鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（120）

中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅱ）

持躰松遺跡

（南さつま市金峰町）

2007年12月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
（120）

持躰松遺跡

二〇〇七年十二月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



中世の輸入陶磁器



持躰松遺跡と万之瀬川下流域



持躰松遺跡と金峰山

序　　文

この報告書は，万之瀬川の河川改修事業に伴って，平成９年度から平成13年度にかけて実施した南さつま市金峰町（旧日置郡金峰町）に所在する持躰松遺跡の発掘調査の記録です。

持躰松遺跡は，薩摩半島の西岸にある吹上浜の南端近くに注ぐ万之瀬川の右岸に位置します。調査の結果，縄文時代から近世にわたる各時代の遺構や遺物が数多く発見されました。特に，古代や中世の大きな溝や何軒もの掘立柱建物跡，それにもまして全国各地の窯で焼かれた陶器や須恵器，それに中国大陸からもたらされた青磁や白磁，陶器などの輸入陶磁器類などが多量出土し，これらは当時広範な交流が行われていたことを窺わせる貴重な資料となりました。また，弥生時代終末期の住居跡も発見されています。

本報告書が，県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査に当たりご協力をいただいた鹿児島地域振興局（旧伊集院土木事務所），南さつま市教育委員会及び発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成19年12月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　宮　原　景　信

報　告　書　抄　録

ふりがな	もったいまついせき
書名	持　躰　松　遺　跡
副書名	中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅱ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	120
編著者名	抜水茂樹・繁昌正幸・富山孝一・黒川忠広・上床　真・廣　栄次
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
発行年月日	西暦2007年12月21日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
持躰松遺跡（もったいまついせき）	南さつま市（みなみさつまし） 金峰町宮崎（きんぽうちょうみやざき） 字持躰松（あざもったいまつ）	462209	35-130	31° 25′ 35″	130° 19′ 32″	本調査 1997.9.1～1998.2.27 1998.10.12～1999.3.25 1999.4.20～1999.10.14 確認調査（残存部分） 2001.12.3～2001.12.21	7,038	中小河川改修 （万之瀬川）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
持躰松遺跡	散布地	縄文時代後期		南福寺式土器・出水式土器	
		縄文時代晩期		入佐式土器・黒川式土器・石鏃・磨製石斧・打製石斧・スクレイパー・磨石・叩石	
		弥生・古墳時代	竪穴住居跡・土坑・溝状遺構・ピット・土器溜まり	刻目突帯文土器・入来式土器・黒髪式土器・山ノ口式土器・須玖式土器・松木薗式土器・中津野式土器・砥石・ガラス製品・鉄製品	
		古代	溝状遺構・土坑・掘立柱建物跡・畝間状遺構・ピット	土師器・須恵器・墨書土器・刻書土器・箆書土器・赤色土器・黒色土器・移動式カマド・鉄製品・紡錘車・鞴の羽口・鉄滓	多数の箆書・刻書土器が出土している。
		中世	掘立柱建物跡・竪穴建物跡・溝状遺構・畝間状遺構・土師器集積遺構・土坑墓・ピット・杭列跡・石列	土師器・須恵器（東播磨系・樺万丈系）・瓦質土器・瓦器・赤色土器・黒色土器・常滑焼・瀬戸焼・備前焼・カムィヤキ・青磁・白磁・青白磁・青花・輸入陶器・土錘・土製品・滑石製石鍋・滑石製品・砥石・硯・刀子・鉄製品・鞴の羽口・鉄滓	東海系の陶器や畿内系瓦器椀・貿易陶磁が多く出土している。
		近世		苗代川焼（薩摩焼）・肥前系陶磁器	

遺跡の概要	持躰松遺跡では縄文時代晩期から近世までの遺構や遺物が発見された。弥生時代は終末期の在地系土器が豊富に出土し，中世前半期においては，掘立柱建物跡や溝状遺構・土坑墓等が確認された。またそれに伴い，県内では他に例を見ないほどの多種多様な輸入陶磁器と，東海地方や近畿・瀬戸内地方から流入したと考えられる国産陶器等が出土している。



第１図　持躰松遺跡の位置図（１／50,000）

例　言

1　本書は，中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う持躰松遺跡の発掘調査報告書である。
2　本遺跡は，鹿児島県南さつま市（旧日置郡金峰町）金峰町宮崎字持躰松に所在する。
3　発掘調査は，鹿児島県土木部河川課（伊集院土木事務所）から鹿児島県教育委員会が依頼を受け，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
4　発掘調査事業は平成９年９月１日から平成13年12月21日まで実施し，整理作業・報告書作成は平成18年度に実施した。
5　遺物番号は，各時代別に通し番号とし，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
6　挿図の縮尺は，各図面に示した。
7　本書で用いたレベル数値は，県土木部が提示した工事計画図面に基づく海抜絶対高である。
8　発掘調査及び現場及び現場における図面の作成・写真の撮影は，調査担当者が行った。空中写真撮影は，有限会社ふじたに委託した。
9　遺構実測図のトレースは，整理作業員の協力を得て抜水茂樹，繁昌正幸が行った。
10　土器の実測・トレースは，整理作業員の協力を得て抜水茂樹，富山孝一が行った。
11　石器の実測・トレースの一部は，株式会社パスコに委託し，監修は抜水茂樹が行い，一部は整理作業員の協力を得て抜水茂樹が行った。
12　遺構内および包含層から出土した炭化物の放射性炭素年代測定をパリノ・サーヴェイ株式会社に，花粉の分析を株式会社古環境研究所に，樹種同定を株式会社加速器分析研究所に委託した。
13　遺物の写真撮影は，鹿児島県立埋蔵文化財センター文化財主事鶴田靜彦，同吉岡康弘，文化財研究員西園勝彦が行った。
14　本文は抜水茂樹，富山孝一が編集した。執筆分担は下記のとおりである。

第Ⅰ～Ⅳ章，第Ⅶ章第２節，第Ⅷ章第２節，第Ⅸ章，第Ⅹ章，Ⅺ章第８節第９節 …… 抜水茂樹
第Ⅴ章，第Ⅵ章第２節，第Ⅺ章第２節…… 富山孝一
第Ⅵ章第１節，第Ⅶ章第１節，第Ⅷ章，第Ⅺ章第１節第３節…… 繁昌正幸
第Ⅺ章第４節第５節…… 上床　真
第Ⅺ章第７節…… 黒川忠広
第Ⅺ章第６節…… 廣　栄次

15　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，持躰松遺跡の遺物注記の略称は「ＭＴＭ」である。

本文目次

巻頭図版
序　文
報告書抄録
例　言
目　次
第Ⅰ章　発掘調査の経過…… 1
　第１節　調査に至るまでの経過…… 1
　第２節　調査の組織…… 1
　第３節　調査の経過…… 2
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境…… 3
　第１節　地理的環境…… 3
　第２節　歴史的環境…… 3
第Ⅲ章　調査の概要…… 8
　第１節　発掘調査の方法…… 8
　第２節　整理作業の概要…… 8
　第３節　遺物の分類について…… 8
第Ⅳ章　遺跡の層序…… 8
第Ⅴ章　縄文時代の調査……13
　第１節　遺物……13
第Ⅵ章　弥生・古墳時代の調査……20
　第１節　遺構……20
　第２節　遺物……49
第Ⅶ章　古代の調査……93
　第１節　遺構……93
　第２節　遺物…… 109
第Ⅷ章　中世の調査…… 136
　第１節　遺構…… 136
　第２節　遺物…… 172
第Ⅸ章　近世の調査…… 220
　第１節　遺物…… 220
第Ⅹ章　科学分析…… 222
第Ⅺ章　発掘調査のまとめ…… 243

挿図目次

第１図　持躰松遺跡の位置図
第２図　周辺遺跡位置図…… 5
第３図　周辺地形図…… 7
第４図　グリッド配置図…… 9
第５図　北側土層断面図……10
第６図　西側土層断面図……11
第７図　南側土層断面図……12
第８図　縄文時代遺物（１）粗製土器……14
第９図　縄文時代遺物（２）精製土器……15
第10図　縄文時代遺物（３）石器……16
第11図　縄文時代遺物（４）石器……17
第12図　縄文時代遺物（５）石器……18
第13図　弥生・古墳時代遺構全体図…… 21-22
第14図　弥生・古墳時代主要遺構図……23
第15図　１号住居跡（１）……24
第16図　１号住居跡内遺物……25
第17図　１号住居跡（２）……26
第18図　２号住居跡……27
第19図　２号住居跡内遺物……28
第20図　３号住居跡……29
第21図　４号住居跡……30
第22図　４号住居跡内遺物……30
第23図　５号住居跡……30
第24図　５号住居跡内遺物……30
第25図　１号土坑……31
第26図　１号土坑内遺物……31
第27図　２号土坑……32
第28図　３号土坑……32
第29図　３号土坑内遺物……33
第30図　４号土坑……33
第31図　４号土坑内遺物（１）……34
第32図　４号土坑内遺物（２）……35
第33図　５号土坑……36
第34図　６号土坑及び土坑内遺物……36
第35図　溝状遺構１～３号……36
第36図　溝状遺構内遺物……37
第37図　溝状遺構４号・５号……38
第38図　ピット内遺物……38
第39図　土器溜まり出土状況……39
第40図　土器溜まり内遺物（１）甕形土器……40
第41図　土器溜まり内遺物（２）壺形土器……41
第42図　土器溜まり内遺物（３）壺形土器……42
第43図　土器溜まり内遺物（４）壺形土器……43
第44図　土器溜まり内遺物（５）壺形土器……44
第45図　土器溜まり内遺物（６）その他……45
第46図　土器溜まり内遺物（７）石器……46
第47図　弥生・古墳時代遺物（１）甕形土器Ⅰ類……49
第48図　弥生・古墳時代遺物（２）甕形土器Ⅰ類……50
第49図　弥生・古墳時代遺物（３）甕形土器Ⅱ類……51
第50図　弥生・古墳時代遺物（４）甕形土器Ⅱ・Ⅲ類…52
第51図　弥生・古墳時代遺物（５）甕形土器Ⅲ類……53
第52図　弥生・古墳時代遺物（６）甕形土器Ⅳ類……54
第53図　弥生・古墳時代遺物（７）甕形土器Va類……55
第54図　弥生・古墳時代遺物（８）甕形土器Va類……56
第55図　弥生・古墳時代遺物（９）甕形土器Vb類……57
第56図　弥生・古墳時代遺物（10）甕形土器Vb類……58
第57図　弥生・古墳時代遺物（11）甕形土器Vb類……59
第58図　弥生・古墳時代遺物（12）甕形土器Vb類……60
第59図　弥生・古墳時代遺物（13）甕形土器Vb類……61
第60図　弥生・古墳時代遺物（14）甕形土器Vb類……62
第61図　弥生・古墳時代遺物（15）甕形土器Vb類……63
第62図　弥生・古墳時代遺物（16）甕形土器Vb・Vc類……64

第63図　弥生・古墳時代遺物（17）甕形土器 Vc 類……65
第64図　弥生・古墳時代遺物（18）甕形土器 Vc 類……66
第65図　弥生・古墳時代遺物（19）甕形土器 Vc 類……67
第66図　弥生・古墳時代遺物（20）大甕……68
第67図　弥生・古墳時代遺物（21）大甕……69
第68図　弥生・古墳時代遺物（22）甕形土器脚部……70
第69図　弥生・古墳時代遺物（23）甕形土器脚部……71
第70図　弥生・古墳時代遺物（24）壺形土器……72
第71図　弥生・古墳時代遺物（25）壺形土器……73
第72図　弥生・古墳時代遺物（26）壺形土器……74
第73図　弥生・古墳時代遺物（27）壺形土器……75
第74図　弥生・古墳時代遺物（28）壺形土器……76
第75図　弥生・古墳時代遺物（29）壺形土器口縁部……77
第76図　弥生・古墳時代遺物（30）壺形土器胴部……78
第77図　弥生・古墳時代遺物（31）壺形土器胴部……79
第78図　弥生・古墳時代遺物（32）壺形土器胴部・底部……80
第79図　弥生・古墳時代遺物（33）壺形土器底部……81
第80図　弥生・古墳時代遺物（34）鉢形土器……82
第81図　弥生・古墳時代遺物（35）鉢形土器……83
第82図　弥生・古墳時代遺物（36）その他……84
第83図　弥生・古墳時代遺物（37）土製品等……85
第84図　弥生・古墳時代遺物（38）石器……86
第85図　掘立柱建物跡（１）……94
第86図　古代遺構全体図…… 95-96
第87図　掘立柱建物跡（２）……97
第88図　掘立柱建物跡（３）……98
第89図　掘立柱建物跡（４）……99
第90図　掘立柱建物跡（５）…… 100
第91図　１号土坑及び遺構内遺物…… 100
第92図　２号土坑及び遺構内遺物…… 101
第93図　溝状遺構１～４号…… 101
第94図　溝状遺構５号及び畝間状遺構①…… 103
第95図　畝間状遺構②・③…… 104
第96図　畝間状遺構②・③内遺物…… 104
第97図　ピット内遺物…… 105
第98図　古代遺物（１）土師器椀…… 109
第99図　古代遺物（２）土師器坏…… 110
第100図 古代遺物（３）土師器坏…… 111
第101図 古代遺物（４）土師器その他…… 112
第102図 古代遺物（５）土師器甕…… 113
第103図 古代遺物（６）土師器甕…… 114
第104図 古代遺物（７）土師器甕…… 115
第105図 古代遺物（８）黒色土器・赤色土器…… 116
第106図 古代遺物（９）赤色土器…… 117
第107図 古代遺物（10）須恵器坏・椀等…… 118
第108図 古代遺物（11）須恵器蓋・皿…… 119
第109図 古代遺物（12）須恵器甕…… 120
第110図 古代遺物（13）須恵器甕…… 121
第111図 古代遺物（14）須恵器甕…… 122
第112図 古代遺物（15）須恵器甕・鉢…… 123
第113図 古代遺物（16）須恵器鉢・壺…… 124
第114図 古代遺物（17）須恵器壺…… 125
第115図 古代遺物（18）土製品…… 126
第116図 古代遺物（19）土製品…… 127
第117図 古代遺物（20）石製品・鉄製品…… 128
第118図 古代遺物（21）篦書土器等…… 129
第119図 古代遺物（22）篦書土器等…… 130
第120図 古代遺物（23）篦書土器等…… 131
第121図 中世遺構全体図…… 137-138
第122図 掘立柱建物跡（１）…… 139
第123図 掘立柱建物跡４号及び遺構内遺物…… 140
第124図 竪穴建物跡及び遺構内遺物…… 141
第125図 ３号・４号土坑…… 142
第126図 １号・２号土坑…… 143
第127図 溝状遺構１号・２号・畝間状遺構①…… 144
第128図 溝状遺構４号…… 145
第129図 溝状遺構５号～12号…… 146
第130図 溝状遺構13号・14号…… 147
第131図 溝状遺構14号・15号…… 148
第132図 溝状遺構内遺物（１）…… 149
第133図 溝状遺構内遺物（２）…… 150
第134図 溝状遺構内遺物（３）…… 151
第135図 畝間状遺構③・④及び遺物…… 152
第136図 溝状遺構３号・畝間状遺構②・⑤…… 153
第137図 ピット群①…… 154
第138図 ピット群②…… 155
第139図 １号土坑墓及び遺物…… 157
第140図 ２号土坑墓及び遺物…… 158
第141図 石列及び遺物…… 159
第142図 土師器集積１号～３号及び遺物…… 160
第143図 杭列…… 161
第144図 ピット内遺物①…… 162
第145図 ピット内遺物②…… 163
第146図 ピット内遺物③…… 164
第147図 ピット内遺物④…… 165
第148図 ピット内遺物⑤…… 166
第149図 中世遺物（１）土師器椀・坏…… 172
第150図 中世遺物（２）土師器椀・坏等…… 173
第151図 中世遺物（３）土師器小皿…… 174
第152図 中世遺物（４）土師器小皿…… 175
第153図 中世遺物（５）黒色土器…… 176
第154図 中世遺物（６）黒色土器・赤色土器…… 177
第155図 中世遺物（７）瓦器…… 178
第156図 中世遺物（８）須恵器…… 179
第157図 中世遺物（９）須恵器…… 180
第158図 中世遺物（10）須恵器…… 181
第159図 中世遺物（11）須恵器…… 182
第160図 中世遺物（12）瓦質土器…… 183
第161図 中世遺物（13）国産陶器…… 184
第162図 中世遺物（14）国産陶器…… 185
第163図 中世遺物（15）国産陶器…… 186
第164図 中世遺物（16）輸入陶器椀・壺…… 187
第165図 中世遺物（17）輸入陶器耳壺・壺…… 188
第166図 中世遺物（18）輸入陶器瓶・水注・盤…… 189

第167図 中世遺物（19）輸入陶器鉢…… 190
第168図 中世遺物（20）輸入陶器鉢…… 191
第169図 中世遺物（21）輸入陶器甕等…… 192
第170図 中世遺物（22）青磁…… 193
第171図 中世遺物（23）青磁…… 194
第172図 中世遺物（24）青磁…… 195
第173図 中世遺物（25）青磁…… 196
第174図 中世遺物（26）白磁…… 198
第175図 中世遺物（27）白磁…… 199
第176図 中世遺物（28）白磁…… 200
第177図 中世遺物（29）青白磁・青花…… 201
第178図 中世遺物（30）土製品…… 202
第179図 中世遺物（31）土製品…… 203
第180図 中世遺物（32）土製品…… 204
第181図 中世遺物（33）滑石製品…… 205
第182図 中世遺物（34）滑石製品…… 206
第183図 中世遺物（35）滑石製品…… 207
第184図 中世遺物（36）石製品…… 208
第185図 中世遺物（37）鉄製品…… 209
第186図 時期不明遺物　鉄製品…… 210
第187図 近世遺物（１）陶器…… 220
第188図 近世遺物（２）陶磁器…… 221
第189図 分析試料データ…… 225
第190図 Ｙ−13グリッドにおける植物珪酸体分析結果 … 229
第191図 Ｋ－７区西壁の分析層位…… 233
第192図 植物珪酸体群集と組織片の産状…… 234
第193図 Ｇ－４区北壁の分析層位…… 237
第194図 植物珪酸体群集の層位分布…… 237
第195図 脂肪酸分析結果…… 241
第196図 赤色土器分析測定関係一覧…… 242
第197図 中世遺物…… 244
第198図 資料１（74）…… 246
第199図 資料２（77）…… 246
第200図 古代の遺物の分類…… 252
第201図 カマド関係（その１）…… 252
第202図 カマド関係（その２）…… 253
第203図 カマド関係（その３）…… 254
第204図 紡錘車の出土量の変遷…… 255
第205図 主な転用品の広径と厚さ…… 255
第206図 県内出土の特徴的な紡錘車…… 257
第207図 赤色土器出土遺跡位置図…… 261
第208図 中世出土遺物の編年…… 267-268
第209図 グリッド別遺物数（１）…… 269
第210図 グリッド別遺物数（２）…… 270
第211図 刻書土器…… 270
第212図 グリッド別遺物数（３）…… 271
第213図 グリッド別遺物数（４）…… 272

表 目 次

表１　周辺遺跡一覧表…… 6
表２　縄文時代遺物観察表（１）……19
表３　縄文時代遺物観察表（２）……19
表４　弥生・古墳時代遺構内遺物観察表（１）……47
表５　弥生・古墳時代遺構内遺物観察表（２）……48
表６　弥生・古墳時代遺構内遺物観察表（３）……48
表７　弥生・古墳時代遺物観察表（１）……87
表８　弥生・古墳時代遺物観察表（２）……88
表９　弥生・古墳時代遺物観察表（３）……89
表10　弥生・古墳時代遺物観察表（４）……90
表11　弥生・古墳時代遺物観察表（５）……91
表12　弥生・古墳時代遺物観察表（６）……92
表13　弥生・古墳時代遺物観察表（７）……92
表14　建物計測表（１）…… 106
表15　建物計測表（２）…… 107
表16　１号土坑内遺物観察表…… 108
表17　２号土坑内遺物観察表…… 108
表18　畝間状遺構②③内遺物観察表…… 108
表19　ピット内遺物観察表…… 108
表20　古代遺物観察表（１）…… 131
表21　古代遺物観察表（２）…… 132
表22　古代遺物観察表（３）…… 133
表23　古代遺物観察表（４）…… 134
表24　古代遺物観察表（５）…… 135
表25　古代遺物観察表（６）…… 135
表26　古代遺物観察表（７）…… 135
表27　古代遺物観察表（８）…… 135
表28　建物計測表…… 167
表29　掘立柱建物跡４号内遺物観察表…… 168
表30　竪穴建物跡内遺物観察表…… 168
表31　溝状遺構内遺物観察表土師器…… 168
表32　溝状遺構内遺物観察表須恵器…… 168
表33　溝状遺構内遺物観察表輸入陶磁器…… 169
表34　溝状遺構内遺物観察表土製品…… 169
表35　溝状遺構内遺物観察表石製品…… 169
表36　畝間状遺構④内遺物観察表…… 169
表37　１号土坑墓内遺物観察表…… 169
表38　２号土坑墓内遺物観察表…… 169
表39　石列内遺物観察表…… 170
表40　土師器集積遺構内遺物観察表…… 170
表41　ピット内遺物観察表（１）…… 170
表42　ピット内遺物観察表（２）…… 170
表43　ピット内遺物観察表（３）…… 171
表44　ピット内遺物観察表（４）…… 171
表45　中世遺物観察表（１）…… 211
表46　中世遺物観察表（２）…… 212
表47　中世遺物観察表（３）…… 213
表48　中世遺物観察表（４）…… 213
表49　中世遺物観察表（５）…… 214
表50　中世遺物観察表（６）…… 214

表51　中世遺物観察表（７）…… 215
表52　中世遺物観察表（８）…… 216
表53　中世遺物観察表（９）…… 217
表54　中世遺物観察表（10）…… 218
表55　中世遺物観察表（11）…… 218
表56　中世遺物観察表（12）…… 218
表57　中世遺物観察表（13）…… 219
表58　中世遺物観察表（14）…… 219
表59　中世遺物観察表（15）…… 219
表60　時期不明遺物観察表…… 219
表61　近世遺物観察表…… 221
表62　採取試料等…… 222
表63　放射性炭素年代測定結果…… 222
表64　結果一覧表…… 224
表65　出土樹種同定表…… 226
表66　植物遺体同定表…… 227
表67　出土遺構と結果…… 227
表68　植物珪酸体分析結果…… 229
表69　Ｋ－７区西壁の放射性炭素年代測定結果…… 233
表70　Ｋ－７区西壁の植物珪酸体分析結果…… 234
表71　Ｇ－４区北壁の放射性炭素年代値…… 236
表72　Ｇ－４区北壁の植物珪酸体分析結果…… 237
表73　１号土坑墓試料の放射性炭素年代測定結果… 239
表74　リン分析結果…… 240
表75　古代遺物組成表（その１）…… 249
表76　古代遺物組成表（その２）…… 251
表77　カマド関連遺跡一覧表（その１）…… 253
表78　カマド関連遺跡一覧表（その２）…… 254
表79　紡錘車一覧（１）…… 257
表80　紡錘車一覧（２）…… 258
表81　紡錘車一覧（３）…… 259
表82　赤色土器出土一覧…… 261
表83　火打金の分類…… 263
表84　包含層中の青磁類別集計表…… 265
表85　包含層中の輸入陶器器種別集計表…… 266

図版目次

図版１　中世の輸入陶磁器
図版２　持躰松遺跡と万之瀬川下流域
　　持躰松遺跡と金峰山
図版３　土層断面…… 273
図版４　弥生～古墳時代　遺構…… 274
図版５　弥生～古墳時代　遺構遺物出土状況…… 275
図版６　古代　遺構（１）…… 276
図版７　古代　遺構（２）…… 277
図版８　中世　遺構（１）…… 278
図版９　中世　遺構（２）…… 279
図版10　中世　遺構（３）…… 280
図版11　中世　出土遺物（１）…… 281
図版12　中世　出土遺物（２）…… 282
図版13　縄文時代　出土遺物…… 283
図版14　弥生・古墳時代　遺構内遺物（１）…… 284
図版15　弥生・古墳時代　遺構内遺物（２）…… 285
図版16　弥生・古墳時代　遺構内遺物（３）…… 286
図版17　弥生・古墳時代　遺構内遺物（４）…… 287
図版18　弥生・古墳時代　出土遺物（１）…… 288
図版19　弥生・古墳時代　出土遺物（２）…… 289
図版20　弥生・古墳時代　出土遺物（３）…… 290
図版21　弥生・古墳時代　出土遺物（４）…… 291
図版22　弥生・古墳時代　出土遺物（５）…… 292
図版23　弥生・古墳時代　出土遺物（６）…… 293
図版24　古代　出土遺物（１）土師器…… 294
図版25　古代　出土遺物（２）土師器…… 295
図版26　古代　出土遺物（３）土師器…… 296
図版27　古代　出土遺物（４）土師器…… 297
図版28　古代　出土遺物（５）黒色・赤色土器…… 298
図版29　古代　出土遺物（６）須恵器…… 299
図版30　古代　出土遺物（７）須恵器…… 300
図版31　古代　出土遺物（８）須恵器…… 301
図版32　古代　出土遺物（９）須恵器…… 302
図版33　古代　出土遺物（10）須恵器…… 303
図版34　古代　出土遺物（11）篦書土器等…… 304
図版35　古代　出土遺物（12）篦書土器等…… 305
図版36　古代・中世　出土遺物（13）土製品…… 306
図版37　古代　出土遺物（14）鉄製品…… 307
図版38　中世　出土遺物（１）土師器・黒色土器… 308
図版39　中世　出土遺物（２）土師器・黒色・赤色土器… 309
図版40　中世　出土遺物（３）土師器・瓦器…… 310
図版41　中世　出土遺物（４）須恵器…… 311
図版42　中世　出土遺物（５）須恵器・瓦質土器… 312
図版43　中世　出土遺物（６）国産陶器…… 313
図版44　中世　出土遺物（７）輸入陶磁器…… 314
図版45　中世　出土遺物（８）輸入陶磁器・須恵器・土師器… 315
図版46　中世　出土遺物（９）輸入陶磁器…… 316
図版47　中世　出土遺物（10）輸入陶磁器…… 317
図版48　中世　出土遺物（11）輸入陶器…… 318
図版49　中世　出土遺物（12）輸入陶器…… 319
図版50　中世　出土遺物（13）青磁…… 320
図版51　中世　出土遺物（14）青磁…… 321
図版52　中世　出土遺物（15）白磁…… 322
図版53　中世　出土遺物（16）白磁…… 323
図版54　中世　出土遺物（17）青磁・白磁・青白磁・青花… 324
図版55　中世　出土遺物（18）土製品…… 325
図版56　中世　出土遺物（19）滑石製品…… 326
図版57　中世　出土遺物（20）鉄製品等…… 327
図版58　時期不明　出土遺物　鉄製品…… 328
図版59　古代・中世　出土遺物（21）石製品…… 329
図版60　発掘調査の様子等…… 330

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

鹿児島県土木部河川課（伊集院土木事務所）は，日置郡金峰町（現南さつま市）において，中小河川（万之瀬川）改修事業を計画し，事業予定地内の埋蔵文化財の有無について金峰町教育委員会に照会した。これを受けて金峰町教育委員会は平成５年，県教育庁文化課（現文化財課）の協力を得て分布調査を実施したところ，事業予定地内に持躰松遺跡が所在することが判明した。そのため遺跡の取扱いについて，県土木部・文化課・金峰町教育委員会の三者で協議した結果，埋蔵文化財の保護と事業の推進を図るために，発掘調査を実施することとなった。平成６年12月に確認調査を実施し，この結果をもとに，平成８年７月から11月まで，金峰町教育委員会が調査主体となり，加世田市（現南さつま市）教育委員会・鹿児島県立埋蔵文化財センターの協力を得て全面調査を実施した。しかしながら，中世の遺跡包含層を完掘できないうちに調査期間が終了するに至ったため，その後の協議によって，次年度以降の調査主体者を鹿児島県立埋蔵文化財センターに移管することとなった。

平成９年度は，平成９年９月より平成10年２月までの約５か月間（12月は休止），築堤部分については前年度の下層未調査部分の継続調査及び現道部分の2300㎡の調査を行った。平成10年度は，平成10年11月より平成11年３月までの約５か月間，築堤部分については前年度の下層の部分についての継続調査と樋門部分の1700㎡の調査を行った。また，平成11年度は，平成11年４月より平成11年10月までの約７か月間，築堤部分について前年度の下層の部分についての継続調査と下流側の3000㎡の調査を行った。

整理作業は，平成９年度から平成11年度にかけての発掘調査中に遺物の水洗・注記・接合作業等を並行して行い，本格的な整理作業を平成17年度より平成18年度にかけて他の万之瀬川流域の遺跡群と同時進行の形で県立埋蔵文化財センターで行った。報告書の刊行は平成19年度に行った。

なお，持躰松遺跡は未調査部分が19,924㎡（表面積）あり，今後河川改修事業を行う際には発掘調査が必要である。

第２節　調査の組織

本調査（平成９年度）

事業主体者	鹿児島県土木部河川課
調査主体者	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長　吉元　正幸
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 次長兼総務課長　尾崎　進 主任文化財主事 兼調査課長　戸﨑　勝洋 課長補佐兼第一 調査係長　新東　晃一
調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財研究員　中村　和美 〃　栗林　文夫
調査事務	鹿児島県立埋蔵文化財センター 主査　政倉　孝弘 主事　追立ひとみ
調査指導者	鹿児島女子大学 教授　五味　克夫 国立歴史民俗博物館 教授　小野　正敏

本調査（平成10年度）

事業主体者	鹿児島県土木部河川課
調査主体者	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長　吉永　和人
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 次長兼総務課長　尾﨑　進 主任文化財主事兼 調査課長　戸﨑　勝洋 課長補佐兼第一 調査係長　新東　晃一 主任文化財主事　青﨑　和憲
調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事　安藤　浩 文化財研究員　中村　和美
調査事務	鹿児島県立埋蔵文化財センター 主査　前屋敷裕徳 〃　政倉　孝弘 主事　溜池　佳子
調査指導者	鹿児島大学 助教授　本田　道輝 鹿児島経済大学 教授　中村　明蔵 富山大学 教授　宇野　隆夫

本調査（平成11年度）

事業主体者	鹿児島県土木部河川課
調査主体者	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長　吉永　和人
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 次長兼総務課長　黒木　友幸 主任文化財主事 兼調査課長　戸﨑　勝洋 課長補佐兼第一 調査係長　新東　晃一 主任文化財主事　中村　耕治
調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事　安藤　浩 〃　西郷　吉郎 文化財研究員　栗林　文夫
調査事務	鹿児島県立埋蔵文化財センター 総務係長　有村　貢 主事　溜池　佳子
調査指導者	太宰府市教育委員会 文化財課調査係長　山本　信夫 東京大学名誉教授 鶴見大学客員教授　石井　進

報告書作成事業（平成18年度）

事業主体者	鹿児島県土木部河川課
調査主体者	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長　上今　常雄（４～７月） 宮原　景信（８～３月）
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 次長兼総務課長　有川　昭人 次長　新東　晃一 調査第一課長　池畑　耕一 主任文化財主事 兼第二調査係長　中村　耕治 主任文化財主事　繁昌　正幸
調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事　東郷　克利 〃　抜水　茂樹

	〃	廣　栄次
	〃	富山　孝一
	〃	黒川　忠広
	文化財研究員	上床　真
調査事務	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	総務係長	寄井田正秀
	主査	蒲池　俊一
調査指導者	ラ・サール学園	
	教諭	永山　修一
	鹿児島大学	
	助教授	中村　直子
	愛知県陶磁資料館	
	学芸部長兼	
	学芸課長	仲野　泰裕
	常滑市民俗資料館	中野　晴久
	財団法人瀬戸市文化振興財団	
	瀬戸市埋蔵文化財センター	
	主任	金子　健一
	主事	河合　君近

第３節　調査の経過（日誌抄）

平成９年９月

１日平成９年度の調査開始。重機を使っての表土剥ぎ取り。ベルトコンベアーの設置。草刈り等作業環境整備の後，R・S－10・11区Ⅲｂ層の掘り下げに入る。畝間状遺構を検出する。中世陶磁器が出土。３日南日本放送の記者が取材に来る。10日東北大学柳原敏昭氏が見学。硯や刀子が出土する。25日台風19号により調査区が冠水し，事務所が床上まで浸水する。

平成９年10月

R～Y－10～13区のⅢｂ層を掘り下げる。刻書土器数点が出土する。青磁碗・土師器の坏４枚・小皿７枚が完形で出土する。土師器の集積遺構等を写真撮影する。29日知覧町史談会が見学に訪れる。

平成９年11月

12日鹿児島大学本田道輝氏が見学する。P～X－９～14区の竪穴状遺構，溝状遺構，土坑等の検出と精査をする。20日鹿児島大学五味克夫氏の現地指導。雨のため調査区に水が溜まる。

平成９年12月

作業をひと月中断する。国立歴史民俗博物館小野正敏氏の現地指導。

平成10年１月

T～Z－10～15区のⅢ～Ⅳ層を掘り下げる。溝状遺構，ピット，畝間状遺構の検出と実測をする。13日航空撮影を行う。風雪と雨のため作業が難航する。座標の測量を行う。出土遺物の平板実測を行う。27日石列の検出と実測を行う。

平成10年２月

X～Z－12～16区のⅢ～Ⅵａ層を掘り下げる。作業員の追加募集を行う。大溝，ピット，掘立柱建物跡の精査と写真撮影を行う。炭化木や焼土の入った土坑を検出する。10日南薩地区高校歴史部会の15名が巡視に来る。竪穴状遺構の検出と写真撮影。雨により調査区が冠水する。調査機材や建物等を撤収し，平成９年度の調査を終了する。

平成10年11月

平成10年度の調査開始。重機による表土剥ぎ取り。ベルトコンベアーを敷設してX～U－13～15区のⅣ層上面を調査する。土師器多数が出土する。芝原遺跡の確認調査も並行して行う。寒冷で季節風強し。

平成10年12月

R～W－10～15区のⅣ層を調査する。４日壺型土器の完形が出土。掘立柱建物跡３棟を検出する。樋門部分にトレンチを４つ設定する。土坑，ピットの実測を行う。

平成11年１月

P～X－９～15区のⅤ層を調査する。溝状遺構等を検出する。強風と砂埃で作業が難航する。T―13区で壺型土器の完形2個が出土する。20日鹿児島経済大学（現 鹿児島国際大学）中村明蔵氏，21日富山大学宇野隆夫氏，26日鹿児島大学本田道輝氏の現地指導。

平成11年２月

P～W－９～15区のⅤ層を調査する。連日強風で氷雨も降る。5日県文化財課課長が視察する。中世掘立柱建物跡の柱穴を精査する。樋門部分で掘立柱建物跡を検出する。大雨で冠水したので，ポンプを使って排水する。

平成11年３月

築堤部分のU～W－11～14区のⅥ・Ⅶ層とT－11～13区のⅤ・Ⅵ層を調査する。樋門部分の溝状遺構と畝間状遺構を実測する。鍛冶遺構，土器集中遺構を検出する。水田からの排水が調査区内に流入したためポンプを使って排水する。25日調査機材や建物等を撤収し，平成10年度の調査を終了する。

平成11年４月

平成11年度の調査開始。重機による表土剥ぎ取り。草刈り等作業環境整備の後，P～T－10～13区のⅥ層を調査する。周辺道路（町道）の整備。土器溜まり遺構の実測をする。

平成11年５月

O～S－８～12区のⅦ層を調査する。S－12区で土坑を検出する。P～T－９～13区のⅦ層上面のコンター実測をする。13日ラ・サール学園永山修一氏が見学する。水が湧き出るので，排水溝を設置する。17日県文化財課課長補佐が視察する。畝間状遺構を検出する。同安窯青磁の小皿と刀子の完形品が出土する。

平成11年６月

J～P－４～12区のⅢｂ層を調査する。掘立柱建物跡と畝間状遺構を検出する。７日県文化財課課長が視察する。調査区内に雨水が溜まり，ポンプで排水する。土坑墓内で白磁，合子の完形品が出土する。17日四耳壺の完形品が出土する。

平成11年７月

G～S－３～13区のⅣ層を調査する。雨水用の排水路を造る。１日南日本新聞の記者が取材に来る。杭列や溝状遺構等の遺構を検出。航空撮影を行う。17日琉球大学池田榮史氏が見学する。23日成川式土器の壺の完形品が２個出土する。雨のため調査区に水が度々溜まる。

平成11年８月

I～Q－３～11区のⅣ層及びM～S－７～13区のⅤ層を調査する。２日太宰府市教育委員会山本信夫氏，５日鶴見大学石井進氏，6日鹿児島女子大学五味克夫氏の現地指導。Ⅴ層上面で杭列を検出する。連日の猛暑に加え台風が通過し，調査区が数回冠水する。

平成11年９月

G～P－３～９区のⅤ層及びM～S－７～13区のⅥ層を調査する。古代の遺構を検出する。Ⅴ層上面でコンター実測をする。27日台風で調査区内に雨水が溜まり，事務所建物の屋根が剥がれる。G～K区にミニトレンチを入れる。

平成11年10月

J～R－４～11区のⅦ層を調査する。土層断面の実測をする。Ⅶ層上面でコンター実測をする。14日調査機材や建物等を芝原遺跡へ運び，平成11年度の調査を終了する。

平成13年12月

11日～21日Q・R－19～21区に確認トレンチを入れて，Ⅲｃ層までを調査する。畝間状遺構を検出する。これをもって持躰松遺跡の調査は一応終了となった。

平成18年１～２月

分類，接合，注記等の作業を行う。

平成18年６月

28日大阪大谷大学三辻利一氏の遺物指導（須恵器の産地同定等）。

平成18年９月

27日石器実測の委託を行う。

平成18年11月

６日ラサール学園永山修一氏の遺物指導（刻書土器等）。

平成19年１月

17日鹿児島大学助教授中村直子氏の遺物指導（成川式土器等）。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

持躰松遺跡は，鹿児島県の南さつま市金峰町宮崎の万之瀬川下流域右岸の自然堤防上に立地する。万之瀬川は鹿児島市の南部美濃岳南麓に源を発し，川辺町から南さつま市の加世田平野を横断し吹上浜に至り，ここより東シナに注ぐ長さ約３㎞，流域面積381㎢の薩摩半島南部を代表する河川である。河口周辺には砂丘が広く形成されており，中下流域には沖積平野が広がり，万之瀬川の蛇行によって浸食された台地が見られる。こうした砂丘地と台地には縄文から弥生時代にかけて良好な遺跡が存在しており，早くから人類の進出があったことが推察され，また，縄文海進期最盛期の前期から弥生前期にかけて河口の周辺に，ラグーンが存在していた可能性も指摘されている。河口より約5.4㎞さかのぼった持躰松遺跡周辺は標高約４ｍ前後である。遺跡内も高低差があまり無く，どの時代もほぼ平坦な地形であった。このあたりの表層は未固結堆積物である粘土や砂礫のある河川敷で，後背地には灰色低地土壌が広がり，一部には黒泥炭土壌も見られる。氾濫堆積物は主に砂・シルトからなり，場所によっては，氾濫堆積物の下位に砂礫からなる万之瀬川の旧河床堆積物が伏在する。万之瀬川の自然堤防は，上流側に隣接する渡畑遺跡で出土した縄文後期初頭以降の文化遺物が，自然堤防を形成した氾濫堆積物に覆われた土壌層中に見いだされるところからして，約4,000年前頃から形成されたことがわかる。その後の万之瀬川の河道はあまり変化しないで，厚さ４ｍほどの堆積物を氾濫によって累積してきた。氾濫堆積物の層区分とその推移から，遺跡周辺では縄文中期から中世までの顕著な氾濫は４，５回ほど認められる。この一帯は万之瀬川が大きく蛇行しており，かつ，加世田川や長谷川などの支流の合流地点も近くにあり，周辺の沖積平野は，今でも梅雨や台風の時期になると水害に遭っている。昭和10年の国土地理院発行の地図では，村原付近において河川改修が行われ，低地において蛇行する部分を直線で繋いでいることがわかる。これは昭和初期の恐慌時に失業対策事業として実施された河川改修事業であったと，加世田在住の古老より話を伺った。また，現在の河口も，享和年間（1801～1804）の洪水により流れが変わってできたもので，新川と呼称されている。それ以前の万之瀬川河口はさらに南側に蛇行しており，現在の河口より約３ｋｍ南にあったことがわかっている。東部には比較的なだらかな標高200ｍ前後の山々が南北を縦断している。このなかで本遺跡より約７ｋｍ北東方向にある金峰山は，町名の由来ともなっている標高636ｍで，比較的なだらかな山の多い薩摩半島中央部における最高峰で，古来より信仰の対象となっている。また海上航行の際には，同山より南西方向に約22ｋｍ先にある標高591の円錐形状の野間岳と共にランドマーク的役割を果たしていたのではないかとも考えられている。特に野間岳に関しては，『三國名勝圖會』に中に「毎歳漢土の商舶，長崎に來る時は，洋中にて必ず此嶽を認て，針路を取り，皇國の地に到り，其始て認め見し時は，酒を酌て賀をなすといふ云々」の記述が見える。

第２節　歴史的環境

近年の開発に伴う発掘調査の成果はめざましく，南さつま市では，旧石器時代から近世・近代に至るまでの遺跡が数多く発見されている。この中には，学史上極めて重要な遺跡も含まれており，当地域が考古学研究の良好のフィールドであることをあらためて示唆している。旧石器時代では，金峰町小中原遺跡・加世田祝原遺跡からナイフ形石器が，金峰町山野原遺跡・加世田平田尻遺跡から細石器や礫群が発見されている。縄文時代草創期の遺跡としては，加世田に椈ノ原遺跡がある。ここでは，煙道付き炉穴や集石等の遺構と，隆帯文土器・磨製石斧・丸ノミ状の磨製石斧等の遺物が出土し，国指定の史跡となっている。また，同志風頭遺跡では，煙道付き炉穴から完形の隆帯文土器が出土している。早期の遺跡としては，前述の椈ノ原遺跡が著明である。昭和52年の発掘調査で出土した遺物は，前平式土器と吉田式土器の型式設定について問題を投げかけた。金峰町小中原遺跡では，前平式土器の円筒形・角筒形がまとまって出土している。前期の遺跡としては，金峰町阿多貝塚や上焼田遺跡が著明である。阿多貝塚から出土した資料は，阿多Ｖ類土器と称され，上焼田遺跡からは玦状耳飾が出土している。中期の遺跡としては，金峰町上水流遺跡で大型の集石と春日式土器が豊富に出土しており，河川沿い低地との関係において注目される。また，同町芝原遺跡の竪穴住居跡と石堂遺跡の阿高式土器・並木式土器の出土等も挙げられる。後期の遺跡としては，芝原遺跡がある。ここでは，大量の指宿式土器や南福寺式土器と，鋸歯状尖頭器や石鋸などの特徴的な石器も出土している。また，足形を呈する土製品は本県でも例が無く，加えて西隣の渡畑遺跡出土の土製品と接合したことで注目される。晩期の遺跡としては標識遺跡である上加世田遺跡がある。ここでは土偶・軽石製岩偶・石棒など祭祀をうかがわせる資料が出土しているが，近年の広域編年研究により縄文時代後期に位置づけられることも多くなっている。また加世田の干河原遺跡や金峰町上水流遺跡では，豊富な量の浅鉢と深鉢が出土している。下原遺跡では，縄文晩期終末～弥生早期の刻目突帯文土器に伴って朝鮮半島系無文土器・籾跡土器・石庖丁などが出土している。

弥生時代から古墳時代にかけては，多くの遺跡で遺物の散布がみられる。金峰町高橋貝塚は弥生前期を主体とする貝塚で，万之瀬川の支流堀川の右岸，標高11m の洪積世砂丘上にある。昭和37・38年に河口貞徳氏によって発掘調査が実施された。調査の結果，縄文時代晩期の夜臼式土器と高橋Ⅰ式土器が共伴したことや，南海産の貝を素材とした貝輪や貝そのものが出土したことで学史に残る遺跡となった。同町の下小路遺跡は，弥生時代中後期の須玖式の甕棺が検出された埋葬遺跡で，棺内の人骨にはゴホウラ製の貝輪が着装されていた。また，同町松木薗遺跡では弥生時代中後期の環濠である可能性のある大溝が松木薗式土器を伴って検出されている。標識遺跡である同町中津野遺跡からは，床面が３段構造になる竪穴住居跡が発見され，最下段である３段目からは完形土器が40個出土しているという。中津野式土器は弥生時代終末から古墳時代初頭の土器として位置付けられている。

古墳時代の遺跡としては加世田小湊にある奥山古墳（六堂会箱式石棺墓）が特筆される。この遺跡は昭和６年に発見され，石棺内部には赤色顔料が塗られており，ガラス玉や長さ180cm の鉄剣，刀子が副葬されていた。平成17年３月には，鹿児島大学博物館助教授の橋本達也氏が再調査を行った。その結果，周溝の一部と考えられる遺構が発見され，また同年８月の調査で４世紀代の古墳である可能性が高いことが示された。金峰町白糸原遺跡では，竪穴住居跡19基が検出されている。遺構内遺物から，辻堂原式から笹貫式にかけての時期の集落であるとされている。

古代にも多くの遺跡が発見されている。特にこの地域の遺跡では，集落が発見される場合が多く，広域的なあり方について検討する場合に重要な資料となるであろうことは間違いないと考えられる。荒平窯をはじめとする中岳山麓窯跡群は金峰町にあり，９世紀から10世紀にかけて稼動していたとみられる須恵器窯である。発掘調査は行われていないが，表採の遺物が荒尾窯（熊本県荒尾市）の製品との類似性が高いことから，人的・物的な交流があったと考えられている。同町小中原遺跡からは，多くの掘立柱建物跡と「阿多」という文字が刻まれた土器などが発見されていることから，阿多郡衙の跡と考えられている。また，同町山野原遺跡でも多くの掘立柱建物跡と土師器・須恵器などが発見されている。祭祀に関わるとみられる遺構や，土師器焼成遺構の可能性が考えられるものなども発見されており，在地の実力者にかかわる施設であった可能性が考えられている。

中世には，阿多郡は，ほぼ全域で島津荘が成立した薩摩国にあって，唯一太宰府領であった。このなかで太宰府の権威をかりて領主権を確立し，やがて薩摩武士団の棟梁的地位を固めるまでに至ったとみられる阿多郡司平忠景は12世紀前半の史料に初見される。忠景の在位期間は中央政権の交代の影響で比較的短期間ではあったが，周辺地域にも多少の影響を与えたことも考えられる。

阿多郡はその後13世紀前半には北方と南方に分割される。金峰町が位置する阿多郡は阿多氏が，後には鮫島氏が支配を行い，加世田市が属する加世田別府は二階堂氏が，後には島津氏が支配するようになる。中世前半の遺跡としては，平成８年から11年まで旧金峰町が発掘調査を行った小薗遺跡が挙げられる。ここでは掘立柱建物跡・円形竪穴遺構・石積遺構・区画溝が検出され，遺物として11世紀後半から13世紀代の貿易陶磁と，須恵器・常滑焼・畿内産和泉型瓦器椀・南島産のカムィヤキ・滑石製仏具等が出土している。このことから，金峰山信仰の拠点寺院として，12世紀前半の文献で初見される観音寺との強い関連性が指摘されている。観音寺は保延四（1138）年に前述の阿多郡司平忠景より阿多牟田上浦の寄進を受けるなど，薩摩半島西南部における仏教及び山岳信仰の中心拠点であったと考えられている。

城館跡としては上ノ城跡・別府城跡・牟礼ヶ城跡・貝殻崎城跡などがある。発掘調査は行われていないが，加世田市益山の寺園氏宅には，二重の濠があったと伝えられ，現在もその痕跡が残るという（上東2004）。中世のものであるか明らかでないが，居館であった可能性も考えられる。白糸原遺跡では中世末から近世にかけての土坑が24基検出されている。この中には，南島産の夜光貝が入っているものもある。加えて，竪穴建物跡や双魚文青磁なども見つかっている。また，本遺跡の属する万之瀬川流域の遺跡群も近年特に注目されている。特に万之瀬川下流には川底遺跡（加世田市山村・金峰町宮崎）と中流には古市遺跡・南田代遺跡（川辺町）などがあり，中世を中心とした縄文時代から近世・近代にわたる複合遺跡として今後の調査の成果が期待される。

近世においては，前述の金峰町上水流遺跡の大溝から16世紀末～17世紀中葉に生産し流通された肥前系陶磁器と初期の薩摩焼（苗代川焼等）等が華南産とみられる甕・壺類といった貯蔵器とともに出土している。またこれまでにも，万之瀬川河口付近を含む吹上浜沿岸では，東南アジアとの交易に関連するという指摘のある漂着遺物が確認されている。

外城制度（天明４年〔1784〕に郷に改称。）に関連するものとして，地頭仮屋（加世田は麓，金峰町は阿多と田布施）・庄内役所・浦役所・別当役所・会所・宿場・御蔵・常平倉・津口御番所・遠見御番所・射場・御牧などがあった。また，野町と呼ばれる商人の居住区も存在した。加世田では川畑の聖徳寺付近に，また金峰町内では阿多郷野町と田布施郷池辺野町の二つがあった。

交通網に目を向けると，持躰松遺跡の上流側に隣接する渡畑遺跡には近世の街道『伊作筋』が通っており，現在は国道220号線となって万之瀬橋が架けられている。ここはかつて村原渡口と呼ばれる渡し場であり，昭和56年以前は船で渡っていた。また，持躰松遺跡内にはかつて南薩鉄道が南北方向に走っていた。

これらのほかにも近世の遺跡があるが，この時期の調査事例は全般的に少なく，明らかでない部分が多い。

参考文献

鹿児島県　1975『南薩地域　土地分類基本調査』
上東克彦　2004「鹿児島県薩摩半島に伝世された華南三彩－クンディと果実形水注－」『貿易陶磁研究』24号　日本貿易陶磁研究会
加世田市教委　1985「上加世田遺跡Ⅰ」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(3)
1987「上加世田遺跡Ⅱ」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(4)
1995「干河原遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(12)
1999「志風頭遺跡・奥名野遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(16)
金峰町教委　1998「上水流遺跡－第１次調査－」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(9)
1998「持躰松遺跡　第１次調査」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(10)
2000「小薗遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(11)
鹿児島県教委　1991「小中原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(57)
河口貞徳　1988『日本の古代遺跡38鹿児島』保育社
加世田市史編纂委員会　1986『加世田市史』（上・下）
金峰町郷土史編纂委員会　1987・1989『金峰町郷土史』（上・下）
財團法人　古代學協會　2003「古代文化」第55巻第３号
鹿児島県考古学会　2006「鹿児島県考古」第40号
原口虎雄　1982『三國名勝圖會』第二巻　図書出版青潮社



第２図　周辺遺跡位置図（１／25,000）

番号	遺跡名	所在地		時代							備考
				旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	
1	牟田城跡	南さつま市	金峰町高橋字真門砂入						●		
2	高橋貝塚	南さつま市	金峰町高橋			●					
3	草原町遺跡	南さつま市	金峰町宮崎				●				
4	尾下遺跡	南さつま市	金峰町尾下			●					
5	亀ヶ城跡	南さつま市	金峰町尾下　麓						●		
6	田布施遺跡	南さつま市	金峰町野首他５		●		●		●		
7	筆付遺跡	南さつま市	金峰町尾下筆付		●	●		●			金峰町発掘
8	上焼田遺跡	南さつま市	金峰町宮崎上焼田		●	●	●	●	●		金峰町発掘
9	堀川貝塚	南さつま市	金峰町宮崎		●						
10	阿多貝塚	南さつま市	金峰町宮崎上焼田		●	●	●				
11	立石原遺跡	南さつま市	金峰町宮崎				●				
12	中津野遺跡	南さつま市	金峰町中津野１１19			●					県発掘
13	中津野城跡	南さつま市	金峰町新山						●		
14	上花立遺跡	南さつま市	金峰町								
15	野村原遺跡	南さつま市	金峰町中津野				●				
16	万之瀬川床遺跡	南さつま市	金峰町益山万之瀬川			●	●				
17	上川原遺跡	南さつま市	金峰町宮崎上川原			●	●				
18	白糸原遺跡	南さつま市	金峰町宮崎		●	●	●	●	●		県発掘
19	小中原遺跡	南さつま市	金峰町新山小中原	●	●	●	●	●	●		県・町発掘
20	立野原遺跡	南さつま市	金峰町新山				●				
21	三反田遺跡	南さつま市	金峰町新山			●	●				
22	市薗遺跡	南さつま市	金峰町宮崎		●				●		
23	松田南遺跡	南さつま市	金峰町花瀬		●		●		●		
24	持躰松遺跡	南さつま市	金峰町松田南		●	●	●	●	●	●	本報告書
25	渡畑遺跡	南さつま市	金峰町松田南		●	●	●	●	●	●	県発掘
26	芝原遺跡	南さつま市	金峰町松田南		●	●	●	●	●	●	県・町発掘
27	中小路遺跡	南さつま市	加世田益山			●	●				
28	内ノ田遺跡	南さつま市	加世田益山内ノ田	●			●		●	●	
29	陣跡遺跡	南さつま市	加世田益山陣						●		
30	下東堀遺跡	南さつま市	加世田宮原下東堀	●	●		●				
31	杉本寺跡	南さつま市	加世田川畑杉本寺			●		●	●		
32	上加世田遺跡	南さつま市	加世田川畑上加世田		●	●	●	●	●	●	加世田市発掘
33	永田遺跡	南さつま市	加世田川畑永田					●			
34	榕ノ原遺跡	南さつま市	加世田村原字榕ノ原	●	●	●	●	●	●	●	加世田市発掘
35	大迫田遺跡	南さつま市	金峰町花瀬						●		
36	今城跡遺跡	南さつま市	金峰町花瀬今城原		●	●	●		●		
37	上水流Ｄ遺跡	南さつま市	金峰町花瀬								金峰町発掘
38	上水流遺跡	南さつま市	金峰町花瀬上水流森山		●	●	●	●	●	●	県・町発掘
39	上水流Ｃ遺跡	南さつま市	金峰町花瀬		●		●		●		金峰町発掘
40	花瀬遺跡	南さつま市	金峰町花瀬				●			●	
41	針原遺跡	南さつま市	金峰町花瀬		●			●			
42	弥十山遺跡	南さつま市	金峰町花瀬		●						金峰町発掘
43	中岳山麓古窯跡群	南さつま市	金峰町花瀬					●			
44	宇治野原遺跡	南さつま市	金峰町白川西	●	●		●				金峰町発掘
45	鮎受遺跡	南さつま市	金峰町花瀬		●		●				金峰町発掘
46	加治屋遺跡	南さつま市	加世田川畑岩山・加治屋		●	●	●	●			県発掘
47	二頭遺跡	南さつま市	加世田川畑二頭				●				加世田市発掘
48	屋地遺跡	南さつま市	加世田武田屋地			●					
49	遠見ヶ岡遺跡	南さつま市	加世田川畑遠見ヶ岡		●	●					
50	上長迫遺跡	南さつま市	加世田川畑上長迫・川辺町下山田荒多迫ほか		●	●	●				

表１　周辺遺跡一覧表



第３図　周辺地形図（１／12,500）

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　発掘調査の方法

調査は，対象区域全体に公共座標に沿って10ｍのグリッドを設定して実施した。本遺跡の北側，樋門部分の端がかかるところをＢとし，南側に向けてＣ，Ｄ・・・・・としてＺまでを付け，また，東側の端がかかるところを２として西側に向けて３，４・・・・・として21までを付け，Ｋ－４区などと呼称することとした。

発掘調査は築堤部分を平成９～11年度に，樋門部分を平成10年度に行った。また，平成13年度にＱ・Ｒ－19～21区に確認トレンチを入れて，Ⅲｃ層までを調査した。

調査方法は重機によってⅠ（表土）～Ⅱ層を除去した後，遺物包含層であるⅢ層からⅦ層までを人力で掘り下げた。場所によりⅢ層以下に無遺物層が認められる場合はⅠ～Ⅱ層と同様に重機で除去した。また，最終的な下層確認のためのトレンチを設定して，掘り下げていった。　これらの調査の結果，Ⅲ層からⅦ層に至るまで，縄文時代晩期から中・近世に至るの多量の遺物と多くの遺構が発見されている。出土遺物量は深パンケースに換算して平成９年度50ケース，平成10年度50ケース，平成11年度40ケースである。　遺物は平板により出土地点を記録するとともに，レベルを測定して遺物台帳に記載した。遺構は検出状況を写真で撮影し，位置を記録してから個別に実測を行った。必要に応じて実測途中と実測後の状況も写真撮影した。その際に，一部の遺構は図化作業に関して業者委託を実施している。

作業は河川沿いの低地であったため，作業面がレベルが下がるにつれて湧水が見られるようになった。また夏期の台風や降雨で水位が上昇して調査区が冠水したり調査事務所が床上浸水した後も，水位がなかなか下がらなかった。このためたびたび調査の進行が妨げられた。

持躰松遺跡の面積は表面積で27,000㎡である。このうち年度毎の調査範囲は，表面積で平成９年度2,300㎡，平成10年度1,700㎡，平成11年度3,000㎡，平成13年38㎡であり合計面積が7,038㎡である。これは遺跡面積の約30％にあたる。のこり約70％を含む土地の開発等の際には県教育委員会及び南さつま市教育委員会と事前に協議をすることが必要である。

第２節　整理作業の概要

持躰松遺跡の発掘調査報告書作成に伴う整理作業については，平成９年度から平成13年度にかけての発掘調査中に，遺物の水洗・注記作業を並行して行い，本格的な整理作業を県立埋蔵文化財センターで，平成17年度より実施した。作業は他の万之瀬川流域の遺跡群と同時進行の形で行った。

第３節　遺物の分類について

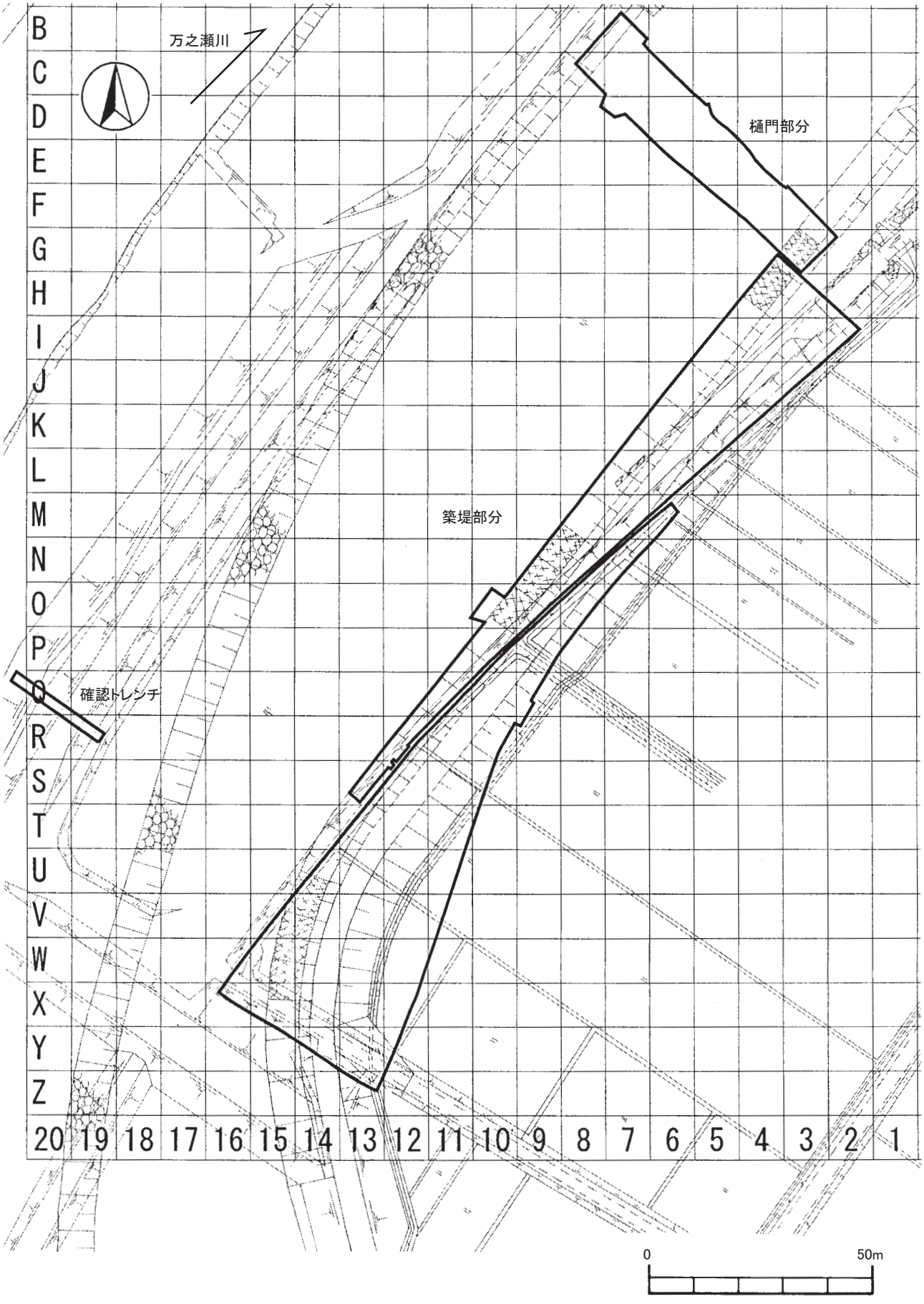
中世の遺物の分類は，下記の文献を参考にした。

・太宰府市教育委員会　2000「大宰府条坊跡ＸＶ」『太宰府市の文化財』第49集
・小野正敏　1982「15～16世紀の染付碗，Ⅲの分類と年代」『貿易陶磁研究』２ 日本貿易陶磁研究会
・森田勉　1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』２　日本貿易陶磁研究会
・森田勉　1996「須恵器系の中世陶器生産」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界 ～その生産と流通～資料集』(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター
・中野晴久「常滑・渥美」1995『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
・藤澤良祐「古瀬戸」1995『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
・伊藤晃「備前」1995『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
・尾上実，森島康雄，近江俊秀「瓦器椀」1995『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
・全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会 2007『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～補遺編』

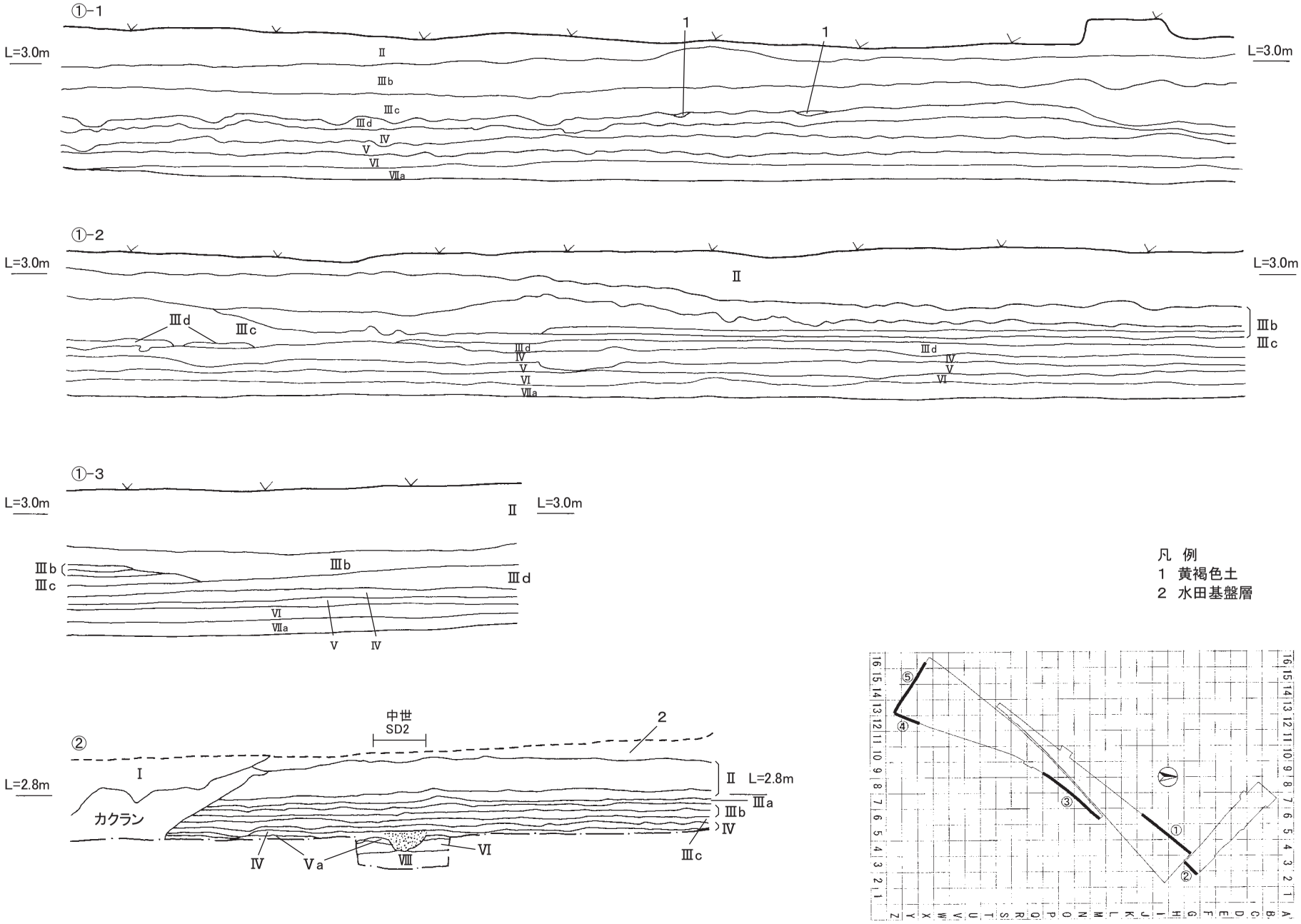
第Ⅳ章　遺跡の層序

持躰松遺跡は万之瀬川下流の川岸近くの自然堤防及び河川敷に立地する遺跡である。本遺跡で見られる地層は，基本的に河川堆積の砂質土および粘質土である。水田耕作や過去数回に及ぶ河川の氾濫に伴う洪水堆積層などを含んでいるので，遺跡内においては，必ずしも層序が安定している状況ではなかった。特定の地点にのみ堆積している砂質土や粘質土も多く観察され，またＶａからⅥ層にかけては単一包含層の中に古墳時代・弥生時代・縄文時代晩期の遺物が見られたり，縄文時代晩期の遺物の下位より古墳時代の遺物が出土する場合も見られた。これらのことにより，右に示す基本的な層位と若干異なる様相を呈する地点もある。また，遺跡内に明確な火山灰層は見られない。

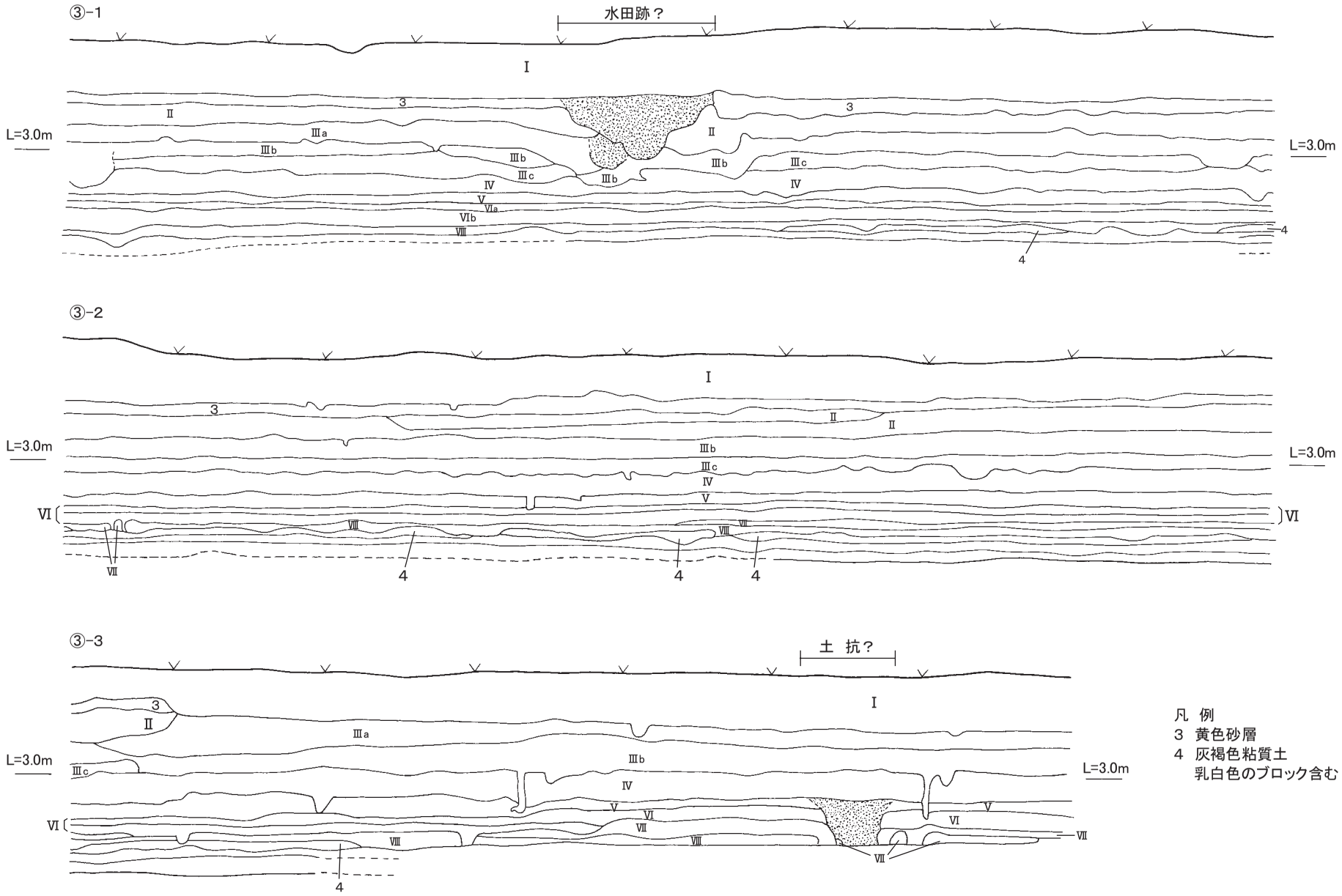
Ⅰ　層	茶褐色土	表土または水田耕作土
Ⅱ　層	灰褐色土	
Ⅲａ層	褐色砂質土	中世後期の包含層
Ⅲｂ層	褐色粘質土	古代末～中世前期の包含層
Ⅲｃ層	黄褐色粘質土	
Ⅲｄ層	明黒褐色粘質土	
Ⅳ　層	黒褐色砂質土	古代の包含層
Ⅴａ層	暗灰黄褐色砂質土	古墳時代の包含層
Ⅴｂ層	黄褐色粘質土	
Ⅵ　層	暗褐色粘質土	縄文時代晩期～弥生時代～古墳時代の包含層
Ⅶａ層	黄褐色粘質土	縄文時代晩期～弥生時代の包含層
Ⅶｂ層	黄橙色粘質土	
Ⅷ　層	灰色砂質土	縄文時代後期の包含層


万之瀬川
樋門部分
築堤部分
確認トレンチ
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
U
V
W
X
Y
Z
20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
0
50m

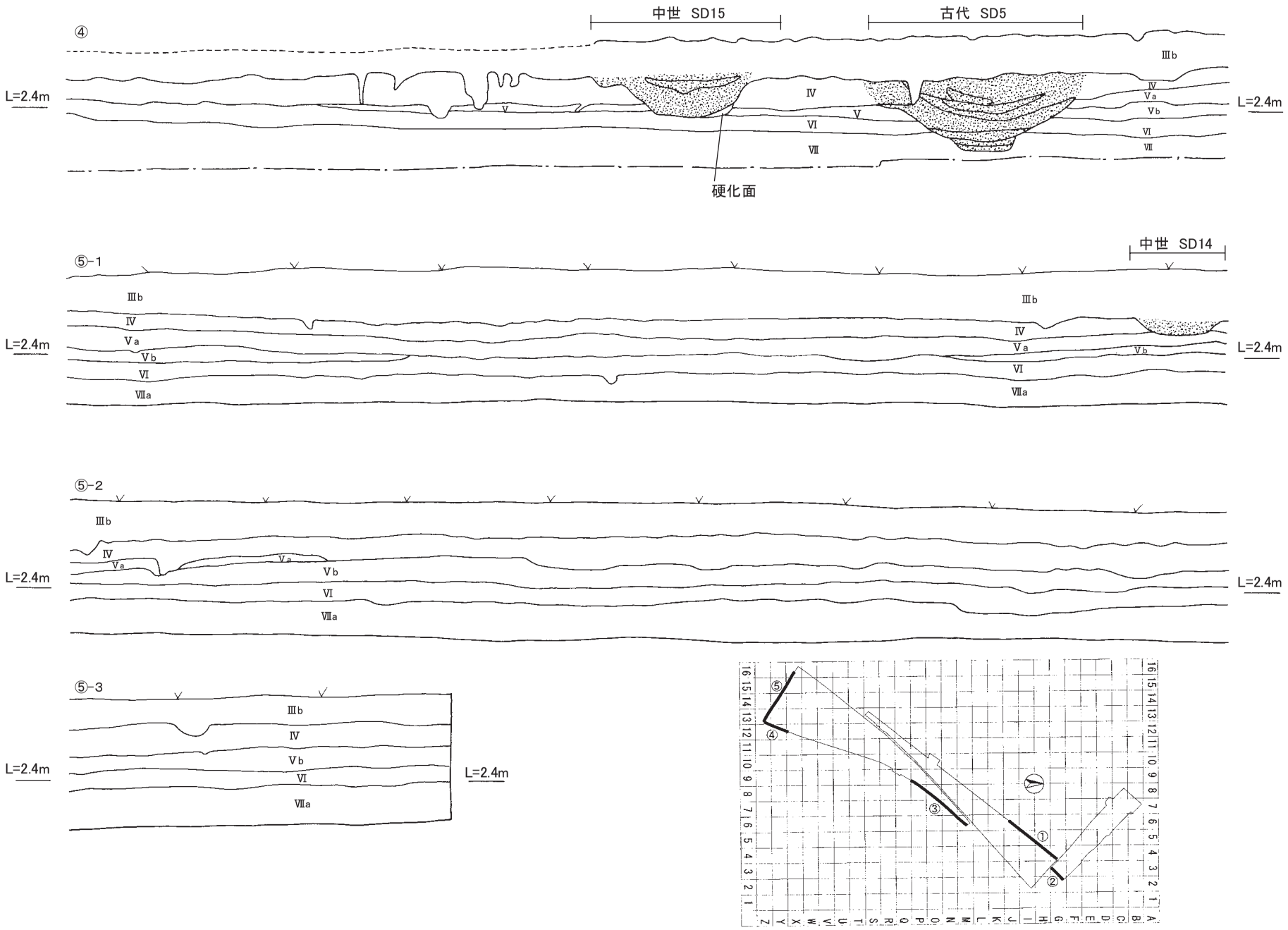
第４図　グリッド配置図


①-1
L=3.0m
L=3.0m
1
1
Ⅱ
Ⅲb
Ⅲc
Ⅲd
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶa
①-2
L=3.0m
L=3.0m
Ⅱ
Ⅲd
Ⅲc
Ⅲb
Ⅲc
①-3
L=3.0m
Ⅱ
L=3.0m
Ⅲb
Ⅲc
Ⅲb
Ⅲd
Ⅵ
Ⅶa
Ⅴ
Ⅳ
②
L=2.8m
中世
SD2
2
Ⅰ
カクラン
Ⅱ
L=2.8m
Ⅲa
Ⅲb
Ⅳ
Ⅳ
Ⅴa
Ⅷ
Ⅵ
Ⅲc
凡 例
1 黄褐色土
2 水田基盤層
①
②
③
④
⑤

第５図　北側土層断面図


③-1
水田跡？
L=3.0m
L=3.0m
③-2
L=3.0m
L=3.0m
③-3
土 抗？
L=3.0m
L=3.0m
凡 例
3 黄色砂層
4 灰褐色粘質土
乳白色のブロック含む

第６図　西側土層断面図



第７図　南側土層断面図

第Ⅴ章　縄文時代の調査

第１節　遺　　物

１遺物の出土状況

縄文時代を中心とした明確な層は今回の調査では確認できなかったが，縄文時代の遺物がⅢ層からⅧ層にかけて出土した。後期の遺物が数点出土したが，その他はほとんど晩期の遺物である。遺物が集中して出土したのはＧ－４区，及びＴ－12･13区とその周辺であった。また，この時代の遺構は検出されなかった。

２遺物

縄文時代後期土器（第８図１～３）

１～３は縄文時代後期の土器の口縁部である。１は口縁部外面に逆Ｓ字の凹線が施されている。２は口唇部付近でやや内湾する器形を呈する。口唇部は棒状の工具で凹凸を施している。３はほぼまっすぐに立ち上がる器形で口縁部外面に粘土帯を逆Ｖ字に貼り付けている。いずれも深鉢形土器の口縁部と思われる。

縄文時代晩期土器（第８図４～第９図37）

４～18は縄文時代晩期の粗製土器である。４は口縁部外面に２条の沈線が巡らされている。

５・６は口唇部がナデられ平坦になっており，５の外面には横方向の条痕が認められる。７は直線的に外反し，内面は丁寧にナデられており，外面は斜め方向の条痕がある。８の外面には数条の深い横方向の沈線が施されている。９は深鉢の口縁部から胴部にかけてである。胴部最大径部で「逆く」字状に屈曲し，口縁端部はやや外反する。内面，外面ともに条痕を施している。10はやや外反し，口唇部はナデによってややくぼみ，やや外面に張り出している。内外面とも条痕が施されている。11，13の上端は深鉢の屈曲部分であると考えられる。12はリボン状の突起部分である。13の内面は丁寧にナデが施され，外面にはススが付着している。14～18は底部である。14・15は充実した脚台状の器形で脚台部は比較的高く，下端はふくらみを持つ。16～18は低脚状の器形で，いずれも内面は丁寧にナデられている。

19～37は縄文時代晩期の精製土器で，内外面ともにミガキが施されている。19～21は口縁部が外反し，口縁部外面に沈線が施され，その結果，口縁端部が玉縁状を呈している。22～24は口縁端部が玉縁状を呈し，頸部で「く」字状に屈曲し，胴部最大径部でも屈曲する。25～28も同様に屈曲するが，胴部屈曲部径より口縁部径のほうが大きいタイプである。27は口縁部端がやや方形状を呈する。29～31は玉縁状の口縁端部を有し，頸部までが短い。頸部で「く」字状に屈曲し，胴部は丸みをおび，口径よりも胴部径が大きい。32は口縁部内外に１条の沈線が施されており，口縁端部は方形状を呈する。34は器壁が薄く，小型の鉢形土器と考えられる。33，35の口縁部は波状を呈し，口縁部下に２条の沈線が巡らされている。沈線部分と胴部の一部に赤色顔料が残る。37は浅鉢の底部と思われる。

石器

石鏃（第10図38～40）

38，39は先端が鋭く側辺が外湾的で最大幅が下方にあり逆刺が鋭く抉りが浅い。39は38より逆刺が鋭くなっている。40は先端が鋭く側辺が直線的で二等辺三角形状を呈し，逆刺が鋭く抉りが深くなっている。

スクレイパー（第10図41・42）

41は縦長剥片のめのうを素材とし，下縁部に微調整が加えられている。42は腰岳の良質の黒曜石を用い，一側縁部に調整剥離を施しスクレイパーとして用いたと考えられる。

打製石斧（第10図43）

肩部に抉りが深くはいる打製石斧であるが基部に研磨が見られる。

磨製石斧（第10図44～46）

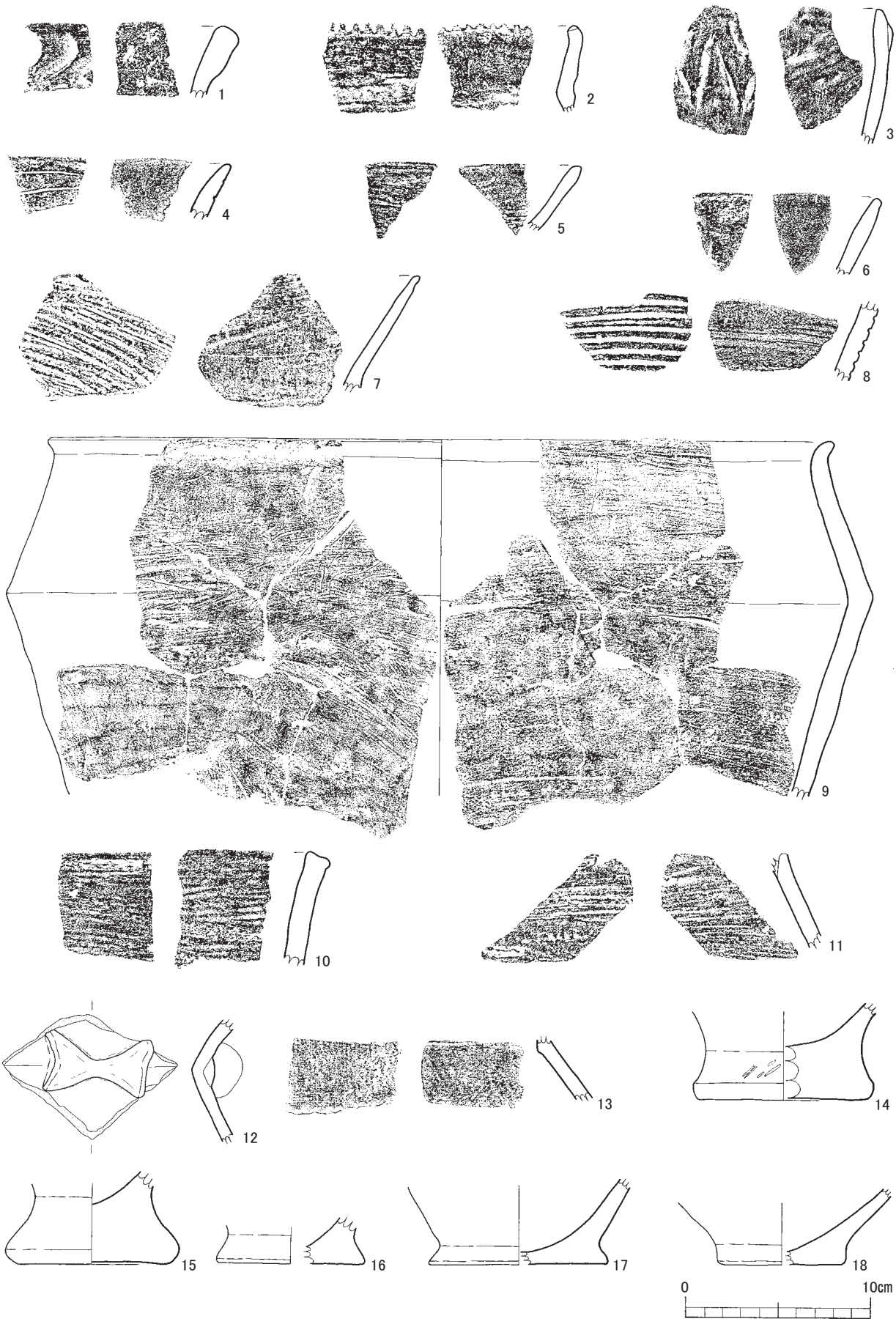
44の刃部は蛤刃で，全体を敲打により整形し，その後丁寧な研磨で仕上げている。45は頁岩製で刃部は欠損している。調整剥離により基部調整を施しており側面は丸みを帯びた面と平坦な面を有する。全体的に丁寧に磨かれている。46も刃部は欠損しているが，先端はノミ状を呈すると思われる。

擦切石器（第10図47）

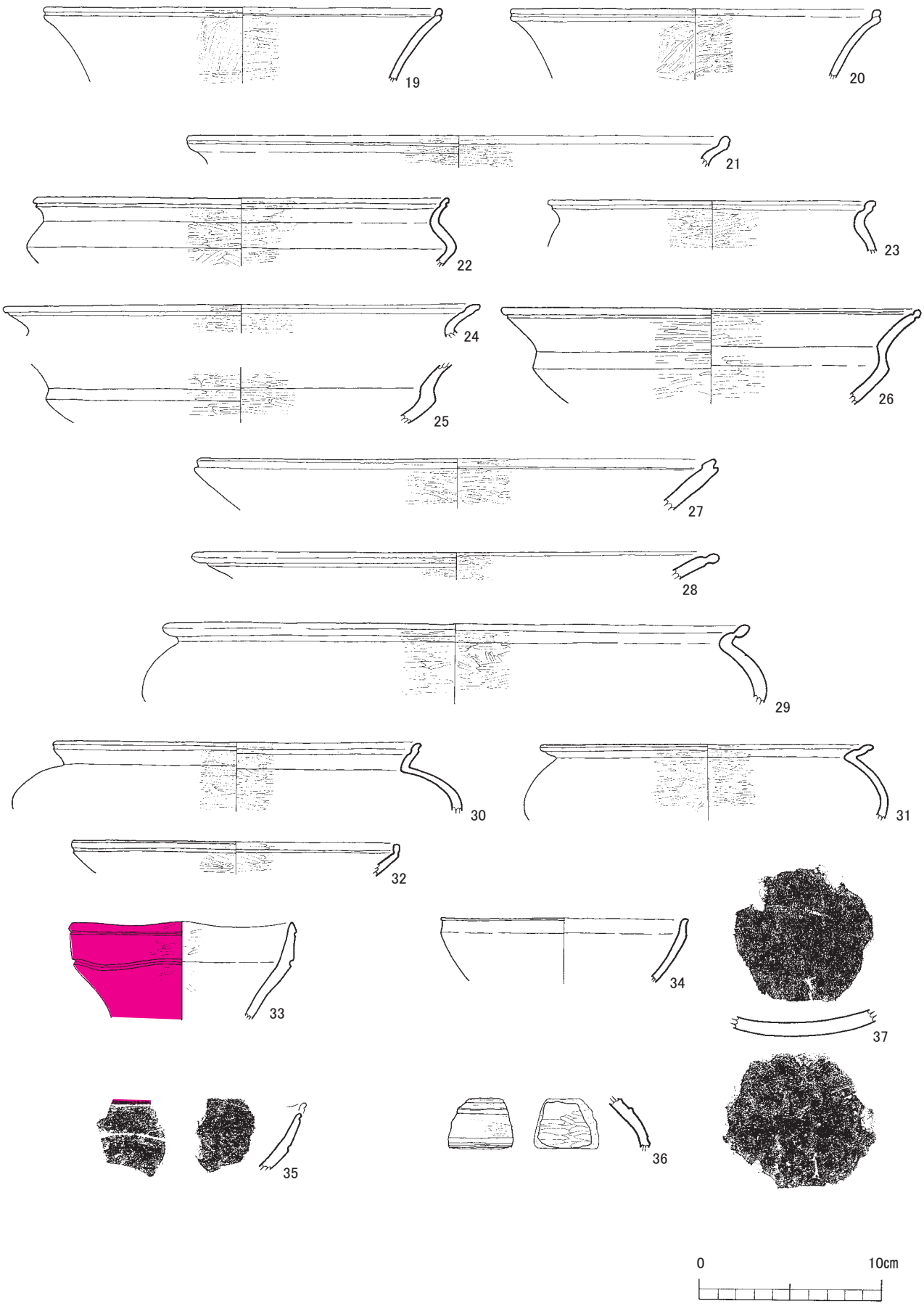
砂岩を用い，下面に研磨による鋭い面がみられる擦切石器である。

凹石・敲石・磨石（第10図48～第12図63）

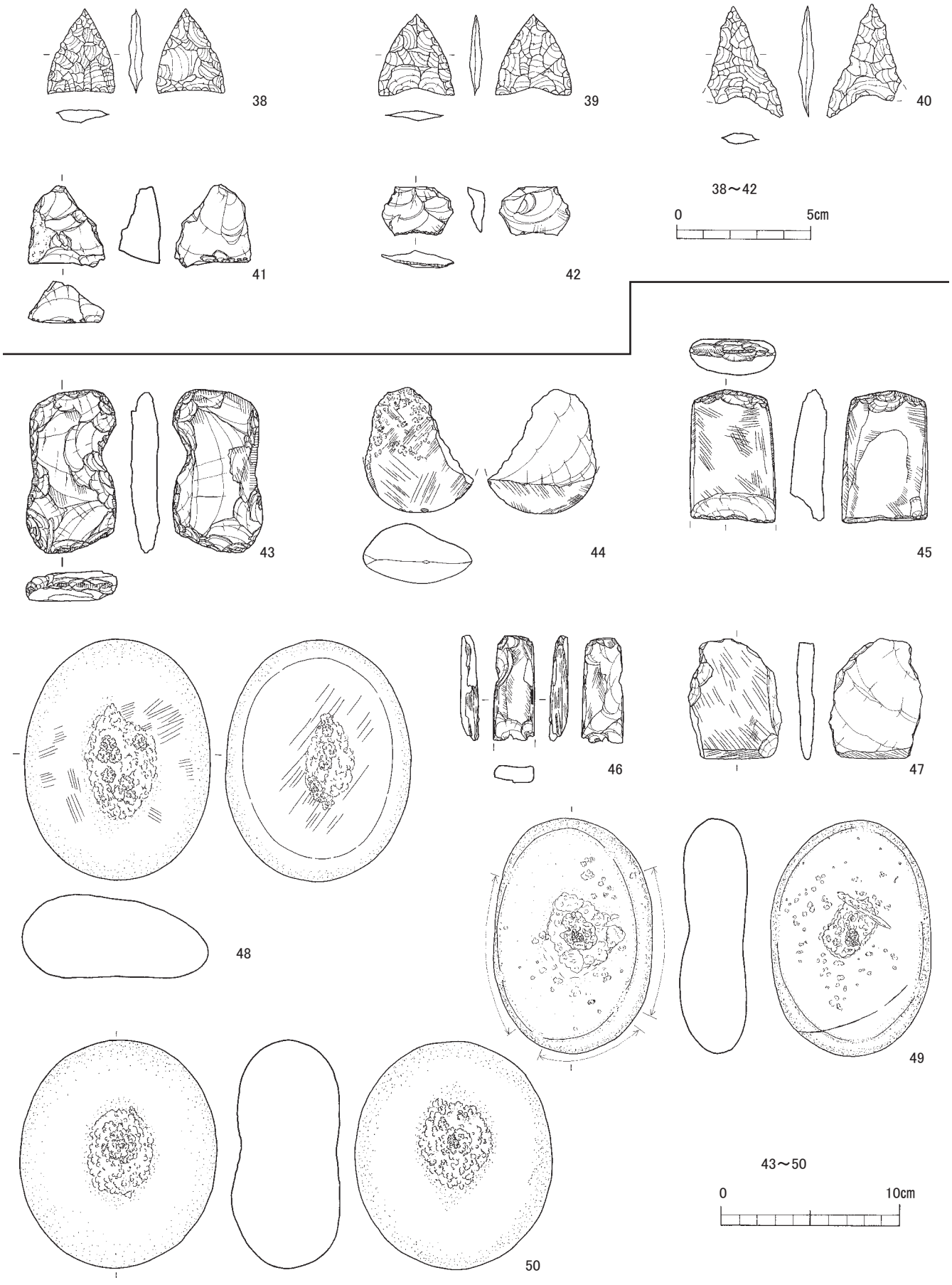
48～60は凹石である。48～50は両面にくぼみを有し側縁に敲打痕がない。51，53，54，56は側縁に敲打痕を有する。52，55は球状の器形を呈する。57，58は円形を呈し磨面を伴う凹石である。59は楕円形を呈し両面から明瞭な穿孔痕がみられる。60は横断面が三角形をなし，この三面に明瞭なくぼみがみられる。61は楕円形状の敲石で，62・63は磨石である。62は磨面が片方のみにあり，63は両面に磨面がみられる。



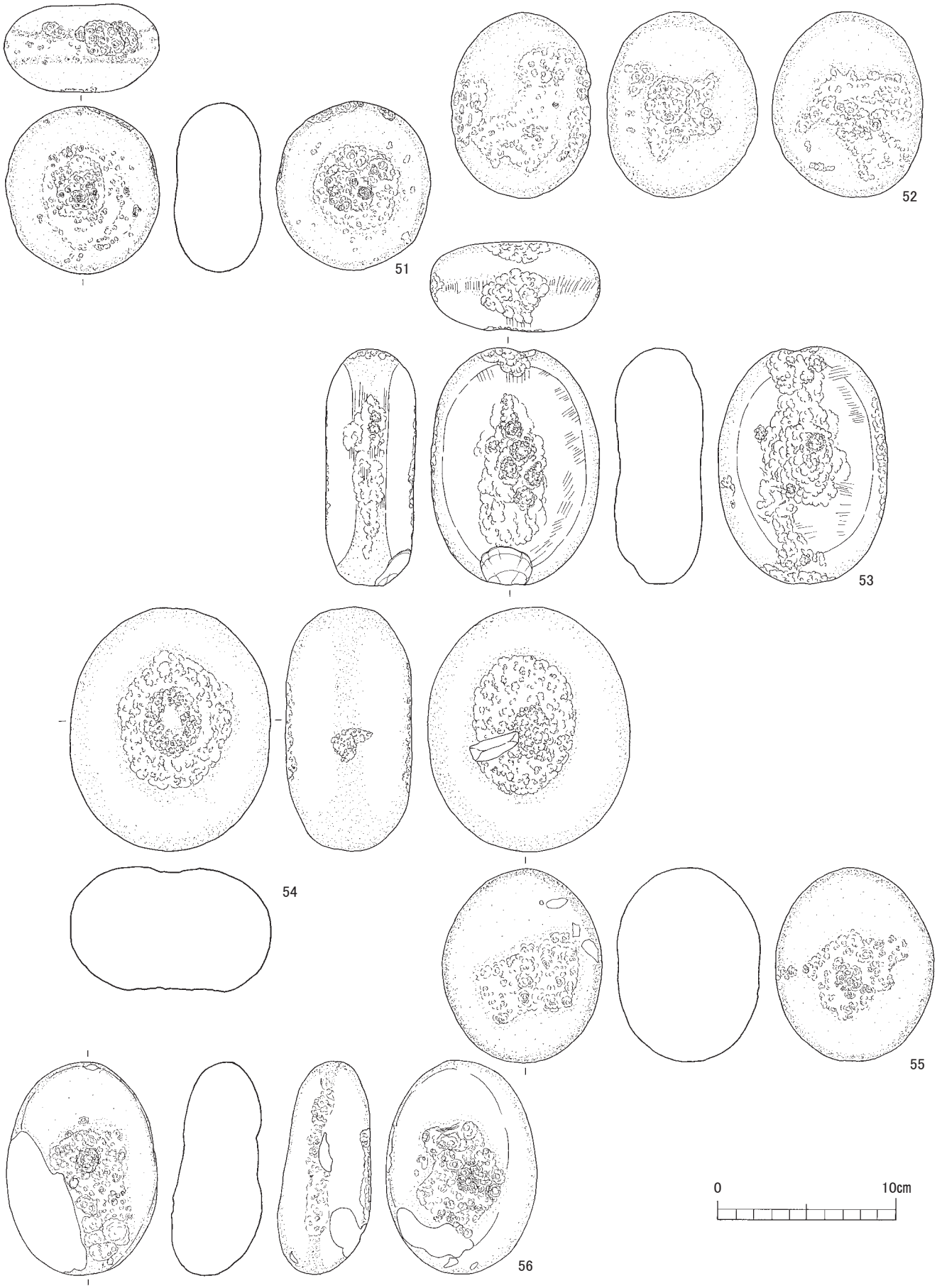
第８図　縄文時代遺物（１）粗製土器



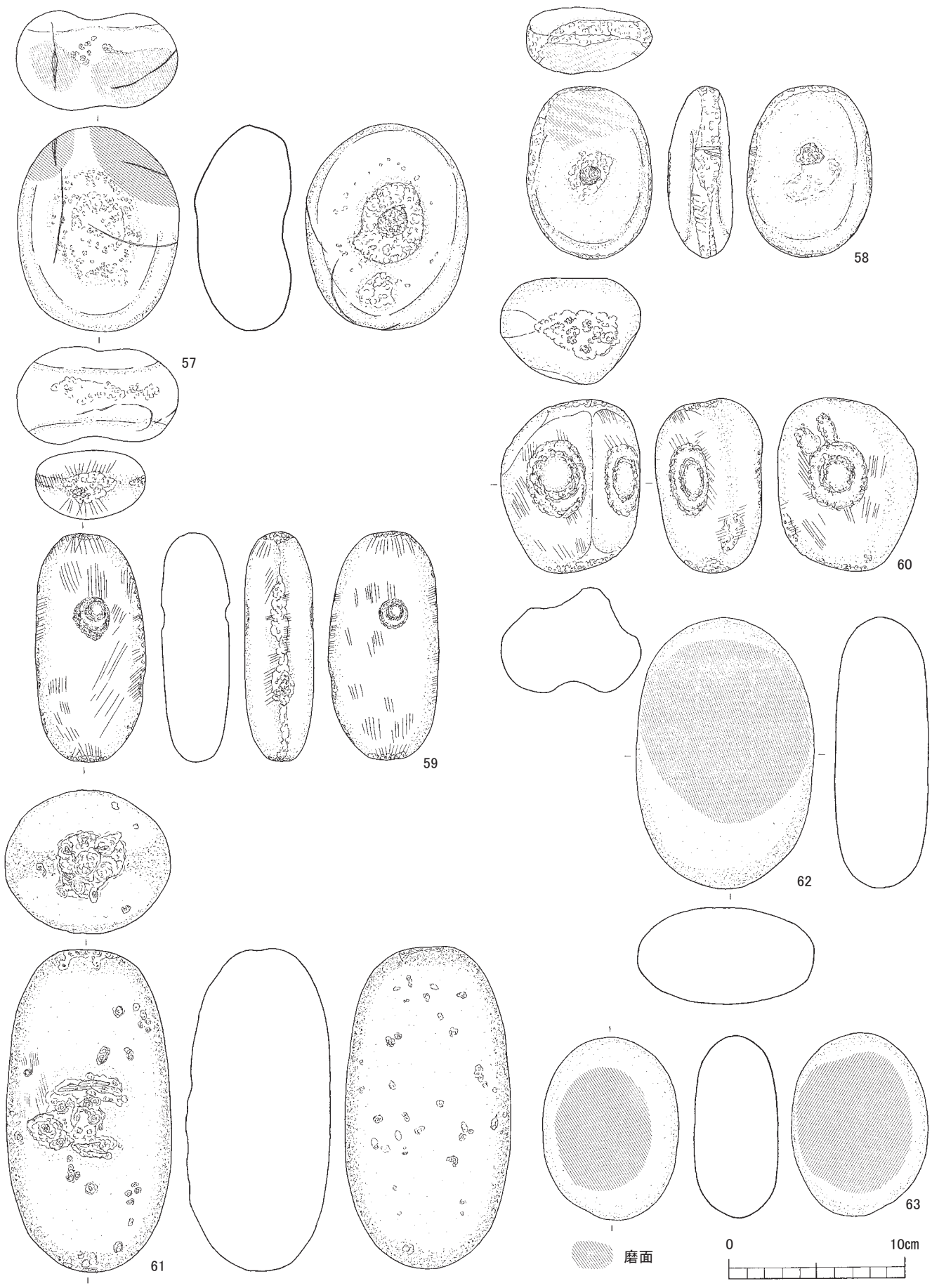
第９図　縄文時代遺物（２）精製土器



第10図　縄文時代遺物（３）石器



第11図　縄文時代遺物（４）石器



第12図　縄文時代遺物（５）石器

表２　縄文時代遺物観察表（１）

挿図	番号	器種	層	部位	出土区	色調		調整		胎土						備考
						外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	ウンモ	小礫	その他	
8	1	深鉢	Ⅳ下	口縁	R－10	褐	褐	ナデ	ナデ	○	○					凹線文
	2	深鉢	Ⅳ下	口縁	T－12	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○	○				—
	3	深鉢	Ⅷ	口縁	X－14	褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○	○				—
	4	深鉢	Ⅳ	口縁	W－14	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○	○				沈線
	5	深鉢	Ⅳ	口縁	X－13	黒褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○					—
	6	深鉢	Ⅴb	口縁	X－13	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○	○				—
	7	深鉢	Ⅴb	口縁	X－13	にぶい黄	浅黄	ナデ	ナデ	○	○	○				—
	8	深鉢	Ⅲb	口縁	Y－14	暗褐	褐	ナデ	ナデ	○	○	○				沈線
	9	深鉢	Ⅵ	口縁～胴部	X－15	黒褐	にぶい黄橙	条痕	条痕・ナデ	○	○	○				—
	10	深鉢	Ⅴb	口縁	X－13	にぶい黄橙	にぶい黄橙	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	○	○				—
	11	深鉢	Ⅳ下	胴部	T－12	暗褐	にぶい黄褐	条痕後ナデ	条痕	○	○					—
	12	深鉢	Ⅴb上	胴部	T－13	にぶい黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○	○				リボン状突起
	13	深鉢	Ⅳ下	胴部	T－13	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○	○				—
	14	深鉢	Ⅳ	底部	M－8	にぶい橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○	○			茶粒	—
	15	深鉢	Ⅵ	底部	T－12	橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○			○		—
	16	深鉢	Ⅵ	底部	X－14	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○					—
	17	深鉢	Ⅵ	底部	S－12	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○			○	茶粒	—
	18	深鉢	Ⅵ	底部	S－12	にぶい黄橙	褐灰	ナデ	ナデ	○	○					—
9	19	浅鉢	Ⅴb	口縁	X－15	暗褐	暗褐	ミガキ	ミガキ	○	○	○				—
	20	浅鉢	Ⅳ下	口縁	T－12	暗褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	○	○	○				—
	21	浅鉢	Ⅴb	口縁	W－14	灰褐	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○					—
	22	浅鉢	Ⅴ	口縁～胴部	S－13	灰黄褐	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○					—
	23	浅鉢	Ⅴb	口縁～胴部	T－11	灰黄褐	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○	○			茶粒	—
	24	浅鉢	Ⅳ下	口縁	T－12	黒褐	黄灰	ミガキ	ミガキ	○	○	○				—
	25	浅鉢	Ⅳ	胴部	S－12	にぶい橙	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	○	○	○				—
	26	浅鉢	Ⅳ	口縁～胴部	P－10	にぶい橙	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	○	○	○				—
	27	浅鉢	Ⅳ	口縁	X－13	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○			—
	28	浅鉢	Ⅳ下	口縁	V－13	黒褐	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○					—
	29	浅鉢	Ⅳ下	口縁～胴部	T－14	黒褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	○	○					—
	30	浅鉢	Ⅳ下	口縁～胴部	U－13	灰褐	灰褐	ミガキ	ミガキ	○	○			○		—
	31	浅鉢	Ⅴ	口縁～胴部	Q－11	黒褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	○	○					—
	32	浅鉢	Ⅳ下	口縁	T－12	黒褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	○						—
	33	浅鉢	Ⅳ	口縁～胴部	T－13	にぶい黄橙	褐灰	ミガキ	ミガキ	○	○					赤色顔料
	34	浅鉢	Ⅵ	口縁	T－13	浅黄橙	浅黄橙	ミガキ	ミガキ	○	○	○				—
	35	浅鉢	Ⅳ上	口縁	U－12	にぶい黄橙	黄灰	ミガキ	ミガキ	○	○	○				赤色顔料
	36	浅鉢	Ⅳ	胴部	X－14	明黄褐	黄灰	ミガキ	ミガキ	○	○					—
	37	浅鉢	Ⅳ	底部	G－4	褐	にぶい黄橙	ミガキ・ナデ	ナデ	○	○	○				—

表３　縄文時代遺物観察表（２）

（　）内は欠損部分の測定値

挿図	番号	出土区	層	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
10	38	X－14	Ⅵ	石鏃	黒曜石	2.1	1.7	0.3	1.09	－
	39	R－10	Ⅵ	石鏃	針質安山岩	2	1.95	0.3	0.94	－
	40	S－10	Ⅳ	石鏃	頁岩	2.7	1.7	0.3	0.93	－
	41	T－11	Ⅲb	スクレイパー	めのう	1.85	2.26	1.08	3.64	－
	42	T－12	Ⅵ	スクレイパー	黒曜石	1.22	1.75	0.35	0.68	－
	43	T－12	Ⅵ	打製石斧	頁岩	8.98	5.15	1.53	109.35	－
	44	S－12	Ⅵ	磨製石斧	砂岩	(7.04)	(5.73)	(2.28)	61.31	－
	45	U－12	Ⅳ上	磨製石斧	頁岩	(7.37)	4.79	1.82	104.79	－
	46	W－12	Ⅲb	磨製石斧	粘板岩	(5.83)	2.21	1.02	21.01	－
	47	S－11	Ⅵ	擦切石器	砂岩	(6.87)	(5.07)	1.07	46.06	－
	48	V－12	Ⅲb	凹石	砂岩	13.46	10.38	5.12	990	－
	49	U－12	Ⅲb	凹石	砂岩	12.95	8.72	3.86	650	－
	50	S－12	Ⅵ	凹石	砂岩	12.65	10.92	5.41	1240	－
11	51	U－11	Ⅲb	凹石	安山岩	9.3	8.5	5	580	－
	52	X－13	Ⅲb	凹石	砂岩	10.7	8.8	7.7	1000	－
	53	T－12	Ⅵ	凹石	安山岩	13.2	9.3	5	950	－
	54	T－13	Ⅵ	凹石	安山岩	13.6	11.1	7.1	1630	－
	55	不明	Ⅵ	凹石	安山岩	10.3	8.3	7.9	920	－
	56	S－13	Ⅴ下	凹石	安山岩	11.9	8.5	5.2	660	－
12	57	S－12	Ⅵ	凹石	砂岩	11.4	8.9	5.6	860	－
	58	R－12	Ⅳ	凹石	頁岩	9.6	7	3.9	380	－
	59	S－12	Ⅵ	凹石	砂岩	12.9	6.2	3.9	480	－
	60	T－13	不明	凹石	砂岩	9.6	8.2	6	650	－
	61	U－13	Ⅳ	敲石	安山岩	18	9	8	2080	－
	62	L－6	Ⅲb	磨石	花崗岩	15.2	9.9	5.4	1280	－
	63	Y－14	Ⅲb	磨石	安山岩	10.2	7.8	4.8	550	－

第Ⅵ章　弥生・古墳時代の調査

第１節　遺　　構

１遺構の概要

弥生時代は，Ⅵ層を包含層として土器を中心に石器を一部に含んで遺物が出土したほか，Ⅶ層の上面で遺構を検出した。遺構の埋土はⅥ層土を中心としている。

弥生時代の遺構としては竪穴住居跡５軒，土坑６基，溝状遺構５条のほか，土器溜まり１か所とピット多数が検出されている。なお，Ⅵ層を埋土とする遺構は弥生時代のものばかりでなく古墳時代のものもあることから，埋土中に時代・時期の明確な土器が出土した竪穴住居跡と土坑以外の遺構，つまり溝状遺構やピットでは時代・時期は不明確であった。そのため，ここでは調査中の所見や判断をもとに，２つの時代の遺構を峻別して若干の説明を行うことにする。そのため，ピットのほとんどについては平面図を掲載するにとどめる。

２遺構

(1) 竪穴住居跡

埋土の観察や出土遺物による判断結果から，弥生時代と考えられるものを５軒検出した。検出区域はある程度まとまっており，Ｔ～Ｙ－11～15区で確認された。

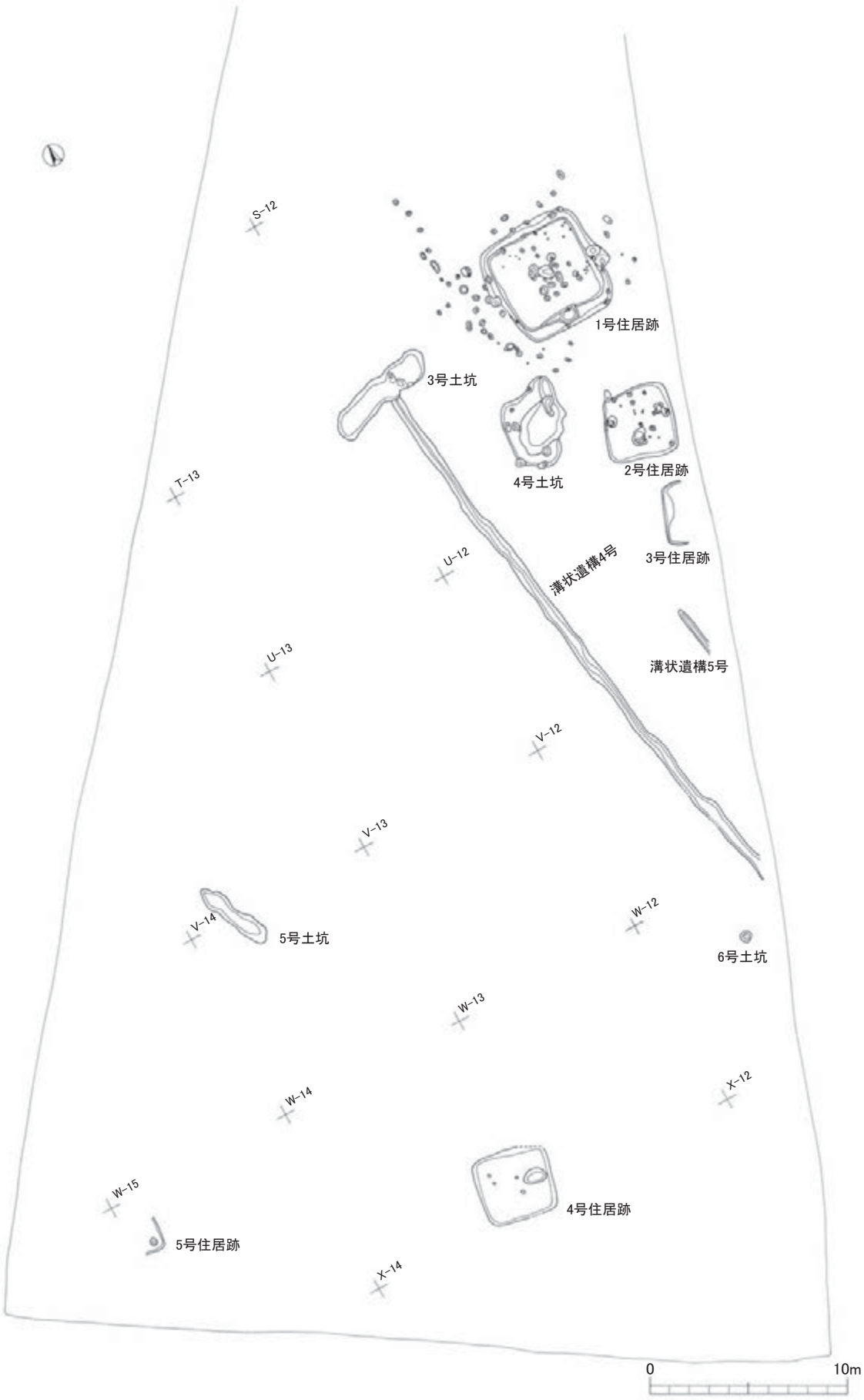
①１号住居跡（第15・17図）

出土遺物から見た場合，弥生時代終末期であるので，この住居跡については弥生時代の遺構として扱う。

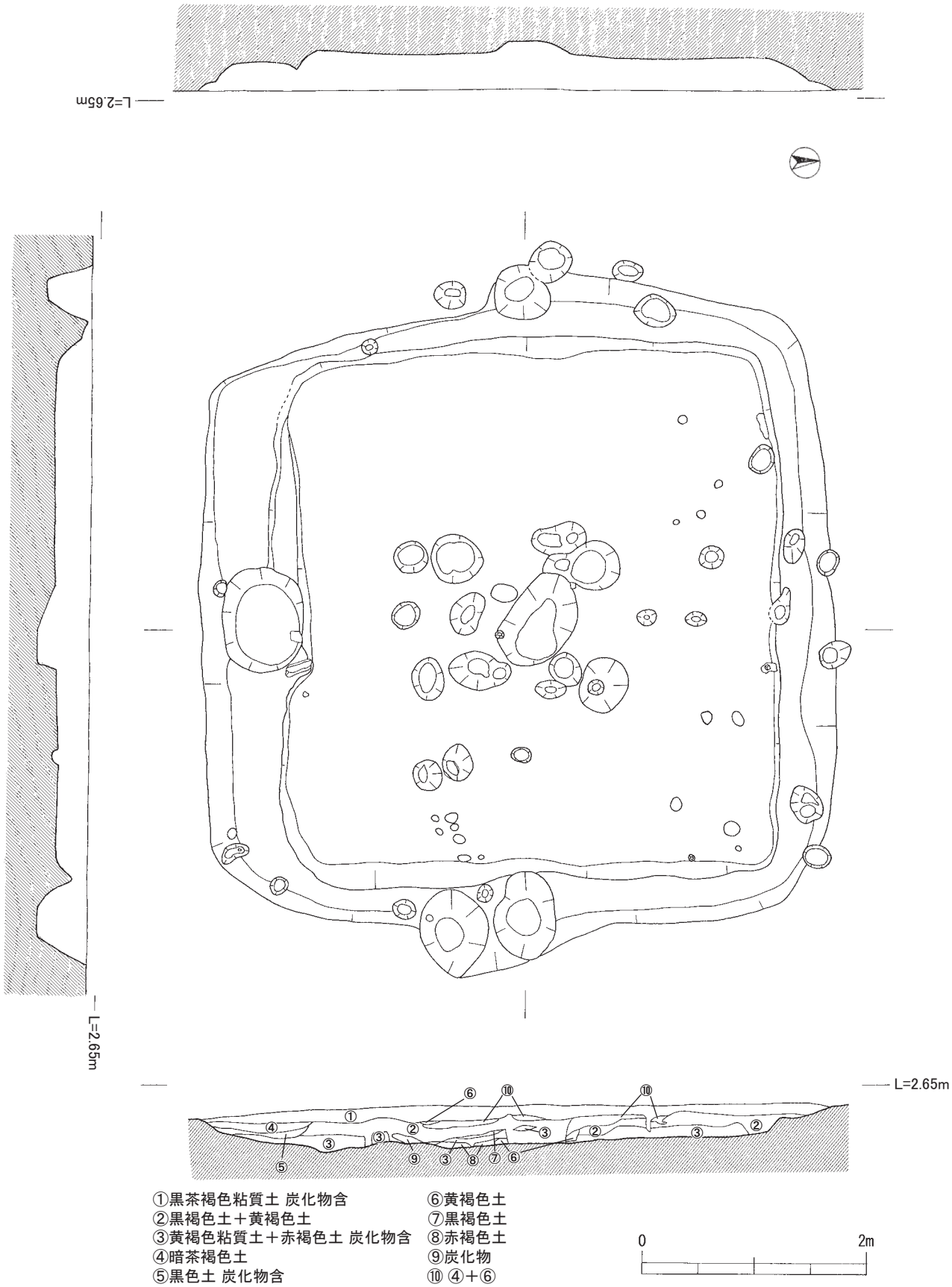
Ｔ・Ｕ－11・12区で確認された。主軸方向はＮ83°Ｗで，ほぼ東西方向を主軸としていると言える。形態は，東西方向が5.7m，南北方向も5.67mで，ほぼ正方形を基調として設けられていると考えられる。南側の辺はほぼ直線となっているものの，その他の３辺は中央部が若干膨らむような弧状を呈していると言える。掘り方は，検出面から約20㎝の深さで，20～50㎝程の一旦狭い平坦面を造り，その後，さらに20㎝程度掘り下げるという“二段掘り”の構造を持っていることが特徴となっている。床面は幾分凹凸が見られるものの，全体としては平坦化されていると言える。中央部に，90㎝×58㎝程の土坑があり，その周囲に４本の主柱穴が取り囲むという構造と考えられる。４本の主柱穴の周りには，それより若干小さめのピットが集中する。中央部の東側では，中小のピットが壁に向かって位置するほか，北側全体にも中小規模のピットが散在している。これらの性格は不明である。掘り方の一段目には，北側以外に土坑がそれぞれ１～２基確認されている。東側の２基は，一段目の掘り方の面からの深さが，それぞれ30㎝と65㎝あることから，貯蔵用の可能性が考えられる。それに対して，西側の1基は規模も小さく，深さも25㎝程度であることから柱穴の可能性が考えられる。また，南側の１基は，平面的な規模は東側のものと類似しているものの，深さが15㎝程度と極めて浅いことから，それらとは異なった機能を有する可能性がある。それ以外にも，掘り方の上面及び一段目を中心とした辺りに，中小規模のピットがある程度集中して位置している。本住居跡の周辺には広範囲にピットが集中しているという特徴がある。１号住居跡以外ではこのように多数のピットは見られないことから，本住居跡の性格や機能，あるいは時期の差として捉えられるかも知れない。これらのピット群はＴ－12区を中心にＴ－11区とＴ－13区にかけてほぼ帯状に分布している。

出土遺物（第16図１～14）

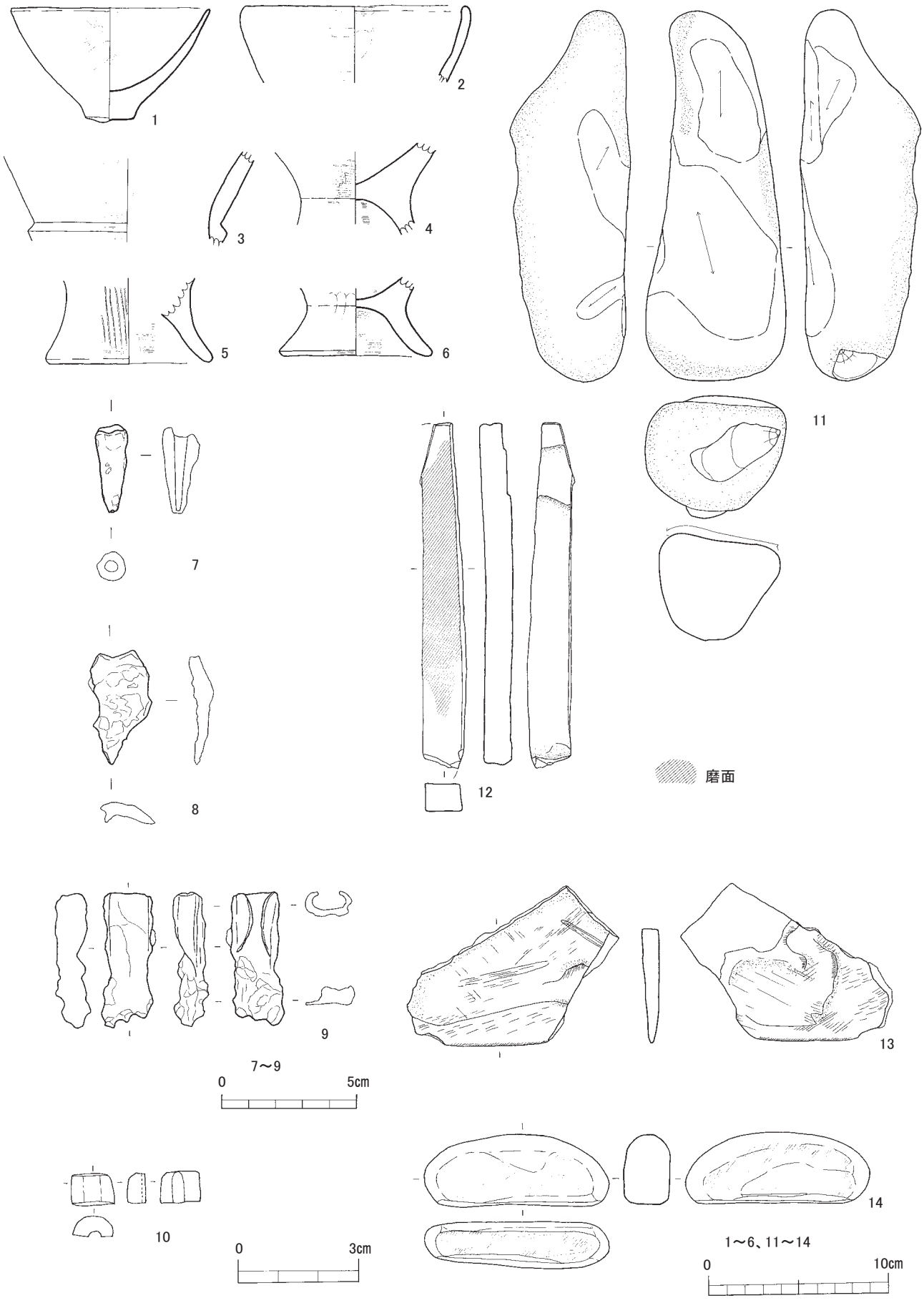
１号住居内からは，弥生時代後期～終末期のものと思われる土器片，石器，ガラス玉，鉄製品が出土した。土器は，小片が多く出土したが，鉢形土器，甕の脚部を図化した。１は口縁端部が細くなり，底部が突出する器形である。時期的特徴が認められるのは，脚部（４～６）である。脚部は低い脚台状（５・６）もしくは，細長い脚部（4）になると考えられ，松木薗式から中津野式の特徴を持っている。石器は砥石（11～13），研磨器（14）が出土した。14は平坦面と両側面に擦痕が認められ，一部非常に滑らかで光沢を持つ部分がある。10は緑色を呈する直径9ミリのガラス玉である。１点出土した。半分欠損しているが中心に直径２ミリ程度の穿孔があったことが分かる。鉄製品は円錐状を呈するもの（7），板状のもの（8），そして袋状鉄斧（9）の３点が出土した。鉄斧９は刃部が錆びており形状がはっきり確認できないが，小さな木柄に装着すると思われる袋部が確認される。袋部は完全に閉じない。弥生時代後期のものであろう。



第14図　弥生・古墳時代主要遺構図


L=2.65m
L=2.65m
L=2.65m
①黒茶褐色粘質土 炭化物含
②黒褐色土＋黄褐色土
③黄褐色粘質土＋赤褐色土 炭化物含
④暗茶褐色土
⑤黒色土 炭化物含
⑥黄褐色土
⑦黒褐色土
⑧赤褐色土
⑨炭化物
⑩ ④＋⑥
0
2m

第15図　1号住居跡（1）



第16図　１号住居跡内遺物

②**２号住居跡**（第18図）

Ｕ－11区で確認された。主軸方向はＮ10°Ｅであるが，ほぼ南北方向を基準としている。掘り方のラインは東と南が若干長く，それぞれ3.44ｍと3.52ｍであり，西と北が幾分短めで，それぞれ3.31ｍと3.28ｍであることから，若干潰れた正方形のように見える。深さは検出面から９㎝～18㎝である。床面には炭化物集中域と大小合わせて18基のピットが見られるが，それらのすべてが本住居跡に付随する柱穴とは考えらない。東西の壁に沿って位置しているほぼ中央のピットが主柱穴と考えられ，南側中程の壁から離れたピットは副柱穴の可能性が考えられる。

出土遺物（第19図15～19）

弥生時代中期後半と思われる土器が出土した。15は穿孔を持つ小型の鉢形土器であるが，胴部最大径部を底部とするように傾けると内面にスス痕が円形状に水平に巡る。鉢形土器本来の用途外に使用された可能性がある資料である。破損後，煮炊用として再利用された可能性が考えられる。このような口縁部に２か所の穿孔つき突起を持つ鉢形土器は，山ノ口式の器種にあるが，本資料は模倣品であろうと考えられる。16は上面が平坦な須玖式の甕形土器の口縁部と思われる。17・18は平底の底部である。18は赤色顔料が塗布され，外面に縦方向のミガキが見られる。19は台石である。おそらく平面は円形を呈すると思われ，平坦面に敲打痕と滑らかな磨面が認められる。

③**３号住居跡**（第20図）

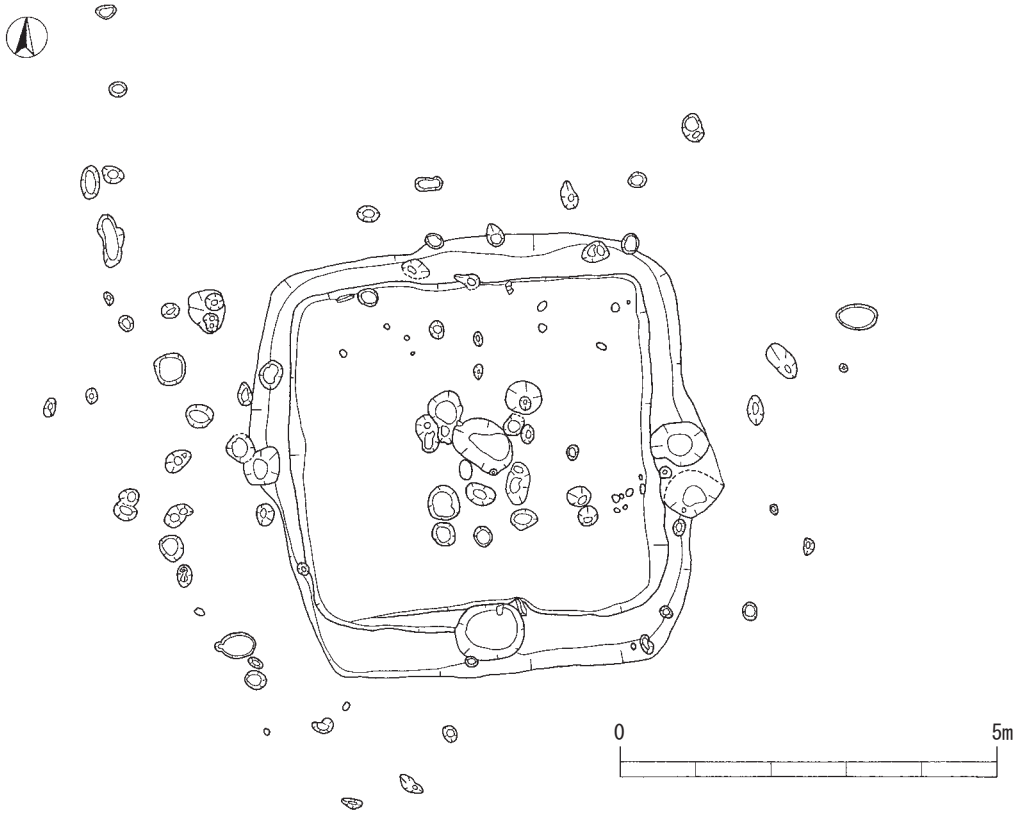
Ｖ－11区で確認された。大部分は東側に延びるものと考えられるため，全体的な規模は不明である。確認された西側のみの部分では，南北方向の西側の辺は3.17ｍ，検出している東西方向の辺は北側で1.10ｍ，南側で1.02ｍであり，深さは検出面から15㎝～18㎝である。主軸方向は西側の辺を基準として推定するとほぼＮ10°Ｅとなることから，１号住居跡と類似するものといえよう。遺構間の間隔から考えても同時期に併存していた可能性が大きい。床面にはピットは確認できなかった。

出土遺物

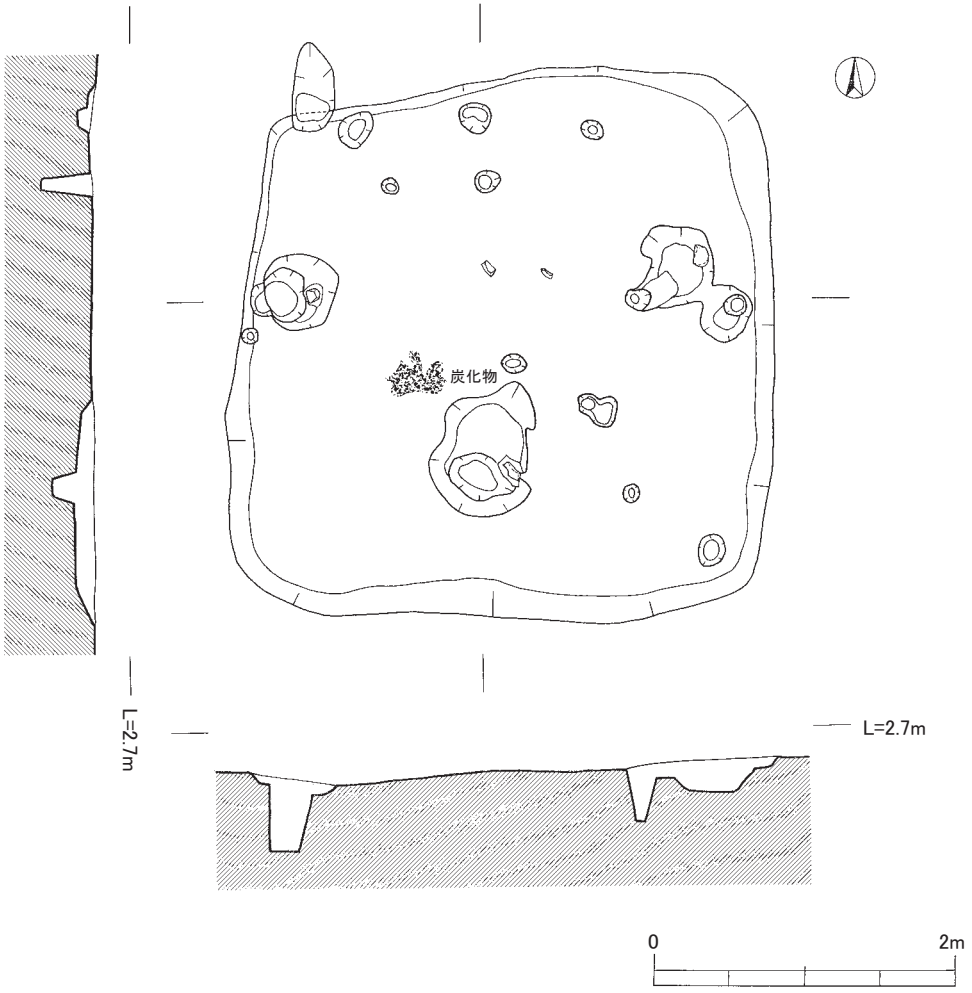
弥生時代のものと思われる胴部の小片が多く出土したが，図化できなかった。

④**４号住居跡**（第21図）

Ｘ・Ｙ－13・14区で確認された。主軸方向はＮ18°Ｅである。南東部を削られているために東及び南側の辺の長さは正確には不明である。また，北東部も上面は攪乱を受けている。西側の辺は3.47ｍ，北側は3.77ｍである。北側に比して南側が若干短く，全体的に北側が長い逆台形をしている。検出面からの深さは，17㎝～23㎝である。東側のほぼ中央部に東西方向に長い土坑が見られるが，貯蔵目的に掘られた可能性が考えられる。また，４基の小ピットが見られるが，主柱穴とは考えられない。



第17図　１号住居跡（２）



第18図　２号住居跡

出土遺物（第22図20～23）

弥生時代中期と思われる土器片が数点出土した。20～23は甕形土器の口縁部である。22は口縁部端は欠損しているが断面が方形を呈すると思われる。23の口縁部上面はわずかにくぼみ，口縁部端はヨコナデによりわずかにくぼみ，下部はわずかに肥厚する。弥生時代中期の入来Ⅱ式に類似する資料である。

⑤５号住居跡（第23図）

Ｘ－15区で確認された。南東隅という極めて一部の検出であることから，詳細は不明である。深さは22～25㎝で，床面には１基のピットが見られる。主軸方向はＮ２°Ｗと想定される。他の住居跡と同様な向きで主軸が大まかに並んだものであることが考えられる。

出土遺物（第24図24・25）

土器小片が12点出土し，口縁部２点を図化した。24は口縁端部が細く，丸みを帯びる甕形土器である。25は上面が逆Ｌ字状に突出し口唇部が平坦にナデられている。弥生時代中期の甕形土器と思われる。

(2) 土　　坑

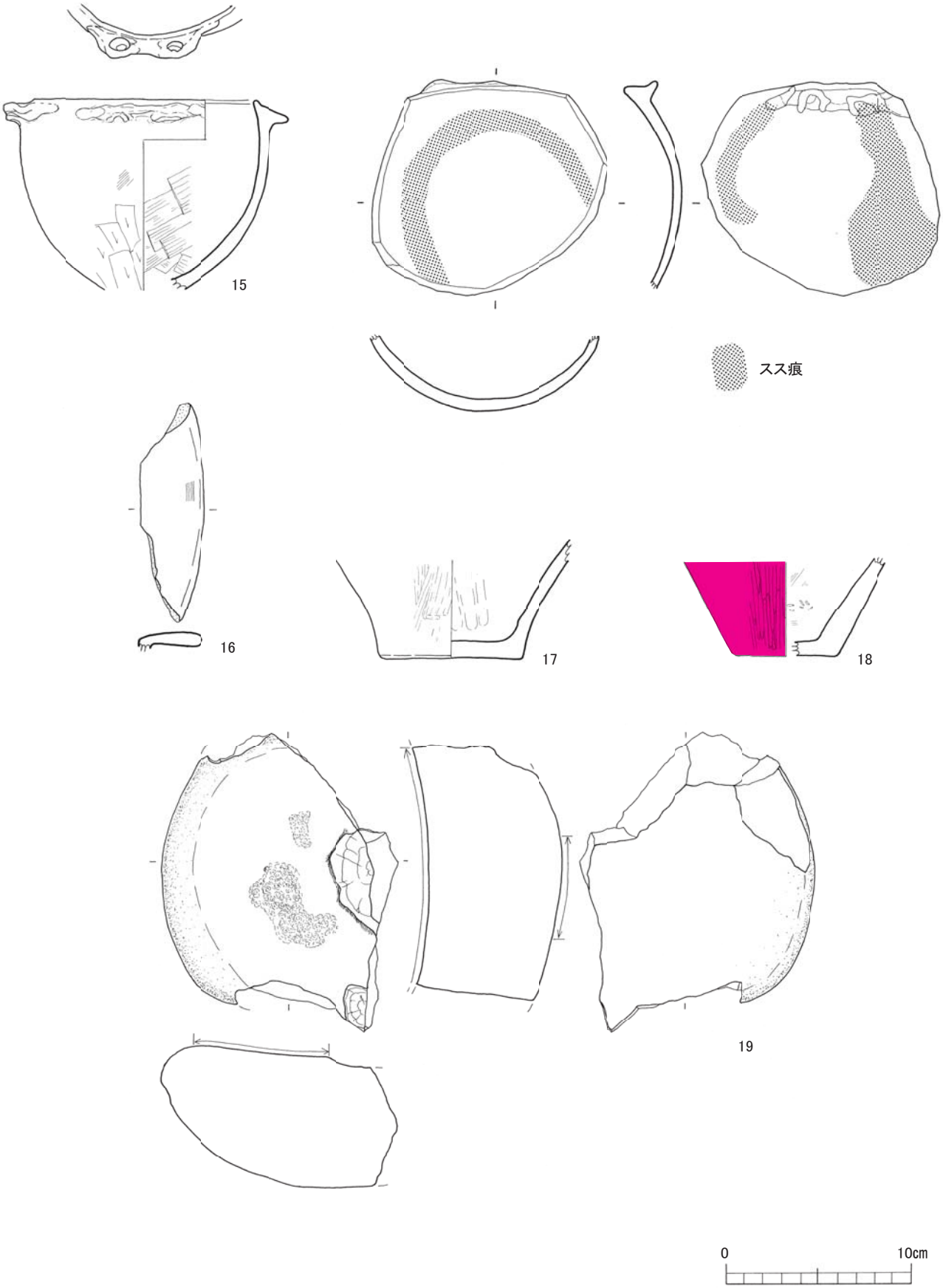
弥生時代の土坑は，Ｒ～Ｗ－10～14区にある程度まとまって検出された。土坑状の遺構はいくつかみられたが，ここではそのうち６基について取り上げる。以下，それぞれについて，概略を述べる。

①１号土坑（第25図）

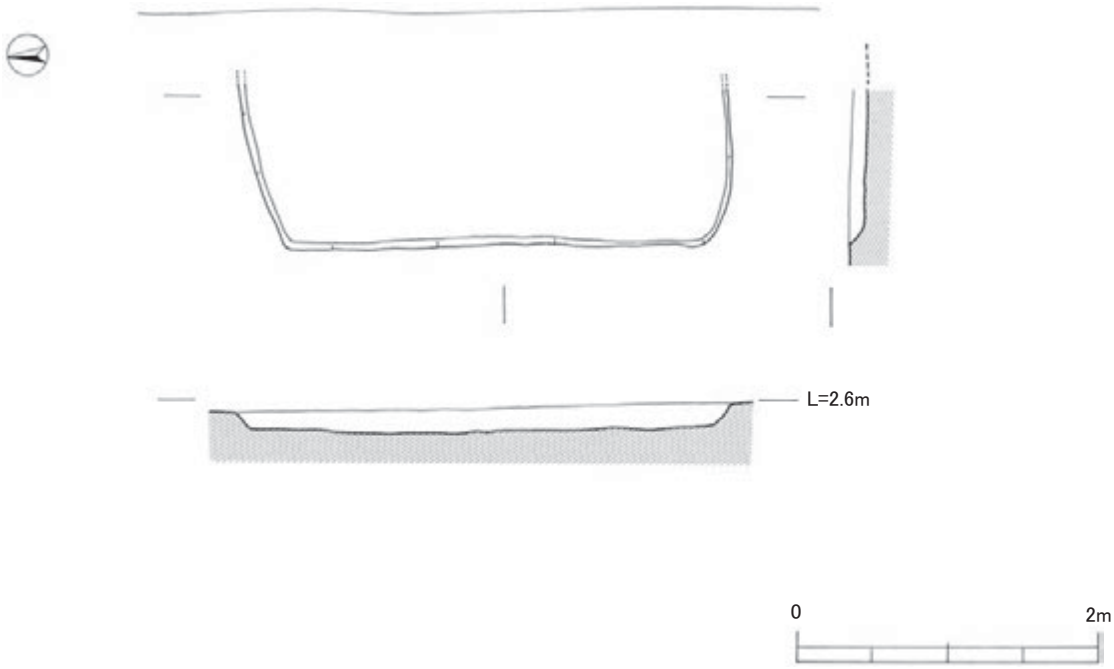
１号土坑は，Ｒ－10・11区で検出された。Ｒ－10～12区にかけて延びる，溝状遺構1号の北側に位置する。形状は，基本的には長楕円形を呈する。規模は，長軸方向が5.57m，短軸方向は西側で1.5m，東側で1.14mあり，深さは約30㎝である。

出土遺物（第26図26～29）

４点図化した。26は壺形土器の口縁部である。27，29は赤色顔料が塗布されており，29には断面三角形と思われる突帯が施されている。ともに須玖式の甕形土器と思われる。



第19図　２号住居跡内遺物



第20図　３号住居跡

②２号土坑（第27図）

２号土坑は，Ｓ－12区で検出された。全体的な形状は中央部が膨らんだ楕円形である。規模は，長軸方向が3.37m，短軸方向では2.08mである。掘り方は，南側が14cmと浅く，北側が26cmと若干深くなっている。本土坑の内部には，中小合わせて10基のピットが見られる。中央部のものは２重となったものを中心に，３基がほぼ南北方向に一列に並んでいる。それを取り囲むようにそれより規模の小さなピットが散在している。

③３号土坑（第28図）

３号土坑は，Ｔ・Ｕ－12・13区で検出された。長軸方向が5.72m，短軸方向は1.22～1.46mで，長楕円形もしくは長方形を呈する。主軸方向はＮ81°Ｅである。検出面からの深さでは27cmと深い。また，中央部付近には，ピットが２基見られる。北側のものは51cm×21cmの長楕円形を呈しており，深さは119cmである。南側のものは74cm×63cmの略円形で，深さは94cmである。この土坑の南側には溝（溝状遺構４号）が延びており，本土坑と交わる部分は深くなっていることから，深さは長軸方向の両側が16～18cmと浅いのに対して，中央の溝内を流れて来た水が流入した結果と考えられ，溝と本土坑は一体の遺構と考えられる。

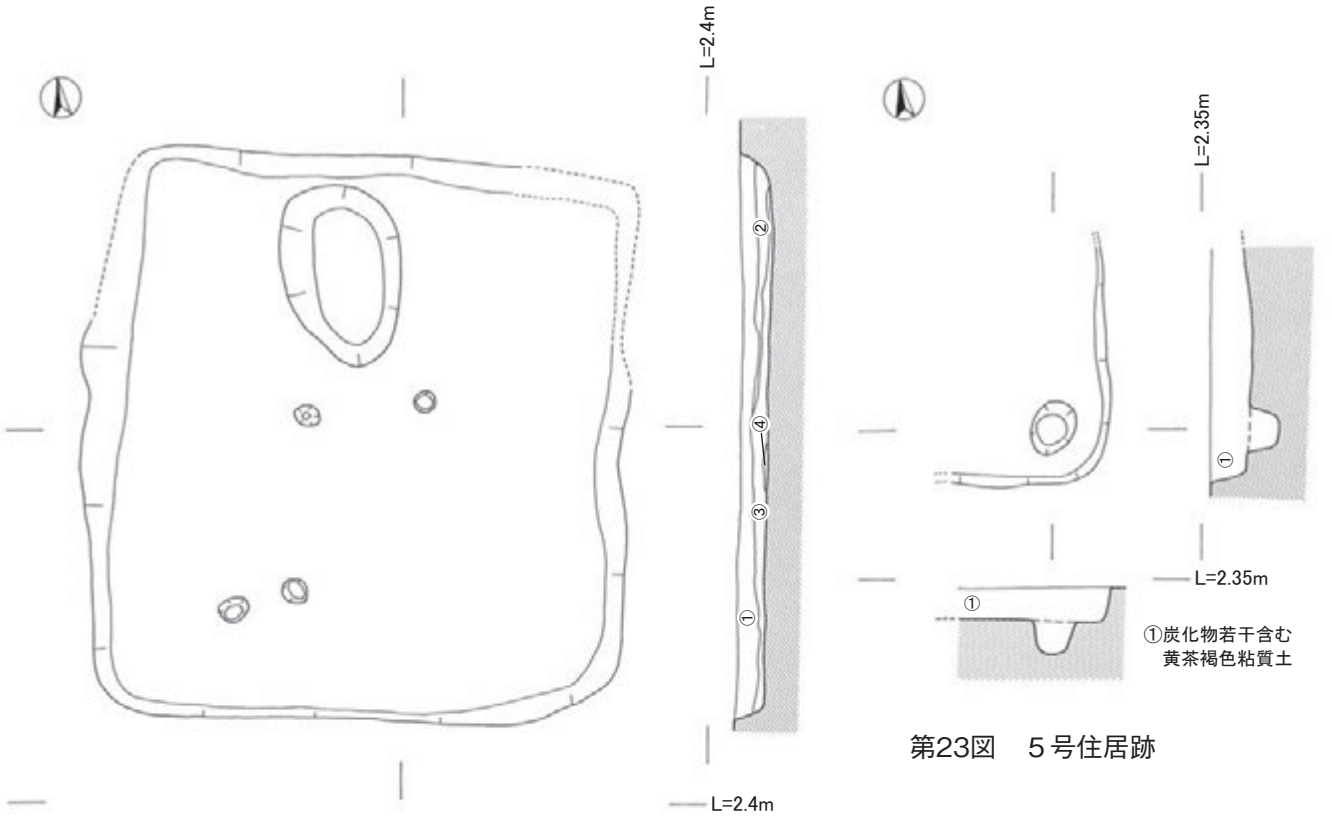
出土遺物（第29図30～33）

胴部片が多いが口縁部，胴部，脚部の４点図化した。30は甕形土器の口縁部である。口縁部は上方へ起きあがり口縁部上面の反りも強く，内面の突出も顕著である。頸部外面はナデによりわずかにくぼんでいる。胴部外面上方と口縁部下面にはススが付着している。31は壺形土器の胴部突帯部分である。突帯部分は丁寧にヨコナデされ，刻目が浅く施されている。32は壺形土器の口縁部である。口縁部は薄手で強く外反し，口唇部にはくぼみがみられる。頸部外面には指頭圧痕がみられる。33は甕形土器の脚部で，天井部はやや丸みを帯びた低脚である。

④４号土坑（第30図）

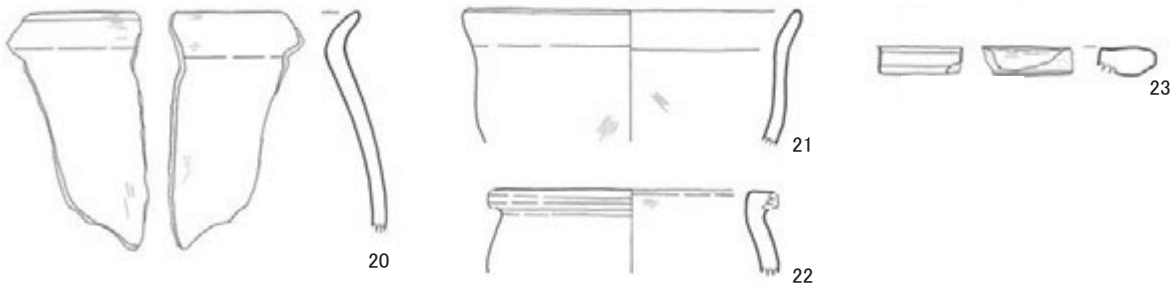
４号土坑は，Ｕ－12区で検出された。長方形と楕円形が合わさったような形で，全体的には不整形と言える。掘り方は，最初に北側の長方形の部分を掘り窪めた後に，中央部を北東方向に楕円形に掘り窪めている。北東部はさらに東側に１段掘り下げを行っている。規模は，長軸方向が北側で3.82m，南側で3.10mあり，短軸方向は中央部で3.21mである。深さは，１段目の長方形の部分が18cm，中央部の楕円形の部分が62.5cmである。

本土坑には，内部を中心として中小のピットが８基ほど見られるが，性格については不明である。



第23図　５号住居跡

第21図　４号住居跡



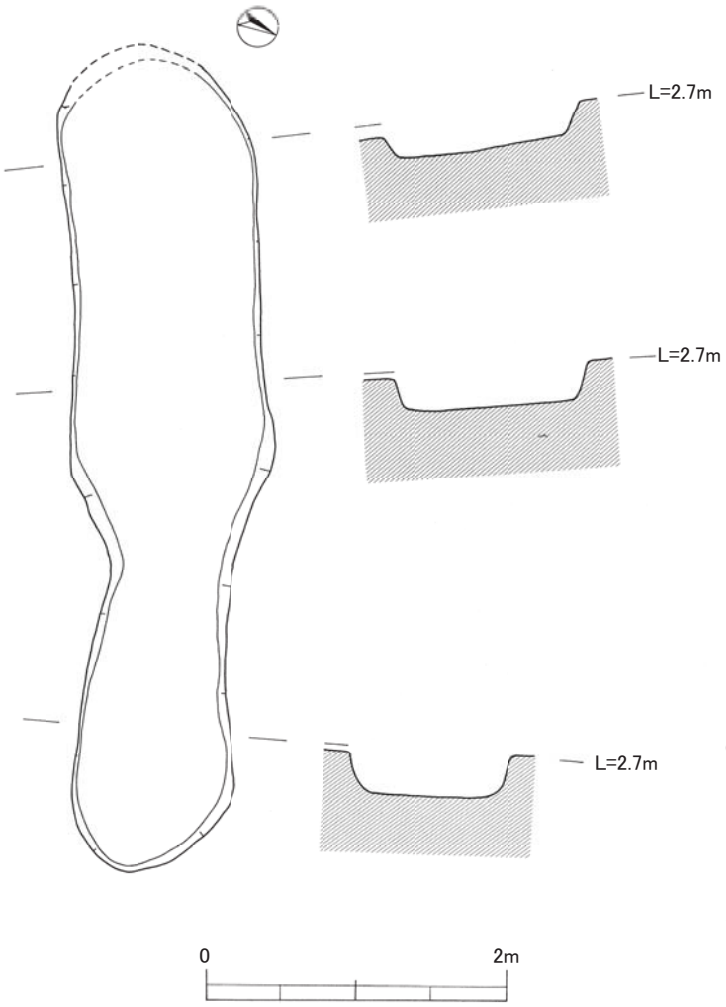
第22図　４号住居跡内遺物



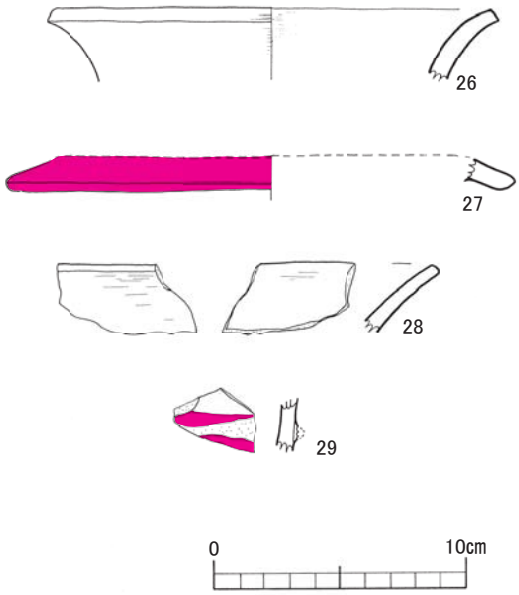
第24図　５号住居跡内遺物

出土遺物（第31図34～第32図52）

弥生時代中期を中心とする土器片が約100点ほど出土したが18点を図化した。34～43は甕形土器の口縁部である。34は口縁部の貼付部分がはがれたものである。断面は台形状を呈し口唇部はややくぼむ。35は断面が略台形を呈し口唇部は指頭圧痕によりわずかなくぼみがみられる。口縁部内面の突出はみられず，胴部は張らずに底部へ向かっている。36は下がり気味の方形状断面を呈し内面がやや突出する。37は断面が台形状を呈しやや上方に上がる。口唇部にはわずかにくぼみがみられ，口縁部内面がやや突出する。胴部には断面三角形の突帯が巡る。胎土に金色の雲母が含まれる。38は直線的に外反し口唇



第25図　１号土坑



第26図　１号土坑内遺物

部にくぼみを有する。39～43は口縁部が上方へ起き上がり，口縁部上面は浅くくぼみ，内面は突出が顕著である。40は胴部に一条の沈線が巡る。44～46は甕形土器の胴部である。いづれも器壁は薄くあまり張らない器形である。44には１条の沈線が巡る。47～49は壺形土器の口縁部である。47は断面方形状の口縁がやや下方に下がる器形を呈する。48は断面三角形状の口縁部を呈し上面は平坦で内面は突出する。頸部から胴部にかけて大きく広がり，胴部には断面三角形の突帯が巡る。赤色顔料が塗布されており，口縁部上面に数条，頸部を巡るように塗られそこから縦に数条下がるように塗布されている。49は口唇部が欠損しているが口縁部上面は平坦で，口縁部内面が突出した壺である。50は鉢である。表面はもろくなっているが外面，内面とも赤色顔料がわずかに残る。51，52は甕形土器の底部である。51は脚の付け根部分であるが，天井は丸みを帯び，胴部よりも器壁の厚い脚台であることがうかがえる。52は充実した脚台である。表面部分の剥離がひどいが，わずかに残る表面にはミガキ調整がみられる。

⑤５号土坑（第33図）

５号土坑は，Ⅴ・Ｗ－14区で検出された。基本的には長楕円形を呈するものである。規模は，長軸方向が4.28ｍ，短軸方向は1.07ｍであり，検出面からの深さは21～35㎝である。北西側が浅く，南東側にかけて深くなっている。周辺に遺構は見られず，完全に独立して存在しているようである。遺物の出土は確認できなかった。

⑥６号土坑（第34図）

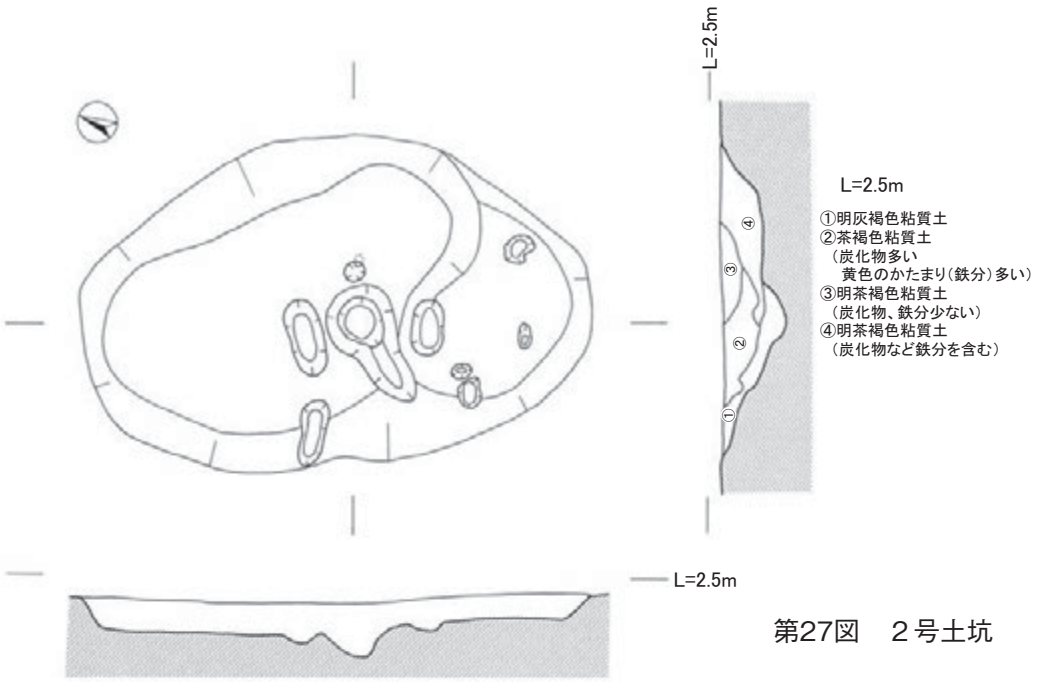
Ｘ－12区で検出された。直径約60㎝，深さ約20㎝の円形状の土坑である。

出土遺物（第34図53）

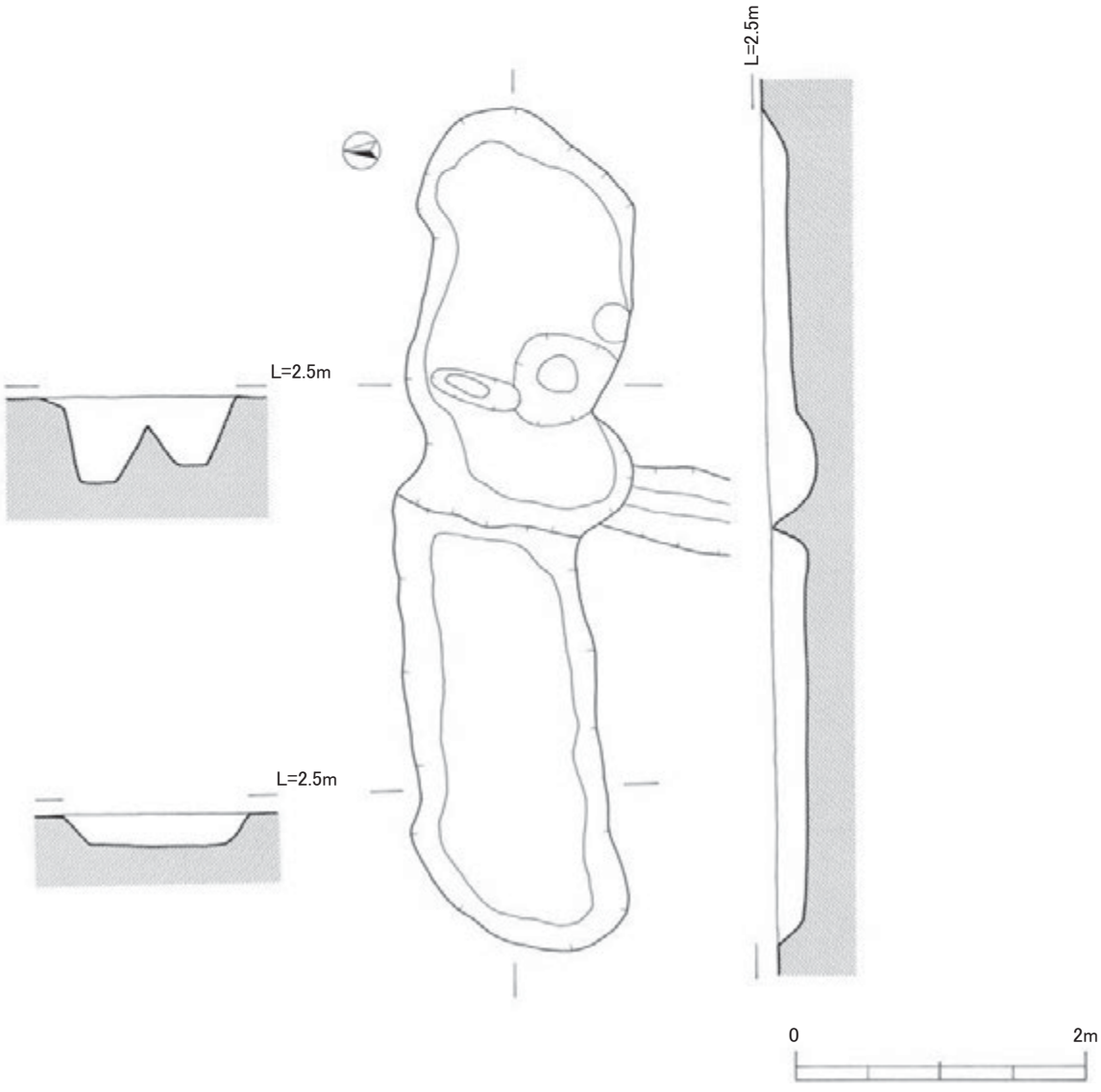
鉢形の土器が１点出土した（53）。ラッパ状の口縁で，平底の器形を呈する。外部上面にはヨコ方向のハケ目が施されているが，下半分はハケ目は無く，表面が剥離した後，器面調整を施したと思われる。

（３）溝状遺構

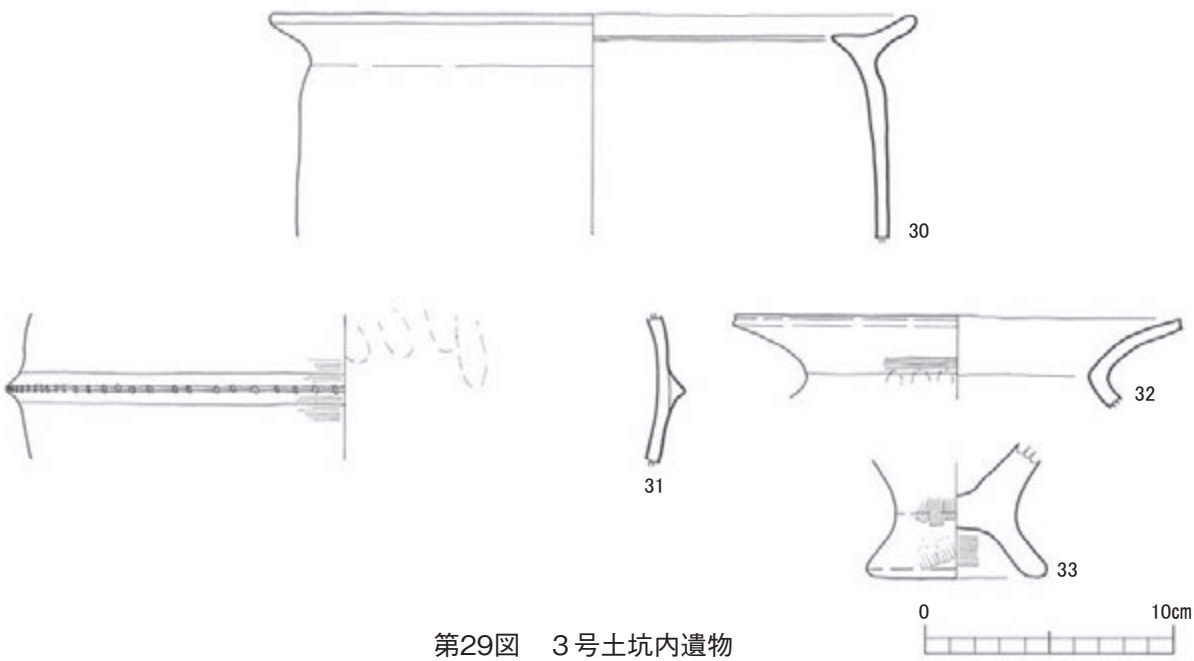
弥生時代の溝状遺構は，合計で５条検出された。それぞれについて概略を述べる。



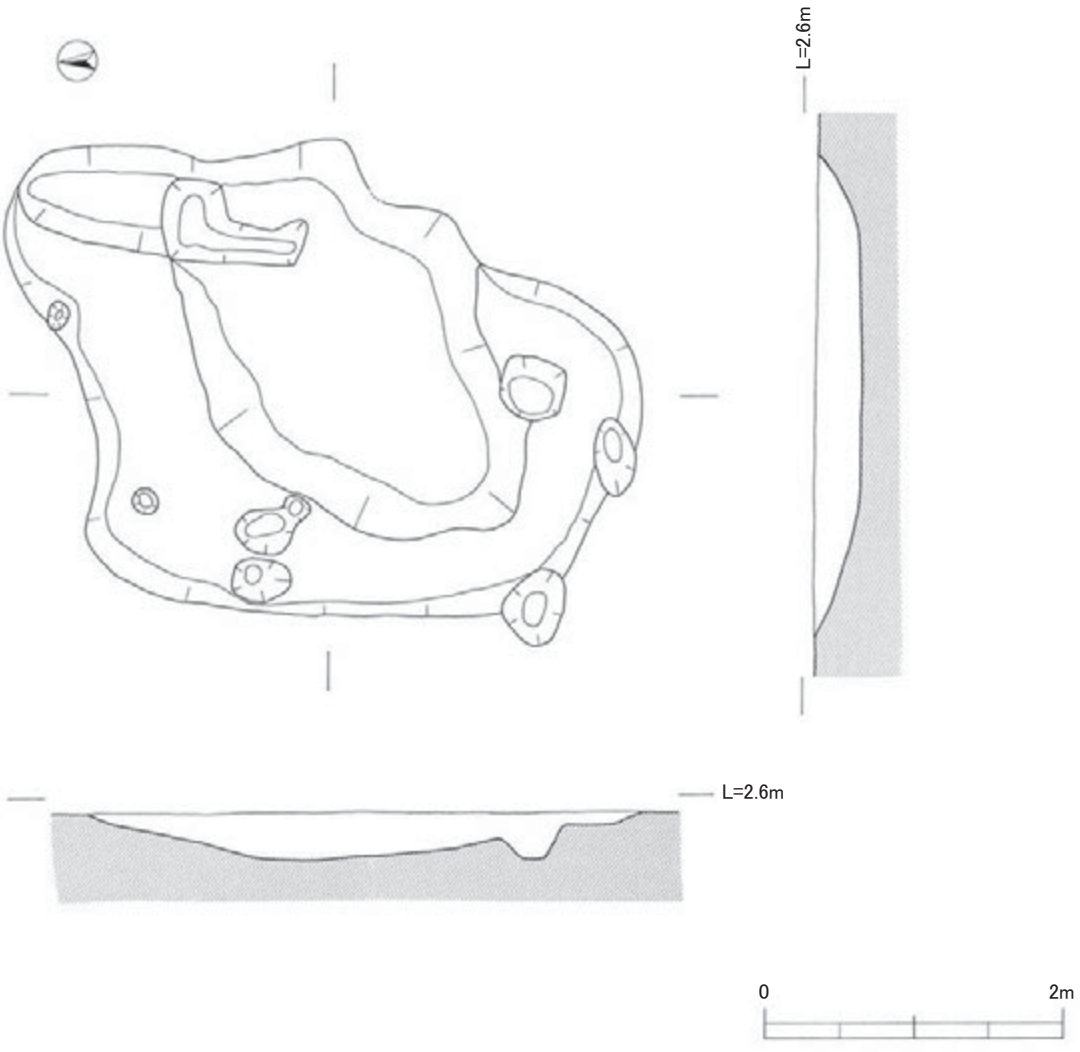
第27図　２号土坑



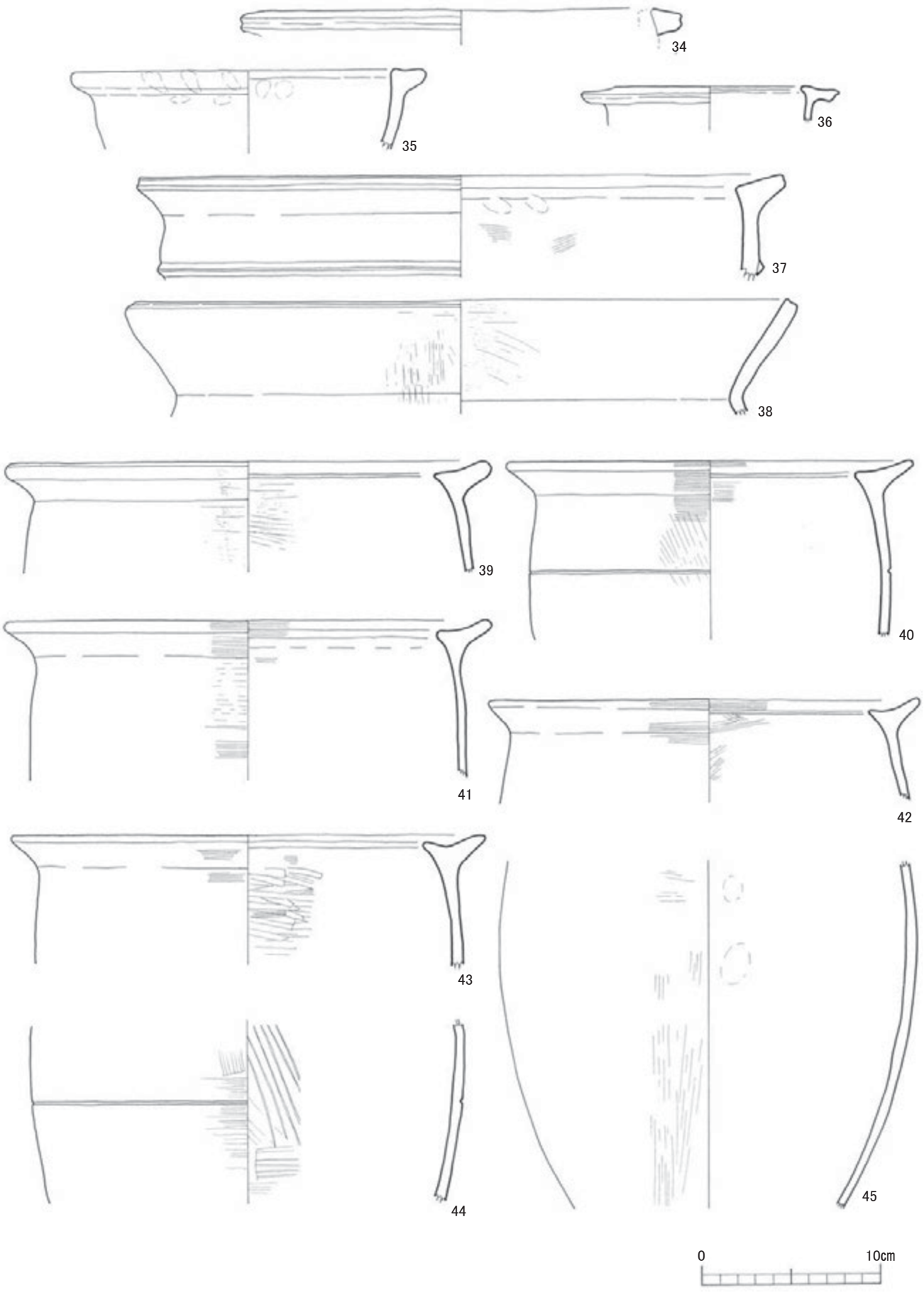
第28図　３号土坑



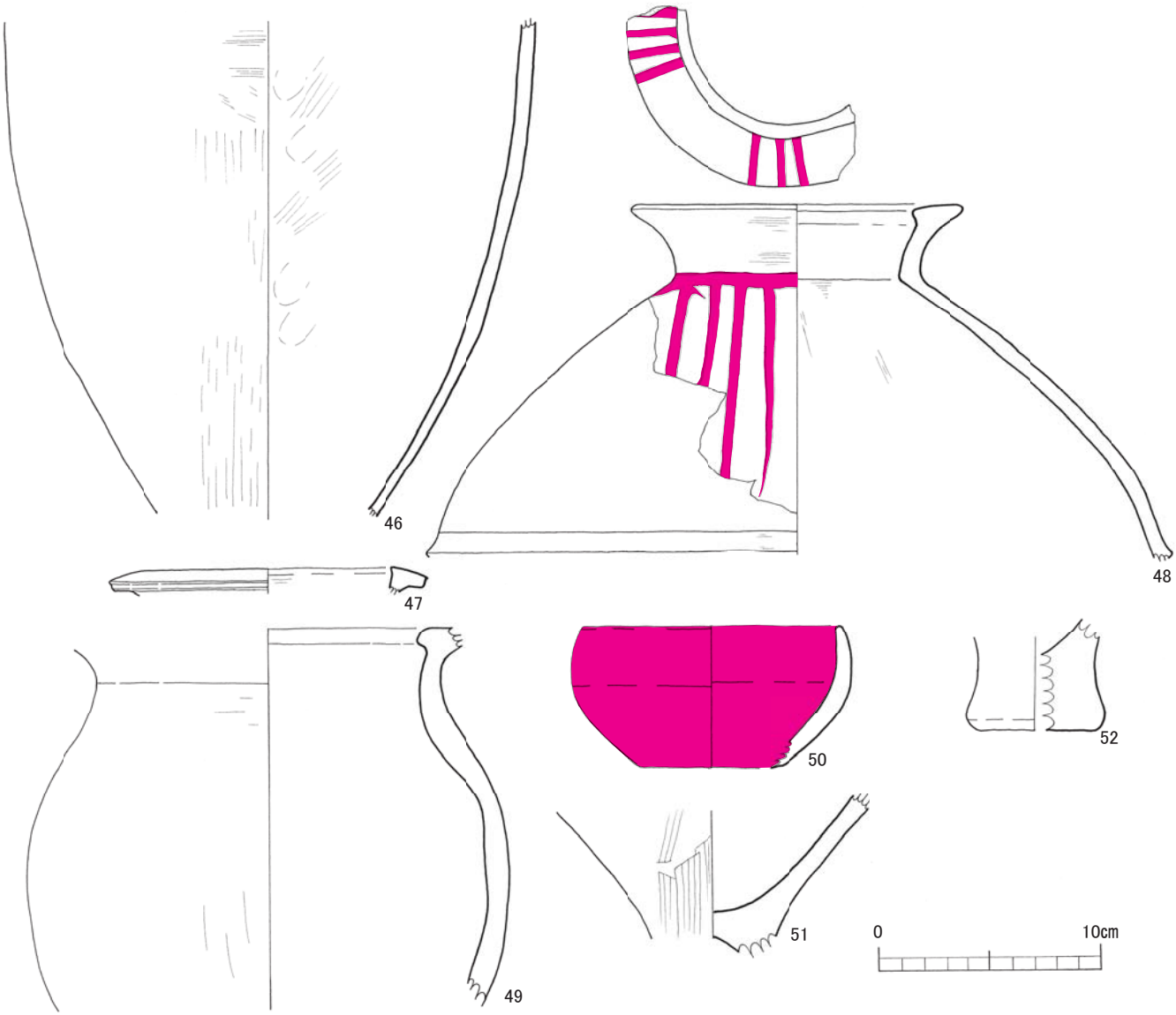
第29図　３号土坑内遺物



第30図　４号土坑



第31図　４号土坑内遺物（１）



第32図　４号土坑内遺物（２）

①溝状遺構１号（第35図）

Q・R－10区で検出された。幅約1m，深さ10～15cmで北東方向に伸びる。

出土遺物（第36図54）

完形の壺形土器（54）が１点出土した。口唇部は丸みを帯び，頸部は短く，丸底を呈している。

②溝状遺構２号（第35図）

R－11区で検出された。幅，深さとも溝状遺構1号と同様の規模で北西方向に伸びている。

出土遺物（第36図55）

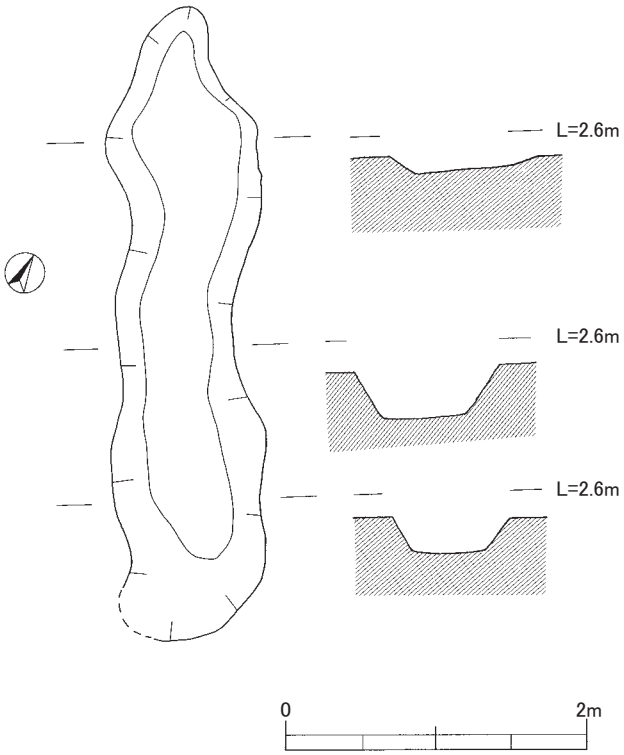
甕形土器の口縁部（55）が１点出土した。強く外反し，口唇部は丸みを帯びている。

③溝状遺構３号（第35図）

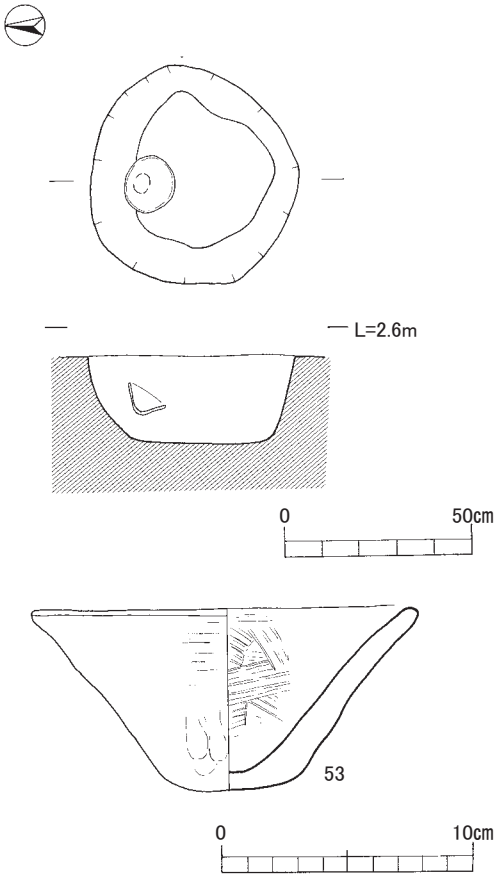
R－10・11区で確認された。幅は1.47～2.18mで，検出した長さは15.42mである。調査区域を横断するように延びており，主軸方向はN82°Wである。南側に展開する住居跡の主軸と類似することや，これらの位置からはある程度離れていることなどから，本居住域の区画溝的な機能を兼ねていた可能性が考えられる。検出面からの深さは1.00～1.26mである。東側が最も浅く，中央付近で最深となり，西側にかけて1.20m程で安定した深さが続くようになる。このことから，調査区域のほぼ中央付近に最深部があるものの，基本的には西側から東側に向かって流れていたと推定される。

出土遺物（第36図56～65）

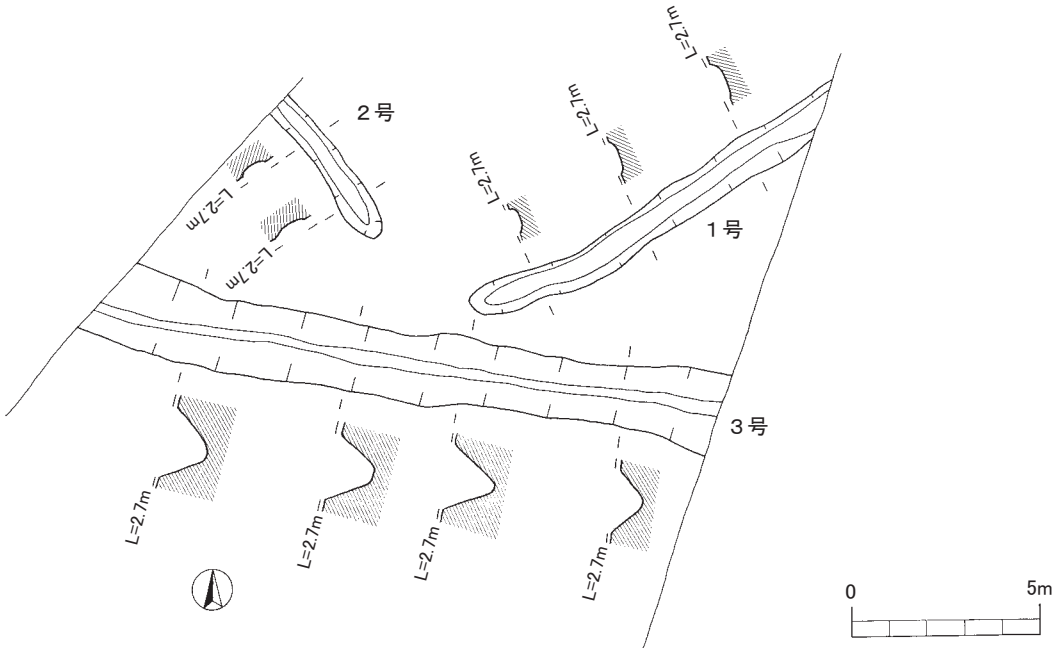
弥生～古墳時代の遺物と思われるものは200点余り出土したが，胴部小片が大半を占めた。56は口縁部屈曲付近の器壁が厚く，先細りしており，口縁部内面がわずか



第33図　５号土坑



第34図　６号土坑及び土坑内遺物

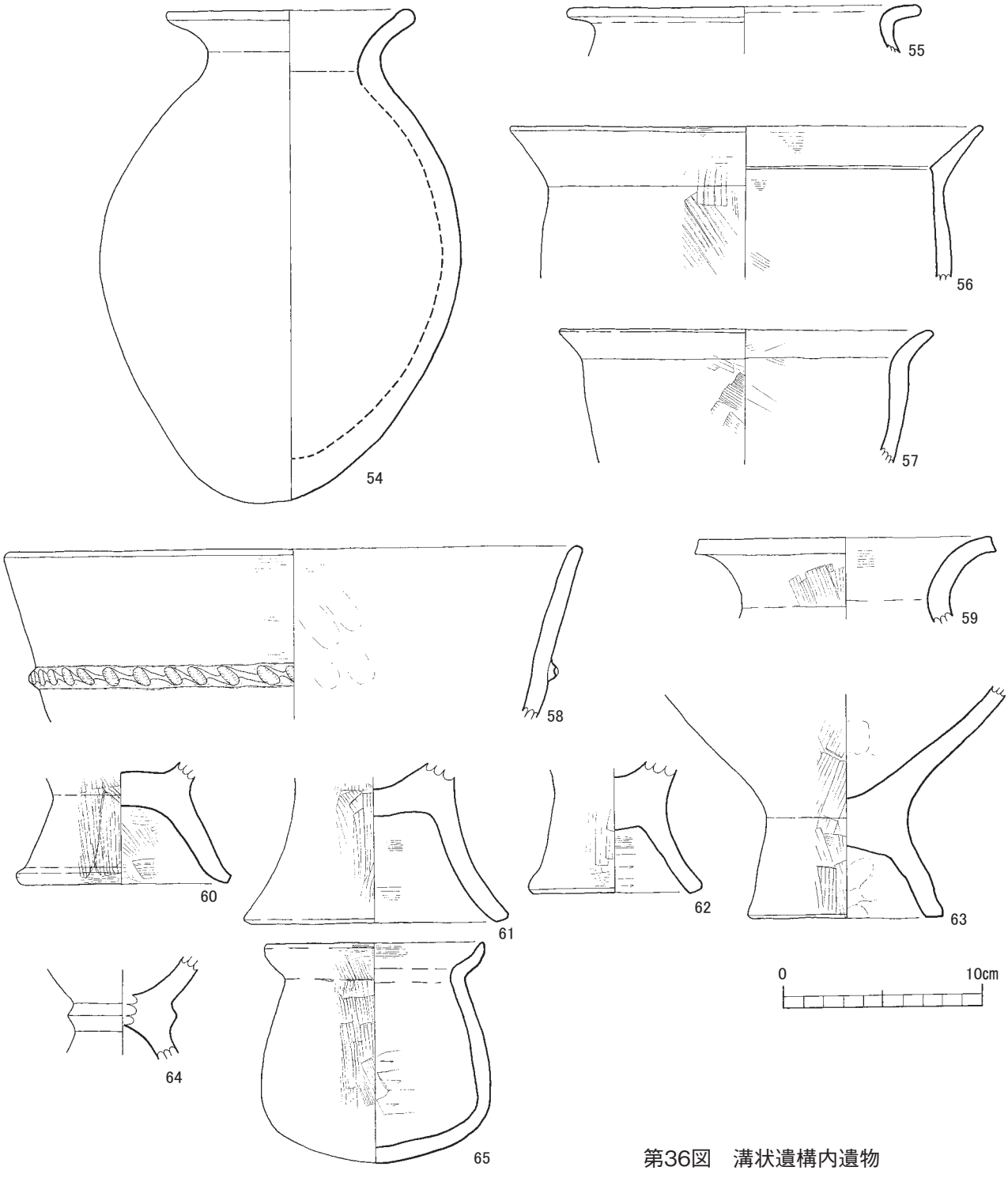


第35図　溝状遺構１～３号

に突出している。57は口唇部が丸みを帯び，胴部は膨らまない。58は口縁部が直線的に開く形態を呈する甕である。刻目突帯が１条巡る。59は口唇部が平坦な壺の口縁部である。胴部側が口唇部よりも厚い。60～64は脚部である。60～62は内面天井はおおむね平坦で脚はやや外反し端部は平面を形成している。63の内面天井部はやや丸くなっており，脚は外反しない。64は断面三角形状の突帯が胴部と脚台部の境目に施されている。65は口縁部が内湾気味に立ち上がり，下膨れの独特のプロポーションを呈する鉢形土器である。

④溝状遺構４号（第37図）

Ｔ～Ｗ－12区で検出された。土坑の項で述べたように，本溝跡から３号土坑へと流入していたことが考えられる。幅は42㎝～84㎝で，検出した長さは31.70ｍである。主軸方向は南側でＮ20°Ｗ，北側でＮ12°Ｗというように検出した部分のほぼ中央付近でやや北寄りに向きを変えている。検出面からの深さは14㎝～21㎝で，先述したように北側に向けて深くなっていることから，南側から北側に向かって流れ，最終的に３号土坑に流入する。遺物の出土は確認できなかった。



第36図　溝状遺構内遺物

⑤溝状遺構５号（第37図）

Ｖ－12区で検出された。幅は30～39㎝，検出した長さは2.95ｍである。検出された部分が小規模であることから明確ではないが，検出した部分については，上記の溝状遺構４号と平行する。検出面からの深さは15㎝程度である。北側が若干深いことや，形状が尖っていることも合わせて考えると，北側から南側へと流れていたことが想定される。つまり，溝状遺構４号とは全く逆の向きに流れていたことになる。遺物の出土は確認できなかった。

(4) ピット（群）

大きく分けて３か所にピットが集中して見られる地域がある。南側から順に，Ｔ・Ｕ－11～13区，Ｑ・Ｒ－９～12区，それにＭ～Ｐ－７～９区の３か所である。

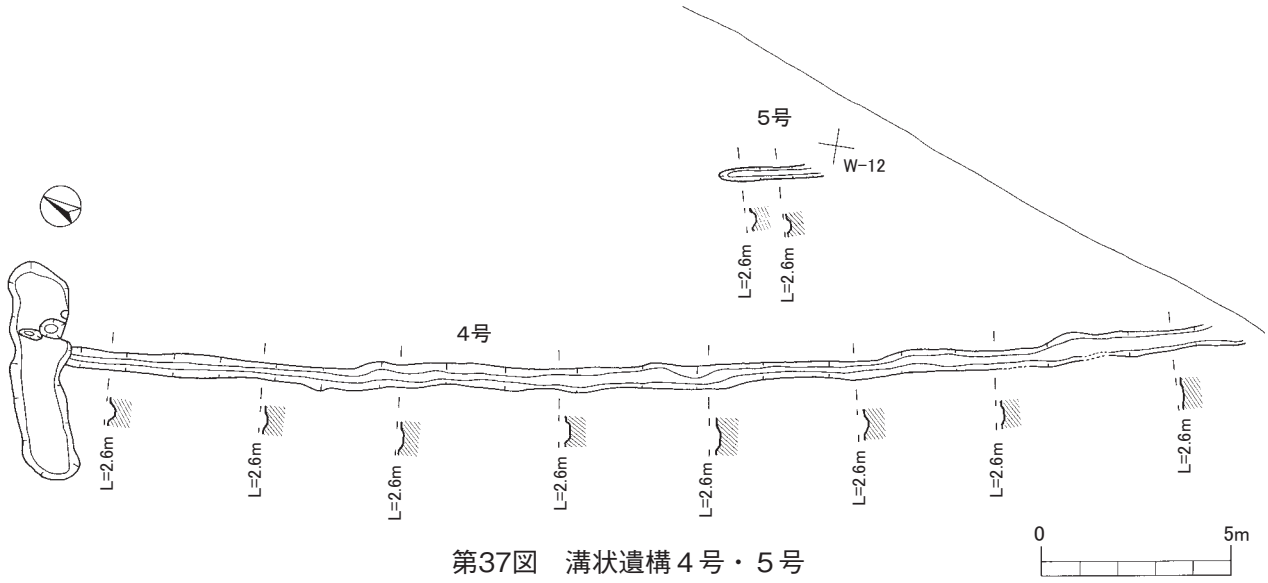
①Ｔ・Ｕ－11～13区（第13，17図）

１号住居跡の周囲に広がるピット群である。

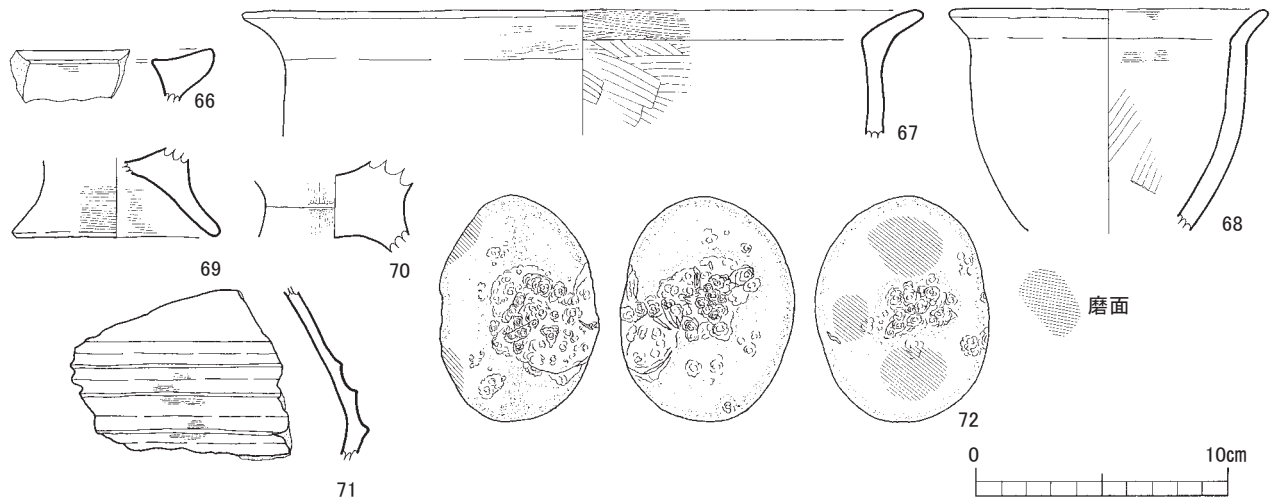
１号住居跡の掘り方の周囲約１ｍ付近に列状に並ぶピットは，この住居に付随するものの可能性が大きいと考えられる。また，その西側に延びてまとまっている一群は，建物である可能性も考慮する必要がある。ピットの平面的な規模が，杭跡などのような小規模のものではなく，一般的な掘立柱建物跡に多い柱穴のような中規模のものであることから，時代を含めての検討が必要となろう。

②Ｑ・Ｒ－９～12区（第13図）

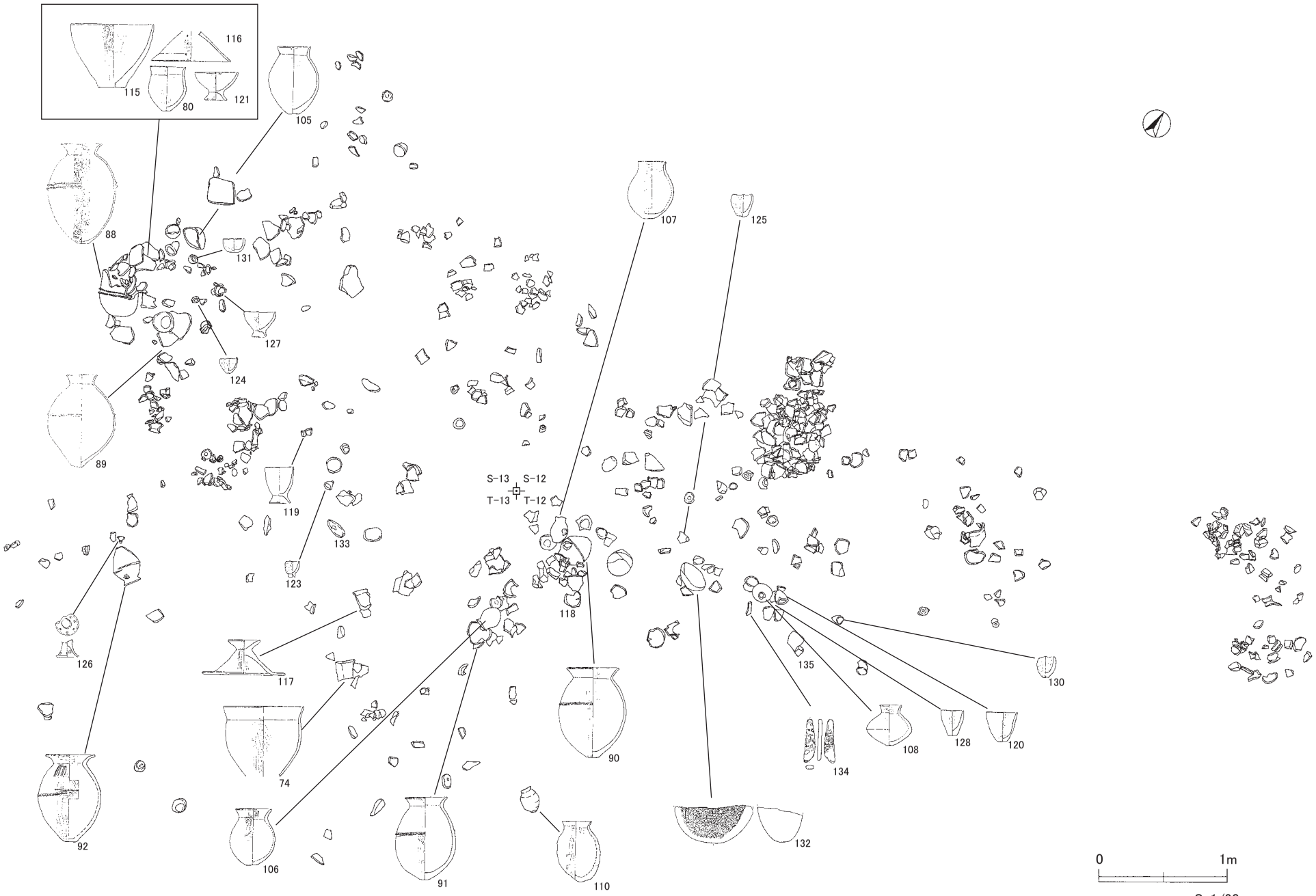
溝状遺構３号（大溝）を中心とした周辺に広がるピット群である。大溝の北側の一群と西側の一群の２つのグループに分けることが可能である。大溝の北側の一群は，中規模のものが規則性なく散在している周囲，



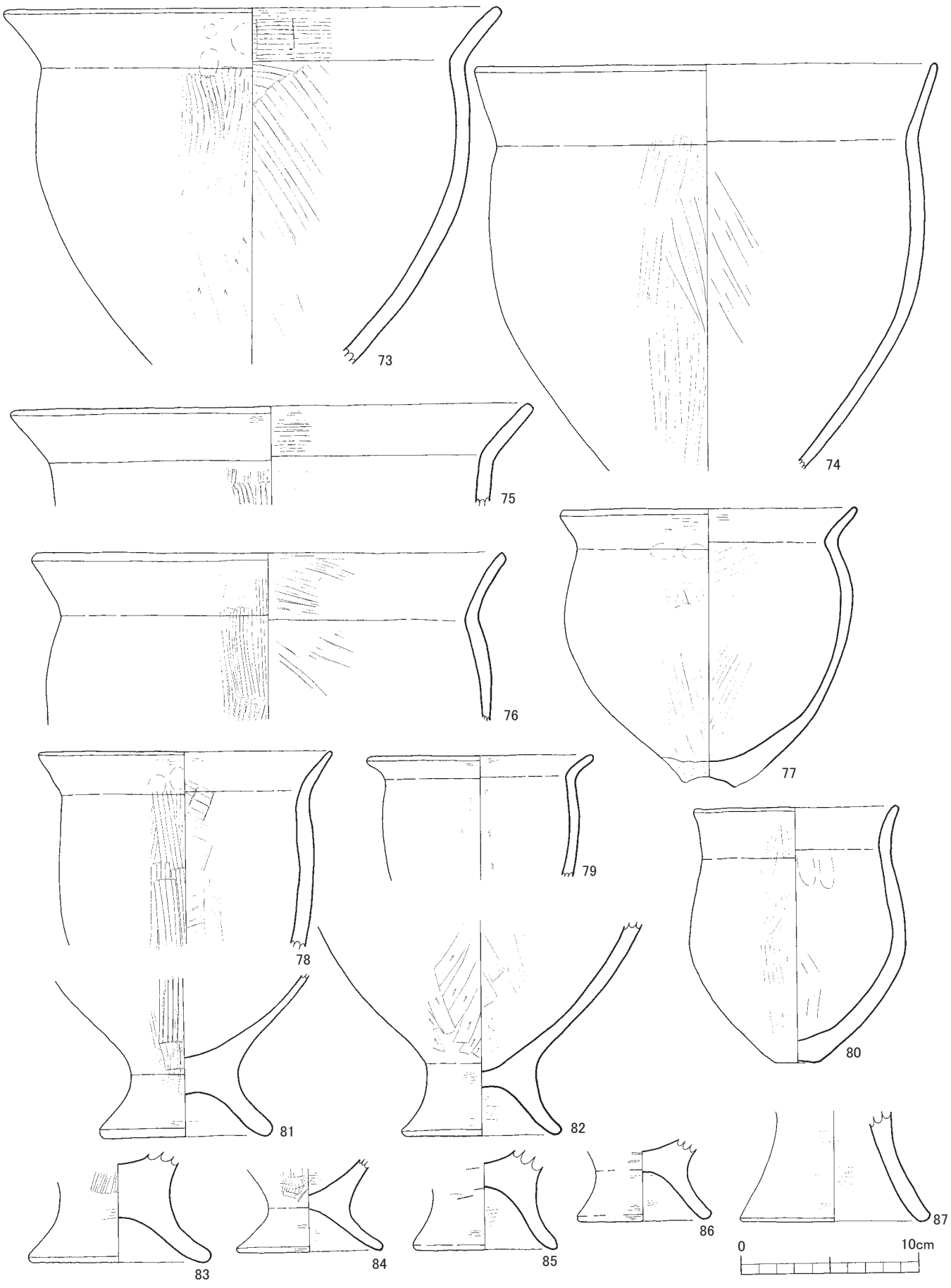
第37図　溝状遺構４号・５号



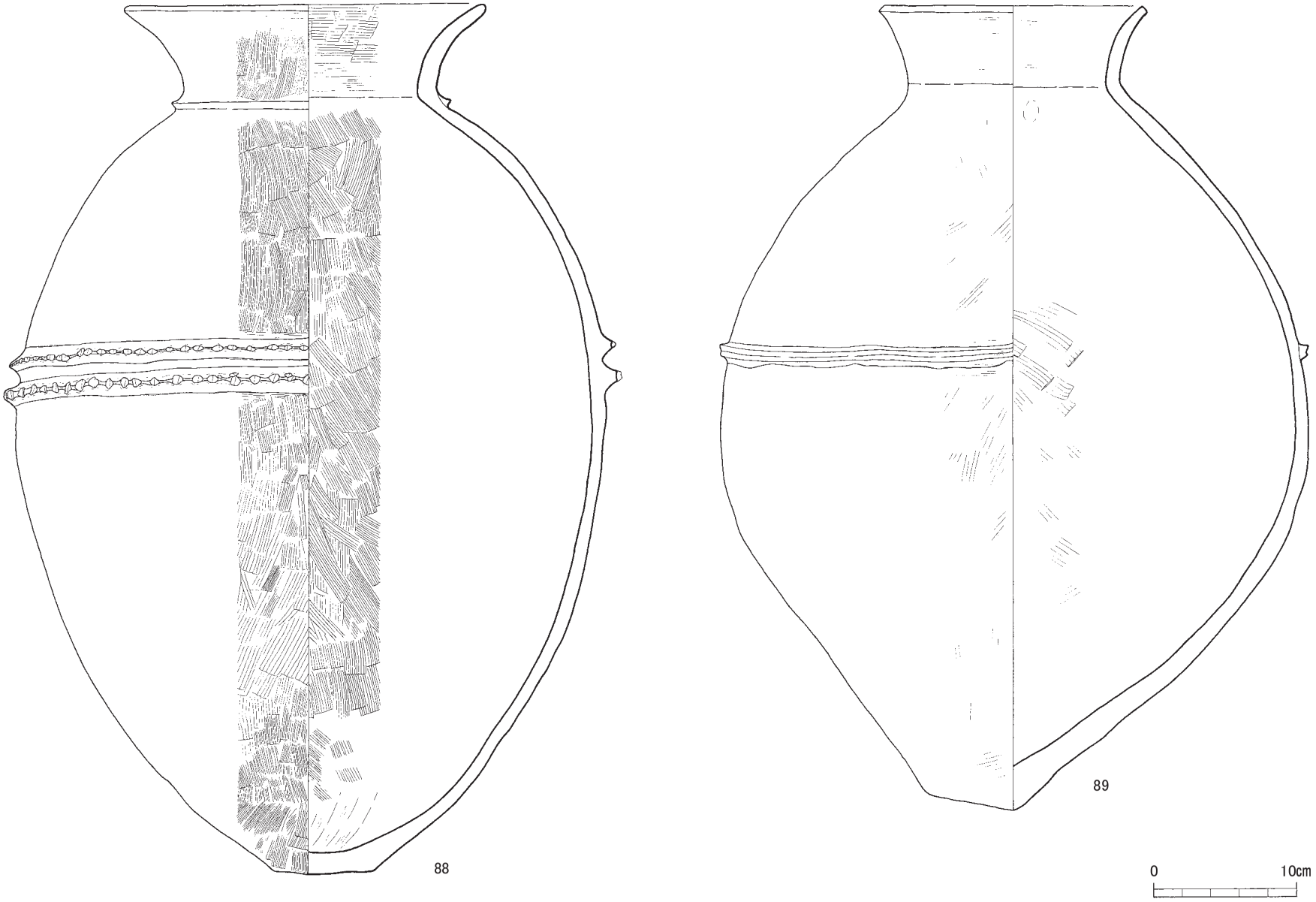
第38図　ピット内遺物



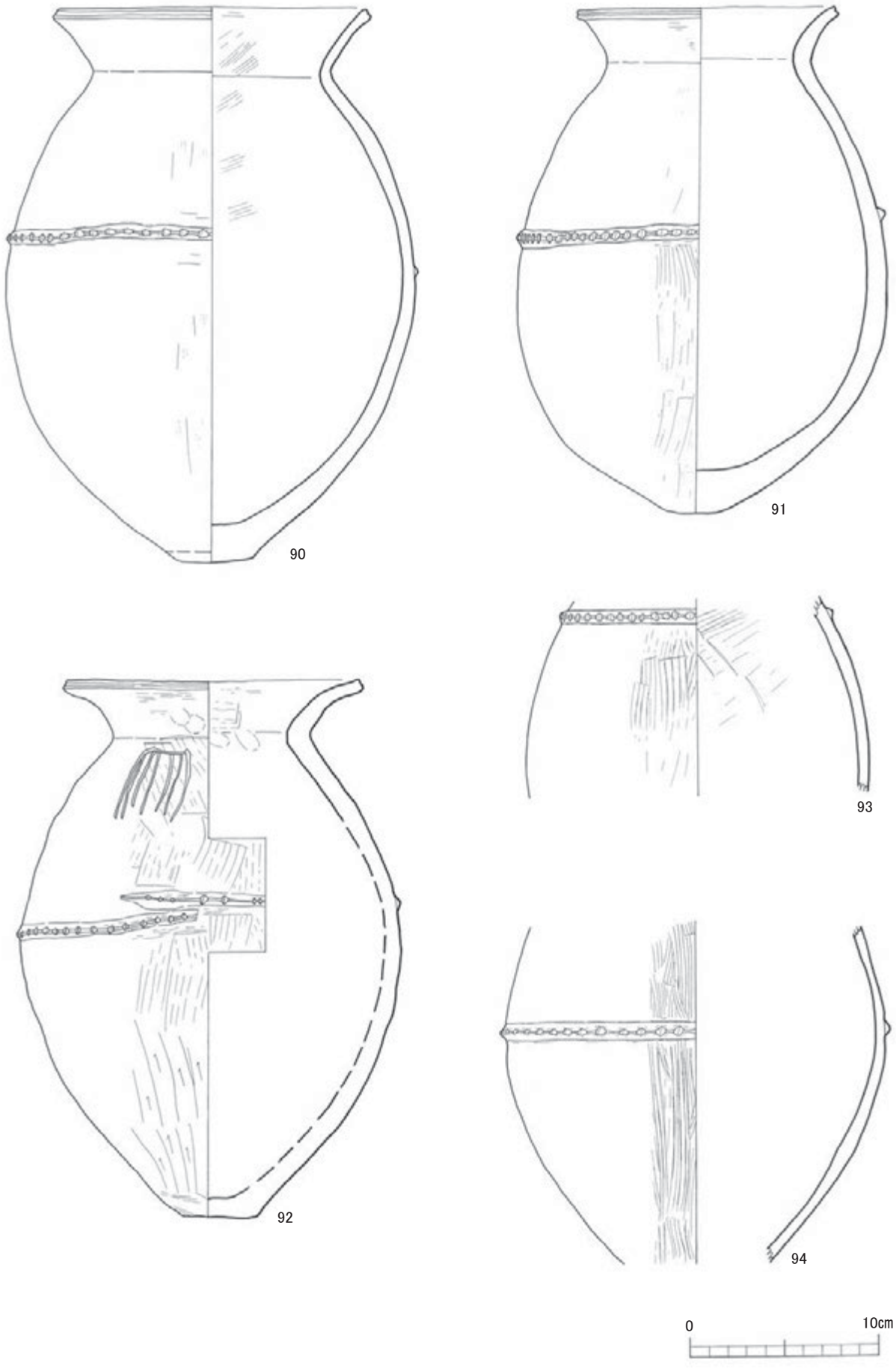
第39図　土器溜まり出土状況



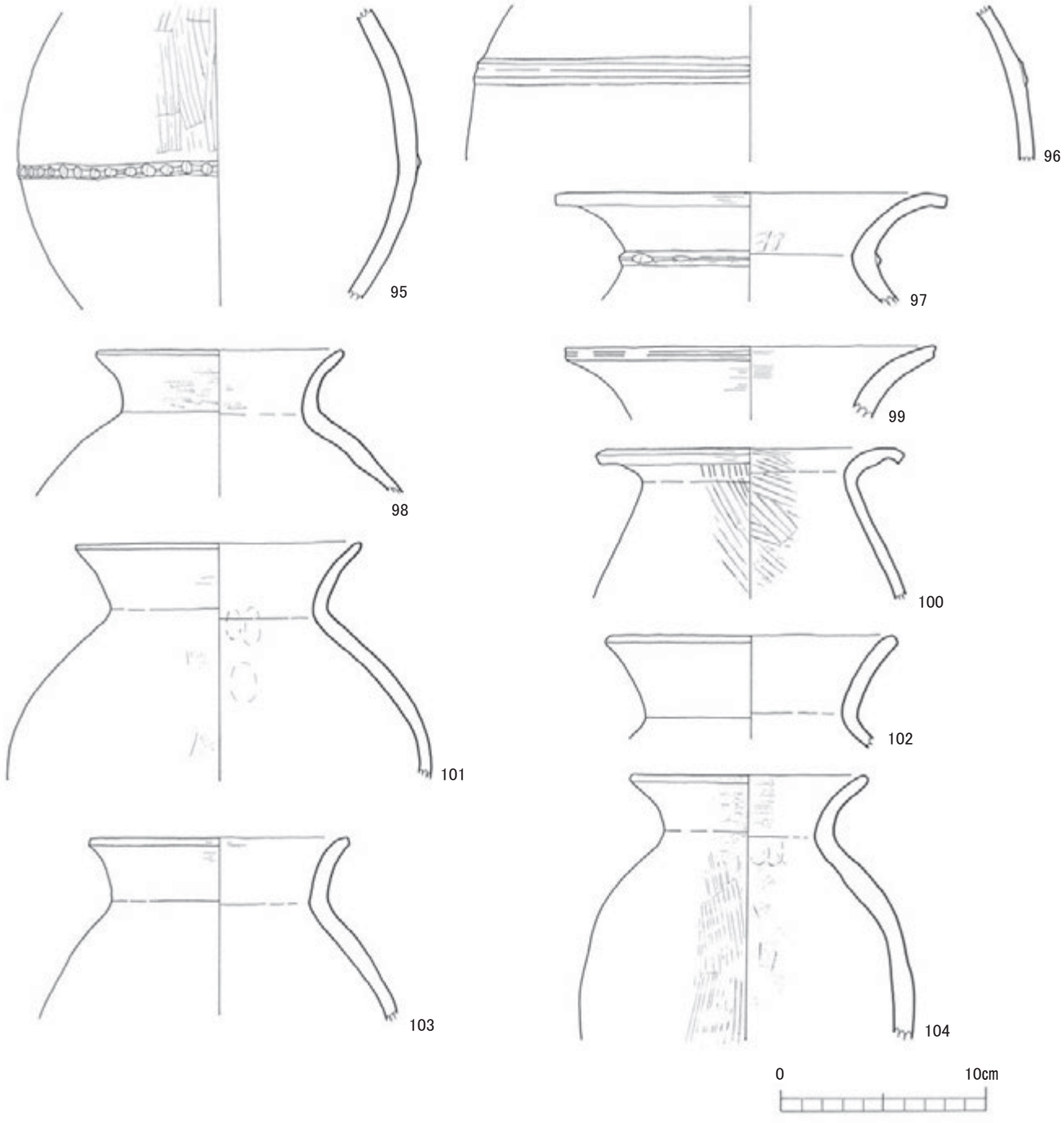
第40図　土器溜まり内遺物（１）甕形土器



第41図　土器溜まり内遺物（２）壺形土器



第42図　土器溜まり内遺物（３）壺形土器



第43図　土器溜まり内遺物（４）壺形土器

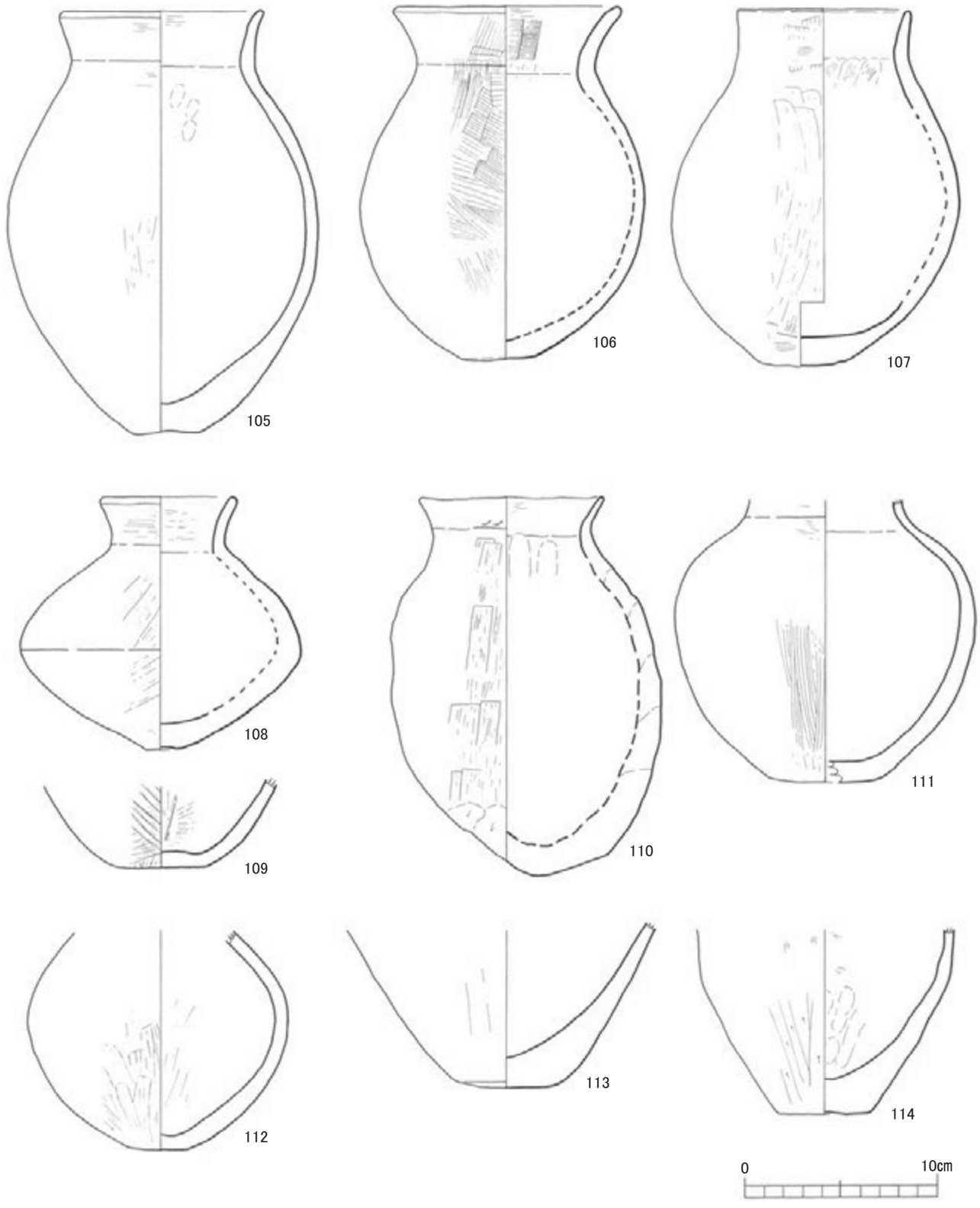
あるいはその間隙を埋めるように小規模のピットが広がっている。また，西側の一群は，中規模のものが，調査した範囲内では列状に並んだように広がっている。これらは２つのグループとも建物として並ぶ傾向が弱いことから，中規模のものを含めて杭跡などの可能性を指摘したい。

③M～P－７～９区（第13図）

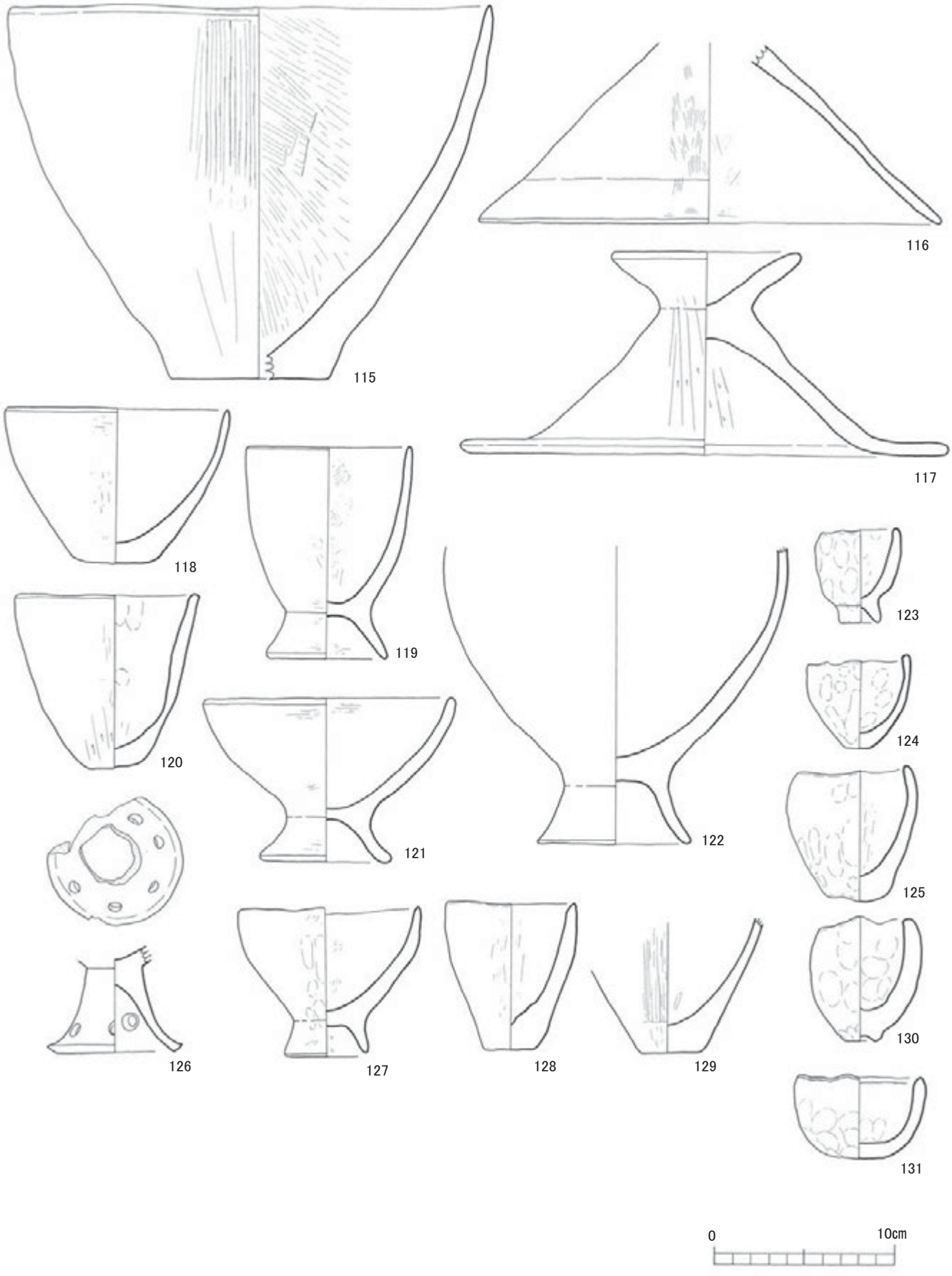
②の北側に広がるピット群である。中規模のピットがまとまりなく散在している状況である。建物としてまとまる傾向は見られず，杭跡の可能性を指摘したい。

ピット群①～③出土遺物（第38図66～72）

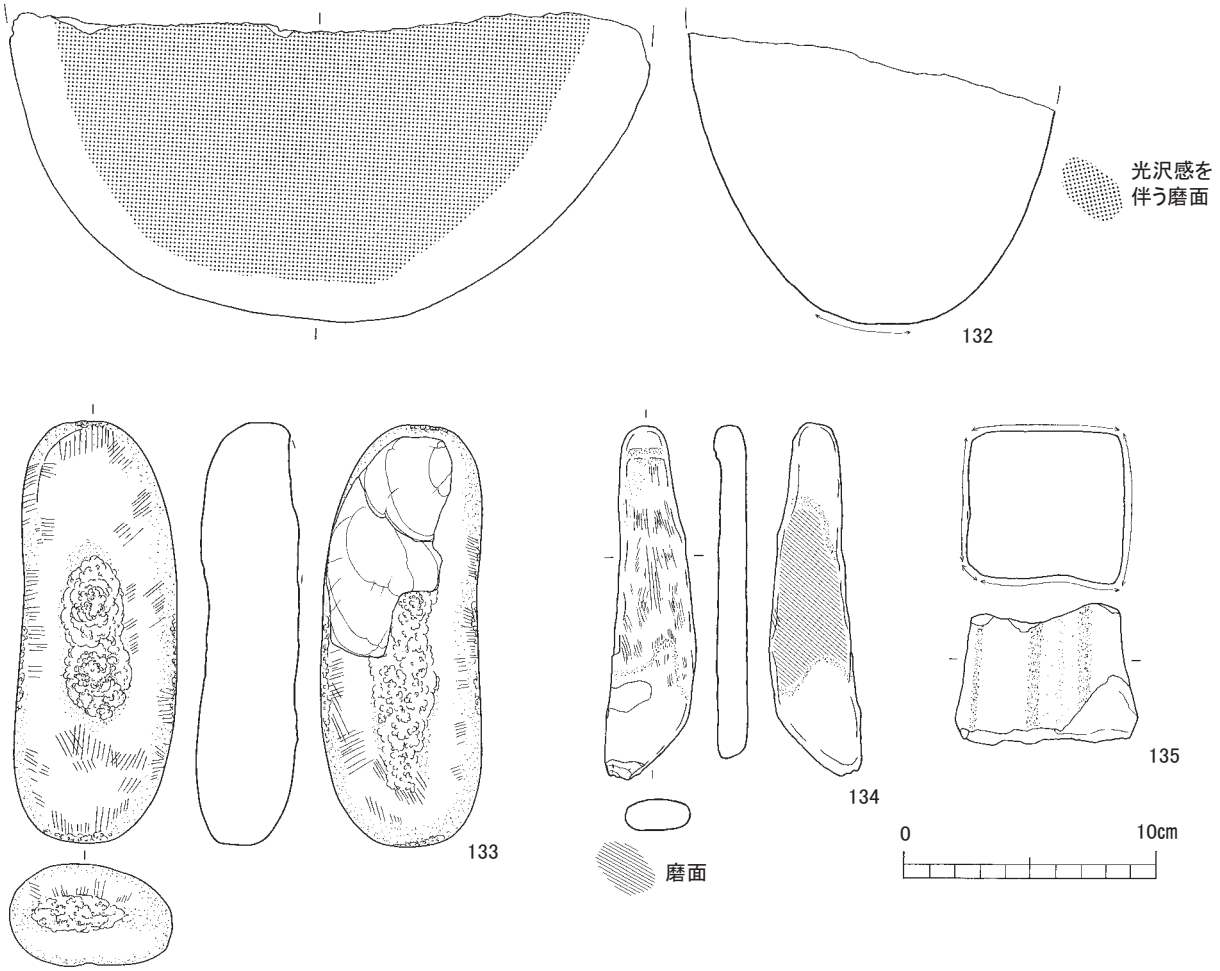
特徴的なものを中心に図化した。66～68は甕形土器の口縁部である。67・68は「く」字状に外反している。69・70は脚部で,69は「ハ」字状に広がる低い脚である。71は壺の胴部である。断面三角形の突帯が巡っている。72は楕円形を呈した敲石で三面に敲打痕がみられる。磨面も３か所観察される。



第44図　土器溜まり内遺物（５）壺形土器



第45図　土器溜まり内遺物（６）その他



第46図　土器溜まり内遺物（７）石器

(5) 土器溜まり（第13・39図）

S・T－11～13区で検出された。長辺が20.0m，短辺は12.3mの範囲に広がっている。小型を中心とする完全品の壺形土器が比較的多く確認されたのを始めとして，完形の大型の壺形土器が２個体破損した状況で出土したほか，鉢形土器や小型の手づくね土器など多数が出土した。出土の状況は，小型壺型土器や鉢形土器などが完全または極めて完形に近い状態で多数検出された。遺跡が河川に隣接した場所であれば，相当な流水作用を受ける結果，器壁等がひどく荒れたり，断面が摩滅していたりする状況が見られることが一般的である。しかし，本遺跡出土の場合は，そのような状況はほとんど見られない。これらのことより，その場に置かれたり遺棄されたりした状況であったことが理解される。

出土遺物（第40図73～第46図135）

73～87は甕形土器である。口縁部は「く」字状に外反し，内面の稜は明瞭ではない。また胴部は77以外はあまり膨らまない。73・74,82にはケズリ調整がみられる。脚は低脚のものが多い。

88～114は壺形土器である。88・89は大型の壺である。88は頸部に１条の断面三角形状の突帯、胴部最大径部に刻目突帯が２条施されている。89は胴部最大径部に断面M字状の突帯が１条巡る。90～95は胴部に一条の刻目突帯が巡る。92は刻目突帯がすれ違っている。胴部上方には横１本、そこから縦に7本の線刻が施されている。胴部下半部はケズリ調整がなされている。105～114は比較的小型の壺である。口縁部は「く」字状に近く立ち上がる。108はそろばん玉状の胴部を持つ。110は粘土の接合部付近の凹凸が目立ち，器形もいびつになっている。

115は大型の鉢形土器である。口縁端部が細くなる平底の器形である。116，117は蓋である。118～122,126～129は鉢形土器である。脚をもつものともたないものがある。126は脚部に多口の穿孔が施されており，高坏の可能性もある。123～125,130・131は手づくね土器である。132～135は石器である。132は磨面を有する台石である。133は凹石である。134は砥石である。小型で携帯用と思われる。135は砥石である。５面を砥面として使用しており、１面には金属の使用痕と思われる溝を有する。３面にわたって熱による変色がみられる。

表４　弥生・古墳時代遺構内遺物観察表（１）

挿図	番号	遺構名称	器種	部位	色調		調整		胎土						備考
					外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	ウンモ	小礫	その他	
16	1	１号住居	鉢形土器	完形	灰白色	浅黄橙色	ナデ・指頭押圧	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	2	１号住居	鉢形土器	口縁	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ・指頭押圧	○	○	○	－	－	－	－
	3	１号住居	壺形土器	口縁	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	4	１号住居	甕形土器	脚	黄橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	5	１号住居	甕形土器	脚	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	6	１号住居	甕形土器	脚	黒褐色	にぶい黄褐色	ナデ・ミガキ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
19	15	２号住居	鉢形土器	口縁～胴部	にぶい橙色	橙色	ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	穿孔つき突起
	16	２号住居	甕形土器	口縁	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	17	２号住居	鉢形土器	底部	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ目後ナデ	ナデ・指頭押圧	○	○	○	－	－	－	－
	18	２号住居	壺形土器	底部	赤褐色	にぶい黄橙色	ヘラミガキ	ナデ	○	○	○	－	－	－	赤色顔料
22	20	４号住居	甕形土器	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	21	４号住居	甕形土器	口縁～胴部	にぶい黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	22	４号住居	甕形土器	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	○	－	－	－
	23	４号住居	甕形土器	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
24	24	５号住居	甕形土器	口縁	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	25	５号住居	甕形土器	口縁	にぶい黄橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
26	26	１号土坑	壺形土器	口縁	にぶい褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	27	１号土坑	甕形土器	口縁	赤褐色	欠損	ナデ	欠損	○	○	－	－	－	－	赤色顔料
	28	１号土坑	甕形土器	口縁	浅黄色	にぶい黄色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	29	１号土坑	甕形土器	胴部	赤褐色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	赤色顔料
29	30	3号土坑	甕形土器	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	○	－	－	炭化物付着
	31	3号土坑	甕形土器	胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ・指頭押圧	○	○	○	－	－	－	刻目突帯
	32	3号土坑	壺形土器	口縁	橙色	浅黄橙色	ナデ・指頭押圧	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	33	3号土坑	甕形土器	脚	明黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
31	34	4号土坑	甕形土器	口縁	黒褐色	剥落	ナデ	剥落	○	○	○	－	－	－	－
	35	4号土坑	甕形土器	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ・指頭押圧	ナデ	○	○	－	－	－	茶粒	－
	36	4号土坑	甕形土器	口縁	褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	37	4号土坑	甕形土器	口縁	にぶい橙色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	○	○	－	－
	38	4号土坑	甕形土器	口縁	灰黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	39	4号土坑	甕形土器	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	40	4号土坑	甕形土器	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	胴部一条沈線
	41	4号土坑	甕形土器	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	42	4号土坑	甕形土器	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	43	4号土坑	甕形土器	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	44	4号土坑	甕形土器	胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	茶粒	沈線
	45	4号土坑	甕形土器	胴部	黄褐色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
32	46	4号土坑	甕形土器	胴部	暗褐色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	茶粒	－
	47	4号土坑	甕形土器	口縁	黒褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	48	4号土坑	壺形土器	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	赤色顔料・暗文
	49	4号土坑	壺形土器	口縁～胴部	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	50	4号土坑	鉢形土器	口縁～胴部	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	赤色顔料
	51	4号土坑	甕形土器	脚	にぶい黄橙色	灰褐色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	52	4号土坑	甕形土器	脚部～底部	にぶい赤褐色	暗褐色	ヘラミガキ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
34	53	6号土坑	鉢形土器	完形	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	－	－	○	－	－
36	54	溝状遺構１号	壺形土器	完形	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	55	溝状遺構２号	壺形土器	口縁	にぶい黄色	にぶい黄色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	56	溝状遺構３号	甕形土器	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	57	溝状遺構３号	甕形土器	口縁	明黄褐色	にぶい橙色	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	58	溝状遺構３号	甕形土器	口縁	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ・指頭押圧	○	○	○	－	－	－	突帯
	59	溝状遺構３号	壺形土器	口縁	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ハケ目・ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	60	溝状遺構３号	甕形土器	脚	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	61	溝状遺構３号	甕形土器	脚	橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	62	溝状遺構３号	甕形土器	脚	赤褐色	にぶい赤褐色	板ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	63	溝状遺構３号	甕形土器	脚	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	茶粒	－
	64	溝状遺構３号	甕形土器	底部	にぶい赤褐色	褐灰色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	65	溝状遺構３号	壺形土器	完形	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
38	66	ピット	甕形土器	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	67	ピット	甕形土器	口縁～胴部	褐色	にぶい褐色	ナデ	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	68	ピット	甕形土器	口縁～胴部	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	69	ピット	甕形土器	脚	にぶい橙色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	70	ピット	壺形土器	底部	にぶい褐色	にぶい黄橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	71	ピット	甕形土器	胴部	明黄褐色	灰白色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	突帯
40	73	土器溜まり	甕形土器	口縁～胴部	橙色	にぶい橙色	ハケ目後ナデ・ヘラケズリ	ハケ目	○	○	○	－	○	－	－
	74	土器溜まり	甕形土器	口縁～胴部	褐色	赤褐色	板ナデ	板ナデ	○	○	－	－	○	－	籾痕
	75	土器溜まり	甕形土器	口縁	にぶい橙色	橙色	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	76	土器溜まり	甕形土器	口縁	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	77	土器溜まり	甕形土器	口縁～底部	にぶい黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	籾痕
	78	土器溜まり	甕形土器	口縁～胴部	浅黄橙色	灰白色	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	79	土器溜まり	甕形土器	口縁～胴部	暗灰黄色	にぶい黄色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	80	土器溜まり	甕形土器	完形	にぶい黄橙色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	茶粒	－
	81	土器溜まり	甕形土器	脚	橙色	黒褐色	ハケ目・ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	82	土器溜まり	甕形土器	脚	にぶい橙色	にぶい橙色	ヘラケズリ	ハケ目・ナデ	○	○	－	－	－	茶粒	－
	83	土器溜まり	甕形土器	脚	にぶい黄橙色	暗褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	84	土器溜まり	甕形土器	脚	橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	85	土器溜まり	甕形土器	脚	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	86	土器溜まり	甕形土器	脚	にぶい黄色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	87	土器溜まり	甕形土器	脚	にぶい黄橙色	剥落	ナデ	剥落	○	○	○	－	○	茶粒	－
41	88	土器溜まり	壺形土器	完形	橙色	橙色	ハケ目	ハケ目	○	○	○	－	－	－	２条刻目突帯

表５　弥生・古墳時代遺構内遺物観察表（２）

挿図	番号	遺構名称	器種	部位	色調		調整		胎土						備考
					外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	ウンモ	小礫	その他	
41	89	土器溜まり	壺形土器	完形	浅黄橙色	浅黄橙色	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	－	○	－	○	－	１条突帯
42	90	土器溜まり	壺形土器	完形	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ目後ナデ	ハケ目	○	○	○	－	－	－	刻目突帯
	91	土器溜まり	壺形土器	完形	浅黄橙色	浅黄橙色	ハケ目・板ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	刻目突帯
	92	土器溜まり	壺形土器	完形	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目・ヘラケズリ	ナデ	○	○	○	－	－	－	刻目突帯・線刻
	93	土器溜まり	壺形土器	胴部	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	－	－	－	－	刻目突帯
	94	土器溜まり	壺形土器	胴部	浅黄橙色	浅黄橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	刻目突帯
43	95	土器溜まり	壺形土器	胴部	にぶい橙色	にぶい黄褐色	ハケ目・ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	刻目突帯
	96	土器溜まり	壺形土器	胴部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	断面Ｍ字状突帯１条
	97	土器溜まり	壺形土器	口縁	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	頸部に突帯
	98	土器溜まり	壺形土器	口縁	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	99	土器溜まり	壺形土器	口縁	にぶい橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	100	土器溜まり	壺形土器	口縁～胴部	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケ目	ハケ目	○	○	－	－	○	－	－
	101	土器溜まり	壺形土器	口縁～胴部	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	102	土器溜まり	壺形土器	口縁	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	103	土器溜まり	壺形土器	口縁～胴部	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	104	土器溜まり	壺形土器	口縁～胴部	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
44	105	土器溜まり	壺形土器	完形	にぶい黄色	黄灰色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	106	土器溜まり	壺形土器	完形	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ目	ハケ目・ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	107	土器溜まり	壺形土器	完形	浅黄橙色	浅黄橙色	板ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	108	土器溜まり	壺形土器	完形	黄灰色	黄灰色	板ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	109	土器溜まり	壺形土器	底部	にぶい褐色	にぶい橙色	ハケ目	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	110	土器溜まり	壺形土器	完形	浅黄橙色	浅黄橙色	板ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	111	土器溜まり	壺形土器	頸部～底部	灰白色	黄灰色	ハケ目・板ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	112	土器溜まり	壺形土器	胴部～底部	橙色	にぶい褐色	板ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	113	土器溜まり	壺形土器	底部	にぶい黄橙色	黄灰色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	114	土器溜まり	壺形土器	底部	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ヘラケズリ	指頭押圧	○	○	○	－	－	－	－
45	115	土器溜まり	鉢形土器	完形	浅黄色	浅黄色	ハケ目・ヘラケズリ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	116	土器溜まり	蓋形土器	胴部	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	117	土器溜まり	蓋形土器	完形	浅黄橙色	浅黄橙色	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	118	土器溜まり	鉢形土器	完形	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	119	土器溜まり	台付鉢形土器	完形	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	120	土器溜まり	鉢形土器	完形	にぶい褐色	暗褐色	ナデ・ヘラケズリ	指頭押圧	○	○	－	－	－	－	－
	121	土器溜まり	台付鉢形土器	完形	浅黄橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	122	土器溜まり	台付鉢形土器	胴部～底部	明黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	123	土器溜まり	手捏ね土器	完形	にぶい褐色	にぶい褐色	指頭押圧	指頭押圧・ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	124	土器溜まり	手捏ね土器	完形	にぶい黄色	黄灰色	指頭押圧	指頭押圧・ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	125	土器溜まり	手捏ね土器	完形	にぶい橙色	にぶい橙色	指頭押圧	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	126	土器溜まり	台付鉢形土器	脚	灰白色	褐灰色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	多口穿孔
	127	土器溜まり	台付鉢形土器	完形	灰白色	灰白色	指頭押圧	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	128	土器溜まり	鉢形土器	完形	にぶい橙色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	129	土器溜まり	鉢形土器	胴部～底部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	板ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	130	土器溜まり	手捏ね土器	完形	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	指頭押圧	指頭押圧	○	○	－	－	－	－	－
	131	土器溜まり	手捏ね土器	完形	浅黄橙色	浅黄橙色	指頭押圧	指頭押圧・ナデ	○	○	○	－	－	－	－

表６　弥生・古墳時代遺構内遺物観察表（３）　　（　）内は欠損部分の測定値

挿図	番号	遺構名称	器種	材質	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
					(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
16	7	１号住居	鉄製品	鉄	(3.2)	(1.2)	(0.3)	5.31	－
	8	１号住居	鉄製品	鉄	(4.1)	(2.0)	(3.2)	6.18	－
	9	１号住居	袋状鉄斧	鉄	(4.9)	(1.3)	(0.5)	10.52	－
	10	１号住居	ガラス玉	ガラス	(0.7)	(1.0)	(0.5)	0.94	緑色を呈する。中央部穿孔
	11	１号住居	砥石	砂岩	20.3	6.6	7.5	1340.0	－
	12	１号住居	砥石	砂岩	(19.0)	2.5	1.6	136.0	－
	13	１号住居	擦切石器	砂岩	(10.2)	(8.7)	1.1	108.0	－
	14	１号住居	研磨器	頁岩	3.9	10.2	2.7	152.2	磨面に光沢部分
19	19	２号住居	石皿	硅質凝灰岩	(18.7)	(16.8)	10.3	4100	－
38	72	ピット	敲石	砂岩	8.8	6.8	6.5	500	－
46	132	土器溜まり	台石	安山岩	(11.8)	(25.3)	14.9	5000	－
	133	土器溜まり	凹石	砂岩	16.8	6.2	4.2	690	－
	134	土器溜まり	砥石	砂岩	13.7	3.5	1.5	97.1	－
	135	土器溜まり	砥石	砂岩	(5.2)	(7.4)	6.2	380	４面使用。３面に熱による変色

第２節　遺　物

１遺物の出土状況

Ⅵ層を中心に出土している。最も出土点数が多い区域は，土器溜まりや１号住居跡が検出されたＴ・Ｓ－12・13区周辺である。時期は弥生時代早期（刻目突帯文土器）から古墳時代までの遺物が出土している。

２遺物

甕形土器

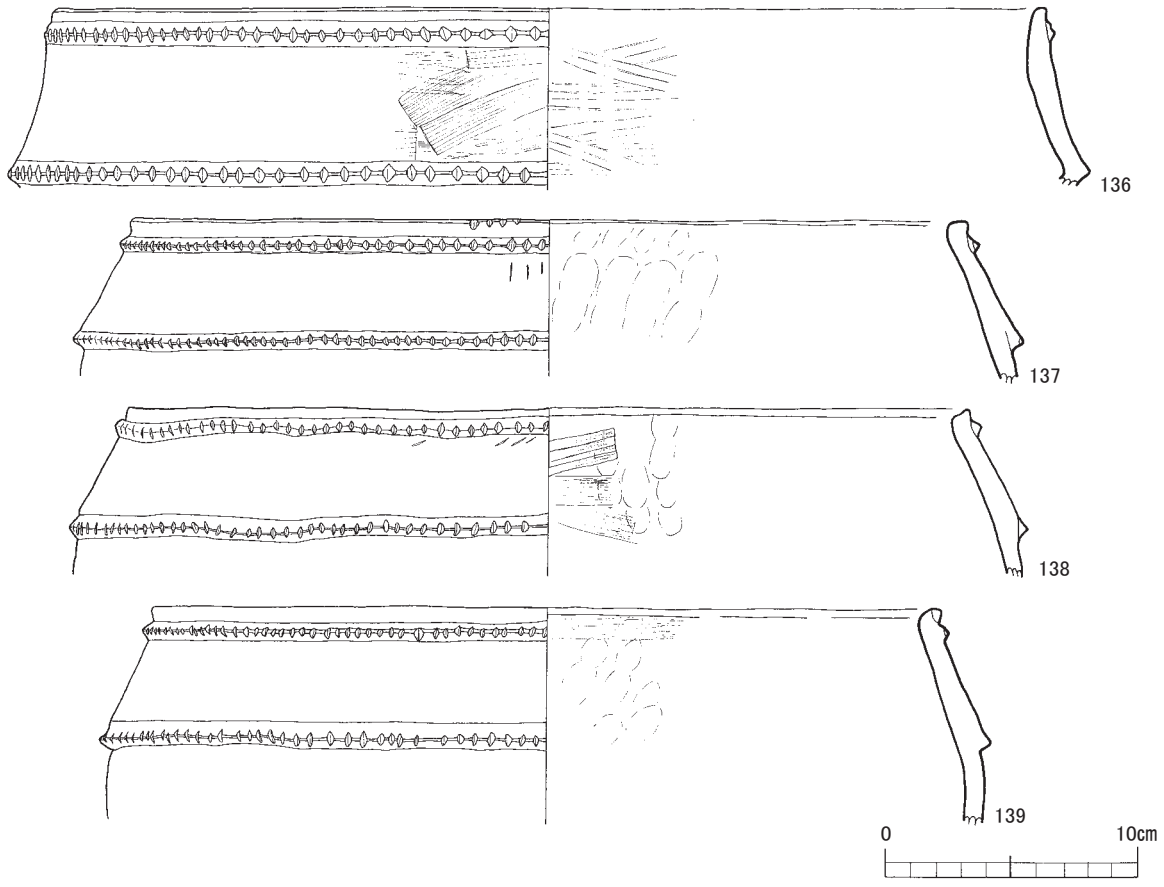
甕形土器はⅠ類からⅤ類に分類した。

・Ⅰ類（第47図136～第48図151）

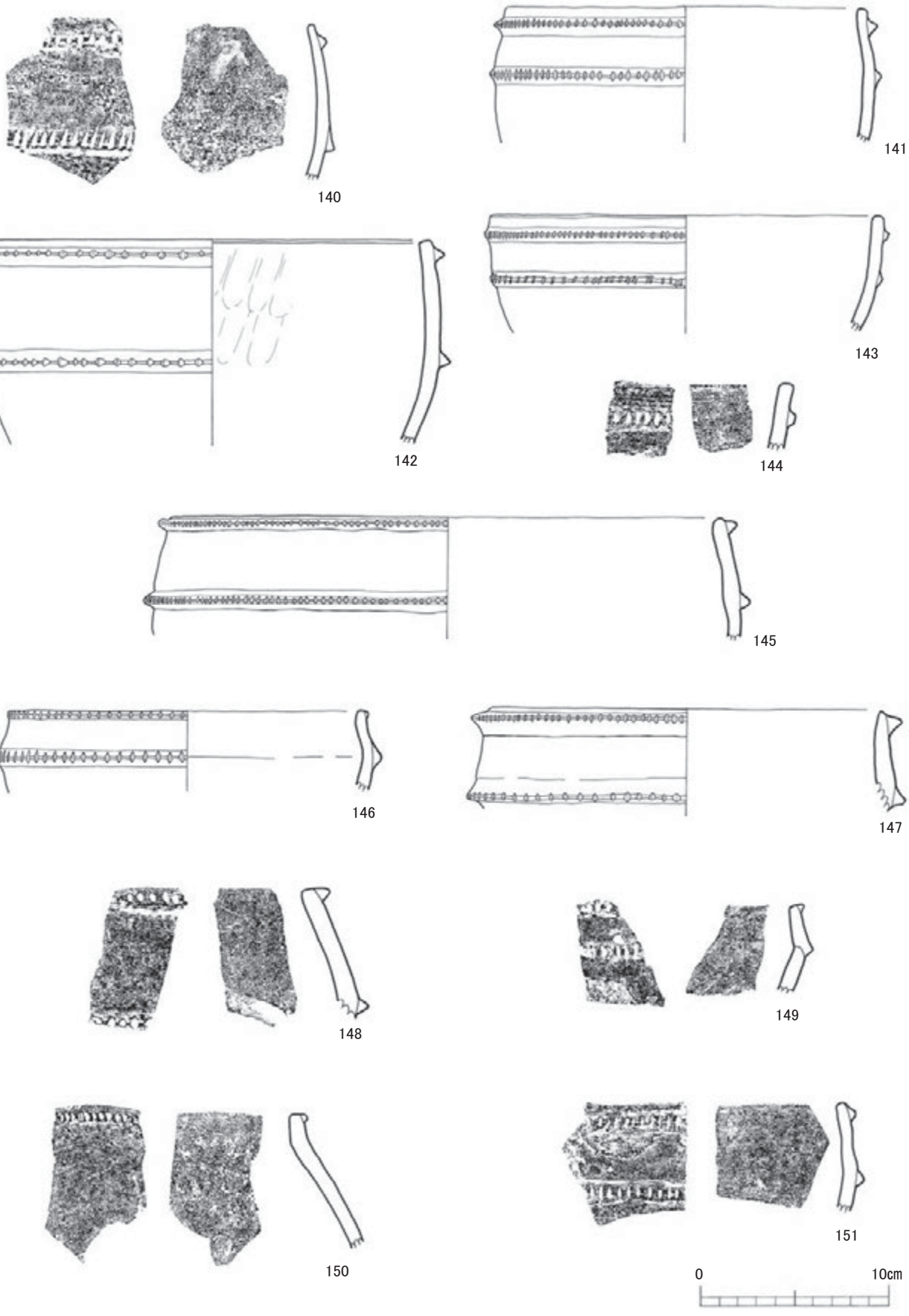
口縁部と胴部屈曲部に刻目突帯を施すいわゆる二条甕のタイプである。口縁部突帯は口縁端部から少し下がった位置に貼り付けられたタイプ（136～144）と，口縁端部に貼り付けられたタイプ（145～151）がある。

・Ⅱ類（第49図152～第50図169）

口縁端部が逆Ｌ字状になるもので，断面が丸みを帯びた三角形状，台形状，方形状を呈するタイプに分けられる。下方へ垂れるもの，まっすぐ伸びるものと上方へ立ちあがる形態のものがある。いずれも胴部に突帯を貼り付けるものや沈線を施すものがある。152は口縁部断面が丸みを帯びた三角形状を呈し，胴部は膨らまず，二条の断面三角形状の突帯が施される。口縁部上面には鳥足状の線刻が施され，指押さえによるくぼみが観察される。また，内面に種子痕状のくぼみが一点観察される。153も152と同様の器形である。155は口縁部が下がり，胴部は膨らまない。158，159，161の口縁部は下がらないで，胴部が膨らみ沈線が巡る。160は口縁部が下がり気味で端部はナデられており，胴部は膨らみ，沈線が２条巡る。163は口縁内面が張り出し，口縁はやや立ち上がり端部はナデられて断面は方形状を呈している。胴部は膨らまずに断面三角形の突帯が２条巡る。胎土に雲母が観察される。167，169は口唇部に刻目が施される。168は口唇部に溝状の凹みを有し，刻目を浅く施す。



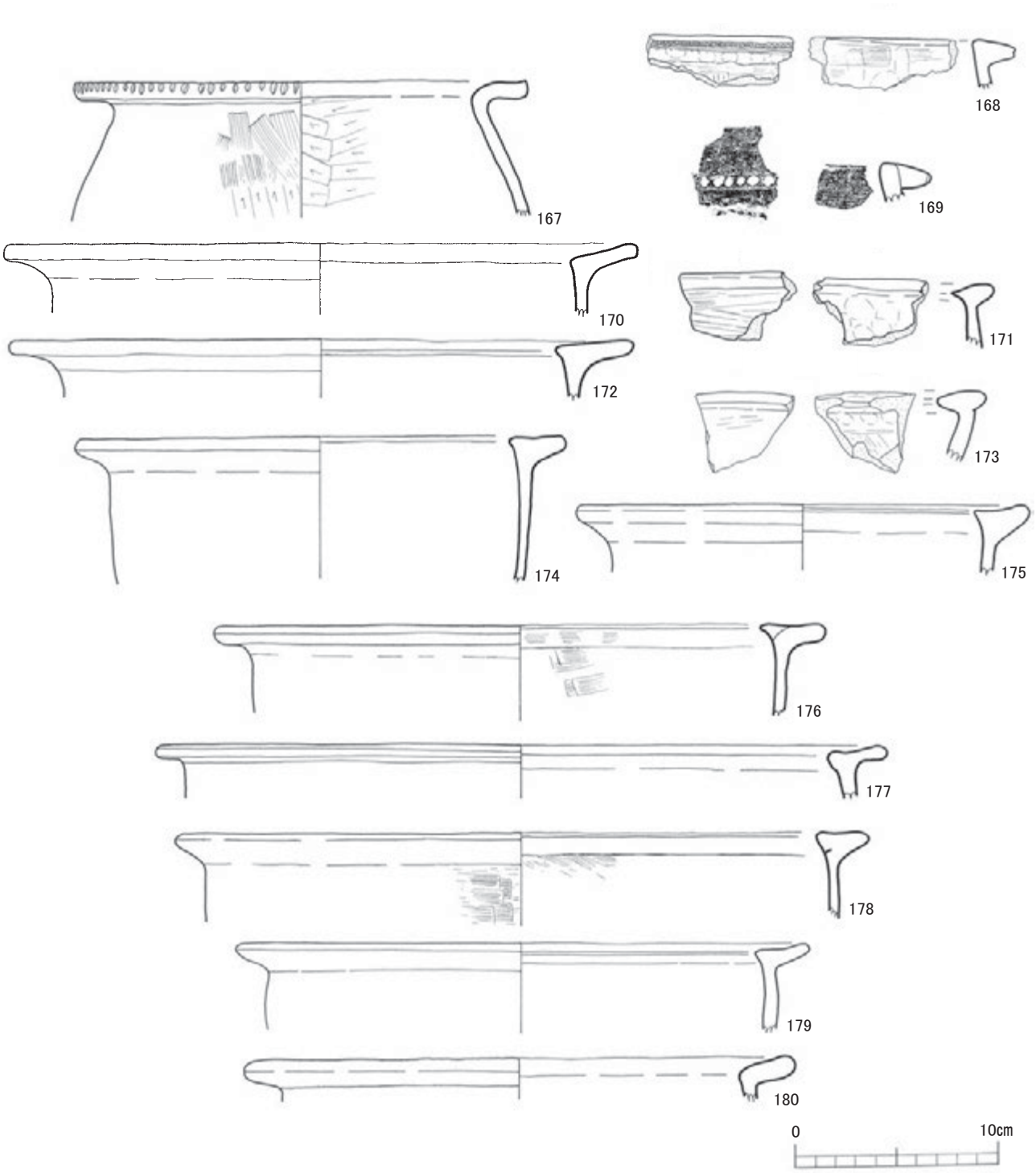
第47図　弥生・古墳時代遺物（１）甕形土器Ⅰ類



第48図　弥生・古墳時代遺物（２）甕形土器Ⅰ類



第49図　弥生・古墳時代遺物（３）甕形土器Ⅱ類



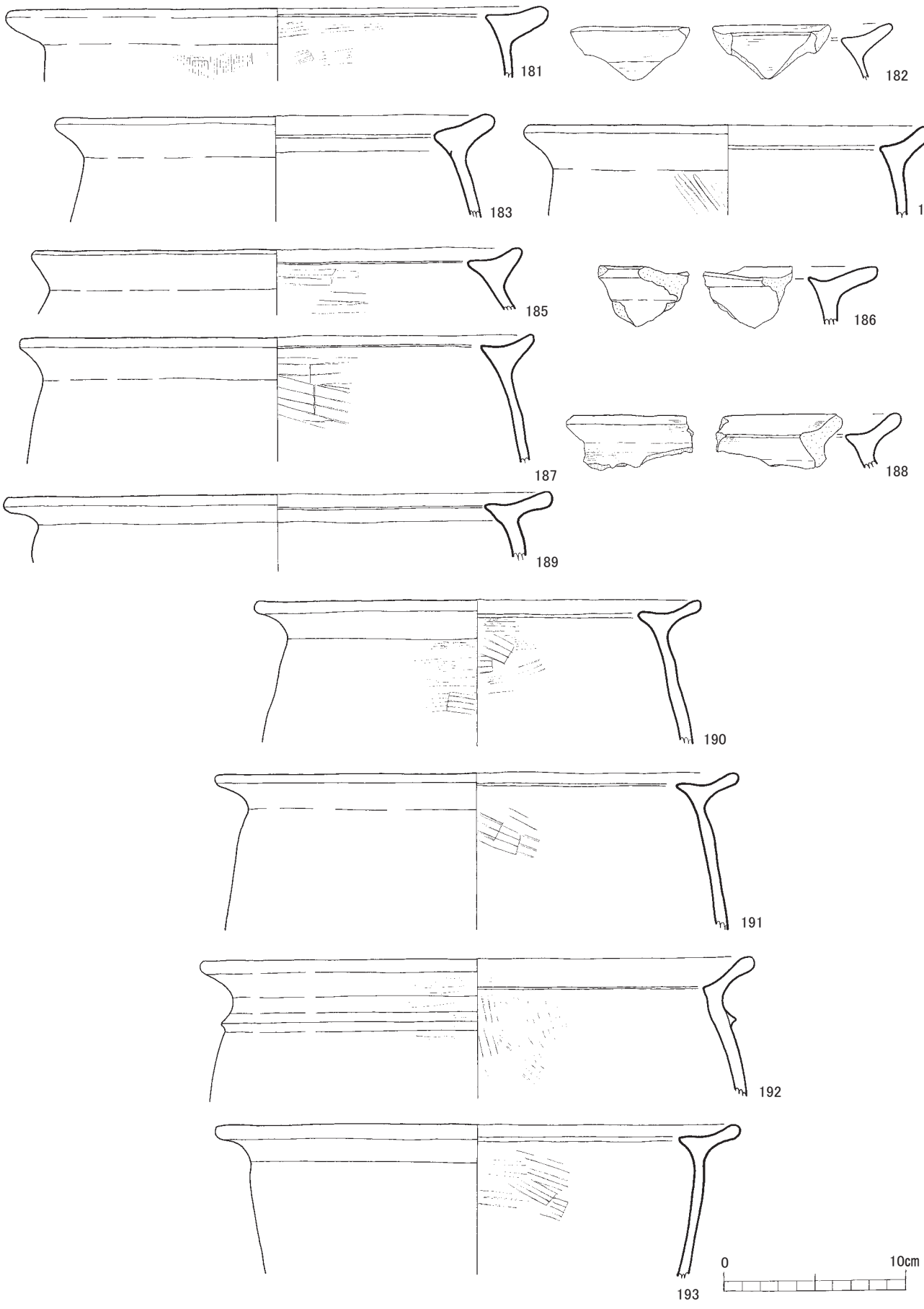
第50図　弥生・古墳時代遺物（４）甕形土器Ⅱ・Ⅲ類

・Ⅲ類（第50図170～第51図193）

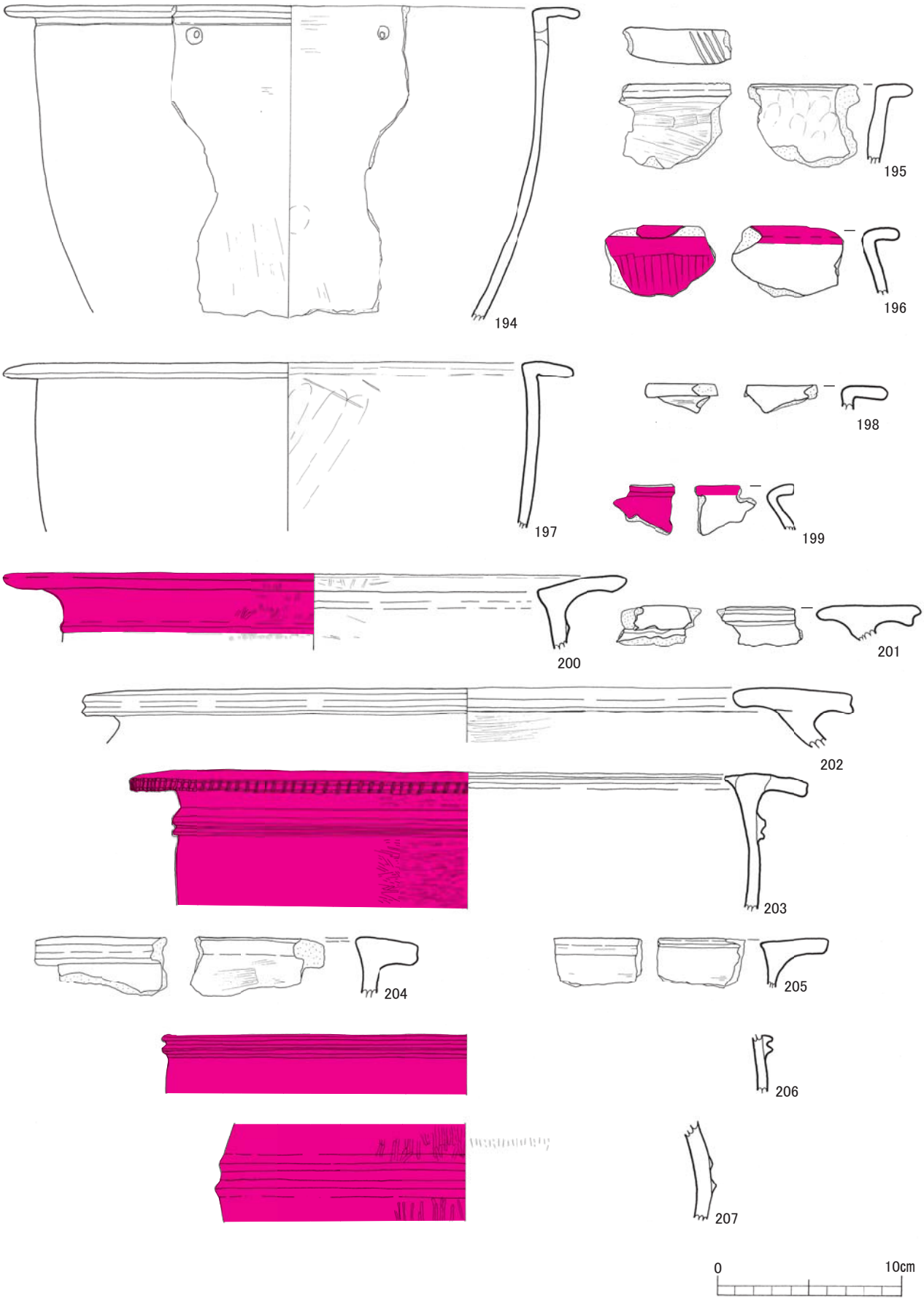
口縁部断面が鋤先状を呈し，上方に上がるタイプである。174～179は口縁部上部が少しくぼみ，口縁はあまり立ち上がらない器形を呈する。189～193は口縁部上部のくぼみが大きく口縁部がしゃくれあがっている器形を呈する。190～192の胴部は張るが，193は胴部が膨らまない器形である。192の屈曲部のすぐ下には断面三角形の突帯が1条巡る。

・Ⅳ類（第52図194～207）

口縁部断面が逆Ｌ字状を呈し，内面の突出がないか，弱いものである。口縁部の立ち上がりも弱いか，もしくは下がり気味である。器壁は比較的薄手で赤色顔料が塗布されているものが多い。194は口縁部下に補修孔を有する。195は口縁部上面に数条の沈線が施される。201・202は甕棺である。口縁部は弱く下方へ垂れ下がり，端部は浅くくぼむ。203は口唇部に刻目を施し，胴部に断



第51図　弥生・古墳時代遺物（５）甕形土器Ⅲ類



第52図　弥生・古墳時代遺物（６）甕形土器Ⅳ類

面M字状の突帯が巡る。赤色顔料が塗布され，外面は丁寧にミガキ調整が施されている。

・Ⅴ類（第53図208～第65図319）

口縁部断面が「く」字状に屈曲するタイプである。資料数が最も多いタイプで，口縁部の立ち上がり，胴部の膨らみ具合によりさらに細分した。

・Va 類（第53図208～第54図227）

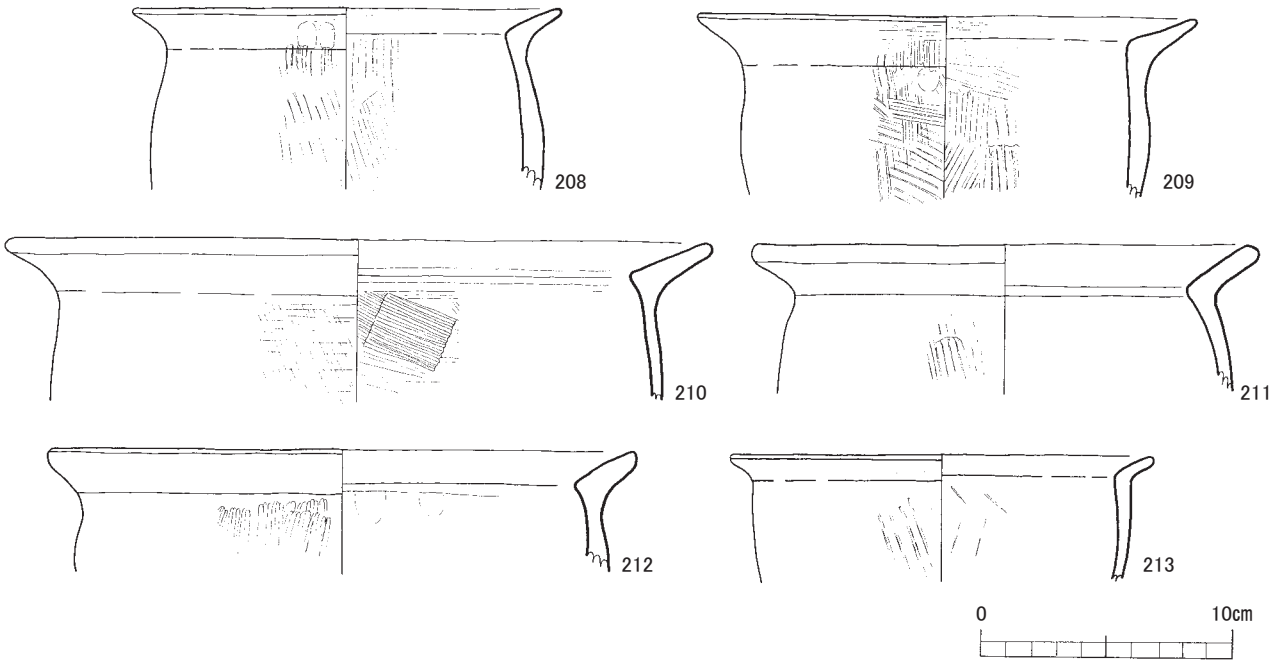
口縁部が「く」字状に外反し，胴部が膨らむタイプである。口縁内面には明瞭な稜線が認められる。219は口唇部がナデられ，矩形を呈している。220は口縁上面と口唇部にナデが施され口縁内面に粘土のはみ出しがみられる。また口唇部下方は三角形状に突出する。

・Vb 類（第55図228～第62図295）

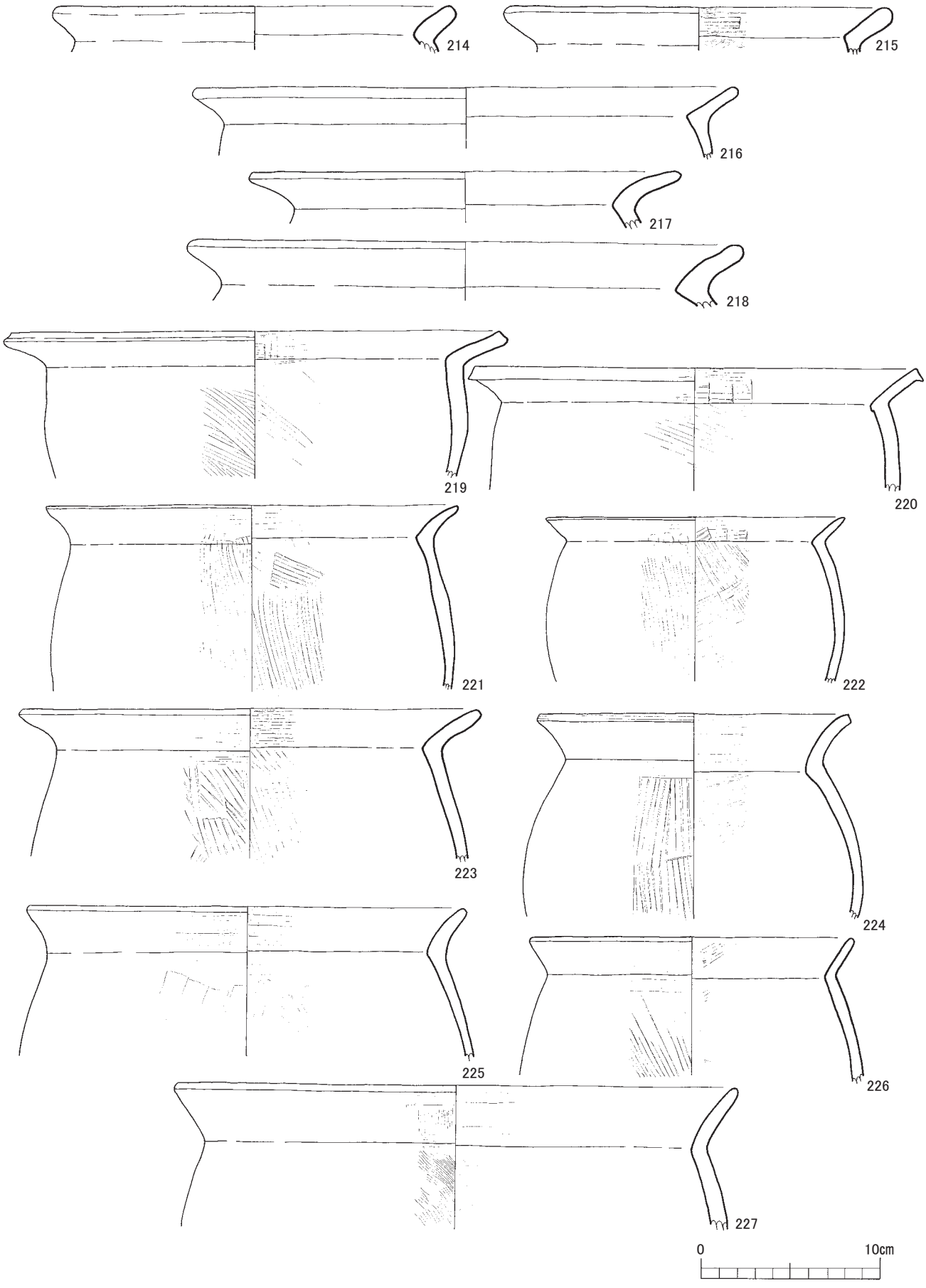
口縁部が「く」字状に近く外反し，胴部がわずかに膨らむタイプである。228～233は口縁の立ち上がりが弱い器形で，口縁端部は丸みを帯びる。234～264は口縁部の立ち上がりが45°前後のものである。234～238は胴部が丸みを帯びて膨らむものである。239～265は胴部の膨らみが弱いものである。261は口縁端部は面を形成し，口縁部内面に稜線は認められるが屈曲は弱い。胴部は膨らまず下半部にはヘラミガキ状の工具ナデ調整が施されている。265～295は口縁部が強く立ち上がる（約60°以上）もので270，272～274は胴部上方で丸みを帯びて膨らむものである。270，272，274は口縁端部が屈曲部より細くなっている。272，274とも端部がやや外反するやや低めの脚台をもち，274は頸部に断面三角形の突帯を一条施している。外面はケズリ調整が施され，丁寧なつくりとなっている。273は胴部下方にケズリ調整がみられる。295は口径36.5㎝，器高41㎝の大型の甕形土器で脚はなく平底である。外面には黒斑があるが炭化物の付着はみられない。

・Vc 類（第62図296～第65図319）

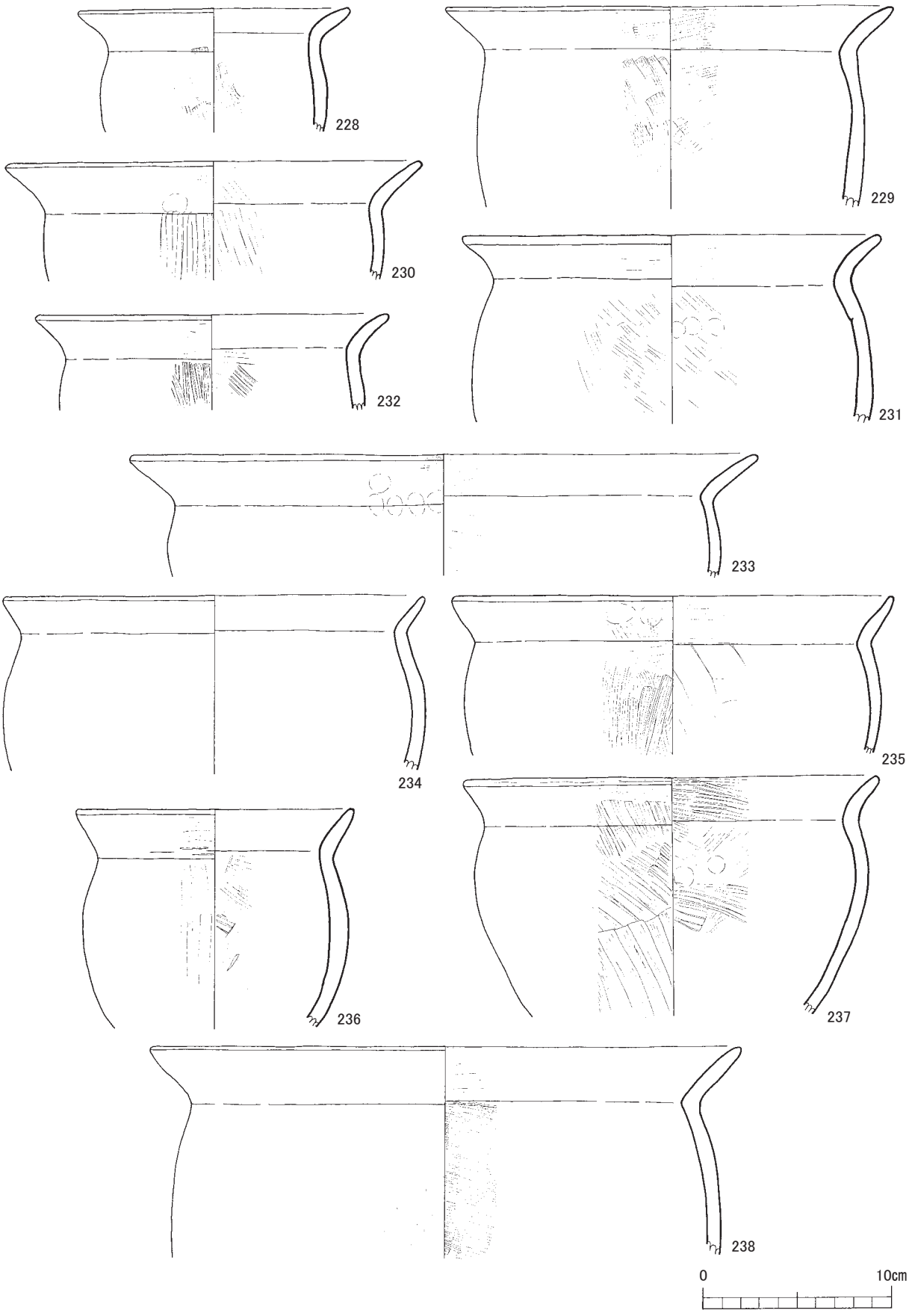
口縁部が「く」字状に近く外反し，胴部はあまり膨らまないタイプである。口縁部内の稜線は認められるものの，屈曲部が鋭角的でなく，なだらかなものが多い。底部は中空の脚台である。器面調整はハケ目が大半であるが，部分的にヘラケズリも認められる。頸部から口縁部へかけて，ハケ目のカキ上げが施されるものも多く見られる。296～308，310は胴部が膨らまずに底部にいたる器形を呈する。309は脚部をもたない完形の甕で胴部最大径部が下方にありやや平べったい丸底を呈する。口縁部は短く，端部は丸みを帯びる。310は胴部中央部に補修孔らしい穿孔を有する。312，313は胴部上方が丸みを帯び，すぼまるように底部にいたる器形である。



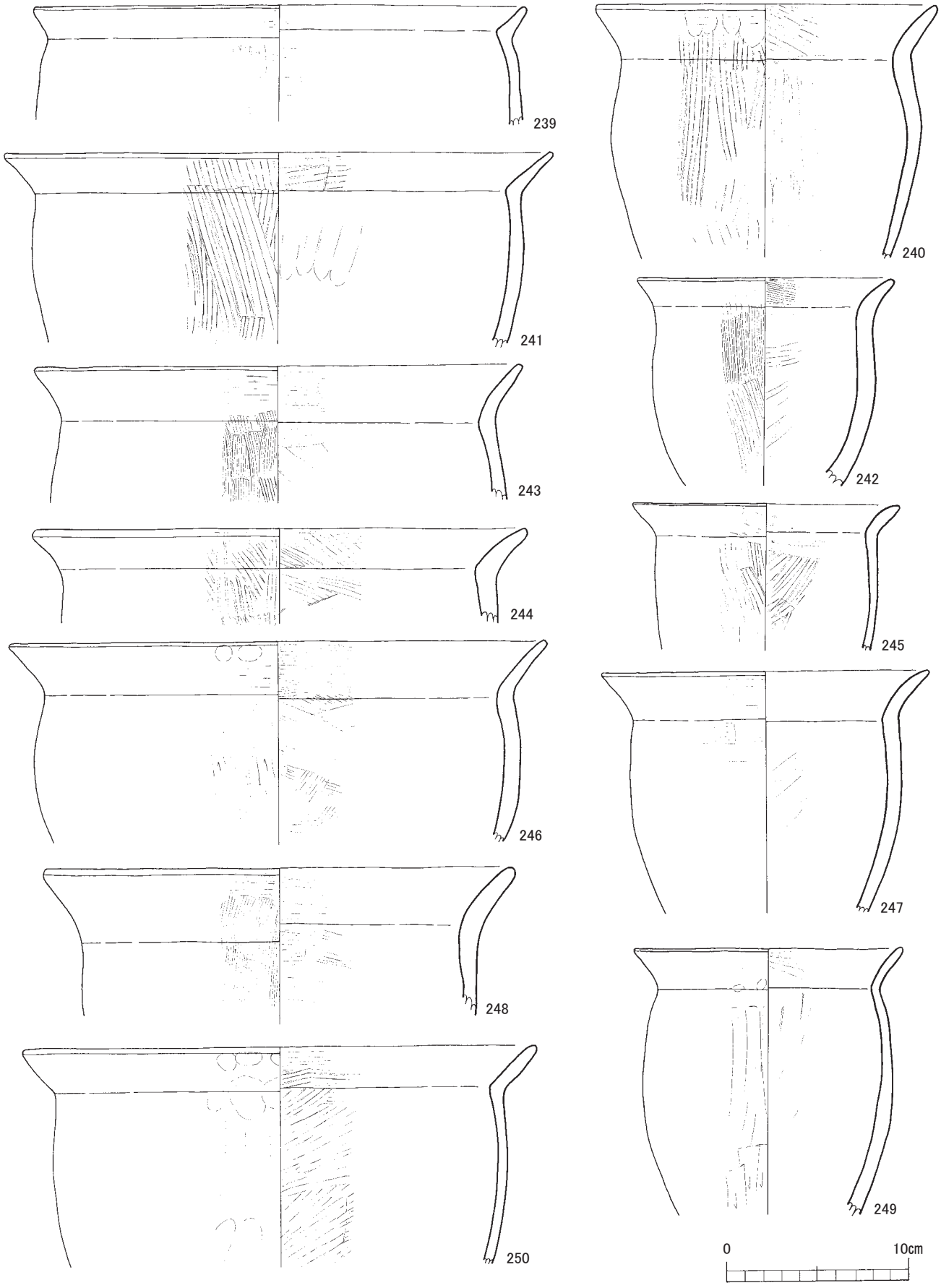
第53図　弥生・古墳時代遺物（７）甕形土器Ⅴａ類



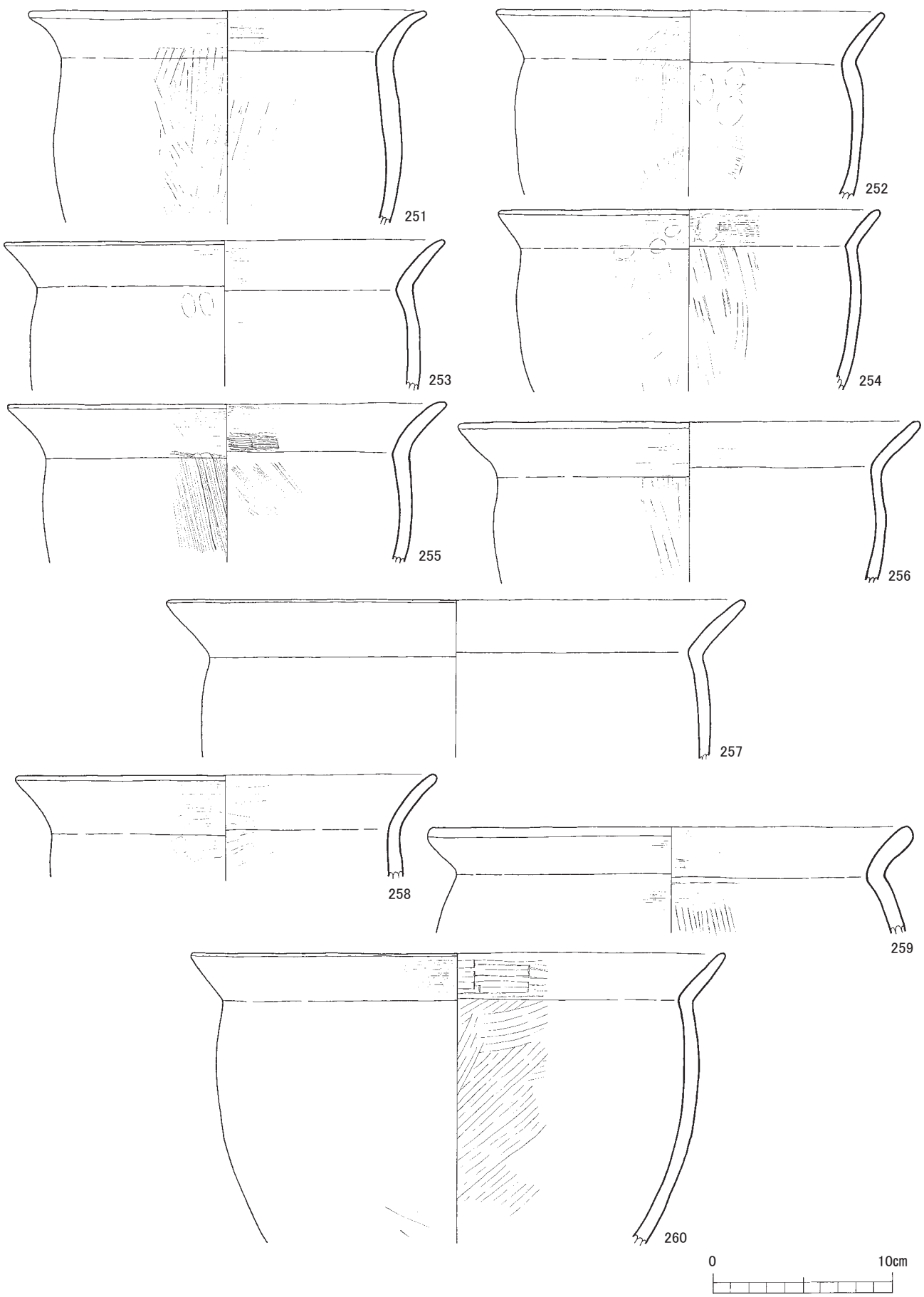
第54図　弥生・古墳時代遺物（８）甕形土器Ｖａ類



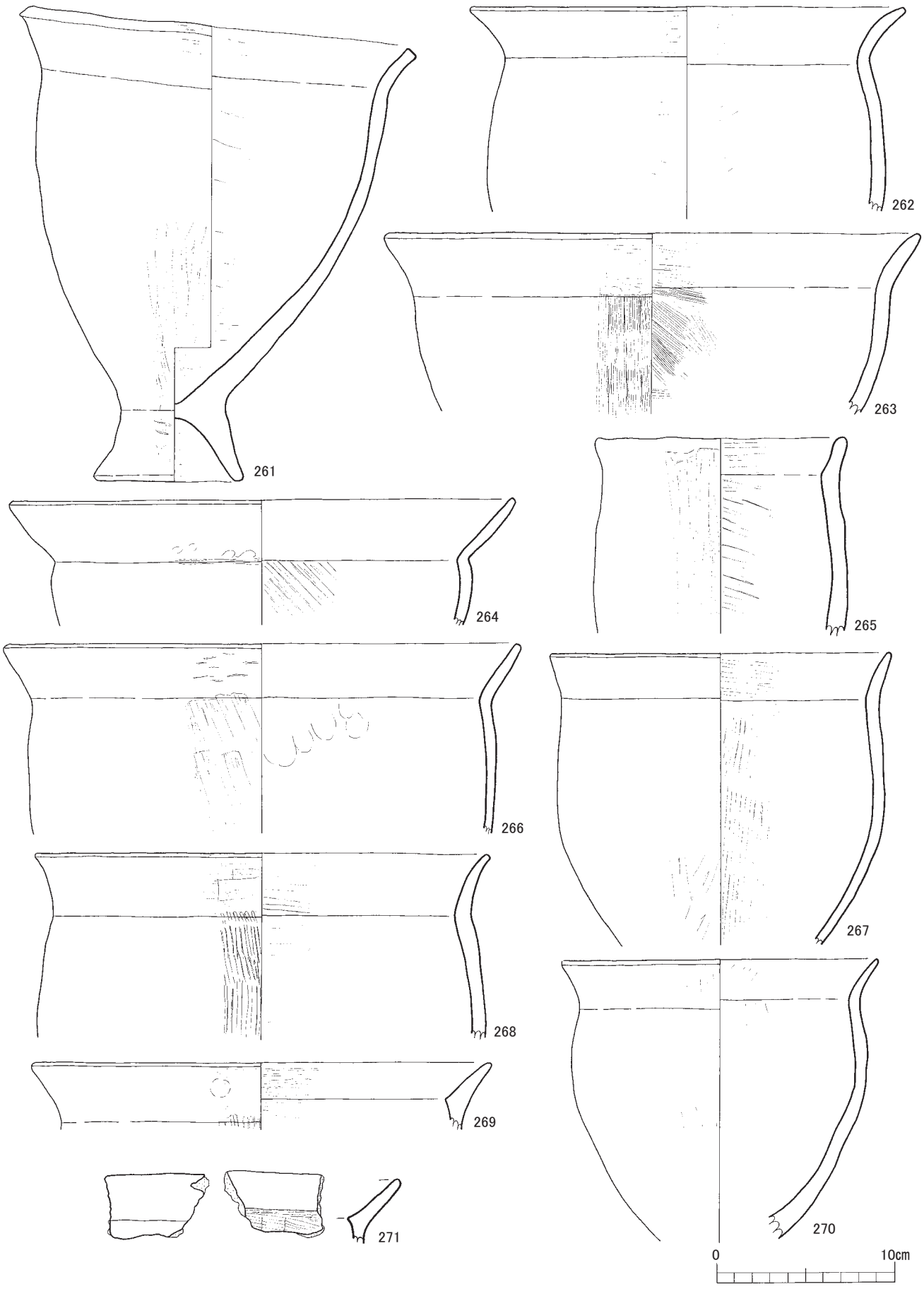
第55図　弥生・古墳時代遺物（９）甕形土器Ⅴｂ類



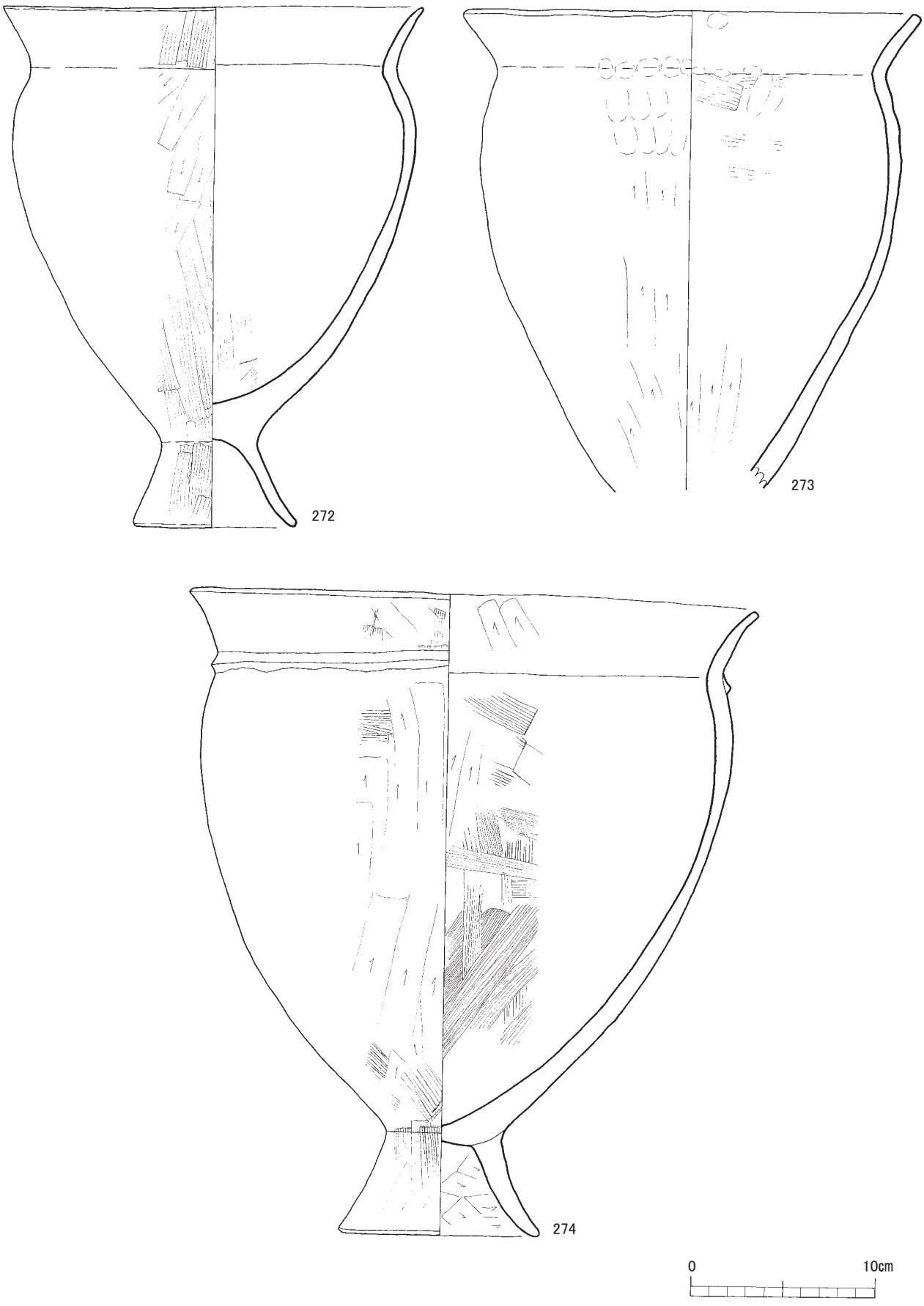
第56図　弥生・古墳時代遺物（10）甕形土器Ⅴｂ類



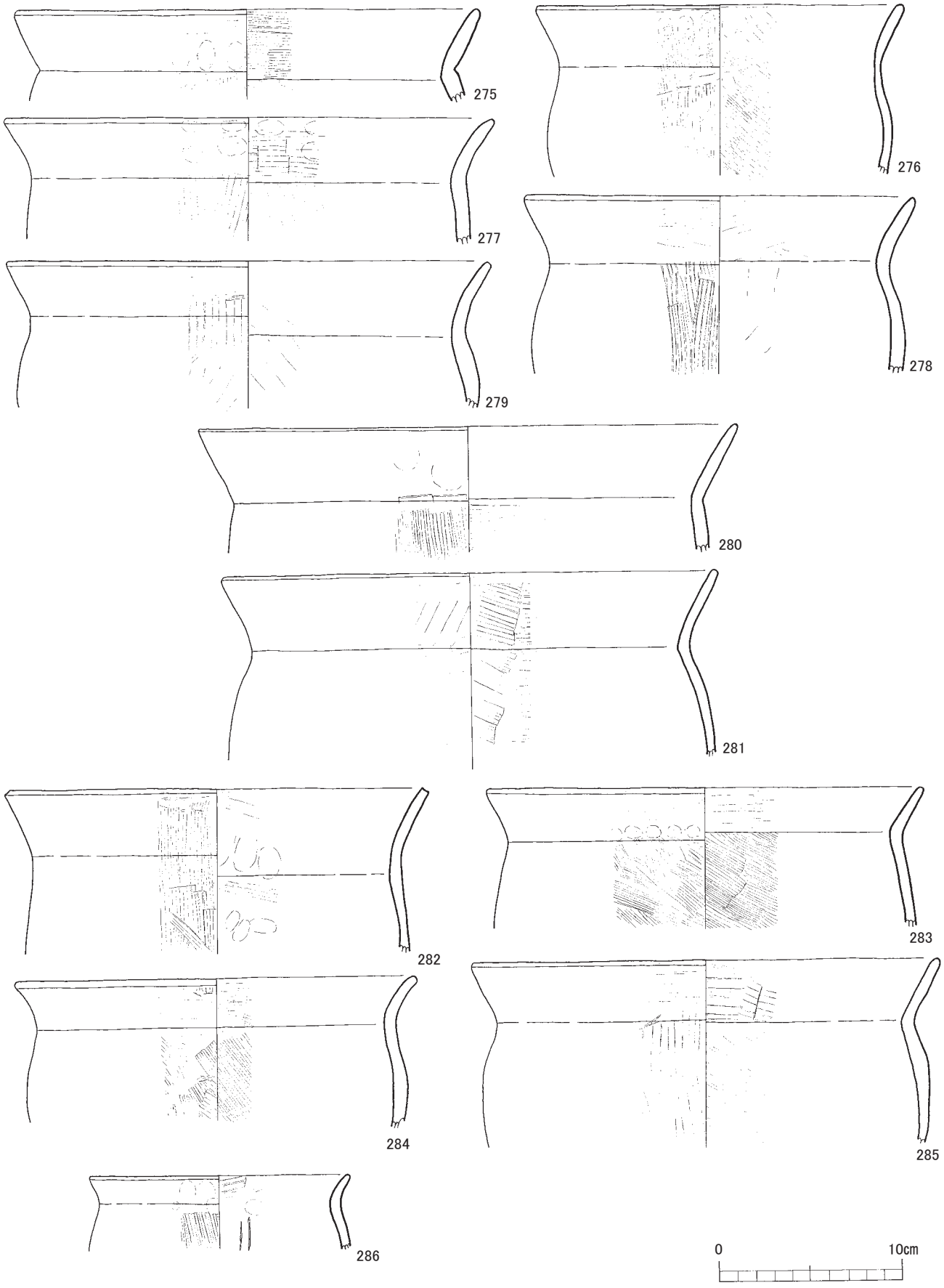
第57図　弥生・古墳時代遺物（11）甕形土器Ⅴｂ類



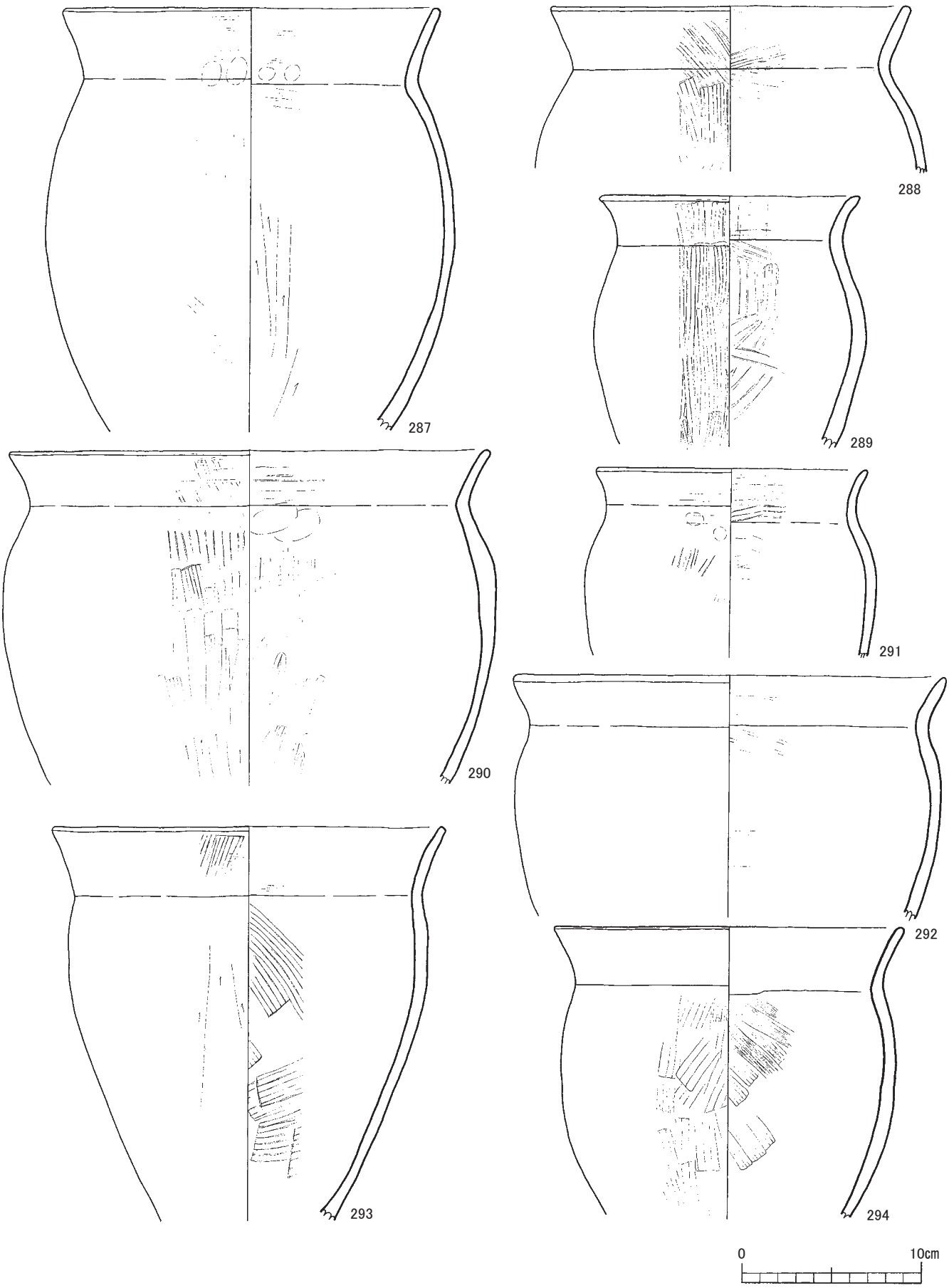
第58図　弥生・古墳時代遺物（12）甕形土器Ⅴｂ類



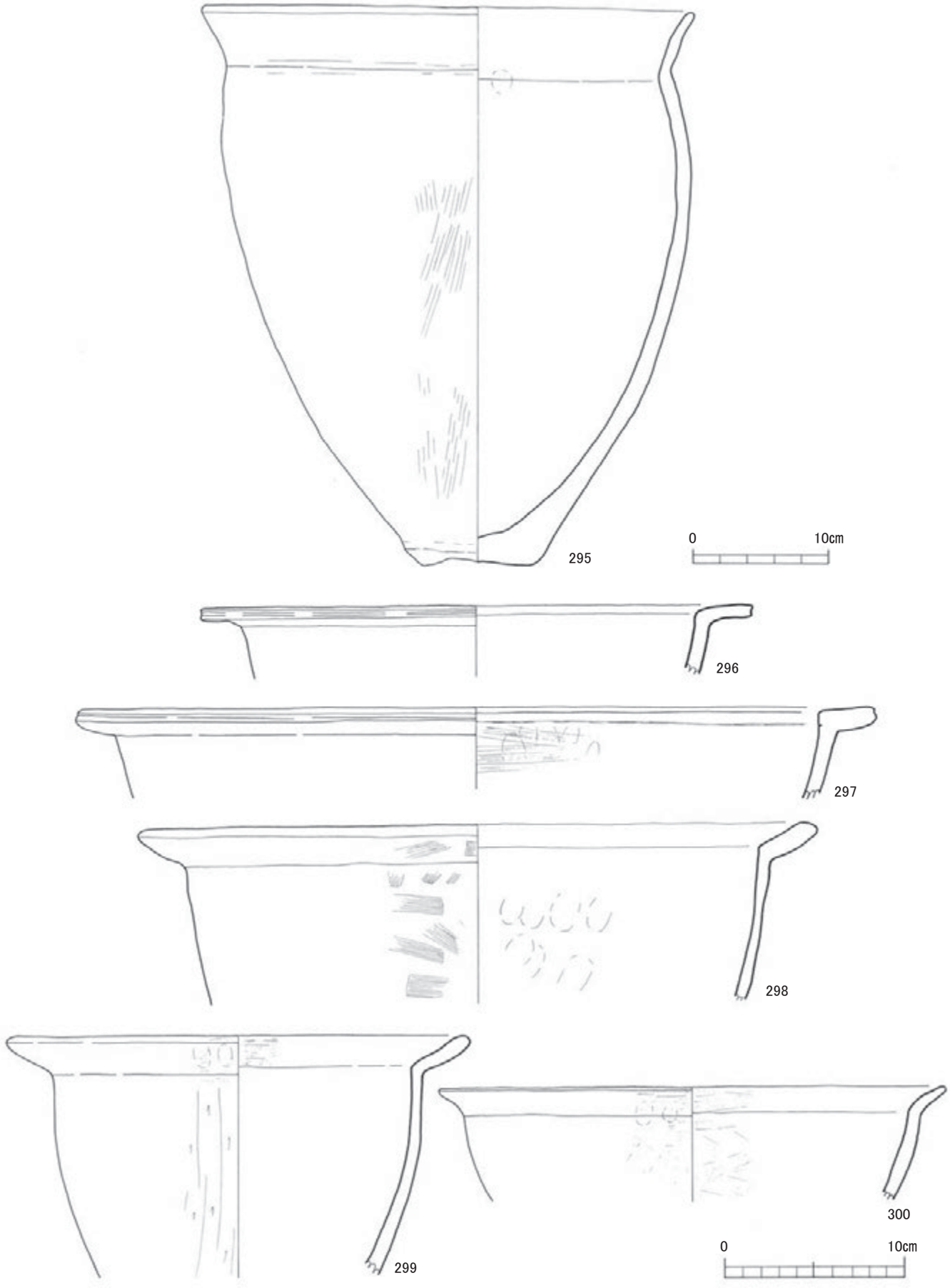
第59図　弥生・古墳時代遺物（13）甕形土器Ⅴｂ類



第60図　弥生・古墳時代遺物（14）甕形土器Ⅴｂ類



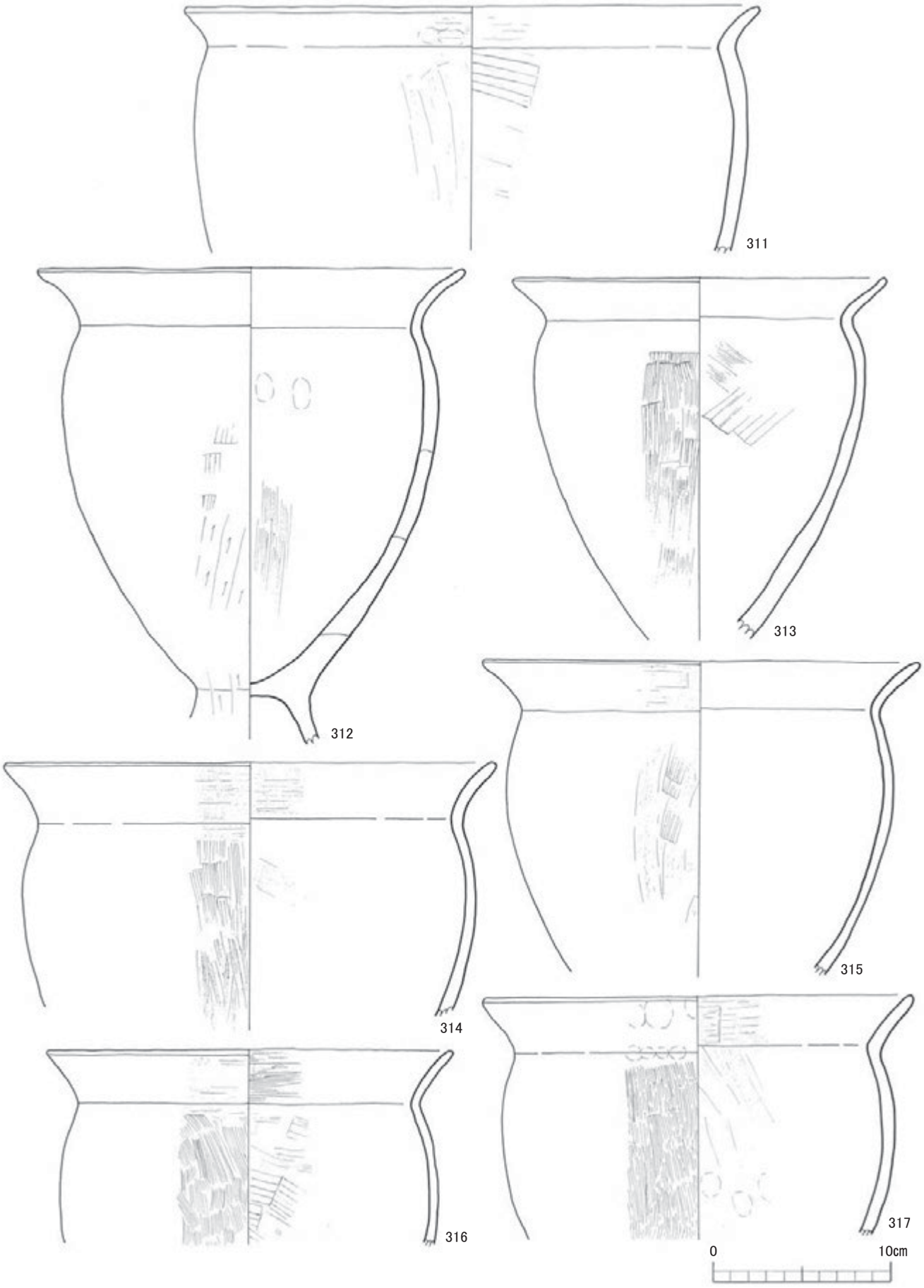
第61図　弥生・古墳時代遺物（15）甕形土器Ⅴｂ類



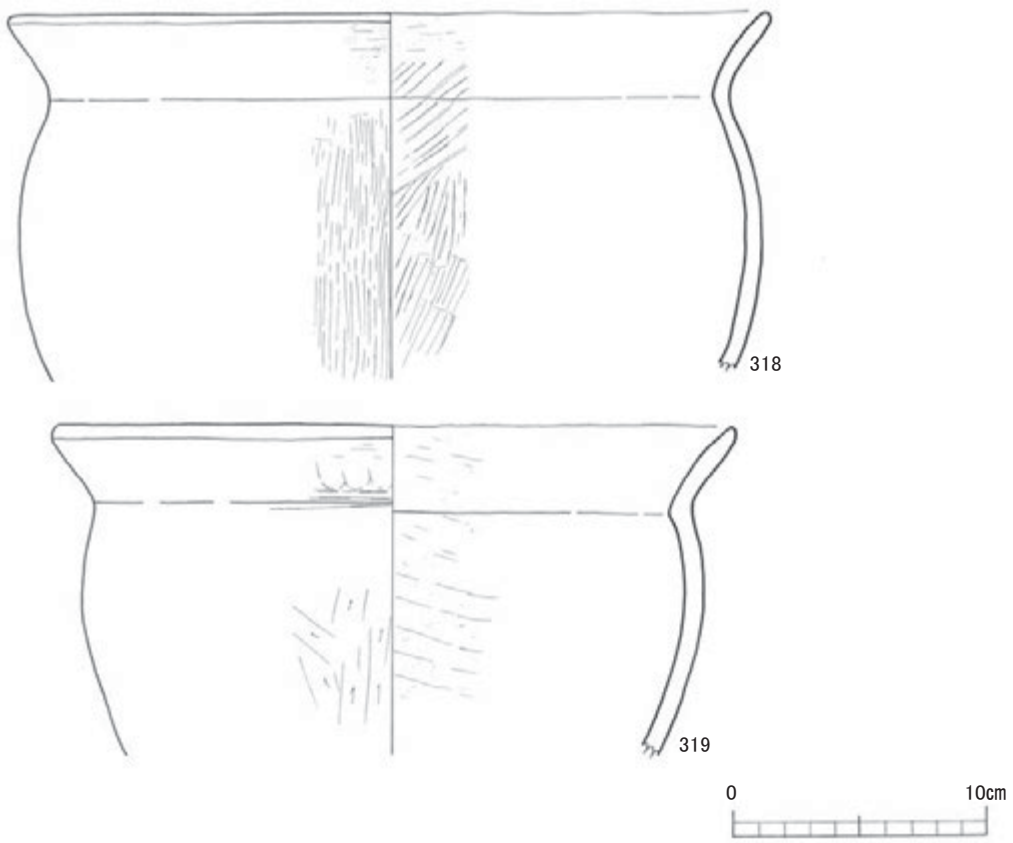
第62図　弥生・古墳時代遺物（16）甕形土器Ｖｂ・Ｖｃ類



第63図　弥生・古墳時代遺物（17）甕形土器Ⅴｃ類



第64図　弥生・古墳時代遺物（18）甕形土器Ⅴｃ類



第65図　弥生・古墳時代遺物（19）甕形土器Ｖｃ類

大甕（第66図320～第67図327）

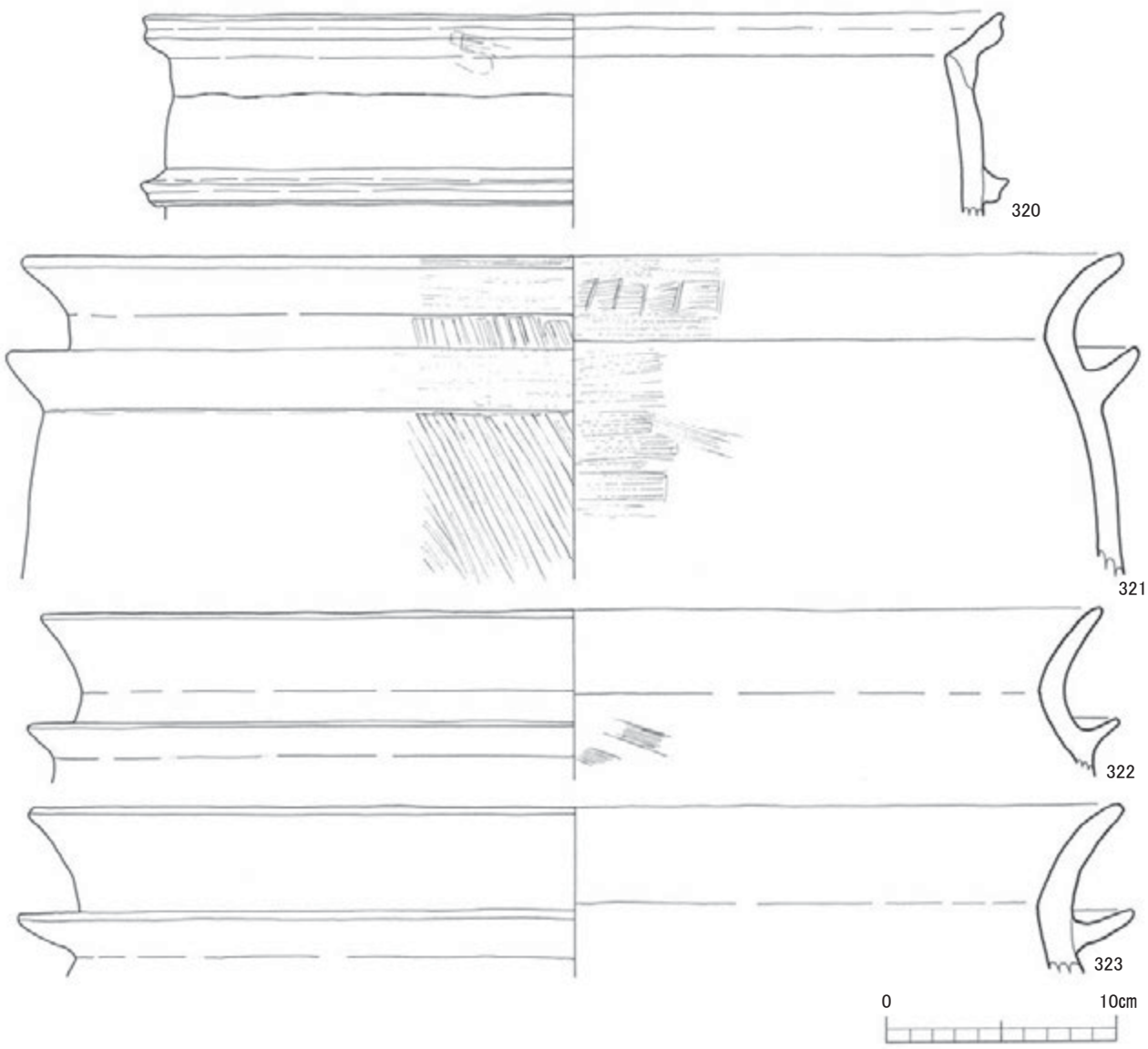
大甕は外反する口縁部の下位に口縁部と同様の形状の突帯を巡らすものである。新しくなるにつけ，口縁下位の突帯が小さくなる傾向がある。320は口縁部の立ち上がりが弱く，口縁端部がくぼみ，口縁下部にM字状の突帯が巡る。胎土には雲母が含まれている。Ⅱ類の甕と同時期と思われる。321～323は口縁上部が丸みをおびて外反し，口縁下部には先端部が細く丸みを帯びた突帯が上を向いてつけられている。324～327は口縁部が直線的に外反している。325の口縁下部の突帯は断面台形状を呈し，327の突帯は断面三角形状を呈し上に反らずに付けられている。

脚部（第68図328～第69図390）

328～335は充実脚台である。328，329，334，はやや上げ底になっている。336～369，373～377は天井部が丸みをおび，脚がやや外反気味の器形を呈する低脚である。370～372，385～390は天井中央部に突起を持ち，断面はM字状を呈する。378～384は天井部が平面でやや高い脚である。381は脚が外反せず直線的におりる。

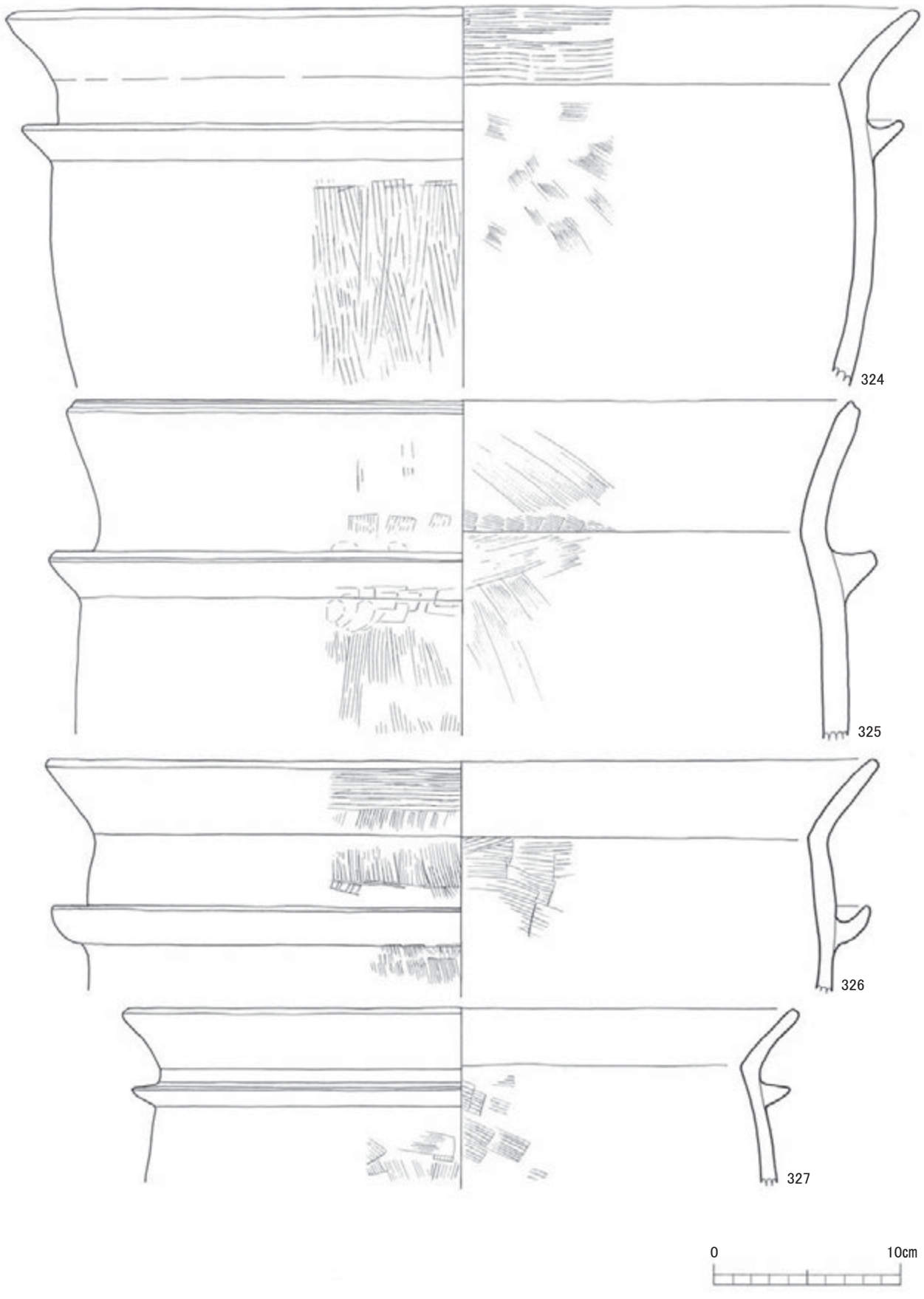
壺形土器（第70図391～第79図526）

391は口縁部上面が水平になり，断面が矩形を呈する。392は口縁部が下方に垂れ下がり，頸部に五条の断面三角形の突帯を施す。393～395は頸部から胴部にかけて断面三角形状の突帯が数条巡らされる。396，397は口唇部に刻目が施される。398，399は口縁部内面に突帯がついている。400～403は頸部が厚い器形である。口縁部は丸みを帯びて外反し，口唇部にくぼみがみられるタイプで，400には頸部に１条の突帯が巡る。404～422，424，428の口縁部断面は矩形を呈する。409，414は頸部に断面三角形の突帯が施される。424は直径が28.6㎝ある広口壺の口縁部で，やや下方へ肥厚した口縁端部はくぼみを有する。口縁内面の端部近くに連続する鋸歯状の沈線文がみられる。４つある鋸歯先端部の角度は最も内側のほうが鋭く，端にいくと鈍い。頸部から口縁部へは内面はゆるやかに立ち上がっているが，外面は鈍く屈曲している。425～427，429～443は口縁部が緩やかに外反し，口唇部が丸みを帯びる。441，442は胴部があまり膨らまない器形である。441は幅の狭い平底，442はやや幅の広い平底を呈する。いずれもタテ方向の工具ナデやケズリ調整が施される。444～453は，胴部に一条の刻目突帯を施しているものである。444は頸部断面が厚く，口縁部は緩やかに外反し，口唇部は浅いくぼみを有する。胴部は膨らみ，胴部最大径部よりやや上方に突帯が施され，底部は丸底と思われる。445は口縁部は直線的に外

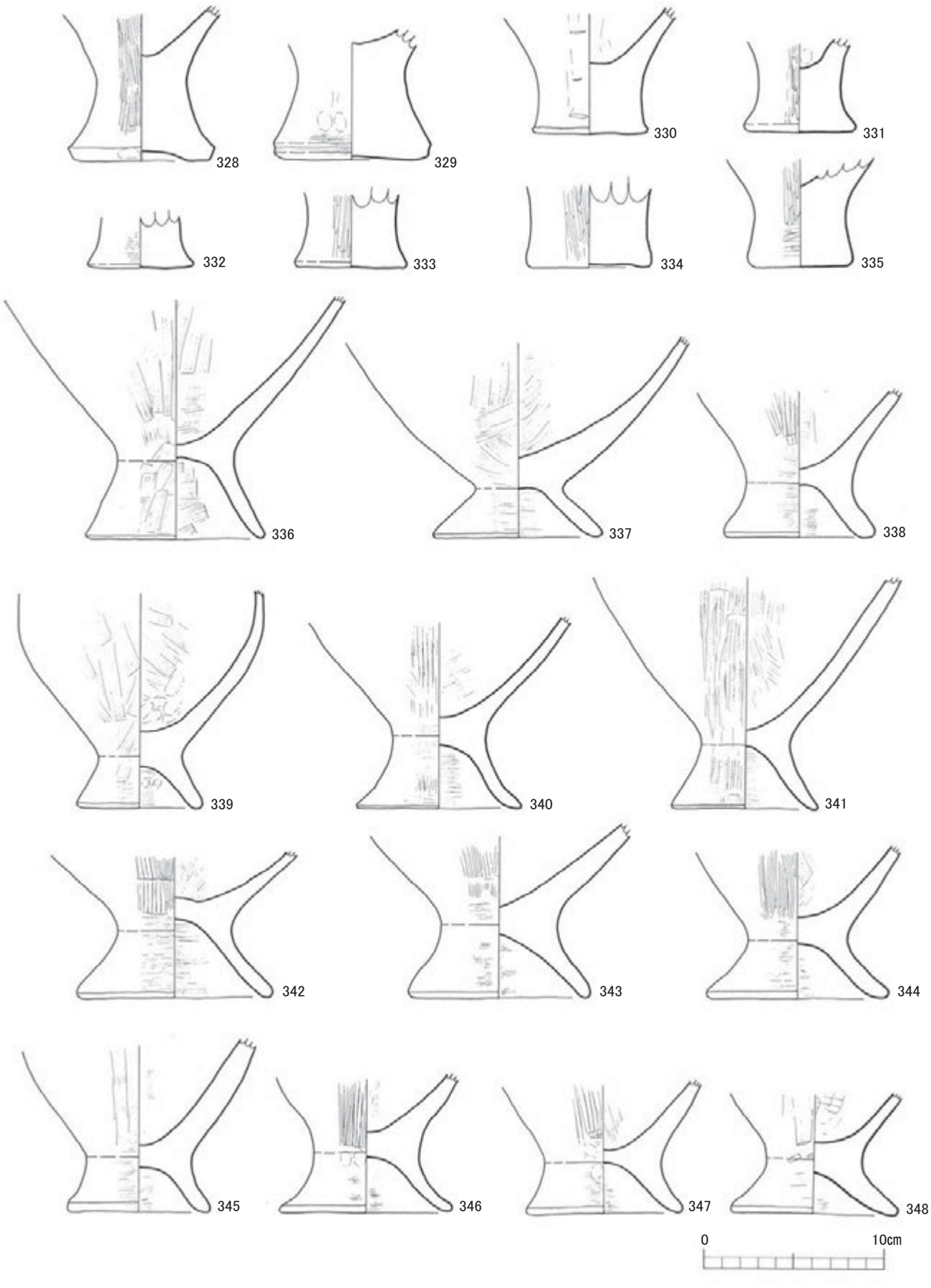


第66図　弥生・古墳時代遺物（20）大甕

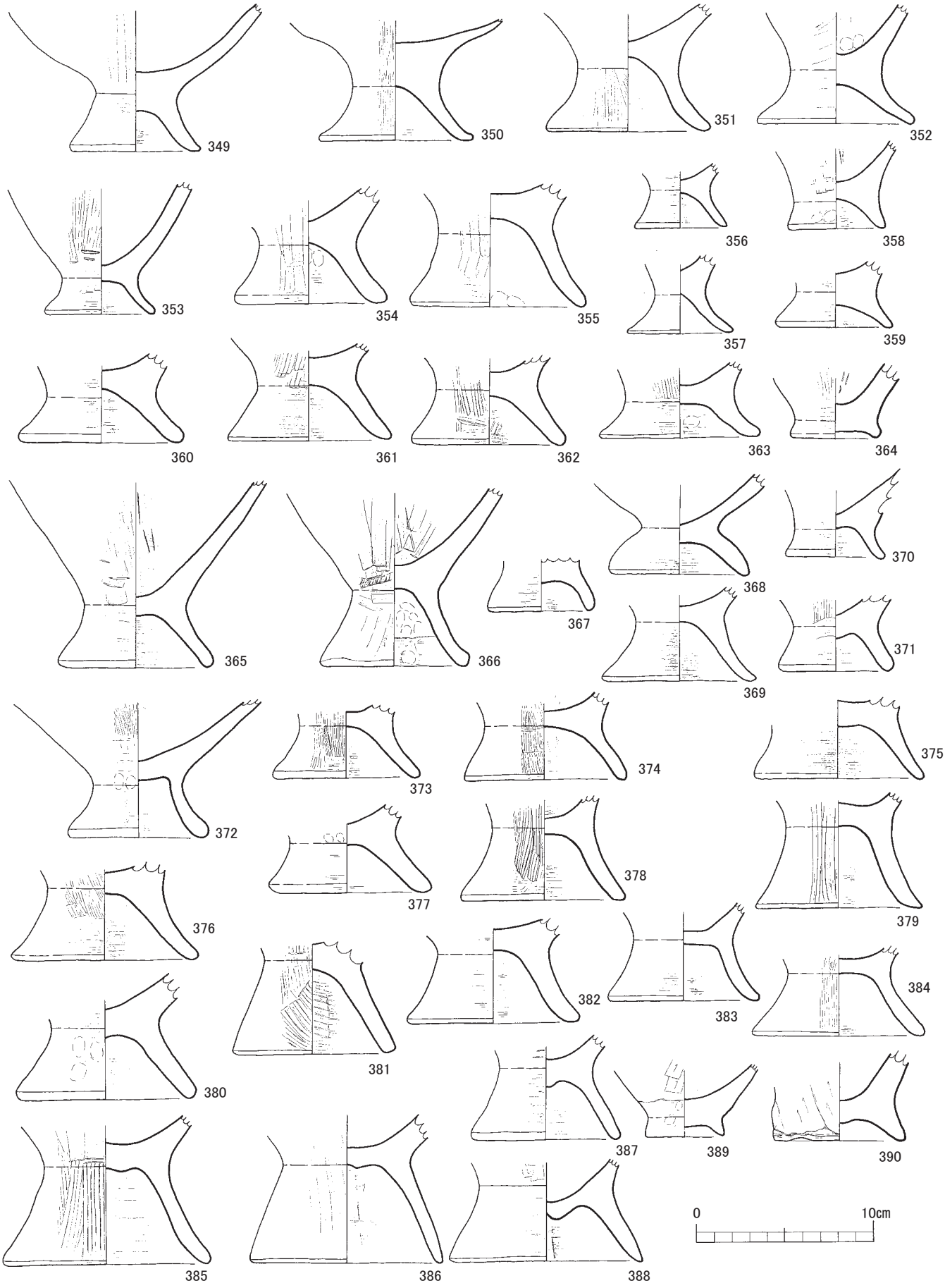
反し，口縁部は丸みをおびた矩形を呈し，丸底である。胴部最大径部より少し上に突帯が巡る。突帯の上部に約2.5㎝ほどの「一」字状の線刻が施されている。446の口縁部はなだらかな曲線を描くように外反し，端部はくぼみを有し，丸底である。突帯はすれちがう形態を呈する。447の口縁部は「く」字状に外反し，口唇部は平坦である。胴部最大径部よりやや上に浅い刻目の突帯が巡る。底部はやや平べったい丸底を呈する。448は頸部から口縁端部までが短く，口唇部はくぼみを有する。胴部は膨らみ丸い刻目を有する突帯が巡る。底部は幅のせまい平底を呈する。452も胴部が膨らむ器形であるが，底部はやや出っ張り，凸レンズ状を呈する。449・450は球形に近い器形である。454は口縁部が「く」字状に外反し口唇部は矩形を呈する。胴部は丸く膨らみ胴部最大径部に直径0.6㎝の穿孔が１か所ある。胴部最大径部より上に刻目が認められない粗雑なつくりの突帯が１条巡っている。底部は丸底である。455～464，468は頸部が立ち上がる器形である。455は長い頸部を持ち，胴部は丸みを帯び狭い平底を呈する。外面は丁寧なナデ調整が施されている。456も頸部がやや長いが口縁は455より外反している。457は細長い頸部で，外面にヘラミガキ調整が施されている。464は口縁部が直線的に外反し，胴部は丸みを帯びて膨らむ。外面はハケ目が丁寧に施され，幅の狭い平底を呈する。468の口縁部も直線的に外反し胴部が丸く膨らみ平底の底部に到る。外面はヘラミガキ状の工具ナデ調整が観察される。462，465～467，469～471，473，474は口縁部が短く，胴部が丸く膨らむ。472は無頸壺である。口縁は厚みをおびて内湾し，外面はナデが施されている。475は頸部が広く胴部の膨らみが弱い器形である。476，477は頸がながく胴部が膨らんだ形態を呈する。478，479は坩の胴部である。480は沈線が施された胴部片でミガキ調整がなされている。482は球



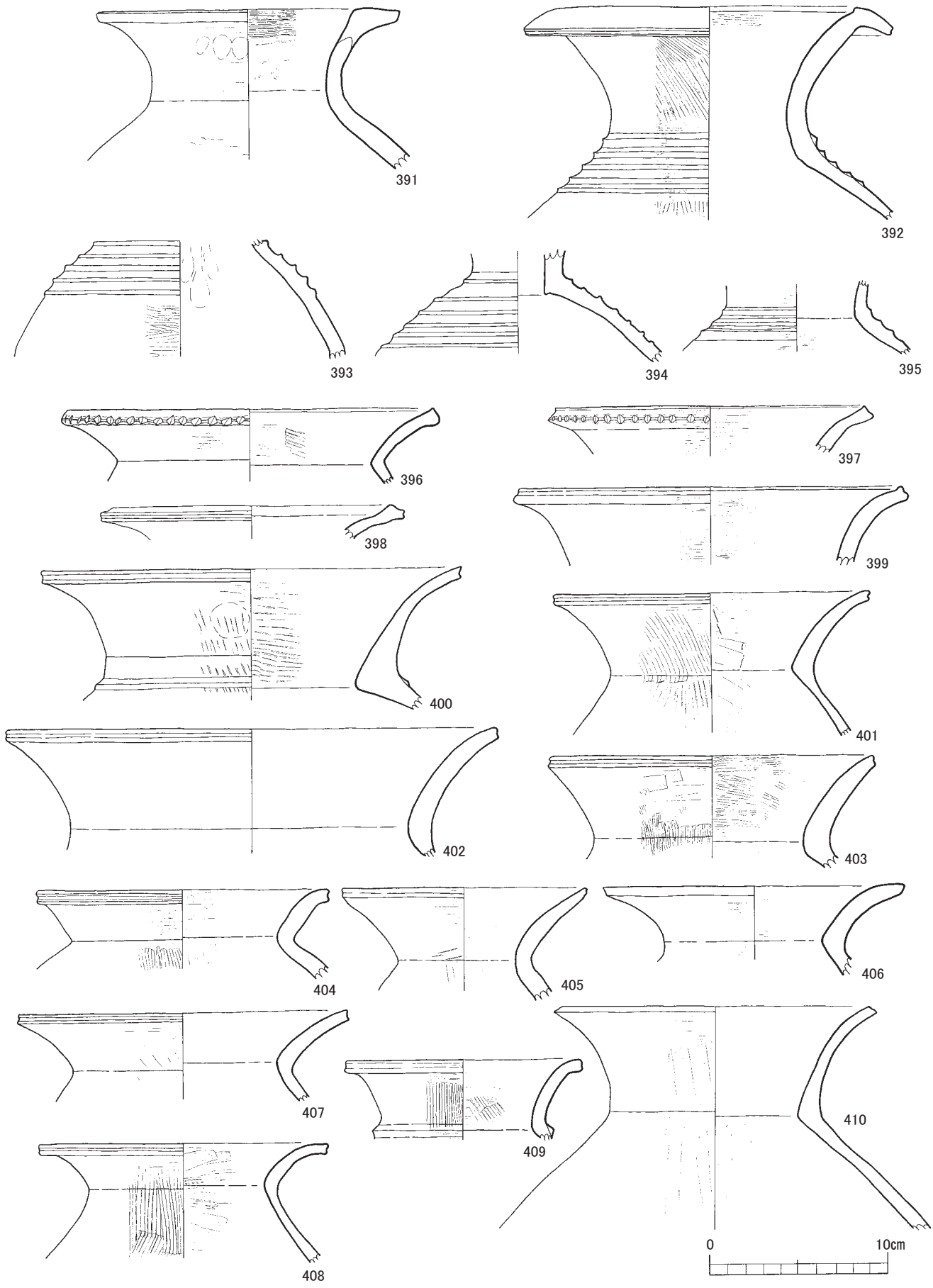
第67図　弥生・古墳時代遺物（21）大甕



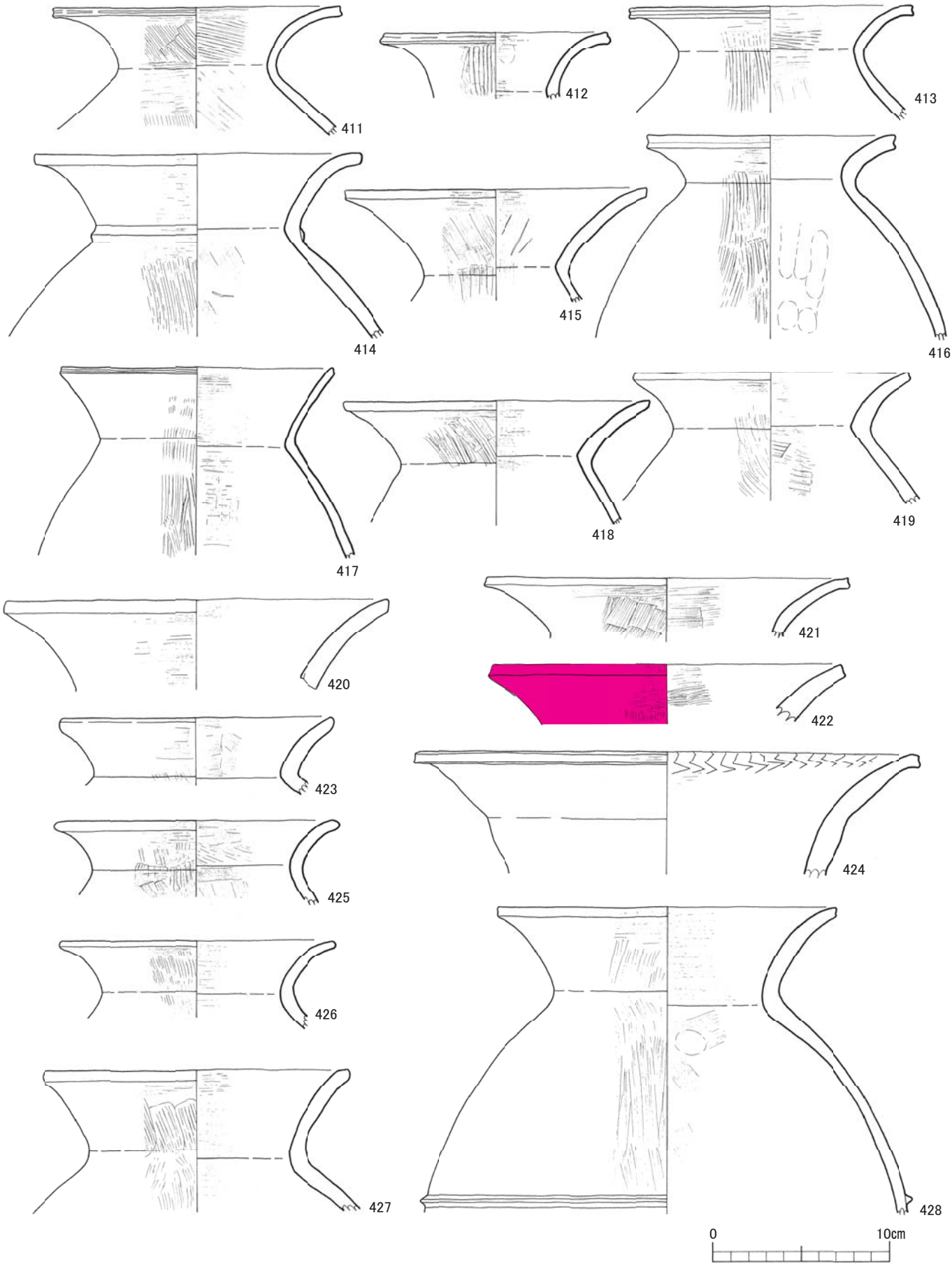
第68図　弥生・古墳時代遺物（22）甕形土器脚部



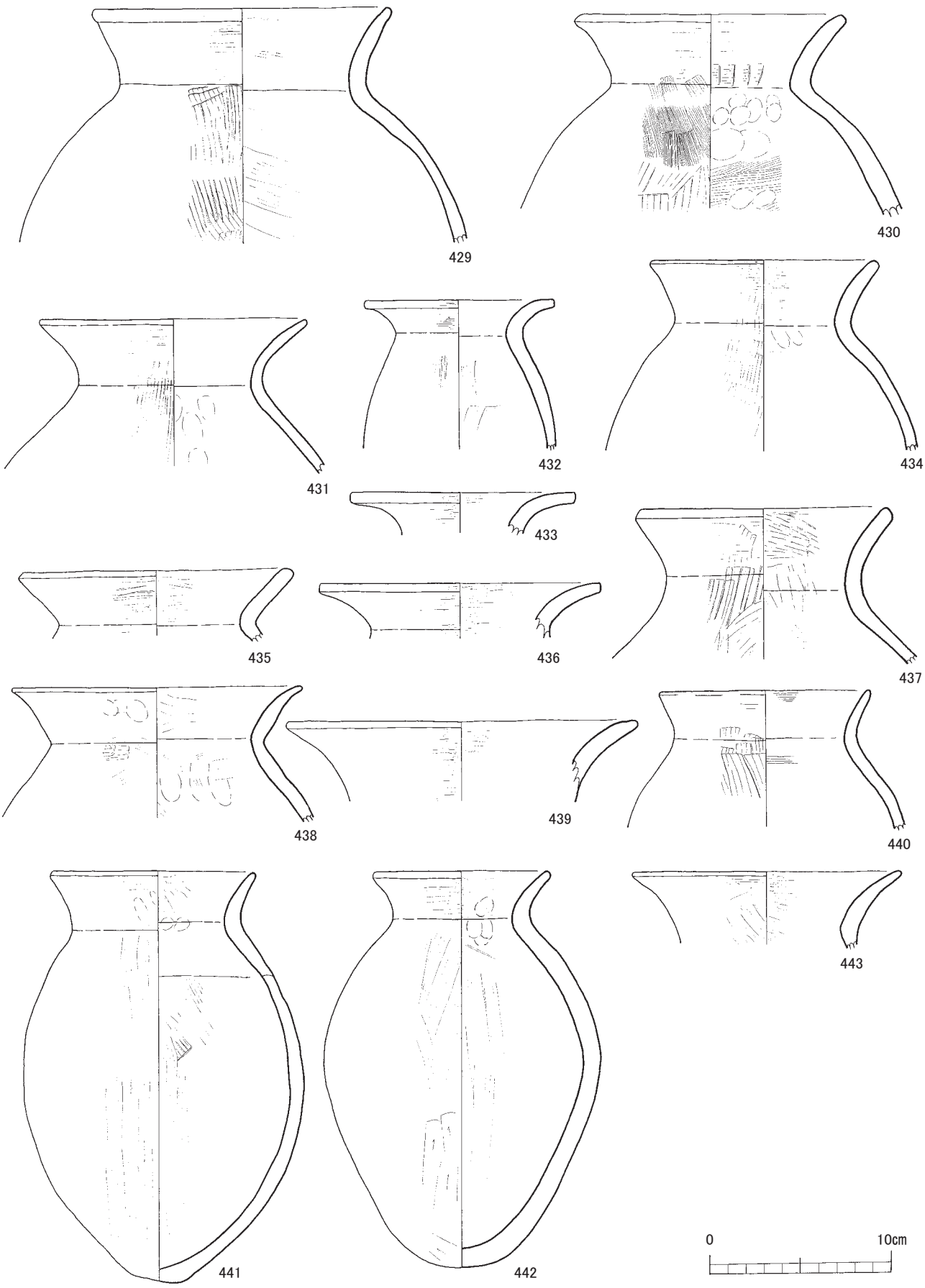
第69図　弥生・古墳時代遺物（23）甕形土器脚部



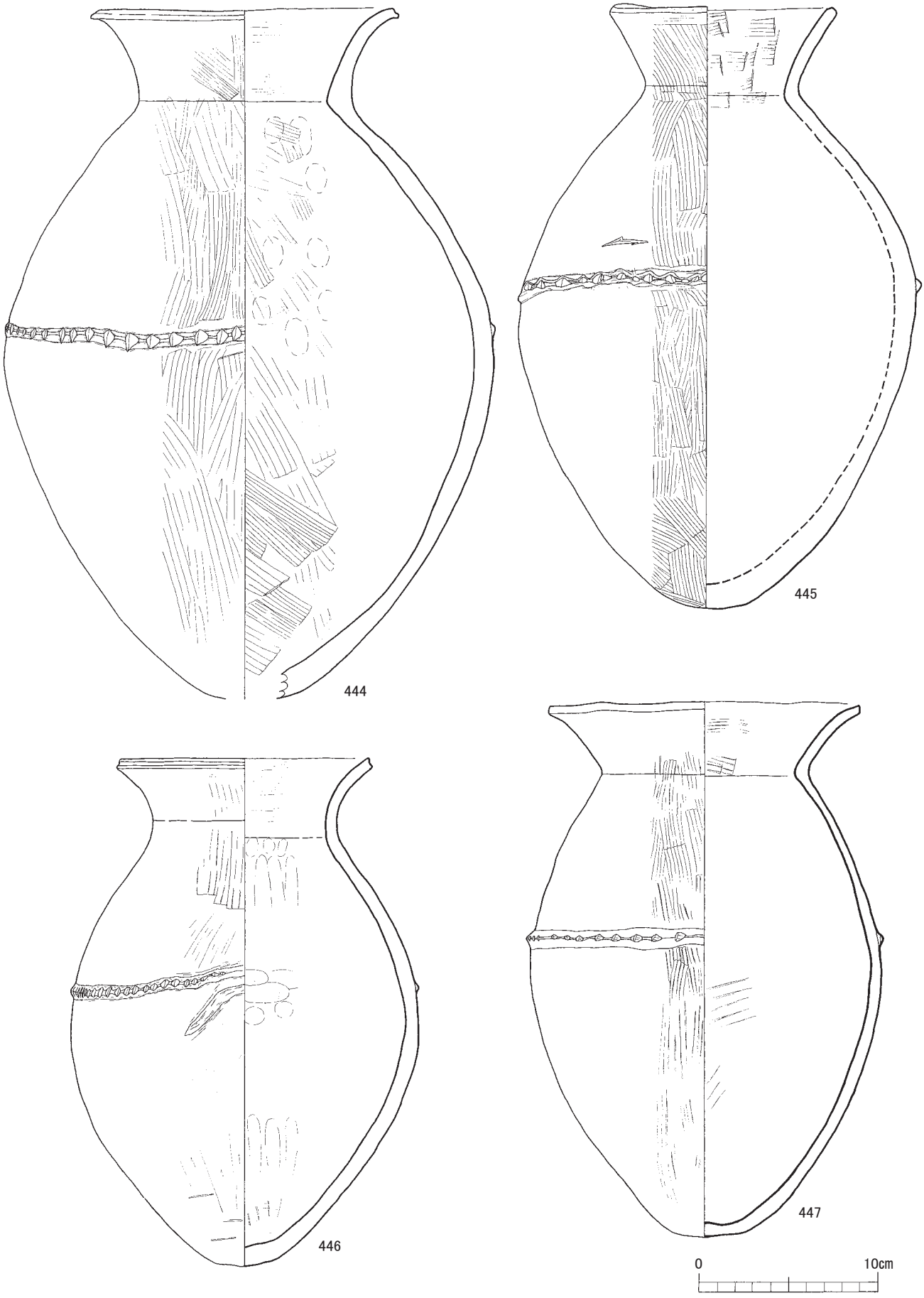
第70図　弥生・古墳時代遺物（24）壺形土器



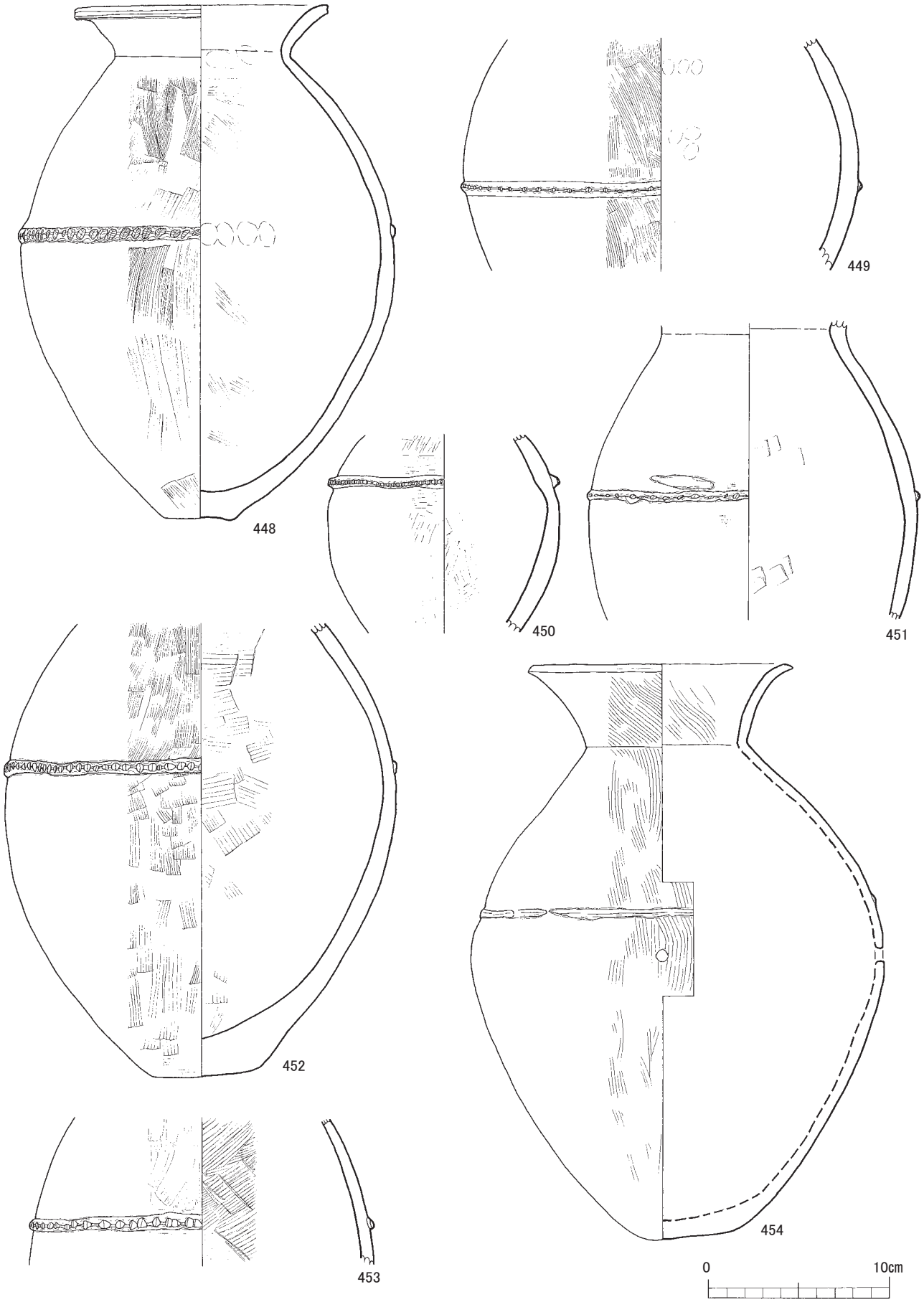
第71図　弥生・古墳時代遺物（25）壺形土器



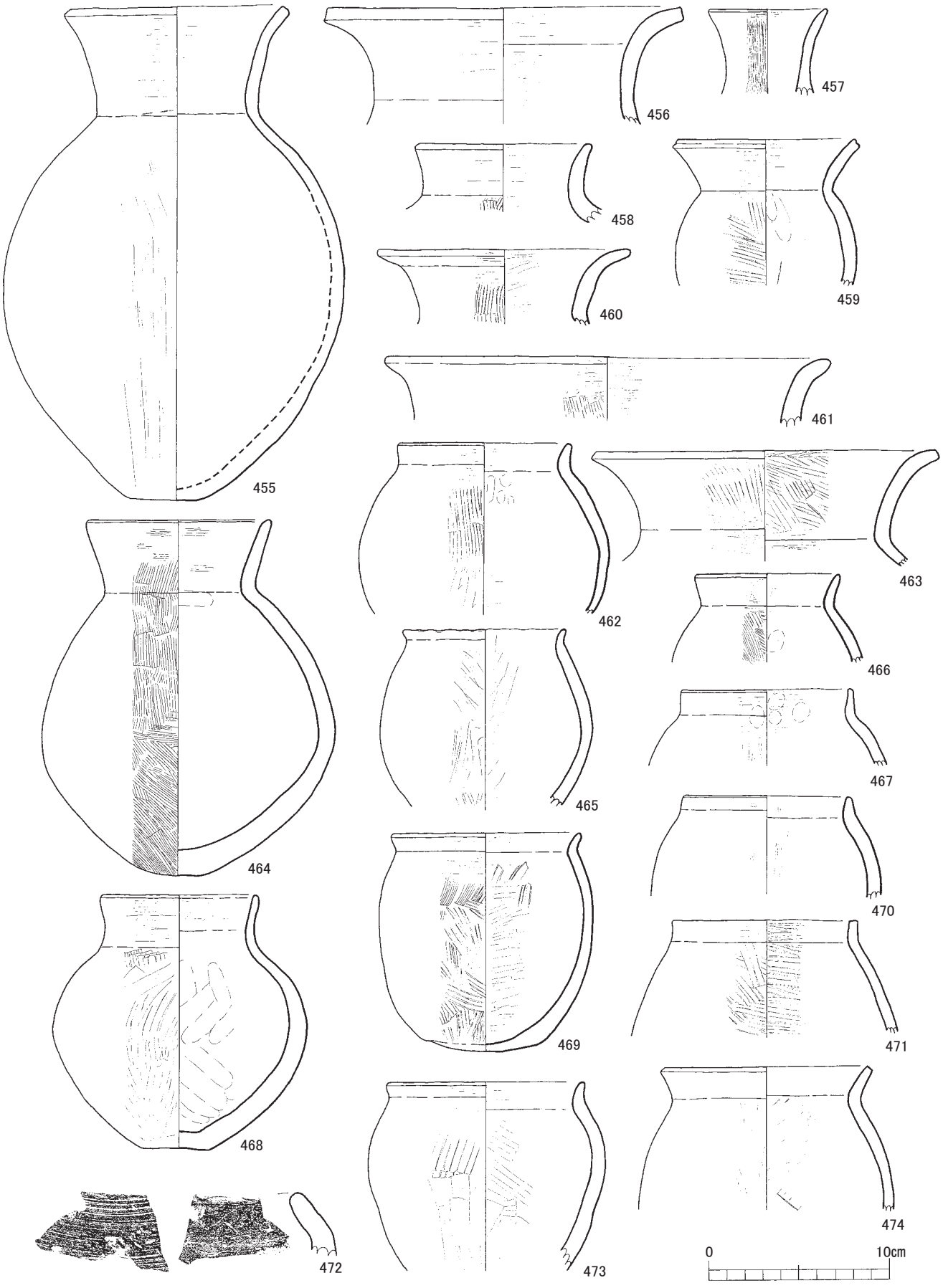
第72図　弥生・古墳時代遺物（26）壺形土器



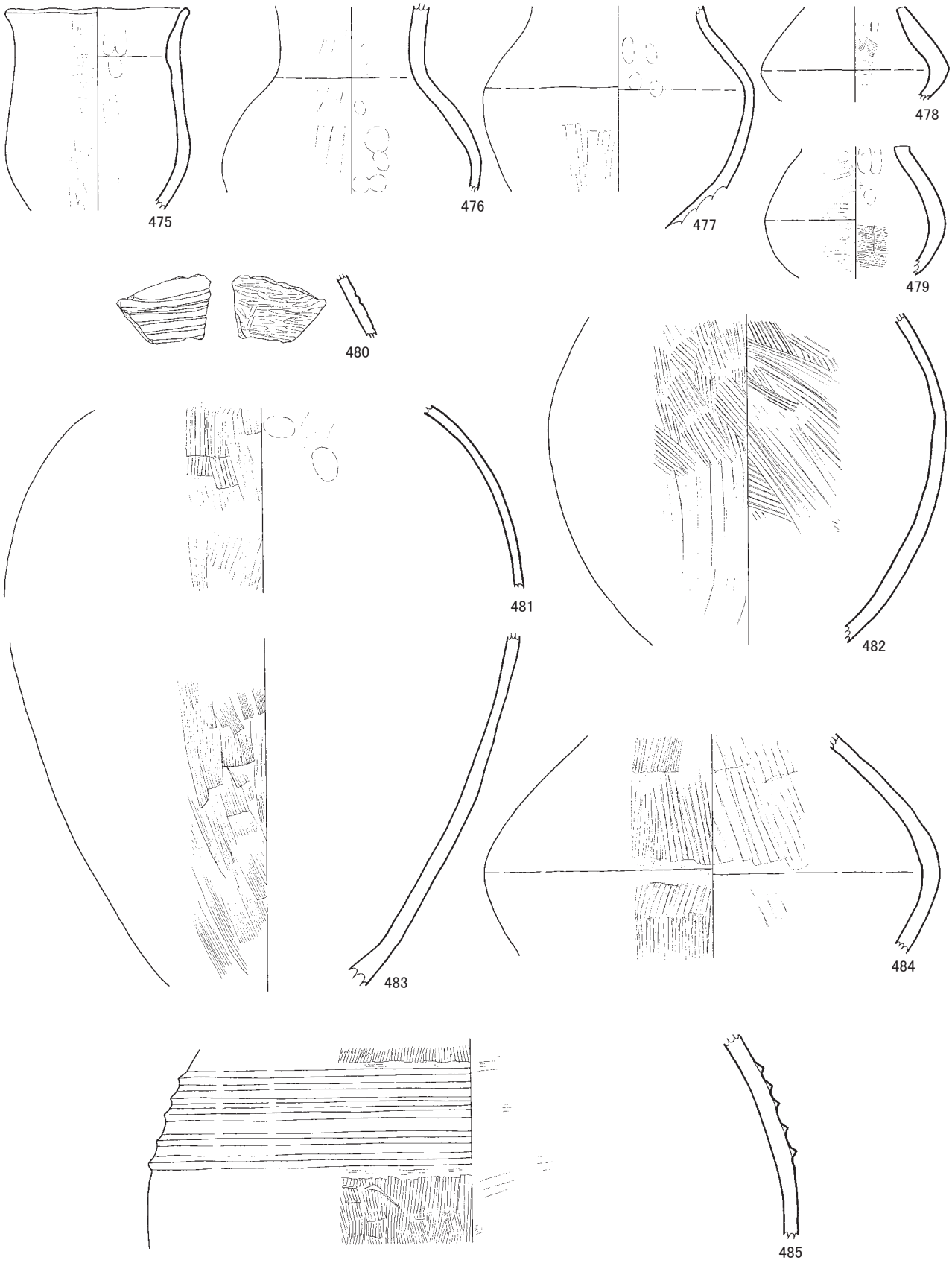
第73図　弥生・古墳時代遺物（27）壺形土器



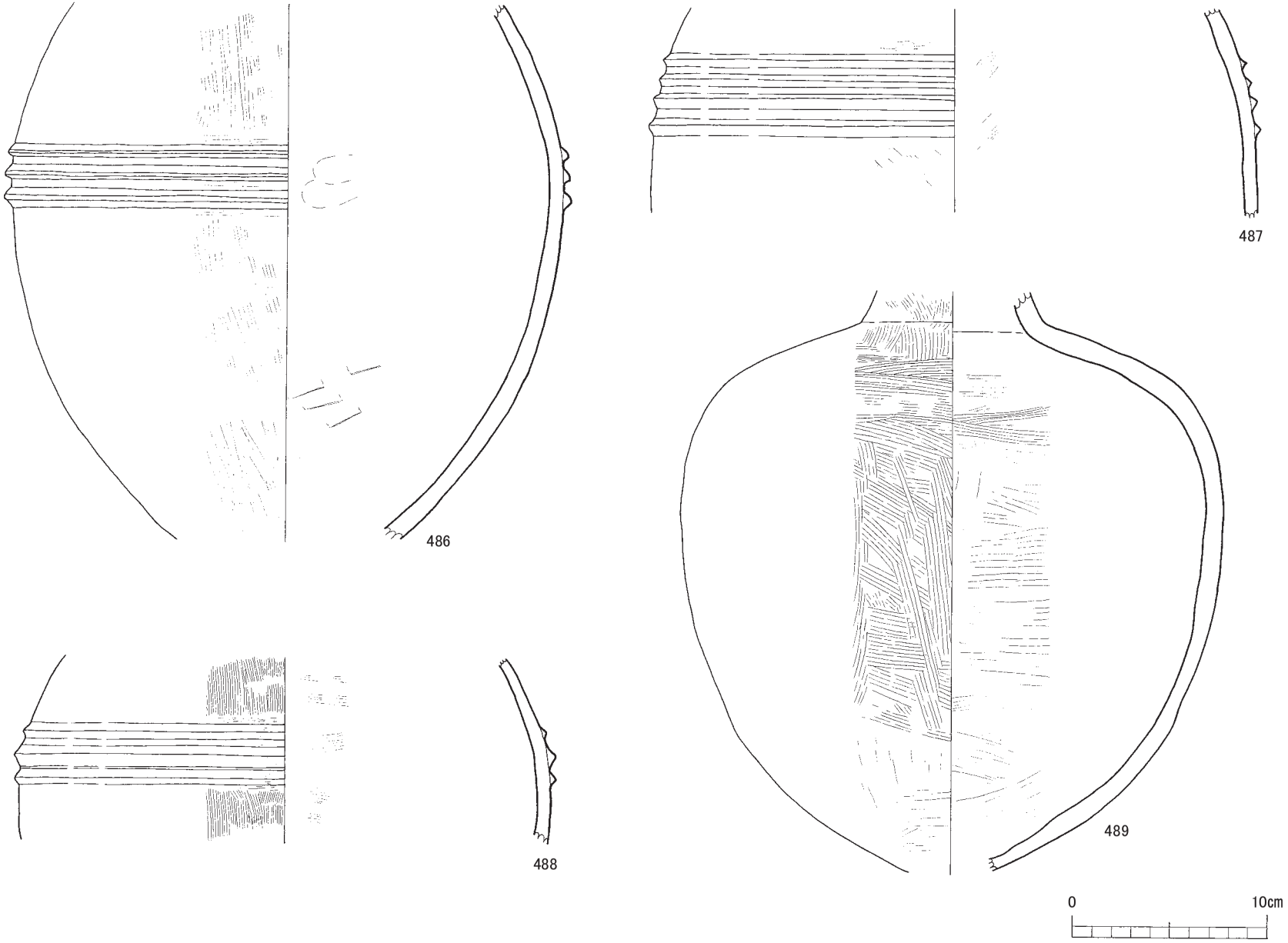
第74図　弥生・古墳時代遺物（28）壺形土器



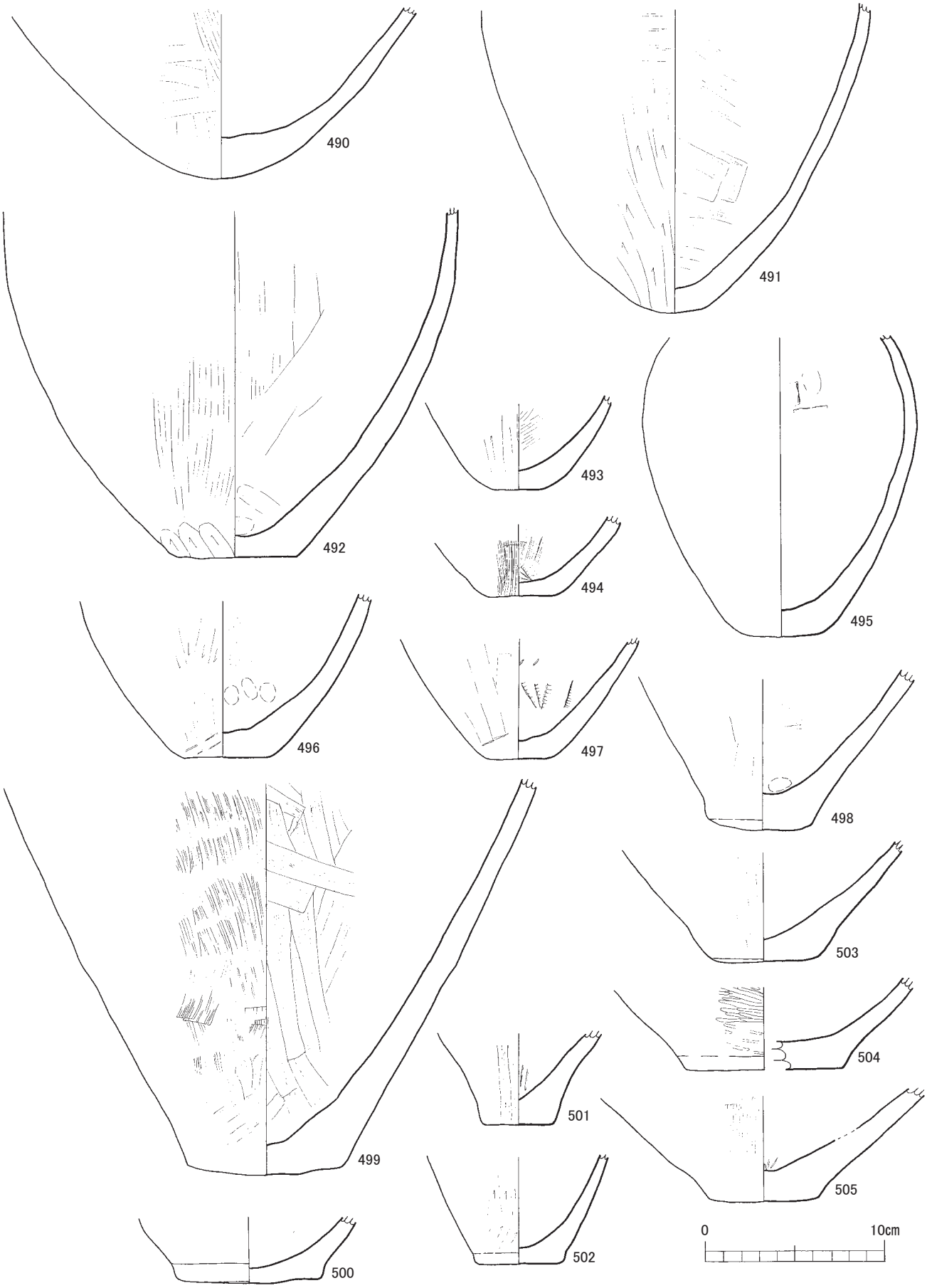
第75図　弥生・古墳時代遺物（29）壺形土器口縁部



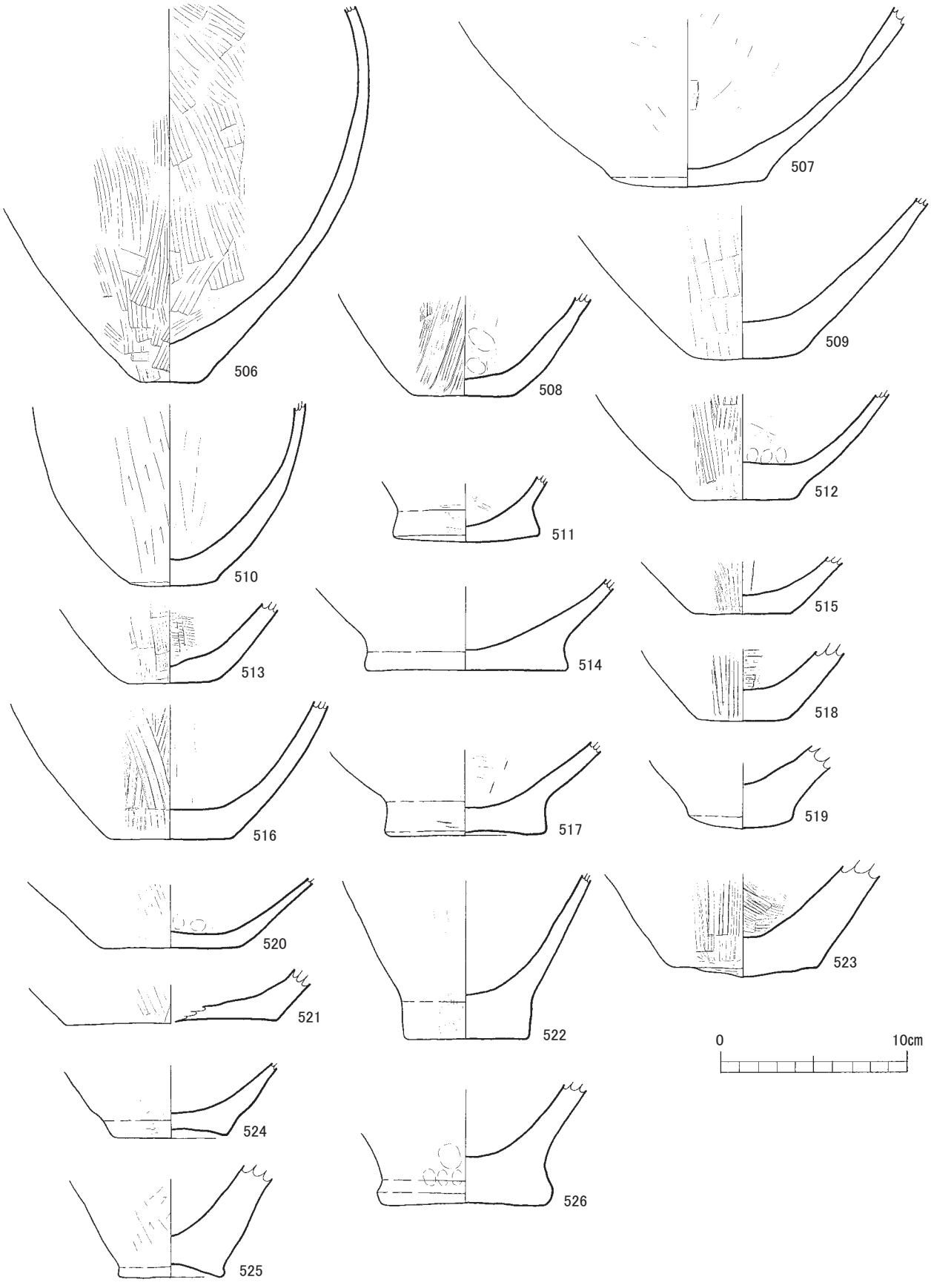
第76図　弥生・古墳時代遺物（30）壺形土器胴部



第77図　弥生・古墳時代遺物（31）壺形土器胴部



第78図　弥生・古墳時代遺物（32）壺形土器胴部・底部



第79図　弥生・古墳時代遺物（33）壺形土器底部

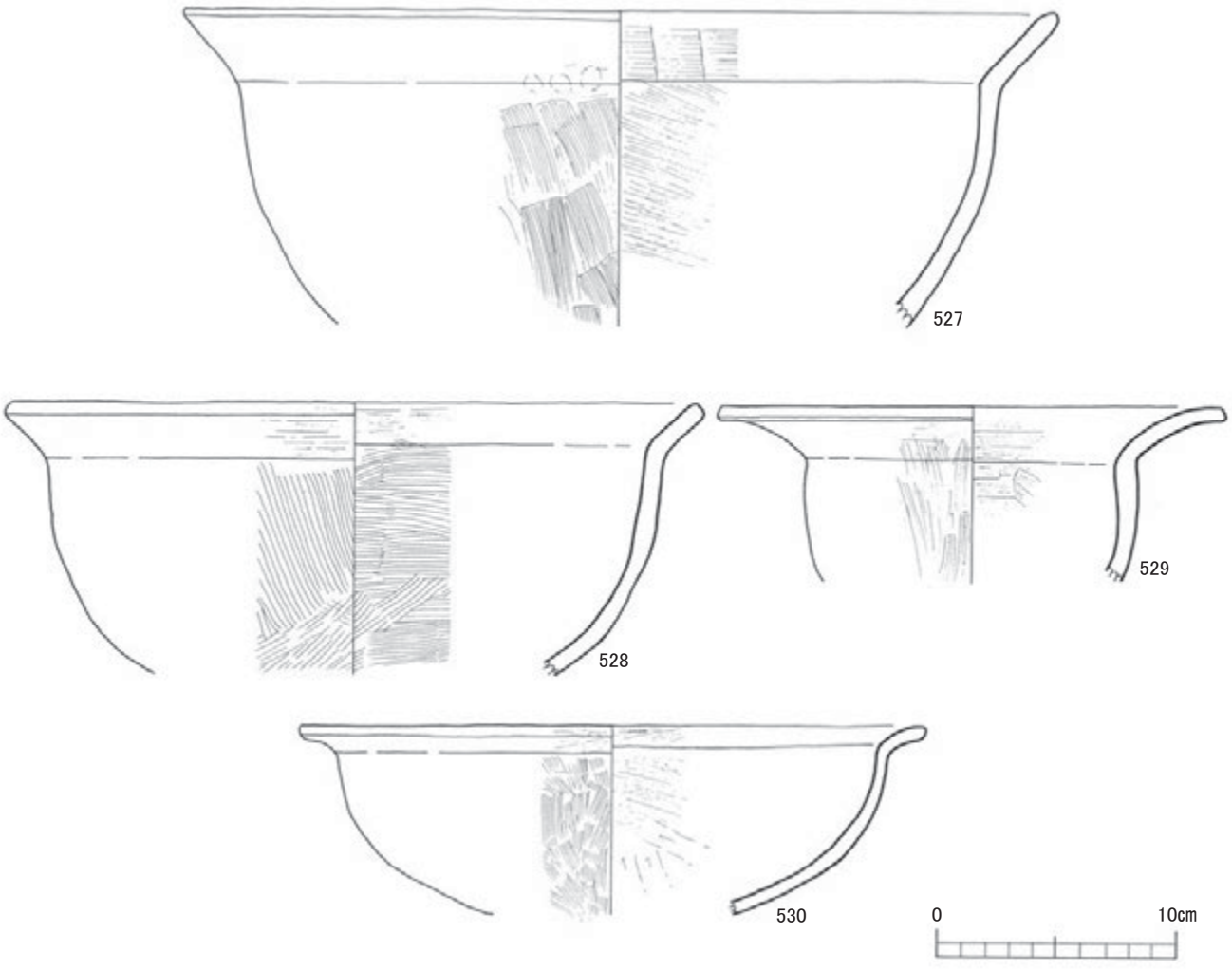
形を呈する胴部片である。484はそろばん玉状を呈する胴部である。485～487は胴部に多状の突帯が施されている。489は頸部がせまく，胴部最大径が上方にあり大きく横に広がるタイプの壺である。490～526は胴部～底部である。丸底（490・491），平底（492～497，508，513，515・516，518，520），凸レンズ状に突出するもの（498～507，509・510，512，519，523），脚台状のもの（511，514，517，522，526），上げ底状のもの（521，524・525）がある。

鉢形土器（第80図527～第82図556）

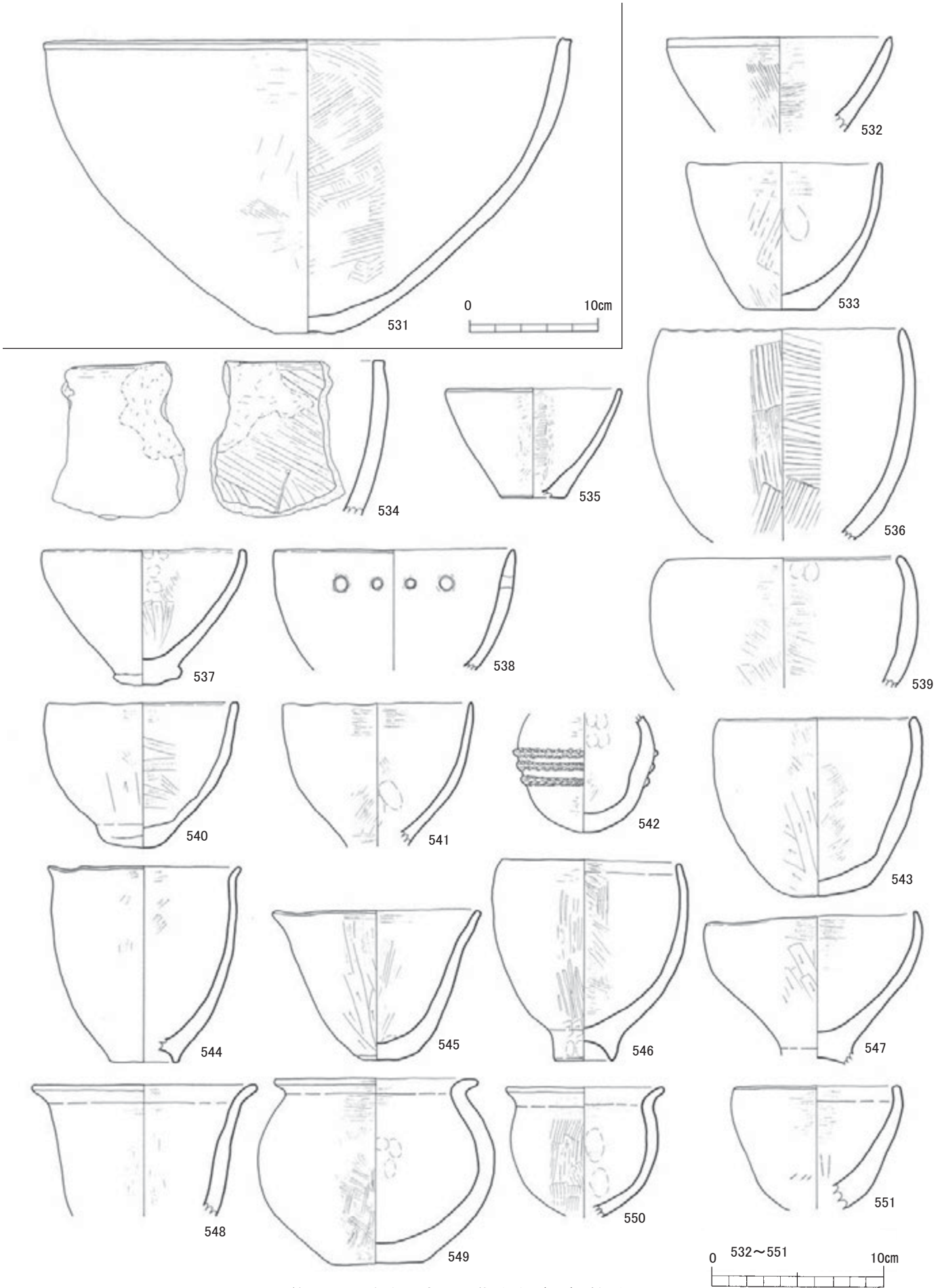
527～530は口縁部が屈曲する鉢形土器である。531～535，537・538，540・541，545は口縁部がまっすぐ外反する器形である。531は口径21㎝の大型の鉢形土器である。口唇部は水平な面を形成し，ナデられてわずかにくぼんでいる。底部は狭い平底である。534は口縁部内外面に粘土を追加した痕跡がみられる。粘土を貼り付けて補修したと考えられる。537，540は底部にこぶ状の突起がみられる。538は上部に２か所の穿孔がみられる。545は，口縁部が屈曲せず，底部から直線的に立ち上がり，口縁部に至るものである。544，548～550は口縁端部が外側へ屈曲する。544は底部が上げ底状となっている。549の口縁部は短く端部は丸みを帯びている。胴部は丸く膨らみ平底を呈する。536，539，542，543，546，547，551は，口縁部が内弯する。542は胴部に絡縄突帯が３条施されている。内面に指頭圧痕がみられ，壺型を呈する器形も考えられる。546の底部は脚台状を呈する。胴部下位にミガキ状のナデ調整がみられる。552～556は台付の鉢形土器である。553～555は脚台部分は手づくね風に仕上げられている。556は口唇部は丁寧にナデられ矩形を呈する。

手捏ね土器（第82図557～573）

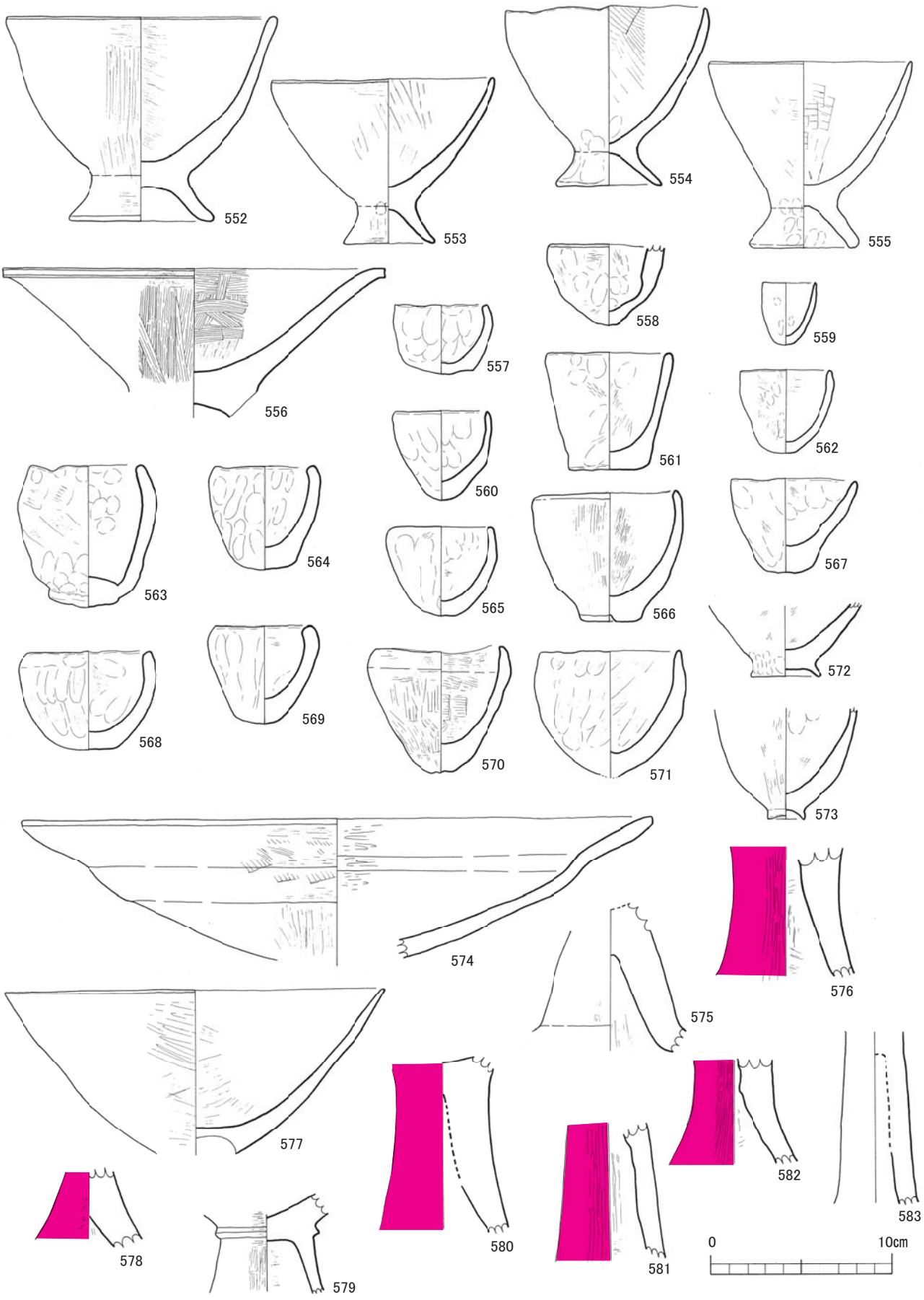
口縁部が内弯するもの（557，560，562～566，568～571），口縁部が外反するもの（558，559，561，567），脚台状の底部を持つもの（572・573）がある。



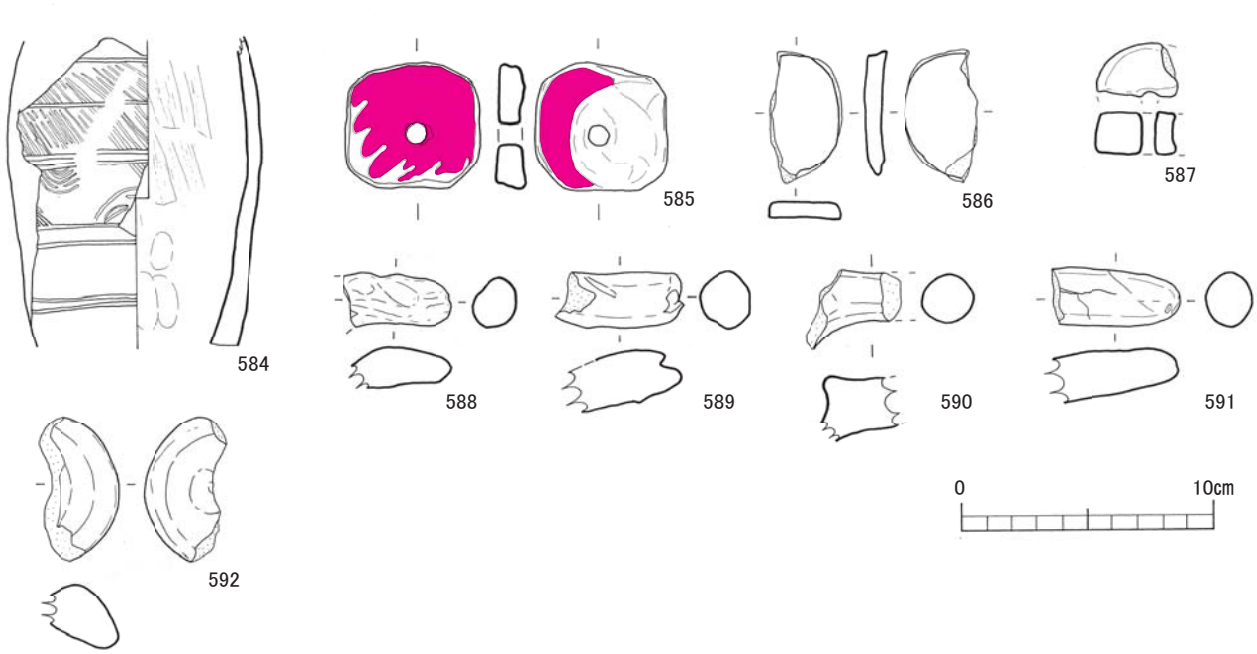
第80図　弥生・古墳時代遺物（34）鉢形土器



第81図　弥生・古墳時代遺物（35）鉢形土器



第82図　弥生・古墳時代遺物（36）その他



第83図　弥生・古墳時代遺物（37）土製品等

高坏（第82図574～583）

574，577は坏部である。574は内外面に段を有する器形である。577の口縁は直線的に外反し，端部は細く丸みを帯びる。575・576，578～583は脚部である。579は付け根部分に突帯が一条施されている。582はハケ目が施され，576，581，583はミガキ調整がなされている。

土製品等（第83図584～592）

584の土器片は，横方向の沈線を数条施し，斜め方向の沈線と重弧文が施されている。585～587は紡錘車である。585は高坏の坏底部を転用したものと思われる。588～591は棒状を呈しているが，匙形土製品の一部であろう。592は円形の土製品で中央部がくぼむ形態を呈するが器種・用途等は不明である。

砥石（第84図593・594，596，597）

593は砂岩製の砥石で，二面に研磨痕がみられる。594も砂岩製の砥石である。正面には研磨による稜が形成され，鉄製品を研磨したと思われる。596は一部欠損しているが正面中央部から上面，裏面にかけて縦状に敲打による溝状のくぼみが巡る。砥石として使用したのち，大型の石錘として使用した可能性が考えられる。砂岩製である。597は中央部が湾曲しており，よく使用されている砂岩製の砥石で，砥面にはやりがんな等の鉄製品の研磨痕と思われる細いU字状のくぼみがみられる。正面と裏面には敲打痕がみられることから，台石としても使用したことが想定される。

樹皮布加工品（第84図595）

小型の砧状を呈し，握手部分には敲打による形成が認められる。砂岩製の樹皮布加工品と考えられる。

穿孔用石器（第84図598）

砂岩製で表裏に平坦面をもつ棒状の石器で先端は細く尖り，横方向の擦痕が残る穿孔用石器である。

石皿（第84図599，600）

599は砂岩の石皿で部分的に敲打痕がみられることから，台石としても使用したことが考えられる。600は砂岩製でもろく，断面が五角形を呈し，一面に研磨痕がみられる。裏面には直径１㎝，深さ５㎜程度のくぼみが認められる。



第84図　弥生・古墳時代遺物（38）石器

表７　弥生・古墳時代遺物観察表（１）

挿図	番号	出土区	層位	器種	類	部位	色調		調整		胎土						備考
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	ウンモ	小礫	その他	
47	136	表採	表採	壺形土器	Ⅰ	口縁	橙色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	条痕後ナデ	○	○	○	－	－	－	刻目突帯
	137	Ｔ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅰ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ後指頭押圧	○	○	○	－	－	－	刻目突帯
	138	Ｓ・Ｔ－12・13	Ⅵ	壺形土器	Ⅰ	口縁	にぶい黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ後指頭押圧	○	○	○	－	○	－	刻目突帯
	139	Ｔ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅰ	口縁	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ後指頭押圧	○	○	○	－	－	－	刻目突帯
48	140	Ｑ－12	Ⅴ	壺形土器	Ⅰ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	茶粒	刻目突帯
	141	Ｑ－10	Ⅵ	壺形土器	Ⅰ	口縁	橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	刻目突帯
	142	Ｑ－11	Ⅵ	壺形土器	Ⅰ	口縁～胴部	橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	茶粒	刻目突帯
	143	Ｑ－11	Ⅵ	壺形土器	Ⅰ	口縁	橙色	にぶい黄橙色	条痕	ナデ	○	○	－	－	－	－	刻目突帯
	144	Ｓ－11	Ⅵ	壺形土器	Ⅰ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	刻目突帯
	145	Ｕ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅰ	口縁	橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	茶粒	刻目突帯
	146	Ｑ－10	Ⅵ	壺形土器	Ⅰ	口縁	橙色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	刻目突帯
	147	Ｒ・Ｓ－10・11	Ⅵ	壺形土器	Ⅰ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	茶粒	刻目突帯
	148	Ｔ－12	Ⅴｂ下	壺形土器	Ⅰ	口縁	灰黄色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	刻目突帯
	149	Ｑ－10	Ⅵ	壺形土器	Ⅰ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	刻目突帯
	150	Ｕ－14	Ⅳ下	壺形土器	Ⅰ	口縁	にぶい橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	刻目突帯
	151	Ｏ－11	Ⅵ	壺形土器	Ⅰ	口縁	にぶい褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	刻目突帯
49	152	Ｔ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅱ	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい橙色	ハケ目後ナデ	ナデ後指頭押圧	○	○	○	－	－	－	－
	153	Ｓ・Ｔ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅱ	口縁～胴部	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ目後ナデ	ナデ後指頭押圧	○	○	○	－	－	－	－
	154	Ｓ－11・12	Ⅵ	壺形土器	Ⅱ	口縁	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	ハケ目	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	155	Ｋ－６	Ⅲｂ	壺形土器	Ⅱ	口縁～胴部	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	茶粒	胴部沈線
	156	Ｓ－11	Ⅵ	壺形土器	Ⅱ	口縁	にぶい橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ後指頭押圧	○	○	○	－	－	－	－
	157	Ｓ－11	Ⅴｂ	壺形土器	Ⅱ	口縁	褐色	明褐色	ハケ目	ハケ目・ナデ	○	○	－	－	－	茶粒	－
	158	Ｔ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅱ	口縁	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	胴部沈線
	159	Ｓ－13	Ⅵ	壺形土器	Ⅱ	口縁～胴部	にぶい赤褐色	明赤褐色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	胴部沈線
	160	Ｔ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅱ	口縁	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	胴部沈線
	161	Ｓ－11	Ⅵ	壺形土器	Ⅱ	口縁	黒褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	胴部沈線
	162	Ｓ－12	Ⅵ下	壺形土器	Ⅱ	口縁	明赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	胴部沈線
	163	Ｓ－13	Ⅵ	壺形土器	Ⅱ	口縁	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	○	－	－	胴部突帯
	164	Ｔ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅱ	口縁	黒褐色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	165	Ｓ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅱ	口縁	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ後指頭押圧	○	○	○	－	－	－	突帯1条
	166	Ｓ・Ｔ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅱ	口縁	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
50	167	Ｕ－13	Ⅳ下	壺形土器	Ⅱ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	ヘラケズリ	○	○	－	－	○	－	口唇部に刻目
	168	Ｍ－８	Ⅳ	壺形土器	Ⅱ	口縁	褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	口縁部に沈線・刻目
	169	Ｎ－８	Ⅳ	壺形土器	Ⅱ	口縁	にぶい赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	口唇部に刻目
	170	Ｓ・Ｑ－11	Ⅵ・Ⅴ	壺形土器	Ⅲ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	○	－	－	－
	171	Ｗ－13	Ⅵ	壺形土器	Ⅲ	口縁	黒褐色	にぶい赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	172	Ｐ－10	Ⅴｂ	壺形土器	Ⅲ	口縁	にぶい黄橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	173	Ｑ－10	Ⅵ	壺形土器	Ⅲ	口縁	暗褐色	暗褐色	ナデ	ナデ後指頭押圧	○	○	－	－	－	－	－
	174	Ｔ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅲ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	175	Ｕ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅲ	口縁	にぶい橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	176	Ｐ－11	Ⅴ	壺形土器	Ⅲ	口縁	にぶい黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	177	Ｙ－14	Ⅵ	壺形土器	Ⅲ	口縁	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	178	Ｒ－11	Ⅵ	壺形土器	Ⅲ	口縁	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	179	Ｓ－11	Ⅵ	壺形土器	Ⅲ	口縁	浅黄色	灰黄色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	180	Ｖ－15	Ⅵ	壺形土器	Ⅲ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
51	181	Ｓ－11	Ⅵ	壺形土器	Ⅲ	口縁	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	182	Ｕ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅲ	口縁	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	○	－	－	－
	183	Ｔ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅲ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	184	Ｔ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅲ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	185	Ｕ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅲ	口縁	浅黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	板ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	186	Ｘ－14	Ⅵ	壺形土器	Ⅲ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	187	Ｔ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅲ	口縁	にぶい黄橙色	浅黄色	ナデ	ハケ目	○	○	○	－	○	－	－
	188	Ｔ－13	Ⅵ	壺形土器	Ⅲ	口縁	浅黄橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	○	－	－	－
	189	Ｗ－13	Ⅴｂ	壺形土器	Ⅲ	口縁	にぶい黄色	黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	190	Ｔ－13	Ⅵ	壺形土器	Ⅲ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	191	Ｔ－13	Ⅵ	壺形土器	Ⅲ	口縁	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	192	Ｍ・Ｎ－９	Ⅴ	壺形土器	Ⅲ	口縁	橙色	橙色	ナデ	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	193	Ｔ－13	Ⅵ	壺形土器	Ⅲ	口縁	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	－
52	194	Ｓ－11・12	Ⅵ	壺形土器	Ⅳ	口縁	黒色	にぶい黄橙色	ミガキに近いナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	穿孔
	195	Ｓ－11	Ⅵ	壺形土器	Ⅳ	口縁	にぶい黄橙色	赤褐色	板ナデ	ナデ後指頭押圧	○	○	－	－	－	－	口縁上部沈線4条
	196	Ｔ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅳ	口縁	明赤褐色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	外面赤色塗料
	197	Ｓ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅳ	口縁	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	198	Ｗ－15	Ⅵａ	壺形土器	Ⅳ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	○	－	－	赤色塗料
	199	Ｓ－12	Ⅴｂ	壺形土器	Ⅳ	口縁	明赤褐色	にぶい黄橙色	ヘラミガキ	ナデ	○	○	－	－	－	－	赤色塗料
	200	Ｎ－９	Ⅴ	壺形土器	Ⅳ	口縁	明赤褐色	橙色	ヘラミガキ	ナデ	○	○	－	－	－	－	赤色塗料
	201	Ｘ－14	Ⅵ	壺形土器	Ⅳ	口縁	淡黄色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	202	Ｐ－10	Ⅳ	壺形土器	Ⅳ	口縁	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	○	－	－	－
	203	Ｕ－13	Ⅵ	壺形土器	Ⅳ	口縁	赤褐色	にぶい橙色	ヘラミガキ	ナデ	○	○	○	－	－	－	赤色塗料
	204	Ｔ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅳ	口縁	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	205	Ｖ－13	Ⅳ	壺形土器	Ⅳ	口縁	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	206	Ｔ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅳ	胴部	赤褐色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	赤色塗料，突帯
	207	Ｒ－11	Ⅵ	壺形土器	Ⅳ	胴部	赤褐色	にぶい橙色	ナデ後ミガキ	ナデ	○	○	－	－	－	－	赤色塗料，突帯
53	208	Ｓ－12	Ⅴｂ	壺形土器	Ⅴａ	口縁～胴部	にぶい褐色	明黄褐色	ハケ目後指頭押圧	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	209	Ｐ－10	Ⅴ	壺形土器	Ⅴａ	口縁～胴部	明黄褐色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	210	Ｔ－13	Ⅳ下	壺形土器	Ⅴａ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ハケ目・ナデ	○	○	○	－	－	－	内側より穿孔痕
	211	Ｑ－11	Ⅴｂ下	壺形土器	Ⅴａ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	212	Ｙ－12	Ⅳ	壺形土器	Ⅴａ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	ナデ	○	○	－	－	－	－	炭化物付着
	213	Ｔ－13	Ⅵ	壺形土器	Ⅴａ	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
54	214	Ｘ－14	Ⅲｂ	壺形土器	Ⅴａ	口縁	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	215	Ｖ－14	Ⅵ	壺形土器	Ⅴａ	口縁	浅黄橙色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	216	Ｒ－11	Ⅵ	壺形土器	Ⅴａ	口縁	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	○	－	－	－
	217	Ｓ－12	Ⅵ	壺形土器	Ⅴａ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－

表８　弥生・古墳時代遺物観察表（２）

挿図	番号	出土区	層位	器種	類	部位	色調		調整		胎土						備考
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	ウンモ	小礫	その他	
54	218	Ｖ－15	Ⅳ	壺形土器	Ｖａ	口縁	浅黄色	にぶい黄色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	219	Ｖ－13	Ⅳ下	壺形土器	Ｖａ	口縁～胴部	橙色	橙色	ハケ目	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	220	Ｓ－12	Ⅳ下	壺形土器	Ｖａ	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	221	Ｐ－10	Ⅳ	壺形土器	Ｖａ	口縁～胴部	橙色	黄橙色	ハケ目後ナデ	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	222	Ｓ－12	Ｖｂ	壺形土器	Ｖａ	口縁～胴部	橙色	黄橙色	ハケ目	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	223	Ｓ－12	Ⅳ下	壺形土器	Ｖａ	口縁～胴部	浅黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	ハケ目	○	○	－	－	○	－	－
	224	Ｓ－12	Ⅵ	壺形土器	Ｖａ	口縁～胴部	橙色	橙色	ハケ目	板ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	225	Ｑ－10	Ⅳ下	壺形土器	Ｖａ	口縁～胴部	にぶい黄色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	－	－	－	－	炭化物付着
	226	Ｑ－11	Ⅵ	壺形土器	Ｖａ	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	227	Ｔ－12	Ⅵ	壺形土器	Ｖａ	口縁～胴部	浅黄橙色	浅黄橙色	ハケ目・ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
55	228	Ｙ－12	Ⅳ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい橙色	橙色	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	ふきこぼれ痕
	229	Ｘ－13	Ⅳ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	板ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	230	Ｓ－13	Ⅴ	壺形土器	Ｖｂ	口縁	橙色	橙色	ハケ目	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	231	Ｓ－12	Ⅵ	壺形土器	Ｖｂ	口縁	橙色	にぶい橙色	ハケ目	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	○	茶粒	－
	232	Ｔ－13	Ⅳ下	壺形土器	Ｖｂ	口縁	にぶい褐色	にぶい橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	233	Ｖ－14	Ⅳ下	壺形土器	Ｖｂ	口縁	橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	234	Ｔ－13	Ｖｂ上	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	明黄褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	235	Ｑ－10	Ｖｂ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	暗赤褐色	明黄褐色	ハケ目	板ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	236	Ｔ－12	Ⅳ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	黄褐色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	237	Ｘ－13	Ⅳ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	橙色	橙色	ハケ目	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	238	Ｓ－12	Ⅵ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい橙色	橙色	ハケ目後ナデ	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
56	239	Ｕ－12	Ⅳ	壺形土器	Ｖｂ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	板ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	240	Ｒ－10	Ｖｂ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	暗赤褐色	黒褐色	ハケ目	板ナデ	○	○	○	－	○	－	炭化物付着
	241	Ｙ－12	Ⅳ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	橙色	橙色	ハケ目後ナデ	ナデ・指頭押圧	○	○	－	－	－	－	－
	242	Ｔ－12	Ⅳ下	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	灰褐色	黄橙色	ハケ目	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	243	Ｙ－13	Ⅳ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	暗褐色	橙色	ハケ目	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	244	Ｒ－11	Ｖｂ	壺形土器	Ｖｂ	口縁	にぶい黄橙色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	○	○	－	－	○	－	－
	245	Ｓ－13	Ⅴ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ハケ目	○	○	○	－	－	茶粒	－
	246	Ｑ－11	Ⅴ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい橙色	にぶい褐色	ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	○	○	○	－	－
	247	Ｓ－12	Ⅵ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	赤褐色	にぶい赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	248	Ｓ－13	Ⅵ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ目	ハケ目後ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	249	Ｓ－12	Ⅵ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	浅黄橙色	浅黄橙色	板ナデ・ヘラケズリ	板ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	250	Ｓ－12	Ⅵ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい赤褐色	にぶい橙色	ナデ・指頭押圧	ハケ目	○	○	－	－	○	－	－
57	251	Ｕ－13	Ｖｂ上	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	暗褐色	明赤褐色	ハケ目	板ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	252	Ｓ－12	Ｖｂ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	253	Ｖ－13	Ⅳ下	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ナデ・指頭押圧	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	254	Ｓ－12	Ⅵ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	255	Ｐ－9	Ⅴ下	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	浅黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	ハケ目・ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	256	Ｓ－12	Ⅵ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	明赤褐色	褐色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	257	Ｓ－12	Ⅵ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	258	Ｔ－13	Ⅳ下	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	明赤褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	259	Ｔ－12	Ⅳ下	壺形土器	Ｖｂ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ハケ目	○	○	○	－	○	－	－
	260	Ｓ－12・13	Ⅴ・Ⅵ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい褐色	にぶい橙色	ナデ	ハケ目	○	○	－	－	○	－	－
58	261	Ｍ－7	Ⅴ	壺形土器	Ｖｂ	完形	明赤褐色	にぶい赤褐色	板ナデ	板ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	262	Ｓ－12	Ⅵ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	赤褐色	にぶい赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	263	Ｓ－12	Ｖｂ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい黄褐色	黄褐色	ハケ目	ハケ目	○	○	－	－	○	－	－
	264	Ｓ－13	Ⅴ	壺形土器	Ｖｂ	口縁	にぶい橙色	橙色	ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	265	Ｓ－11	Ｖｂ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	黒褐色	黒褐色	ハケ目後ナデ	ハケ目	○	○	○	－	○	－	－
	266	Ｗ－13	Ｖｂ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい黄色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ・指頭押圧	○	○	－	－	－	－	ふきこぼれ痕
	267	Ｔ－12	Ⅵ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ・ヘラケズリ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	○	茶粒	－
	268	Ｘ－13	Ⅳ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	褐色	橙色	ハケ目	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	269	Ｒ－12	Ⅳ	壺形土器	Ｖｂ	口縁	にぶい黄褐色	にぶい橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	270	Ｓ－12	Ⅵ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	明黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	茶粒	－
	271	Ｔ－13	Ⅳ下	壺形土器	Ｖｂ	口縁	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
59	272	Ｘ－13	Ⅳ	壺形土器	Ｖｂ	完形	橙色	赤褐色	ヘラケズリ・板ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	273	Ｓ－13	Ⅴ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	浅黄橙色	浅黄橙色	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	274	Ｌ－8	Ⅴ	壺形土器	Ｖｂ	完形	にぶい橙色	橙色	ハケ目後ヘラケズリ	ハケ目	○	○	○	－	○	－	－
60	275	Ｕ－12	Ⅳ下	壺形土器	Ｖｂ	口縁	暗褐色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	276	Ｐ・Ｒ－11	Ⅳ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	277	Ｓ－13	Ⅵ	壺形土器	Ｖｂ	口縁	橙色	にぶい橙色	ハケ目	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	278	Ｗ－13	Ⅳ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	明黄褐色	にぶい黄橙色	ハケ目	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	279	Ｗ－14	Ⅳ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	橙色	橙色	板ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	茶粒	ふきこぼれ痕
	280	Ｒ－12	Ｖｂ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	暗褐色	浅黄橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	281	Ｐ－10	Ⅳ下	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	灰褐色	にぶい橙色	ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	282	Ｖ－14	Ｖｂ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	暗褐色	にぶい赤褐色	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	283	Ｙ－14	Ⅲｂ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	橙色	橙色	ハケ目	ハケ目	○	○	－	－	○	－	－
	284	Ｑ－10	Ｖｂ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	明赤褐色	にぶい黄橙色	ハケ目	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	285	Ｕ－14	Ⅳ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい褐色	にぶい黄褐色	ハケ目	ハケ目	○	○	－	－	○	－	－
	286	Ｐ－9	Ⅳ	壺形土器	Ｖｂ	口縁	暗赤褐色	にぶい橙色	ハケ目	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
61	287	Ｓ－13	Ⅴ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい黄橙色	浅黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ・ヘラケズリ	○	○	○	－	－	－	－
	288	Ｑ－10	Ⅳ下	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄色	ハケ目	ハケ目・板ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	289	Ｑ－10	Ｖｂ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい橙色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目後ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	290	Ｓ－13	Ⅴ下	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	浅黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	ハケ目後ナデ	○	○	－	－	－	－	種子圧痕
	291	Ｔ－12	Ⅳ下	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい黄色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	292	Ｔ－12	Ｖｂ上	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	293	Ｓ－13	Ⅵ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヘラケズリ・ナデ	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	294	Ｓ－13	Ⅵ	壺形土器	Ｖｂ	口縁～胴部	暗褐色	にぶい褐色	ハケ目後ナデ	板ナデ	○	○	－	－	○	－	－
62	295	Ｓ－13	Ⅳ	壺形土器	Ｖｂ	完形	橙色	にぶい橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	296	Ｔ－13	Ⅳ	壺形土器	Ｖｃ	口縁	にぶい橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	297	Ｖ－15	Ⅵ	壺形土器	Ｖｃ	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ後指頭押圧	○	○	○	－	○	－	－
	298	Ｊ－6	Ⅲｂ	壺形土器	Ｖｃ	口縁	にぶい褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	299	Ｗ－12	Ⅳ下	壺形土器	Ｖｃ	口縁～胴部	浅黄橙色	明黄褐色	ヘラケズリ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－

表９　弥生・古墳時代遺物観察表（３）

挿図	番号	出土区	層位	器種	類	部位	色調		調整		胎土						備考
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	ウンモ	小礫	その他	
62	300	X－13	Ⅳ	甕形土器	Ⅴc	口縁～胴部	灰色	にぶい黄色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
63	301	X－15	Ⅴ	甕形土器	Ⅴc	口縁～胴部	黒褐色	にぶい褐色	ハケ目	ハケ目	○	○	○	－	－	－	炭化物付着
	302	X－14	Ⅵ	甕形土器	Ⅴc	口縁～胴部	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	303	R－11	Ⅴb	甕形土器	Ⅴc	口縁～胴部	にぶい黄色	にぶい黄色	ハケ目	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	304	Q－10	Ⅳ	甕形土器	Ⅴc	口縁～胴部	にぶい橙色	黄橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	305	V－12	Ⅳ	甕形土器	Ⅴc	口縁～胴部	赤褐色	赤褐色	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	306	T－13	Ⅵ	甕形土器	Ⅴc	口縁～胴部	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	ハケ目	○	○	－	－	－	－	炭化物付着
	307	R－12	Ⅴ	甕形土器	Ⅴc	口縁～胴部	にぶい橙色	橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	炭化物付着
	308	S－13	Ⅳ	甕形土器	Ⅴc	口縁～胴部	にぶい橙色	橙色	ハケ目・ヘラケズリ	ハケメ	○	○	○	－	○	－	－
	309	V－15	Ⅳ下	甕形土器	Ⅴc	完形	浅黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	310	S－12	Ⅵ	甕形土器	Ⅴc	口縁～胴部	にぶい黄褐色	浅黄橙色	ハケ目後板ナデ	ハケ目	○	○	○	－	－	－	胴部穿孔
64	311	X－13	Ⅴb	甕形土器	Ⅴc	口縁～胴部	橙色	浅黄色	板ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	312	S－13	Ⅵ	甕形土器	Ⅴc	口縁～底部	にぶい褐色	にぶい橙色	ケズリ後ナデ	板ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	313	L－8	Ⅴ	甕形土器	Ⅴc	口縁～胴部	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ目	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	○	－	炭化物付着
	314	U－13	Ⅳ	甕形土器	Ⅴc	口縁～胴部	灰褐色	黄褐色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	315	S－12・13	Ⅴ下・Ⅵ	甕形土器	Ⅴc	口縁～胴部	褐色	明褐色	ハケ目	板ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	316	Q－9	Ⅳ	甕形土器	Ⅴc	口縁～胴部	黄褐色	にぶい黄色	ハケ目	ハケ目	○	○	－	－	－	－	－
	317	S－12	Ⅵ	甕形土器	Ⅴc	口縁～胴部	橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	板ナデ	○	○	○	－	－	－	－
65	318	S－12	Ⅵ	甕形土器	Ⅴc	口縁～胴部	橙色	橙色	ハケ目	ハケ目	○	○	○	－	○	－	－
	319	X－13	Ⅴb	甕形土器	Ⅴc	口縁～胴部	にぶい黄橙色	黄橙色	板ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	－
66	320	T－12	Ⅳ下	大甕	－	口縁～胴部	にぶい橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	○	○	－	－
	321	W－15	Ⅳ	大甕	－	口縁～胴部	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ目	板ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	322	S－11	Ⅳ下	大甕	－	口縁	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	323	Q－10	Ⅴb	大甕	－	口縁	にぶい橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
67	324	U－14	Ⅴb	大甕	－	口縁～胴部	橙色	橙色	ハケ目	ハケ目・ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	325	U－14	Ⅴb	大甕	－	口縁～胴部	明赤褐色	明赤褐色	ハケ目後ナデ	板ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	326	V－14	Ⅳ	大甕	－	口縁～胴部	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ目	ハケ目後ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	327	U－13	Ⅳ下	大甕	－	口縁～胴部	橙色	橙色	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	－	－	○	－	－
68	328	T－12	Ⅵ	甕形土器	－	脚部	褐色	橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	329	U－12	Ⅵ	甕形土器	－	脚部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	○	－	－	－
	330	R－10	Ⅵ	甕形土器	－	脚部	赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	331	T－12	Ⅵ	甕形土器	－	脚部	橙色	黄灰色	ヘラミガキ・ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	332	S－11	Ⅵ	甕形土器	－	脚部	にぶい赤褐色	剥落	ナデ	剥落	○	○	－	－	－	－	－
	333	T－11	Ⅵ	甕形土器	－	脚部	にぶい橙色	剥落	ヘラミガキ	剥落	○	○	－	－	○	－	－
	334	S－11	Ⅴb下	甕形土器	－	脚部	にぶい褐色	剥落	ヘラミガキ	剥落	○	○	－	－	○	－	－
	335	S－11	Ⅵ	甕形土器	－	脚部	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ヘラミガキ・ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	336	S－12	Ⅵ	甕形土器	－	脚部	にぶい褐色	にぶい黄橙色	ヘラケズリ・ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	337	Q－11	Ⅳ	甕形土器	－	脚部	にぶい橙色	明黄褐色	板ナデ	板ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	338	Y－12	Ⅴ	甕形土器	－	脚部	にぶい黄橙色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	339	P－10	Ⅴ	甕形土器	－	脚部	橙色	黄橙色	板ナデ	ナデ後指頭押圧	○	○	○	－	－	－	－
	340	S－13	Ⅴ下	甕形土器	－	脚部	橙色	暗褐色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	341	N－9	Ⅳ	甕形土器	－	脚部	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	342	M－7	Ⅴ	甕形土器	－	脚部	にぶい黄橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	343	O－11	Ⅳ	甕形土器	－	脚部	にぶい橙色	オリーブ褐色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	344	M－8	Ⅳ	甕形土器	－	脚部	にぶい赤褐色	にぶい橙色	ハケ目・ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	345	T－11	Ⅴb	甕形土器	－	脚部	橙色	にぶい黄橙色	板ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	346	S－13	Ⅴ	甕形土器	－	脚部	にぶい赤褐色	黒褐色	ハケ目・ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	347	X－15	Ⅵ	甕形土器	－	脚部	橙色	橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	348	T－12	Ⅵ	甕形土器	－	脚部	橙色	にぶい黄褐色	板ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	－
69	349	S－13	Ⅴ	甕形土器	－	脚部	橙色	橙色	板ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	350	S－13	Ⅴ	甕形土器	－	脚部	にぶい黄橙色	明黄褐色	ハケ目	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	351	M－9	Ⅳ	甕形土器	－	脚部	橙色	橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	352	S－12	Ⅵ	甕形土器	－	脚部	橙色	橙色	ナデ	指頭押圧	○	○	○	－	○	－	－
	353	P－9	Ⅳ	甕形土器	－	脚部	橙色	橙色	ハケメ・ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	354	U－13	Ⅳ下	甕形土器	－	脚部	にぶい黄橙色	明黄褐色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	355	T－11	Ⅲb	甕形土器	－	脚部	橙色	にぶい橙色	板ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	356	Q－10	Ⅴb	甕形土器	－	脚部	にぶい黄橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	357	J－6	Ⅳ	甕形土器	－	脚部	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	358	T－12	Ⅵ	甕形土器	－	脚部	浅黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	359	V－14	Ⅵ	甕形土器	－	脚部	にぶい橙色	橙色	指頭押圧	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	360	S－11	Ⅳ下	甕形土器	－	脚部	にぶい黄橙色	黒褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	361	T－13	Ⅴb上	甕形土器	－	脚部	にぶい黄橙色	黄褐色	ハケ目・ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	362	P－10	Ⅵ	甕形土器	－	脚部	明赤褐色	暗褐色	ハケ目	指頭押圧	○	○	○	－	○	－	－
	363	S－13	Ⅴ下	甕形土器	－	脚部	橙色	にぶい赤褐色	ハケ目・ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	364	P－10	Ⅴb	甕形土器	－	脚部	暗灰黄色	にぶい黄色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	365	M－9	Ⅳ	甕形土器	－	脚部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	366	U－14	Ⅳ下	甕形土器	－	脚部	にぶい橙色	にぶい黄褐色	板ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	367	S－13	Ⅳ下	甕形土器	－	脚部	黄灰色	剥落	ナデ	剥落	○	○	○	－	－	－	－
	368	P－11	Ⅳ	甕形土器	－	脚部	橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	369	S－13	Ⅴ下	甕形土器	－	脚部	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	370	Q－11	Ⅴ	甕形土器	－	脚部	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	371	S－11	Ⅳ	甕形土器	－	脚部	橙色	にぶい橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	372	S－13	Ⅴ下	甕形土器	－	脚部	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	373	T－13	Ⅴb下	甕形土器	－	脚部	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	374	U－13	Ⅳ下	甕形土器	－	脚部	にぶい黄褐色	にぶい橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	375	Q－11	Ⅴ	甕形土器	－	脚部	にぶい黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	376	L－7	Ⅴ	甕形土器	－	脚部	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ目・ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	377	U－13	Ⅳ	甕形土器	－	脚部	にぶい橙色	褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	378	R－11	Ⅴb下	甕形土器	－	脚部	にぶい黄橙色	黒褐色	ハケ目	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	379	O－9	Ⅳ	甕形土器	－	脚部	にぶい黄褐色	灰褐色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	380	O－10	Ⅳ	甕形土器	－	脚部	にぶい黄橙色	黒褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	381	L－6	Ⅴ	甕形土器	－	脚部	にぶい褐色	橙色	ハケ目	ナデ	○	○	－	－	○	－	－

表10　弥生・古墳時代遺物観察表（4）

挿図	番号	出土区	層位	器種	部位	色調		調整		胎土						備考
						外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	ウンモ	小礫	その他	
69	382	R－12	Ⅴ	甕形土器	脚部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	383	M－8	Ⅳ	甕形土器	脚部	浅黄橙色	黒褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	炭化物付着
	384	T－13	Ⅴb上	甕形土器	脚部	にぶい橙色	黒褐色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	385	S－13	Ⅵ	甕形土器	脚部	にぶい橙色	橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	386	L－6・7	Ⅳ・Ⅴ	甕形土器	脚部	にぶい褐色	暗褐色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	387	S－12	Ⅵ	甕形土器	脚部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	388	S－11	Ⅳ下	甕形土器	脚部	にぶい黄橙色	暗灰黄色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	389	S－13	Ⅵ	甕形土器	脚部	橙色	灰褐色	指頭押圧	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	390	O－11	Ⅴ	甕形土器	脚部	にぶい橙色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
70	391	T－12・V－14	Ⅳ	壺形土器	口縁～胴部	灰黄色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	392	U－12	Ⅳ下	壺形土器	口縁～胴部	橙色	橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	茶粒	頸部に多条突帯
	393	U－14	Ⅴb	壺形土器	肩部	にぶい褐色	にぶい黄橙色	ヘラミガキ	指頭押圧	○	○	○	－	－	茶粒	多条突帯
	394	S・T－13	Ⅴb上・Ⅵ	壺形土器	肩部	にぶい黄橙色	黒褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	多条突帯
	395	U－13	Ⅳ下	壺形土器	肩部	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	多条突帯
	396	S－12	Ⅵ	壺形土器	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	口唇部に刻目
	397	R－11	Ⅳ上	壺形土器	口縁	にぶい橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	口唇部に刻目
	398	V－14	Ⅵ	壺形土器	口縁	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	口縁部内面に突帯
	399	N－9	Ⅴ	壺形土器	口縁	灰褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	○	－	－	口唇部肥厚
	400	Q－10	Ⅳ下	壺形土器	口縁	明黄褐色	にぶい黄橙色	ハケ目	ハケ目	○	○	○	－	－	－	頸部に突帯
	401	P－11	Ⅳ	壺形土器	口縁	明黄褐色	浅黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	茶粒	－
	402	T－13	Ⅴb上	壺形土器	口縁	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	403	R－10	Ⅲb	壺形土器	口縁	浅黄橙色	にぶい橙色	ハケ目・ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	茶粒	－
	404	V－15	Ⅳ	壺形土器	口縁	にぶい黄橙色	にぶい橙色	ナデ・ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	405	W－14	Ⅴb	壺形土器	口縁	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	406	M－9	Ⅴ	壺形土器	口縁	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	407	O－9	Ⅳ	壺形土器	口縁	橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	408	U－12	Ⅳ下	壺形土器	口縁	にぶい黄橙色	浅黄橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	409	X－14	Ⅳ	壺形土器	口縁	にぶい褐色	明褐色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	頸部に突帯
	410	S－12	Ⅴb	壺形土器	口縁～胴部	浅黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
71	411	P・Q－11・12	Ⅴ	壺形土器	口縁	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	412	M－9	Ⅴ	壺形土器	口縁	浅黄橙色	浅黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	413	X－13	Ⅳ	壺形土器	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	414	L－7	Ⅴ	壺形土器	口縁	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	頸部に突帯
	415	P－10	Ⅴb	壺形土器	口縁	橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	416	V－15	Ⅳ	壺形土器	口縁～胴部	にぶい橙色	明黄褐色	ハケ目	指頭押圧	○	○	○	－	－	－	－
	417	T－12	Ⅴb・Ⅵ	壺形土器	口縁～胴部	浅黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	418	S－12	Ⅵ	壺形土器	口縁	浅黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	419	N－8	Ⅳ	壺形土器	口縁	浅黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	420	T－13	Ⅳ	壺形土器	口縁	にぶい黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	421	S－12	Ⅵ	壺形土器	口縁	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	茶粒	－
	422	S－12	Ⅵ	壺形土器	口縁	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	赤色顔料
	423	W－14	Ⅴb	壺形土器	口縁	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	424	S－11	Ⅴb	壺形土器	口縁	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	内面線刻あり
	425	L－8	Ⅳ	壺形土器	口縁	にぶい橙色	浅黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	426	M－8	Ⅴ	壺形土器	口縁	橙色	橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	427	V－14	Ⅳ下	壺形土器	口縁	橙色	黄橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	428	N－9	Ⅴ	壺形土器	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	板ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	胴部に突帯
72	429	Q－10	Ⅳ	壺形土器	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	430	Q－9	Ⅳ	壺形土器	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	ナデ・ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	431	P－10	Ⅴb	壺形土器	口縁～胴部	浅黄橙色	にぶい黄色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	432	T－12	Ⅴb	壺形土器	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	433	U－13	Ⅳ下	壺形土器	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	434	S－13	Ⅴ・Ⅵ	壺形土器	口縁～胴部	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	435	T－12	Ⅳ下	壺形土器	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ後ヘラミガキ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	436	W－15	Ⅳ	壺形土器	口縁	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	437	P－11	Ⅴ	壺形土器	口縁	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケ目	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	438	T－12	Ⅵ	壺形土器	口縁～胴部	橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	439	W－14	Ⅵ	壺形土器	口縁	にぶい橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	440	Q・R－10	トレンチ	壺形土器	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	441	S－13	Ⅴ	壺形土器	完形	にぶい橙色	明赤褐色	板ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	442	P－9	Ⅴ	壺形土器	完形	にぶい褐色	にぶい褐色	板ナデ・ヘラケズリ	板ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	443	Q－11	Ⅴ	壺形土器	口縁	橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
73	444	M－7	Ⅴ	壺形土器	完形	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	胴部刻目突帯
	445	M－8	Ⅴ	壺形土器	完形	橙色	橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	胴部刻目突帯・線刻
	446	S－13	Ⅴ	壺形土器	完形	にぶい橙色	橙色	ハケ目後ナデ・ケズリ	ナデ	○	○	○	－	－	－	胴部刻目すれ違い突帯
	447	T－12	Ⅵ	壺形土器	完形	浅黄橙色	浅黄橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	胴部刻目突帯
74	448	Q－11	Ⅴb下	壺形土器	完形	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	胴部刻目突帯
	449	S－11	Ⅴb	壺形土器	胴部	橙色	橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	450	R－10	Ⅳ下	壺形土器	胴部	にぶい黄褐色	明黄褐色	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	胴部刻目突帯
	451	S・T－12	Ⅴ下・Ⅵ	壺形土器	胴部	にぶい黄橙色	灰白色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	胴部刻目突帯
	452	P－10	Ⅴb下	壺形土器	胴部～底部	にぶい橙色	にぶい褐色	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	○	－	胴部刻目突帯
	453	T－12・13	Ⅵ	壺形土器	胴部	にぶい橙色	橙色	ナデ	ハケ目	○	○	○	－	－	－	胴部刻目突帯
	454	M－9	Ⅴ	壺形土器	完形	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	胴部刻目突帯・穿孔
75	455	V－15	Ⅳ下	壺形土器	完形	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	茶粒	－
	456	U－12	Ⅵ	壺形土器	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	457	R－12	Ⅴb	壺形土器	口縁	褐色	橙色	ヘラミガキ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	458	R－11	Ⅴb	壺形土器	口縁	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	459	R－11	Ⅳ	壺形土器	口縁	明黄褐色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	460	O－11	Ⅳ	壺形土器	口縁	黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	461	U－13	Ⅵ	壺形土器	口縁	淡黄色	浅黄色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	462	S－12	Ⅳ下	壺形土器	口縁～胴部	橙色	にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	463	V－12	Ⅳ	壺形土器	口縁	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	－

表11　弥生・古墳時代遺物観察表（5）

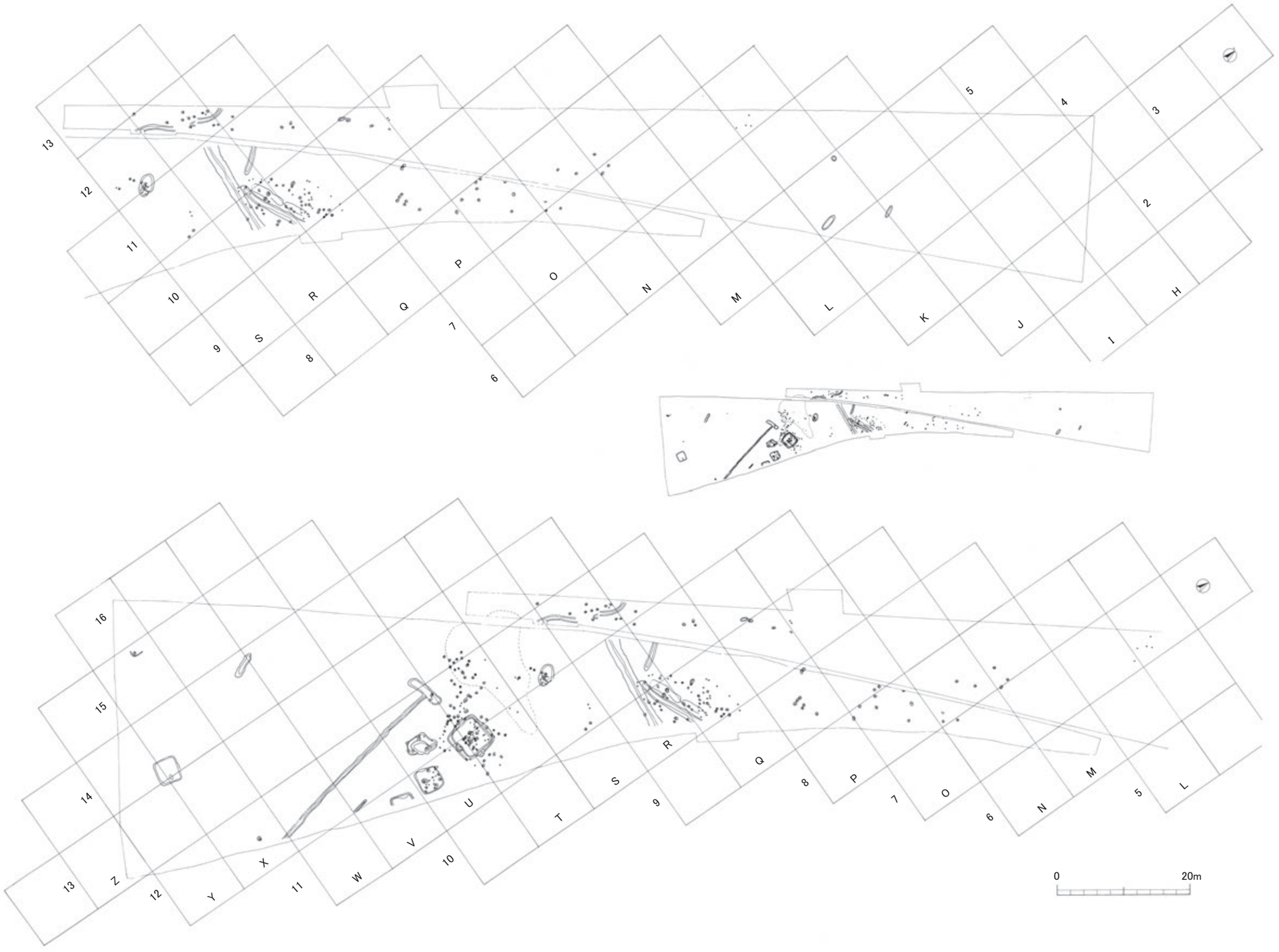
挿図	番号	出土区	層位	器種	部位	色調		調整		胎土						備考
						外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	ウンモ	小礫	その他	
75	464	M－7	Ⅴ	壺形土器	完形	橙色	橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	465	R－11	Ⅵ	壺形土器	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	466	U－14	Ⅳ下	壺形土器	口縁	オリーブ黒色	黄褐色	ハケ目	ナデ	○	－	－	－	－	－	－
	467	T－12	Ⅵ	壺形土器	口縁	にぶい黄褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	468	S－12	Ⅴb	壺形土器	完形	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	板ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	469	Q－11	Ⅵ	壺形土器	完形	橙色	にぶい橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	470	S－13	Ⅵ	壺形土器	口縁	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	471	U－12	Ⅳ下	壺形土器	口縁～胴部	橙色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	472	X－12	Ⅲb	壺形土器	口縁	橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	無頸壺
	473	T－12	Ⅴb，Ⅵ	壺形土器	口縁～胴部	橙色	にぶい橙色	ナデ	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	474	P－11	Ⅴ	壺形土器	口縁～胴部	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
76	475	S－13	Ⅵ	壺形土器	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	476	T－13	Ⅴb上	壺形土器	胴部	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	477	T－12	Ⅵ	壺形土器	胴部	灰白色	褐灰色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	478	X－13	Ⅲb	壺形土器	胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	－	○	－	－	－	－
	479	Q－11	Ⅴ	壺形土器	胴部	にぶい黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	480	P－11	Ⅴ	壺形土器	胴部	赤褐色	赤褐色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	○	○	－	－	－	沈線
	481	U－12	Ⅵ	壺形土器	胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	－	○	○	－	－	－	－
	482	Q－11	Ⅴ	壺形土器	胴部	にぶい黄橙色	橙色	ハケ目・ナデ	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	483	T－12	Ⅵ	壺形土器	胴部	暗褐色	明褐色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	484	O－9	Ⅳ，Ⅵ	壺形土器	胴部	にぶい黄色	にぶい黄色	ハケ目	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	485	O－8	Ⅴ	壺形土器	肩部	橙色	浅黄色	ハケ目	ナデ	○	○	－	－	－	－	突帯
77	486	N－9	Ⅴ	壺形土器	胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	突帯
	487	S－13	Ⅵ	壺形土器	肩部	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	突帯
	488	T－12	Ⅳ	壺形土器	肩部	橙色	浅黄橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	○	－	突帯
	489	X－15	Ⅳ	壺形土器	胴部	にぶい黄褐色	にぶい橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
78	490	R－11	Ⅵ	壺形土器	底部	明赤褐色	明赤褐色	板ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	491	P－11	Ⅳ	壺形土器	胴～底部	にぶい橙色	浅黄色	ヘラケズリ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	492	L－8	Ⅴ	壺形土器	胴～底部	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	茶粒	－
	493	S－13	Ⅴ	壺形土器	底部	橙色	明赤褐色	ヘラケズリ・ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	494	S－13	Ⅴ下	壺形土器	底部	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	495	U－12	Ⅵ	壺形土器	胴～底部	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	496	S－13	Ⅴ下，Ⅵ	壺形土器	底部	浅黄橙色	にぶい黄橙色	ヘラケズリ・ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	497	S－12	Ⅵ	壺形土器	底部	にぶい褐色	明赤褐色	板ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	498	T－13	Ⅵ	壺形土器	胴部・底部	黒褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	499	R－10	Ⅴb	壺形土器	胴～底部	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	板ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	500	Q－10	Ⅴb上	壺形土器	底部	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	501	S－13	Ⅵ	壺形土器	底部	浅黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	502	I－6	Ⅲd	壺形土器	底部	にぶい褐色	にぶい褐色	ヘラケズリ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	503	P－10	Ⅴ	壺形土器	底部	にぶい黄橙色	明黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	504	T－11	Ⅴb	壺形土器	底部	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ヘラミガキ	ナデ	○	○	○	－	－	茶粒	－
	505	S－12	Ⅵ	壺形土器	底部	浅黄橙色	浅黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
79	506	S－13	Ⅵ	壺形土器	胴部・底部	橙色	明赤褐色	ハケ目	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	507	P－10	Ⅴb	壺形土器	胴部・底部	橙色	明黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	508	T－13	Ⅴb上	壺形土器	底部	浅黄橙色	浅黄橙色	ハケ目	指頭押圧	○	○	○	－	－	－	－
	509	U－14	Ⅴb上	壺形土器	胴部・底部	明褐色	にぶい黄色	板ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	510	T－13	Ⅳ下	壺形土器	底部	にぶい黄色	浅黄橙色	ヘラケズリ・ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	511	T－13	Ⅴb上	壺形土器	底部	にぶい黄橙色	黒褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	512	T－12	Ⅳ下	壺形土器	底部	にぶい橙色	明黄褐色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	513	P－10	Ⅳ	壺形土器	底部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	板ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	514	T－12	Ⅴb上	壺形土器	底部	にぶい黄橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	茶粒	－
	515	U－13	Ⅴb上	壺形土器	底部	にぶい褐色	褐色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	516	U－13	Ⅴb	壺形土器	底部	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	517	Q－10	Ⅴb下	壺形土器	底部	橙色	暗褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	518	U－13	Ⅳ下	壺形土器	底部	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケ目	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	519	T－11	Ⅵ	壺形土器	底部	橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	520	S－11・12	Ⅵ	壺形土器	底部	黒褐色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	521	U－14	Ⅳ	壺形土器	底部	にぶい黄橙色	灰褐色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	－	○	－	－	－	－
	522	M－8	Ⅴ	壺形土器	底部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	523	U－13	Ⅴb上	壺形土器	底部	橙色	褐色	ハケ目	ハケ目	○	○	○	－	○	－	－
	524	S－13	Ⅵ	壺形土器	底部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	525	S－11	Ⅳ	壺形土器	底部	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ヘラケズリ・ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	526	P・Q－11	Ⅵ	壺形土器	底部	橙色	黒褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	茶粒	－
80	527	Q－11	Ⅴb上	鉢形土器	口縁～胴部	にぶい橙色	橙色	板ナデ	板ナデ	○	－	○	－	－	－	－
	528	V－12	Ⅲb	鉢形土器	口縁～胴部	にぶい褐色	にぶい黄橙色	ハケ目	ハケ目	○	○	○	－	－	－	炭化物付着
	529	S－13	Ⅴ下	鉢形土器	口縁～胴部	橙色	橙色	ハケ目後ナデ	板ナデ	○	○	○	－	－	茶粒	－
	530	T－13	Ⅳ下	鉢形土器	口縁～胴部	浅黄橙色	橙色	ハケ目	ハケ目後ナデ	○	○	○	－	－	－	－
81	531	S－13	Ⅵ	鉢形土器	完形	橙色	橙色	ハケ目後ナデ	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	532	K－7	Ⅳ	鉢形土器	口縁～胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	－	－	○	－	－	－	－
	533	S－13	Ⅴ下	鉢形土器	完形	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	534	S－13	Ⅵ	鉢形土器	口縁	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ハケ目	○	○	○	－	－	－	補修痕
	535	T－13	不明	鉢形土器	口縁～底部	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	536	T－12	Ⅴ，Ⅵ	鉢形土器	口縁・胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	537	O－9	Ⅳ	鉢形土器	完形	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	538	S－12	Ⅵ	鉢形土器	口縁～胴部	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	○	－	穿孔2ヶ所
	539	S－11	トレンチ	鉢形土器	口縁・胴部	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	540	Q－11	Ⅵ	鉢形土器	完形	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	541	S－11・12	Ⅳ下	鉢形土器	口縁～胴部	明黄褐色	明黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	－	－	－	－	－
	542	O－10	Ⅲb	鉢形土器	胴～底部	にぶい橙色	明赤褐色	ナデ	指頭押圧	○	○	－	－	○	－	－
	543	X－13	Ⅳ	鉢形土器	完形	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	544	Q－11	Ⅴb下	鉢形土器	口縁～底部	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	545	L－7	Ⅴ	鉢形土器	完形	浅黄橙色	浅黄橙色	板ナデ・ヘラケズリ	板ナデ	○	○	－	－	－	－	－

表12　弥生・古墳時代遺物観察表（6）

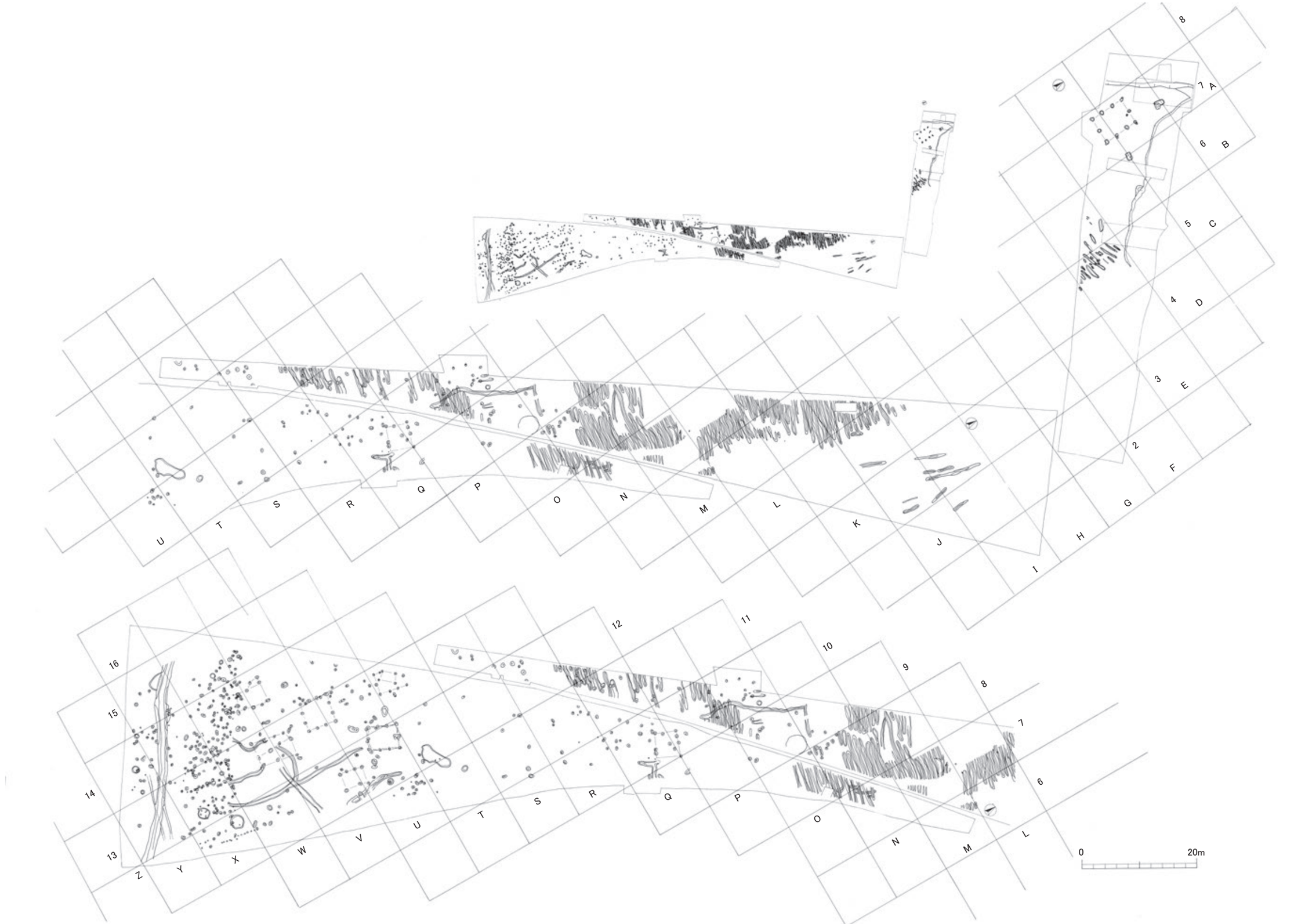
挿図	番号	出土区	層位	器種	部位	色調		調整		胎土						備考
						外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	ウンモ	小礫	その他	
81	546	R－12	Ⅴ	鉢形土器	完形	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	－	○	－	－	－	－
	547	M－8	Ⅴ	鉢形土器	完形	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヘラケズリ・ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	548	R－11	Ⅳ上	鉢形土器	口縁・胴部	橙色	明黄褐色	ナデ	ナデ	－	○	－	－	－	－	－
	549	P－11	Ⅴ	鉢形土器	完形	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	550	Y－14	Ⅲb	鉢形土器	口縁・胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	551	U－13	Ⅵ	鉢形土器	口縁・胴部	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
82	552	Q－11	Ⅳ	鉢形土器	完形	にぶい橙色	にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	553	M－8	Ⅴ	鉢形土器	完形	橙色	橙色	ナデ	ハケ目・ナデ	○	○	－	－	○	－	－
	554	M－8	Ⅴ	鉢形土器	完形	にぶい黄橙色	橙色	ナデ・指頭押圧	ハケ目	○	○	－	－	○	－	－
	555	Q－10	不明	鉢形土器	完形	にぶい橙色	浅黄橙色	指頭押圧	板ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	556	O－10	Ⅳ	鉢形土器	口縁～胴部	橙色	橙色	ハケ目	ハケ目	○	○	○	－	－	－	－
	557	S－13	Ⅴ	手捏ね土器	完形	橙色	にぶい黄橙色	指頭押圧	指頭押圧	○	－	○	－	－	－	－
	558	Q－11	Ⅵ	手捏ね土器	完形	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	指頭押圧	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	559	V－12	Ⅵ	手捏ね土器	完形	にぶい橙色	にぶい橙色	指頭押圧	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	560	S－13	Ⅴb	手捏ね土器	完形	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	指頭押圧	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	561	Q－11	Ⅴ	手捏ね土器	完形	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	指頭押圧	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	562	S－12	Ⅵ	手捏ね土器	完形	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	指頭押圧	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	563	R－10	Ⅴb下	手捏ね土器	完形	にぶい黄橙色	黄褐色	指頭押圧	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	564	S－13	Ⅳ	手捏ね土器	完形	浅黄橙色	浅黄色	指頭押圧	ナデ	○	－	○	－	○	－	－
	565	S－13	Ⅴ	手捏ね土器	完形	浅黄色	にぶい黄色	指頭押圧	指頭押圧	○	○	○	－	－	－	－
	566	P・Q－11・12	Ⅴ	手捏ね土器	完形	浅黄色	浅黄色	ハケ目後ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	567	Q-11・12	Ⅴ，Ⅵ	手捏ね土器	完形	暗褐色	暗褐色	指頭押圧	指頭押圧・ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	568	S－13	Ⅴ	手捏ね土器	完形	にぶい橙色	にぶい黄橙色	指頭押圧	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	569	Q－11	Ⅴ	手捏ね土器	完形	浅黄色	浅黄色	指頭押圧	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	570	R－9	Ⅳ	手捏ね土器	完形	褐色	褐色	板ナデ	ハケ目・ナデ	○	－	○	－	○	－	－
	571	T－11	Ⅵ	手捏ね土器	完形	暗褐色	にぶい黄褐色	指頭押圧	ナデ	○	○	○	－	○	－	－
	572	P－9	Ⅳ	手捏ね土器	胴～底部	明黄褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ・指頭押圧	○	○	○	－	－	－	－
	573	T－12	Ⅵ	手捏ね土器	胴～底部	浅黄色	浅黄色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	574	V－14	Ⅳ	高坏	坏部	にぶい橙色	赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	575	X－14	Ⅲb	高坏	脚部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	－	○	－	－	茶粒	－
	576	Q・R－10・11	Ⅴ，Ⅵ	高坏	脚部	にぶい橙色	にぶい赤褐色	ヘラミガキ	ナデ	○	○	○	－	○	－	赤色顔料
	577	U－13	Ⅳ	高坏	坏部	橙色	にぶい黄橙色	ヘラミガキ・ナデ	ナデ	○	－	○	－	○	－	－
	578	U－12	Ⅲb	高坏	脚部	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	－	○	－	－	－	赤色顔料
	579	O－8	Ⅳ	高坏	脚部	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	580	U－13	Ⅲb	高坏	脚部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	赤色顔料
	581	U－13	Ⅳ上	高坏	脚部	明赤褐色	にぶい黄橙色	ヘラミガキ	ナデ	－	－	○	－	－	－	赤色顔料
	582	Q－11	Ⅵ	高坏	脚部	明赤褐色	にぶい橙色	ハケメ	ナデ	○	○	○	○	○	－	赤色顔料
	583	Y－14	Ⅲb	高坏	脚部	橙色	橙色	ナデ	ナデ	－	○	－	－	－	－	－
83	584	Q・R－10・11	Ⅴb	不明	不明	浅黄色	黄灰色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	重弧文
	585	Y－14	Ⅳ	紡錘車	－	赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	赤色顔料
	586	U－12	Ⅵ	紡錘車	－	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	587	X－14	Ⅲb	紡錘車	－	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	588	V－12	Ⅵ	匙形土製品	－	灰褐色	－	指頭押圧	－	○	○	○	－	－	－	－
	589	S－13	Ⅴb	匙形土製品	－	暗褐色	－	指頭押圧	－	○	○	○	－	－	－	－
	590	X－13	Ⅳ	匙形土製品	－	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	－	－	－
	591	V－13	Ⅵ	匙形土製品	－	灰黄褐色	－	ナデ	－	○	○	○	－	－	－	－
	592	U－12	Ⅲb	不明	－	橙色	灰褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	－	○	－	－

表13　弥生・古墳時代遺物観察表（7）　　（　）内は欠損部分の測定値

挿図	番号	出土区	層位	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
84	593	U－12	Ⅵ	砥石	砂岩	(7.5)	3.5	4.3	152.0	－
	594	T－11	Ⅵ	砥石	砂岩	(8.7)	6.5	3.5	238.0	－
	595	R－13	Ⅴ	樹皮布加工品	砂岩	(7.3)	5.0	5.1	217.0	－
	596	S－12	Ⅵ	砥石	砂岩	(12.4)	8.6	4.4	810.0	中央に溝状の凹み
	597	S－13	Ⅵ	砥石	砂岩	(16.4)	10.0	5.9	970.0	－
	598	Y－13	Ⅵ	穿孔用石器	砂岩	11.9	4.8	2.7	180.0	－
	599	Q－10	Ⅵ	石皿	砂岩	(27.4)	11.6	4.8	2710.0	－
	600	T－11	Ⅵ	石皿	砂岩	14.8	9.0	5.5	825.0	穿孔



第13図　弥生・古墳時代遺構全体図



第86図　古代遺構全体図

第Ⅶ章　古代の調査

第１節　遺　　構

１遺構の概要

古代の遺構はⅣ～Ⅴ層の上面で検出し，埋土はⅣ層を中心としている。古代の遺構としては，掘立柱建物跡10棟をはじめとして，土坑２基，溝状遺構５条，畑畝跡３か所，ピット群２か所などが検出されている。

２遺構

（１）掘立柱建物跡

３間×３間１棟，２間×３間６棟，２間×２間１棟，１間×１間１棟のほか，規模の不明なものが１棟確認されている。これらの建物の柱穴は浅いものが多く，削平を強く受けたものが多いことを示しているといえよう。以下，それぞれについて概略を述べていく。

①掘立柱建物跡１号（第85図）

Ｃ・Ｄ－７区で検出された。規格は，本遺跡に最も普遍的な２間×３間の建物で，大きさは5.12ｍ×6.70ｍである。柱穴の深さは，最も浅いもので19㎝，最も深いものでは62㎝となるが，残存値で40～50㎝程度の深さのものが多いと言える。ただ，極端に浅いものも見られることから，本来はもっと深かったものが削平によって浅くなったと考えられる。また，南側の列を中心とした桁行方向の５基のピットは添え柱か建て替えであろう。

②掘立柱建物跡２号（第85図）

Ｐ・Ｑ－9・10区で検出された。調査ではピットを欠いているが，本来の企画は２間×２間の建物であったと想定される。柱穴の深さは，最も浅いもので12㎝，最も深いものでは64㎝となるが，残存値で25～30㎝程度の深さのものが多いものの，10㎝程度のものも見られる。

③掘立柱建物跡３号（第87図）

Ｕ－12・13区で検出された。下記の掘立柱建物跡４号と同一か所で検出されたことから，同一規模での建て替えの可能性があるが，主軸方向も若干ずらしての全面的な造作であることから，ここでは別個の遺構として取り扱う。規格は，２間×３間の建物で，大きさは4.69ｍ×5.62ｍである。柱穴の深さは，最も浅いもので13㎝，最も深いものでは39㎝となるが，残存値で30～35㎝程度の深さのものが多い。

④掘立柱建物跡４号（第87図）

Ｕ－12・13区で検出された。上記の掘立柱建物跡３号と同一か所で検出された。規格は，２間×３間の建物で，大きさは4.48ｍ×5.70ｍである。柱穴の深さは，最も浅いもので13㎝，最も深いものでは33㎝となるが，残存値で30㎝程度の深さのものが多い。

⑤掘立柱建物跡５号（第88図）

Ｔ・Ｕ－13区で検出された。調査区域の端部に当たっていたことから，２基ほどピットを欠くが，本来の規格は，２間×３間の建物であると想定される。大きさは4.05ｍ×5.30ｍである。柱穴の深さは，最も浅いもので10㎝，最も深いものでは51㎝となるが，残存値で30㎝程度の深さのものが多い。若干浅いと考えられることから，幾分削平を受けているものと思われる。

⑥掘立柱建物跡６号（第88図）

Ｔ－13区で検出された。規格は，１間×１間の建物である。大きさは1.92ｍ×3.10ｍである。柱穴の深さは，最も浅いもので12㎝，最も深いものでは19㎝となるが，残存値で15㎝程度の深さのものが多い。

⑦掘立柱建物跡７号（第88図）

Ｕ・Ｖ－12区で検出された。規格は，２間×３間の建物で，大きさは3.48ｍ×4.63ｍである。柱穴の深さは，最も浅いもので５㎝，最も深いものでは36㎝となるが，残存値で15～20㎝程度の深さのものが多い。

⑧掘立柱建物跡８号（第89図）

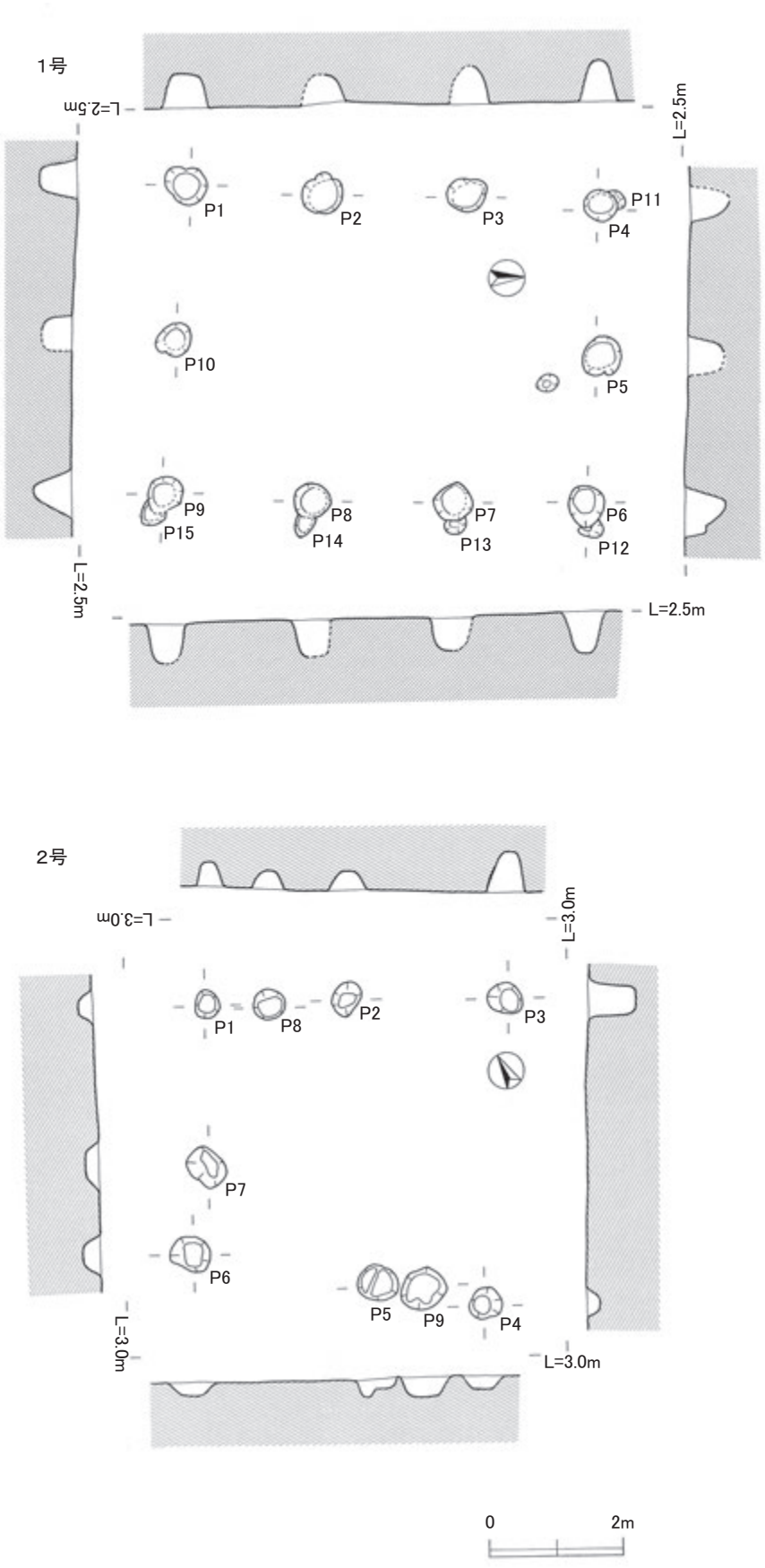
Ｕ・Ｖ－13・14区で検出された。規格は，調査した範囲では本遺跡唯一の３間×３間の建物で，大きさは5.44ｍ×5.58ｍである。柱穴の深さは，最も浅いもので18㎝，最も深いものでは46㎝となるが，残存値で30～35㎝程度の深さのものが多いといえる。北側の桁行の柱穴のうち北東の２基はそれぞれ２基のピットが見られることから，添え柱か建て替えがあった可能性もある。

⑨掘立柱建物跡９号（第89図）

Ｖ・Ｗ－13区で検出された。規格は，基本的に２間×３間の総柱建物と考えられ，桁行の１基の柱穴が何らかの理由で確認されなかったものと考えられる。柱穴の深さは，最も浅いもので８㎝，最も深いものでは30㎝となるが，残存値で20㎝程度の深さのものが多い。

⑩掘立柱建物跡10号（第90図）

Ｖ・Ｗ－14区で検出された。規格は，基本的には１間



第85図　掘立柱建物跡（１）

×２間である。大きさは4.98ｍ×6.22ｍである。この北側と南側に，それぞれ半間の庇が取り付く，変則的な二面庇建物と想定される。柱穴の深さは，最も浅いもので４㎝，最も深いものでは36㎝となるが，残存値で20～30㎝程度の深さのものが多い。若干浅いと考えられることから，幾分削平を受けているものと思われる。

（２）土　坑

この時期の土坑は，全部で２基が確認された。特に２号土坑は鍛冶炉の可能性が高いものである。以下に，概略を述べる。

①１号土坑（第91図）

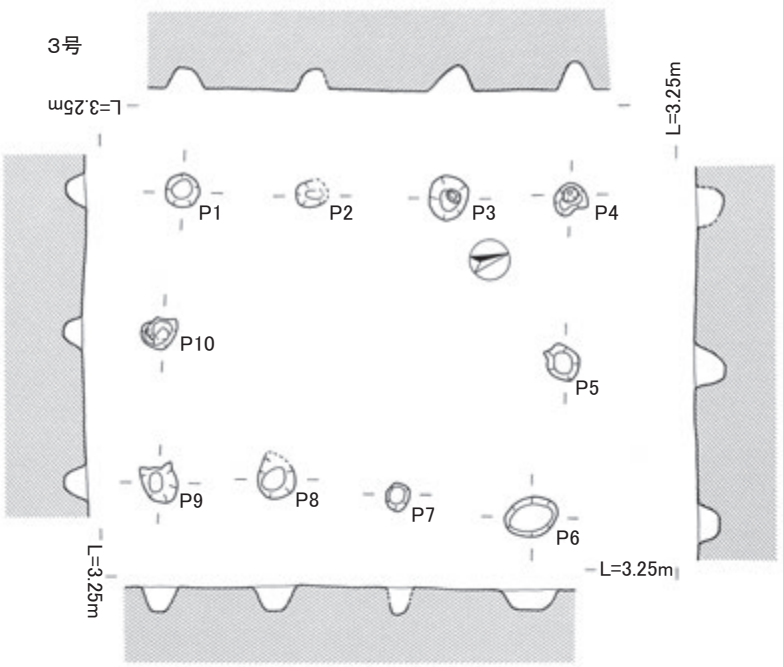
Ｘ－12区で検出された。長軸方向はほぼ東西方向で2.28ｍ，短軸方向がほぼ南北方向で2.14ｍあり，全体的な平面形は，四角形を基本として南西側のみ丸味を帯びている。深さは38～49㎝で，中央部では42㎝であり，底面はほぼ平らになっている。

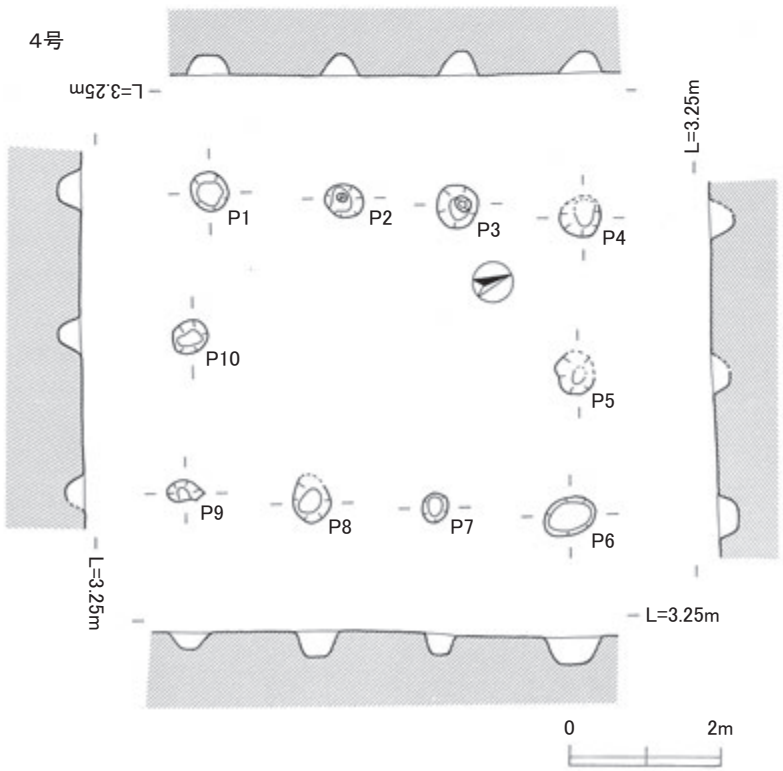
出土遺物（第91図１・２）

１は外面にススが付着する土師器である。甕と比べて深さが浅く，鍋の形態に似る。２は細かく調整され，丁寧なつくりの須恵器の蓋である。

②２号土坑（鍛冶炉）（第92図）

Ｘ－13区で検出された。長径は4.18ｍ，短径は3.59ｍで，楕円形を呈する。深さは，最深部が27㎝あり，全体的には浅い皿形を呈している。床面には若干凹凸が見られるが，東側の部分は樹根の可能性がある。また，南側には，４基の割合に大きめのピットが見





第87図　掘立柱建物跡（２）

られるほか，北側にはそれよりも小規模のピットが６基散在している。これらのピットは，その位置や規模がまばらで統一性がないことからいずれも柱穴とは考えられない。何らかの必要によって掘られたり，杭状のものを突き刺したものである可能性が大きい。埋土中には細かな粒子も含まれているほかに，本遺構の特色として，炭化物や灰，焼土などが全体的に広がっていることが挙げられる。最も深い部分でも30㎝に満たない状況であり，そのような遺構の埋土中に，火熱に関連したものが多量に存在している状況は，一般的な土坑とは考えられず，本遺構の周辺から鉄滓などの製鉄関連遺物が出土していることと，床面が被熱によって硬化していることなどから，ここでは鍛冶炉であると想定したい。埋土中からは土師器や須恵器の小破片が出土している。

出土遺物（第92図３～10）

３は直線的に外に開く椀もしくは坏である。口径は16.6㎝を測る。４は脚高の低い椀の高台である。８・９は甕の口縁部であるが，全形は不明である。

（３）溝状遺構

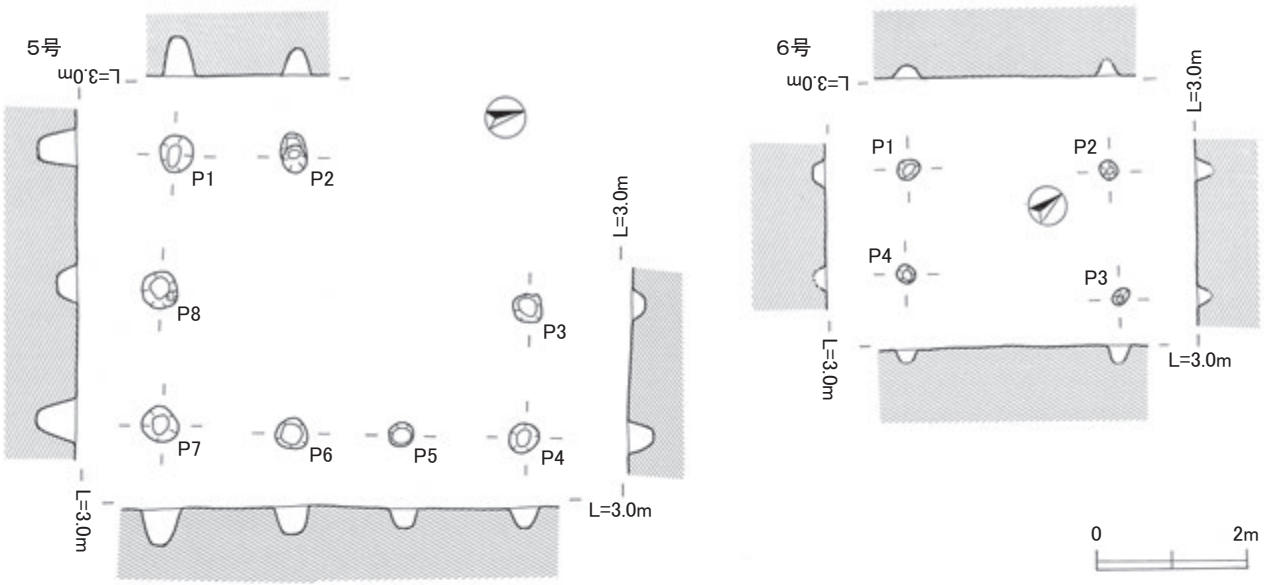
古代の溝状遺構は，調査時点で古代大溝と呼称していた大規模な溝をはじめとして，５条が検出された。そのうちの主なものについて述べる。

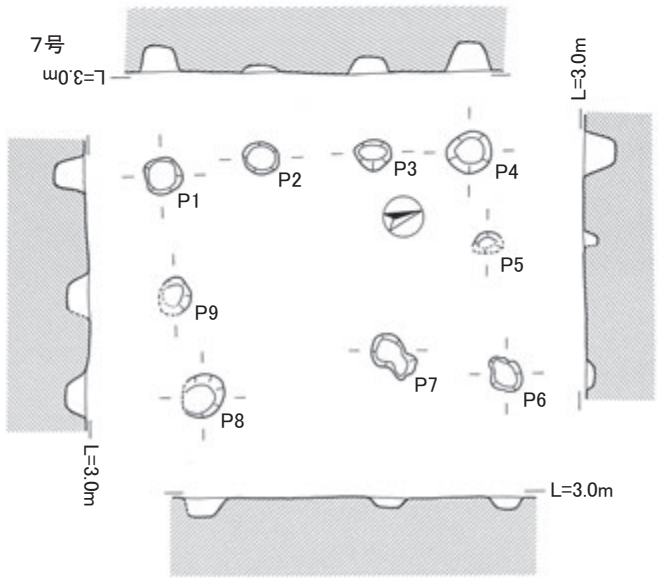
①溝状遺構１号（第93図）

Ｎ～Ｐ－９・10区で検出された。幅は25～77㎝で，深さは11～19㎝で，検出された総延長は18.7ｍである。北側部分はほぼ直線的であるが，南側は大きく弧を描くような形状である。北端と南端とがいずれも丸まっているが，南側よりも北側の方が相対的に深くなっていることから，南側から北に向かって流れていたものと考えられる。

②溝状遺構２号（第93図）

Ｕ～Ｘ－12・13区で検出された。Ｕ－13区からＸ－13区にかけて，ほぼ直





第88図　掘立柱建物跡（３）

③溝状遺構３号（第93図）

W・X－13区で検出された。幅は35～56㎝で，深さは８～12㎝と極めて浅く，検出された総延長は9.1ｍである。形状から北側が掘り方の始まりと思われることと，南側が相対的に深くなっていることなどから，北側から南に向かって流れていたものと考えられる。

④溝状遺構４号（第93図）

W－13・14区で検出された。幅は28～59㎝で，深さは10～12㎝と極めて浅く，検出された総延長は6.6ｍである。形状から北側が掘り方の始まりと思われることと，北側の先端部が深くなっているものの，全体的に見ると北側より南側が深くなる傾向があることなどから，北側から南に向かって流れていたものと考えられる。

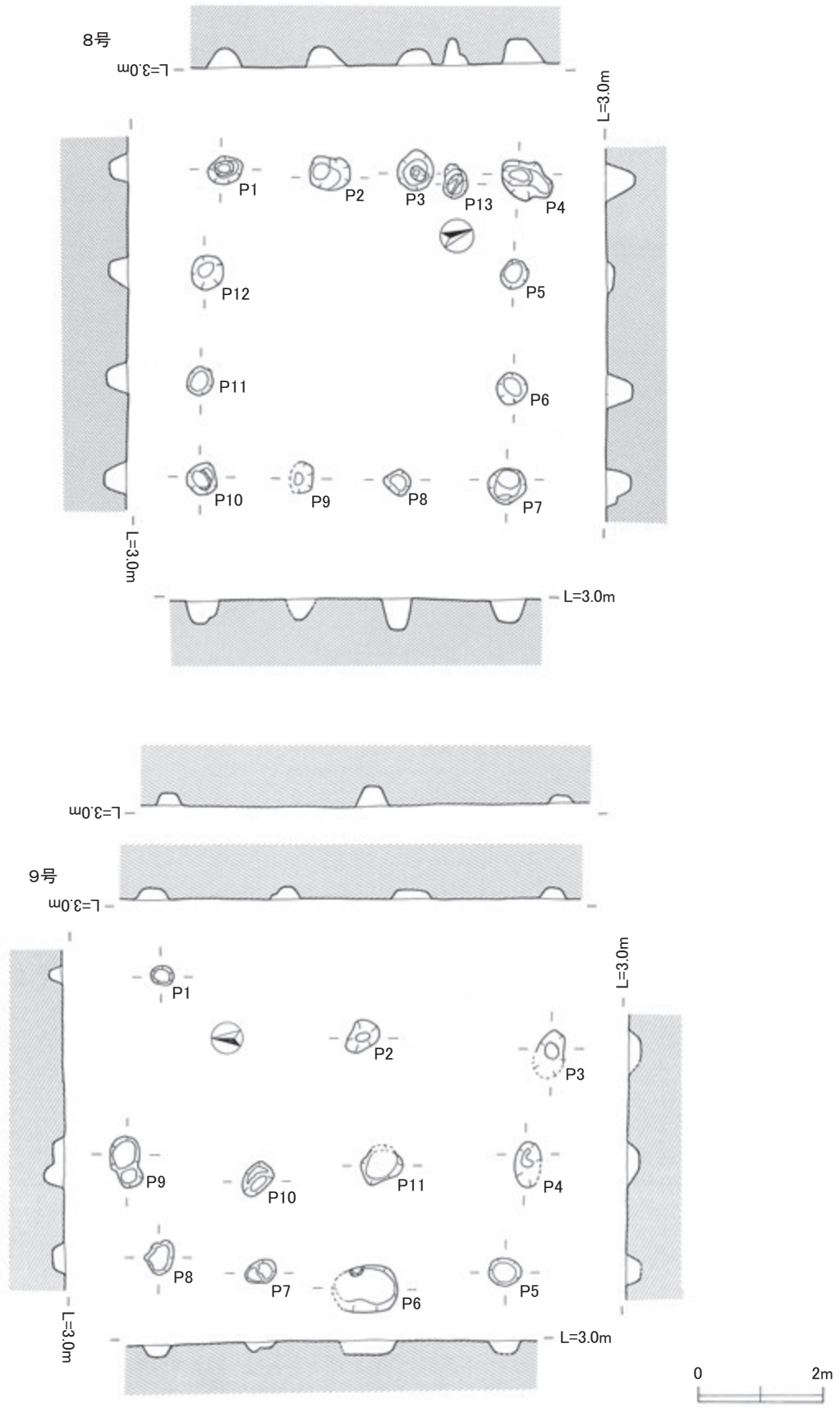
線的に延びる本流部分と，その途中のV・W－13区境で，弧状に西流して枝分かれするものとを合わせて１つの遺構として捉えている。

幅は35～70㎝で，検出された総延長は，弧状の枝分かれ部分で約7.7ｍ，ほぼ直線的な本流部分で約24ｍ，深さはいずれも11～15㎝と極めて浅い。形状から判断すると，北側が掘り方の始まりと思われることと，深さが南側に向かって深くなる傾向があることなどから，本流部分の流路は北側から南に向かって流れていたものと考えられる。また，枝分かれ部分は，本流部分よりも低くなっていることと，相対的に西側が低くなっていることから，東側から西に向かって流れていたものと考えられる。

⑤溝状遺構５号（第94図）

W～Z－13～15区で検出された。幅は1.3～1.8ｍ，深さは0.9～1.2ｍで，検出した総延長は37.4ｍである。

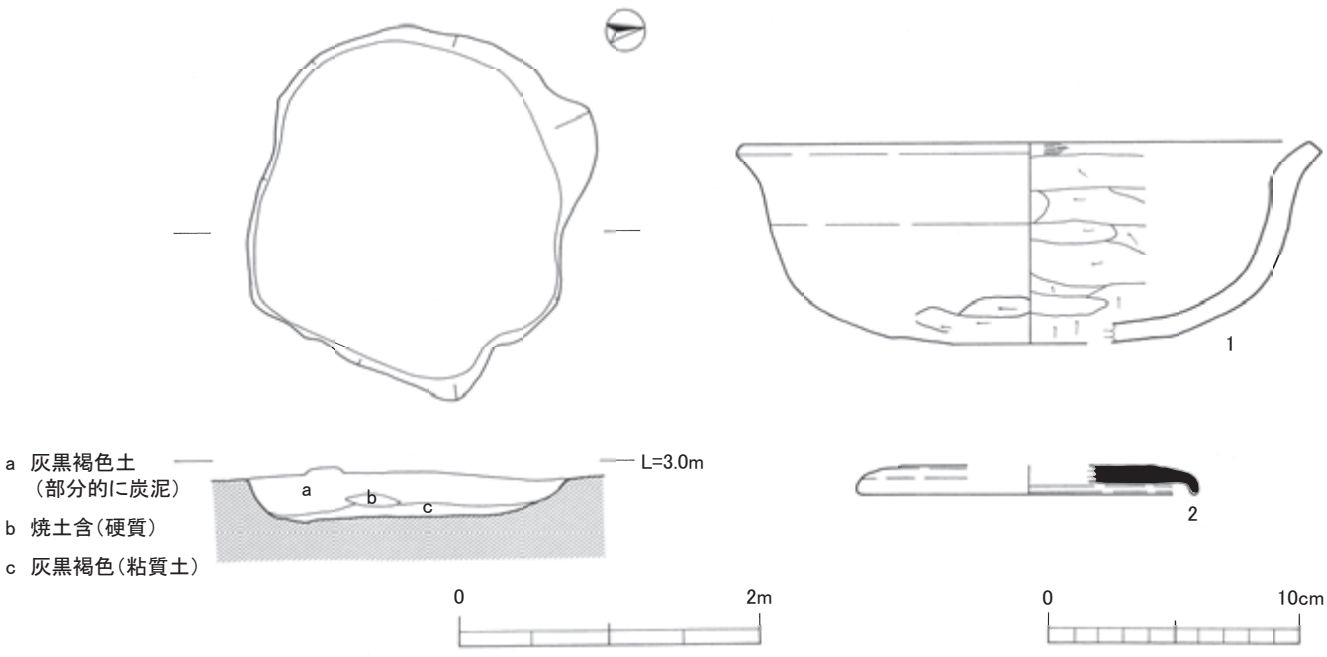
断面の形状は，基本的には逆台形ないしはやや丸味を帯びた三角形と言えるものである。部分的には，途中に段を有する箇所もあり，その部分は断面のラインが弧を描いたようになっている。北西側が浅く，南東側が深くなっていることから，流路は北西から南東に向かっていたと考えられる。なお，本遺構の上部には，中世の大規模な溝状遺構がやや向きを異にして掘られていることから，この地域の地形上，このような大規模な溝を掘削する必要があったことも考えられる。遺構内遺物は小片が多く，図化しなかった。



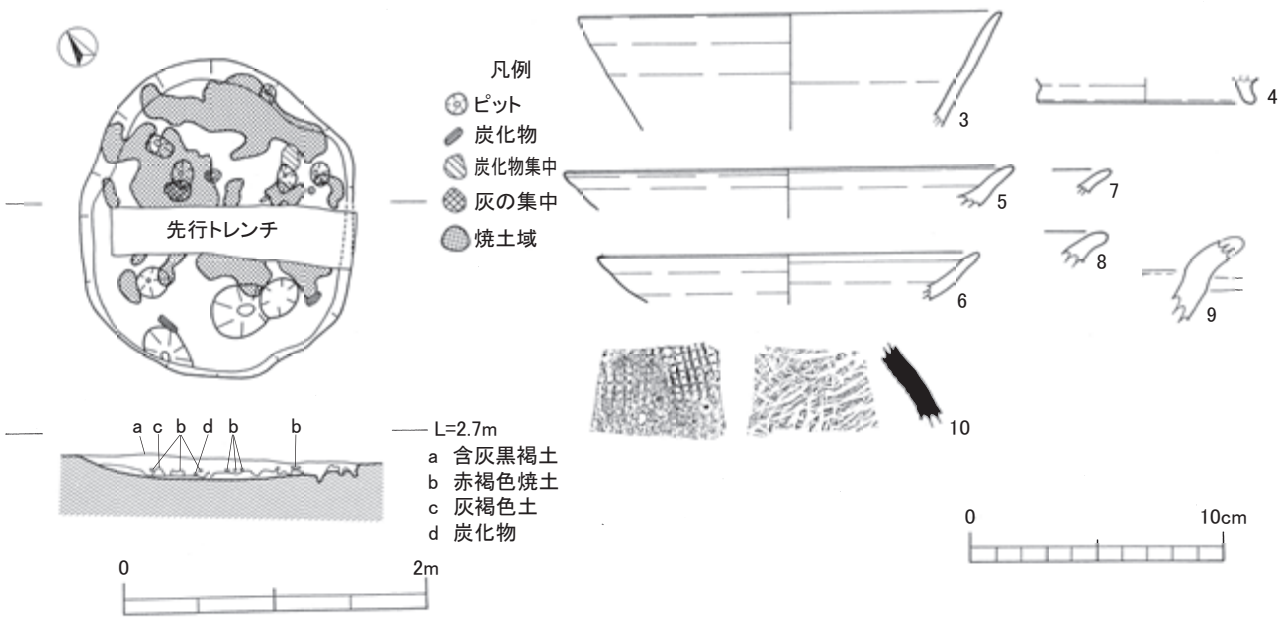
第89図　掘立柱建物跡（４）



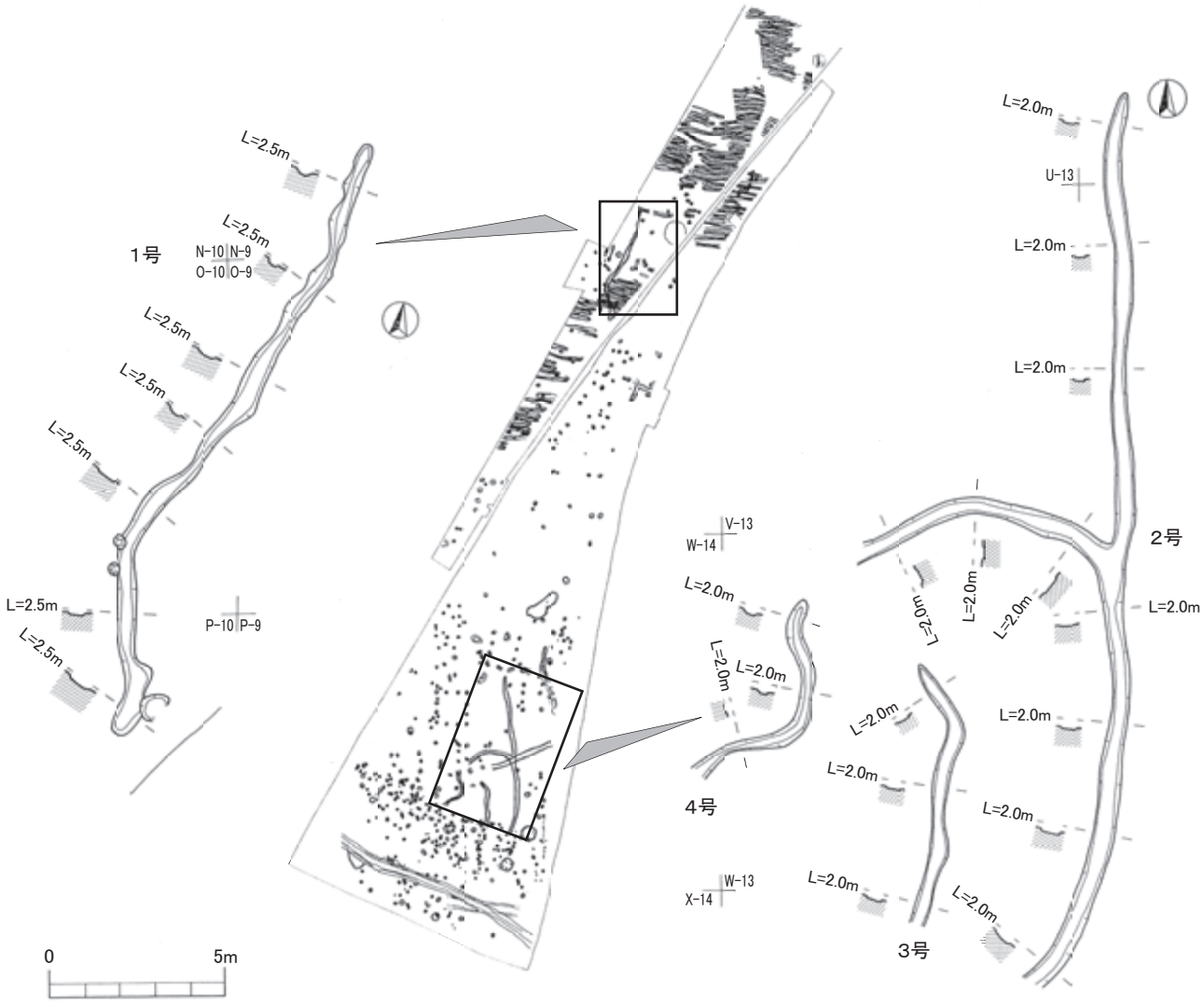
第90図　掘立柱建物跡（５）



第91図　１号土坑及び遺構内遺物



第92図　２号土坑及び遺構内遺物



第93図　溝状遺構１～４号

（4）畝間状遺構

古代該当の畝間状遺構跡が，大きく分けて３か所で確認されている。以下に，南側から順に区域に概略を述べることにする。

①Ｅ～Ｆ－５～６区（第94図）

樋門部分の中央部付近に確認された畝跡である。１条の長さは，最も長いもので東側では4.8m程度であることから，それほど長いものとは言えない。幅は15～55㎝で，10条ほど検出されている。形状は基本的に直線的であるが，一部には若干弧を描いたようなものも見られる。

②Ｉ～Ｏ－５～９区（第95図）

調査区のほぼ中央部で，ほぼ東西方向に確認された畝跡である。調査範囲が狭かったことから，１条の明確な長さは不明であるものの，それほど長いとは思えない。幅は20～80㎝で，検出されたもので最も長い畝で12.2mである。畝は，合計で80条ほど検出されている。基本的に東西方向で直線的であるが，一部には弧を描いたようなものや直交する方向のものも見られる。

出土遺物（第96図11・12）

11は畝間状遺構①の埋土から出土した坏である。見込み中央部が窪んでいる。内外面に赤色顔料が施されている。12は畝間状遺構②の埋土から出土した土錘である。孔が外側へ寄っている。半分が欠損しており，全形は不明である。

③Ｏ～Ｒ－9～12区（第95図）

調査区の南部の西側で，ほぼ東西方向に確認された畝跡である。三角形の狭い調査範囲のため，１条の長さは不明であるが，それほど長くはないようである。幅は50～70㎝で，検出されたもので最も長い畝で7.0mである。畝は，合計で30条ほど検出されている。基本的に東西方向で直線的であるが，一部には弧を描いたようなものも見られる。

（5）ピット群

掘立柱建物跡とはならず，ピット群としたものは，大きく２群に分かれる。

①Ｎ～Ｓ－8～12区（第86図）

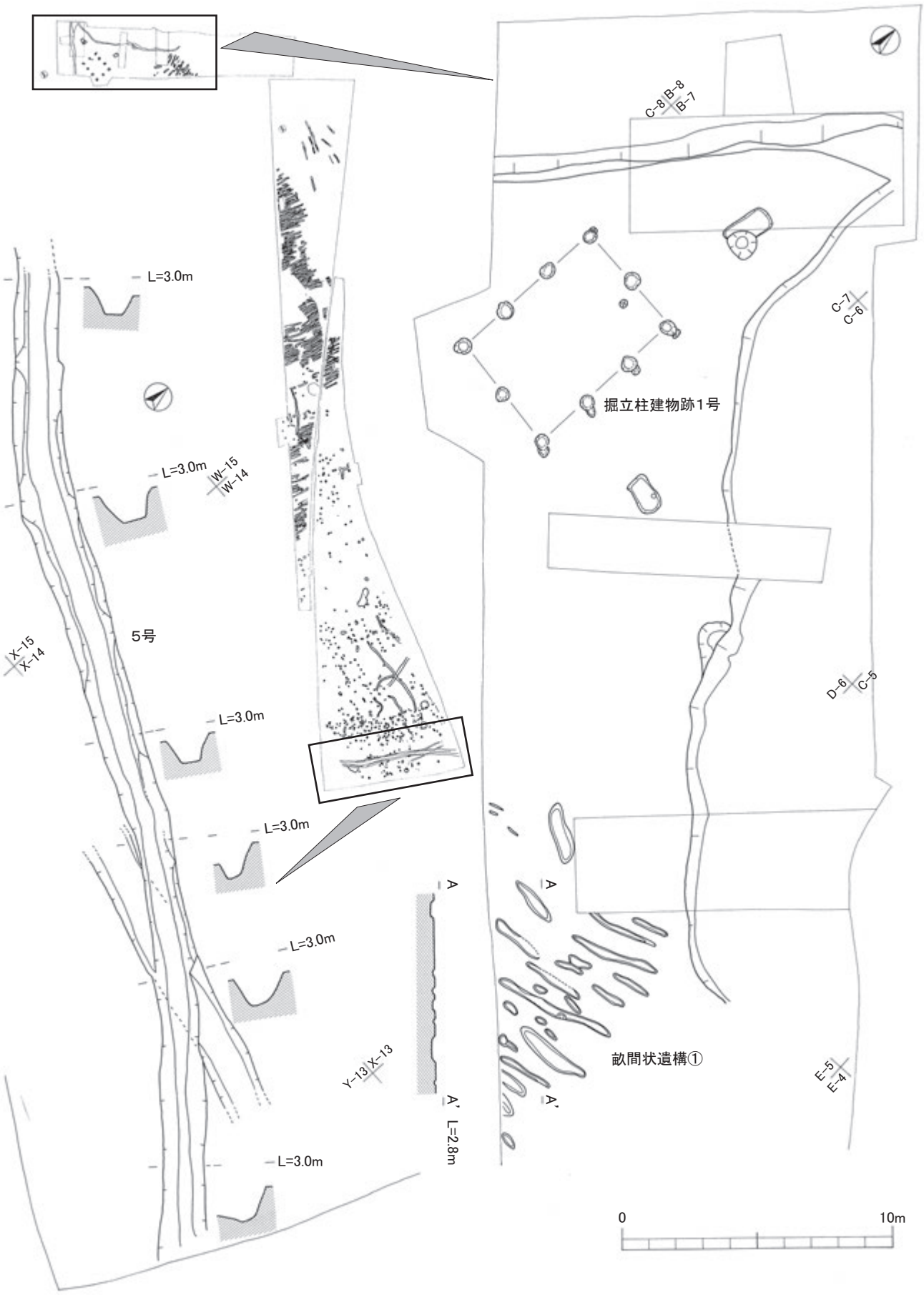
調査区域のほぼ中央部に当たる。①の北側と同じようなピットのあり方で，散在している状況である。この中で１棟の掘立柱建物跡が復元された。それ以外の場所では，ピットが極めて散らばった状況であったことから，建物として復元するには至らなかった。畑の畝跡の周囲に展開するピットもあるが，時期的な差異については，最終的に確認できていない。

②Ｓ～Ｚ－11～15区（第86図）

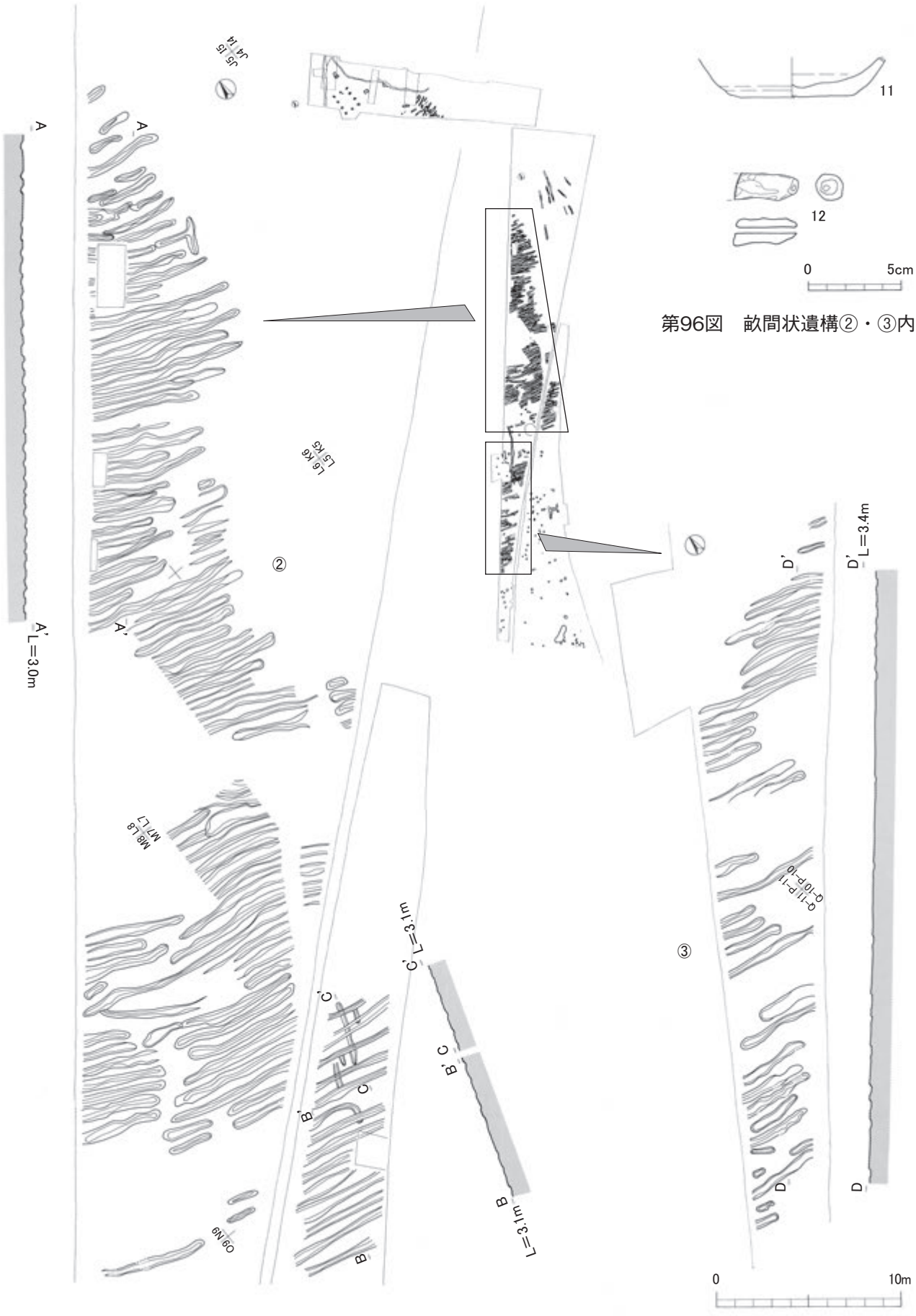
調査区域の南部に当たる。北側には３間×３間や２間×２間の掘立柱建物跡が何棟か存在していることから，この区域のピット群も建物として建つのではないかと考えて復元を試みたが，残念ながら復元できるには至らなかった。ただ，柱筋の並び方が，南北方向を始めとして１列に並んでいる状況も見られることから，根気強く復元に取り組めば何棟かは復元できる可能性を秘めているとも言える。本区域の北側はピットの数も少なく，そのために調査時点で建物を復元することができている。それに対して，南側はピットが密に集中している状況であることから，全くと言っていいほど，建物として復元するには至っていない。北側に比べて，ピットの規模がやや小さく，その間隔も狭いものが多く見受けられる。そのことから，柱穴と言うよりは，やや規模の大きい杭が打ち込まれた跡と考えるべきかも知れない。

（6）ピット群からの出土遺物（第97図13～28）

ピット群①②から出土した主な遺物をここにまとめて掲載する。13～21は土師器である。14と15は高台の断面が三角形状を呈する。15は外へ大きく開く。18は外底面がヘラで切り離された後，粘土を調整していない。19は鉢である。外底面中央部にススが付着している。二次焼成が考えられる。23～26は須恵器である。23は底部が欠損し，全形が明らかでないが，鉄鉢形を呈していると考えられる。26は頸部と肩部に二本の突帯を巡らせている壺である。27は鞴の羽口である。28は紡錘車である。紡輪は傘状をなし，直径は４㎝以上ある。紡茎は2.4㎝が残存し，直径は約3.5㎜である。

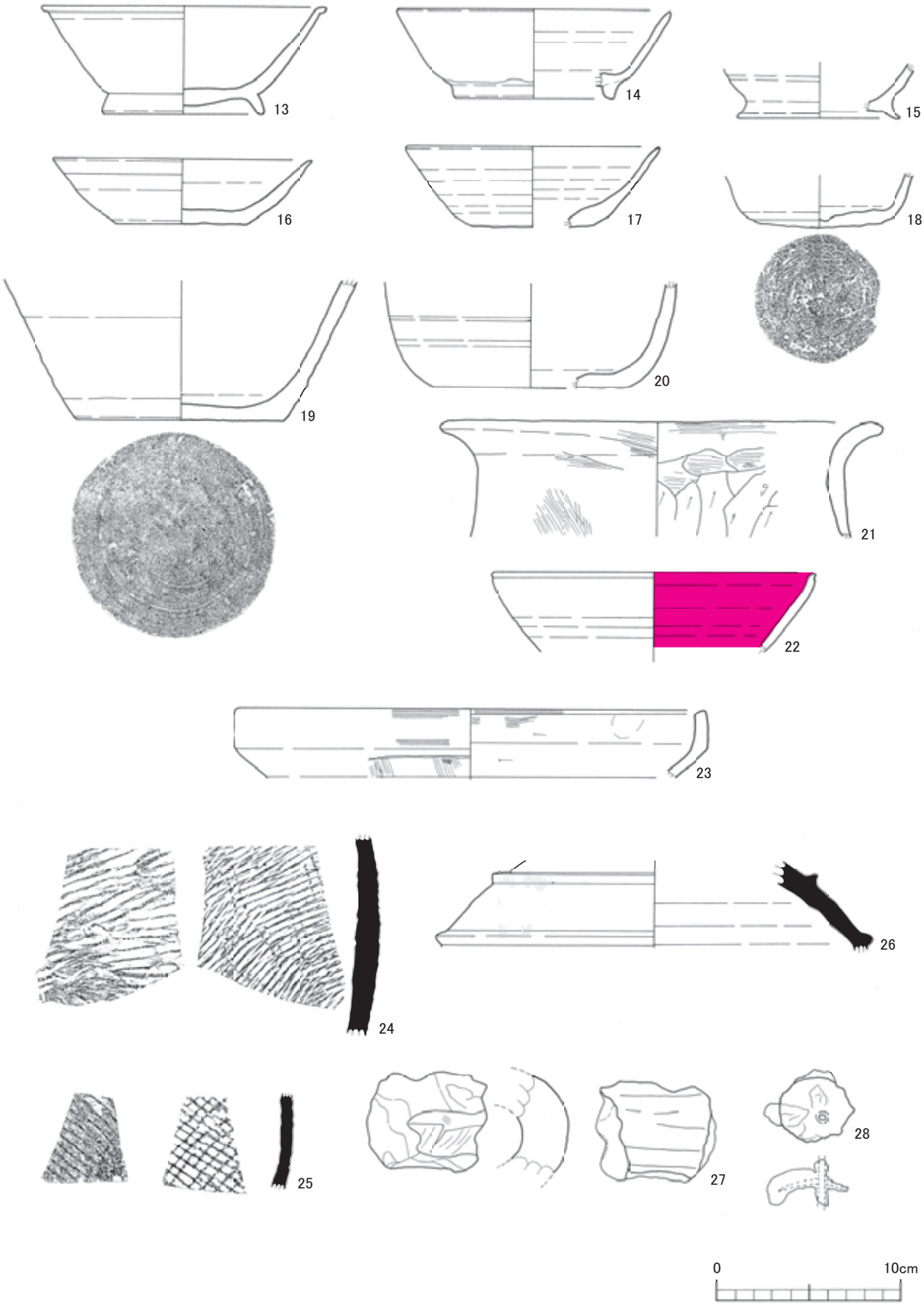


第94図　溝状遺構５号及び畝間状遺構①



第95図　畝間状遺構②・③

第96図　畝間状遺構②・③内遺物



第97図　ピット内遺物

掘立柱建物跡１号柱穴計測表

柱穴番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
1	66	52	46
2	59	(38)	39
3	59	(48)	39
4	65	(48)	54
5	57	(50)	41
6	61	53	62
7	62	(52)	53
8	57	(50)	54
9	55	(46)	56
10	58	(38)	42
11	(25)	(20)	21
12	37	(26)	26
13	(22)	(20)	20
14	(37)	(24)	19
15	(40)	(34)	34

掘立柱建物跡１号規模表

梁方向		桁方向	
柱穴間	距離（cm）	柱穴間	距離（cm）
1～9	395	1～4	555
1～10	171	1～2	138
10～9	177	2～3	153
2～8	392	3～4	144
3～7	393	10～5	575
4～6	384	9～6	566
4～5	168	9～8	161
5～6	158	8～7	149
		7～6	137

掘立柱建物跡２号柱穴計測表

柱穴番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
1	40	38	24
2	54	39	25
3	52	47	64
4	48	43	25
5	60	50	12
6	59	47	14
7	57	45	18
8	46	45	33
9	63	61	28

掘立柱建物跡２号規模表

梁方向		桁方向	
柱穴間	距離（cm）	柱穴間	距離（cm）
1～6	315	1～3	392
1～7	188	1～2	162
7～6	73	2～3	184
2～5	367	6～4	385
3～4	400	6～5	220
		5～4	105

掘立柱建物跡３号柱穴計測表

柱穴番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
1	46	45	21
2	39	33	27
3	59	54	33
4	46	42	38
5	52	42	39
6	68	51	26
7	36	33	13
8	51	49	30
9	(59)	44	30
10	50	40	23

掘立柱建物跡３号規模表

梁方向		桁方向	
柱穴間	距離（cm）	柱穴間	距離（cm）
1～9	340	1～4	467
1～10	147	1～2	126
10～9	152	2～3	132
2～8	325	3～4	112
3～7	347	10～5	488
4～6	370	9～6	429
4～5	168	9～8	104
5～6	156	8～7	120
		7～6	125

掘立柱建物跡４号柱穴計測表

柱穴番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
1	50	47	28
2	51	44	31
3	59	54	33
4	57	(50)	28
5	55	(48)	28
6	68	51	26
7	36	33	13
8	51	49	30
9	50	(34)	19
10	50	40	23

掘立柱建物跡４号規模表

梁方向		桁方向	
柱穴間	距離（cm）	柱穴間	距離（cm）
1～9	350	1～4	435
1～10	140	1～2	125
10～9	167	2～3	96
2～8	338	3～4	106
3～7	343	10～5	462
4～6	340	9～6	446
4～5	148	9～8	115
5～6	135	8～7	117
		7～6	126

掘立柱建物跡５号柱穴計測表

柱穴番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
1	49	43	51
2	50	36	30
3	37	34	10
4	42	40	31
5	34	33	23
6	39	32	30
7	50	49	(2)
8	51	49	28

掘立柱建物跡５号規模表

梁方向		桁方向	
柱穴間	距離（cm）	柱穴間	距離（cm）
1～7	304	1～2	112
1～8	125	8～3	438
8～7	124	7～4	434
2～6	317	7～6	123
3～4	128	6～5	106
		5～4	122

掘立柱建物跡６号柱穴計測表

柱穴番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
1	30	25	12
2	22	21	19?
3	22	17	14?
4	24	21	11?

掘立柱建物跡６号規模表

梁方向		桁方向	
柱穴間	距離（cm）	柱穴間	距離（cm）
1～4	107	1～2	236
2～3	140	4～3	260

表14　建物計測表（１）

掘立柱建物跡７号柱穴計測表

柱穴番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
1	50	47	27
2	45	42	5
3	47	40	16
4	57	52	36
5	42	(30)	13
6	48	46	11
7	63	41	7
8	59	54	22
9	41	(40)	20

掘立柱建物跡７号規模表

梁方向		桁方向	
柱穴間	距離（cm）	柱穴間	距離（cm）
1～8	239	1～4	346
1～9	106	1～2	82
9～8	83	2～3	97
3～7	210	3～4	71
4～6	242	9～5	372
4～5	77	8～6	350
5～6	141	8～7	200
		7～6	115

掘立柱建物跡８号柱穴計測表

柱穴番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
1	53	44	31
2	70	50	35
3	65	59	29
4	93	59	40
5	47	41	18
6	49	45	40
7	63	56	35
8	46	37	46
9	50	(38)	30
10	53	48	34
11	48	39	31
12	53	51	31
13	49	45	27

掘立柱建物跡８号規模表

梁方向		桁方向	
柱穴間	距離（cm）	柱穴間	距離（cm）
1～10	444	1～4	416
1～12	115	1～2	106
12～11	120	2～3	74
11～10	106	3～13	14
2～9	434	13～4	54
3～8	441	12～5	444
4～7	430	11～6	454
4～5	95	10～7	435
5～6	131	10～9	117
6～7	99	9～8	112
		8～7	122

掘立柱建物跡９号柱穴計測表

柱穴番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
1	75	48	11
2	60	43	30
3	(58)	44	16
4	68	41	18
5	45	45	(10)
6	(90)	71	19
7	49	34	8
8	54	48	17
9	69	49	13
10	59	38	18
11	38	(30)	29

掘立柱建物跡９号規模表

梁方向		桁方向	
柱穴間	距離（cm）	柱穴間	距離（cm）
1～8	408	1～3	592
1～9	242	1～2	293
9～8	98	2～3	249
10～7	99	9～4	600
2～6	336	9～10	168
2～11	148	10～11	138
11～6	130	11～4	176
3～5	290	8～5	506
3～4	108	8～7	115
4～5	117	7～6	94
		6～5	143

掘立柱建物跡10号柱穴計測表

柱穴番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
1	81	60	17
2	49	35	7
3	72	62	4
4	67	(59)	12
5	86	55	33
6	75	53	36
7	56	45	26
8	52	49	20
9	48	45	21
10	40	40	14

掘立柱建物跡10号規模表

梁方向		桁方向	
柱穴間	距離（cm）	柱穴間	距離（cm）
1～8	382	1～4	477
1～9	290	1～2	198
9～8	47	2～3	127
2～10	260	3～4	34
4～6	203	9～6	422
4～5	40	9～10	205
5～6	98	10～6	180
		8～7	112

表15　建物計測表（２）

表16　１号土坑内遺物観察表

挿図	番号	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		調整		備考
							外面	内面	外面	内面	
91	1	土師器	甕（鍋）	23	—	—	橙色	橙色	ヨコナデ，ケズリ	ヨコナデ，ケズリ	外面にスス付着
	2	須恵器	蓋	13.4	—	—	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—

表17　２号土坑内遺物観察表

挿図	番号	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		調整		備考
							外面	内面	外面	内面	
92	3	土師器	椀	16.6	—	—	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	4	土師器	椀	—	8.6	—	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	5	土師器	Ⅲ	8.9	—	—	黄橙色	明褐色	回転ナデ	回転ナデ	—
	6	土師器	Ⅲ	7.5	—	—	黄褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	—
	7	土師器	椀	—	—	—	灰褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	—
	8	土師器	甕	—	—	—	黄褐色	明褐色	回転ナデ	回転ナデ	—
	9	土師器	甕	—	—	—	明褐色	明褐色	回転ナデ	回転ナデ	—
	番号	種別	器種	色調		調整		備考			
				外面	内面	外面	内面				
	10	須恵器	甕	灰色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	格子目タタキ	同心円当て具	胴部			

表18　畝間状遺構②③内遺物観察表

挿図	番号	遺構名	出土区	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		調整		備考
									外面	内面	外面	内面	
96	11	畝間状遺構③	O-10	赤色土器Ⅲ類	坏	—	6.8	—	浅黄色	浅黄色	回転ナデ	回転ナデ	—
	番号	遺構名	出土区	種別	品種	最大長 (cm)	最大径 (cm)	最大厚 (cm)	色調	備考			
	12	畝間状遺構②	N- 9	土製品	錘	(3.4)	1.4	—	にぶい黄橙色	—			

表19　ピット内遺物観察表

挿図	番号	年度・遺構番号	出土区	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		調整		備考
										外面	内面	外面	内面	
97	13	H9・ｲｺｳ803	W-14	Ⅳ	土師器	椀	15.4	8.8	5.8	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	14	H10・土坑	U-13	—	土師器	椀	14.7	8.4	4.8	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	15	H10・ｲｺｳ371	W-14	—	土師器	椀	—	8.8	—	にぶい橙色	灰黄色	回転ナデ	回転ナデ	—
	16	H10・土坑	U-13	—	土師器	坏	13.8	7	3.5	淡黄色	淡黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	17	H10・ｲｺｳ371	W-14	—	土師器	坏	13.6	6.6	4.3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	18	H9・ｲｺｳ777	X-14	Ⅳ	土師器	坏	—	7.1	—	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	19	H9・ｲｺｳ5	W-15	Ⅲb	土師器	鉢	—	11.3	—	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	外底面にスス付着，中世遺構埋土中より
	20	H9・ｲｺｳ17	W-14	Ⅲb	土師器	鉢	—	10.4	—	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	中世遺構埋土中より
	21	H10・土坑	U-13	—	土師器	甕	24.2	—	—	にぶい黄橙色	浅黄色	ナデ	横ナデ+タテケズリ	—
	22	H10・ｲｺｳ371	W-14	—	赤色土器Ⅰ類	坏	17.4	—	—	灰白色	淡黄色	回転ナデ	回転ナデ	内面赤色顔料塗布
	番号	年度・遺構番号	出土区	層位	種別	器種	色調		調整		備考			
							外面	内面	外面	内面				
	23	H9・ｲｺｳ742	X-13	Ⅳ	須恵器	鉄鉢形	にぶい黄橙色	にぶい橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	口径25.2㎝			
	24	H9・ｲｺｳ820	W-15	Ⅲb	須恵器	甕	にぶい黄褐色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	平行タタキ	同心円→平行当て具	—			
	25	H9・ｲｺｳ803	W-14	Ⅳ	須恵器	甕	にぶい赤褐色	灰黄褐色	格子目タタキ	平行当て具	—			
	26	H10・ｲｺｳ371	W-14	—	須恵器	壺	暗灰黄色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—			
	番号	年度・遺構番号	出土区	層位	種別	品種	最大長 (cm)	最大径 (cm)	最大厚 (cm)	色調	備考			
	27	H9・ｲｺｳ831	W-14	Ⅳ	土製品	羽口	—	—	—	灰黄色	—			
	番号	番号	出土区	層位	器種	部位	最大長 (cm)	最大厚 (cm)	最大幅 (cm)	重量 (g)	備考			
	28	H9ｲｺｳ308	U-11	—	紡錘車	紡輪・紡茎	—	2.4	4.3	17.06	—			

第２節　遺　　物

１遺物の出土状況

Ⅲｂ層からⅣ層を包含層として土師器や須恵器等が出土している。土師器の中には墨書土器１点のほかに刻書土器が他とは比べものにならないほど多数出土しており，本遺跡の特徴と言える。

２遺物

土師器

椀（第98図29～49）

29と30は断面三角形の高台を有する。31は円柱状の高台を有する，充実高台椀である。高台部分は意識的に作られ，立ち上がり部はナデられている。33と34は胴部が直線的に開くものである。35と38は口縁部付近が緩やかに外反している。36と37は胴部が内湾気味に立ち上がる。39～42は「ハ」の字状に広がる高台を持つ。40は二次焼成とみられるススが内外面に付着する。43は高台に輪積み痕が残る。44・46は脚部が低く高台内の中央部付近が盛り上がる。48の高台内はていねいにナデ調整がしてあり，中央が円盤状にわずかに突出している。

坏（第99図50～96）

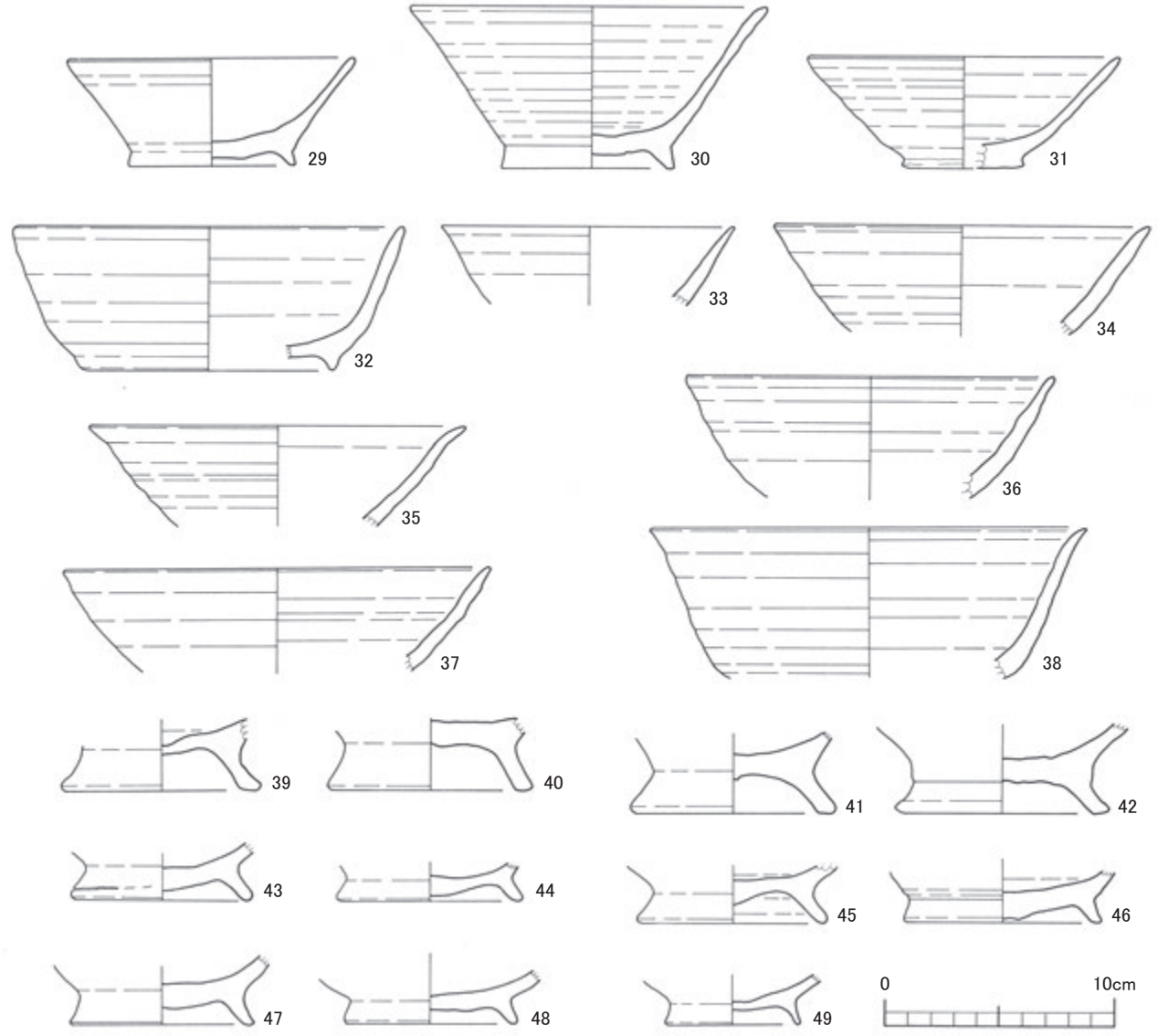
坏は器形と技法により，以下のように分類した。

・Ⅰ類（第99図50～54）

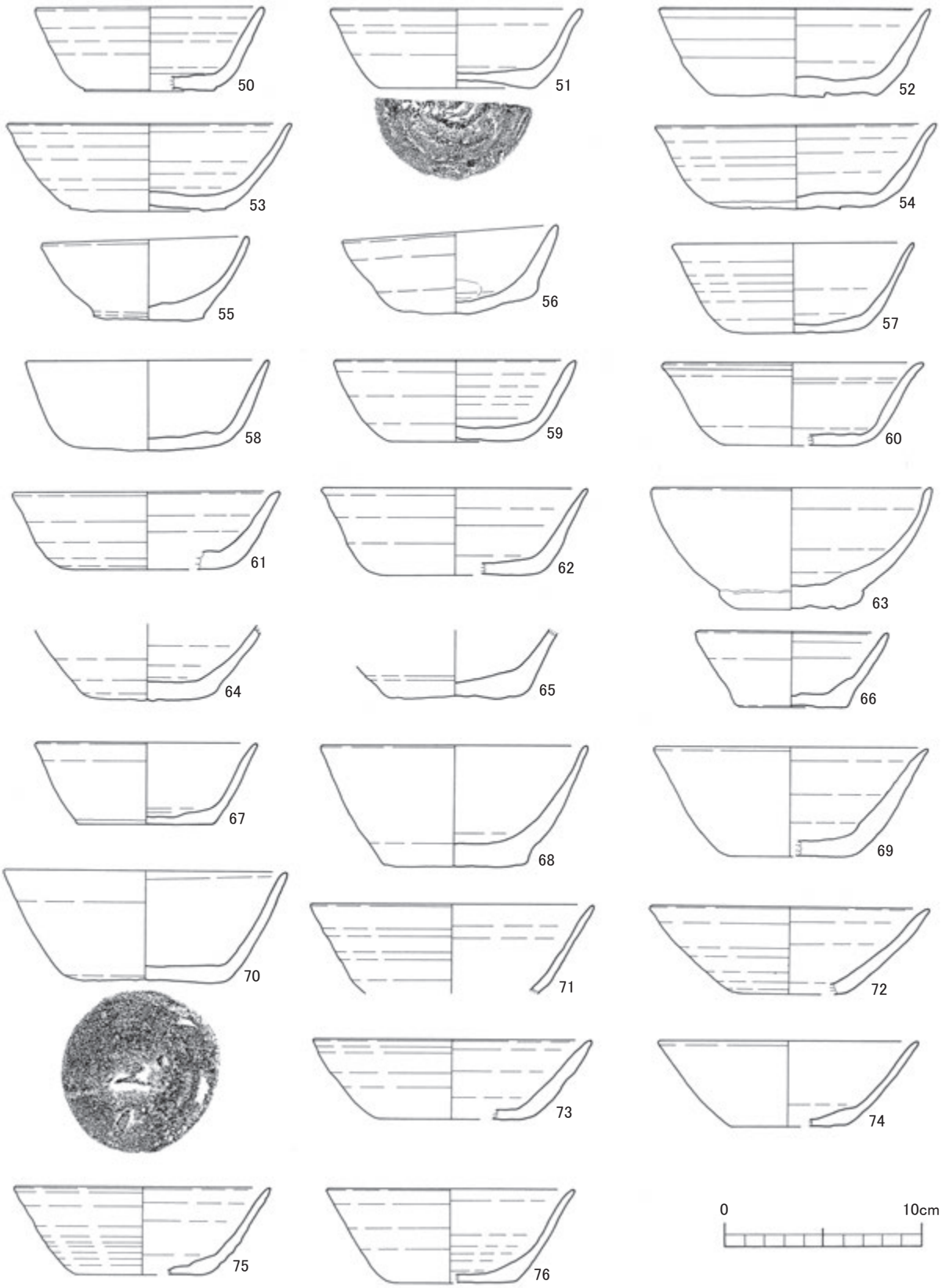
底部をヘラ切りしたままで調整が無く，比較的作りが雑なもの。52は回転台からヘラで切り離す際に，外底面の粘土が剥離している。

・Ⅱ類（第99図55～65）

底部ヘラケズリにより整形したもので，胴部の立ち上がり部分は丸味を持つ。56と63は回転台からヘラで切り離す際にはみ出した底部側面の粘土を調整していない。



第98図　古代遺物（１）土師器椀



第99図　古代遺物（２）土師器坏

60の口縁端部はわずかに外反する。外底面はヘラで切り離した後，調整され，平坦になっている。65は二次焼成を受けている。

・Ⅲ類（第99図66～71）

器高が高く，胴部が直線的に開くもの。

・Ⅳ－１類（第99図72～76）

口径に比べて底径が小さい。そのため胴部が大きく開く形状を呈する。器高４㎝以上。

・Ⅳ－２類（第100図77～85）

口径に比べて底径が小さい。そのため胴部が大きく開く形状を呈する。器高４㎝未満。81は胴部外面下位に回転による強いナデの痕跡がみられる。82と83の胴部はおおむね直線状にのび，口縁部は玉縁状になっている。

・Ⅴ類（第100図86～91）

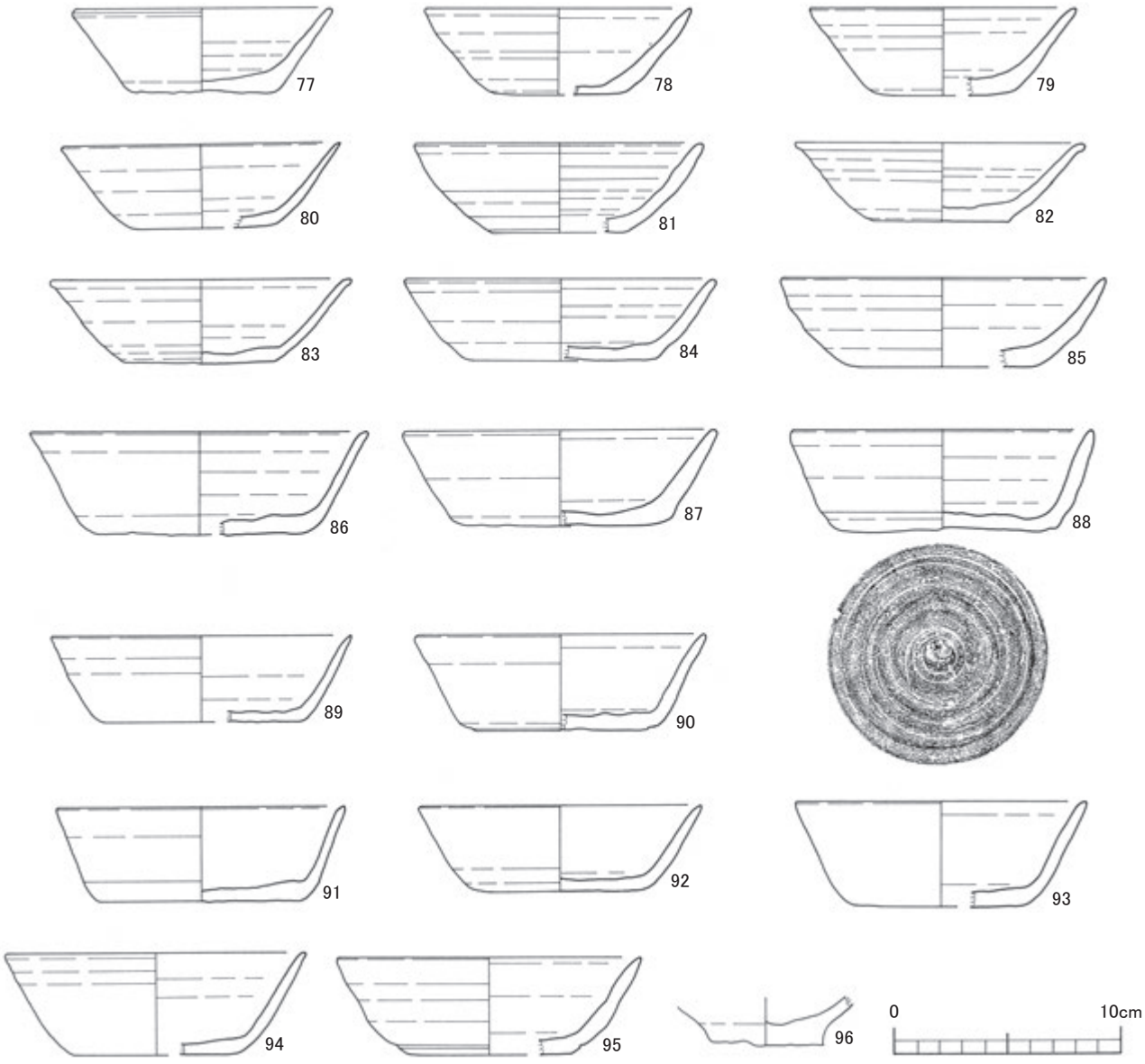
口径も底径も大きいものであるが，器高が高くなく，側面観は箱形を呈する。90は見込みにロクロ目が残る。88はほぼ完形の資料である。外底面はヘラによる切り離しの後，丁寧に調整される。胴部低位はヘラケズリされ，段がつく。

・Ⅵ類（第100図92～95）

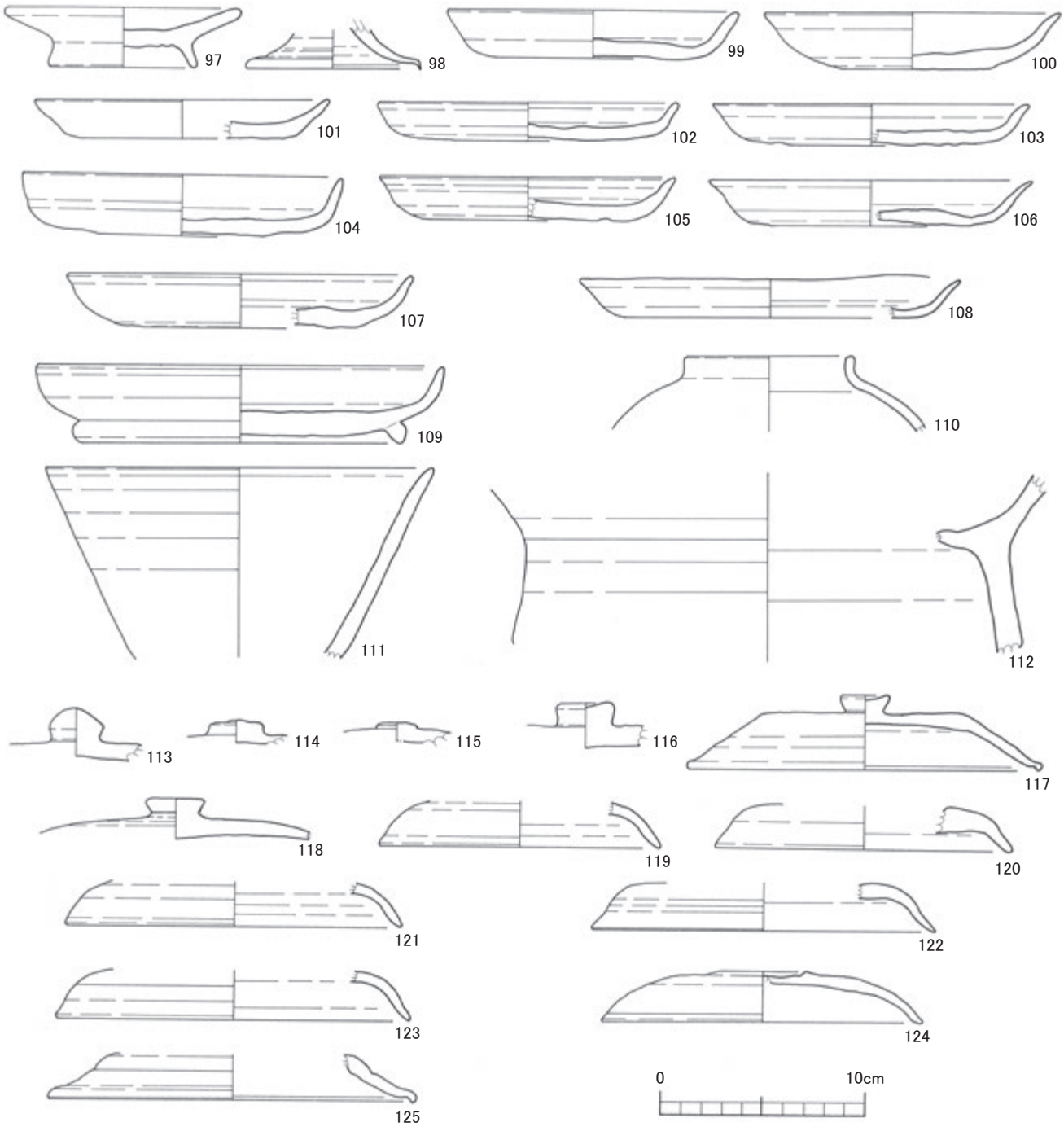
底部がヘラ切りされた後，調整が丁寧に行われている。

・Ⅶ類（第100図96）

底部が厚く，円盤状を呈する。立ち上がり部はナデられている。



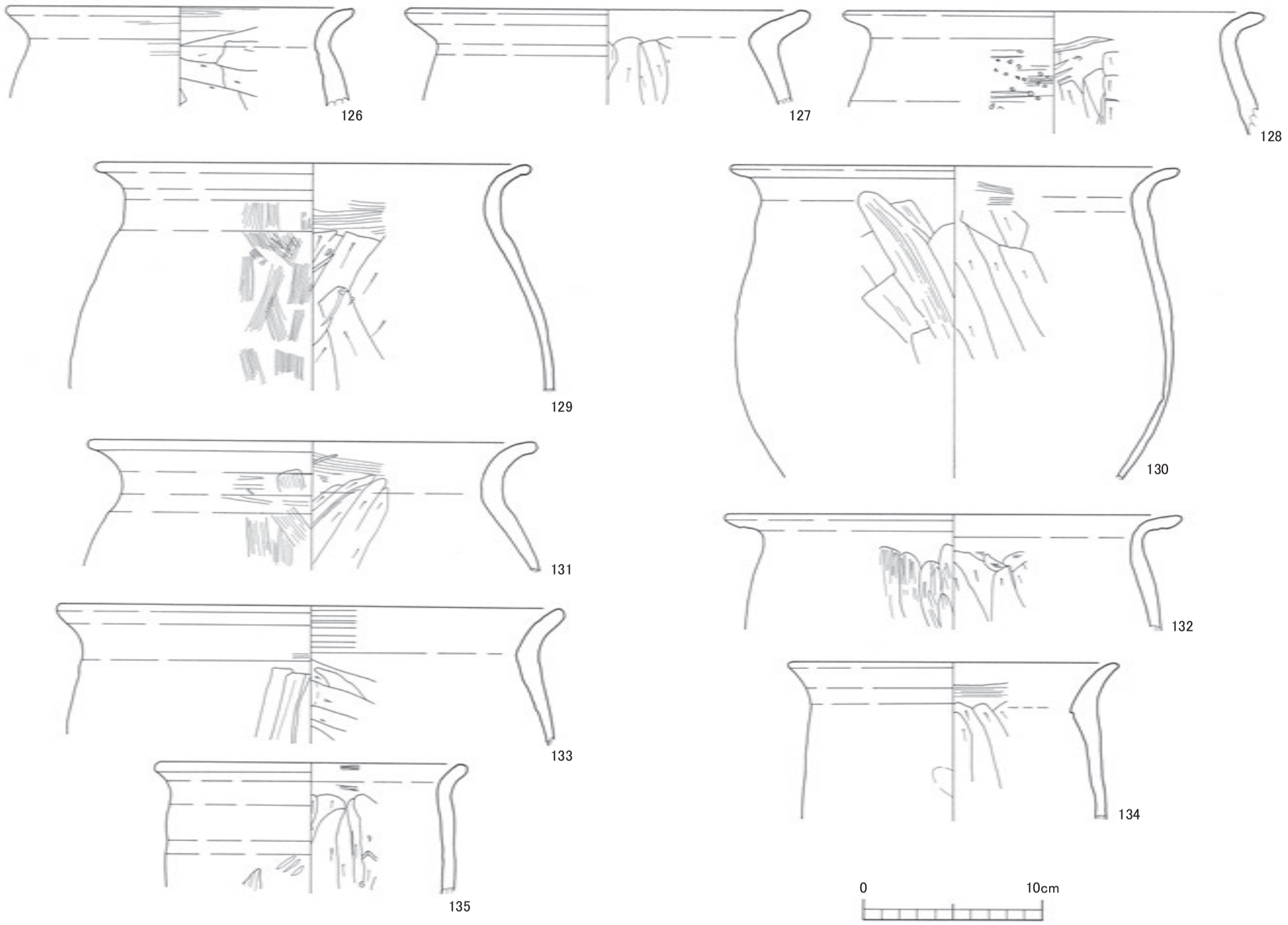
第100図　古代遺物（３）土師器坏



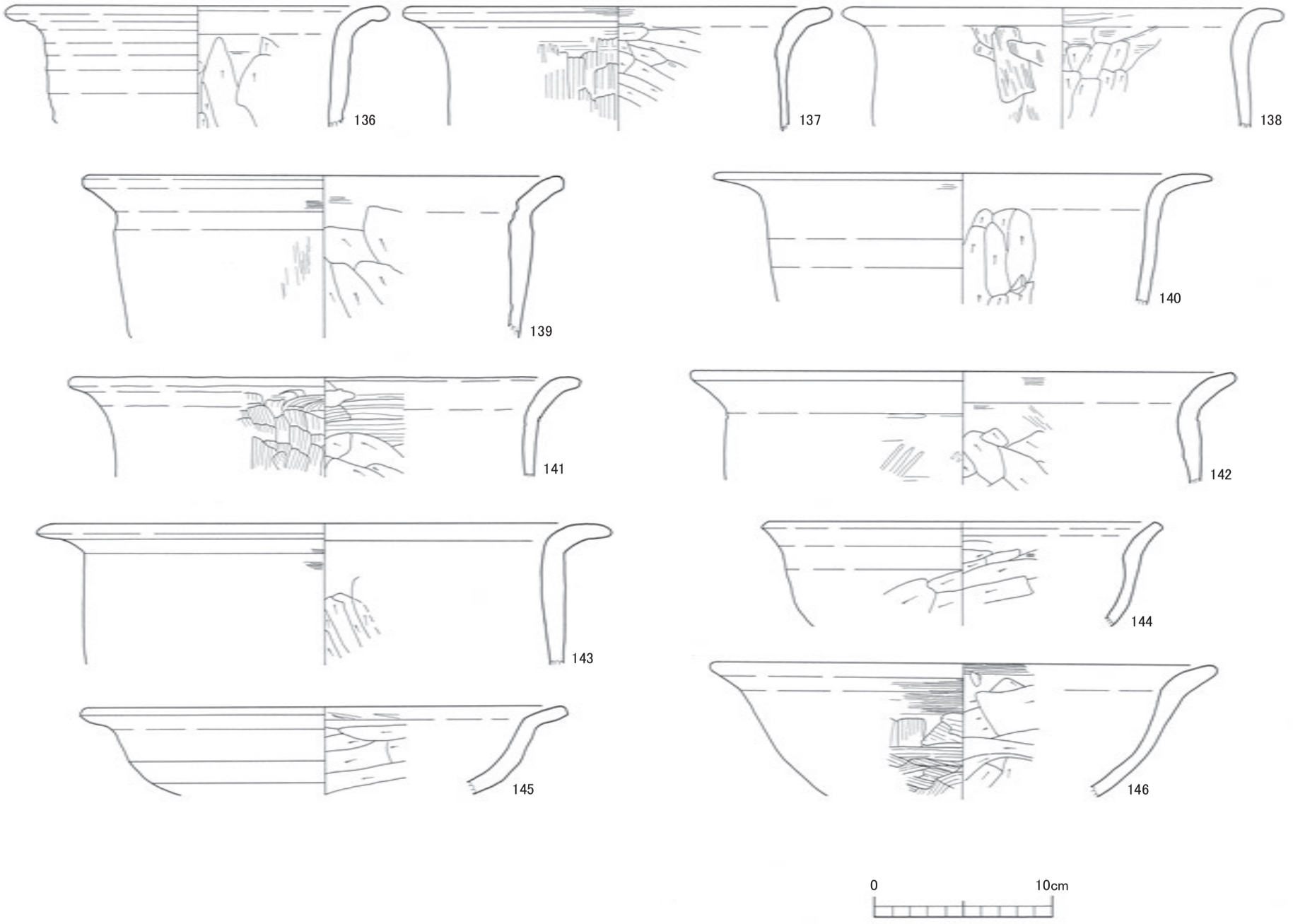
第101図　古代遺物（４）土師器その他

その他（第101図97～125）

97は高台付皿である。皿部は短く平坦に近いため，深さは１㎝と浅い。高台はまっすぐ「ハ」の字状に開く。98は高坏である。脚部の裾が拡がり，端部を下方に曲げる。99～108は皿である。口径14～18.3㎝，器高1.8～2.9㎝で浅い皿が中心である。102は見込み中央付近にススが付着しているが，使用法については不明である。106は外反気味に開く。104は垂直に近い角度で開く。109は底面に輪高台が付いたもので盤に分類した。口径及び底径は大きいが，器高はそれほど高くない。110は頸部の短い壺と思われる。内外面共に丁寧にナデられ内面にススが付着する。111と112は鉢である。111は胴部が直線的に開く。112は高台付近のみであるが，大型の鉢であると思われる。高台は高さ５㎝以上あり，角度は直立に近い。内面に二次焼成を受けている。113～125は蓋である。113は頂部が山形になった擬宝珠様の摘みを，114は扁平な擬宝珠様の摘みを有する。115は摘みが特に低い。116・117は逆台形様で上面が窪んだ摘みを有する。118は摘みの上面がほぼ水平である。119と121は細かく調整され，丁寧なつくりである。122と123は口縁端部がわず



第102図　古代遺物（５）土師器甕



第103図　古代遺物（6）土師器甕

かに外反する。124は摘みのない倒坏状の蓋で，天井部中央が窪んでいる。125の口縁端部は下方に屈曲させている。

甕（第102図126～第104図149）

甕は口縁部の器形と技法により，以下のように分類した。

・Ⅰ類（第102図126～133）

胴部が若干張り気味で丸味を持つ。口縁部は斜上方に長く伸びる。胴部に最大径が求められる。128の外面は格子叩きで整形された後，ナデている。132の口縁部付近は逆Ｌ字状に大きく外反する。

・Ⅱ類（第102図134～第103図143）

口縁部はⅠ類と同じであるが，胴部が張らない。最大径は口縁部に求められる。134と135は口径が17㎝未満で一回り小型である。139は頸部外面が削られることで内傾した後，口縁部に至る。

・Ⅲ類（第103図144～146）

底部より内湾しながら立ち上がり，口縁部に至る。胴部は他と比べて深さが浅く，鍋の形態に似る。

・Ⅳ類（第104図147）

胴部が大きく横に張り，須恵器の甕に近い形態である。口縁部の内外面にミガキ調整がなされ，造りが丁寧である。

148と149は胴部の中位あたりである。外面に叩き痕がある。

黒色土器（第105図150～156）

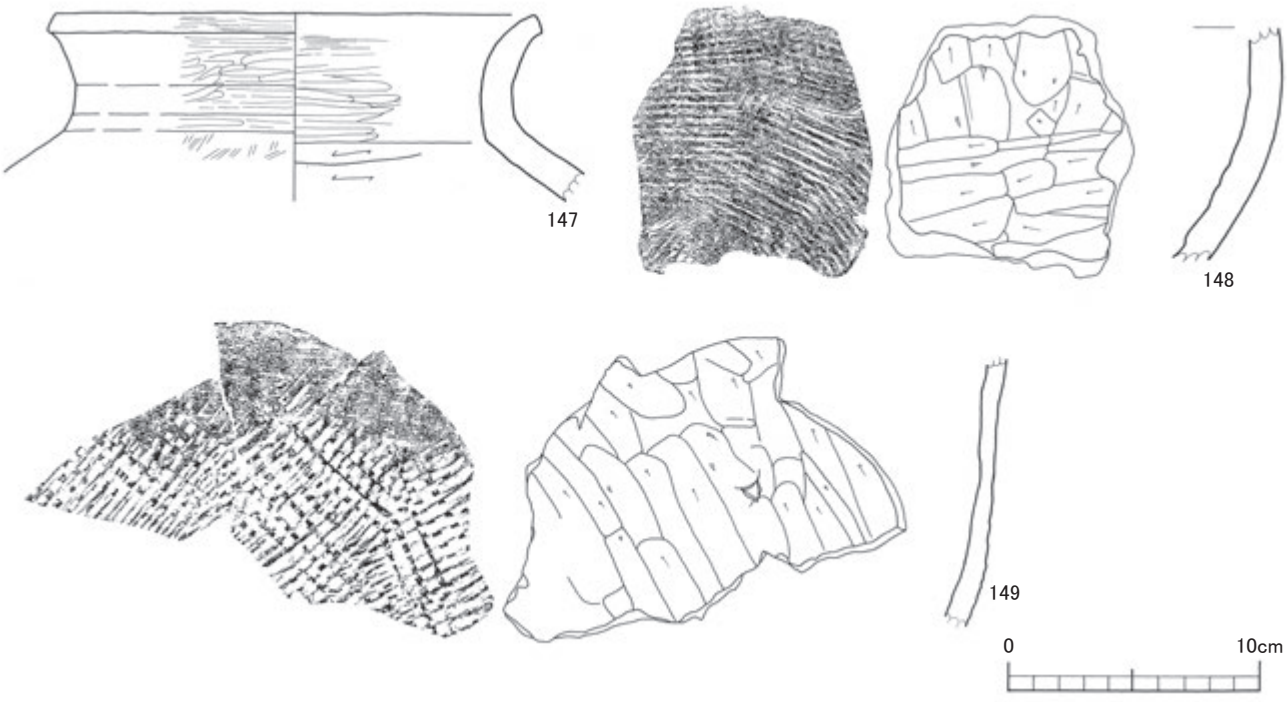
内面のみを黒く燻した内黒土器をⅠ類に，内外面とも黒く燻した黒色土器をⅡ類とした。器種は椀・坏である。152～154は高台がやや高く，「ハ」の字状に広がる。155・156は高台がやや低く，断面三角形である。古代末期に位置づけられるものと思われる。

赤色土器

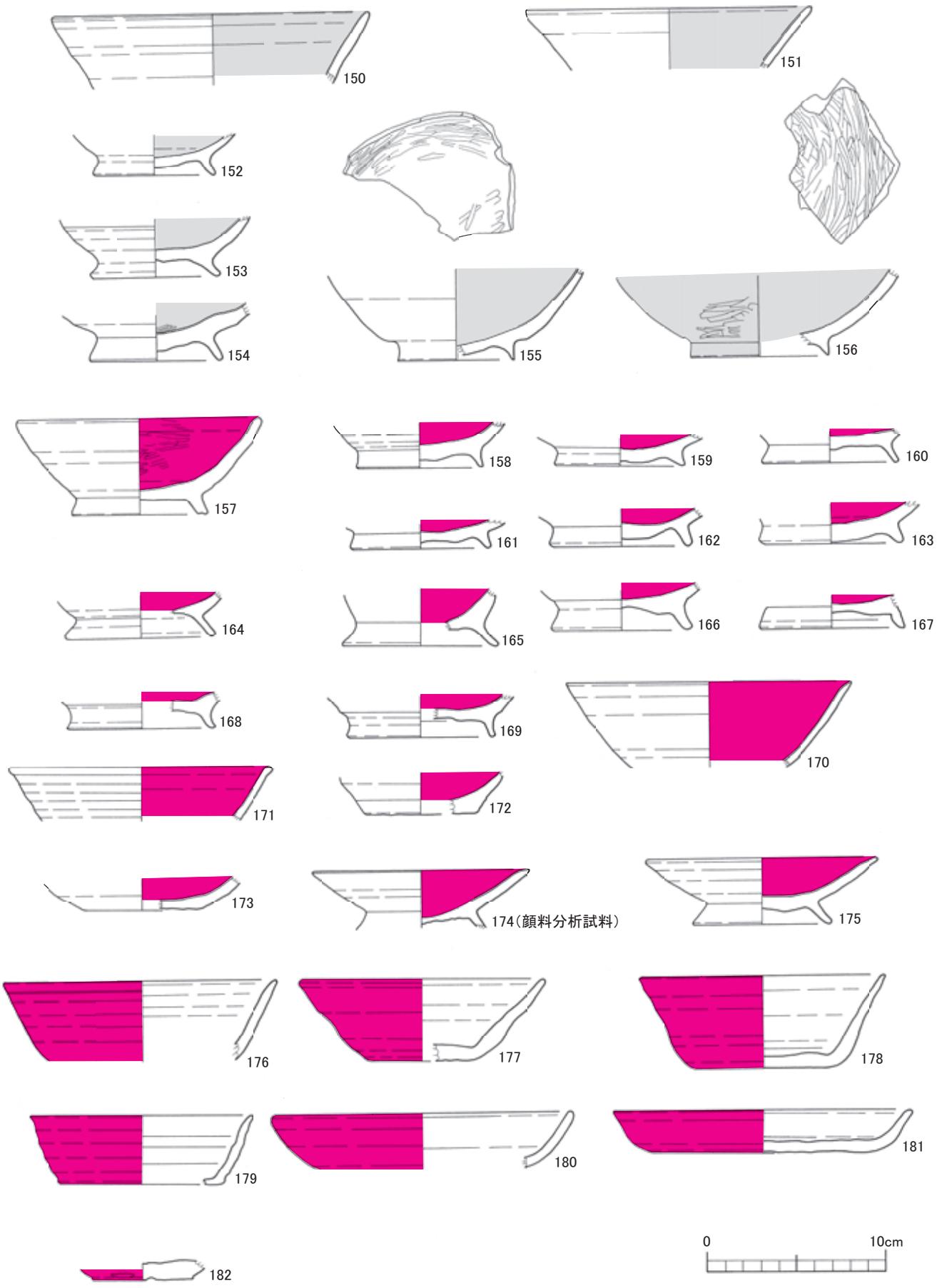
赤色顔料を内面にのみ施されたものをⅠ類，外面にのみ施されたものをⅡ類，内外面に施されたものをⅢ類とした。

・Ⅰ類（第105図157～175）

157～169は椀である。157は畳付が窪んでおり，高台内側がほぼ平坦である。また胎土が他と違って粗い。159は高台がやや低く，断面は三角形状を呈する。古代末期に位置づけられる。161の高台は低く，あまり開かない。163は高台内側の中心部の調整が粗く，高台とほぼ同じ高さまで盛り上がっている。164・165の高台はやや高く，「ハ」の字状に広がる。166は高台内側が調整のため窪んでいる。167は高台内側の調整が粗く，ヘラ切り離しの際の粘土が残っている。169は胴部下位に稜を持ち，高台はあまり開かず短い。高台内側は調整のため窪んでいる。170～173は坏である。171は口縁部を肥厚させ，玉縁状にしている。172は円盤状の底部を有し，立ち上がり部はナデられている。174・175は高台付皿である。174の胴部は底部よりまっすぐ開く。見込みに広くススが付着しており，燈明皿として使用された可能性



第104図　古代遺物（７）土師器甕



第105図　古代遺物（８）黒色土器・赤色土器

が考えられる。

・Ⅱ類（第105図176～182）

181以外は坏である。179の器高は比較的低く，側面観は箱形に近いものである。180・181はローリングを受け，顔料の剥落が著しい。182は薄い円盤状の底部を有する。底部周辺はヘラ切りの際の粘土がはみ出したまま無調整である。

・Ⅲ類（第106図183～192）

183～187は椀である。183は高台内面のヘラ切り離し痕より，ロクロが左回転であったことが推察できる。見込みはほぼ平坦である。184の高台は「ハ」の字状に広がり，高台内側は盛り上がる。188～191は坏である。188の器壁は薄く，口縁端部はわずかに外反する。189は見込み・外底面ともに雑な仕上げである。

須恵器

坏（第107図193～209）

坏は高台付坏と，高台無し坏に二分できる。193は高台の畳付きが窪んでいる。195は高台が底面の外側に短く付き，底部からの立ち上がりは丸味を持つ。196は口径が最大で，口縁部が外反する。197は胴部が直線的に立ち上がり，箱形を呈すると考えられる。199～209は高台の無い坏である。199は胴部外面の立ち上がり部分にヘラケズリが施されている。200と202は口縁部は直線的に開き，口縁端部がわずかに外反する。206は内外面に火襷がはっきりと残り全体の色調も橙色である。見込みにロクロ目をはっきりと残し，外底面にヘラ切り痕を残す。

椀（第107図210～214）

210は断面四角形の短い高台を有する。212は高い高台が外に大きく開く。

双耳坏（第107図215）

高台付坏の胴部中位の２か所に，断面四角形の把手状のものを貼り付けている。把手は上方あるいは水平に外に向かっていると考えられるが，形状は不明である。高台内面の中心よりやや外側に×印が篦書きされる。

高坏（第107図216）

脚部の裾が拡がり，端部を下方に曲げている。

蓋（第108図217～229）

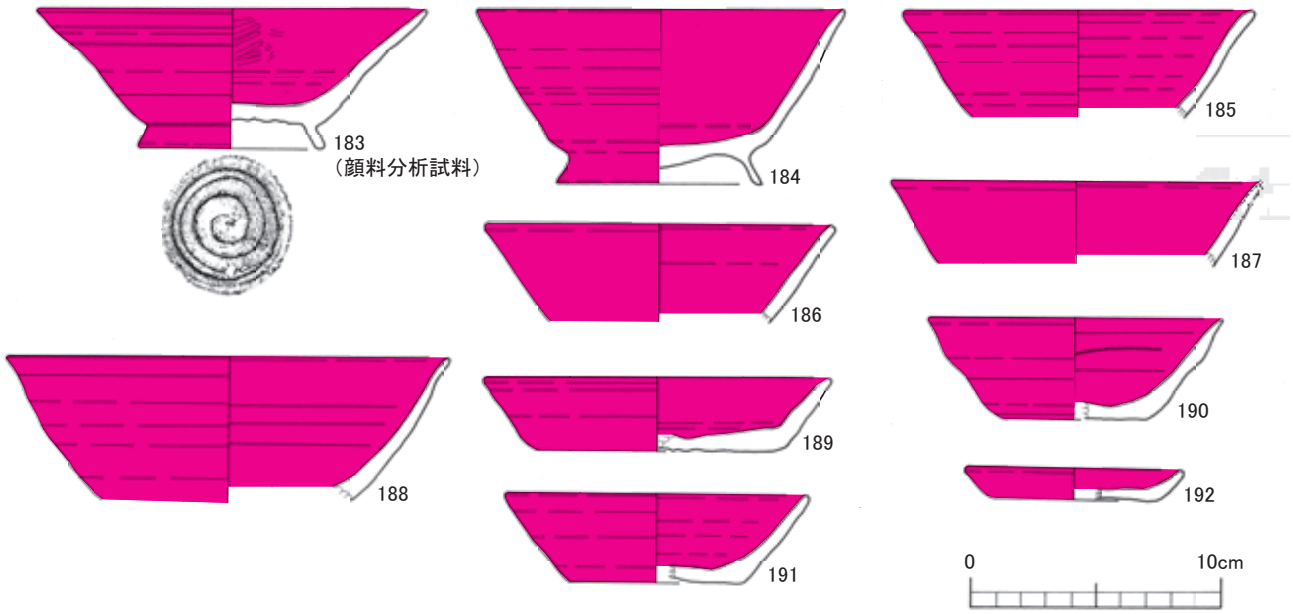
217～219は頂部が山形になった擬宝珠様の摘みを有する。219は特に高い頂部である。220～223は扁平な擬宝珠様の摘みを有する。221は径が小さく，端部を大きく下方に屈曲させるもので，壺の蓋である可能性がある。223は頂部がわずかに窪んでいる。225と227は天井部端部を下方に折り曲げている。226は端部近くの内面に断面三角形のかえりがつく。228は内面が磨られて光沢する部分をもつ転用硯である。端部外面に稜を持つ。229はつまみのない倒坏状の蓋であると思われる。

皿（第108図230～232）

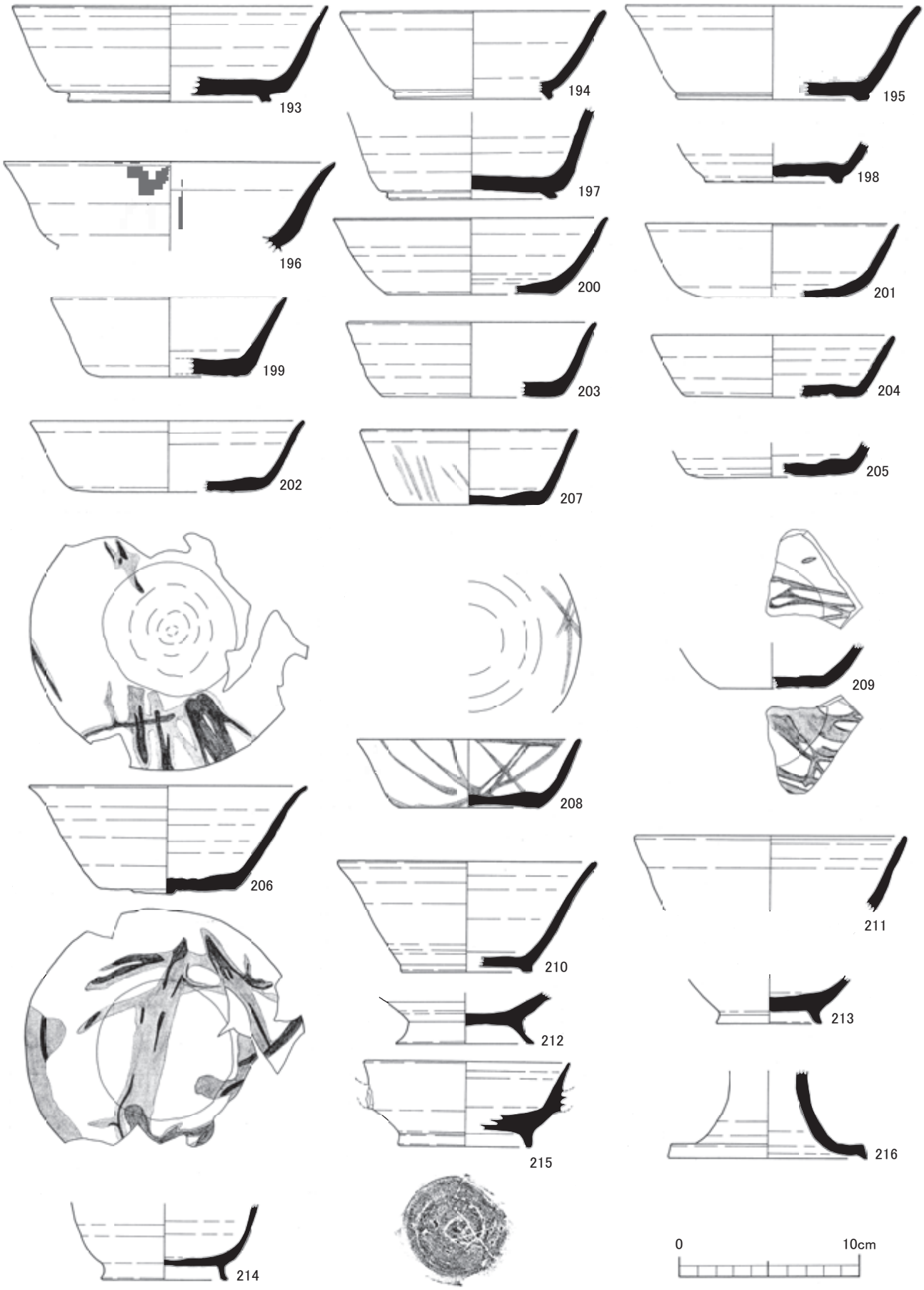
いずれも底部は平坦で口縁端部はわずかに外反する。232は内面に火襷が残る。

甕（第109図233～第112図250）

233～241は口縁部から頸部である。233～236は外反する口縁部が端部近くで屈曲し，二重口縁状となる。233は鋸歯文が，235と236には櫛描波状文が施される。237～241は頸部が締まり，口縁部は短く外反している。外面は格子叩きや平行叩きがみられ，内面には同心円当て具がみられる。241は沈線による鋸歯文が施される。242～250は胴部から底部である。243は焼成不良で土師質である。内面に車輪文タタキがみられる。



第106図　古代遺物（９）赤色土器



第107図　古代遺物（10）須恵器坏・椀等

鉢（第112図251・第113図252）

251は低く断面三角形の高台を有する。252は高台を欠損している。片口を有しており，内外面共にヨコナデで仕上げている。

壺（第113図253～第114図268）

253～257は口縁部から頸部である。253と254は瓶である可能性もあるが，壺類とした。253と255は短く外反する。254は外反する口縁部が端部近くで屈曲し，甕のような二重口縁状となる。256は頸部が直行し長い。257・258，262は肩部に断面三角形の突帯を巡らせて強調させている。258は突帯の接合痕が上下に残り，補強の意図を持っていることが窺える。260の胴部は球状を呈する。261は頸部と肩部の中間に突帯を巡らせてたものである。内面下位には同心円タタキがみられる。263の内底面には用途は明確ではないが，使用によって生じた痘痕状の剥離が一面に認められる。264と266は縁に沿って外開きの高台を有する。264の内底面には指ナデによる調整痕が残る。底径は12.8㎝を測る。265は回転台整形の底部付近である。立ち上がり付近に段をつけ，底面にはヘラによる切り離し痕がみられる。268は輪高台付きで胴部は内湾して立ち上がる。外面には横方向のヘラケズリが施される。

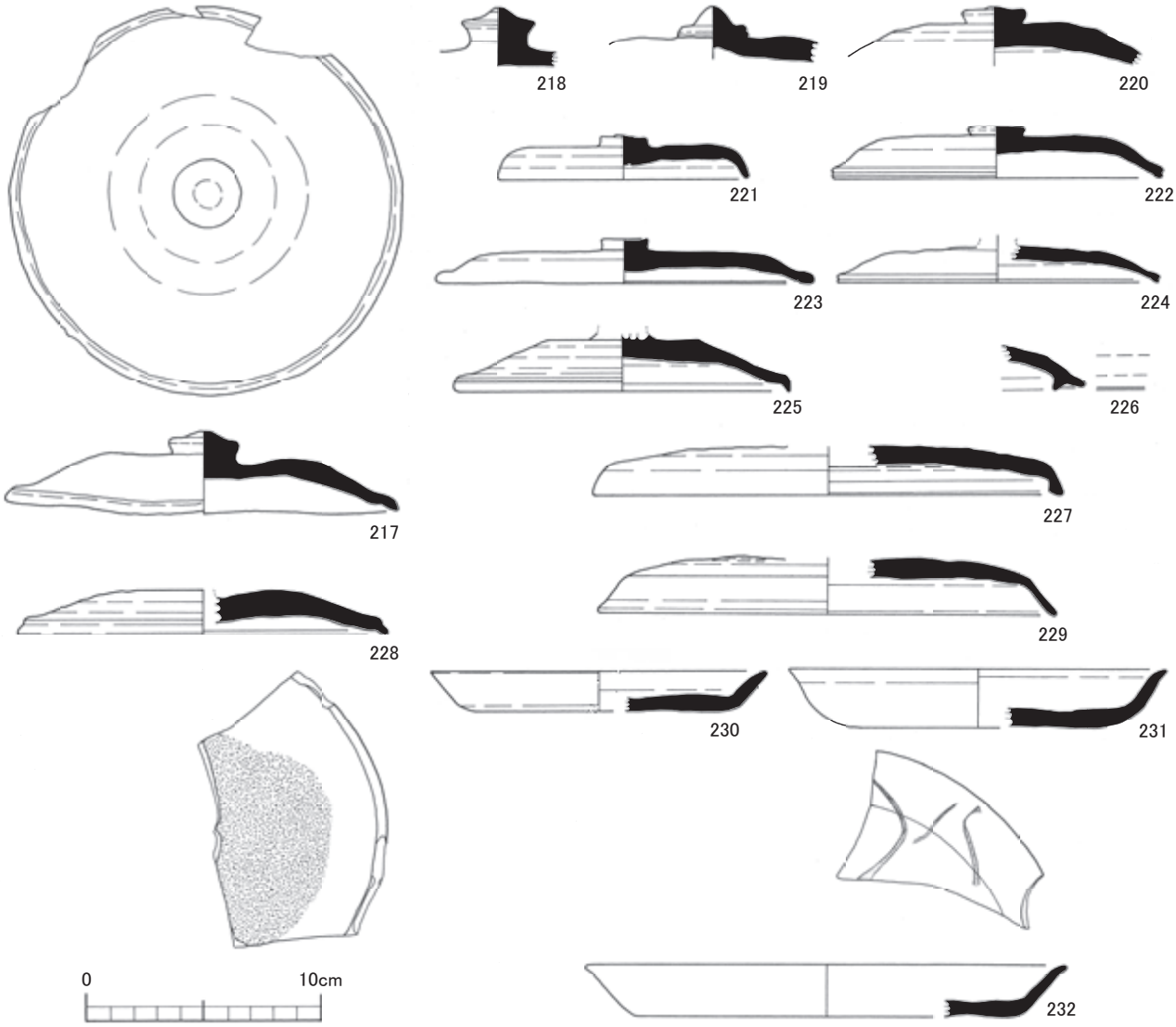
土製品

紡錘車（第115図269～275）

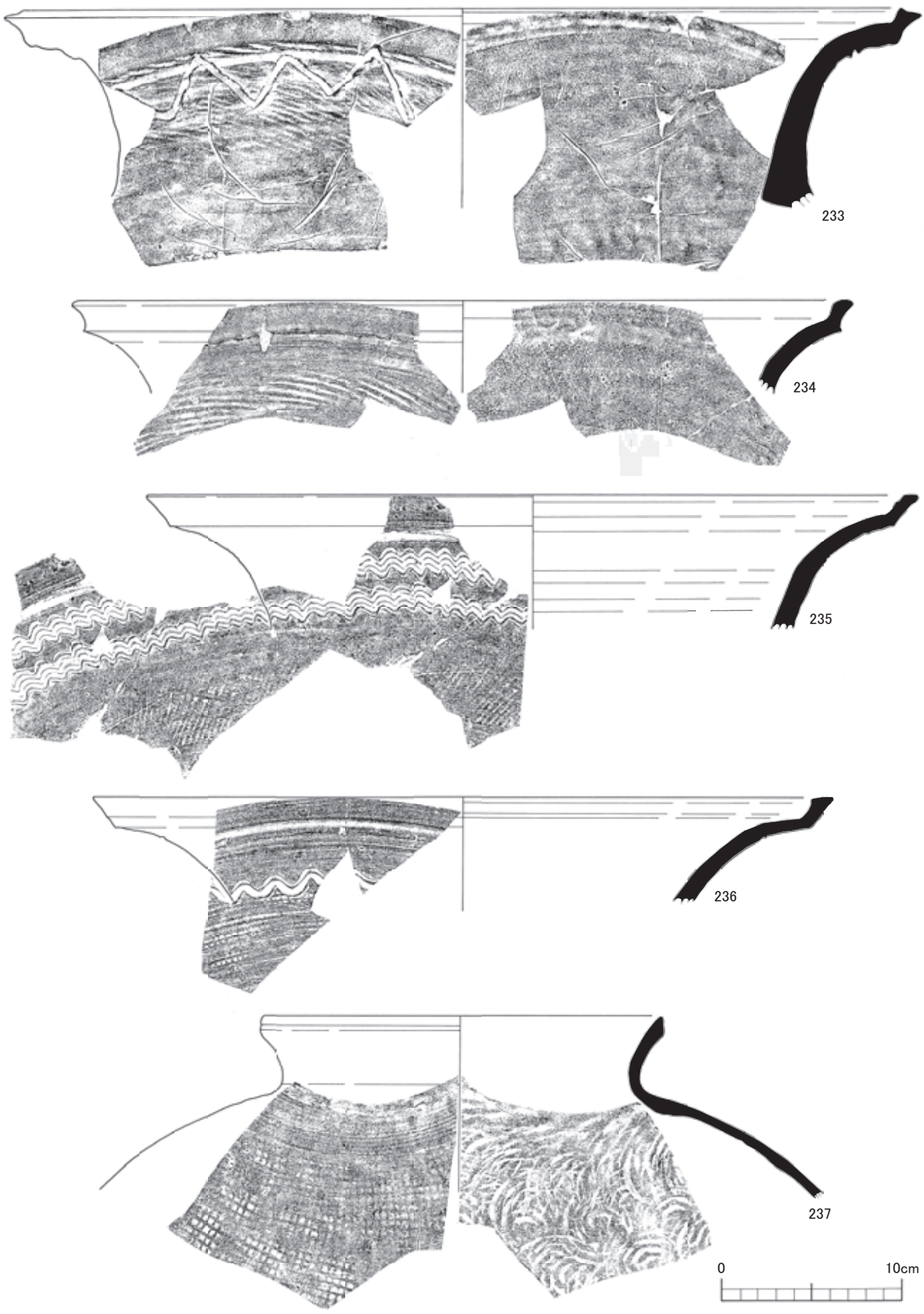
269～275は坏の胴部を取り除き，平たい円盤状に形成し，中心付近に孔を穿って紡輪としている転用品である。269は両面に赤色顔料が塗布されている。270は下面にヘラによる切り離し痕が残る。272は両面ともよく研磨されており，ヘラによる切り離し痕等が残らない。

鞴の羽口（第115図276～279）

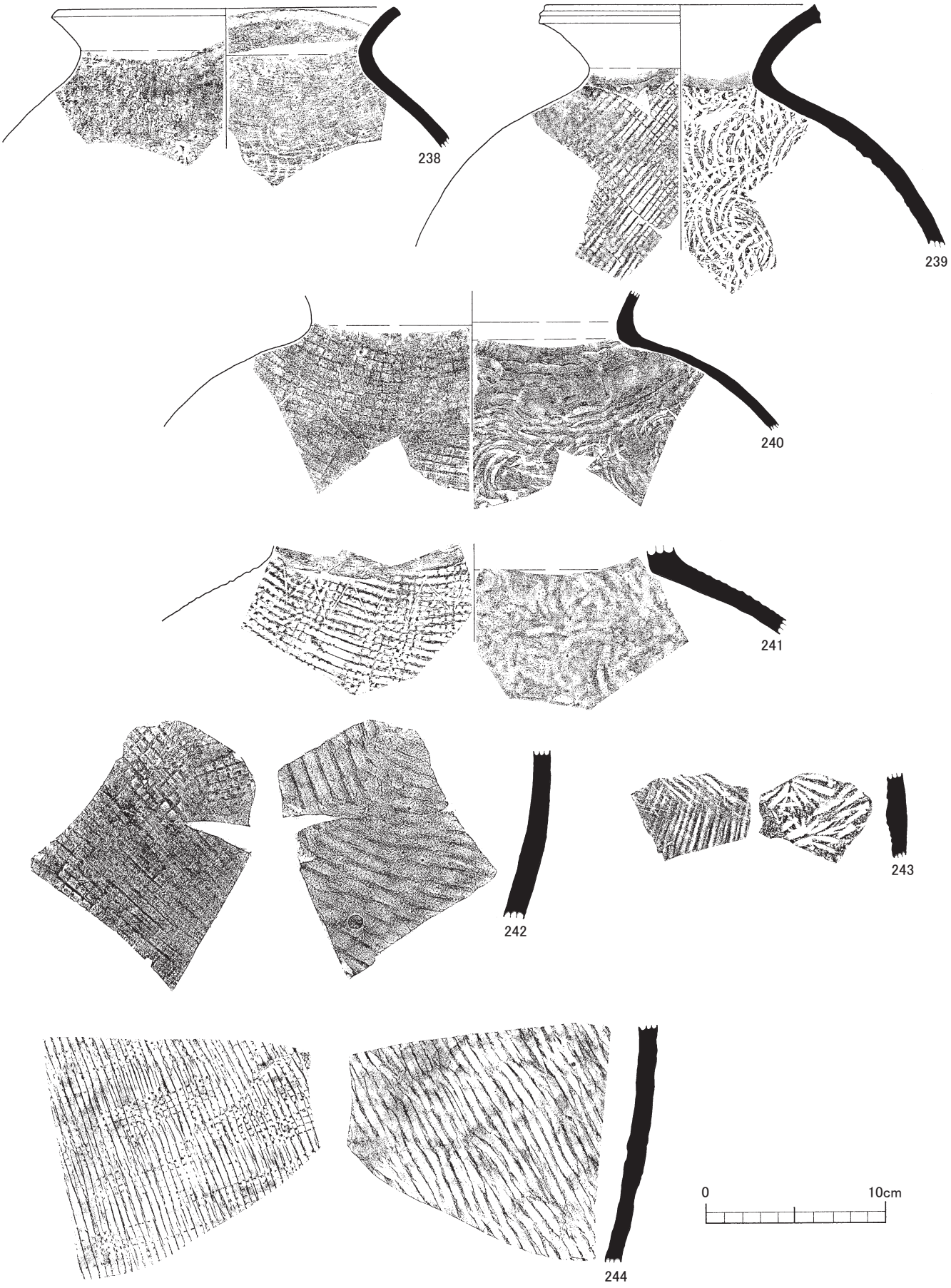
該当時期は確定できないが，出土層から，古代遺物として掲載した。取付部の外面が被熱で黒色化している。276は外面に黒緑色のガラス状の物質が熔着しており，



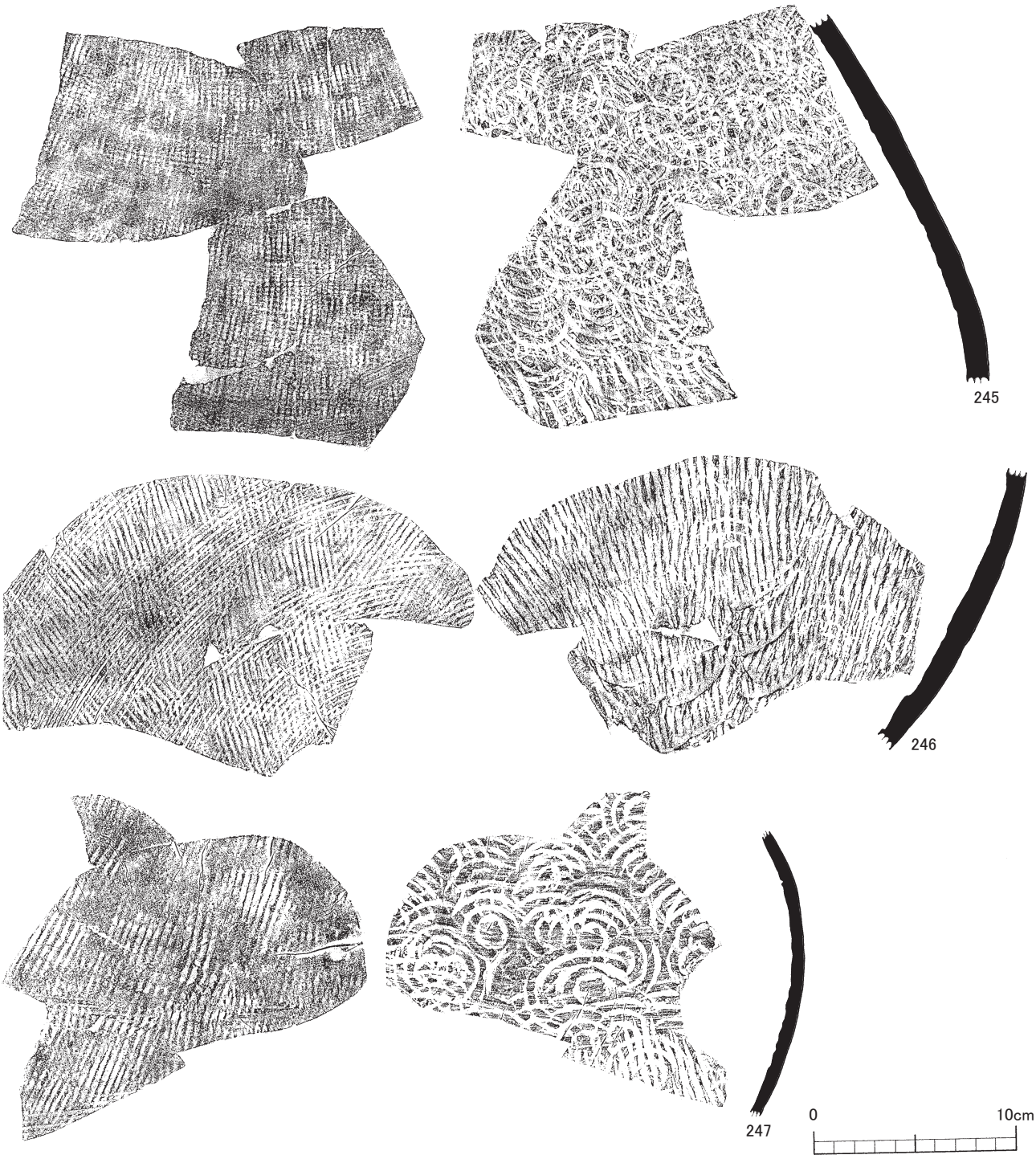
第108図　古代遺物（11）須恵器蓋・皿



第109図　古代遺物（12）須恵器甕



第110図　古代遺物（13）須恵器甕



第111図　古代遺物（14）須恵器甕

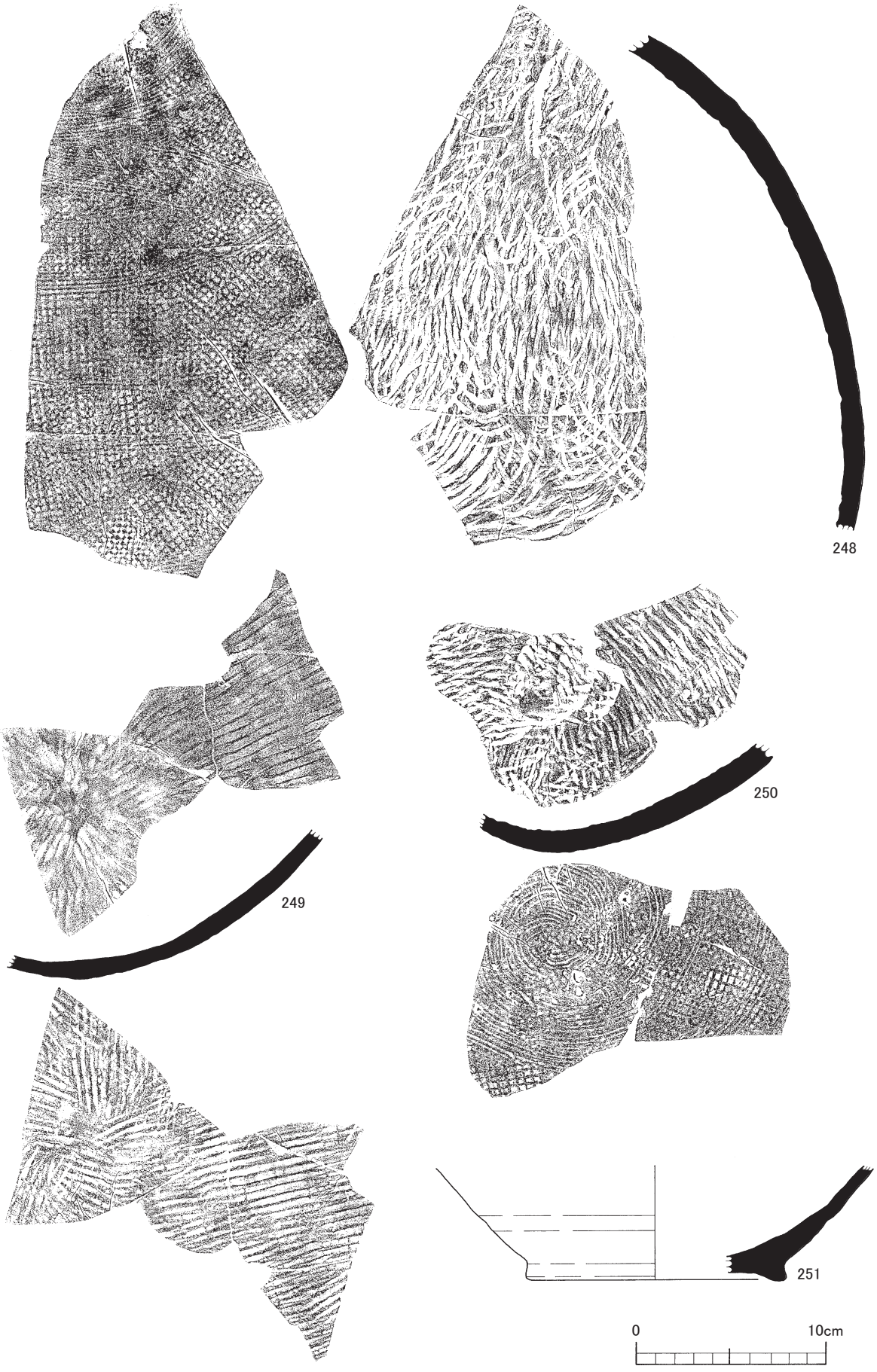
その周辺は被熱で黒色化している。279は外面に幅約８㎜の溝が５本等間隔で施される。装着に関するものか。276～278の送風孔の径は約2.8㎝である。

カマド（第116図280～285）

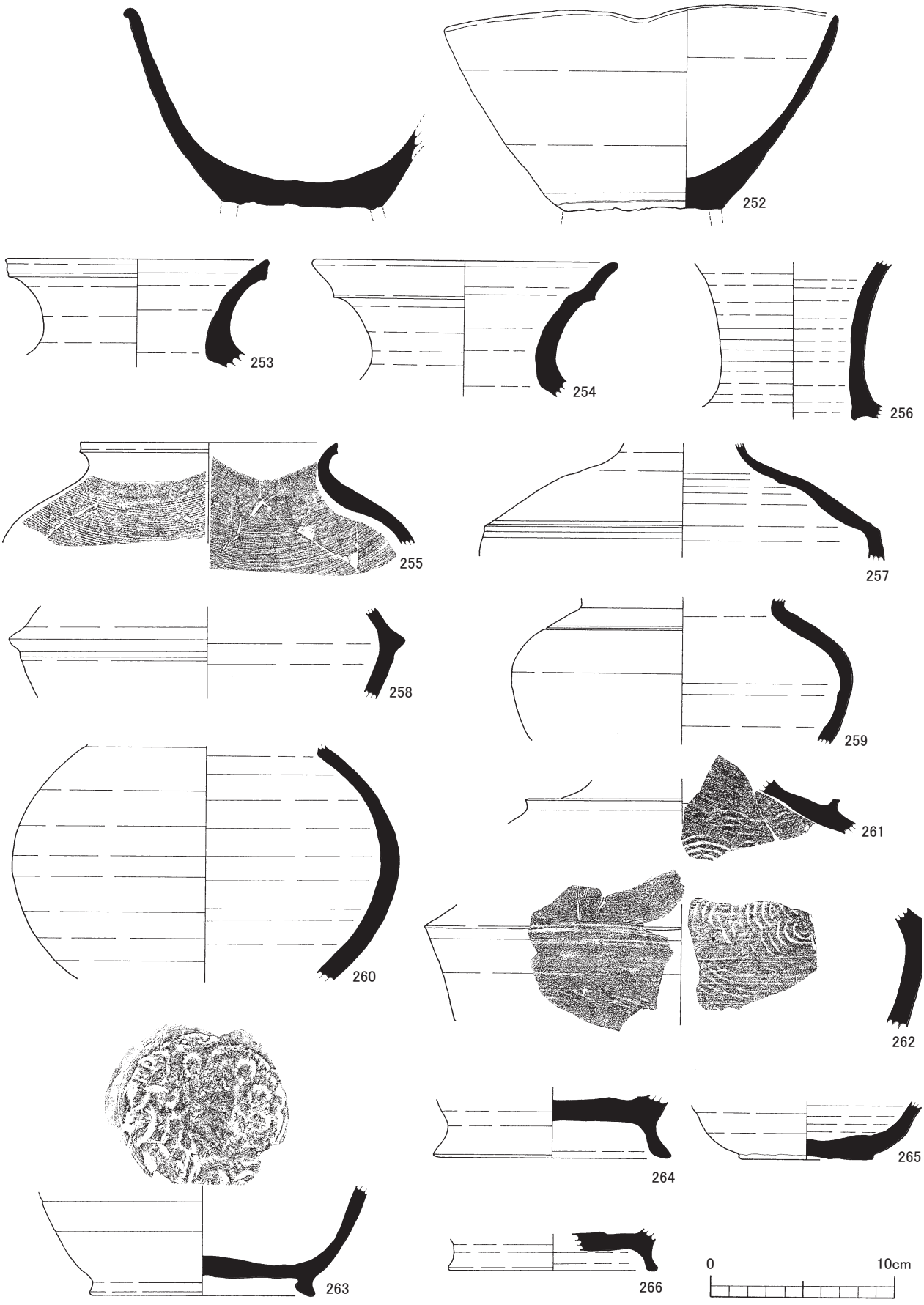
完形復元できなかったので，全体形状は明らかでないが，移動式カマドは破片が23個だけで，個体数で考えると１個程度であると思われる。胎土は軽石や長石等を多く含み粗い。280は焚き口を構成する部分である。粘土紐の積み上げで成形した後，焚き口面を切り取って，庇を貼り付けている。庇は上部のみでなく，両側にもあり，焚き口を三方より囲む形となっている。内外面をハケ目で調整している。庇上面にススの付着をみる。281～285はカマドの側面や基部付近と考えられるもので，ナデ調整が行われている。285は指頭圧痕を有する。

石製品（第117図286～288）

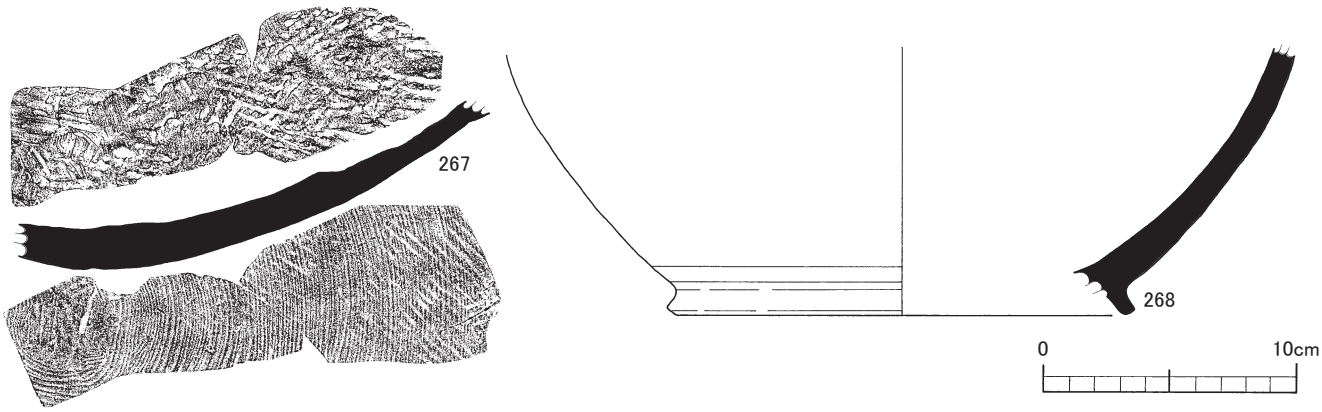
いずれも砥石である。286は頁岩製で穿孔が施されており，紐が通されていたと考えられる。半分が欠損して



第112図　古代遺物（15）須恵器甕・鉢



第113図　古代遺物（16）須恵器鉢・壺



第114図　古代遺物（17）須恵器壺

いるので形状は明らかでないが，平坦な使用面から金属用と考えられる。287は砂岩製で表裏両面と両側面に磨面を持つ手持砥石と考えられる。両面の中央付近に凹研磨面を有する。片方は楕円形で反対側は溝状を呈す。研磨の方向も複数確認できる。288は砂岩製で表裏両面と両側面に磨面を持つ。表面の中央付近がわずかに凹面を呈し他は平坦となる。裏面の上部には敲打痕が広がるが，この砥石を原石から成形するときにつけられたものであろう。下部が欠損しているので全体の形状は不明である。

鉄製品（第117図289～293）

289と290は紡錘車である。紡輪は二つとも直径４㎝前後で断面は傘状をなしている。289の中には紡茎が詰まっており，290の紡茎は3.2㎝程度が残存する。紡茎の直径は289が約５㎜で290が約４㎜である。断面形は共に円形である。291～293は鎌である。平面形は緩やかな弧を描く。291は左端を小さく折り曲げている。これは，柄の装着部分として使われたものであると考えられる。292は三日月状を呈し，刃部の先端の幅が291より狭い。293は刃部の先端である。

転用硯（第108図228）

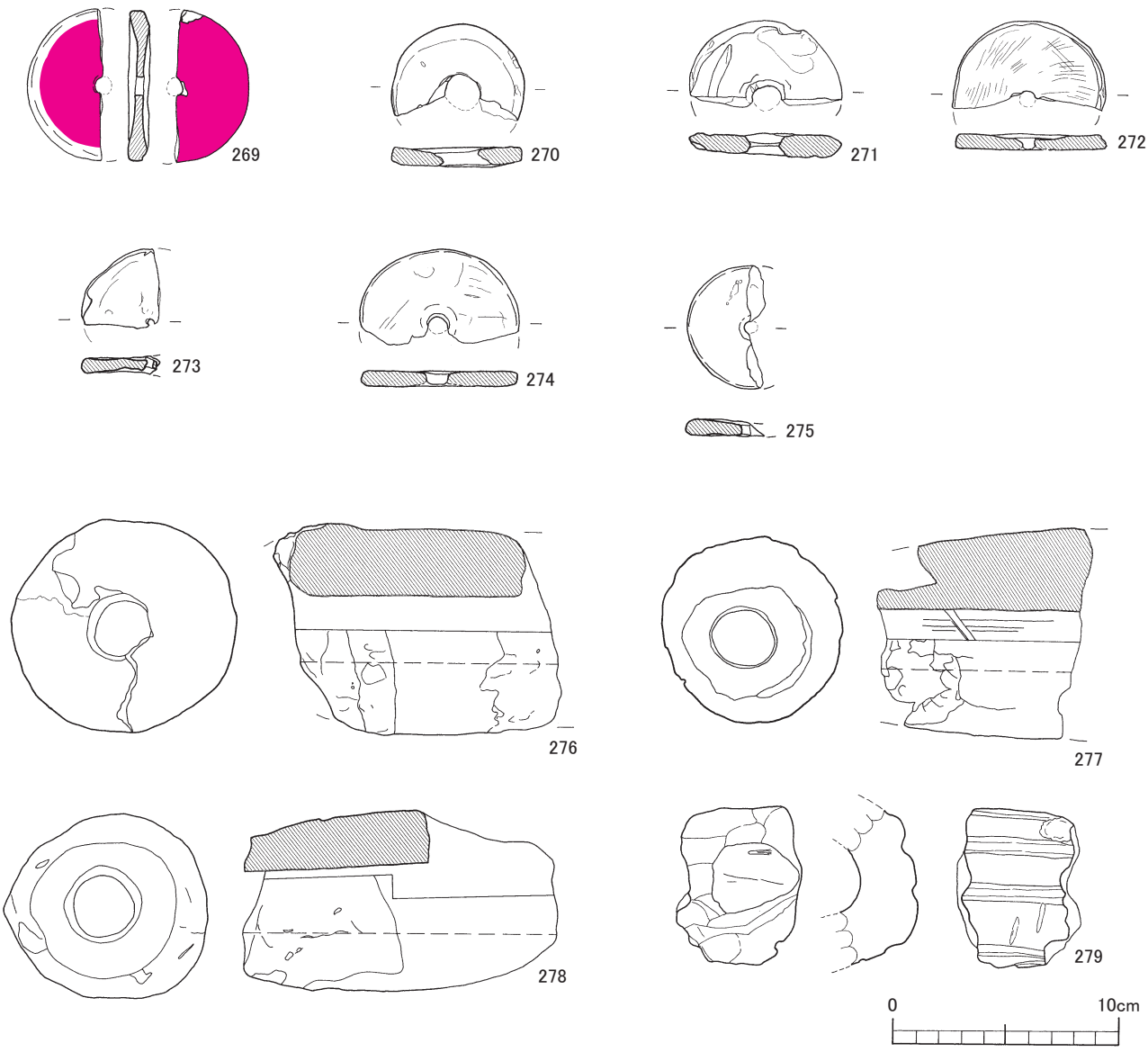
須恵器の蓋再利用した転用硯が１点出土している。墨書土器との関係が指摘される。

篦書・刻書・墨書土器（第118図294～第120図353）

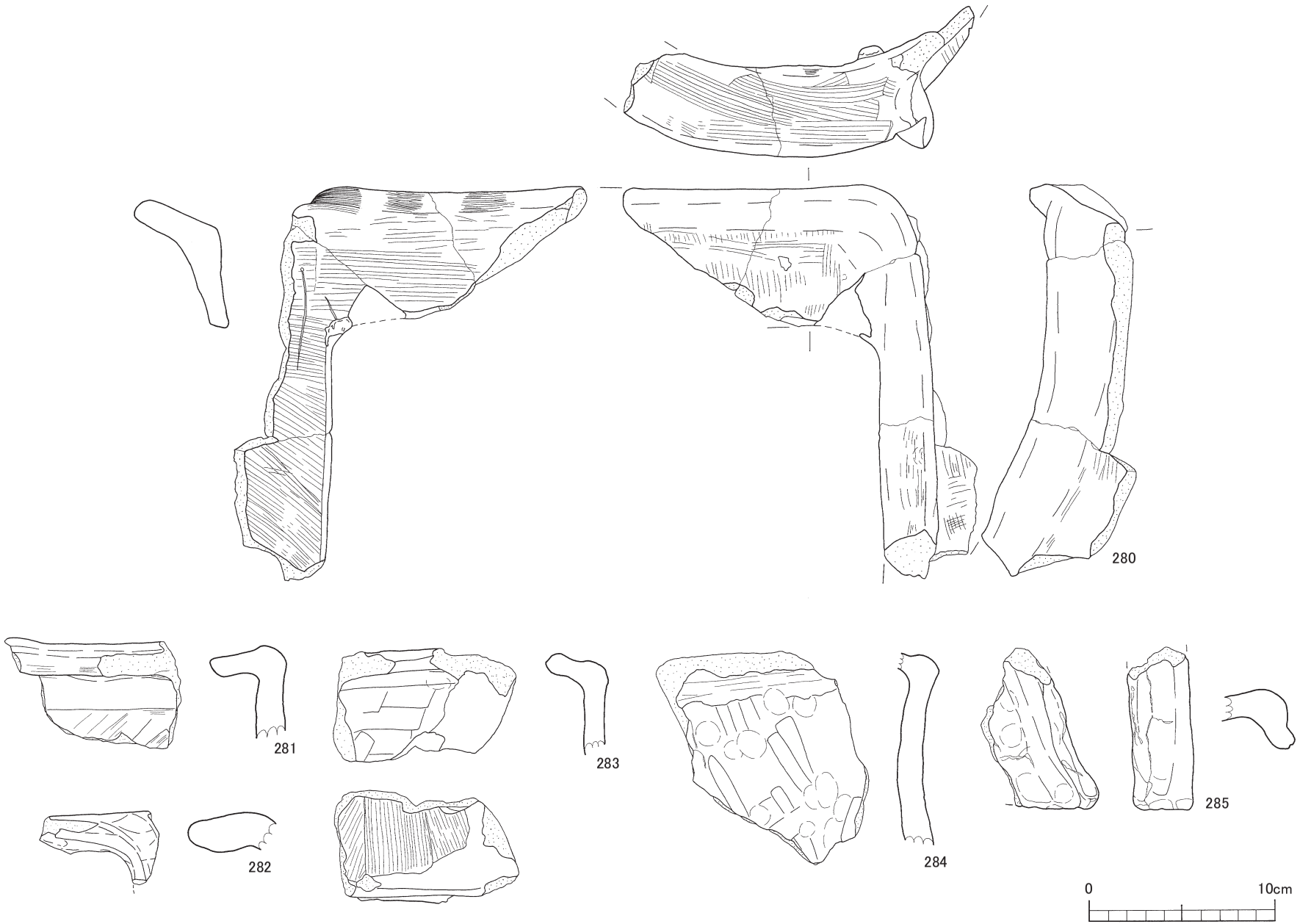
土師器の文字資料60点を図化した。篦書土器がほとんどで，刻書土器は２点，墨書土器が１点である。これは本遺跡の際だった特徴と言える。

294～305は「門」と読めるもの，及びその一部と推定されるものである。門構えの“扉”部分が299のように正しく整っているものは極めて少なく，大部分は一画足りなかったり（296），左右の“扉”の上部を繋げていたり（294），中位と下位を繋げていたり（304），左の“扉”の縦一画目と二画目を孤を描きながら繋げたり（302・303），“扉”の中央部分のそれぞれの縦画を省略していたり（303），“扉”の両側で大きさが異なっていたり（304・306）する。その理由として，これらの文字を書いた人々が識字層ではなく，文字を知らない階層のひとびとであって，恐らく（書かれていた）文字を見て，その形をまねて書いた結果と考えられる㈱。306～308は文字の形などから「門」ではないかと考えられるものである。307と308は「門」の“扉”部分，306は縦画と一方の“扉”の部分と想定される。309～316および350は「凡」と読めるものである。日常見られる字形とは異なり，“風構え”の上部に縦の短い線あるいは点を付し，内部は斜め方向の点のほか，横方向の短い線を付すものが特徴的である。317は「凡」の異体字または省略形ではないかと考えられる。㈱。318～320は「幸」と読めるものである。318と319は下部の横線を一本欠く。321も構成する要素からみて「幸」と考えられる。322は「中万」と読める。323と324は「冨」，325も324の下部と類似することから「田」と読め，上部の欠損を考慮すると「冨」の可能性も考えられる。326は縦線より右側が欠損しているが，縦線までの横線をそのまま延長すると「生」の文字になる。327は偏を“糸編”あるいは“亻人編”，造りを「白」と考えると「綿」あるいは「線」または「徨」と想定される。328は「中」，330は「考」，331は「所」と読める以外は，不明である。335～341は「一」または「｜」という記号，342～344は「払い」または曲線の記号，346と349は二本線，347と352は記号であるか文字の一部であるかは不明である。353は墨書であるが欠損により文字は不明である。

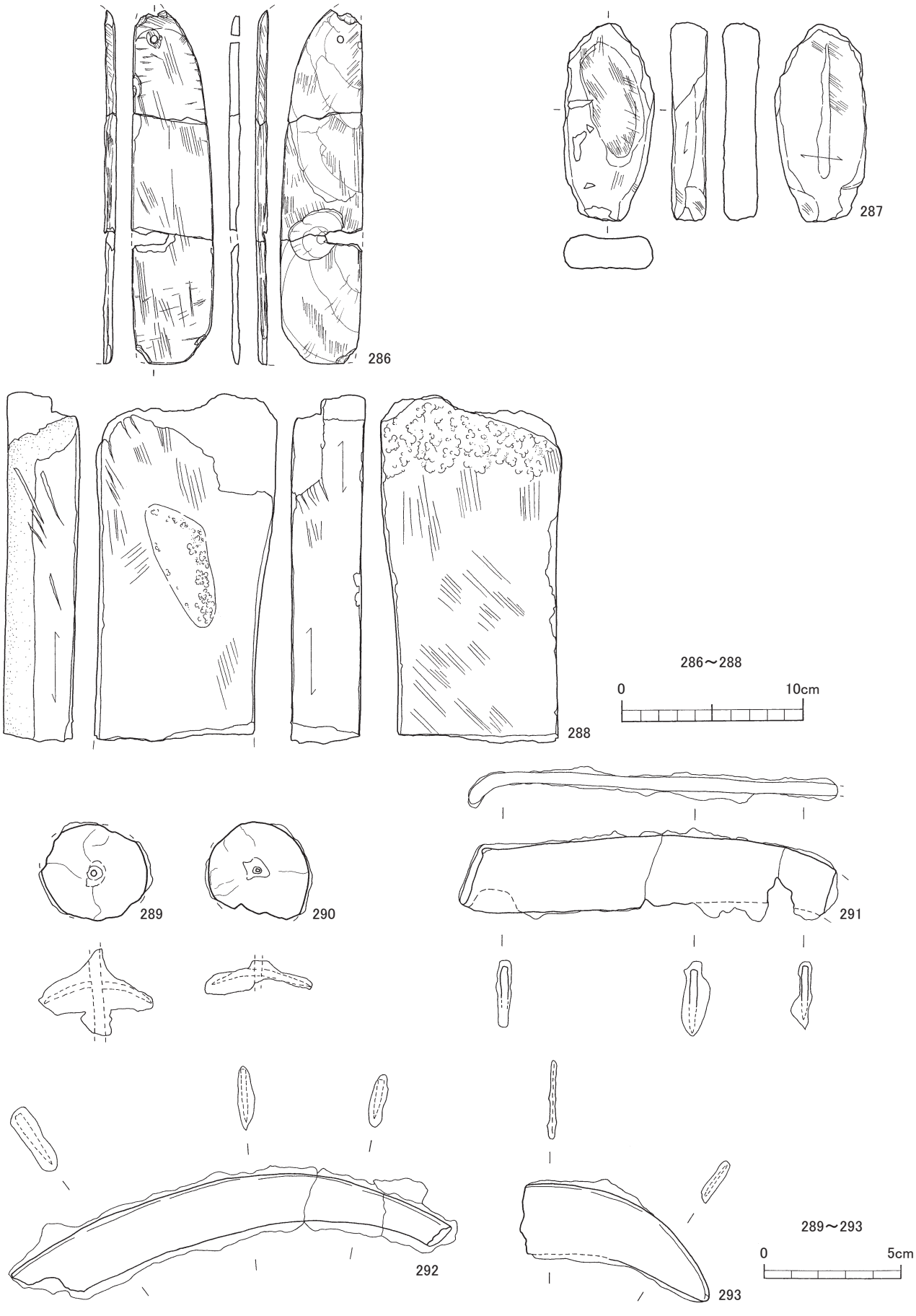
㈱永山修一氏（ラ・サール学園教諭）の御教示による。



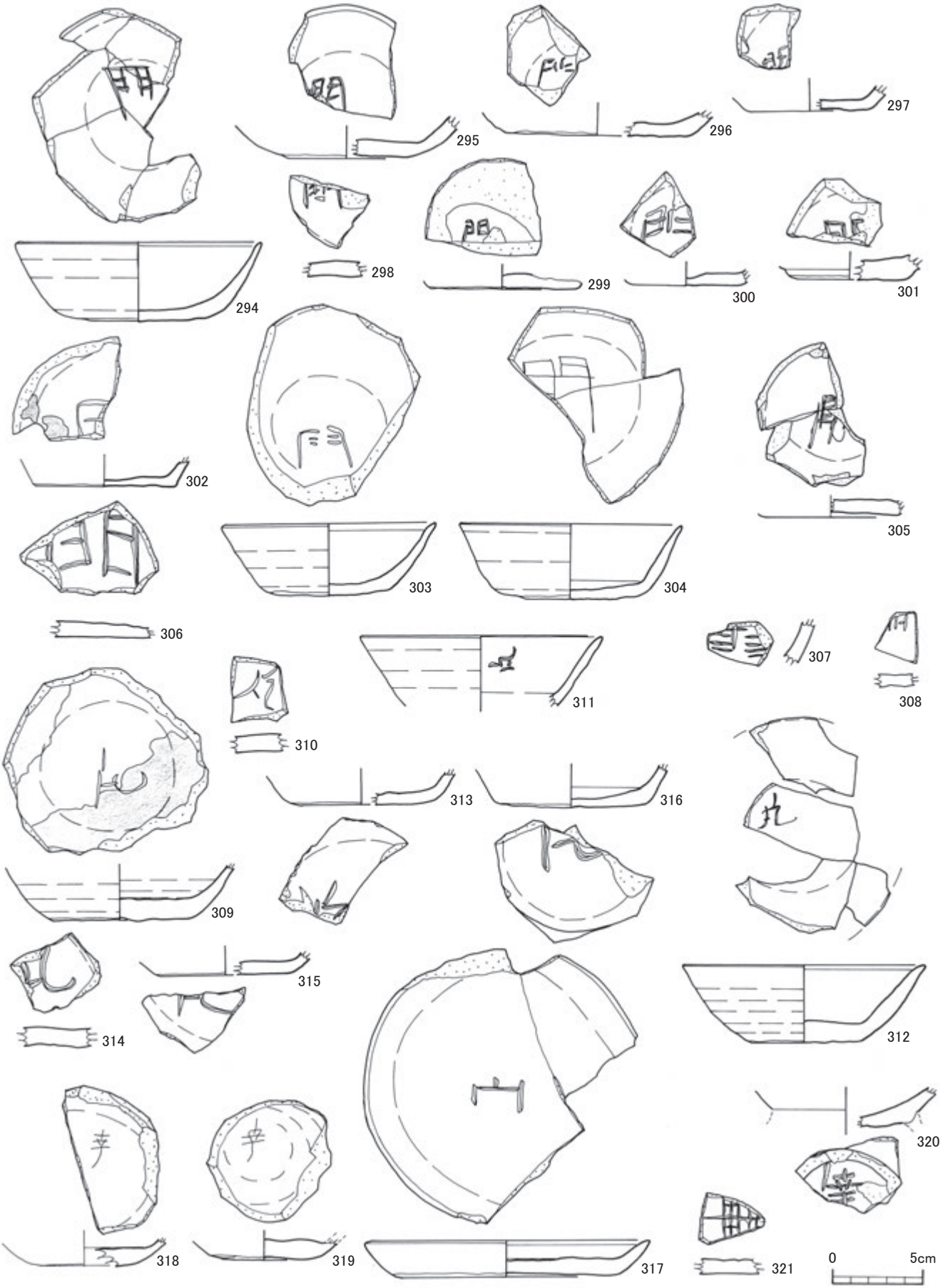
第115図　古代遺物（18）土製品



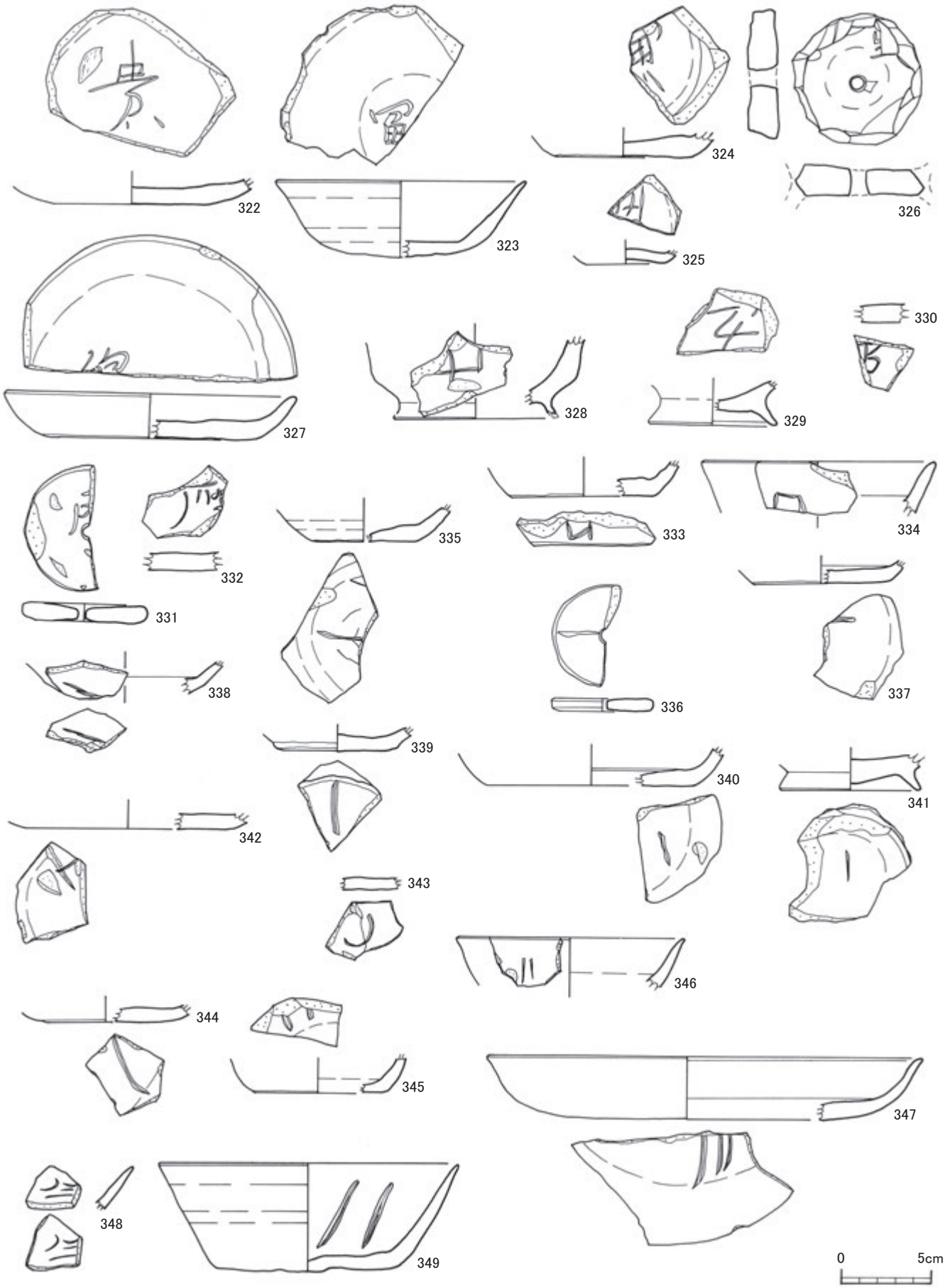
第116図　古代遺物（19）土製品



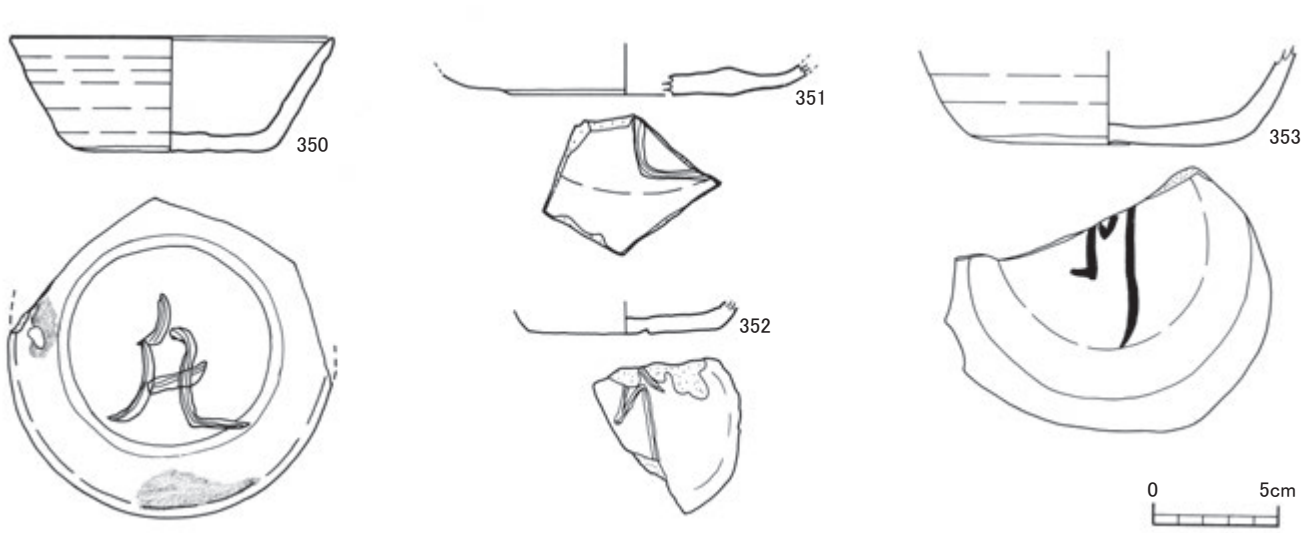
第117図　古代遺物（20）石製品・鉄製品



第118図　古代遺物（21）箆書土器等



第119図　古代遺物（22）箆書土器等



第120図　古代遺物（23）箆書土器等

表20　古代遺物観察表（1）

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種	部位	文字	備考
	294	L- 7	Ⅳ上	箆書土器	坏	見込み	門	—
	295	X-14	Ⅲb	箆書土器	坏	見込み	門	—
	296	O-10	Ⅳ	箆書土器	坏	見込み	門	畝間状遺構①より
	297	W-14	Ⅲb	箆書土器	坏	見込み	門	—
	298	V-14	Ⅳ上	箆書土器	椀？	見込み	門	—
	299	不明	不明	箆書土器	坏	見込み	門	—
	300	樋門	撹乱	箆書土器	坏	見込み	門	—
	301	樋門	一括	箆書土器	坏	見込み	門	—
	302	U-13	Ⅳ	箆書土器	坏	見込み	門	—
	303	X-14	Ⅲb	箆書土器	坏	見込み	門	—
	304	? -13	Ⅳ	刻書土器	坏	見込み	門	—
	305	X-13	Ⅲb	箆書土器	坏	見込み	門	—
	306	X-13	Ⅲb	箆書土器	坏	見込み	門	—
118	307	W-14	Ⅲb	箆書土器	坏？	外面	門？	—
	308	V-13	Ⅲb	箆書土器	椀	見込み	門？	—
	309	W-12	Ⅲb	箆書土器	坏	見込み	凡	—
	310	X-14	Ⅲb	箆書土器	坏？	見込み	凡	—
	311	U-13	土坑	箆書土器	坏	内面	凡	—
	312	L- 7	Ⅳ	刻書土器	坏	見込み	凡	畝間状遺構②より
	313	S-11	Ⅳ	箆書土器	坏	外底	凡	—
	314	V-12	Ⅲb	箆書土器	坏	見込み	凡	—
	315	S-11	Ⅳ上	箆書土器	坏	見込み	凡	—
	316	不明	褐色粘質土	箆書土器	坏	外底	凡	—
	317	X-14	Ⅲb	箆書土器	皿	見込み	凡？	—
	318	V-13	Ⅲb	箆書土器	坏	見込み	幸	ピット内より
	319	R-11	Ⅲb	箆書土器	坏	見込み	幸	—
	320	W-14	Ⅲb	箆書土器	椀	外底	幸	—
	321	W-13	Ⅲb	箆書土器	坏？	見込み	幸？	—
	322	S-11	Ⅲb	箆書土器	坏	見込み	中万	—
	323	V-12	Ⅲb	箆書土器	坏	見込み	冨	—
	324	X-14	Ⅲb	箆書土器	坏	見込み	冨？	—
	325	S-10	Ⅳ	箆書土器	坏	見込み	冨？	—
	326	X-13	Ⅳ上	箆書土器	椀？	見込み	生？	転用紡錘車
	327	T-13	Ⅳ	箆書土器	坏	見込み	綿？線？徨？	—
	328	Q-10	Ⅳ	箆書土器	椀	外面	中？	—
	329	X-15	Ⅲb	箆書土器	椀	見込み	不明	—
	330	T-12	Ⅲb	箆書土器	椀？	外底？	考？	—
	331	V-14	Ⅲb	箆書土器	椀？	見込み	所？	転用紡錘車
	332	T-12	Ⅳ	箆書土器	椀？	見込み	不明	—
	333	V-12	Ⅲb	箆書土器	坏	外面	不明	横書き？
	334	R-10	Ⅳ	箆書土器	坏	外面	不明	横書き？
	335	W-12	Ⅲb	箆書土器	坏	外底	一？	記号？
119	336	X-15	Ⅲb	箆書土器	坏？	見込み	一？	転用紡錘車
	337	Q-10	Ⅳ上	箆書土器	坏	外底	一？	記号？
	338	T-12	Ⅳ	箆書土器	椀？	外面	斜線？	記号？
	339	V-13	Ⅲb	箆書土器	坏	外底	｜？	記号？
	340	V-13	Ⅲb	箆書土器	坏	外底	｜？	記号？
	341	X-12	Ⅲb	箆書土器	椀	外底	｜？	記号？
	342	T-11	Ⅳ	箆書土器	坏	外底	左払い？	記号？
	343	T-11	Ⅲb	箆書土器	坏？	外底	左払い？	記号？
	344	T-12	Ⅲb	箆書土器	坏	外底	右払い？	記号？
	345	V-12	Ⅲb	箆書土器	坏	見込み	縦二本線？	文字？
	346	T-12	Ⅳ	箆書土器	坏	外面	縦二本線？	文字？
	347	X-14	Ⅲb	箆書土器	大皿	外底	縦三本線？	文字？
	348	V-13	Ⅲb	箆書土器	坏	内面	生？	—
	349	X-14	Ⅲb	箆書土器	坏	内面	縦二本線？	文字？
	350	O-10	Ⅳ	箆書土器	坏	外底	凡	外面にスス付着
120	351	T-13	Ⅳ	箆書土器	坏	外底	凡？	—
	352	P- 9	Ⅳ	箆書土器	坏	外底	不明	記号？
	353	P-13	Ⅳ	墨書土器	坏	外底	凡？	—

表21　古代遺物観察表（2）

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種	口径	底径	器高	色調		調整		胎土	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	外面	内面	外面	内面		
	29	I- 6	Ⅲb	土師器	椀	12.4	7.2	4.6	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	ローリングを受けている
	30	W-15	Ⅲb	土師器	椀	15.35	7.3	6.95	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	31	X-15	Ⅲb	土師器	椀	13.4	4.4	4.8	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	32	V-12	Ⅳ上	土師器	椀	16.8	10.8	6.2	にぶい橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	内外面上位にｽｽ付着
	33	V-14	Ⅳ	土師器	椀	12.6	—	—	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	34	V-13	Ⅳ上	土師器	椀	16.2	—	—	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	35	W-14	Ⅲb	土師器	椀	16.2	—	—	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	36	V-14	Ⅳ	土師器	椀	15.8	—	—	淡黄色	淡黄色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	37	W-14	Ⅳ	土師器	椀	18.2	—	—	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
98	38	S-12	Ⅳ	土師器	椀	18.8	—	—	浅黄橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	39	O-10	Ⅲb	土師器	椀	—	8.5	—	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	40	T-12	Ⅲb	土師器	椀	—	8.8	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	内外面にｽｽ付着
	41	O-10	Ⅲb	土師器	椀	—	8.8	—	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	42	K- 6	Ⅲb	土師器	椀	—	9.2	—	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	43	H- 4	Ⅳ	土師器	椀	—	7.8	—	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	高台に輪積み痕がある
	44	W-14	Ⅲb	土師器	椀	—	8	—	浅黄色	浅黄色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	45	Z-12	Ⅲb	土師器	椀	—	8.2	—	にぶい黄橙色	浅黄色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	46	T-12	Ⅲb	土師器	椀	—	8	—	浅黄橙色	淡黄色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	47	W-14	Ⅳ	土師器	椀	—	7.9	—	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	48	V-14	Ⅳ	土師器	椀	—	7.4	—	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	49	R-12	Ⅲb	土師器	椀	—	5.8	—	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	50	U-14	Ⅳ	土師器	坏	11.4	6.6	4.2	にぶい黄橙色，灰黄褐色	浅黄橙色，黒褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	外面と口縁部内側にスス付着
	51	U-13	Ⅳ	土師器	坏	12.6	7.6	4	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	外面と口縁部内側にスス付着
	52	T-13	Ⅳ	土師器	坏	13.5	8	4.6	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	体部低位～底面にｽｽ付着
	53	X-13	Ⅲb	土師器	坏	14.2	7.8	4.5	にぶい黄色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	54	W-15	Ⅲb	土師器	坏	14.2	8.9	4.2	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	55	P-10	Ⅲb	土師器	坏	10.3	5.5	4.3	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	56	O-10	Ⅳ	土師器	坏	10.8	6.2	4.1	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	内面に指頭痕
	57	U-13	Ⅳ上	土師器	坏	12.2	4.8	4.5	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬，赤色粒	—
	58	K- 6	Ⅲb	土師器	坏	12.2	5.8	4.5	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	59	V-14	Ⅳ	土師器	坏	12.2	7	4.6	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	60	U-12	Ⅳ上	土師器	坏	13	6.4	4.2	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	61	J- 6	Ⅲb	土師器	坏	13.2	9	3.9	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	62	O-10	Ⅴ	土師器	坏	13.4	8.2	4.4	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
99	63	I- 6	Ⅲb	土師器	坏	14	5	6.1	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	64	V-11	Ⅳ上	土師器	坏	—	6.5	—	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	65	?-15	Ⅲb	土師器	坏	—	7	—	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	内外面にスス付着
	66	O-10	Ⅲb	土師器	坏	9.8	5.6	3.8	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	見込みに指頭痕
	67	W-14	Ⅲb	土師器	坏	11.2	6.6	4.1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	内外面にスス付着
	68	U-14	Ⅳ	土師器	坏	13.4	7	6.1	浅黄橙色	淡黄色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	69	V-14	Ⅳ	土師器	坏	13.8	6	5.5	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	70	U-13	Ⅳ	土師器	坏	14.2	7.6	5.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	外面にスス付着
	71	V-14	Ⅲb	土師器	坏	14.2	—	—	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	72	W-14	Ⅳ	土師器	坏	14	4.6	4.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	73	U-12	Ⅳ	土師器	坏	14	7.5	4	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	74	X-14	Ⅲb	土師器	坏	13	6.1	4.35	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	75	W-14	Ⅲb	土師器	坏	13	6.4	4.4	黄褐色	黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	76	W-15	Ⅲb	土師器	坏	12.4	6.4	4.75	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	内外面にスス付着
	77	R-10	Ⅳ	土師器	坏	11.4	6	3.6	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	78	W-14	Ⅲb	土師器	坏	11.6	5.2	3.8	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	79	W-14	Ⅳ	土師器	坏	11.6	6.4	3.8	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	内外面にスス付着
	80	T-12	Ⅳ	土師器	坏	12.2	6.6	3.75	浅黄橙色	淡黄色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	81	V-14	Ⅳ	土師器	坏	12.6	5.6	3.9	浅黄橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	82	W-14	Ⅳ	土師器	坏	12.6	5.9	3.5	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	83	T-11	Ⅳ上	土師器	坏	13.1	6.6	3.7	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	84	V-12	Ⅳ	土師器	坏	13.6	8.5	3.55	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	85	O-10	Ⅳ	土師器	坏	14.2	—	7.8	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
100	86	V-13	Ⅳ	土師器	坏	14.6	9	4.5	浅黄橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	87	V-11	Ⅳ	土師器	坏	13.6	9.2	4.2	橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬，赤色粒	—
	88	X-12	Ⅳ	土師器	坏	13.2	9.4	4.5	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	89	U-13	Ⅳ上	土師器	坏	13	8.6	3.8	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	90	W-12	Ⅲb	土師器	坏	12.6	7.7	4.2	にぶい黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	91	O-10	Ⅳ	土師器	坏	12.6	8.8	4.2	淡黄色	淡黄色	回転ナデ	回転ナデ	精錬，赤色粒	—
	92	T-12	Ⅳ	土師器	坏	12.2	6.6	3.8	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	93	W-12	Ⅳ上	土師器	坏	12.6	5.4	4.1	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	94	X-14	Ⅲb	土師器	坏	13	6.8	4.5	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	95	V-12	Ⅲb	土師器	坏	13.2	6.6	4.3	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	96	樋門	—	土師器	坏	—	4.9	—	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬，赤色粒	—
	97	I- 6	Ⅲb	土師器	高台付皿	11.4	7.2	2.9	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	98	Q-10	Ⅳ	土師器	高坏	—	4.2	—	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	99	V-11	Ⅲb	土師器	皿	14	8.4	2.3	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	100	S-11	Ⅳ	土師器	皿	14.2	7.2	2.8	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	101	V-15	Ⅲb	土師器	皿	14.2	9.8	1.9	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
101	102	S-12	Ⅳ	土師器	皿	14.4	12.2	1.8	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	内外面にスス付着
	103	X-14	Ⅲb	土師器	皿	15.2	8	2	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	104	T-11	Ⅳ上	土師器	皿	15.4	7.8	2.9	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	105	X-14	Ⅲb	土師器	皿	16.2	10	2.1	淡黄色	淡黄色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	106	Q-10	Ⅳ	土師器	皿	15.6	9.8	2.2	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	107	W-15	Ⅲb	土師器	皿	16.6	9.1	2.6	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—

表22　古代遺物観察表（3）

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種	口径	底径	器高	色調		調整		胎土	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	外面	内面	外面	内面		
	108	Q-10	Ⅳ	土師器	Ⅲ	18.3	13.9	2.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	109	T-13	Ⅳ上	土師器	盤	19.6	15.4	3.8	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	110	T-12	Ⅳ上	土師器	壺	8.2	—	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	内面にスス付着
	111	W-14	Ⅳ	土師器	鉢	18.6	—	—	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬，赤色粒	—
	112	Y-12	Ⅳ	土師器	鉢	—	—	—	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬，黒色粒，赤色粒	—
	113	V-14	Ⅲb	土師器	蓋	—	—	—	明黄褐色	明黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬，赤色粒	—
	114	W-14	Ⅲb	土師器	蓋	—	—	—	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	115	V-14	Ⅵ	土師器	蓋	—	—	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	粗い，礫	—
101	116	K- 6	Ⅲb	土師器	蓋	—	—	—	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬，赤色粒	—
	117	Q-10	Ⅳ	土師器	蓋	17.2	—	3.6	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	118	W-12	Ⅳ	土師器	蓋	—	—	—	にぶい橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	やや粗い	—
	119	V-11	Ⅲb	土師器	蓋	13.6	—	—	浅黄橙色	淡黄色，にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	120	X-14	Ⅲb	土師器	蓋	14.4	—	—	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬，黒色粒	—
	121	V-11	Ⅲb	土師器	蓋	16.2	—	—	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	122	O-10	Ⅲb	土師器	蓋	16.6	—	—	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	123	O-10	Ⅳ	土師器	蓋	17	—	—	にぶい黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	124	X-14	Ⅲb	土師器	蓋	15.4	—	2.5	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬，赤色粒	—
	125	T-11	Ⅳ上	土師器	蓋	17.8	—	—	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬，赤色粒	—
	126	X-14	Ⅳ	土師器	甕	19.2	—	—	橙色	橙色	横ナデ	横ナデ＋横ケズリ	石英，礫，パンス	—
	127	R-11	Ⅳ	土師器	甕	22.4	—	—	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	横ナデ＋タテケズリ	精錬	—
	128	S-11	Ⅳ	土師器	甕	23.2	—	—	橙色	橙色	格子タタキ→ナデ	横ナデ＋タテケズリ	石英	—
	129	U-12	Ⅳ上	土師器	甕	24	—	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ＋ハケメ	横ナデ＋ナナメケズリ	石英，長石，雲母，礫	—
102	130	V-12	Ⅳ上	土師器	甕	24.2	—	—	橙色	橙色	横ナデ＋ナナメハケメ	横ナデ＋ナナメケズリ	石英，長石，雲母，礫	—
	131	U-12	Ⅳ	土師器	甕	24.8	—	—	明黄褐色	にぶい黄褐色	横ナデ＋ハケメ	横ナデ＋ナナメケズリ	石英，長石，雲母	—
	132	P- 9	Ⅳ	土師器	甕	25	—	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	横ナデ＋タテハケメ	横ナデ＋タテケズリ	石英，輝石	—
	133	Y-14	Ⅲb	土師器	甕	27.6	—	—	にぶい橙色	にぶい橙色	横ハケ目＋タテハケメ	横ハケ目＋ナナメケズリ	石英，長石，パンス	—
	134	T-11	Ⅳ	土師器	甕	16.5	—	—	橙色	黄橙色	ナデ	横ナデ＋タテケズリ	石英	—
	135	X-14	Ⅲb	土師器	甕	16.8	—	—	明褐色	明褐色	横ナデ	横ナデ＋タテケズリ	石英，長石，雲母，パンス	—
	136	W-15	Ⅲb	土師器	甕	21.1	—	—	明赤褐色	明黄褐色	格子叩き→横ナデ	横ナデ＋タテケズリ	石英，礫	—
	137	X-14	Ⅲb	土師器	甕	23.8	—	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	横ナデ＋タテハケメ	横ナデ＋ナナメケズリ	石英，礫	—
	138	U-13	Ⅳ	土師器	甕	24.4	—	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	横ナデ＋ハケメ	横ナデ＋ナナメケズリ	石英，長石，雲母	—
	139	X-13	Ⅲb	土師器	甕	26.2	—	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	横ナデ＋ナデ	横ナデ＋ナナメケズリ	石英，礫	—
	140	U-13	Ⅳ上	土師器	甕	27	—	—	橙色	橙色	横ナデ	横ナデ＋タテケズリ	石英，雲母，パンス	—
103	141	T-11	Ⅳ	土師器	甕	28.4	—	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	横ナデ＋ハケメ	横ナデ＋ナナメケズリ	石英，輝石，礫	—
	142	W-15	Ⅲb	土師器	甕	30.2	—	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	横ナデ	横ナデ＋ナナメケズリ	石英，長石	—
	143	W-12	Ⅳ	土師器	甕	31.6	—	—	明褐色	明褐色	横ナデ	横ナデ＋ナナメケズリ	石英，礫	—
	144	V-12	Ⅲb	土師器	甕（鍋）	22.2	—	—	橙色	橙色	横ナデ＋ナナメケズリ	横ナデ＋ナナメケズリ	石英，長石，礫	—
	145	S-11	Ⅳ	土師器	甕（鍋）	27	—	—	橙色	橙色	ナデ	横ナデ＋ケズリ	精錬	—
	146	W-14	Ⅳ	土師器	甕（鍋）	28	—	—	にぶい褐色	にぶい黄褐色	横ナデ＋ハケメ	横ナデ＋ナナメケズリ	石英，輝石，礫	—
	147	T-11	Ⅳ上	土師器	甕	19.4	—	—	橙色	橙色	ナデ＋ミガキ	ミガキ，ケズリ	石英，輝石	須恵器の模倣か
104	148	W-14	Ⅲb	土師器	甕	—	—	—	橙色	にぶい橙色	平行タタキ	ケズリ	石英，輝石，礫	須恵器の模倣か
	149	W-15	Ⅲb	土師器	甕	—	—	—	にぶい褐色	にぶい黄褐色	格子タタキ＋横ナデ	ナナメケズリ	石英，輝石，礫	須恵器の模倣か
	150	V-12	Ⅲb	黒色土器Ⅰ類	椀	17.5	—	—	にぶい橙色	黒色	回転ナデ	ヘラミガキ	精錬	—
	151	V-15	Ⅳ	黒色土器Ⅰ類	椀	15.8	—	—	にぶい黄橙色	黒色	回転ナデ	ヘラミガキ	精錬，赤色粒	—
	152	V-14	Ⅲb	黒色土器Ⅰ類	椀	—	6.8	—	浅黄橙色	黒色	回転ナデ	ヘラミガキ	精錬	—
	153	V-14	Ⅲb	黒色土器Ⅰ類	椀	—	7.2	—	にぶい黄橙色	黒色	回転ナデ	ヘラミガキ	精錬	—
	154	V-14	Ⅲb	黒色土器Ⅰ類	椀	—	7.5	—	浅黄橙色	黒色	回転ナデ	ヘラミガキ	精錬	—
	155	V-13	Ⅲb	黒色土器Ⅰ類	椀	—	6.4	—	にぶい橙色	黒色	回転ナデ	ヘラミガキ	精錬	—
	156	—	表採	黒色土器Ⅱ類	椀	—	7.7	—	灰黄～黒色	黒色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	精錬	—
	157	W-13	Ⅲb，Ⅳ	赤色土器Ⅰ類	椀	13.5	7.5	5.3	橙色	極暗赤褐色	回転ナデ	ヘラミガキ	砂粒，礫	—
	158	Y-14	埋土Ⅱ	赤色土器Ⅰ類	椀	—	7.0	—	明黄褐色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	中世遺構埋土中より
	159	Q-10	Ⅲb	赤色土器Ⅰ類	椀	—	7.2	—	淡黄色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	160	X-14	Ⅳ	赤色土器Ⅰ類	椀	—	7.6	—	浅黄橙色	明赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	161	V-14	Ⅳ	赤色土器Ⅰ類	椀	—	7.7	—	にぶい黄橙色	明褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	162	Y-12	Ⅲb	赤色土器Ⅰ類	椀	—	7.8	—	浅黄橙色	赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	163	Y-13	Ⅲb	赤色土器Ⅰ類	椀	—	8.0	—	淡黄色	にぶい赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	164	V-12	Ⅳ	赤色土器Ⅰ類	椀	—	8.3	—	淡黄色	褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	165	U-14	Ⅲb	赤色土器Ⅰ類	椀	—	8.6	—	浅黄橙色	明褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
105	166	W-14	Ⅳ	赤色土器Ⅰ類	椀	—	7.8	—	浅黄橙色	にぶい黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	167	V-14	Ⅲb	赤色土器Ⅰ類	椀	—	8.0	—	浅黄橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	168	T-11	Ⅳ	赤色土器Ⅰ類	椀	—	8.2	—	にぶい黄橙色	赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	169	T-11	Ⅲb	赤色土器Ⅰ類	椀	—	8.2	—	浅黄橙色	赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	170	V-14	Ⅳ上	赤色土器Ⅰ類	坏	15.8	—	—	浅黄橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	171	X-15	Ⅲb	赤色土器Ⅰ類	坏	14.6	—	—	浅黄橙色	赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	172	U-12	Ⅲb	赤色土器Ⅰ類	坏	—	6.0	—	浅黄橙色	明赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	173	W-14	Ⅲb	赤色土器Ⅰ類	坏	—	6.4	—	浅黄橙色	明赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	174	V-14	Ⅳ	赤色土器Ⅰ類	高台付皿	12.1	—	—	浅黄橙色	褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	内面スス付着
	175	W-14	Ⅳ上	赤色土器Ⅰ類	高台付皿	12.6	7.6	3.7	浅黄橙色	明赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	176	T-12	Ⅳ	赤色土器Ⅱ類	坏	15.1	—	—	橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	177	X-14	Ⅲb	赤色土器Ⅱ類	坏	13.6	6.0	4.5	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	178	X-14	Ⅲb	赤色土器Ⅱ類	坏	13.6	7.9	5.1	にぶい黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	179	X-14	Ⅳ	赤色土器Ⅱ類	坏	12.2	8.4	3.8	明赤褐色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	180	M- 9	Ⅲb	赤色土器Ⅱ類	坏	16.6	—	—	橙色	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	181	V-11	Ⅲb	赤色土器Ⅱ類	Ⅲ	16.4	12.9	2.35	橙色	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	182	X-13	Ⅲb	赤色土器Ⅱ類	坏	—	5.6	—	明赤褐色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	183	V-11	Ⅳ	赤色土器Ⅲ類	椀	14.3	7.3	5.5	赤褐色	赤褐色	回転ナデ	ヘラミガキ	精錬	—
106	184	W-14	Ⅳ	赤色土器Ⅲ類	椀	14.4	8.1	6.8	浅黄橙色	明赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	185	V-11	Ⅳ	赤色土器Ⅲ類	椀	15.8	—	—	淡赤橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	186	S-12	Ⅳ	赤色土器Ⅲ類	椀	13.8	—	—	明褐色	明褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—

表23　古代遺物観察表（4）

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種	口径	底径	器高	色調		調整		胎土	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	外面	内面	外面	内面		
106	187	W-14	Ⅳ上	赤色土器Ⅲ類	椀	14.6	—	—	赤褐色	赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	188	X-15	Ⅲb, Ⅳ下	赤色土器Ⅲ類	坏	17.4	—	—	にぶい黄橙色	淡赤橙色	回転ナデ	回転ナデ	やや粗	—
	189	X-13	Ⅲb	赤色土器Ⅲ類	坏	13.6	9.7	2.9	橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	190	T-12	Ⅳ	赤色土器Ⅲ類	坏	11.6	5.6	4.0	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	191	V-11	Ⅲb	赤色土器Ⅲ類	坏	12.0	7.0	3.5	赤橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
	192	U-11	Ⅲb	赤色土器Ⅲ類	Ⅲ	8.4	6.0	1.3	明赤褐色	明褐色	回転ナデ	回転ナデ	精錬	—
107	193	U-12, V-12	Ⅲb, Ⅳ	須恵器	高台付坏	17.6	11.1	5.3	灰色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	194	S-12	Ⅳ	須恵器	高台付坏	14.4	8.3	4.85	灰白色	浅黄色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬, 黒色粒	焼成やや不良
	195	W-12, X-13	Ⅳ	須恵器	高台付坏	16.2	10.4	5.2	青灰色	青灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬, 白色粒	—
	196	V-15	Ⅳ上	須恵器	高台付坏	18.2	—	—	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	197	P-11	Ⅴ	須恵器	高台付坏	—	9.4	—	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	198	V-11	Ⅲb	須恵器	高台付坏	—	7.6	—	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	199	M- 8	Ⅳ	須恵器	坏	13	8.8	4.3	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬, 黒色粒	—
	200	W-12	Ⅲb, Ⅳ上	須恵器	坏	15	9.2	4.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	201	W-14	Ⅳ	須恵器	坏	14	7.7	4.05	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	202	Q-11	Ⅳ	須恵器	坏	15.2	10.6	3.9	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	底部篦切り
	203	O- 9	Ⅲb	須恵器	坏	13.6	10	4.1	灰色	暗灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	204	V-13	Ⅳ	須恵器	坏	13.4	9.6	3.4	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	底部篦切り
	205	Q-11	Ⅳ	須恵器	坏	—	9.2	—	灰白色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	206	X-14	Ⅲb	須恵器	坏	15.3	7.6	6	橙色	橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	内外面火襷
	207	V-12	Ⅲb, Ⅳ	須恵器	坏	12	7.6	4.2	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	外面に火襷
	208	V-12	Ⅲb, Ⅳ上	須恵器	坏	12.3	7.7	3.75	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	内外面火襷，口縁部の一部に自然釉
	209	X-13	Ⅲb	須恵器	坏	—	6	—	黄褐色	橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	内外面に火襷
	210	V-12	Ⅲb	須恵器	椀	14.2	7.2	6.1	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	211	X-13	Ⅲb	須恵器	椀	14.9	—	—	灰色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	212	U-12	Ⅳ上	須恵器	椀	—	7.6	—	黒褐色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ→指ナデ	精錬	—
	213	X-15	Ⅳ上	須恵器	椀	—	5.8	—	にぶい赤褐色	橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	214	Y-13, V-15	Ⅲb, Ⅳ, Ⅳ上	須恵器	椀	—	7	—	明褐色	明褐色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	内部底面に自然釉付着
	215	Q-10	Ⅲb, Ⅳ上	須恵器	双耳坏	11.4	7.4	4.7	オリーブ灰色	オリーブ灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	両把手部が欠損
	216	X-14	Ⅳ	須恵器	高坏	—	11	—	暗灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	外面に自然釉付着
108	217	L- 6	Ⅳ上面	須恵器	蓋	16.6	—	3.5	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	218	X-13	Ⅲb	須恵器	蓋	—	—	—	にぶい褐色	橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	219	W-14	Ⅲb	須恵器	蓋	—	—	—	浅黄橙色	浅黄橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	焼成不良
	220	Q-12	Ⅲb	須恵器	蓋	—	—	—	淡黄色	浅黄橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	221	V-12, V-11	Ⅲb	須恵器	蓋	10.4	—	1.9	暗灰黄色	にぶい褐色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	壺の蓋
	222	V-12	Ⅳ, Ⅳ上	須恵器	蓋	14.1	—	2.2	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	口縁部内外面自然釉付着
	223	X-14	Ⅲb	須恵器	蓋	16	—	1.9	浅黄色	浅黄色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	224	V-12	Ⅳ上	須恵器	蓋	13.6	—	—	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	225	T-13, U-14	Ⅲb, Ⅳ	須恵器	蓋	14.2	—	—	暗オリーブ灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	外面に自然釉付着
	226	W-12	Ⅳ上	須恵器	蓋	—	—	—	オリーブ灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	外面に自然釉付着
	227	V-13, W-14	Ⅳ, Ⅲb	須恵器	蓋	19.8	—	—	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	228	X-14	Ⅲb	須恵器	蓋	15.6	—	—	青灰色	青灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ→指ナデ	精錬	転用硯
	229	W-14	Ⅳ	須恵器	蓋	19.4	—	—	灰白色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬, 黒色粒	—
	230	X-14	Ⅲb	須恵器	Ⅲ	14.2	12	1.7	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	231	O-10	Ⅲb	須恵器	Ⅲ	16	10	2.5	灰白色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	黒色粒, 礫	—
	232	V-15, W-15	Ⅳ	須恵器	Ⅲ	20.4	15.8	2.2	灰白色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	内面に火襷
109	233	T-11	Ⅲb, Ⅳ	須恵器	甕	50.4	—	—	褐色	明褐色	平行叩き→ロクロによるナデ	上：ロクロによるナデ，下：平行タタキ	精錬	内面に自然釉付着
	234	T-11	Ⅲb	須恵器	甕	43	—	—	にぶい赤褐色	灰オリーブ色	上：ロクロによるナデ，下：平行タタキ	ロクロによるナデ	精錬	内面に自然釉付着
	235	K- 6, V-14	Ⅲb, Ⅳ	須恵器	甕	42.5	—	—	灰色	にぶい赤褐色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	荒平窯系か
	236	S-13	Ⅲb, Ⅳ	須恵器	甕	40.9	—	—	黄褐色	黄褐色	格子目タタキ→ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬, 黒色粒	荒平窯系か
	237	P-11, Q-11	Ⅳ	須恵器	甕	22	—	—	茶褐色	灰色	ナデ＋格子目タタキ	ナデ＋同心円当て具	精錬	外面に自然釉付着
110	238	V-12	Ⅲb	須恵器	甕	19.2	—	—	灰オリーブ色	赤褐色	平行タタキ→ロクロによるナデ	ロクロによるナデ，同心円当て具→ロクロによるナデ	精錬	外面に自然釉付着
	239	V-12, 15	Ⅳ, Ⅳ上	須恵器	甕	14.8	—	—	灰オリーブ色	灰オリーブ色	ロクロによるナデ，格子目タタキ	ロクロによるナデ，同心円当て具	精錬	内外面に自然釉付着
	240	O-10, P- 8	Ⅲb	須恵器	甕	—	—	—	灰色	褐灰色	格子目タタキ	同心円当て具	精錬	外面に自然釉付着
	241	O-10	Ⅲb	須恵器	甕	—	—	—	褐色	にぶい褐色	格子目タタキ	同心円当て具→ナデ	精錬	外面に自然釉付着
	242	T-11, T-12	Ⅲb, Ⅳ上	須恵器	甕	—	—	—	暗灰色	灰色	格子目タタキ	平行当て具→ナデ	精錬, 黒色粒	—
	243	S-12	Ⅳ	須恵器	甕	—	—	—	橙色	橙色	平行タタキ	車輪文当て具	白色粒, 礫	焼成不良
	244	S-11, T-11	Ⅲb, Ⅳ	須恵器	甕	—	—	—	黄褐色	にぶい黄褐色	格子目タタキ	平行当て具	精錬	—
111	245	Y-13	Ⅲb, Ⅳ	須恵器	甕	—	—	—	黄灰色	灰オリーブ色	格子目タタキ	同心円当て具	黒色粒, 礫	—
	246	V-12, U-13	Ⅲb, Ⅳ	須恵器	甕	—	—	—	灰オリーブ色	浅黄色	平行タタキ	同心円当て具→平行当て具	精錬, 黒色粒	—
	247	Y-13, W-14	Ⅲb下, Ⅳ	須恵器	甕	—	—	—	黄灰色	灰黄色	平行タタキ	同心円当て具→平行当て具	精錬	上半分に自然釉付着
112	248	W-14, 15	Ⅲb, Ⅳ	須恵器	甕	—	—	—	灰白色	灰オリーブ色	格子目タタキ	同心円当て具（楕円気味）	精錬, 黒色粒	—
	249	X-15	Ⅲb	須恵器	甕	—	—	—	黄色	黄色	平行タタキ	平行当て具→ナデ	精錬	焼成不良
	250	U-14, V-14	Ⅳ, Ⅳ上	須恵器	甕	—	—	—	黄褐色	暗灰黄色	格子タタキ→工具による調整	平行当て具	精錬	—
	251	M-9	Ⅲb	須恵器	鉢	—	13.6	—	青灰色	青灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	白色粒, 礫	—

表24　古代遺物観察表（5）

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	胎土	備考
113	252	V-11, 12	Ⅲb	須恵器	鉢	21.1	—	—	青灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	片口付き
	253	L-6, K-8	Ⅳ	須恵器	壺	14.1	—	—	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬, 白色粒	—
	254	S-12	Ⅳ	須恵器	壺	16.3	—	—	褐色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	内面に自然釉付着
	255	T-11	Ⅲb	須恵器	壺	13.8	—	—	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬, 黒色粒	—
	256	R-13	Ⅲb	須恵器	壺	—	—	—	にぶい赤褐色	明黄褐色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	257	T-11	Ⅲb	須恵器	壺	—	—	—	にぶい黄橙色	黄橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	258	V-15	Ⅳ	須恵器	壺	—	—	—	灰白色	淡黄色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	259	X-14, Y-13	Ⅲb, Ⅳ上	須恵器	壺	—	—	—	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	260	L-7, L-8	Ⅲb, Ⅲc	須恵器	壺	—	—	—	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	外面に自然釉付着
	261	V-13, V-14	Ⅲb, Ⅳ上	須恵器	壺	—	—	—	褐色	灰オリーブ色	ロクロによるナデ	同心円当て具→ロクロによるナデ	精錬	—
	262	V-14	Ⅳ	須恵器	壺	—	—	—	明赤褐色	灰オリーブ色	ロクロによるナデ	同心円当て具→ロクロによるナデ	精錬	—
	263	Q-11	Ⅳ	須恵器	壺	—	12.1	—	明黄褐色	黄橙色	ロクロによるナデ	横撫→ロクロによるナデ, 底部→工具によるナデ	精錬	—
	264	X-14	Ⅲb	須恵器	壺	—	12.8	—	黄褐色	灰オリーブ色	指ナデ	ロクロによるナデ	精錬, 白色粒	—
	265	W-14	Ⅲb	須恵器	壺	—	7.25	—	灰オリーブ色	灰オリーブ色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
	266	X-14	Ⅲb	須恵器	壺	—	11.2	—	黒褐色	にぶい黄色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—
114	267	S-12	Ⅳ	須恵器	壺	—	—	—	褐灰色	灰オリーブ色	平行タタキ→ロクロによるナデ	同心円当て具＋平行当て具	精錬	—
	268	T-10	Ⅲb	須恵器	壺	—	18.3	—	灰色	灰白色	ｶｷﾒ→ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	精錬	—

表25　古代遺物観察表（6）

挿図	番号	出土区	層位	種別	品種	最大長 (cm)	最大径 (cm)	最大厚 (cm)	色調	備考
115	269	W-15	Ⅳ	土製品	紡錘車	—	6.7	0.9	浅黄橙色	赤色杯の転用品
	270	X-14	Ⅲb	土製品	紡錘車	—	5.7	0.85	浅黄橙色	坏の転用品
	271	Y-12	Ⅲb	土製品	紡錘車	—	6.7	1	浅黄色	坏の転用品
	272	R-11	Ⅳ上	土製品	紡錘車	—	6.6	0.7	淡黄色	坏の転用品
	273	W-14	Ⅲb	土製品	紡錘車	—	—	0.9	浅黄橙色	坏の転用品
	274	X-14	Ⅲb下	土製品	紡錘車	—	6.9	0.7	灰白色	坏の転用品
	275	U-14	Ⅲb	土製品	紡錘車	—	5.5	0.7	浅黄橙色	坏の転用品
	276	X-14	Ⅲb	土製品	鞴の羽口	—	8.9	3.6	ｵﾘｰﾌﾞ灰色／浅黄色	先端にｶﾞﾗｽ質が熔着
	277	U-14	Ⅳ	土製品	鞴の羽口	—	9.3	3.1	橙色	先端部被熱変色
	278	T-11	Ⅳ	土製品	鞴の羽口	—	7.8	3.1	明黄褐色	先端部被熱変色
	279	Q-9	Ⅳ	土製品	鞴の羽口	—	8	2.8	灰色	外面に溝が５本

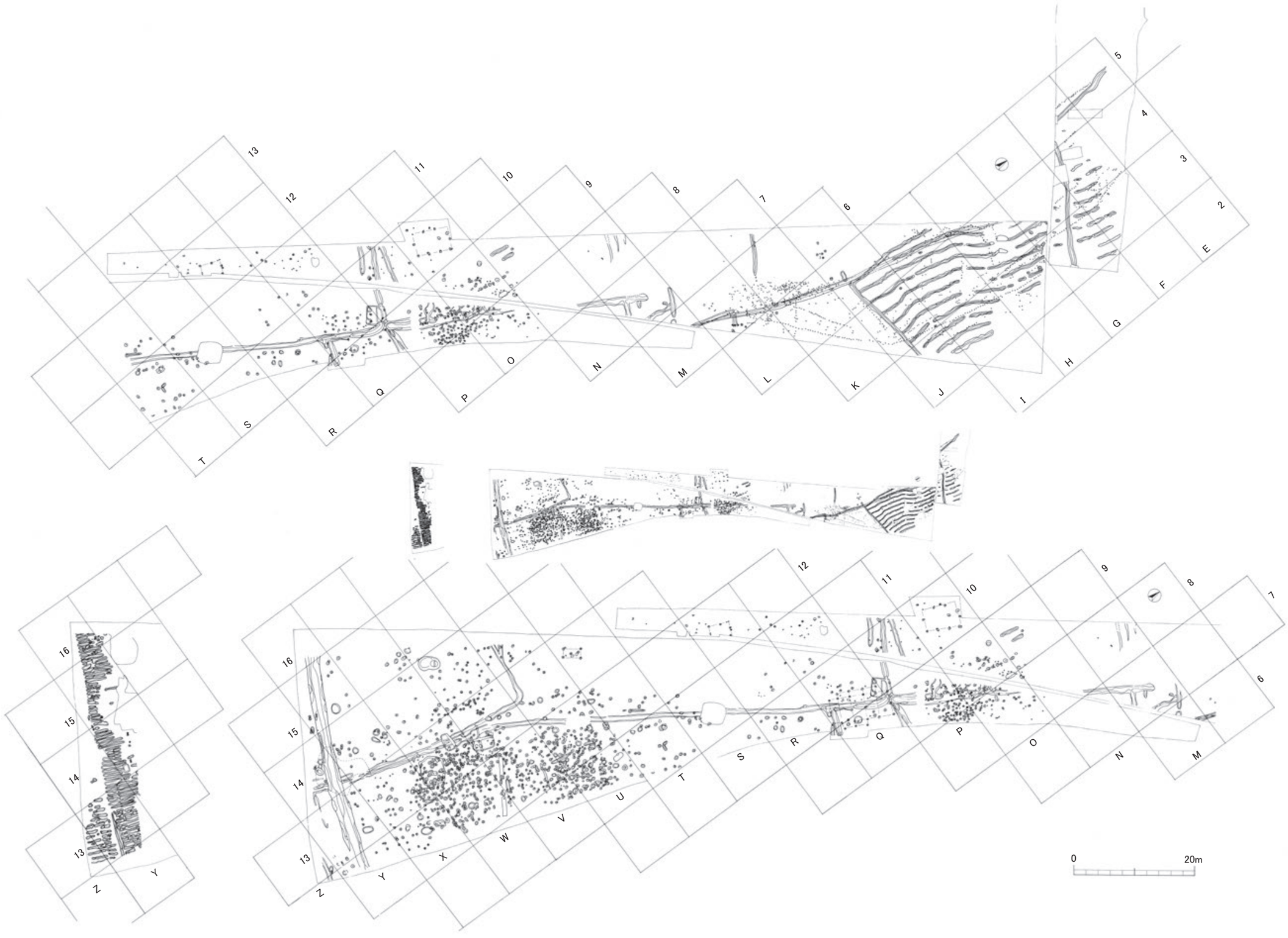
挿図	番号	出土区	層位	種別	品種	器面調整	色調	備考
116	280	X-12, 13	Ⅳ	土製品	カマド	ハケ目	にぶい黄橙色	ススの付着
	281	N-10	Ⅲb	土製品	カマド	ナデ	にぶい黄橙色	—
	282	K-6	Ⅲb	土製品	カマド	ナデ	にぶい褐色	内外面に被熱痕
	283	V-13	Ⅲb	土製品	カマド	ナデ／ハケ目	にぶい橙色	—
	284	M-7	Ⅲb	土製品	カマド	ナデ／指オサエ	橙色	—
	285	W-13	Ⅲb	土製品	カマド	ナデ / ハケ目	橙色	ススの付着

表26　古代遺物観察表（7）

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	備考
117	286	I-6	Ⅲb	石製品	砥石	19.1	4.4	—	頁岩　半分欠損
	287	S-13	Ⅳ	石製品	砥石	10.7	4.9	1.8	砂岩
	288	W-14	Ⅳ	石製品	砥石	—	9.8	3.6	砂岩　半分欠損

表27　古代遺物観察表（8）

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種	部位	最大長 (cm)	最大厚 (cm)	最大幅 (cm)	重量 (g)	備考
117	289	W-12	—	鉄製品	紡錘車	紡輪・紡茎	—	3.2	4.1	19.91	—
	290	W-13	Ⅲb	鉄製品	紡錘車	紡輪	—	1	4.1	12.49	—
	291	J-6	Ⅲb	鉄製品	鎌	基部～刃部	13.8	0.9	2.9	36.03	—
	292	U-12	Ⅲb	鉄製品	鎌	刃部	16.3	1.3	3.2	52.96	—
	293	R-10	Ⅲb	鉄製品	鎌	刃先	7.1	1	3.1	13.39	—



第121図　中世遺構全体図

第Ⅷ章　中世の調査

第１節　遺　　構

１遺構の概要

中世の遺構としては，掘立柱建物跡４棟や竪穴建物跡１棟，土坑墓２基，土坑４基，溝状遺構15条，畝間状遺構５か所，土師器の集積遺構３基，杭列などが検出されている。基本的にはⅣ層の上面で検出し，埋土はⅢｂ層を中心としている。

２遺構

（１）掘立柱建物跡

Ｐ・Ｑ－９・10区とＯ－10区，それにＲ－12区でそれぞれ１棟ずつ検出された。以下，それぞれについて概要を述べる。

①掘立柱建物跡１号（第122図）

Ｏ－10区で検出された。一部，調査区域外にひろがっている。規格は２間×３間である。柱穴の深さは，最も浅いもので19cm，最も深いものでは42cm となり，残存値で35cm 程度のものが多い。削平を受けた可能性も考えられるが，明確ではない。

②掘立柱建物跡２号（第122図）

Ｐ・Ｑ－９・10区で検出された。大きさは10.42m×4.18mで，これに東側と西側に庇が付く。柱穴の深さは，７～52cm であり，残存値で25～30cm のものが多い。

③掘立柱建物跡３号（第122図）

Ｒ－12区で検出された。一部，調査区域外に延びているが，規格は２間×２間であると考えられる。複合する柱穴は，建て替えによる結果と考えられる。柱穴の深さは，最も浅いもので４cm，５cm であった。これらは大規模な削平を受けたと考えられる。それ以外では10cm，最も深いものでは31cm となり，残存値で15cm 程度のものが多い。

④掘立柱建物跡４号（第123図）

Ｔ－13区で検出された。１間×１間の掘立柱建物跡の内部南側に２基の土坑が確認されており，本建物跡に付随する遺構と考えられる。１基の土坑Ａは，建物跡の南側の中でも南に掘られた土坑である。長軸方向はほぼ南北方向で52cm，短軸方向はほぼ東西方向で42cm あり，平面形は幅の広い楕円形である。深さは東側に16cm の最深部があり，西側にかけては緩やかな傾斜で上がっていく。もう１基の土坑Ｂは，建物跡の南側の中でも北に掘られた土坑である。長軸方向はほぼ東西方向で56cm，短軸方向はほぼ南北方向で28cm あり，平面形は幅の狭い楕円形である。深さは最深部で13cm で，底面の形状は弧状を呈している。

出土遺物（第123図１）

土坑Ａ内から砥石が出土した。石材はいわゆる天草砥石で，表面に使用痕が観察できる。

（２）竪穴建物跡（第124図）

Ｗ－13区で検出された。調査区域の南部で，中世大溝とした溝状遺構１号の北側，南北方向に延びる大規模な溝状遺構の東側に隣接して確認された。長辺が4.64m，短辺は3.96mで，基本的には長方形を呈しており，西側の中央部のみやや弧状に張り出している。主軸方向はＮ64°Ｗである。掘り方の深さは，東側で53cm，西側で60cm となっており，床面には若干凹凸が見られる。

床面には数多くのピットが見られるが，すべてが本遺構に伴うものとは考えられない。各辺の壁側に位置する両端及び中央部の３基ずつのピットと，中央のものが柱穴ではないかと考えられ，９本の柱で支えられた建物と思われる。また，中央部東側と，北及び東側にあるピットよりも規模の大きなものは，それぞれ深さがそれほど深くはないことから，一般的な土坑ではないかと考えられる。

出土遺物（第124図２～14）

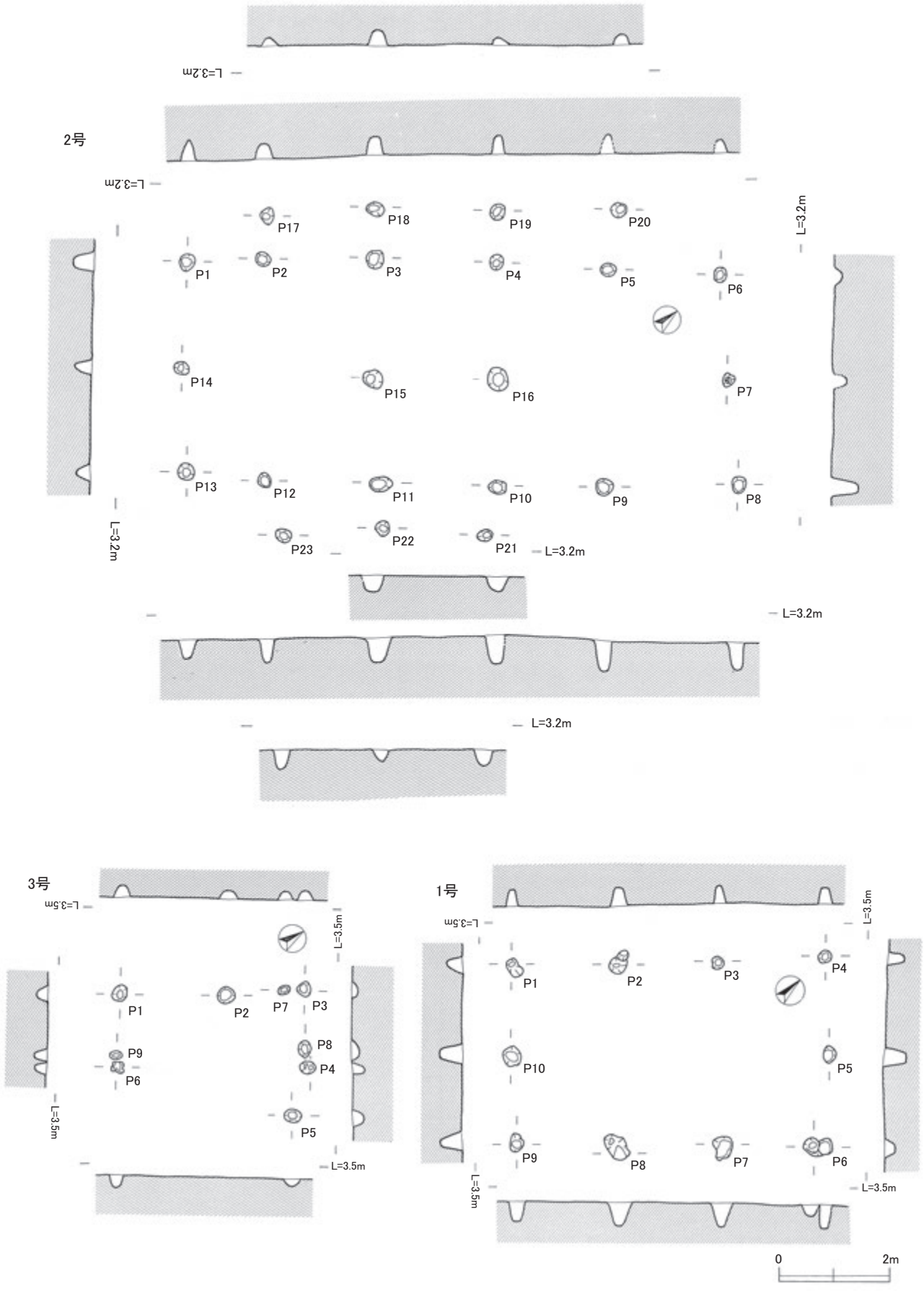
２・３は土師器の坏である。２の底部付近には指頭痕がつく。５～７は和泉型と思われる瓦器椀である。５の内面，６の内外面にはヘラミガキが施される。７の外面には指頭圧痕がつく。８は東播磨系の捏鉢である。10・11は鎬蓮弁のある龍泉窯系青磁の碗である。11の見込みには細い草花文様の刻印がある。13は輸入陶器の甕の胴部である。内面には同心円状の当て具痕がある。14は刀子の茎部の付け根部分で，段がある。

（３）土　　坑

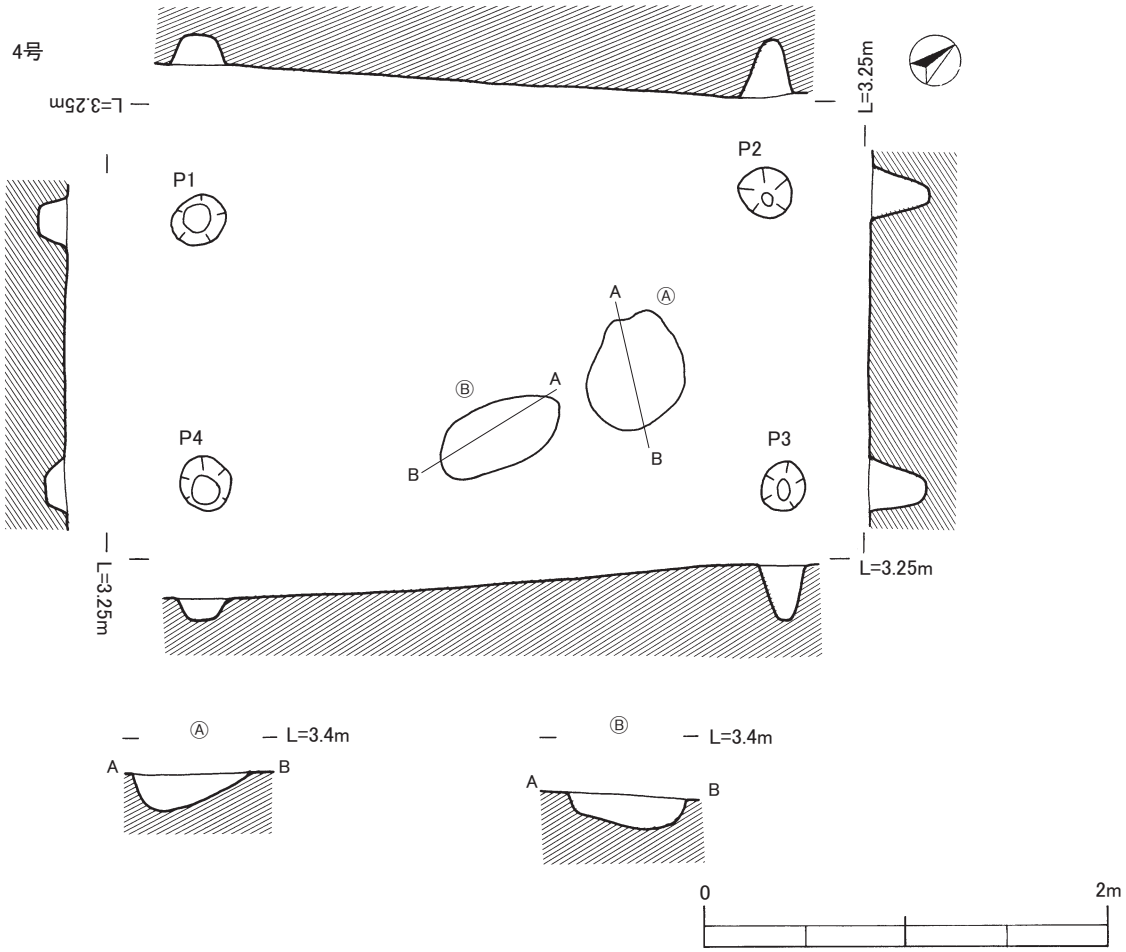
５基の土坑が検出された。以下，その概略を述べる。

①１号土坑（第126図）

２号土坑に隣接するように，Ｑ－９区で検出された。明瞭な掘りこみは見られないが，ここでは土坑としておきたい。焼土は直径約50cm 弱で，厚さは３cm 程度である。周囲が焼けた状況ではなかったようであるが，それは熱が焼土の周囲にまで及ばなかったと考えられるほか，焼土のまとまりとして掘った穴に遺棄されたものである可能性も考えられる。



第122図　堀立柱建物跡（１）



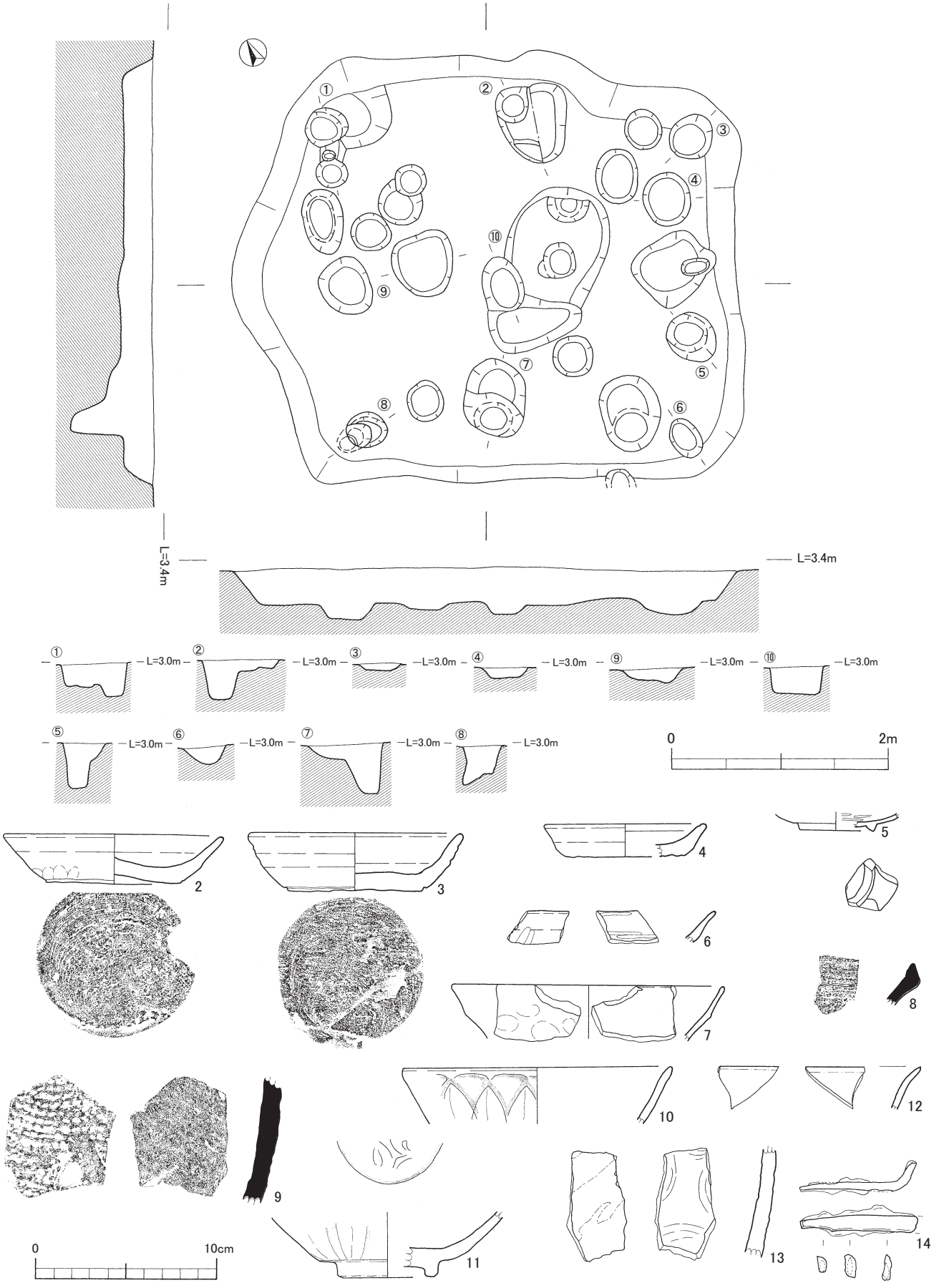
第123図　堀立柱建物跡４号及び遺構内遺物

②２号土坑（第126図）

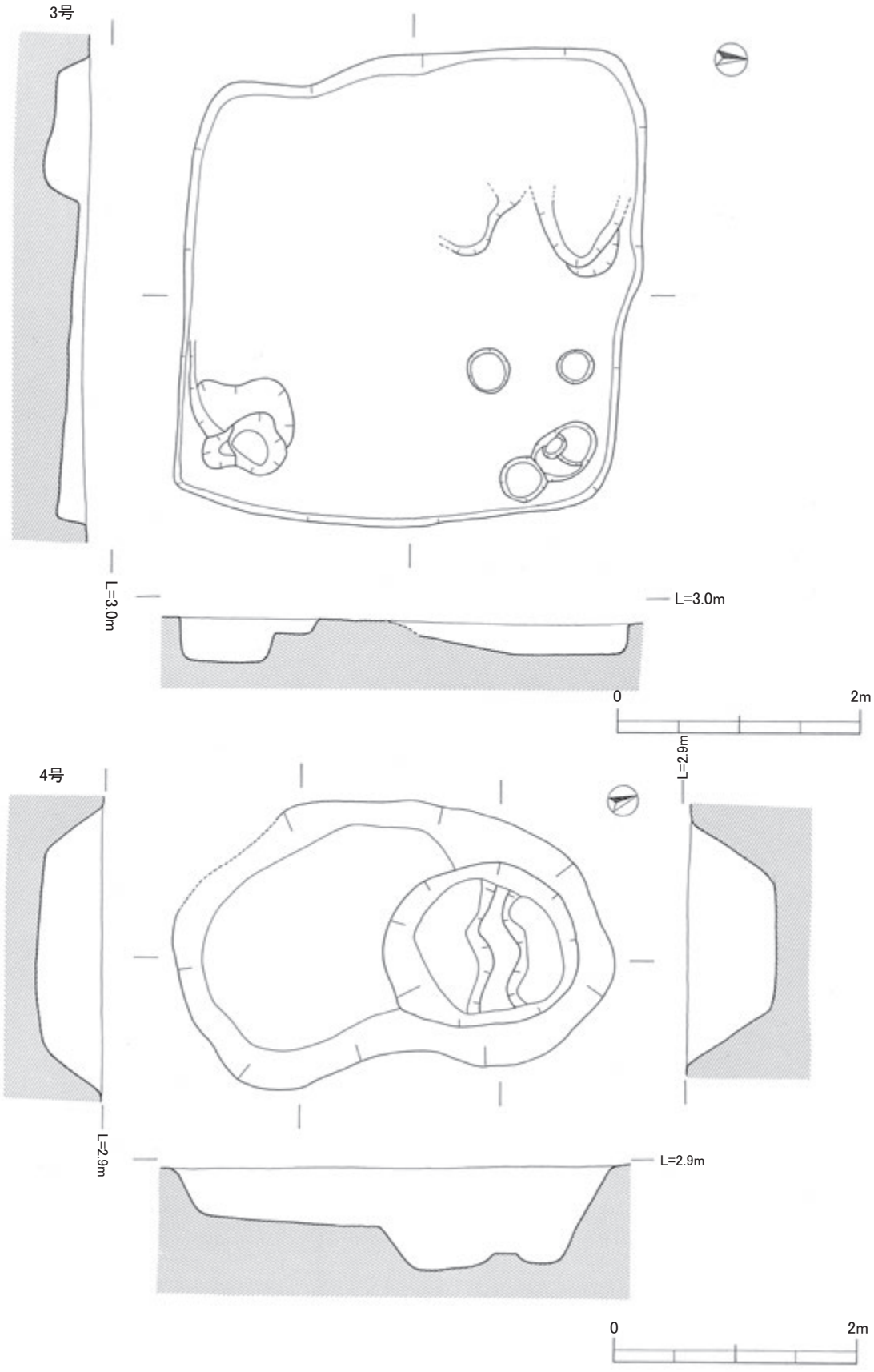
１号土坑に隣接してQ－９区で検出された。長軸方向はほぼ南北方向で105cm，短軸方向はほぼ東西方向で98cmあり，平面形状は丸まった楕円形と言える。本土坑の深さは10～15cm程で，底面は凹凸が著しい。中央部やや南側に30×40cm程の焼土がまとまっている。周辺の土が茶褐色などで，かつ焼けた状況ではないことから，この焼土は掘られた穴に遺棄された可能性が考えられる。

③３号土坑（第125図）

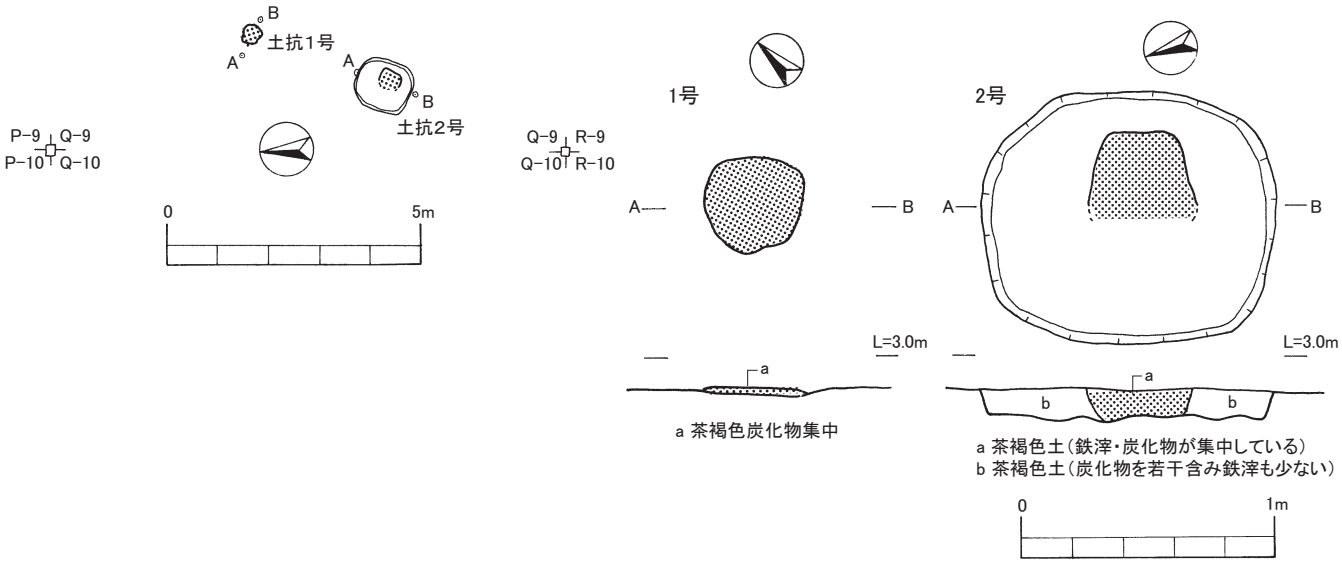
Ⅴ－13区で検出された。長辺が3.83m，短辺は3.75mで，やや歪んだ正方形か菱形に近い形状と言える。深さは６～37cmと差が大きい。中央部付近が極めて浅く，北及び東側に徐々に傾斜しているとともに，南及び西側には急激な段差をもって深くなっている。主軸方向はＮ８°Ｗである。東側の床面にピットが見られるほか，北西側には土坑状の掘り方も見られる。用途については不明である。



第124図　竪穴建物跡及び遺構内遺物



第125図　３号・４号土抗



第126図　１号・２号土抗

④４号土坑（第125図）

Ｖ－14・15区で検出された。長径は3.61m，短径が2.34mで，基本的には楕円形といえる。主軸方向はＮ41°Ｅである。掘り方は２段になっており，１段目の深さは39cm，２段目の最深部で85cmとなっている。２段目は，中央部が帯状に高くなっており，その部分を境にして北側及び南側に窪む形となっている。用途については不明である。

（４）溝状遺構

中世の溝状遺構は，規模の大小・長短合わせて15条ほど検出された。以下に概要を述べる。

①溝状遺構１号（第127図）

溝状遺構２号と同様に樋門部分のほぼ中央部，Ｅ・Ｆ－５区で検出された。幅は36～81cmで，深さは17～22cmと極めて浅く，検出された総延長は12.0mである。断面形はほとんどは逆台形であるが，一部には箱形となるものもある。北から南方向に，ほぼ直線的に掘られている。途中，一部に深い箇所があるものの，全体的に見ると南側が浅く，北側が深くなる傾向があることなどから，南側から北に向かって流れていたものと考えられる。溝の西側に畑の畝跡が見られるが，畑とは同時併存の可能性も考えられる。また，溝の南側が調査されていないために，溝状遺構２号と繋がっているのかどうかについても判然としない。

②溝状遺構２号（第127図）

Ｆ・Ｇ－３～５区で検出された。本調査区域は樋門部分であるが，その東側で検出されたことになる。

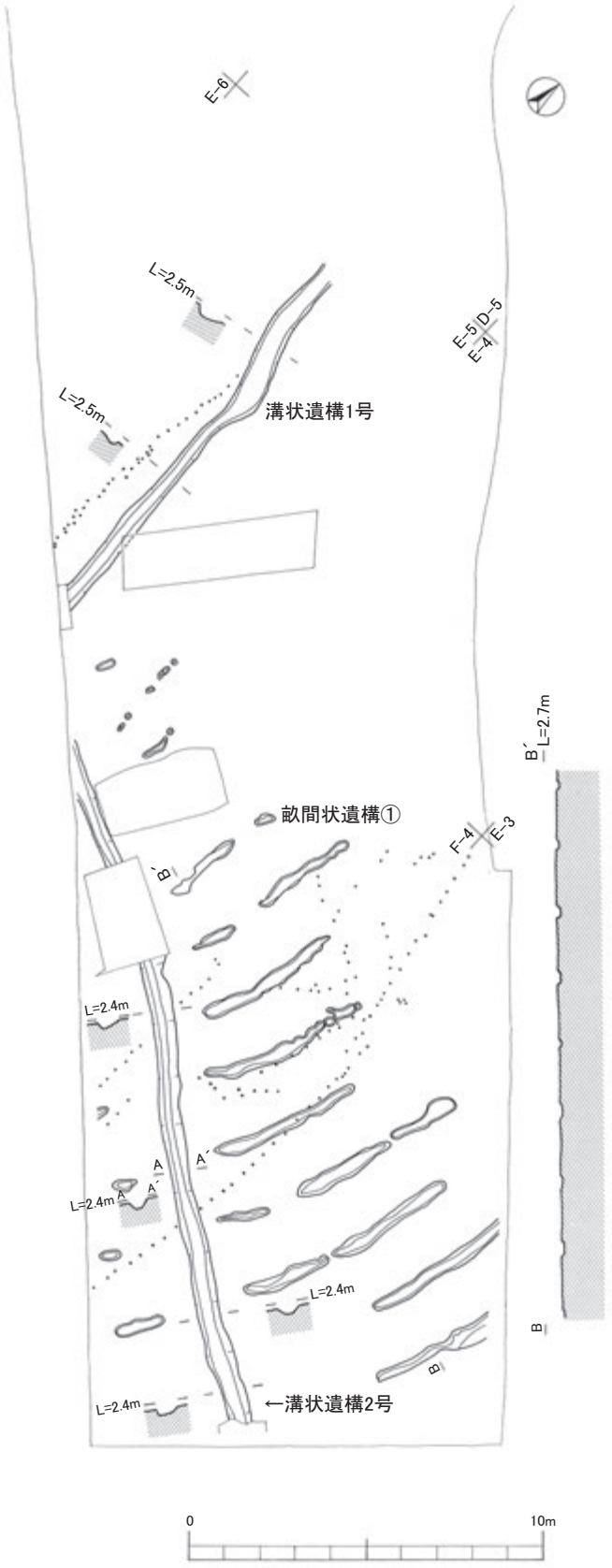
幅は40～80cmで，深さは18～22cmと極めて浅く，検出された総延長は19.8mである。断面形はほとんどは逆台形であるが，一部には三角形となるものもある。北西から南東方向に，やや斜めに掘られている。全体的に見ると西側が浅く，東側が深くなる傾向があることなどから，西側から東に向かって流れていたものと考えられる。

③溝状遺構３号（第136図）

Ｉ～Ｊ－３～５区で検出された。東西に延びた途中から北側にほぼ直角に曲がっている。このため，全体的には矩形の溝ということになる。幅は33～88cm，深さは17～25cmである。検出した総延長は，東西方向が16.0m，南北方向で16.5m，双方を合わせた長さは32.5mとなる。この溝の内側（北西側）には，緩やかにカーブを描いた形状の畑の畝跡が展開する。南北方向の溝によって，畑の畝が切られていることから，この溝は畑と同時併存か，新旧があるとすれば溝の方が新しいと言える。ただ，畑の畝跡が溝の東側には延びていないことを考えれば，この溝は畑の区画溝であることも考えられる。1号と繋がる可能性が高い。

④溝状遺構４号（第128図）

Ｈ～Ｍ－４～６区で検出された。わずかに弧を描きながらも主軸はＮ15°Ｅで，総延長は55.7mである。幅は60cm～1.2m，深さは20～40cmである。途中が溝状遺構３号によって切られているため，時期的に３号より古いものであると考えられる。溝の断面形は浅い逆台形状を呈している。遺構の両端でレベル差があまりなかったため，どちらの方向へ流れていたかは不明である。



第127図　溝状遺構１号・２号・畝間状遺構①

⑤溝状遺構５号（第129図）

Ｋ－６・７区で検出された。幅は39～60cm，深さが10～28cm，総延長は7.1ｍで，主軸方向は59° Ｗ，断面形逆台形である。

⑥溝状遺構６・７号（第129図）

Ｍ・Ｎ－６～８区で検出された。６号は，７号の北東部に位置する。幅は48～82cm，深さは７～20cm，斜め方向にＴ字状となっている。検出された南北方向の長さは4.0ｍ，主軸方向はＮ19° Ｅである。溝の断面形は皿形か三角形である。７号は，溝状遺構13号の延長部分に当たるものかとも思われるが，途中を調査区域のほぼ中央部に造られた現代の溝によって破壊されているため，明確にすることはできない。幅は77～120cmで，途中で東に分かれる。検出した直線部分の総延長は11.67ｍである。深さは８～18cmで，一般的に北側が浅いことから，南側に流れていたと想定される。主軸方向はＮ39° Ｅで，溝の断面形は皿形を基本とする。

⑦溝状遺構８・９号（第129図）

Ｎ－９区で検出された。８号は，幅が22～45cm，深さが４～９cm，総延長は1.6ｍで，主軸方向はＮ６° Ｗ，断面形は皿形である。９号は，幅が31～44cm，深さが６～10cm，総延長は3.5ｍで，主軸方向はＮ３° Ｅ，断面形は皿形である。

⑧溝状遺構10・11・12号（第129図）

Ｐ－10・11区で検出された。10号は幅が31～71cm，深さが６～14cm，総延長は6.6ｍで，主軸方向はＮ80° Ｗ，断面形は皿形～逆台形である。11号は，幅が69～81cm，深さが18～25cm，総延長は5.8ｍで，主軸方向はＮ64° Ｗ，断面形は逆台形である。12号は，幅が57～80cm，深さが８～10cm，総延長は4.9ｍで，主軸方向はＮ66° Ｗ，断面形は皿形である。

⑨溝状遺構13号（第130図）

Ｐ～Ｖ－９～13区で検出された。Ｐ－10区で西から短く東へとほぼ直線的に流れた後に，同区でほぼ直角に南側に向きを変え，そのままほぼ直線的に南に向かい，溝状遺構２号合流する形で南に向かい，そのまま調査区域外へと流れている。主軸方向は，南に向きを変える前の西側部分でＮ60° Ｗ，向きを変えた後ではＮ39° Ｅとなっている。幅は30～57cmで，検出した長さは向きを変える前の西側で6.1ｍ，向きを変えた後の南側で89.5ｍに及び，総延長は95.6ｍとなる。深さは，14～24cmであり南側が浅く西側が深くなっていることから，南から北に向けて流れた後，向きを変えて西側へと流れていた

ものと考えられる。溝の断面形は皿形や浅いU字状を基本とするものの，部分的には浅い逆台形状や段を有している。

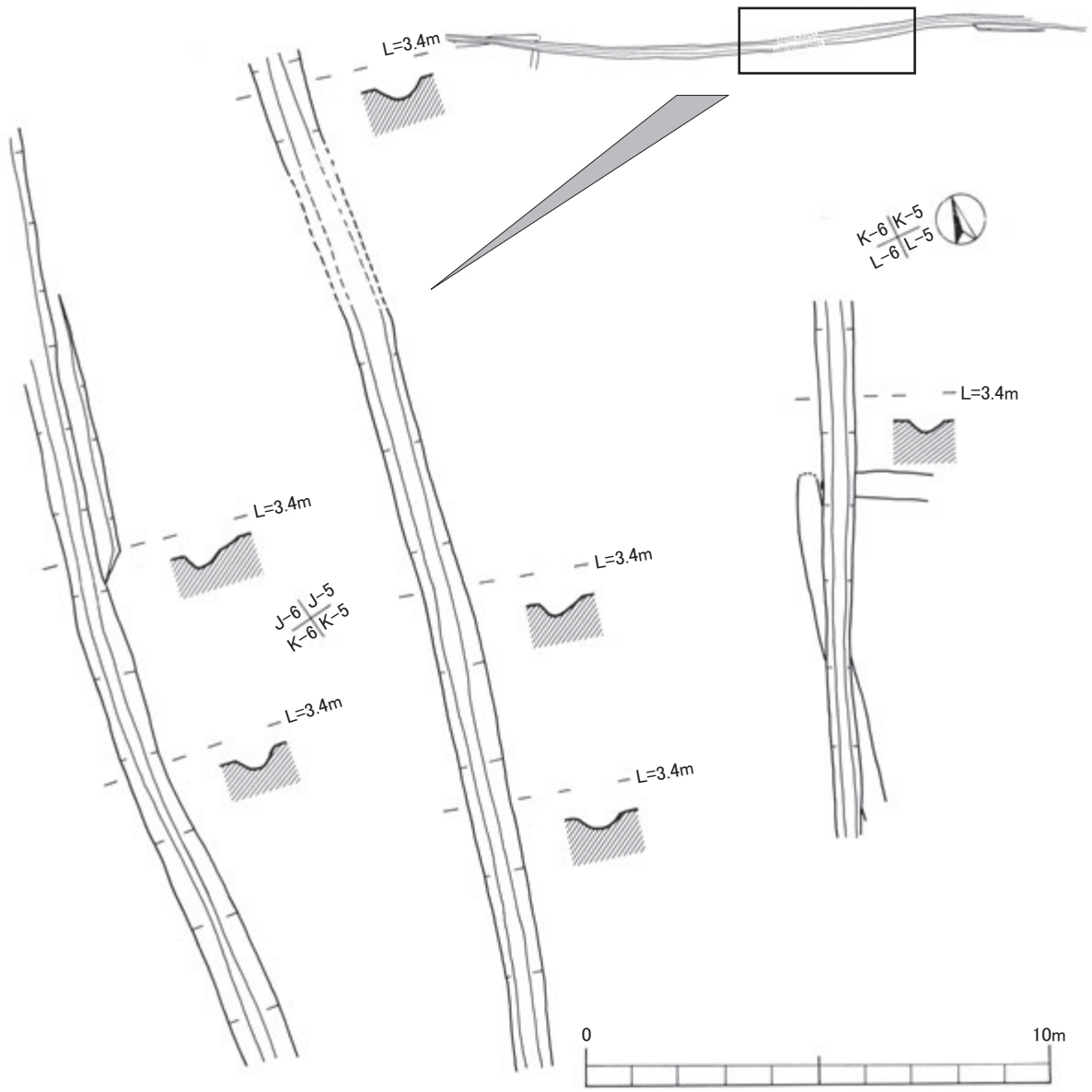
⑩溝状遺構14号（第130図）

U～Y－13・14区で検出された。U－14区からU－13区に東に向けて直線的に流れた後に，U－13区でほぼ直角に南側に向きを変え，そのままほぼ直線的に南に向かい，溝状遺構15号の下方を通って調査区域外へと流れている。主軸方向は，南に向きを変える前の西側部分でN81°W，向きを変えた後ではN13°Eとなっている。幅は21～48cmで，検出した長さは向きを変える前の西側で5.0m，向きを変えた後の南側で38.3mに及び，総延長は43.3mとなる。深さは，8～34cmであり西側が浅く南側が深くなっていることから，西から東に向けて流れた後，向きを変えて南側へと流れていたものと考えられる。溝の断面形は皿形を基本とするものの，部分的には浅い逆台形状を呈していると言える。

⑪溝状遺構15号（第131図）

調査段階で“中世大溝”と呼称していた溝である。調査区域の南部南端の，X・Y－12～16区で検出された。

幅は1.81～2.60mで，検出した長さは37.2mに及んでいる。主軸方向はN64～72°Wで，ほぼ東西方向に近い向きに設定されていると言えよう。深さは，1.12～1.25mであり，東側が浅く西側が深くなっていることから，東から西に向けて流れていたものと考えられる。溝の断面形は逆台形を基本とするものの，部分的には1～2段の



第128図　溝状遺構４号

段を有する箇所や，局所的に窪んだところもあるなど一様ではない。また，流路面の北側や南側で，奥の方に向かって若干浸食している状況も見られることから，流水がある程度の勢いを持って流れていたことを裏付けているとともに，流水が直線的に流れていたのではなく，屈曲しながら流れていた状況も表していると考えられる。床面が硬化しており，埋土は大きく２層に分かれている。いずれも中世の遺物が多く出土しているが，埋土の違いによる遺物の時期差はみられない。

出土遺物（第132図15～第134図68）

・溝状遺構４号　15～17

15は白磁の碗である。見込みに櫛目文を施す時についたと思われる施文具の痕が，針穴が並んでいるようにつく。16は脚付土製煮炊具の脚部の先端付近である。17は砥石の一部であるが，両面に各３本ずつ溝を有する。再加工して別の石製品を作るためと考えられるが，詳しいことは不明である。

・溝状遺構５号　18

18は青磁の碗である。外面の釉が梅花皮状になっている。雷文，もしくは無文の14世紀後半～15世紀頃のものであると考えられる。

・溝状遺構12号　19～23

19は底径が小さく，胴部下位でいったん水平方向へ広がった後に，内湾気味に立ち上がる土師器の坏である。21は外面底部に工具痕を有する土師器の皿である。23は白磁の皿である。見込みの釉を環状に剥ぎ取り，露胎部分には数ケ所目跡を有する。

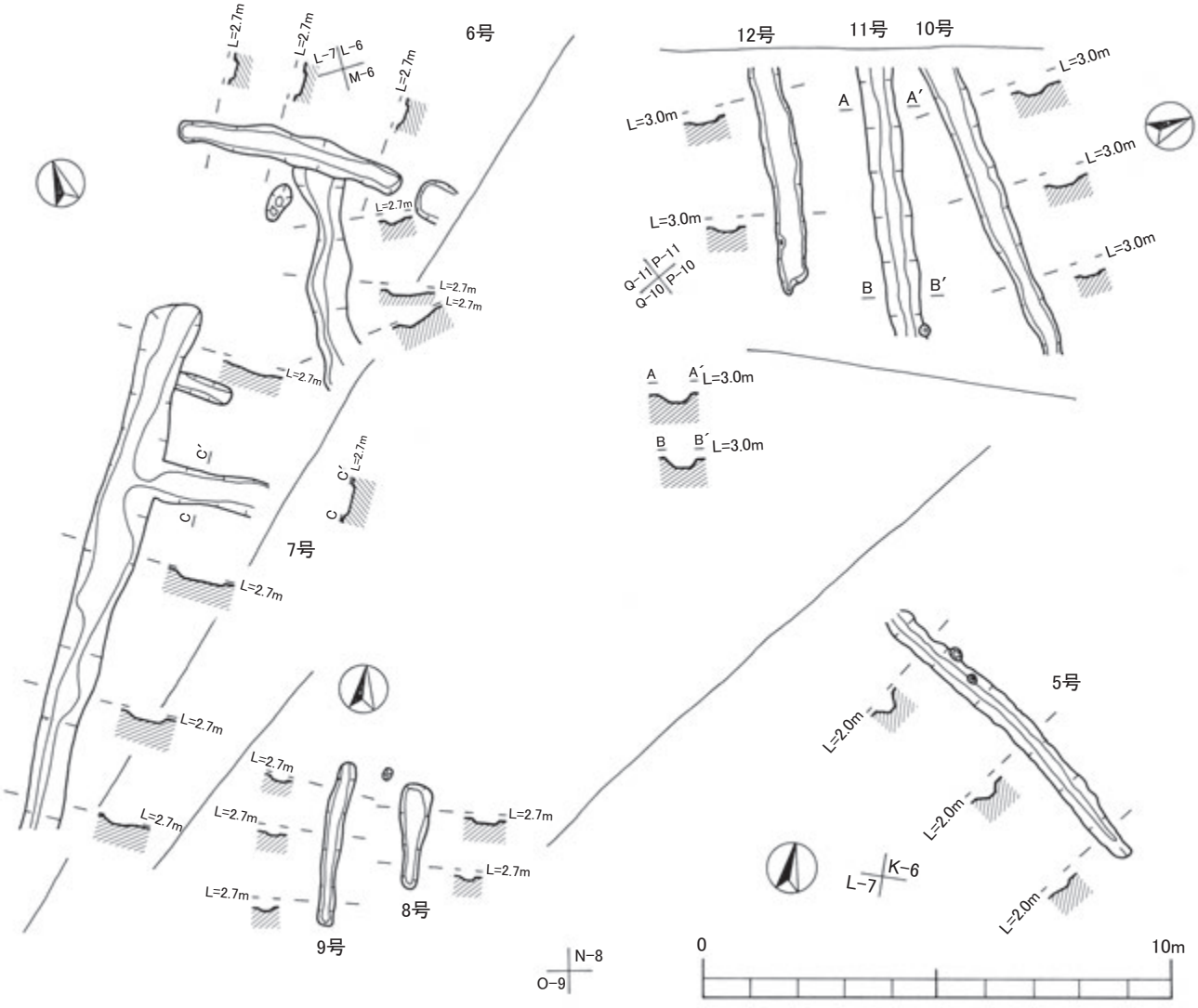
・溝状遺構13号　24～27

24は高台内面に矢印様の線刻がある椀である。高台は低く，外へ開く。

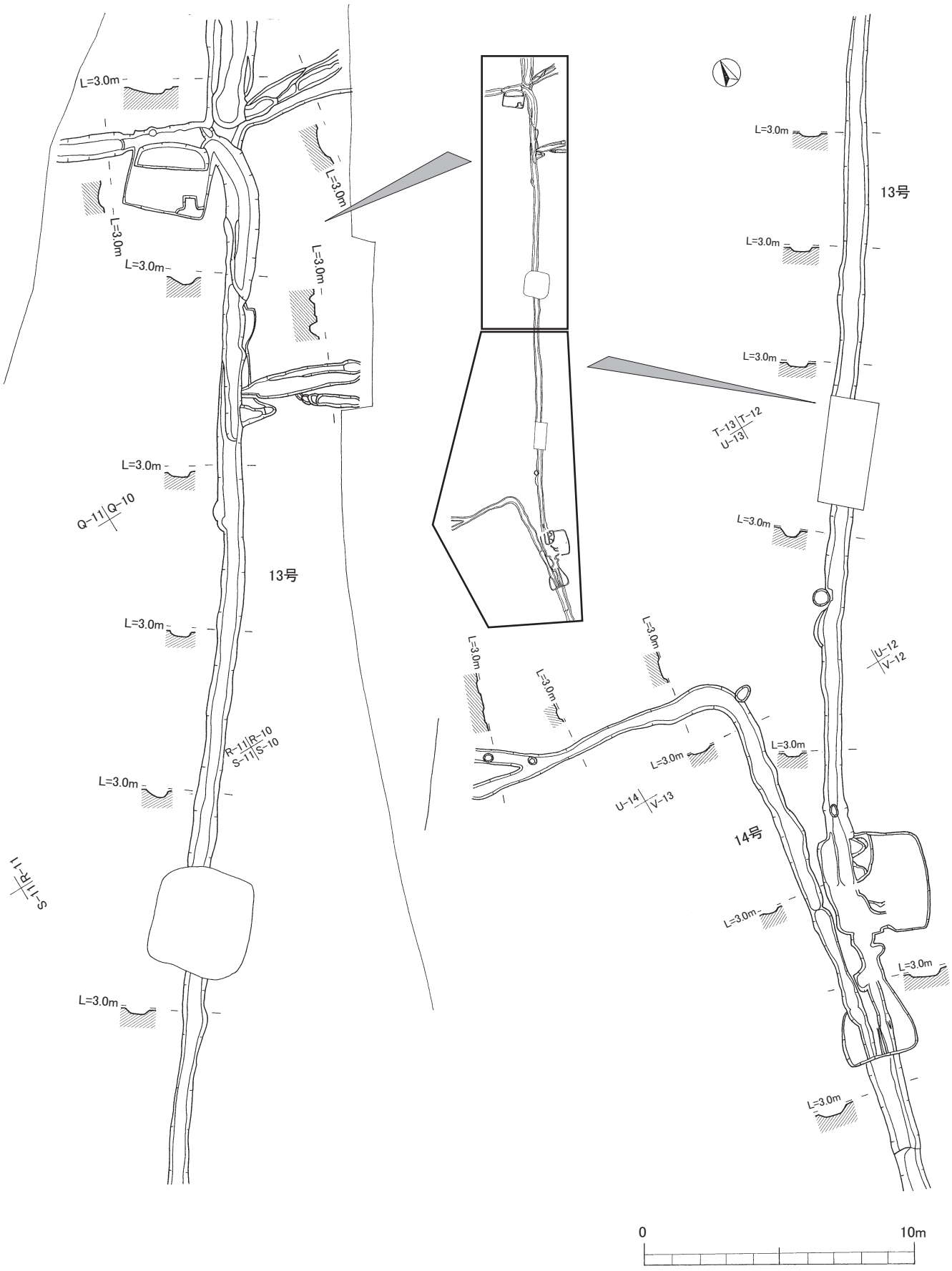
・溝状遺構14号　28～31

30は土師器の皿である。外底面には糸の切り離し痕が明瞭に残る。

・溝状遺構15号　32～68

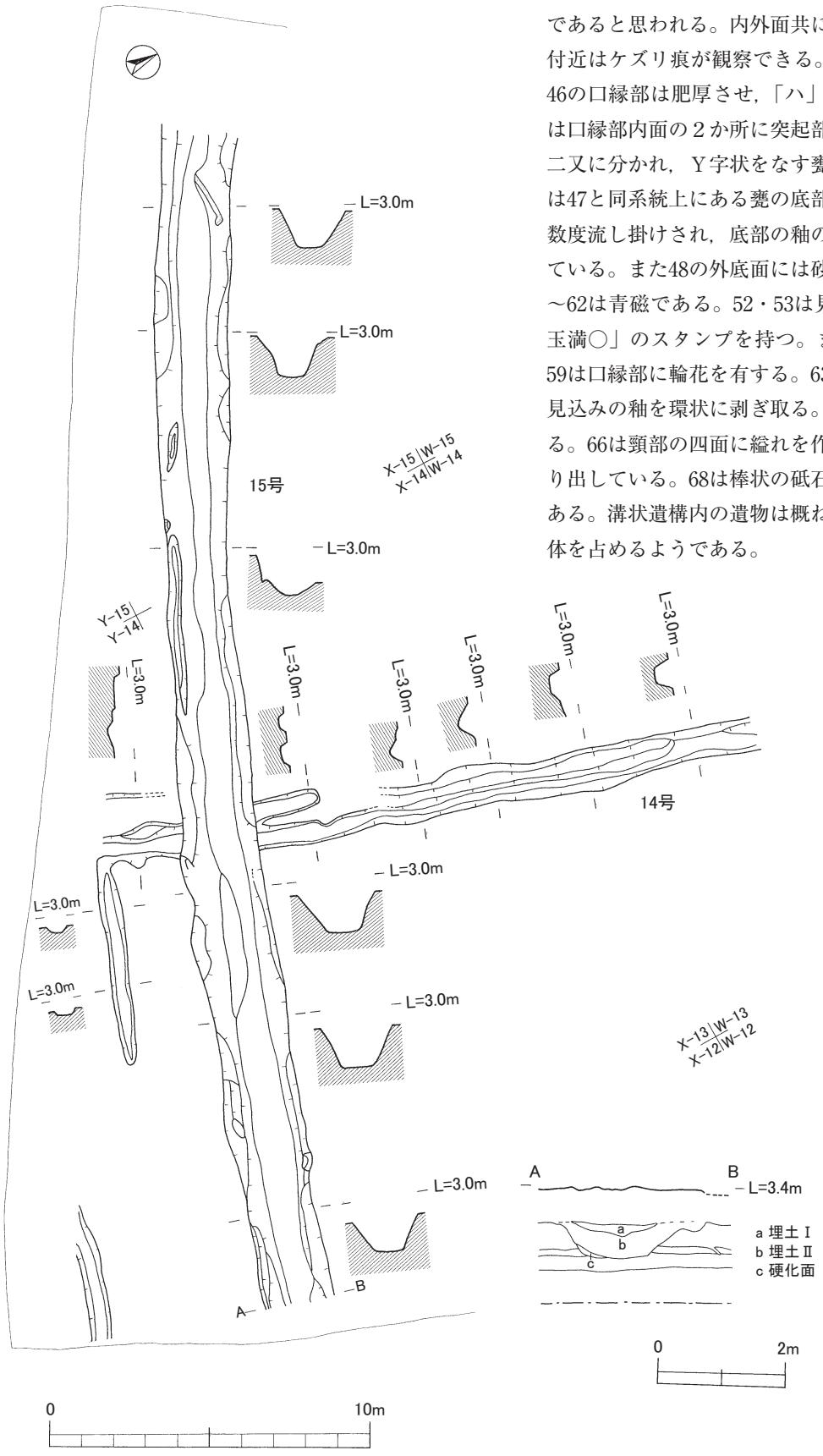


第129図　溝状遺構５号～12号

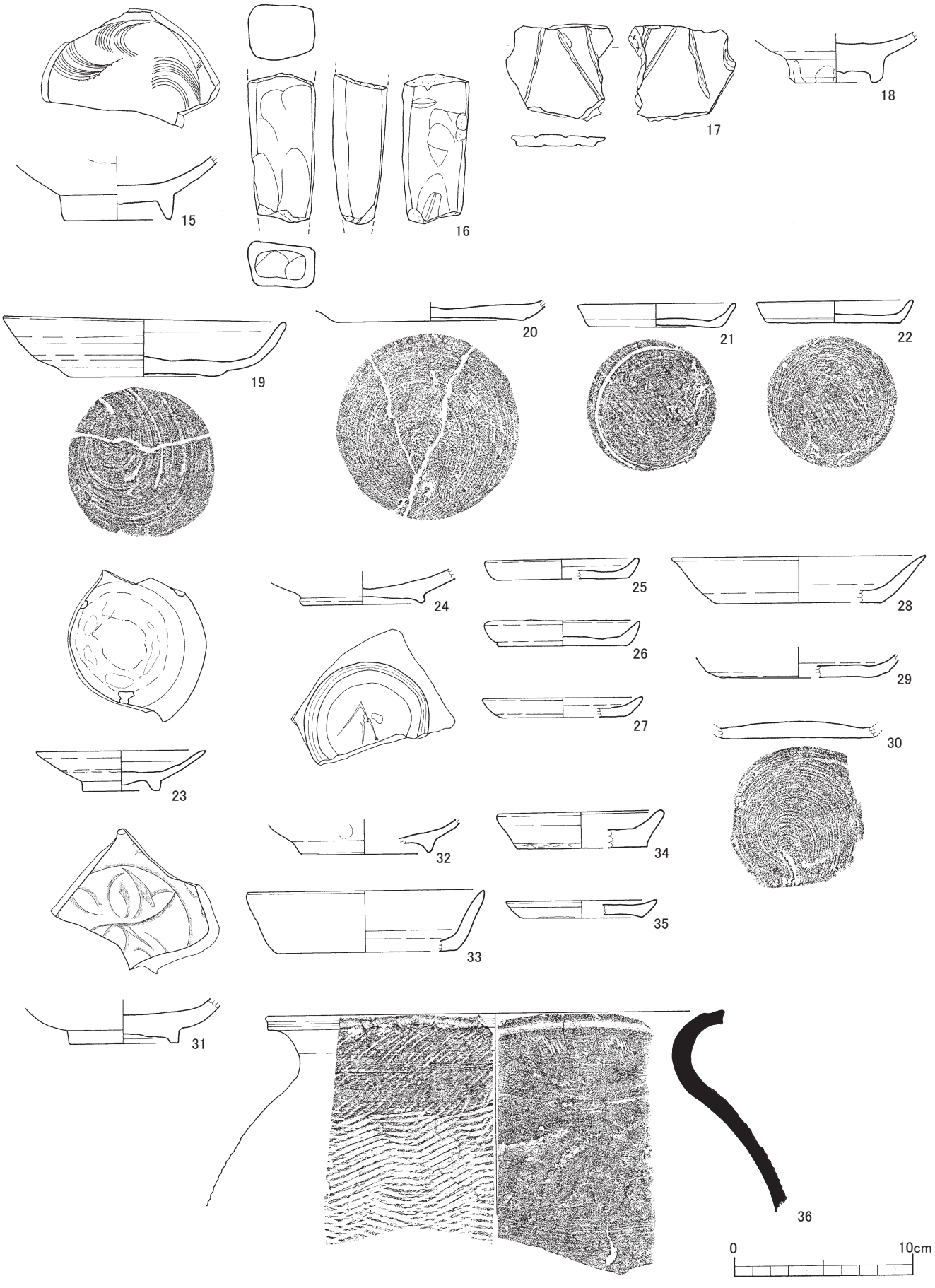


第130図　溝状遺構13号・14号

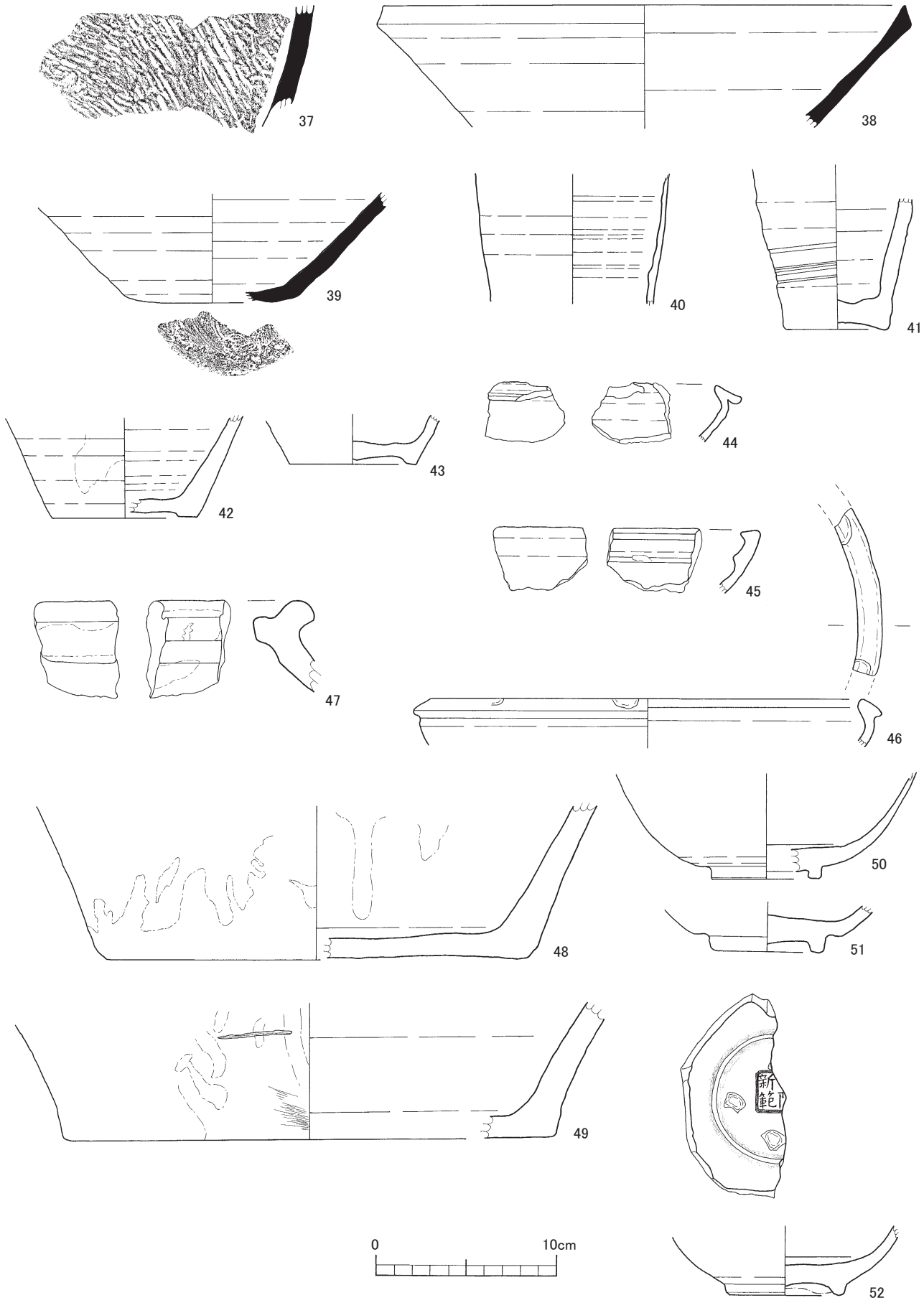
32～35は土師器である。32は胎土より瀬戸内地方からの搬入品であると思われる。36は土師質（瓦質）の甕である。内面の当て具痕はナデ消されている。口径は24.5cmを測る。40～64は輸入陶器である。40～43は壺であると思われる。内外面共に施釉され，41の底部外面付近はケズリ痕が観察できる。44～46は鉢である。44・46の口縁部は肥厚させ，「ハ」の字形に外側に開く。45は口縁部内面の２か所に突起部を有する。47は口縁部が二又に分かれ，Ｙ字状をなす甕の口縁部である。48・49は47と同系統上にある甕の底部と思われる。内面は釉が数度流し掛けされ，底部の釉の一部は，梅花皮状になっている。また48の外底面には砂が多く付着している。50～62は青磁である。52・53は見込みに「○○新範」「金玉満○」のスタンプを持つ。また，52は目跡を有する。59は口縁部に輪花を有する。63・64は白磁である。63は見込みの釉を環状に剥ぎ取る。66・67は滑石加工品である。66は頸部の四面に縦れを作ることによって頭部を作り出している。68は棒状の砥石である。２面に敲打痕がある。溝状遺構内の遺物は概ね，12世紀後半のものが主体を占めるようである。



第131図　溝状遺構14号・15号



第132図　溝状遺構内遺物（１）



第133図　溝状遺構内遺物（２）



第134図　溝状遺構内遺物（３）

（５）畝間状遺構

中世に位置づけられる畝間状遺構は，４か所で確認されている。それぞれについて，概略を述べる。

①Ｆ・Ｇ－３～５区（第127図）

樋門の西側に確認された畝跡であり，１条の長さの最も長いもので4.5m程度である。幅は15～60ｃｍを測る。Ｇ～Ｊ－３～５区より続いている畝跡と思われる。

②Ｇ～Ｊ－３～５区（第136図）

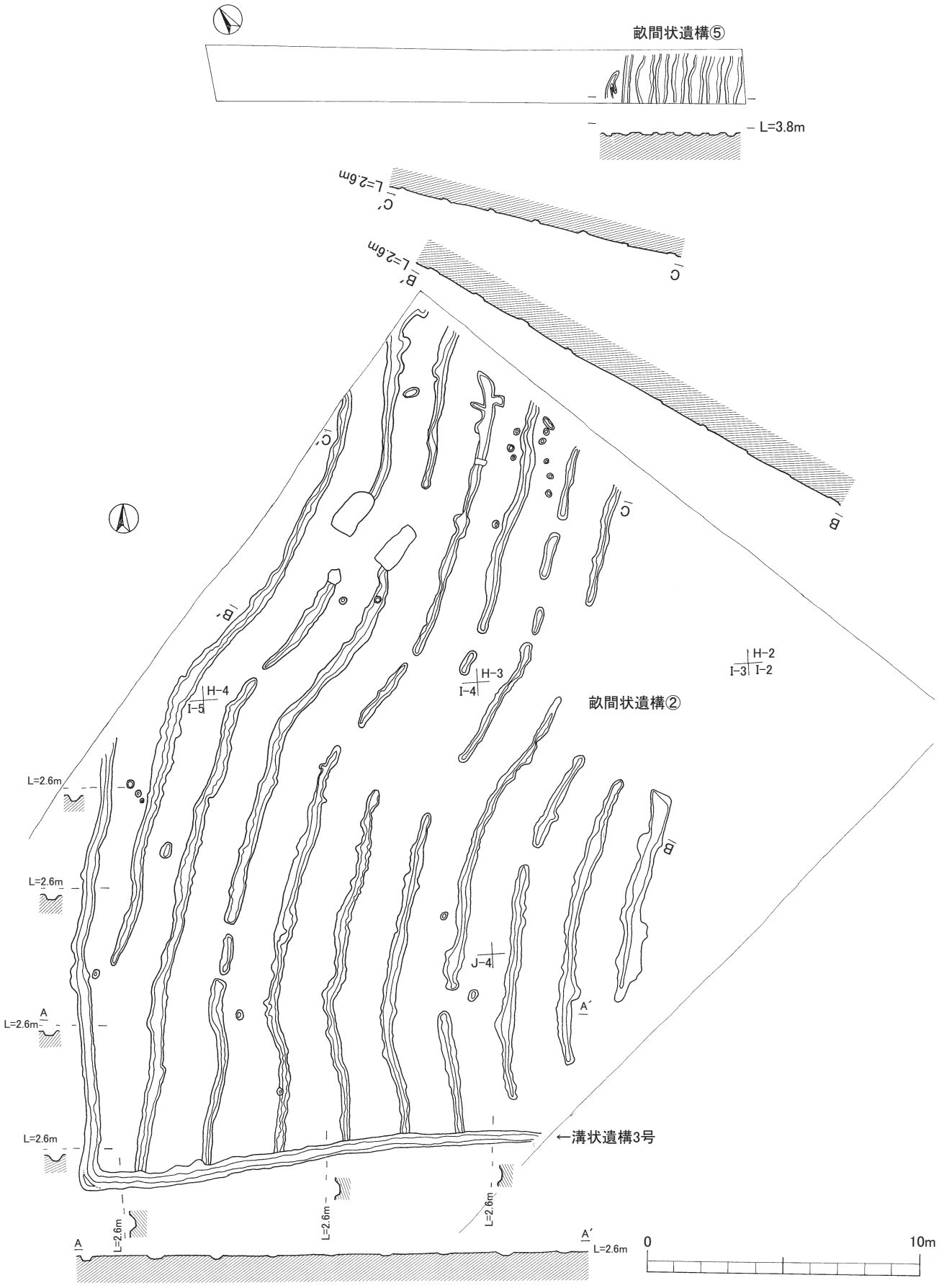
調査区の北部，樋門部分を除くと最も北側で，ほぼ南北方向に確認された畝跡である。調査範囲いっぱいに広がるように検出されている。幅は30～100cm で，検出された畝で，最も長いもので１条の長さは23.4mあり，途中途切れながらやや弧を描くように続いている。畝は，合計で10条ほどが検出されている。基本的に南北方向で曲線的であり，途中途切れながらも流れ自体は続いていると言える。

③Ｍ－８区（第135図）

調査区域のほぼ中央部の非常に狭い範囲での検出である。ほぼ東西方向に2.2～5.6mの長さで検出された。幅は35～90cm あり，一部には，以前に耕作された南北方向の畝が下面に見られる。ただ，本遺構は同様な畝の並



第135図　畝間状遺構③・④及び遺物



第136図　溝状遺構３号・畝間状遺構②・⑤



第137図　ピット群①



第138図　ピット群②

びが古代相当の遺構として西側に繋がっているように思えることから，時期が異なる可能性も否定できない。

④Ｘ～Ｚ－12～16区（第135図）

調査区の南部，最南端で検出されたものである。調査区の南端を，ほぼ東西方向に横切るように幅５ｍ程の規模できれいに並んだものと，その延長部に当たると考えられる南東隅にあるものとは，１ｍ程の間隔を持ってはいるものの，並ぶ方向自体は揃っていることから同時期の耕作によるものと考えられる。畝の１条の長さは0.4～4.4ｍと差異が大きいものの，途切れた部分を補った１条全体の長さとしては約4.5～5.0ｍ程度と割合に揃っており，また，並びの方向も同一である。東側にこの並びとは直交する方向に１条の畝が見られるが，この部分の下部に同様な方向に耕作された畝が見られることから，これより以前に耕作された跡がそのまま残った結果ではないかと考えられる。畝の幅は25～58cm と差異が大きいように感じられるが，これは残った部分が畝の上面ではなく下面であることから，耕作が深く行われたかそうでなかったかの差によるものと想定される。

出土遺物（第135図69）

畝間状遺構④の埋土より69が出土した。青花の碗である。口縁部外面に四方襷文があり，胴部に芭蕉葉文がある。16世紀末に編年されるものである。

⑤確認トレンチ（Ｒ－19区）（第136図）

確認トレンチ内の西側で検出された。畝の埋土は目の粗い砂で，万之瀬川の過去の洪水による堆積砂と思われる。時代の特定はできないが，中世～近世にかけてのものと思われる。

（６）ピット群

掘立柱建物跡として復元できなかったピットの集中域は，調査区域の中央部及び南部の２か所で検出された。（出土遺物は第144図～第148図）

①Ｎ～Ｓ－８～13区（第137図）

調査区域のほぼ中央部で，溝状遺構３・４号の周辺に広がるピット群である。中でもＯ・Ｐ－９区に極端に集中する一画があるが，それでも建物として復元するには至らなかった。また，Ｑ－９区では割合にいい間隔でピットが見られることから，溝を挟んで建物が建つ可能性は考えられる。Ｑ～Ｓ－12・13区のピットは規模が極端に小さいことから，杭跡の可能性がある。

②Ｓ～Ｙ－11～15区（第138図）

調査区域の南部に大きく広がるピット群で，溝状遺構13～15号の周辺に展開する。竪穴建物跡や３号土坑を中心とした，溝状遺構14・13号の東側に集中するものは，ピットの規模が揃っていることや，柱筋がほぼ南北方向を中心に並ぶ傾向が見られることから，建物が復元できる可能性が大きいものの，あまりにも集中していたことから逆に建物として復元することはできなかった。また，溝状遺構14号に囲繞された一画に散在するピットは，規模や間隔が適当のように考えられることから，建物が建つ可能性がある。溝状遺構13号に添うように並んでいるピットもその可能性を考慮したい。

（７）土坑墓

２基の土坑墓が検出された。以下，概要を述べる。

①１号土坑墓（第139図）

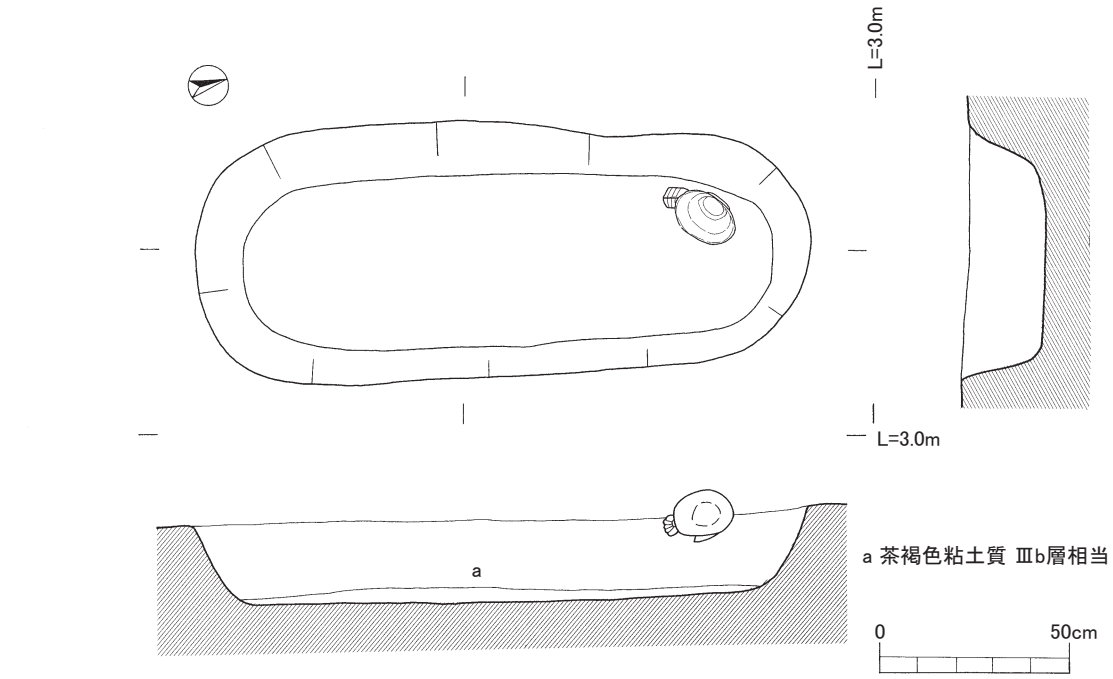
Ｏ－９区で検出された。長径が165cm，短径は65cmの長楕円形である。深さは最大で23cm である。断面の形状は滑らかなＵ字状をしている。埋土は褐色の砂質土である。埋土中に人骨や白色の粉状のものなどは一切確認されなかったが，検出面において北側で，白磁の碗が１点と青白磁の合子がまとまって出土している。碗は上向きに置かれ，合子はその下位に置かれていた。

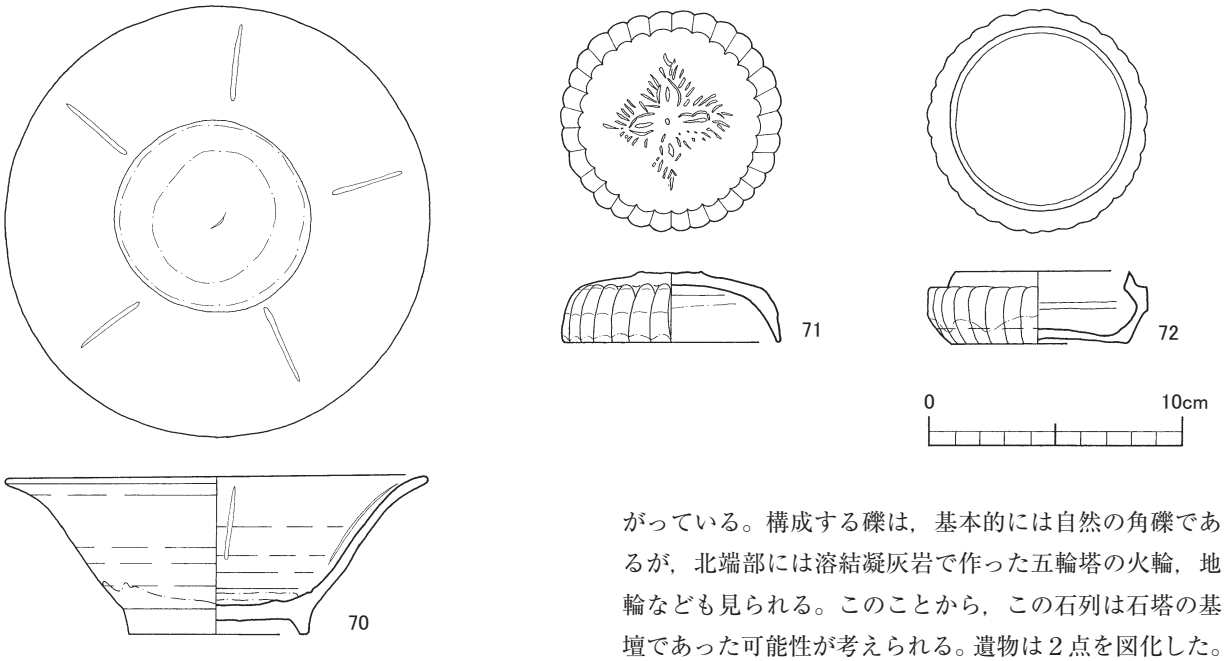
②２号土坑墓（第140図）

Ｕ－11区で検出された。長辺が169cm，短辺は90cmの長方形を基本とするものの，全体的に丸味を帯びた形状と言える。深さは最大で14cm である。断面の形状はやや角張ったＵ字状をしている。埋土は灰茶褐色炭混じりの砂質土と部分的にそれよりも暗い色の埋土が中心となるものの，下部は暗灰褐色弱粘質土である。埋土中に人骨や白色の粉状のものなどは確認されなかったが，下部埋土の直上に当たるところに，坏，小皿，滑石製品など遺物が合計５点まとまって出土している。小皿の１組は口縁部が合わさっていたほか，坏は上向きに置かれていた。その集中部分より約15cm 上位には滑石製の加工品が平置きされていた。

出土遺物（第139図70～第140図78）

70は12Ｃ中頃～後半に編年される白磁の碗で，この時期に属する白磁の中では比較的優品であるといえる。内面には縦５本の白堆線による区画文様を有し，見込みの釉は環状に剥ぎ取る。外面下位より下は露胎である。71・72は型造りによる青白磁の合子で蓋・身共に完形である。やや白濁しているものの，青白色の釉薬が掛かる優品である。蓋は天井部に草花文を浮き出しており，側面には菊弁文を有する。内面の下位は露胎である。身も側面に菊弁文を有する。「受け」部と外面胴部下位から外底面までは露胎である。





第139図　１号土抗墓及び遺物

73は土師器の坏である。74～77は土師器の小皿である。共に底面に糸切り痕が認められる。78は滑石製品である。穿孔が見られることや，形が四角形に整えられていたことなどから，権衡(天秤の重り)である可能性がある。

（8）石　　列（第141図）

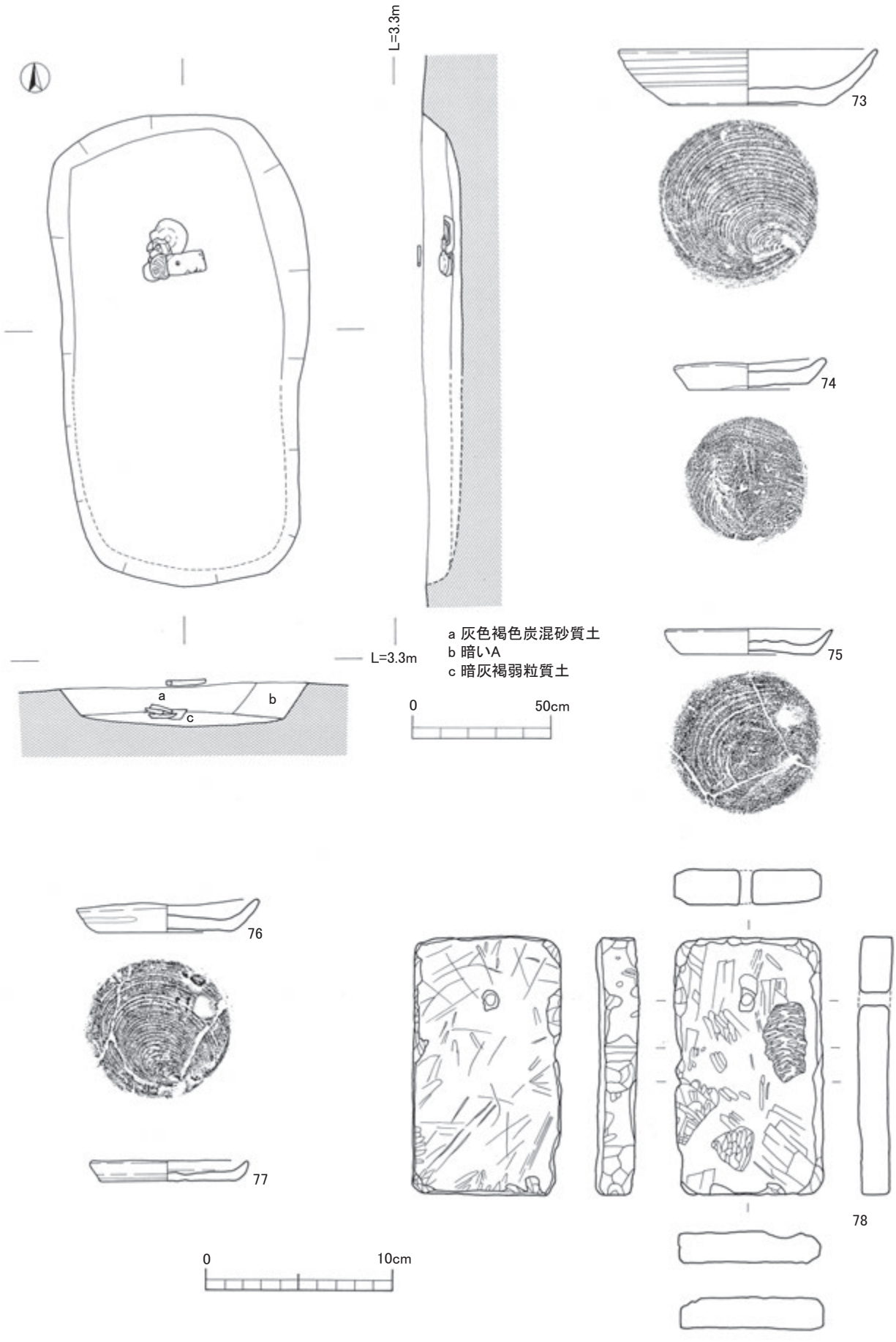
X・Y－13・14区で溝状遺構14号・15号より上のレベルで検出された。長軸方向が南北方向で9.1m，短軸方向は東西方向で8.2mの範囲に，局所的にまとまりつつ広がっている。構成する礫は，基本的には自然の角礫であるが，北端部には溶結凝灰岩で作った五輪塔の火輪，地輪なども見られる。このことから，この石列は石塔の基壇であった可能性が考えられる。遺物は２点を図化した。(第141図79・80)また陶磁器や中世須恵器，滑石等も見られるが周囲のものが混ざり込んだものと考えられる。

（9）土師器集積遺構

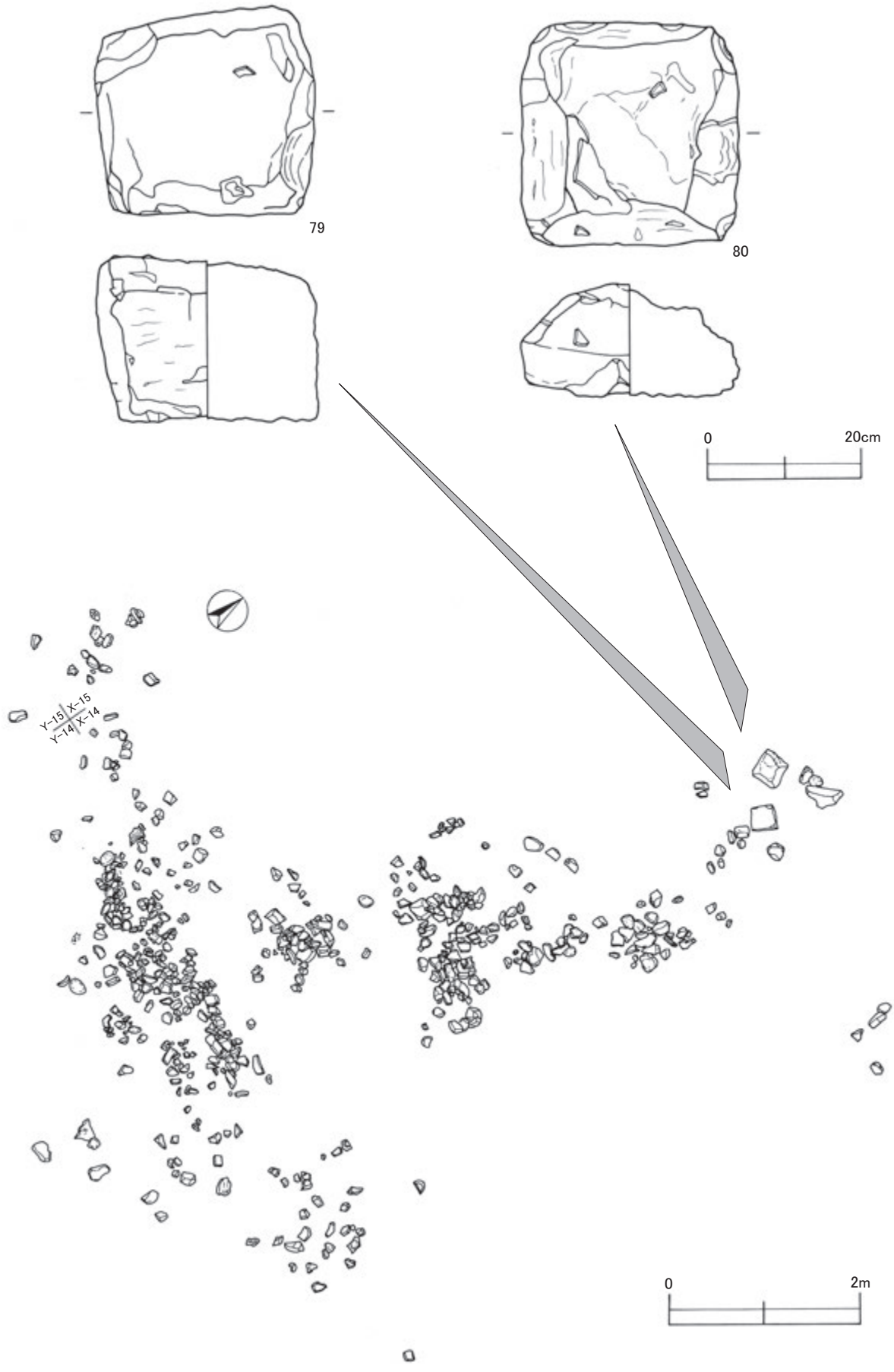
Ｔ－13区で３基が検出された。同じグリッドに３基が集中して検出されたことは，非常に特殊な状況であると考えられる。調査中に付した名称に従い，１～３号として概要を説明していきたい。

①土師器集積１号（第142図）

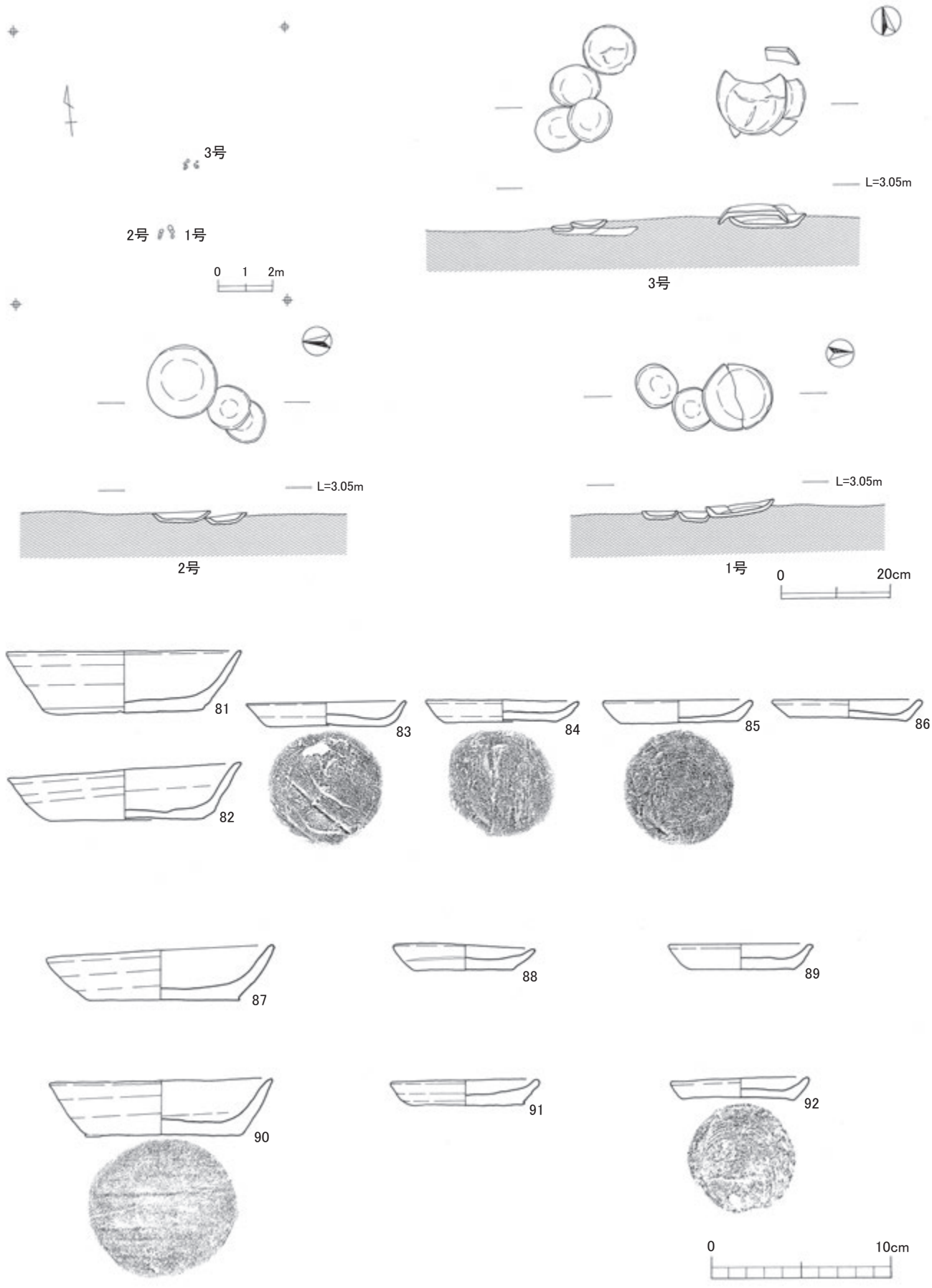
Ｔ－13区の南側に，ハの字状に検出された２群のうちの東側の１群である。土師器の坏と小皿２枚で構成され



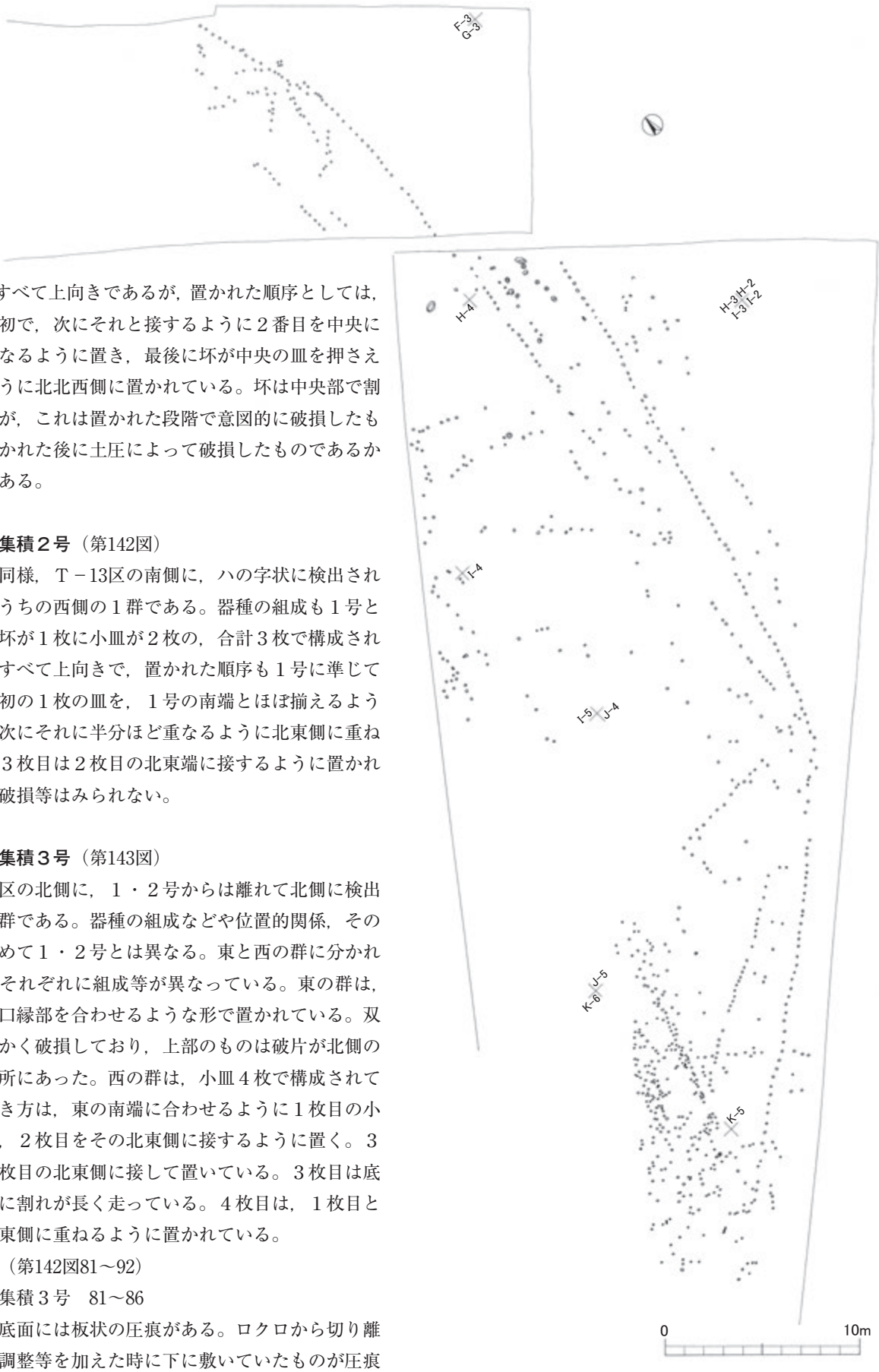
第140図　２号土抗墓及び遺物



第141図　石列及び遺物



第142図　土師器集積１号～３号及び遺物



第143図　杭列

ている。すべて上向きであるが，置かれた順序としては，南側が最初で，次にそれと接するように２番目を中央に北東側になるように置き，最後に坏が中央の皿を押さえつけるように北北西側に置かれている。坏は中央部で割れているが，これは置かれた段階で意図的に破損したものか，置かれた後に土圧によって破損したものであるかは不明である。

②土師器集積２号（第142図）

１号と同様，Ｔ－13区の南側に，ハの字状に検出された２群のうちの西側の１群である。器種の組成も１号と同じで，坏が１枚に小皿が２枚の，合計３枚で構成されている。すべて上向きで，置かれた順序も１号に準じている。最初の１枚の皿を，１号の南端とほぼ揃えるように置き，次にそれに半分ほど重なるように北東側に重ねて置き，３枚目は２枚目の北東端に接するように置かれている。破損等はみられない。

③土師器集積３号（第143図）

Ｔ－13区の北側に，１・２号からは離れて北側に検出された１群である。器種の組成などや位置的関係，そのほかを含めて１・２号とは異なる。東と西の群に分かれており，それぞれに組成等が異なっている。東の群は，坏２枚が口縁部を合わせるような形で置かれている。双方とも細かく破損しており，上部のものは破片が北側の離れた場所にあった。西の群は，小皿４枚で構成されている。置き方は，東の南端に合わせるように１枚目の小皿を置き，２枚目をその北東側に接するように置く。３枚目も２枚目の北東側に接して置いている。３枚目は底部の中央に割れが長く走っている。４枚目は，１枚目と２枚目の東側に重ねるように置かれている。

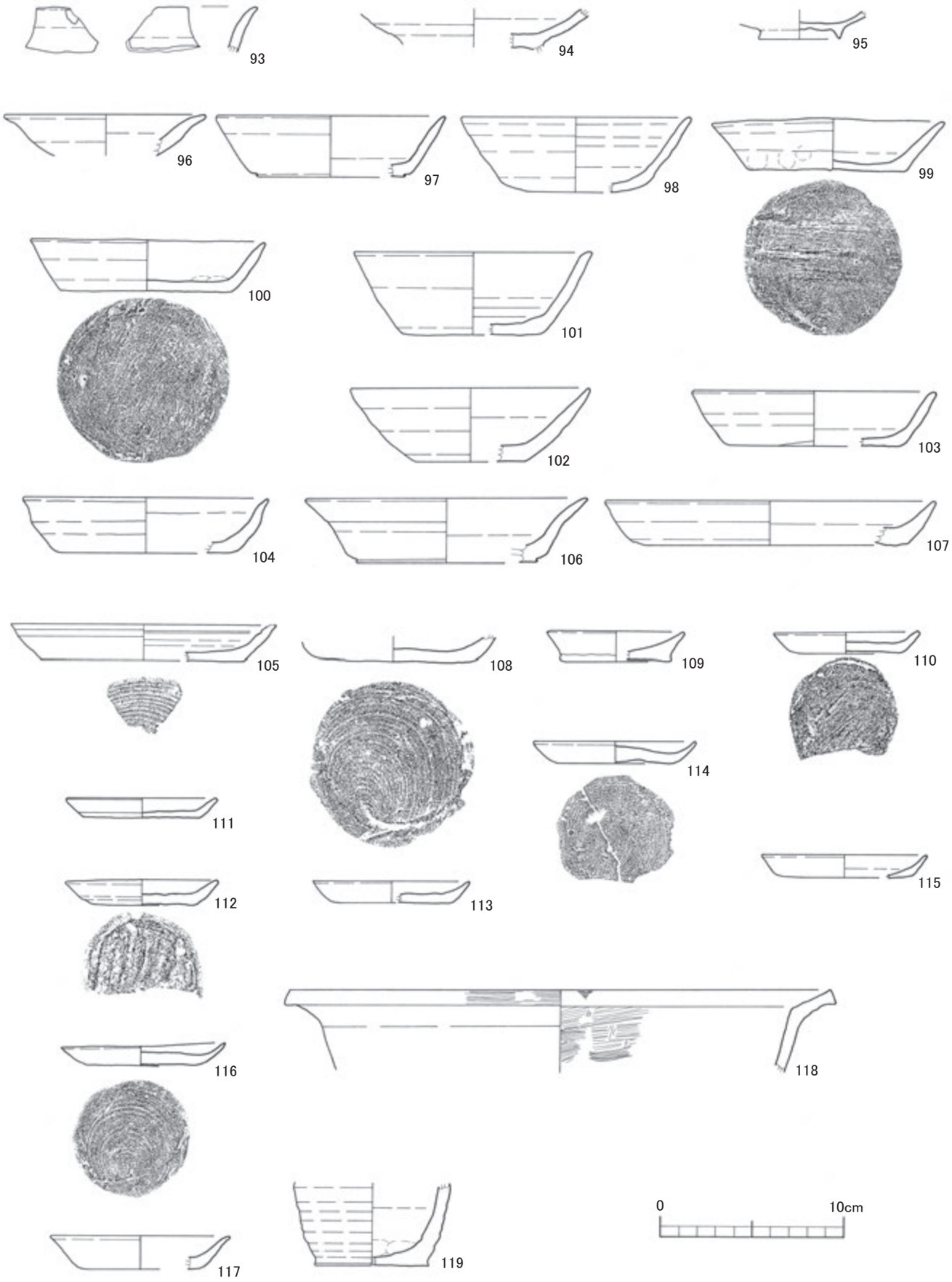
出土遺物（第142図81～92）

・土師器集積３号　81～86

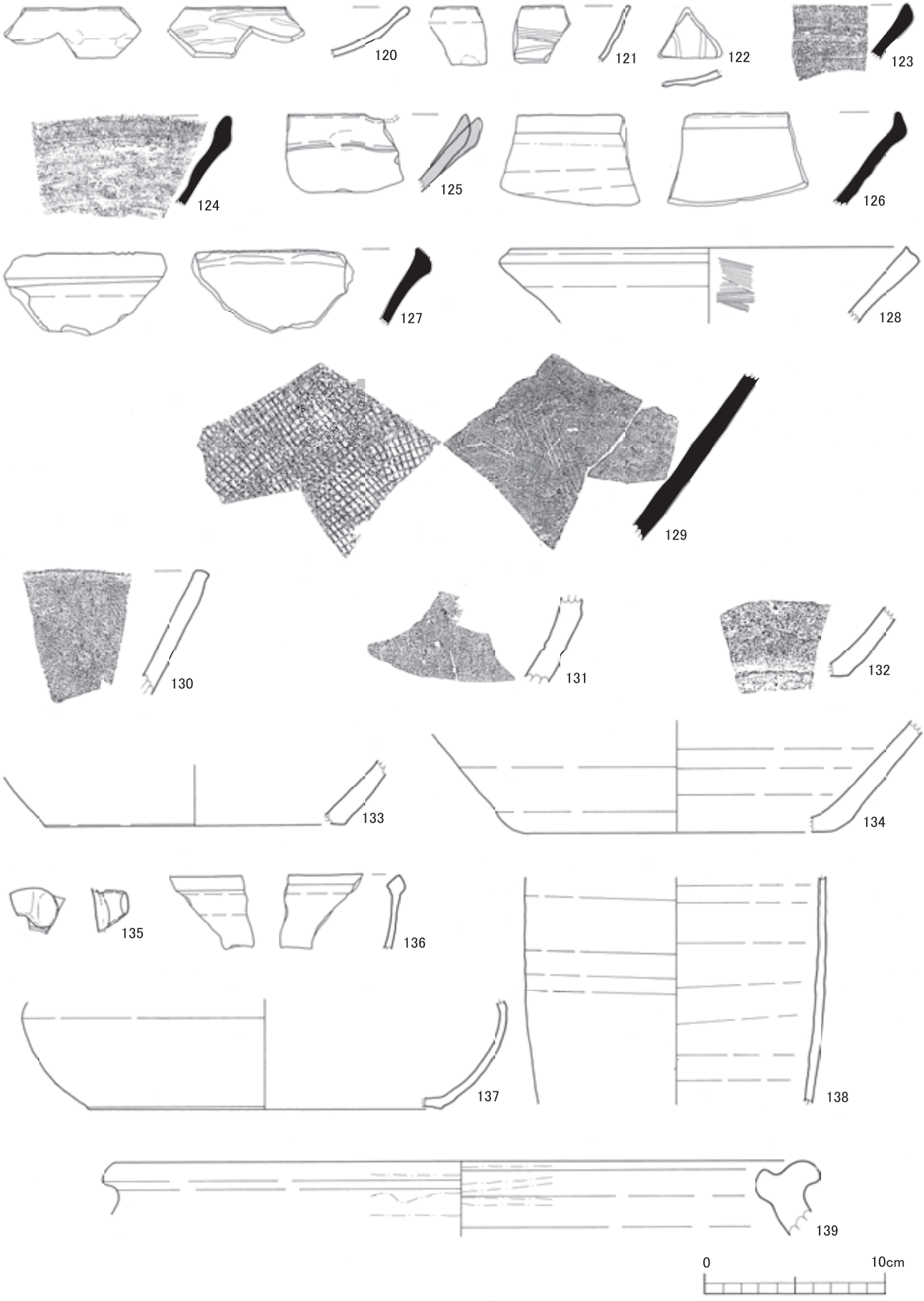
83の外底面には板状の圧痕がある。ロクロから切り離した後，調整等を加えた時に下に敷いていたものが圧痕として残ったと考えられる。

・土師器集積２号　87～89

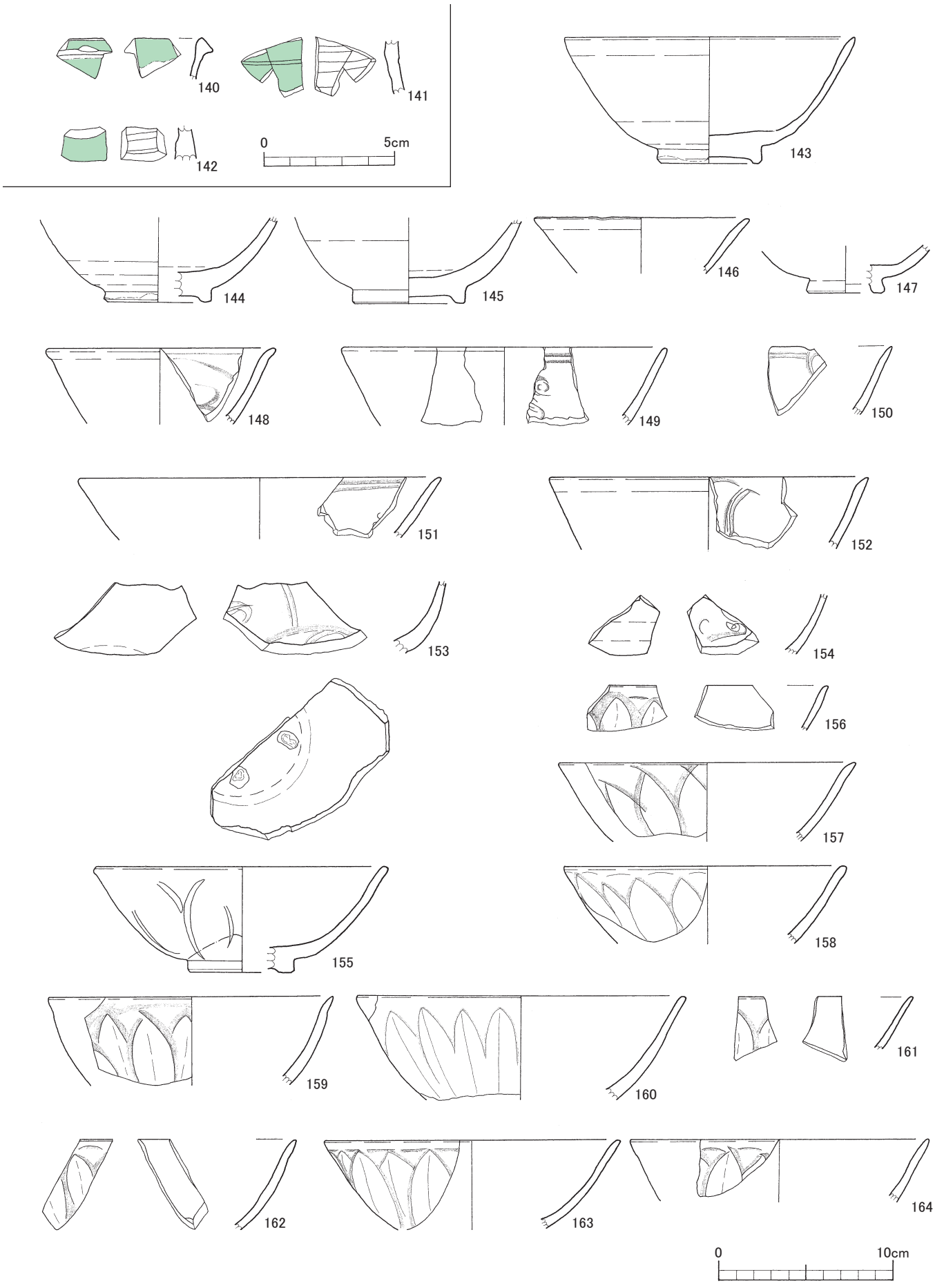
88の胴部外面には工具痕がつく。



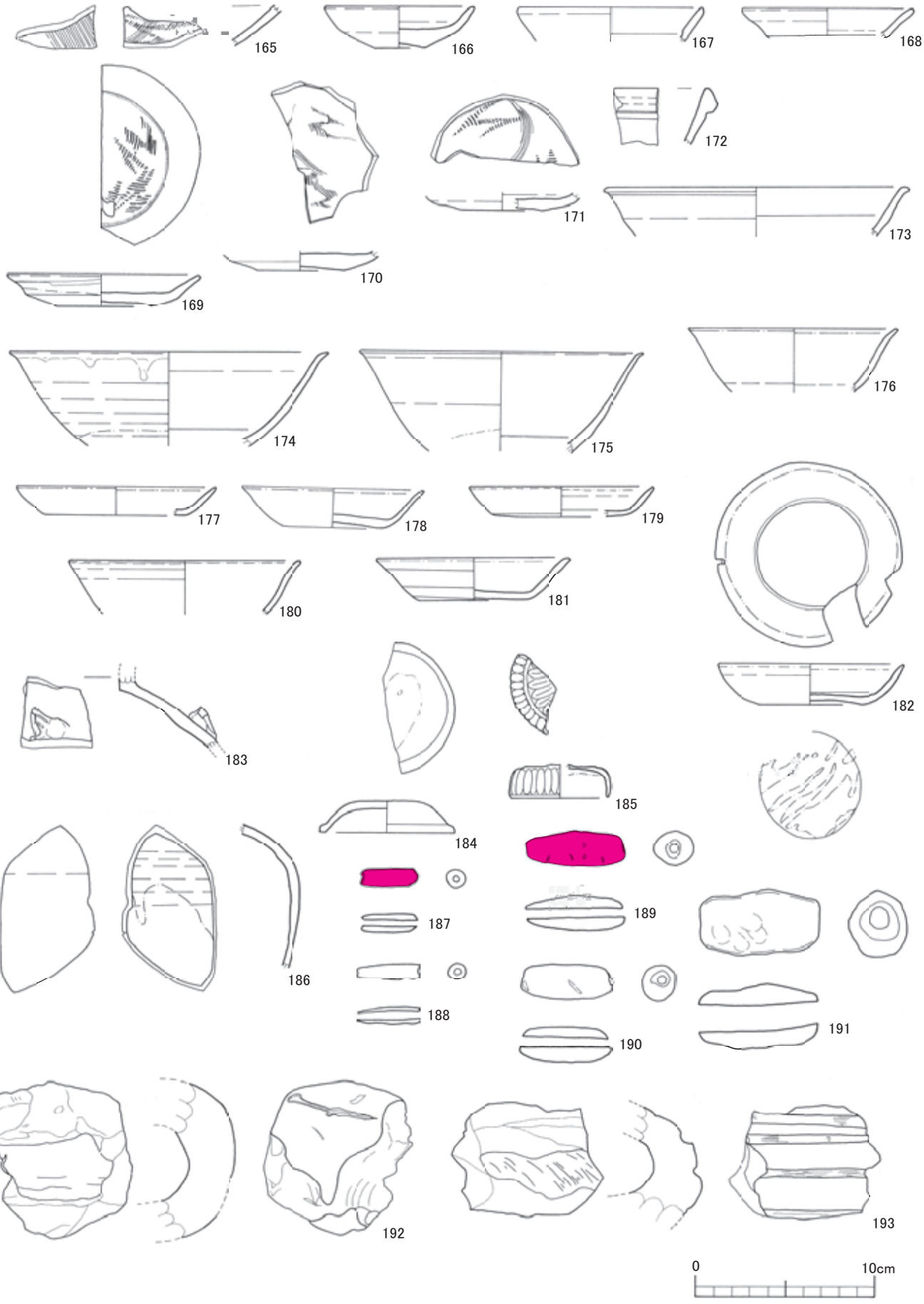
第144図　ピット内遺物①



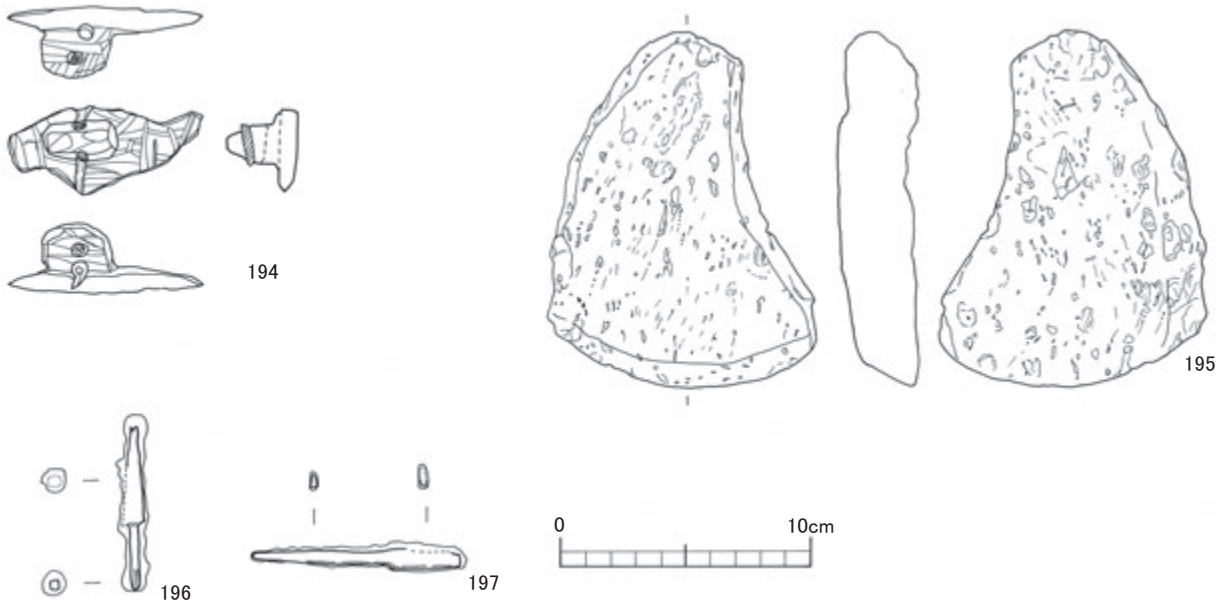
第145図　ピット内遺物②



第146図　ピット内遺物③



第147図　ピット内遺物④



第148図　ピット内遺物⑤

・土師器集積１号　90～92

90の外底面には83と同じ理由と思われる繊維状の圧痕がある。81～92は13世紀末から14世紀初頭頃のものであると考えられる。

(10) 杭　　列（第143図）

Ｆ～Ｌ－３～７区で検出された。調査区域の北部，樋門部分をも含む区域である。畑の畝跡を中心として，溝状遺構も随所に見られるエリアに当たる。これらの遺構との前後関係は不明であるが，畑の畝跡の流れに添うでもなく，離れるでもないように，列状に並んでいる部分と，列状には並ばず，狭い範囲に集中する部分との２種に分かれる。列状に並ぶものは，Ｆ－３・４区からＬ－６・７区にかけて，Ｊ－４区まではほぼ南北方向に，そこからは調査区域に添うように南西方向に，それぞれ１～２列に並んで見られる。ピットの直径は，５～７，８cm 程度であり，ピットの間隔は10～30cm 程度と言ったところである。一方，狭い範囲に集中するものは，Ｊ～Ｌ－６区に見られ，ピットの規模は列状のものと同様である。

(11) ピット群からの出土遺物（第144図93～第148図197）

ピット群から出土した主な遺物をここにまとめて掲載する。93～119は土師器である。95は色調が他の椀・坏類より白く，胎土には長石を多く含むことより瀬戸内地方からの搬入品であると思われる。見込みの一部が赤変しているが，重ね焼きの跡であることも考えられる。99・100・110はの外底面には繊維状の圧痕が確認できる。これらは坏をロクロから切り離した後，ナデ調整等を加えた段階で下に敷いていたものが圧痕として残ったと考えられる。102は厚めの器壁を有する。106は口縁部が外反して立ち上がる。112の外底面には99と同じ理由と思われる板状の圧痕がある。118は外面にススが濃く付着していることより煮炊具と考えられる。下部の形状が明らかでないが，鍋形を呈するものと思われる。119は内底面に指頭圧痕が多く見られる。器種は不明である。120～122は瓦器である。120と121は外面に指頭圧痕があり，内面には斜位に幅２～３ｍｍのヘラミガキ痕がある。123～127は東播磨系須恵器の捏鉢である。128は胎土がやや軟質で粉っぽい瓦質の捏鉢である。内面をハケ目で調整する。130は備前捏鉢の口縁部である。131～134は常滑焼である。131の内面は摩滅しており，また工具痕が見られる。135～142は輸入陶器である。136・137は黄釉の掛かる盤である。139は口縁部が二又に分かれて断面がＹ字状を呈する甕の口縁部である。内外面共に釉が横位に帯状に掛かる。140～142は華南三彩である。４点のみの出土で，全形は明らかでないが，水注あるいはクンディーであると考えられる。140は肥厚した口縁部で断面は三角形である。141は沈線が一本走る頸部と思われる。143～171は青磁である。146は口縁部に輪花を有する小碗である。148～154は劃花文の碗である。155～158は片掘蓮弁の碗で，159～164は弁の中央に稜をなす，鎬蓮弁の碗である。155は見込みに目跡がある。166～171は皿である。166の外底面は焼成前に釉を掻き取っている。169～171はヘラ状工具による文様と櫛の先端で押したジグザグ状の点描文を有する。172～182は白磁である。173～175は端反り碗である。176～182は口縁部の釉を掻き取ったいわゆる口禿の碗・皿である。182の外底面は釉を板状工具でのばしているのが観察できる。183～186は青白磁である。183は耳壺の把手部分と思われる。184・185は合子の蓋である。184は無紋，185は天井部と側面に菊の花弁文がそれぞれ型押しされる。187～193は土製品である。187・189は赤色顔料が塗布されている土錘である。191は最大幅が3.5cm を測る比較的大型の土錘である。193は外面に幅５～８mm の溝を有する輞の羽口である。194は滑石製石鍋の把手部分を再加工したものである。２か所穿孔され，外側の孔には釘か錐状の金属品が残存している。195は軽石製品である。表面と裏面は調整され平坦になっている。側面の一部も調整され弧状を呈する。196は丸根鉄鏃である。長さは欠損のため明らかでない。

掘立柱建物跡１号柱穴計測表

柱穴番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
1	32	22	19
2	36	33	32
3	25	21	30
4	25	22	25
5	30	24	35
6	30	26	42
7	45	35	37
8	45	30	41
9	31	25	38
10	40	35	41

掘立柱建物跡１号規模表

梁方向		桁方向	
柱穴間	距離（cm）	柱穴間	距離（cm）
1～9	284	1～4	546
1～10	124	1～2	165
10～9	120	2～3	153
2～8	296	3～4	170
3～7	302	10～5	552
4～6	316	9～6	511
4～5	146	9～8	153
5～6	136	8～7	150
		7～6	132

掘立柱建物跡２号柱穴計測表

柱穴番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
1	32	26	35
2	28	26	27
3	34	31	35
4	26	25	34
5	29	26	（9）
6	27	21	（14）
7	22	22	（18）
8	29	24	47
9	32	27	52
10	32	22	39
11	42	28	35
12	28	23	39
13	32	32	（8）
14	29	24	（26）
15	35	32	24
16	42	39	24
17	31	25	14
18	33	24	28
19	29	29	7
20	29	26	13
21	26	20	26
22	27	26	14
23	29	27	36

掘立柱建物跡２号規模表

梁方向		桁方向	
柱穴間	距離（cm）	柱穴間	距離（cm）
1～13	347	1～6	947
1～14	163	1～2	110
14～13	159	2～3	172
2～12	374	3～4	191
3～11	379	4～5	176
3～15	184	5～6	176
15～11	163	14～7	974
4～10	380	14～15	316
4～16	175	15～16	190
16～10	159	16～7	390
5～9	365	13～8	982
6～8	364	13～12	115
6～7	163	12～11	178
7～8	162	11～10	171
		10～9	163
17～2	50	9～8	214
18～3	62		
19～4	60	17～20	614
20～5	81	17～18	170
10～21	64	18～19	190
11～22	52	19～20	190
12～23	78	23～21	337
		23～22	151
		22～21	158

掘立柱建物跡３号柱穴計測表

柱穴番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
1	30	29	18
2	32	28	31
3	26	25	4
4	29	23	12
5	28	26	11
6	23	21	13
7	21	16	10
8	31	24	5
9	21	19	16

掘立柱建物跡３号規模表

梁方向		桁方向	
柱穴間	距離（cm）	柱穴間	距離（cm）
1～6	109	1～3	308
3～5	204	1～2	162
3～4	116	2～3	111
4～5	68		

掘立柱建物跡４号柱穴計測表

柱穴番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
1	28	24	15
2	27.5	26	26
3	25	22	28
4	28	26	11

掘立柱建物跡４号規模表

梁方向		桁方向	
柱穴間	距離（cm）	柱穴間	距離（cm）
1～4	102	1～2	254
2～3	120	4～3	261

表28　建物計測表

表29　掘立柱建物跡４号内遺物観察表

挿図	番号	種別	器種	最大長（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
123	1	石製品	砥石	—	2.9	260	欠損品

表30　竪穴建物跡内遺物観察表

挿図	番号	遺構名	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		調整		備考
								外面	内面	外面	内面	
124	2	竪穴建物跡	土師器	坏	12	9	2.7	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	3	竪穴建物跡	土師器	坏	11.5	7.2	3.1	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	4	竪穴建物跡	土師器	皿	8.8	6.6	1.8	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	番号	遺構名	種別	器種・分類	色調		調整		備考			
					外面	内面	外面	内面				
	5	竪穴建物跡	瓦器	椀	灰色	灰色	ナデ	ヘラミガキ	付け高台			
	6	竪穴建物跡	瓦器	椀・和泉型？	灰白色	灰白色	ナデ+ヘラミガキ	ヘラミガキ	—			
	7	竪穴建物跡	瓦器	椀・和泉型	灰白色	灰白色	ナデ+指オサエ?	ナデ？	—			
	8	竪穴建物跡	須恵器	東播磨系須恵器捏鉢	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—			
	9	竪穴建物跡	須恵器	甕	灰色	灰色	格子目タタキ	ナデ？	—			
	番号	遺構名	種別	器種・分類	胎土	釉薬	備考					
	10	竪穴建物跡	青磁	龍泉窯系青磁碗・Ⅱ-b類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—					
	11	竪穴建物跡	青磁	龍泉窯系青磁碗・Ⅱ-c類	堅緻，灰白色	オリーブ灰色	—					
	12	竪穴建物跡	白磁	白磁碗・Ⅳ類	堅緻，灰白色	明オリーブ灰色	口禿げ					
	13	竪穴建物跡	輸入陶器	甕	堅緻，明赤褐色	浅黄色	—					
	番号	遺構名	種別	器種	部位	最大長(cm)	最大厚(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	備考		
	14	竪穴建物跡	鉄製品	刀子	身・茎	6.5	0.8	1.5	7.04	—		

表31　溝状遺構内遺物観察表　　土師器

挿図	番号	溝番号	遺構名	出土区	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		調整		備考
										外面	内面	外面	内面	
132	19	12号	溝内	P-11	土師器	坏	15.7	8.2	3.5	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	糸切り痕
	20	12号	溝内イコウ07	P-11	土師器	皿	—	10.5	—	浅黄色	淡黄色	回転ナデ	回転ナデ	糸切り痕
	21	12号	溝内イコウ06	P-11	土師器	小皿	8.7	7.3	1.35	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	糸切り痕
	22	12号	溝内イコウ06	P-11	土師器	小皿	8.7	7.4	1.3	にぶい黄褐色	褐灰色	回転ナデ	回転ナデ	糸切り痕
	24	13号	溝	P- 9	土師器	椀	—	7	—	灰黄色	黒色	回転ナデ	ヘラミガキ	刻印？
	25	13号	溝	Q- 9	土師器	小皿	8.6	7.5	1.1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	26	13号	溝	P-10	土師器	小皿	8.4	7.2	1.4	にぶい黄色	にぶい黄色	回転ナデ	回転ナデ	—
	27	13号	溝	V-13	土師器	小皿	9	6.8	1.1	浅黄色	浅黄色	回転ナデ	回転ナデ	内外面ス ス付着
	28	14号	溝	V-13	土師器	坏	14.2	9.2	2.6	浅黄色	にぶい黄色	回転ナデ	回転ナデ	—
	29	14号	溝	V-13	土師器	皿	—	8.6	—	黄灰色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	30	14号	南北溝	W-13	土師器	皿	—	—	—	にぶい黄橙色	にぶい黄色	回転ナデ	回転ナデ	糸切り痕
	32	15号	大溝１埋土Ⅰ	Y-13	土師器	椀	10.6	7	1.8	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ	瀬戸内系
	33	15号	大溝埋土Ⅰ	X-14	土師器	坏	13.2	9.9	3.4	黄橙色	黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	34	15号	大溝埋土Ⅱ	Y-13	土師器	小皿	9.4	7.4	2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	35	15号	大溝１埋土Ⅰ	Y-13	土師器	小皿	8.4	6.8	0.9	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—

表32　溝状遺構内遺物観察表　　須恵器

挿図	番号	溝番号	遺構名	出土区	種別	器種・分類	色調		調整		備考
							外面	内面	外面	内面	
132	36	15号	大溝１，２	Y-14	土師質(瓦質)土器	甕	オリーブ黒色	オリーブ黒色	平行タタキ	当て具→ナデ	—
133	37	15号	大溝１埋土Ⅰ	X-15	須恵器	甕	灰色	灰色	平行タタキ	当て具→ナデ	—
	38	15号	大溝埋土Ⅱ	Y-13	東播磨系須恵器	捏鉢	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	39	15号	大溝埋土Ⅱ	Y-14	東播磨系須恵器	捏鉢	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—

表33　溝状遺構内遺物観察表　　輸入陶磁器

挿図	番号	溝番号	遺構名	出土区	種別	器種・分類	胎土	釉薬	備考
132	15	4号	溝	H-5	白磁	白磁碗・Ⅴ-4類	堅緻，灰黄色	淡黄色	12C 中～後半
	18	5号	溝一括	K-6	青磁	青磁碗	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	不成不良
	23	12号	溝内イコウ610	P-11	白磁	白磁Ⅲ・Ⅲ-1類	堅緻，淡黄色	灰白色	内底面環状に釉剥ぎ，露胎部分に目跡
	31	14号	溝	W-13	龍泉窯系青磁	青磁碗・Ⅰ-2類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
133	40	15号	大溝1埋土Ⅰ	Y-13	輸入陶器	壺	堅緻，灰白色	外・灰褐色，内・黄灰色	—
	41	15号	大溝1埋土Ⅱ	Y-14	輸入陶器	壺Ⅳ類？	灰褐色，黒色粒	黄灰色	—
	42	15号	大溝埋土Ⅱ	X-15	輸入陶器	耳壺Ⅵ類？	橙色，白色粒	外･部分的に灰白色，内･淡黄色	—
	43	15号	大溝埋土	Y-13	輸入陶器	四耳壺Ⅵ類？	堅緻，赤色粒	オリーブ黄色	外底面露胎
	44	15号	大溝埋土	Y-12	輸入陶器	鉢Ⅵ類？	橙色，赤色粒	茶褐色	—
	45	15号	大溝埋土Ⅱ	Y-13	輸入陶器	鉢Ⅰ-1b類	白色粒，砂	—	—
	46	15号	大溝埋土Ⅱ	Y-14	輸入陶器	鉢・Ⅵ-1類	堅緻，淡黄灰色	褐色	—
	47	15号	大溝1埋土Ⅱ	Y-14	輸入陶器	甕Ⅲ類	茶褐色，灰褐色，白色粒	灰オリーブ色	—
	48	15号	大溝1埋土Ⅱ	Y-14	輸入陶器	甕	茶褐色，灰褐色，白色粒	灰黄色	—
	49	15号	大溝埋土Ⅰ	Y-14	輸入陶器	甕	にぶい赤褐色，白色粒	外･黄オリーブ色，内･黄オリーブ色	—
	50	15号	大溝埋土Ⅱ	Y-13	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-1a類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	51	15号	大溝埋土Ⅱ	Y-12	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-1a類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	52	15号	大溝埋土Ⅰ	X-14	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ類	堅緻，灰白色	オリーブ灰色	—
134	53	15号	大溝1埋土Ⅱ	Y-14	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ類	堅緻，灰白色	オリーブ灰色	—
	54	15号	大溝1埋土Ⅱ	X-15	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-2類	堅緻，灰色	灰オリーブ色	—
	55	15号	大溝埋土Ⅰ	Y-13	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-2類	堅緻，灰色	灰オリーブ色	—
	56	15号	大溝埋土Ⅱ	Y-13	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-2類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	57	15号	大溝1埋土Ⅱ	Y-12	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-2a類	堅緻，灰白色	オリーブ灰色	—
	58	15号	大溝埋土Ⅱ	Y-12	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-3類	堅緻，灰白色	オリーブ灰色	—
	59	15号	大溝埋土Ⅱ	Y-13	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-4類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	60	15号	大溝埋土Ⅰ	Y-13	同安窯系青磁	碗・Ⅲ類	堅緻，灰白色	オリーブ黄色	—
	61	15号	大溝埋土	Y-13	同安窯系青磁	青磁Ⅲ・Ⅰ-1a類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	62	15号	大溝埋土Ⅱ	Y-13	同安窯系青磁	青磁Ⅲ・Ⅰ-2b類	堅緻，灰白色	緑灰色	—
	63	15号	大溝埋土	Y-13	白磁	碗・Ⅷ-1類	堅緻，灰白色	灰白色	—
	64	15号	大溝埋土Ⅰ	Y-14	白磁	碗・Ⅴ類	堅緻，灰白色	浅黄色	—

表34　溝状遺構内遺物観察表　　土製品

挿図	番号	溝番号	出土区	種別	品種		器面調整	色調	備考	
132	16	4号	L-6	土製品	脚付煮炊具		ケズリ→ナデ	灰白色	—	
挿図	番号	溝番号	遺構名	出土区	種別	品種	最大長 (cm)	最大径 (cm)	最大厚 (cm)	備考
134	65	15号	大溝1埋土1	X-15	土製品	錘	3.8	1.5	—	—

表35　溝状遺構内遺物観察表　　石製品

挿図	番号	溝番号	遺構名	出土区	種別	器種	備考
132	17	4号	溝状遺構	L-6	石製品	砥石加工品	粘板岩
134	66	15号	大溝埋土Ⅱ	Y-13	滑石製品	石鍋再加工品	加工痕有り
	67	15号	大溝1埋土Ⅰ	Y-13	滑石製品	石鍋再加工品	加工痕有り
	68	15号	大溝1埋土Ⅱ	Y-14	石製品	砥石	—

表36　畝間状遺構④内遺物観察表

挿図	番号	遺構名	出土区	層位	種別	器種・分類	胎土	釉薬	備考
135	69	畝間状遺構④	X-15	Ⅲa	青花	碗・小野分類C群1類	堅緻，灰白色	明オリーブ灰色	—

表37　1号土坑墓内遺物観察表

挿図	番号	遺構名	種別	器種・分類	胎土	釉薬	備考	備考
139	70	1号土坑墓	白磁	白磁碗・Ⅷ-4類	堅緻，灰白色	灰白色	見込みは環状に露胎	—
	71	1号土坑墓	青白磁	合子　蓋	堅緻，浅黄橙色	灰白色	草花文	—
	72	1号土坑墓	青白磁	合子　身	堅緻，浅黄橙色	明緑灰色	菊弁文	—

表38　2号土坑墓内遺物観察表

挿図	番号	遺構名	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		調整		備考
								外面	内面	外面	内面	
140	73	2号土坑墓	土師器	坏	14	8.4	3	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	74	2号土坑墓	土師器	小皿	8.3	6.4	1.7	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	75	2号土坑墓	土師器	小皿	4.5	3.5	1.4	浅黄橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	76	2号土坑墓	土師器	小皿	9.8	7.2	1.8	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	77	2号土坑墓	土師器	小皿	8.3	7.2	1.1	黄橙色	黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	番号	遺構名	種別	器種	重量 (g)	備考						
	78	2号土坑墓	滑石製品	権衡？	475	穿孔						

表39　石列内遺物観察表

挿図	番号	出土区	器種	石材	長辺（cm）	短辺（cm）	高さ（cm）	重量（kg）	備考
141	79	X-14	地輪	溶結凝灰岩	28.3	26.9	20.3	18.1	—
	80	X-14	火輪	溶結凝灰岩	28.9	28.4	14	11.2	—

表40　土師器集積遺構内遺物観察表

挿図	番号	遺構名	出土区	種別	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調		調整		備考
									外面	内面	外面	内面	
142	81	土師器集積３号	T-11	土師器	坏	12.8	8.3	3.4	黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	82	土師器集積３号	T-11	土師器	坏	12.8	8.5	3.1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	83	土師器集積３号	T-11	土師器	小皿	8.7	6.6	1.4	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	84	土師器集積３号	T-11	土師器	小皿	8.4	6.3	1.3	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	85	土師器集積３号	T-11	土師器	小皿	8.2	6.4	1.2	にぶい黄橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	86	土師器集積３号	T-11	土師器	小皿	8.2	6.4	2.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	87	土師器集積２号	T-11	土師器	坏	12.6	8.4	3.1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	88	土師器集積２号	T-11	土師器	小皿	7.8	5.4	1.6	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	工具痕
	89	土師器集積２号	T-11	土師器	小皿	8	5.8	1.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	90	土師器集積１号	T-11	土師器	坏	12.1	8.4	3.3	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	繊維状圧痕
	91	土師器集積１号	T-11	土師器	小皿	8.2	5.9	1.4	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	92	土師器集積１号	T-11	土師器	小皿	7.6	6.2	1.3	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—

表41　ピット内遺物観察表（１）

挿図	番号	年度・遺構番号	出土区	層位	種別	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調		調整		備考
										外面	内面	外面	内面	
144	93	Ｈ９・イコウ142	W-13	Ⅲｂ	土師器	椀	—	—	—	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	94	Ｈ９・イコウ7	W-14	Ⅲｂ	土師器	椀	—	—	—	淡黄色	淡黄色	回転ナデ	回転ナデ	—
	95	H10・イコウ237	V-13	—	土師器	椀	—	4.4	—	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ	瀬戸内系土師質土器
	96	Ｈ９・イコウ196	V-11	Ⅲｂ	土師器	坏	10.9	—	—	橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	97	Ｈ９・イコウ99	W-12	Ⅲｂ	土師器	坏	12.4	8.1	3.3	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	98	Ｈ９・イコウ157	W-13	Ⅲｂ	土師器	坏	12.4	—	—	にぶい黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	99	Ｈ９・イコウ64	X-12	—	土師器	坏	12.4	8.4	2.8	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	100	Ｈ９・イコウ283	U-11	Ⅲｂ	土師器	坏	12.7	9.2	2.8	灰黄色	灰黄色	回転ナデ	回転ナデ	外面スス付着
	101	Ｈ９・イコウ173	V-12	Ⅲｂ	土師器	坏	12.8	7.6	4.5	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	102	Ｈ９・イコウ237	U-12	Ⅲｂ	土師器	坏	13	6	4	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	103	Ｈ９・イコウ594	V-13	Ⅲｂ	土師器	坏	13.2	9.4	3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	内外面スス付着
	104	Ｈ９・イコウ527	V-12	Ⅲｂ	土師器	坏	13.3	9.2	3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	105	H10・イコウ66	V-13	—	土師器	坏	14.2	10.1	1.95	にぶい橙色	褐色	回転ナデ	回転ナデ	—
	106	H10・イコウ351	V-12	—	土師器	坏	15	9.7	3.5	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	107	Ｈ９・イコウ142	W-13	Ⅲｂ	土師器	坏	16.4	14	2.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	108	Ｈ９・イコウ268	U-13	Ⅲｂ	土師器	皿	—	8.4	—	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	109	H10・イコウ317	W-12	—	土師器	小皿	7.5	6	1.6	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	110	Ｈ９・イコウ522	W-13	Ⅲｂ	土師器	小皿	7.9	5.6	1.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	底部にスス付着
	111	Ｈ９・イコウ81	V･W-12	Ⅲｂ	土師器	小皿	8.2	6.4	1.1	明黄褐色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	112	H10・イコウ86	V-13	—	土師器	小皿	8.3	5.8	1.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	底面に板状圧痕
	113	Ｈ９・イコウ215	V-11	Ⅲｂ	土師器	小皿	8.6	6	1.2	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	114	Ｈ９・イコウ131	W-13	Ⅲｂ	土師器	小皿	8.8	6	1.2	にぶい黄橙色	浅黄色	回転ナデ	回転ナデ	—
	115	H10・イコウ238	V-13	—	土師器	小皿	9	7.2	1.3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	116	Ｈ９・イコウ594	V-13	Ⅲｂ	土師器	小皿	9	6	1.3	灰白色	黄灰色	回転ナデ	回転ナデ	—
	117	Ｈ９・イコウ207	V-11	Ⅲｂ	土師器	小皿	9.8	6.6	1.7	橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	118	Ｈ９・ピット512	V-11	—	土師器	土師鍋	30	—	—	黒色	黒褐色	ナデ	ハケ目	外面スス付着
	119	Ｈ９・イコウ162	V-12	Ⅲｂ	土師器	不明	—	6.2	—	灰黄褐色	褐灰色	回転ナデ	回転ナデ	—

表42　ピット内遺物観察表（２）

挿図	番号	年度・遺構番号	出土区	層位	種別	器種・分類	色調		調整		備考
							外面	内面	外面	内面	
145	120	Ｈ９・イコウ589	W-13	Ⅲｂ	瓦器	椀・和泉型	灰色	灰色	指ナデ＋指オサエ	ヘラミガキ	—
	121	Ｈ９・イコウ120	W-12	Ⅲｂ	瓦器	椀・和泉型	灰色	灰色	指ナデ＋工具ナデ	ヘラミガキ	—
	122	H10・イコウ184	U-12	—	瓦器	椀	灰色	灰色	ナデ	ナデ	—
	123	Ｈ９・イコウ312	T-11	Ⅲｂ	須恵器	東播磨系須恵器捏鉢	褐灰色	褐灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	124	Ｈ９・イコウ250	U-12	Ⅲｂ	須恵器	東播磨系須恵器捏鉢	明オリーブ灰色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	125	Ｈ９・イコウ268	U-13	Ⅲｂ	須恵器	東播磨系須恵器捏鉢	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	注口部
	126	Ｈ９・イコウ472	W-13	Ⅲｂ	須恵器	東播磨系須恵器捏鉢	灰黄色	灰黄色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	127	Ｈ９・イコウ713	X-14	Ⅲｂ	須恵器	東播磨系須恵器捏鉢	灰色	黒色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	内面全体に灰釉かかる
	128	Ｈ９・イコウ523	W-13	Ⅲｂ	瓦質土器	捏鉢	灰色	灰色	ナデ	ナナメハケ目	—
	129	Ｈ９・イコウ181	V-12	Ⅲｂ	須恵器	甕	灰色	灰色	格子目タタキ	ナデ	—
	130	H9・イコウ77	W-12	Ⅲｂ	備前焼	捏鉢	灰黄褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	—
	131	Ｈ９・イコウ116	W-12･13	Ⅲｂ	常滑焼	甕	赤褐色	にぶい赤褐色	ナデ	ナデ	—
	132	Ｈ９・イコウ250	U-12	Ⅲｂ	常滑焼	捏鉢	明赤褐色	明赤褐色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	133	Ｈ９・イコウ538	U-11	Ⅲｂ	常滑焼	捏鉢	にぶい橙色	にぶい橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	134	H10・イコウ184	U-12	—	常滑焼	捏鉢	にぶい褐色	にぶい橙色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	番号	年度・遺構番号	出土区	層位	種別	器種・分類	胎土	釉薬	備考		
	135	Ｈ９・イコウ586	U-12	Ⅲｂ	輸入陶器	耳壺	堅緻, 灰白色, 磁質, 黒色粒	オリーブ灰色	—		
	136	Ｈ９・イコウ224	U・V-12	Ⅲｂ	輸入陶器	盤Ⅰ類	黒色粒, 白色粒, 灰色	灰白色	—		
	137	H9・イコウ99	W-12	Ⅲｂ	輸入陶器	盤Ⅰ類	堅緻，灰色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	—		
	138	Ｈ９・イコウ309	T・U-11	Ⅲｂ	輸入陶器	壺	堅緻，暗赤灰色	オリーブ黒色	—		
	139	Ｈ９・イコウ393	T-12	Ⅲｂ	輸入陶器	甕Ⅲ類（Ｙ字口縁甕）	堅緻, 白色粒, 茶褐色	浅黄色	—		
146	140	Ｈ９・イコウ283	U-12	Ⅲｂ	輸入陶器	水注か壺類	浅黄橙色，軟質	緑色	華南三彩		
	141	Ｈ９・イコウ255	U-12	Ⅲｂ	輸入陶器	水注か壺類	浅黄橙色，軟質	緑色	華南三彩		
	142	Ｈ９・イコウ273	U-13	Ⅲｂ	輸入陶器	水注か壺類	浅黄橙色，軟質	緑色	華南三彩		

表43　ピット内遺物観察表（3）

挿図	番号	年度・遺構番号	出土区	層位	種別	器種・分類	胎土	釉薬	備考
146	143	H９・イコウ181	V-12	—	青磁	龍泉窯系青磁・Ⅰ-1a類	堅緻，灰色	オリーブ灰色	—
	144	H９・イコウ258	U-12	Ⅲb	青磁	龍泉窯系青磁碗・Ⅰa類	堅緻，灰白色	オリーブ灰色	焼成不良
	145	H９・イコウ513	V-11	Ⅲb	青磁	龍泉窯系青磁碗・Ⅰ-1a類	堅緻，褐灰色	灰褐色	内外面発色不良
	146	H９・イコウ275	U-11	Ⅲb	青磁	龍泉窯系青磁小碗・Ⅰ-1b類	堅緻，灰白色	緑灰色	口縁部輪花
	147	H９・イコウ224	U･V-12	Ⅲb	青磁	龍泉窯系青磁小碗・Ⅰ-1a類	堅緻，灰色	オリーブ灰色	—
	148	H９・イコウ393	T-12	Ⅲb	青磁	龍泉窯系青磁碗・Ⅰ-2類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	149	H10・イコウ257	W-12	—	青磁	龍泉窯系青磁碗・Ⅰ-4類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	150	H９・イコウ291	U-11	Ⅲb	青磁	龍泉窯系青磁碗・Ⅰ-4b類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	口縁部輪花
	151	H９・イコウ224	U･V-12	Ⅲb	青磁	龍泉窯系青磁碗・Ⅰ-4類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	152	H９・イコウ181	V-12	Ⅲb	青磁	龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4d類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	153	H９・イコウ224	U･V-12	Ⅲb	青磁	龍泉窯系青磁碗・Ⅰ-4類	堅緻，灰色	灰オリーブ色	—
	154	H９・イコウ155	W-13	Ⅲb	青磁	龍泉窯系青磁・Ⅰ-4類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	155	H９・イコウ81	V-12	Ⅲb	青磁	龍泉窯系青磁・Ⅱ-a類？	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	156	H９・イコウ74	W-12	Ⅲb	青磁	龍泉窯系青磁碗・Ⅱ-b類	堅緻，灰色	オリーブ灰色	—
	157	H９・イコウ270	U-13	Ⅲb	青磁	龍泉窯系青磁碗・Ⅱ-b類	堅緻，灰色	灰オリーブ色	—
	158	H９・イコウ275	U-11	Ⅲb	青磁	龍泉窯系青磁碗・Ⅱ-b類	堅緻，灰白色	緑灰色	—
	159	H９・イコウ297	U-11	Ⅲb	青磁	龍泉窯系青磁碗・Ⅱ-b類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	160	H９・イコウ589	W-13	Ⅲb	青磁	龍泉窯系青磁碗・Ⅱ-b類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	161	H９・イコウ99	W-12	—	青磁	龍泉窯系青磁・Ⅱ-b類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	162	H９・イコウ74	W-12	Ⅲb	青磁	龍泉窯系青磁碗・Ⅱ-b類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	163	H９・イコウ155	W-13	Ⅲb	青磁	龍泉窯系青磁・Ⅱ-b類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	164	H９・イコウ12	V-14	Ⅲb	青磁	龍泉窯系青磁碗・Ⅱ-b類	堅緻，灰白色	オリーブ灰色	—
147	165	H10・イコウ185	U-12	—	青磁	同安窯系青磁碗Ⅰ類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	166	H９・イコウ215	V-11	Ⅲb	青磁	龍泉窯系青磁皿・Ⅰ-1a類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	167	H10・イコウ45	W-12	—	青磁	同安窯系青磁皿・Ⅰ類	堅緻，灰白色	灰白色	—
	168	H10・イコウ66	V-13	—	青磁	同安窯系青磁皿・Ⅰ類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	169	H９・イコウ224	U･V-12	Ⅲb	青磁	同安窯系青磁皿・Ⅰ-1b類	堅緻，灰白色	明オリーブ灰色	—
	170	H10・イコウ187	U-12	—	青磁	同安窯系青磁皿・Ⅰ-2b類	堅緻，灰白色	緑灰色	—
	171	H10・イコウ184	U-12	—	青磁	同安窯系青磁皿・Ⅰ-2b類	堅緻，灰白色	オリーブ灰色	—
	172	H10・イコウ308	V-12	—	白磁	白磁碗・Ⅳ類	堅緻，灰白色	灰白色	—
	173	H10・イコウ105	V-12	—	白磁	白磁碗・Ⅴ類	堅緻，灰白色	灰白色	—
	174	H９・イコウ113	W-13	Ⅲb	白磁	白磁碗・Ⅴ-4a類	堅緻，灰黄色	浅黄色	胴部下位露胎
	175	H９・イコウ304	U-11	Ⅲb	白磁	白磁碗・Ⅴ-4a類	堅緻，灰白色	灰白色	胴部下位露胎
	176	H９・イコウ295	U-11	Ⅲb	白磁	白磁碗・Ⅸ-1類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	177	H９・イコウ314	T-11	Ⅲb	白磁	白磁皿・Ⅸ-1a類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	178	H９・イコウ527	V-12	Ⅲb	白磁	白磁皿・Ⅸ-1b類	堅緻，灰白色	灰白色	—
	179	H９・イコウ224	U･V-12	Ⅲb	白磁	白磁皿・Ⅸ-1a類	堅緻，灰白色	灰白色	—
	180	H９・イコウ12	V-14	Ⅲb	白磁	白磁皿・Ⅸ-1b類	堅緻，灰白色	灰白色	—
	181	H10・イコウ217	U-12	—	白磁	白磁皿・Ⅸ-1b類	堅緻，灰白色	灰白色	—
	182	H10・イコウ266	W-13	—	白磁	白磁皿・Ⅸ-1b類	堅緻，灰白色	明オリーブ灰色	—
	183	H９・イコウ268	U-13	Ⅲb	白磁	耳壺Ⅲ類	堅緻，灰白色	灰オリーブ色	—
	184	H９・イコウ622	W-12	Ⅲb	青白磁	合子蓋	堅緻，灰白色	明緑灰色	—
	185	H９・イコウ36	X-13	Ⅲb	青白磁	合子蓋	堅緻，灰黄色	オリーブ灰色	—
	186	H９・イコウ224	U･V-12	Ⅲb	青白磁	白磁壺	堅緻，灰白色	灰白色	—

番号	年度・遺構番号	出土区	層位	種別	品種	最大長（cm）	最大径（cm）	最大厚（cm）	色調	備考
187	H10・イコウ49	W-12	—	土製品	錘	3.2	1.1	—	にぶい黄橙色	赤色顔料塗布
188	H９・イコウ217	V-11	—	土製品	錘	3.5	1	—	にぶい橙色	—
189	H９・イコウ699	X-15	Ⅲb	土製品	錘	5.4	1.9	—	赤褐色	赤色顔料塗布
190	H９・イコウ699	X-15	Ⅲb	土製品	錘	5.1	2	—	にぶい黄褐色	—
191	H９・イコウ594	V-13	Ⅲb	土製品	大型土錘	6.6	3.5	—	にぶい黄橙色	—
192	H９・イコウ706	X-14	Ⅲb	土製品	鞴の羽口	—	—	—	淡黄色	—
193	H９・イコウ586	U-12	Ⅲb	土製品	鞴の羽口	—	—	—	橙色	外面に溝

表44　ピット内遺物観察表（4）

挿図	番号	年度・遺構番号	出土区	層位	種別	器種	備考
148	194	H９・イコウ232	U-12	—	滑石製品	石鍋再加工品	—
	195	H９・イコウ162	V-12	—	軽石製品	不明	穿孔

番号	年度・遺構番号	出土区	層位	器種	部位	最大長（cm）	最大厚（cm）	最大幅（cm）	重量（g）	備考
196	H９イコウ215	V-11	—	鏃	完形品	6.9	1.3	1.1	14.39	—
197	H11イコウ143	P･Q-11	Ⅲ	刀子	身・茎	8.5	0.6	1.1	6.01	—

第２節　遺　　物

１遺物の出土状況

Ⅲｂ層を包含層として土師器や須恵器，陶器，青磁，白磁，瓦器，滑石製品，鉄製品，輔の羽口等が大量に出土した。

２遺物

土師器

椀（第149図198～200）

198と199は器壁が薄く，胴部中位の輪積みの接合部を指おさえで補強しており，そこが緩やかな稜を形成している。また色調が他の椀・坏類より白っぽく，胎土に長石を多く含んでいることより，瀬戸内地方からの搬入品であると考えられる。

坏（第149図201～第150図226）

坏は器形と技法により，以下のように分類した。

・Ⅰ類（第149図201～207）

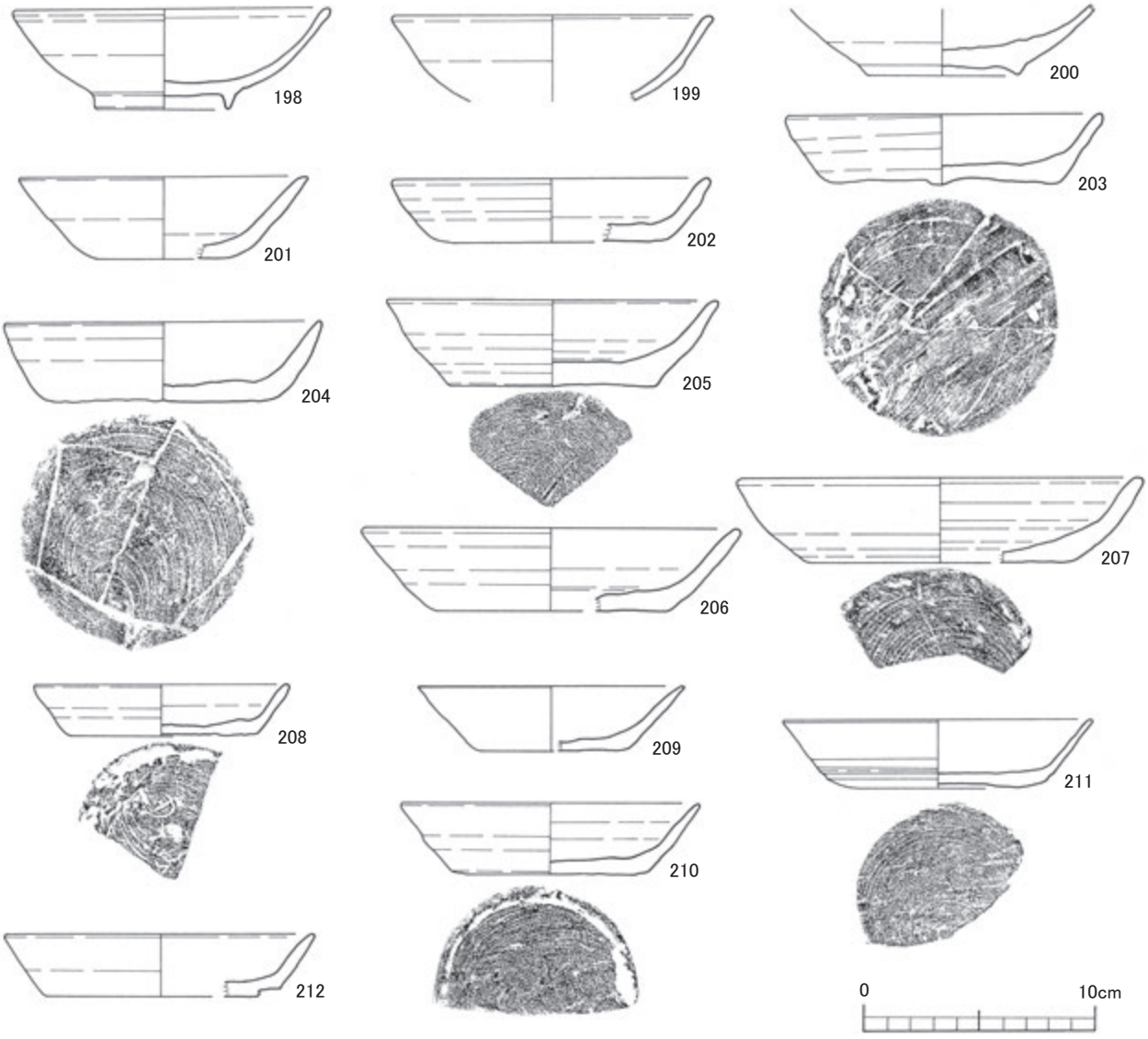
他と比べてやや厚めの器壁を持つもの。202は見込みに指頭痕が残る。203は外底面に幅約９mm の板状工具の圧痕がある。

・Ⅱ類（第149図208～第150図215）

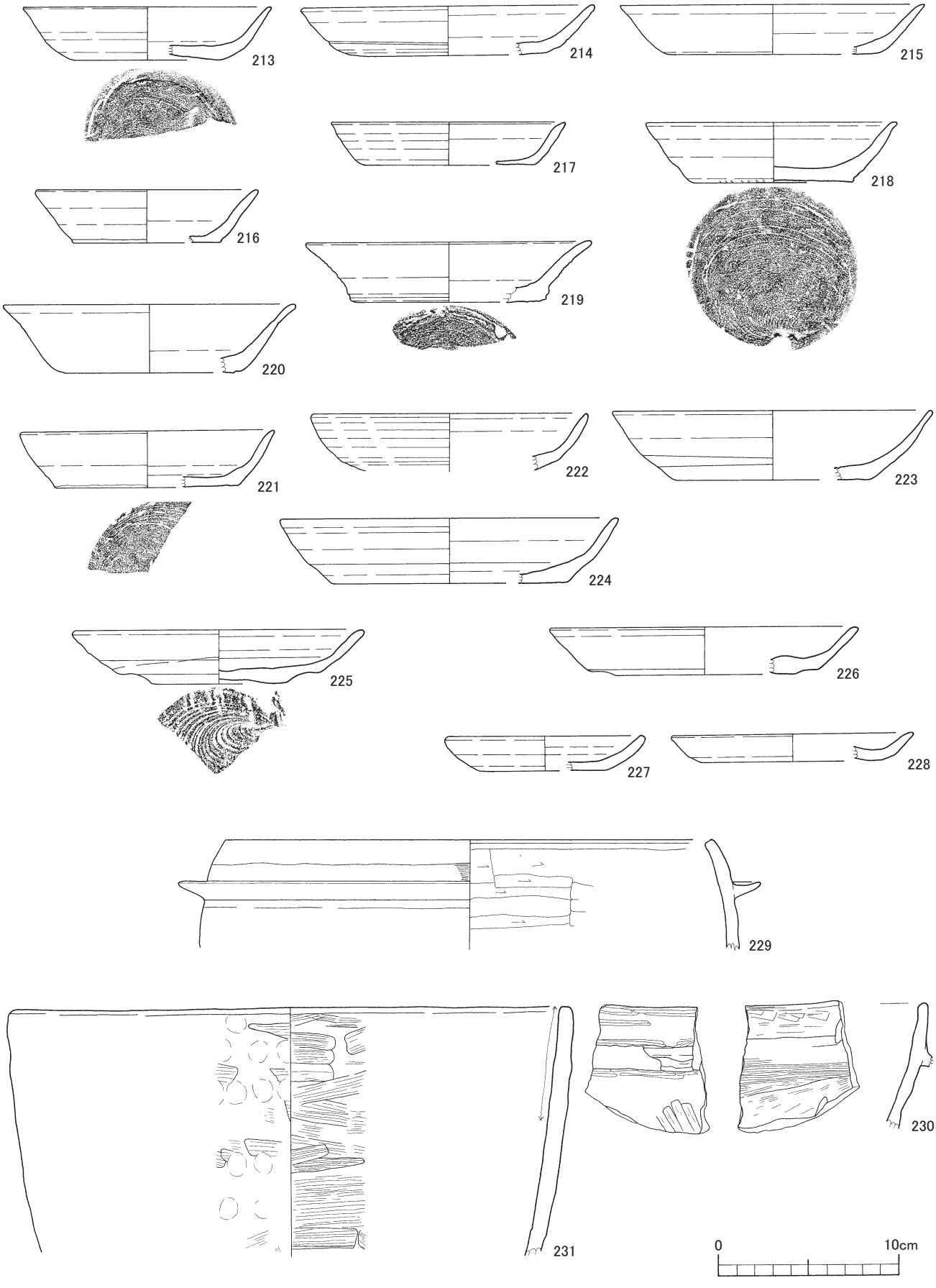
口縁部が直行して立ち上がるもの。

・Ⅲ類（第150図216～220）

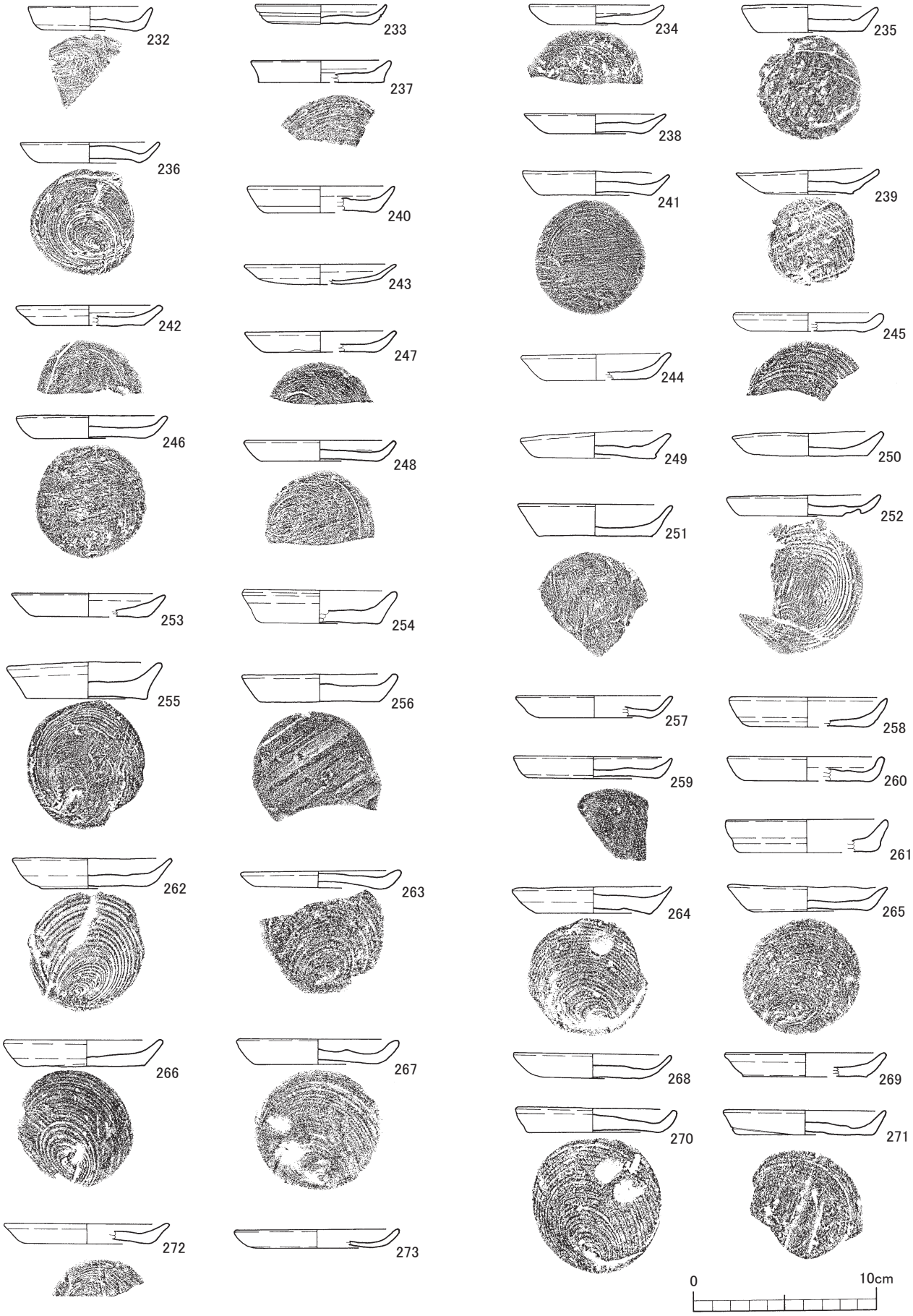
口縁部が外反またはやや外反気味に立ち上がるもの。218は外底面に回転形成した際に付いたと思われる工具痕が２～４mm 間隔でついている。219は外面に指頭痕が残る。



第149図　中世遺物（１）土師器椀・杯



第150図　中世遺物（２）土師器椀・杯等



第151図　中世遺物（３）土師器小皿

・Ⅳ類（第150図221～224）

口縁部が内湾またはやや内湾気味に立ち上がるもの。224は見込みに指ナデによる調整痕が残る。

・Ⅴ類（第150図225・226）

胴部下位でいったん水平方向に広がった後に，口縁部が外側に直行するもの。225はやや雑な感じの仕上げである。

皿（第150図227・228）

口径11cm 以上のものを皿とし，小皿と区別した。

羽釜（第150図229・230）

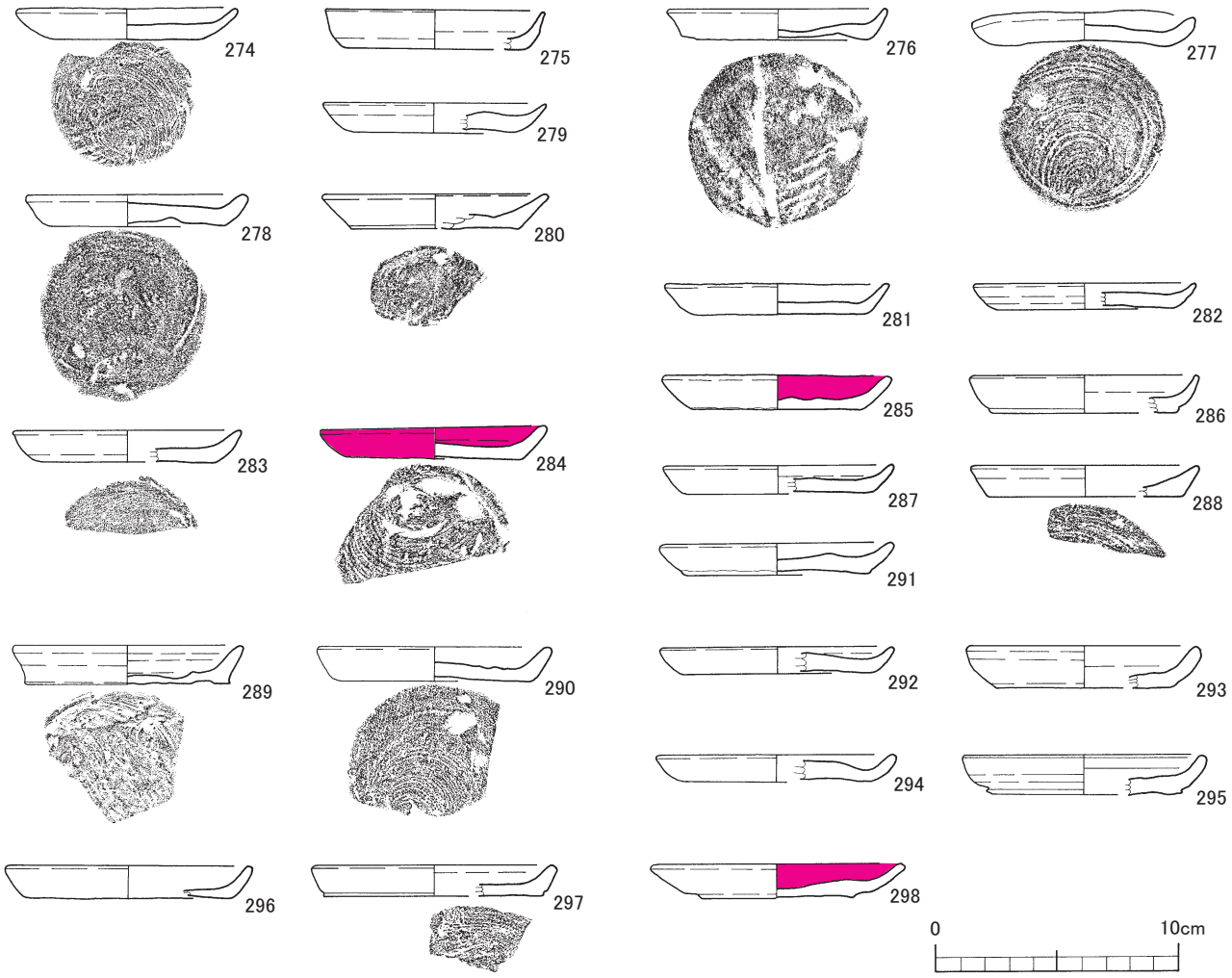
229は口縁部付近が内湾している。230は鍔部が欠損しており，長さ等は不明である。

鉢（第150図231）

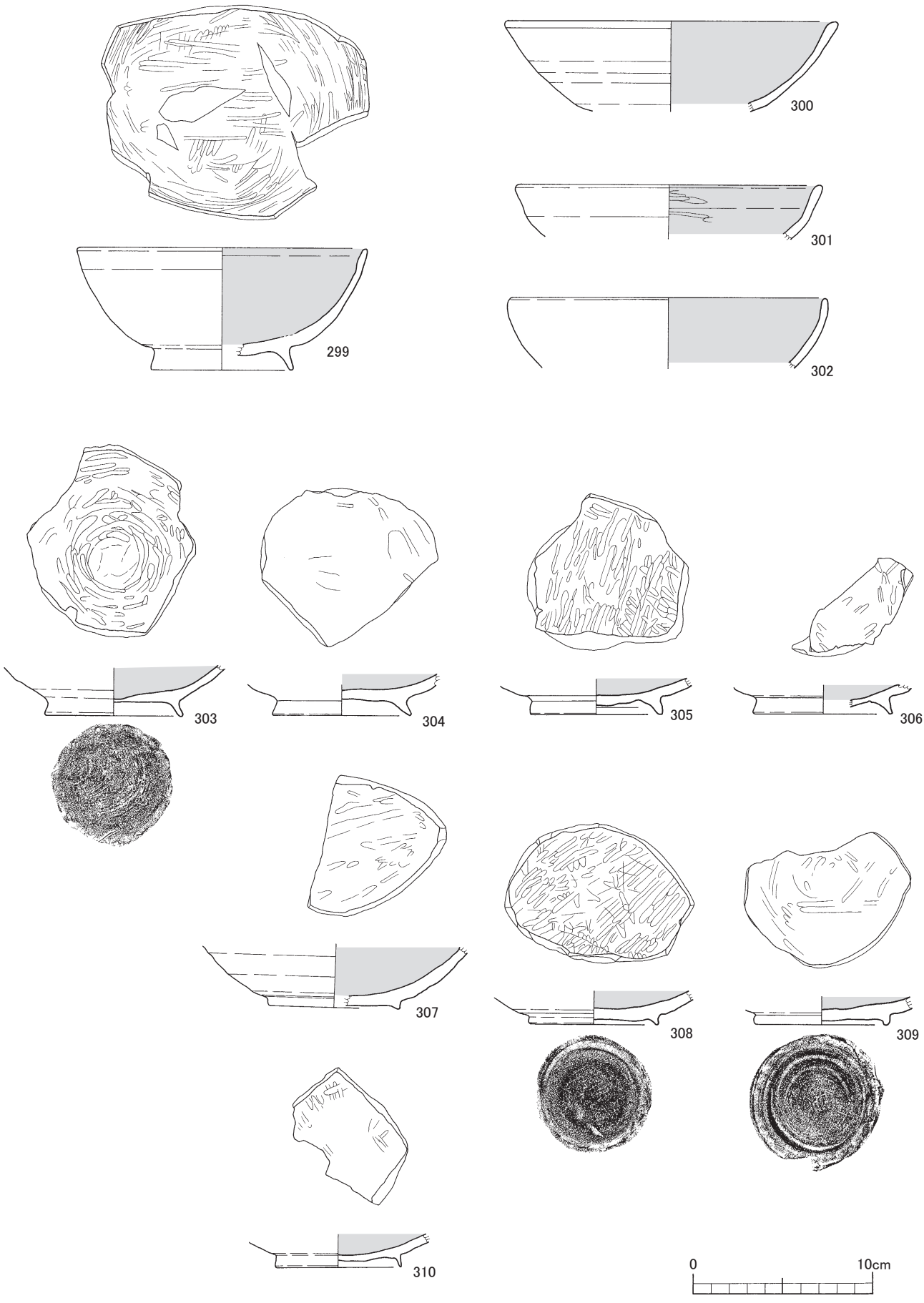
口縁部のみの出土で全体の形状は不明である。外面は輪積みの接合部を指おさえで補強している。口縁部内面付近に煤が濃く付着している。胎土は長石や礫を非常に多く含み，一見古墳時代の土器のようにも見える。明確な所属時期は明らかでないが，出土層位により中世遺物として掲載した。

小皿（第151図232～第152図298）

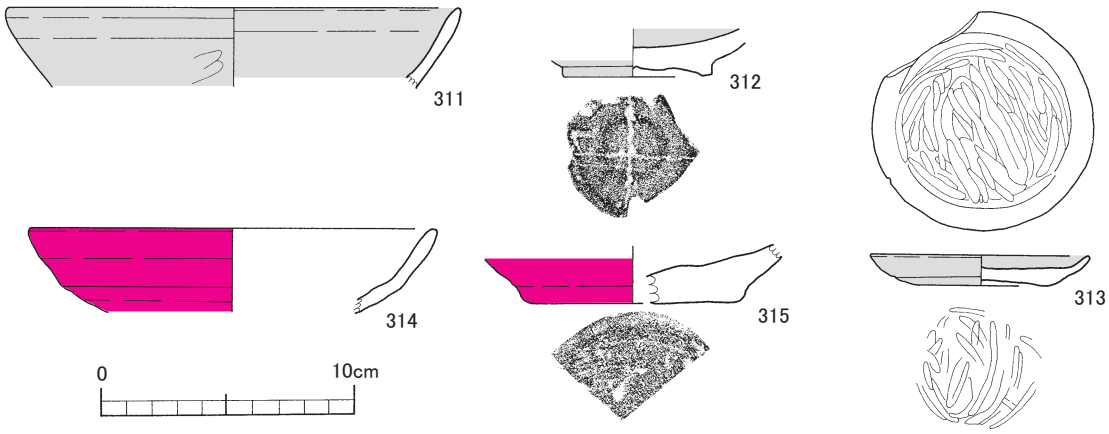
口径11cm 未満，器高２cm 以下を土師器の小皿とした。糸で切り離して回転台から離され，内外面回転ナデによって仕上げられている。大きさで口径が6.0cm ～９cm 未満のものと，９cm ～11cm までの２種類程度に分類の可能性が考えられる。255のように胴部の立ち上がりが外に張り出しているものが数個体確認できる。また，内面や口縁部に煤の付着したものは，灯明皿として使用された可能性が考えられる。糸切り痕以外の外底面に見られる特徴的なものとして，256・271・272に幅約９mm ～約15mm の板状の圧痕が確認できる。241と280には繊維状の圧痕が確認できる。これらは小皿をロクロから切り離した後，ナデ調整等を加えた段階で下に敷いていたものが圧痕として残ったと考えられる。この他，指頭痕のあるものが５つみられるが，ロクロから切り離した後，持ち運びの際についたものと思われる。



第152図　中世遺物（４）土師器小皿



第153図　中世遺物（５）黒色土器



第154図　中世遺物（６）黒色土器・赤色土器

黒色土器（第153図299～第154図313）

土師質の黒色土器は，内面のみを黒く燻したものをⅠ類，内外面を黒く燻したものをⅡ類とした。器面が摩滅して確認できないものもあるが，原則的にⅠ類は内面のみに，Ⅱ類は両面にヘラミガキが施されている。椀は腰が深く高台はいずれも低く，断面三角形状を呈している。300は口縁付近がわずかに肥厚する。303は見込みの中央部が窪み極端に薄くなっている。また，外底面には回転台から糸で切り離した跡が残る。304と306は高台が特に外反する。312は外底面に「十」字状の記号が刻書されているが理由は不明である。313は内外面共にヘラミガキが行われている小皿である。

赤色土器（第154図314・315）

315は外底面に赤色顔料が塗られている。胴部下端にナデ調整により段を有する。底部は円盤状である。赤色土器は小皿にも３点あるが，土師器小皿のところへ掲載した。

瓦器（第155図316～344）

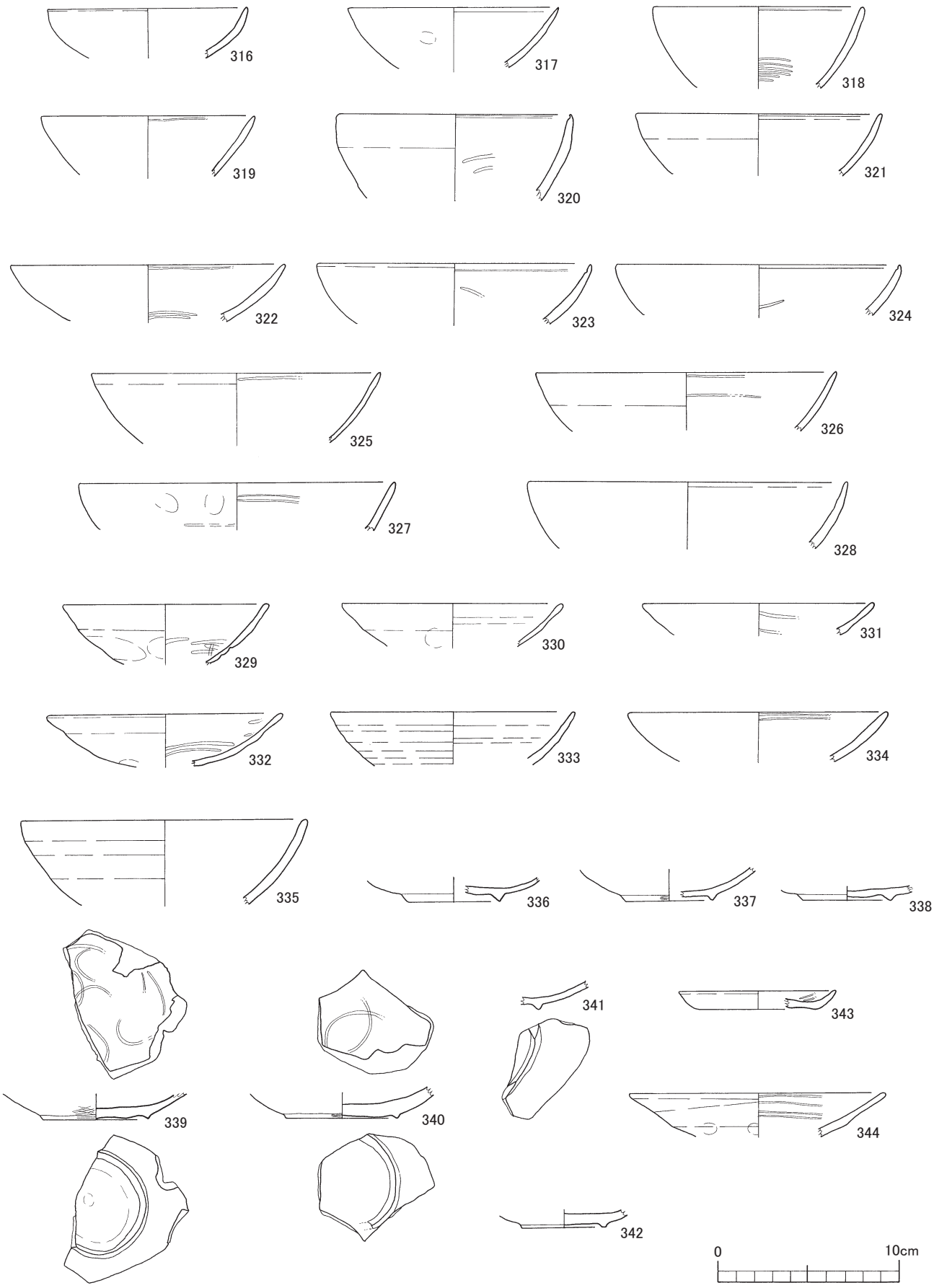
29点を図化した。土師質で燻しが施されている。器面の色調は基本的には灰白色から灰褐色を呈する。器種は椀と皿である。摩滅しているため器面調整痕が明瞭に残らないものが大半である。316～328，336～343は楠葉型で12世紀後半に編年される。緩やかに内湾する体部で口縁端部はやや尖り気味に丸く納める。口縁端部の内面にヘラ状工具による沈線が口縁と平行に巡らされているものが多い。318と322の内面の口縁部と見込みには数条の平行線状のヘラミガキが圏線状に施される。327は外面に指頭圧痕と粘土の接合痕が観察できる。

329～335・344は和泉型で12世紀末から13世紀前半に編年される。口縁が外反気味で，端部を丸く納めるものが多い。329は焼成が良好で燻しが良好である。外面に指頭圧痕による器壁の凹凸があり，凹部にはヘラが当たっておらず，屈曲部には稜がある。内面には横位と縦位に幅２～３mm のヘラミガキ痕がある。332は胴部上位が外に広く張り出しており，屈曲部の稜が明瞭である。内面は幅２～３mm のヘラミガキ痕が圏線状に走る。333は内外面共にロクロによるナデが明瞭でヘラミガキ痕がみられない。334は口縁内面に２条のミガキ痕が残る。燻しが良好である。330は器壁は薄く焼成は良好である。内外面に工具ナデ痕が見られ，外面の屈曲部の稜が明瞭である。336～342は胴部下位から高台付近である。高台は断面三角形状の貼り付け輪高台である。339と340の見込みには幅1.2～２mm のヘラミガキ痕が連結輪状の暗文で施される。高台を断面三角形状に形成する際のヘラケズリの痕跡が残る。343は皿である。内面に幅１mm のヘラミガキ痕が残る。344は外面にロクロによるナデと指頭圧痕が，内面に横位のヘラミガキ痕が圏線状に施される。全体的に胎土は細かく，礫を含むものはあまりない。

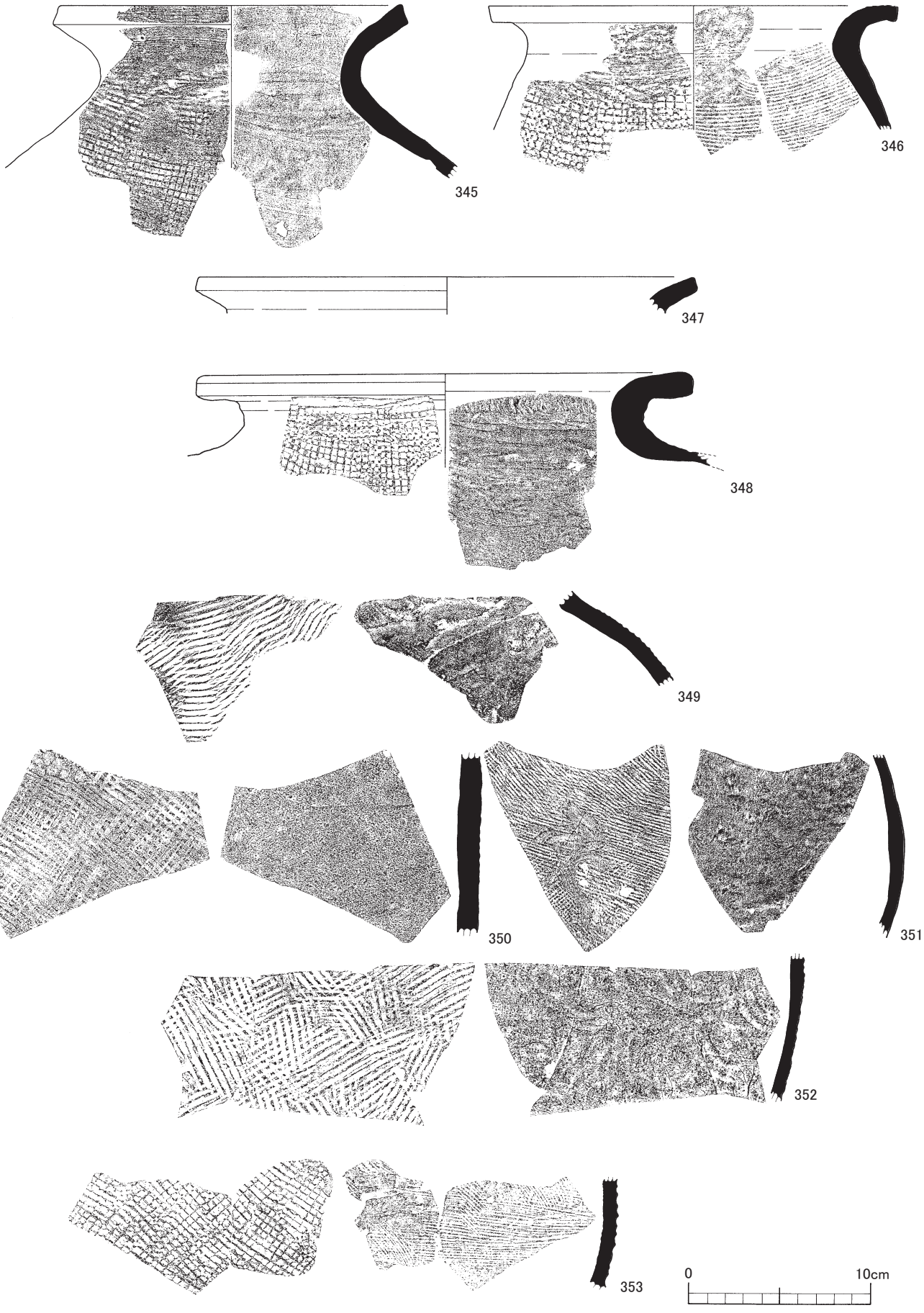
須恵器・瓦質土器

甕（第156図345～第158図358）

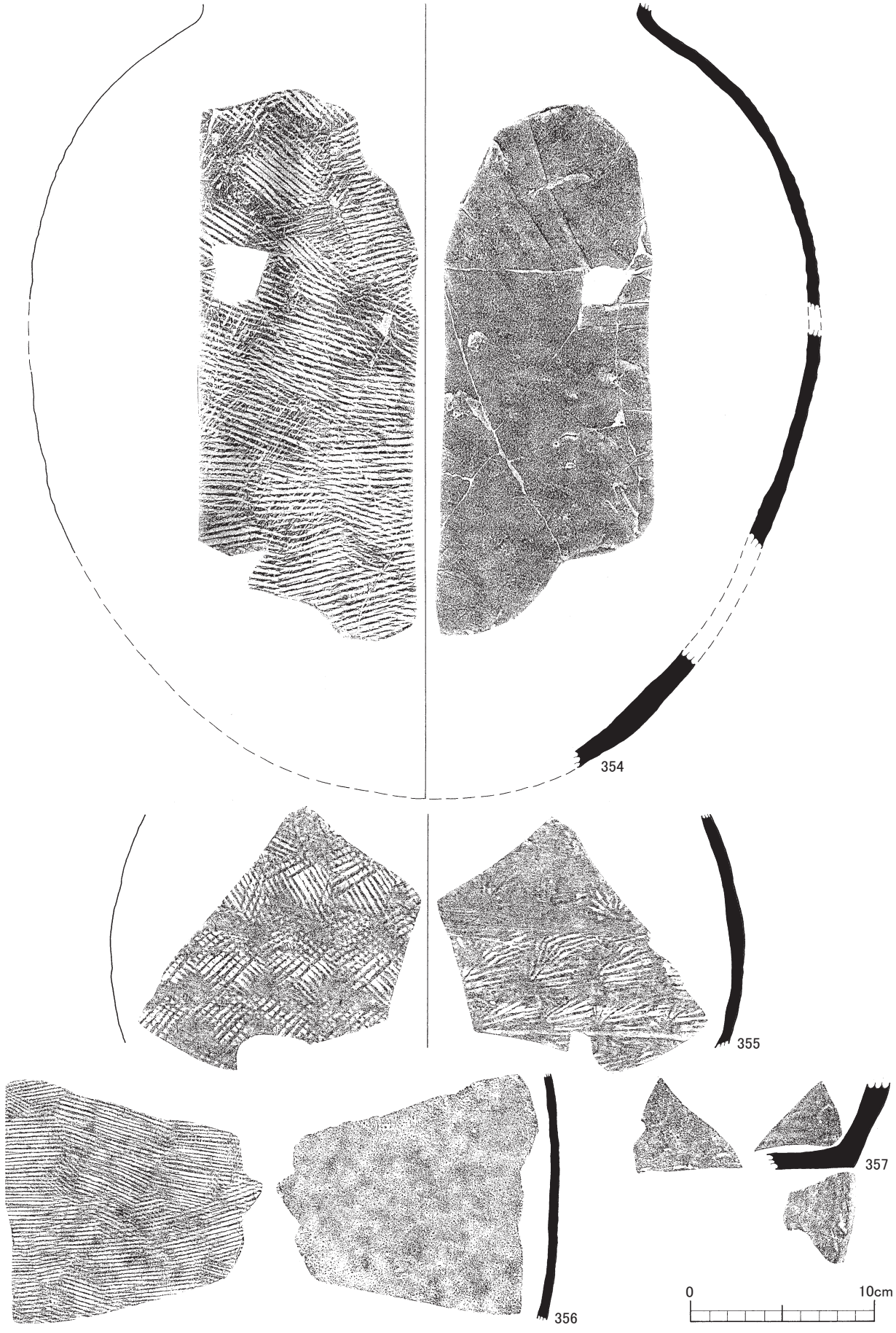
345～348は口縁部付近である。頸部は「く」の字状に屈曲し，口縁部は大きく外反する。胴部外面は格子目タタキ痕が，内面にはナデ及びハケメ調整痕が残り，熊本県の荒尾市にある樺番丈窯系の須恵器の特徴を有する。349～358は胴部から底部である。349と356は焼成が特に悪く，土師質に近いものがある。350～352は魚住窯系と考えられる。焼成良好で器面が黒く光沢を帯びる。353は低還元焼成のため，瓦質に近いものである。354は胴部の最大径が約43.2cm を測る。355の内面は平行当て具を異なった角度で２～３回使用した後，輪積みの接合部



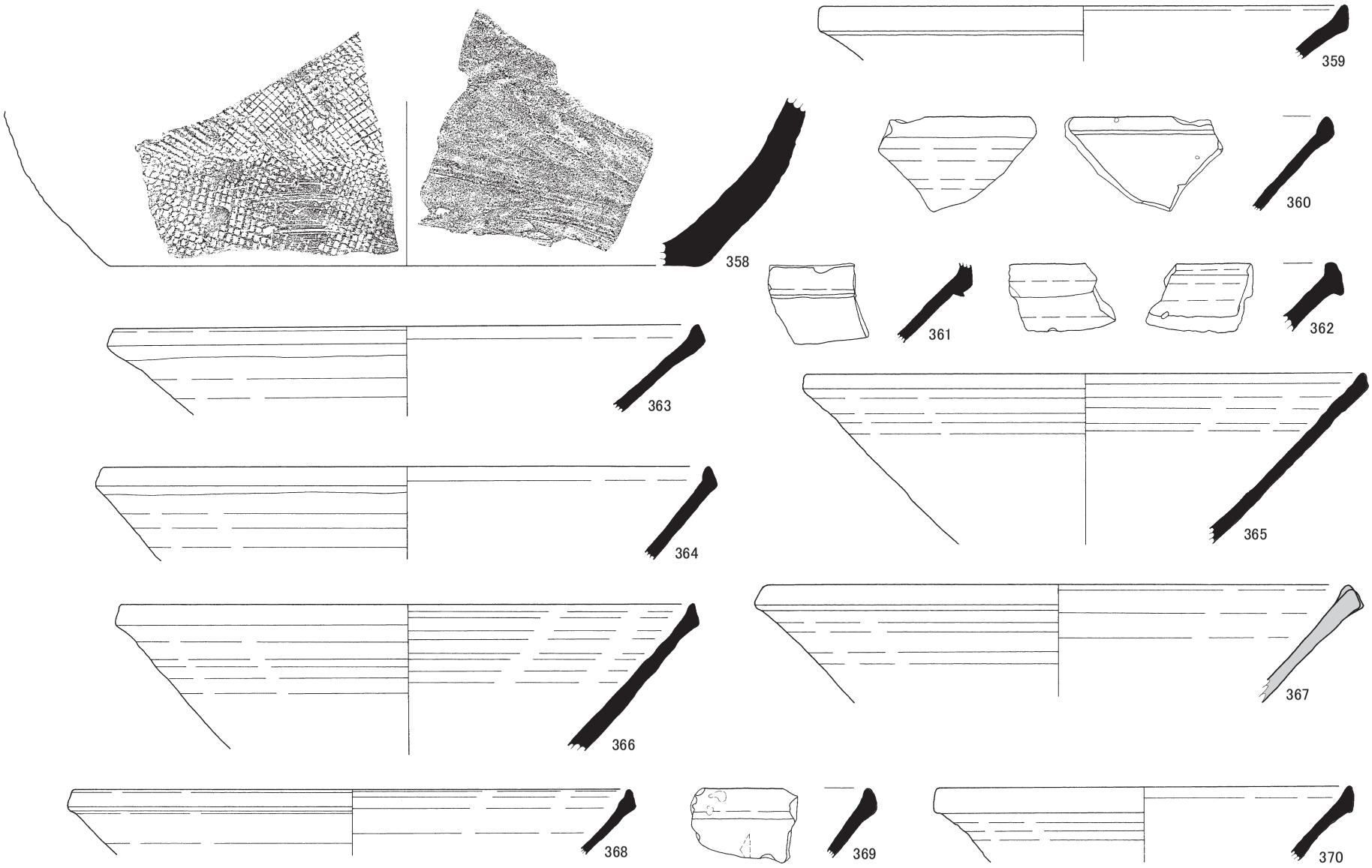
第155図　中世遺物（7）瓦器



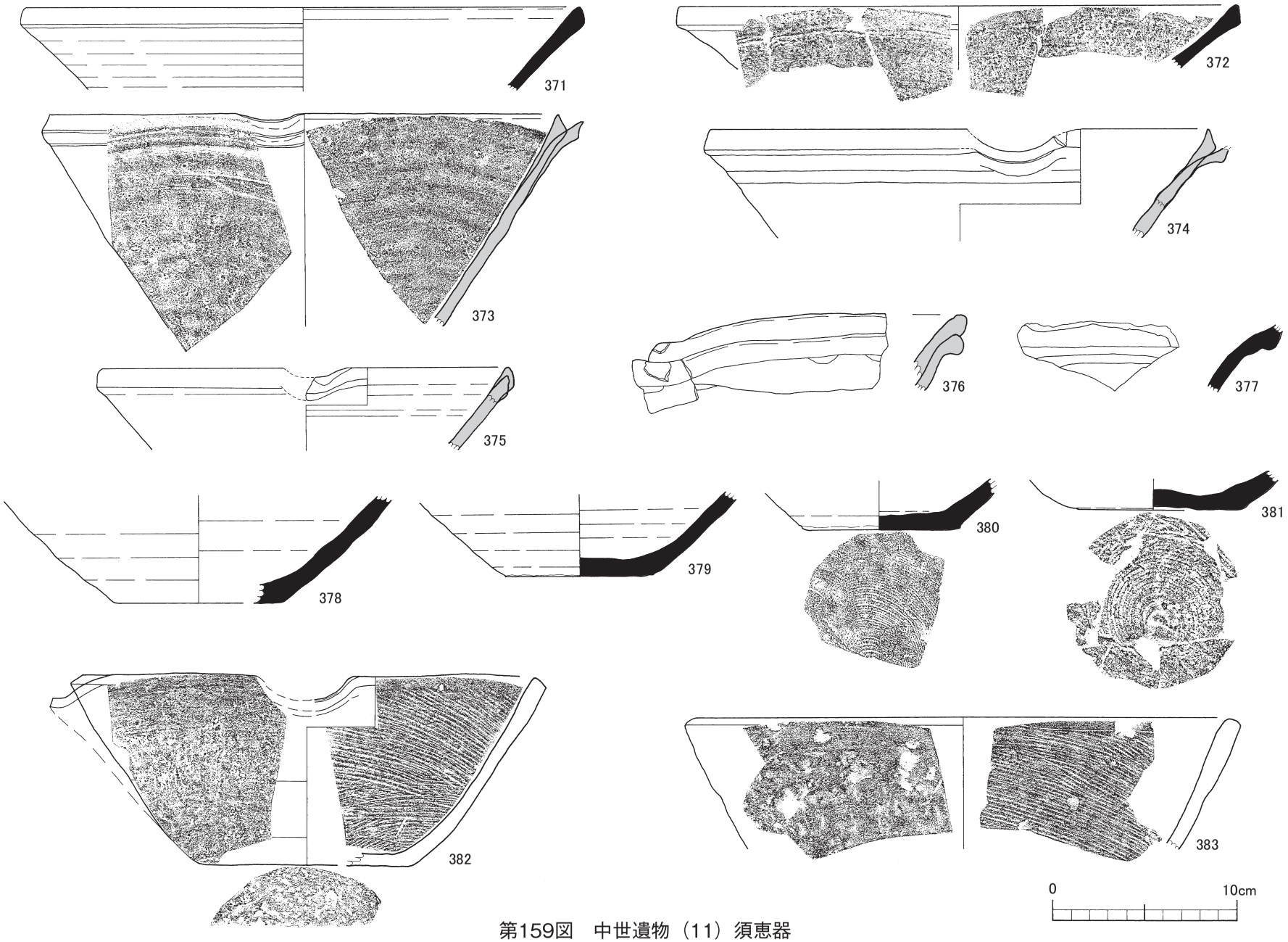
第156図　中世遺物（８）須恵器



第157図　中世遺物（9）須恵器



第158図　中世遺物（10）須恵器



第159図　中世遺物（11）須恵器

とみられる場所をナデて補強している。外面も同様の方法で補強している。358は樺番丈窯系の甕の底部である。

捏鉢（第158図359～第159図381）

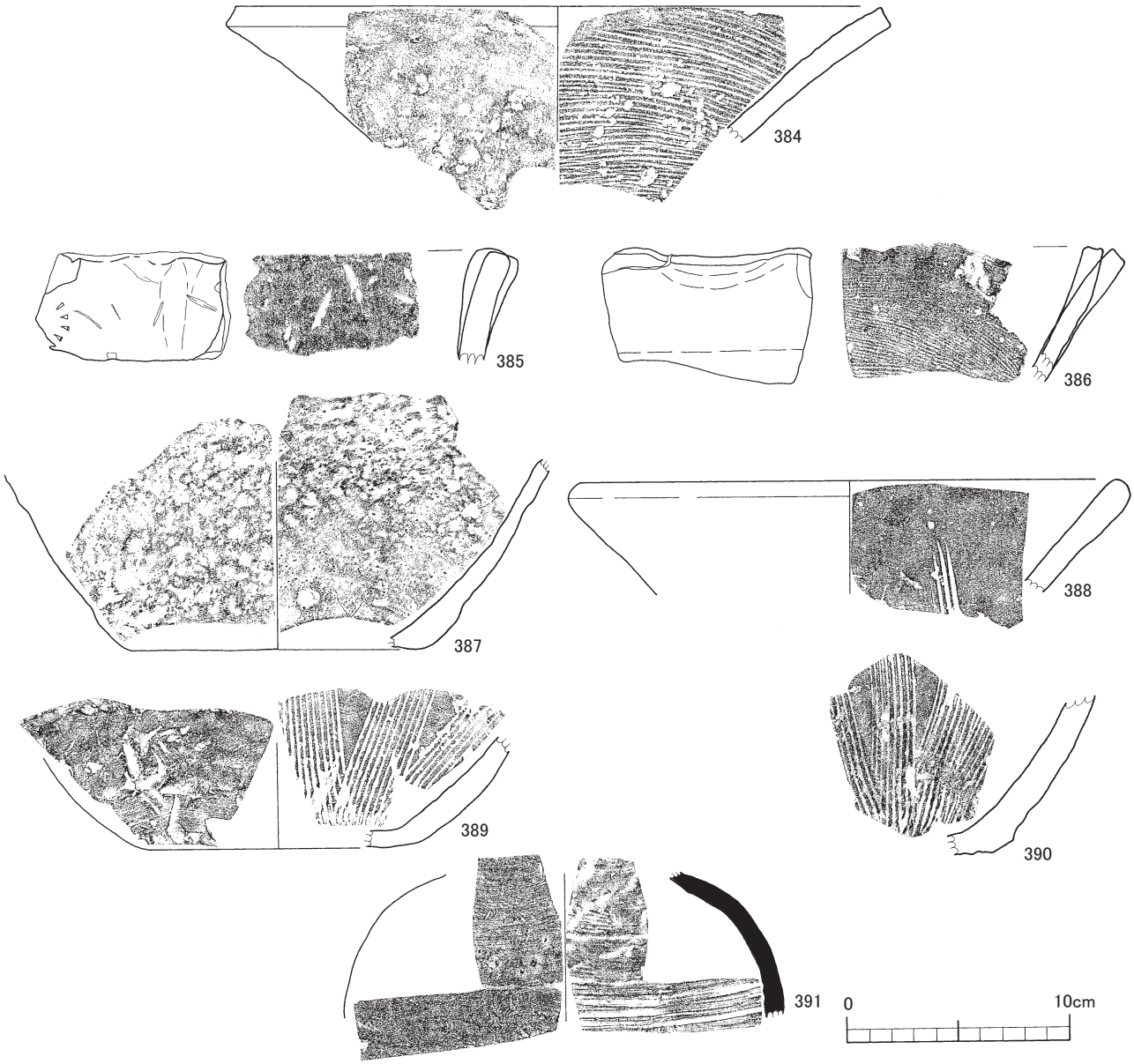
359～381は東播磨系の捏鉢である。胎土には砂味があり，白色粒や礫を含む。口縁部には灰～暗灰色の釉が掛かる。359～365は口縁部が肥厚し，内面にはっきりした段を有する。362は口縁部が特に大きく肥厚する。366～370は口縁部内面の段がわずかにみられる。371～377は口縁部内面に段が無く，直線的になっている。376は重ね焼きを行った際に熔着したもので，そのままの状態で流通したものと見られる。361は口縁部上端が欠けているので，376のような熔着品であった可能性がある。378～381は底部である。糸による切り離し痕が残る。12世紀末から13世紀前半に編年される。

瓦質土器（第159図382～第160図390）

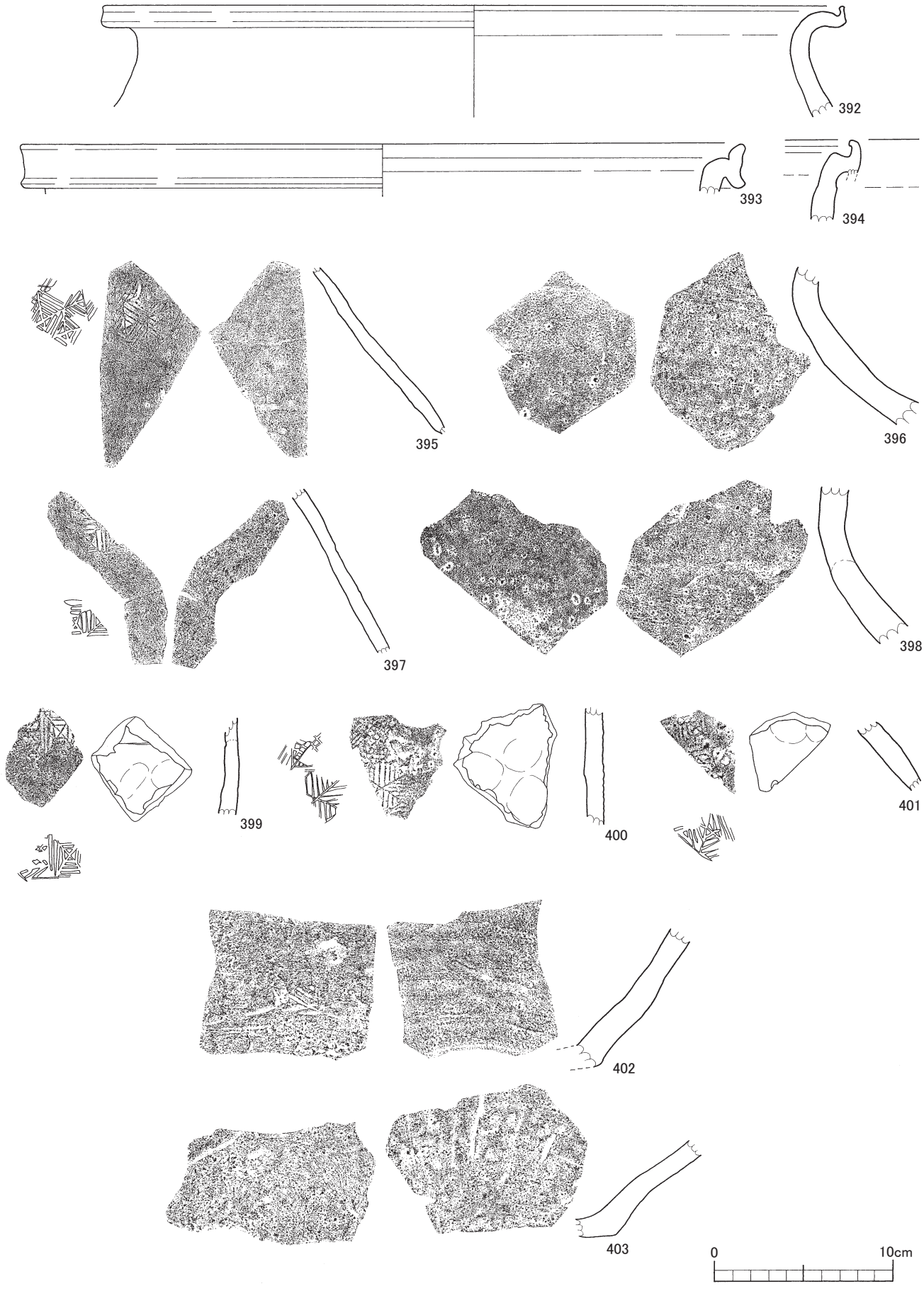
焼成温が低いため，瓦質に分類される鉢である。胎土は軟質で粉っぽい。外面は凹凸のある粗い仕上げである。382～384，386は内面にハケメが施される樺番丈窯系の鉢である。385は平面が八弁か六弁の輪花形を呈するいわゆる奈良火鉢である。胴部外面に花文のスタンプを押捺する。14世紀の所産と思われる。388～390は内面に櫛工具による卸目が施されている擂鉢である。

類須恵器（カムィヤキ）（第160図391）

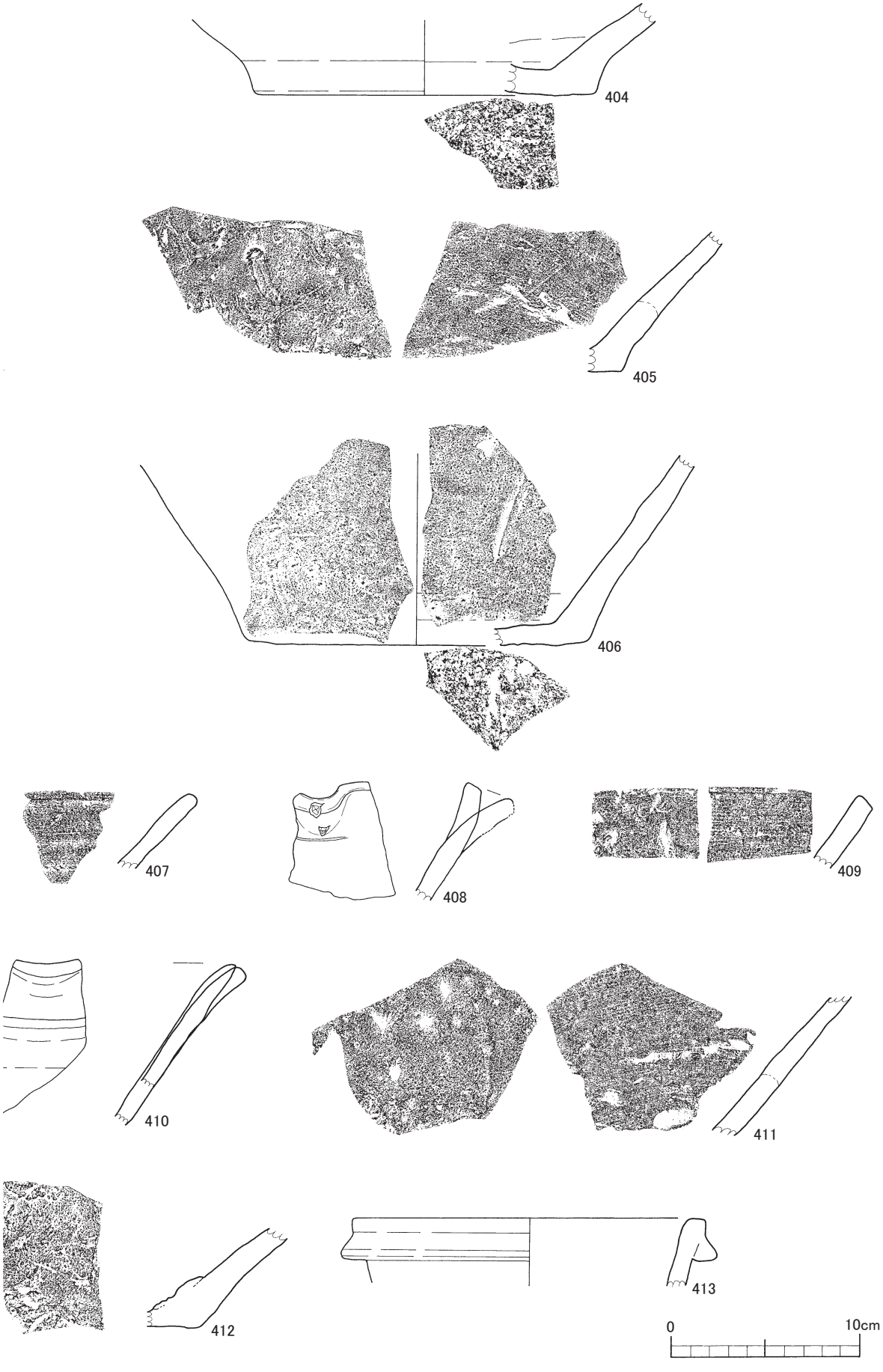
奄美群島の一つ徳之島の南部に窯体群が確認されているカムィヤキの壺の肩部である。胎土は暗灰色で硬質である。内面は格子目当て具を当てられた後，ナデ調整されてある。



第160図　中世遺物（12）瓦質土器



第161図　中世遺物（13）国産陶器



第162図　中世遺物（14）国産陶器

国産陶器

常滑（第161図392～第163図414）

中世の国産陶器の中で最も出土量が多いのが常滑焼である。硬質の焼締めで灰緑色の自然釉が掛かるものが多い。胎土は灰色で，白色粒や礫を多く含む。392～394は甕の口縁部である。392は口縁部断面がL字状を呈しており，口縁部内面と胴部下半に自然釉が厚くかかる。13世紀前半に編年される。393は口縁部断面がN字状を呈している。縁帯の幅は2.4mm を測る。13世紀後半に編年される。395～406は胴部および底部である。395，397，399～401の外面には押印文が施されていることから肩部付近であると考えられる。395と398は胎土に長石を多く含む。403・404は内外面に板状工具痕が残り，外底面には砂の付着が観察できる。406の内外面にも板状工具痕が残り，内底面には自然釉が掛かる。407～412は片口鉢である。408は13世紀中頃に編年される。410は高台を有する片口鉢の口縁部である。内面に自然釉が掛かっていることから重ね焼きの一番上にのせて焼かれていたことが考えられる。13世紀前半に編年される。412は内面に重ね焼きの跡が残る。413は口縁部を外側へ折り曲げ，先端が鍔状になっている鉢である。輸入陶器の可能性も考えられる。414は壺の肩部である。外面には押印文の他に×印が施されている。これは窯印ではなく，その用途は不明である。内面には輪積み痕と指頭痕が観察できる。12世紀中頃に編年される。

瀬戸（第163図415～417）

415と416は合子の蓋である。天井部にのみ淡緑色の灰釉が掛かる。白磁小壺の蓋の可能性もある。417は卸皿である。１本１～1.2mm の卸溝が入る。内外面に淡緑色の灰釉が掛かる。これらは13世紀後半から14世紀前後に編年される。

備前（第163図418～419）

418は椀である。須恵器に似た質感がある。口縁部に自然釉が掛かる。419は内面に使用による摩滅のある擂鉢である。14世紀後半から15世紀前半に編年される。

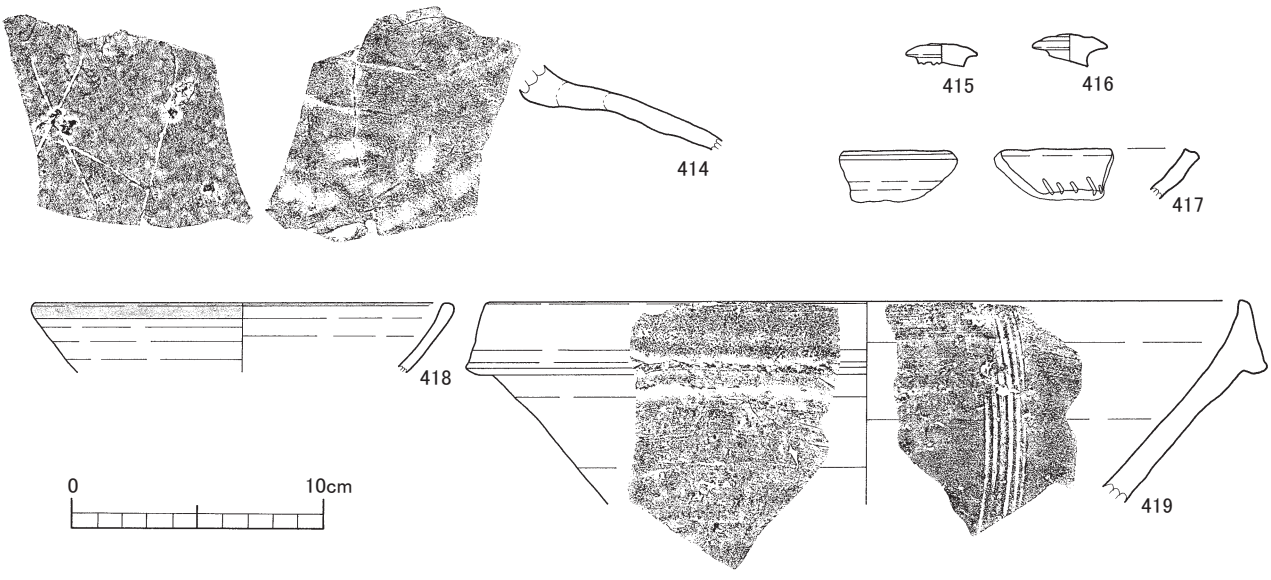
輸入陶器

椀（第164図420～421）

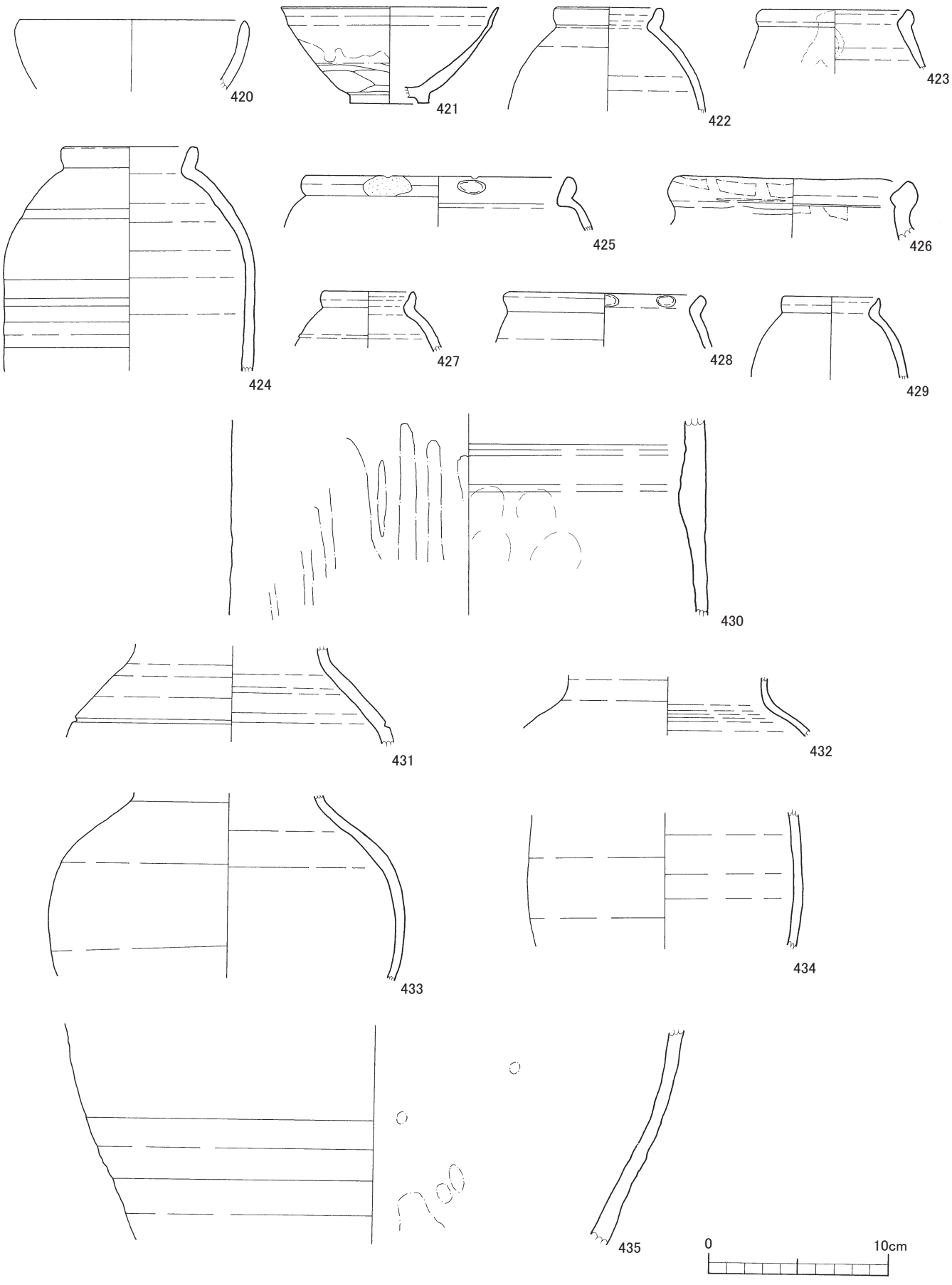
２点図化した。421はにぶい赤褐色の鉄が掛かる天目椀である。外面の胴部下位は露胎し，ヘラ状工具による器面調整が施される。産地はあきらかでなく，国産品の可能性もある。

壺・耳壺・水注（第164図422～第165図452）

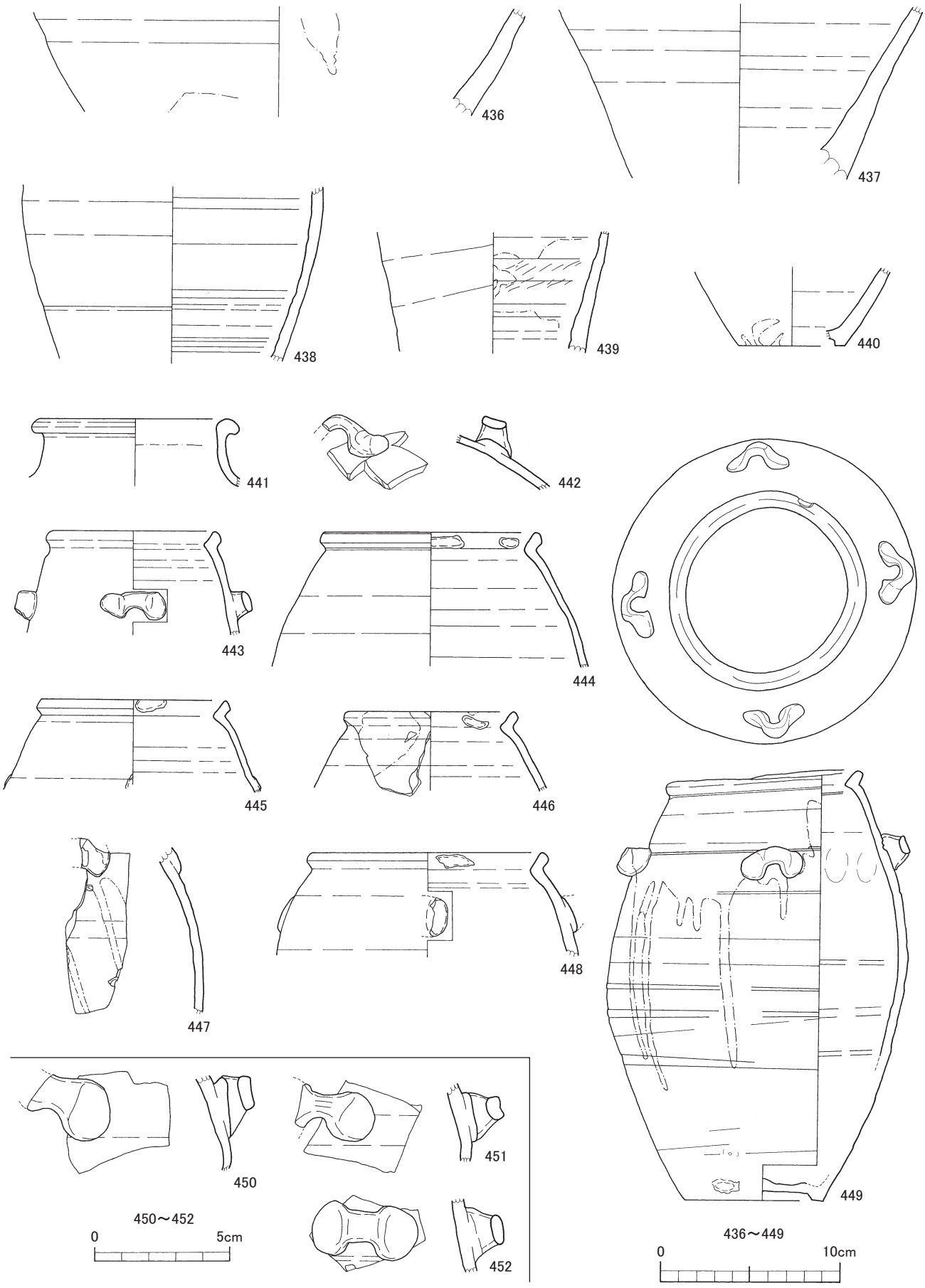
全形を確認できるものが少なく，壺と耳壺の区別が困難なものが数点あった。胎土に磁器に近い質感をもつものがある。口縁部の内面に目跡が残るものと底部付近に目跡が残るものがある。426の口縁部は内外面に釉の掛け残しが見られる。438は内面に，439は内外面にロクロ目を強く残す。449は完形の褐釉四耳壺である。白褐色～灰白色の釉が内外面に施された後，オリーブ黒色の灰釉が流し掛けされている。焼成温度が低かったため，図の裏側にあたる部分の焼成が良好でなく，玉垂れ状の灰釉には光沢がない。口縁部は「く」の字形に外反し，肩部に１～２状の沈線を巡らせ，その直下に耳を貼り付けている。胴部内面と外面上位にはロクロ目が，胴部下位の外面にはケズリ痕が観察できる。高台は碁笥底風の輪状高台である。重量は1.03kg。450と451は胎土と釉の質感より428と同一産地の可能性がある。



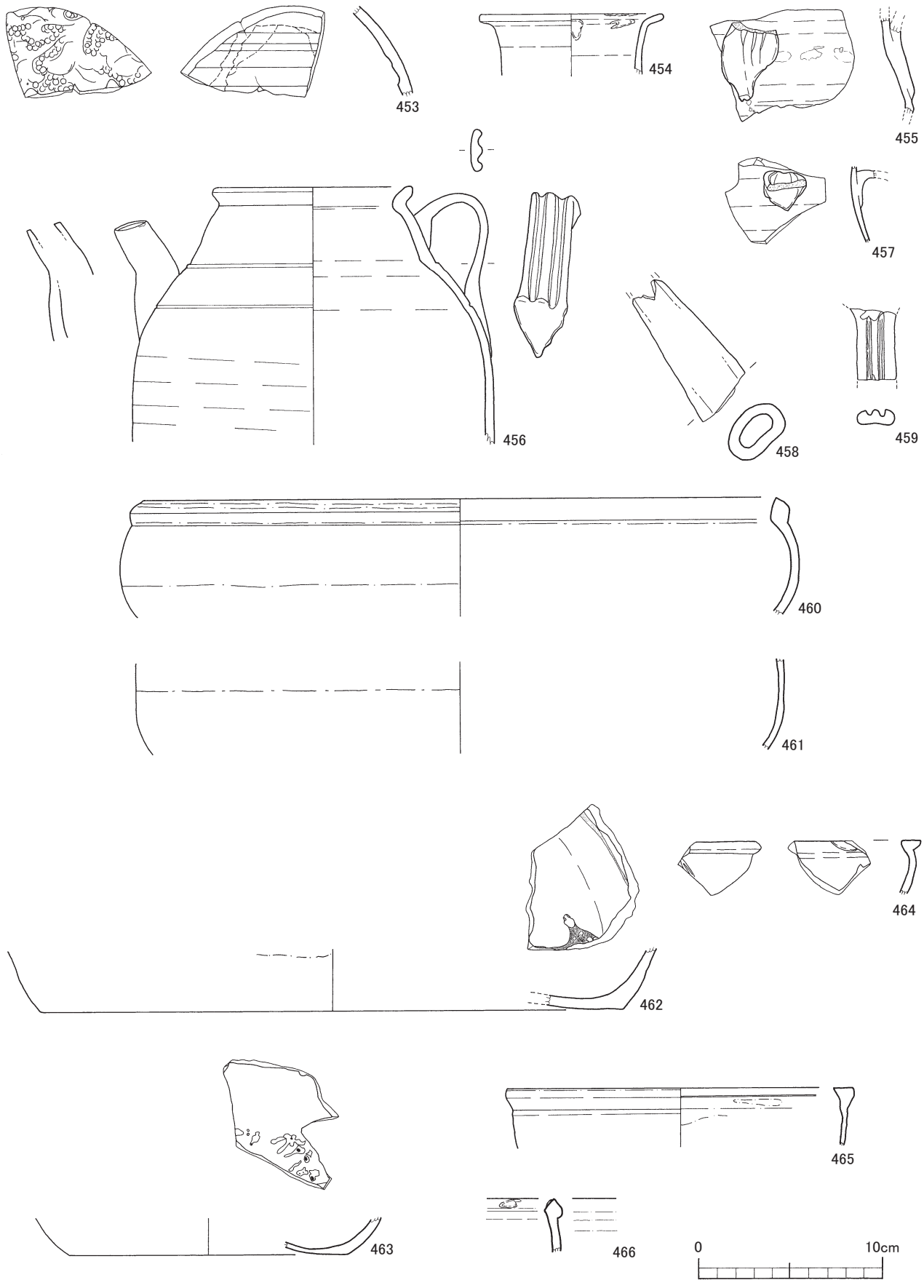
第163図　中世遺物（15）国産陶器



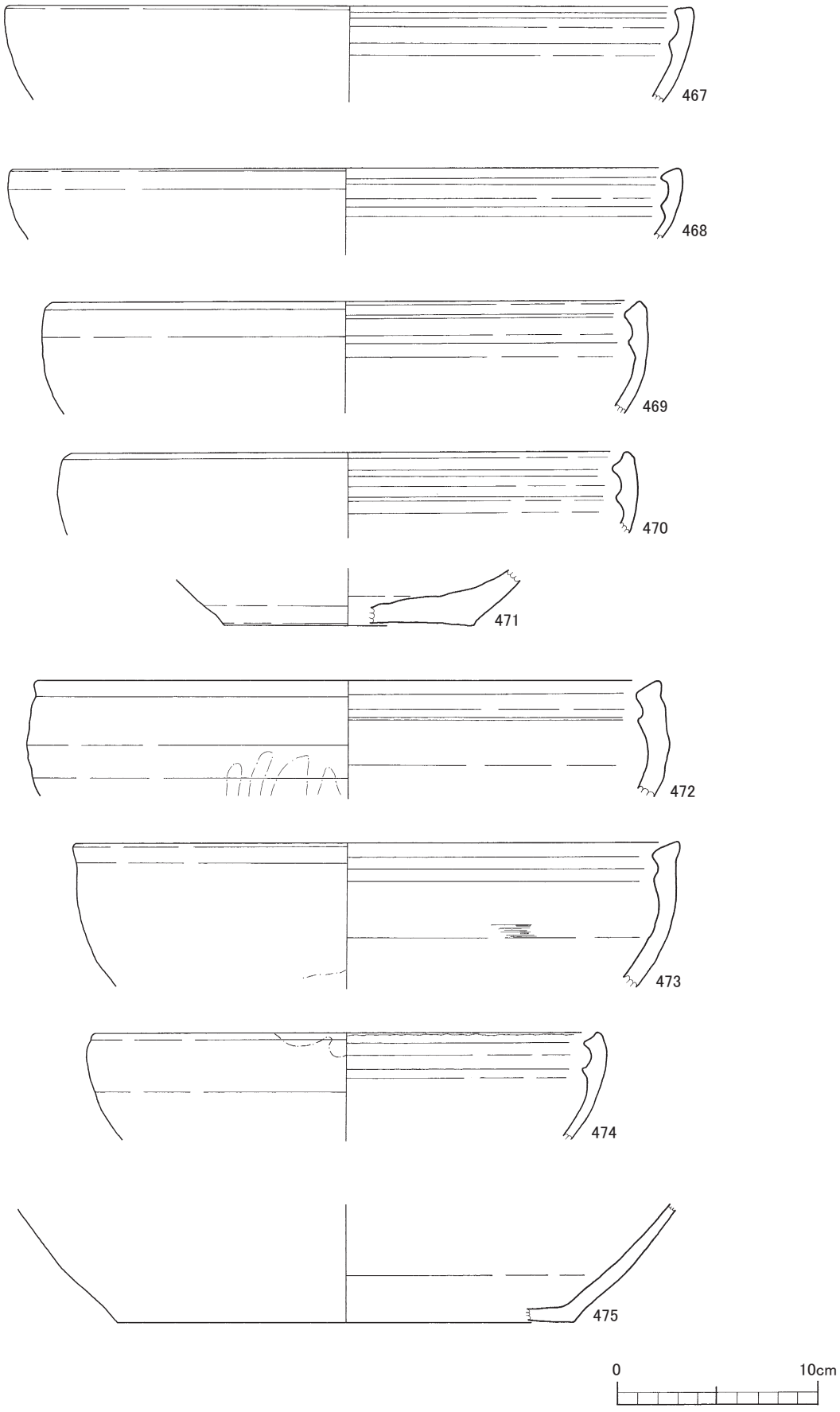
第164図　中世遺物（16）輸入陶器椀・壺



第165図　中世遺物（17）輸入陶器耳壺・壺



第166図　中世遺物（18）輸入陶器瓶・水注・盤



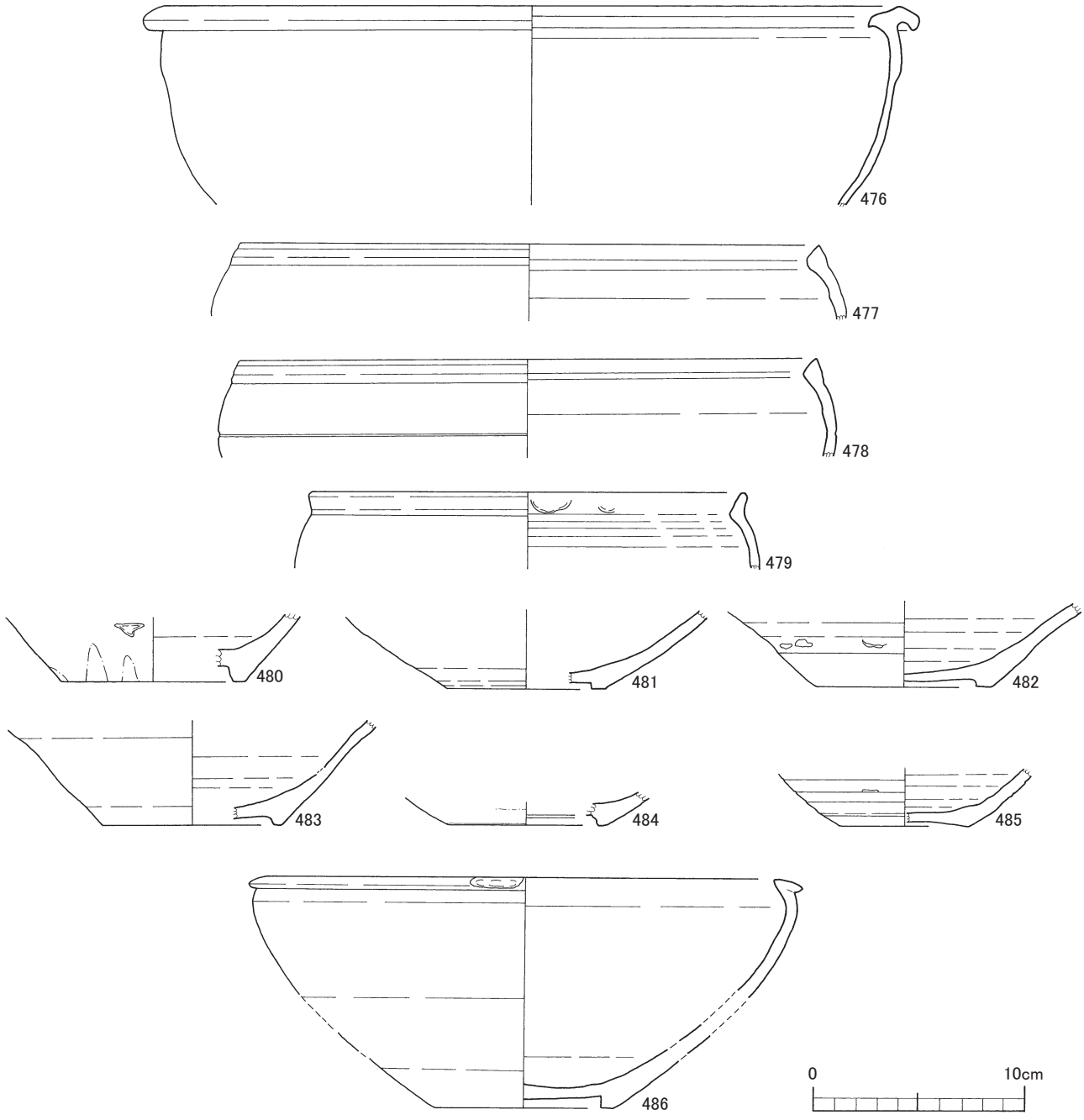
第167図　中世遺物（19）輸入陶器鉢

磁州窯系白釉瓶（第166図454）

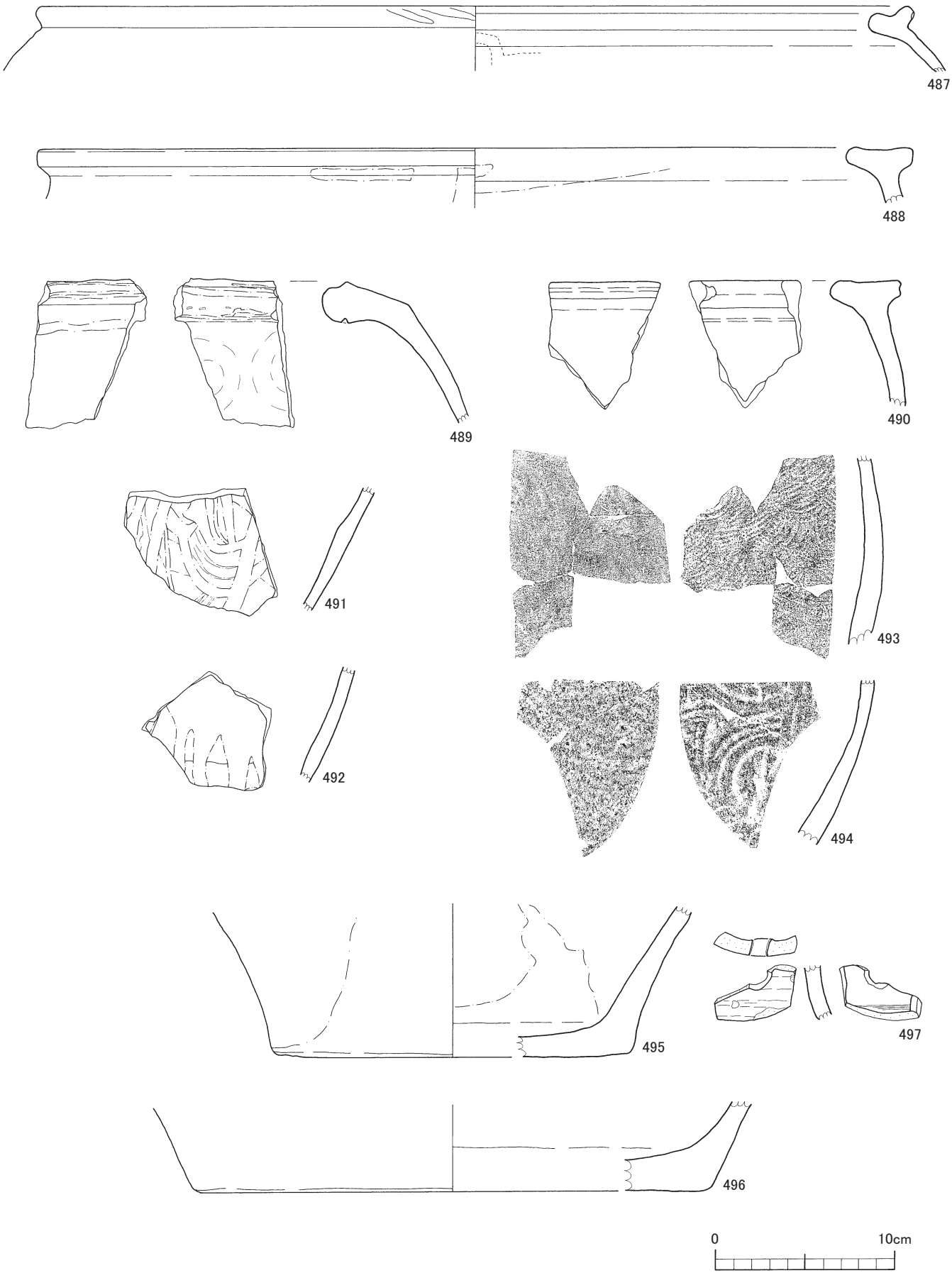
５点出土した。磁州窯系の瓶類の肩部であると考えられるが，全形は明らかでない。金峰町教育委員会が行った１次調査でも１点の報告があり，同一個体の可能性がある。外面は厚く白化粧土を掛けた後，円管状の工具による魚子文と沈線文を施し，その上から鉄釉を掛け，器面の鉄釉を削り落として白地を出し，さらに透明釉を上に掛けたもので，刻んだ文様部分のみが鉄色となる。内面は露胎と白化粧土を掛けた部分に分かれる。胎土はにぶい赤褐色で砂味が強い。他に例を見ない技法で作った優品である。11世紀中頃～12世紀前半に位置付けられる。

水注（第166図454～459）

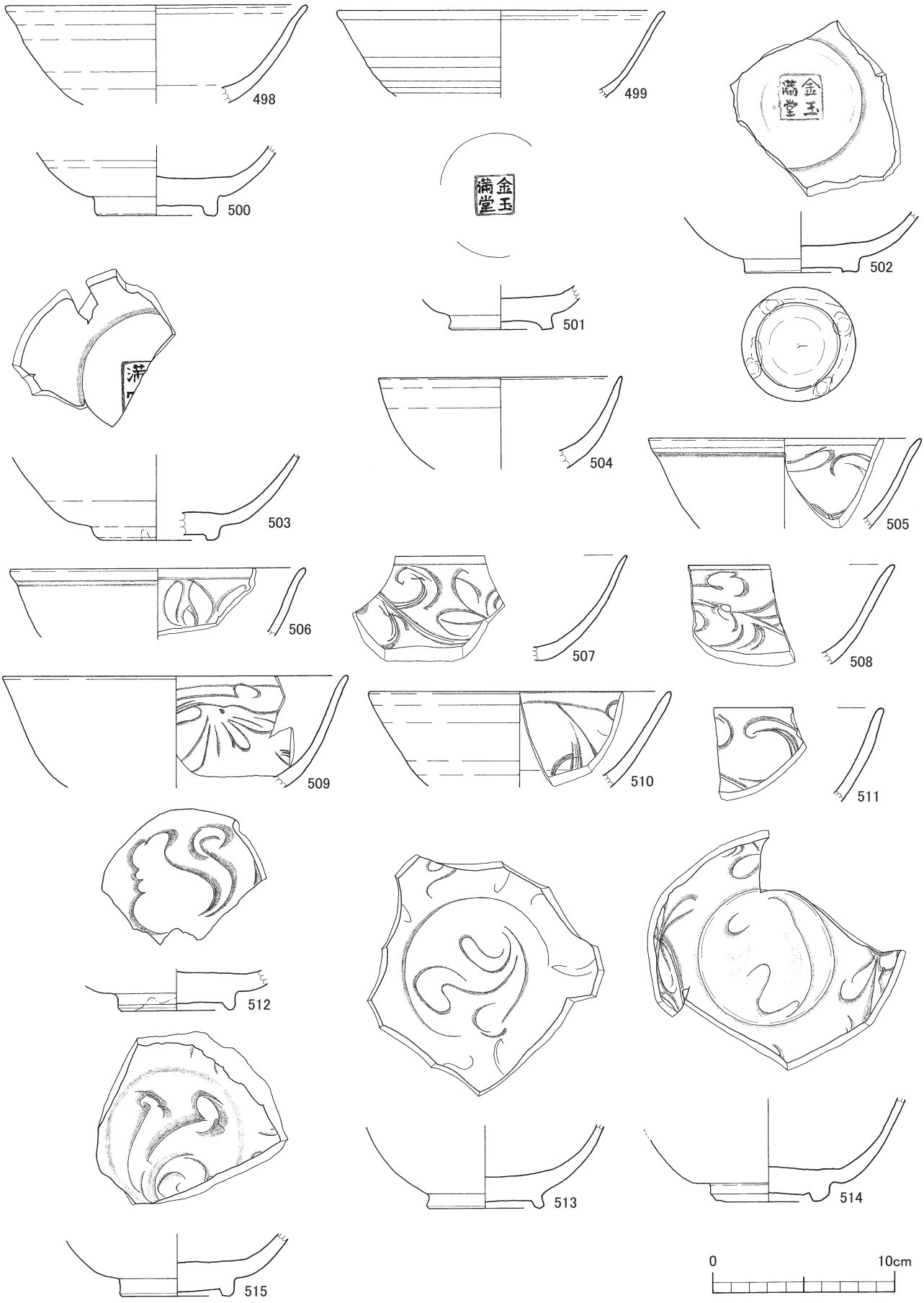
454は口縁部内面に目跡の残る破片で耳壺か水注の判別ができない。455は３条の縦溝がある把手の付根部分である。胎土と釉の質感より444と同一産地の可能性がある。456は良好な状態で復元できた資料である。胎土は灰白色で，光沢のないオリーブ黄色の釉が掛かる。口縁部は「く」字形に外反し，頸部は下方が開き胴部との境に小さな段をつくる。段の直下にある注口部分は比較的短いものである。胴部に貼り付けられた把手には幅５～６mm の溝が縦に２本入る。頸部から胴部内面にはロクロ目が明瞭に残り，胴部外面の中下位にヘラ削りを行う。458は注口部である。光沢のある暗褐色の釉が内外



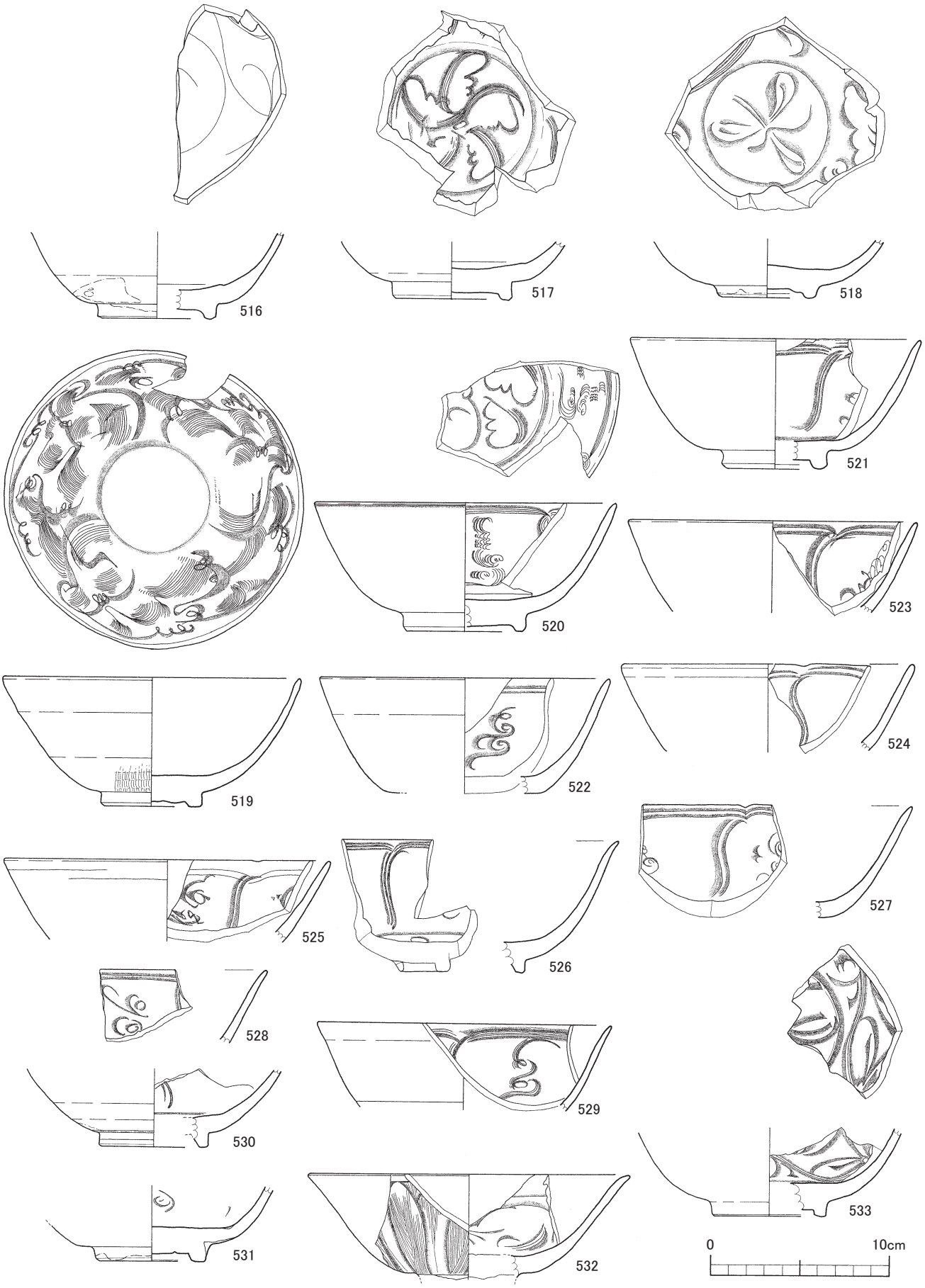
第168図　中世遺物（20）輸入陶器鉢



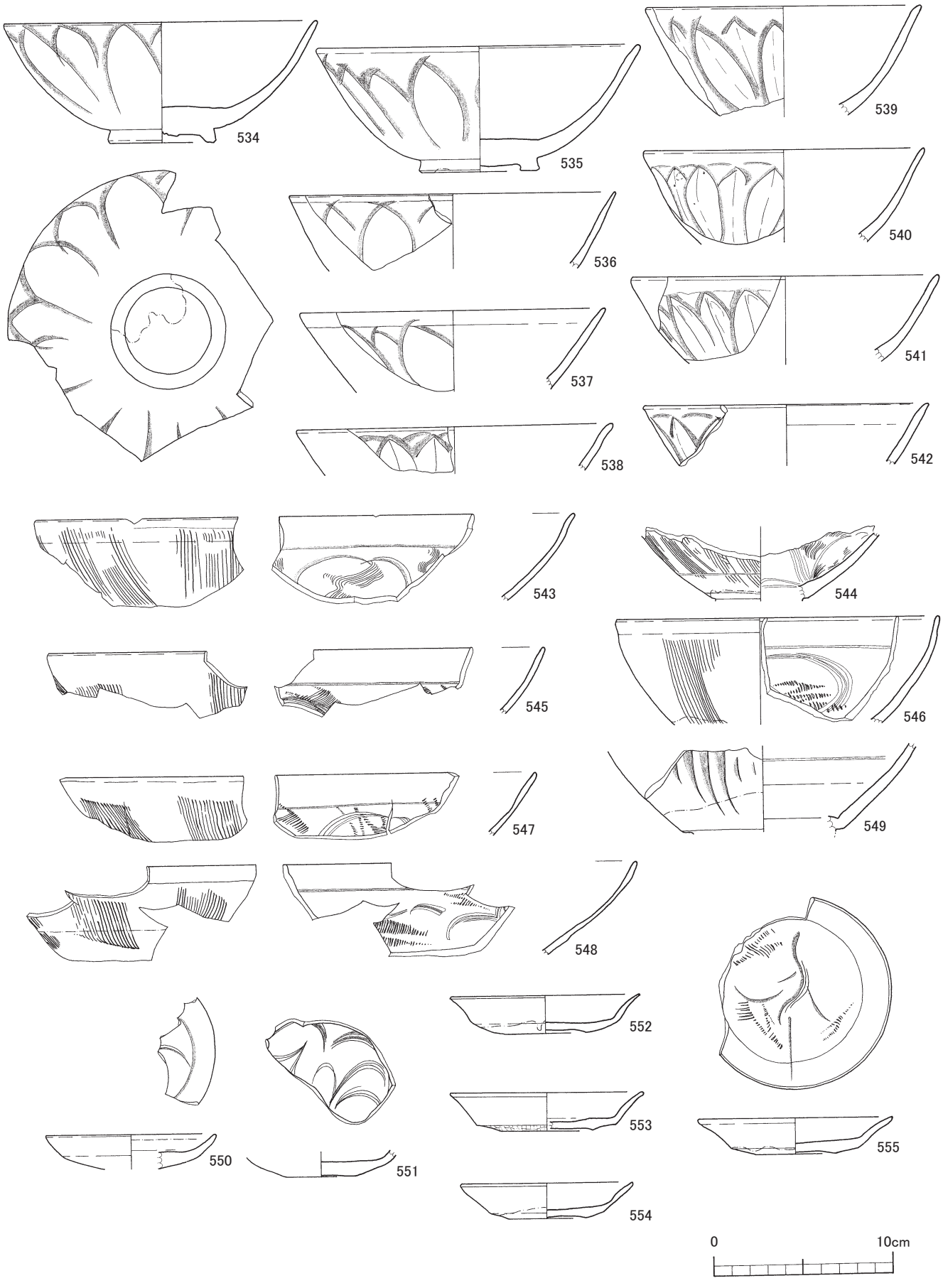
第169図　中世遺物（21）輸入陶器甕等



第170図　中世遺物（22）青磁



第171図　中世遺物（23）青磁



第172図　中世遺物（24）青磁

面に施される。根本の外径は約3.4mm である。459は３条の縦溝がある把手部分である。胎土と釉の質感より444や455と同一産地の可能性がある。

盤・小盤（第166図460～466）

460～463・466の釉調は黄釉で，内面全体と口縁部外面に施釉され，胴部上位から底面は露胎となる。口唇部の釉は施釉後，拭き取られている。胎土は粗く，白色粒を多く含む。これらは同一産地であると思われる。

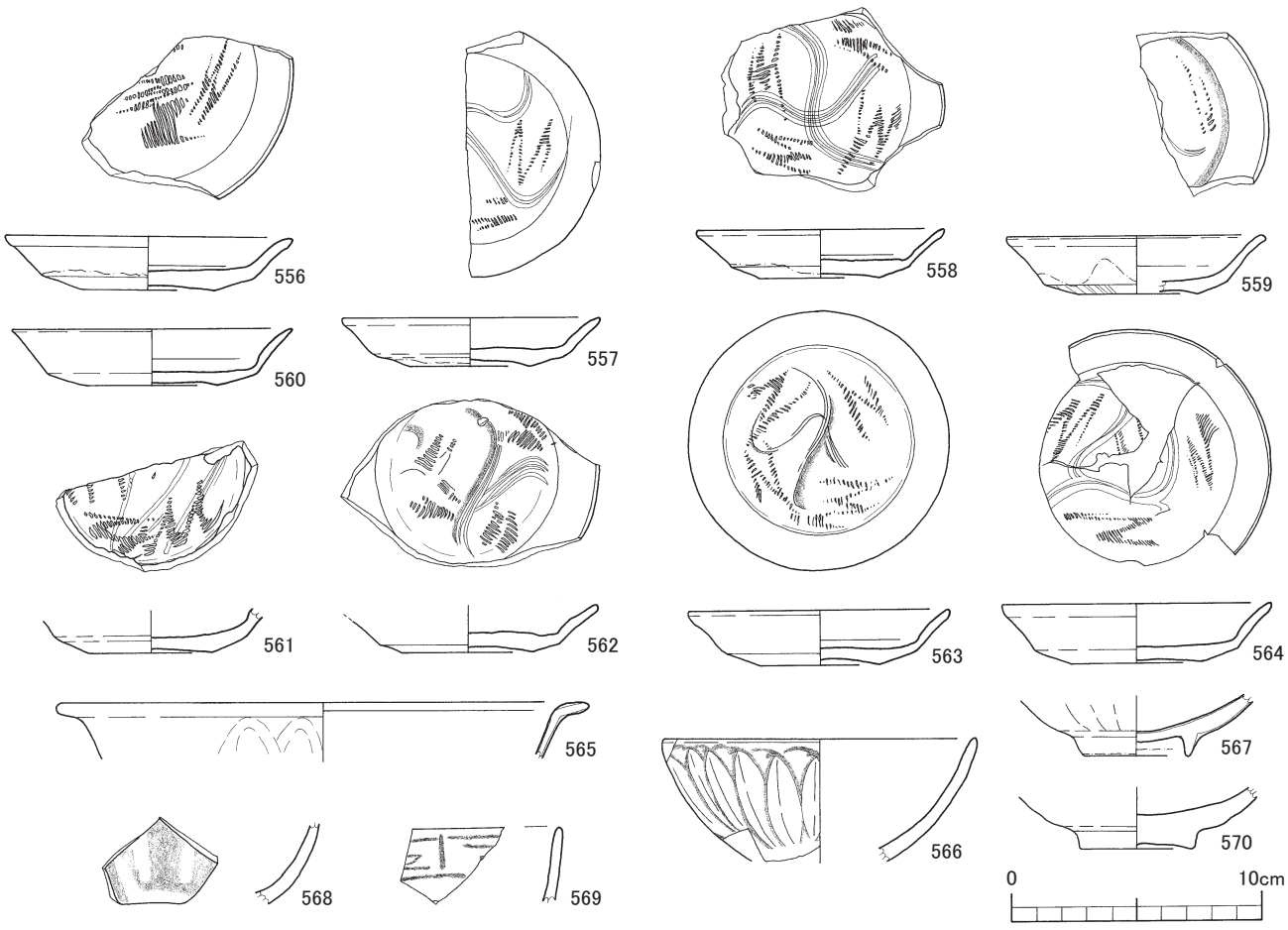
460の口縁部は肥厚しており，断面菱形に近い形状を呈する。内面に鉄絵を有する。462と463も内面に鉄絵を有する。晋江磁竈窯産と考えられ，12世紀に編年される。464の口縁部はＬ字形を呈し，内面に目跡が残る。465と466は口径が20cm 未満の小盤である。465の外面は露胎で口唇部と内面に赤色顔料を塗布し，その上より内面に釉がかけられている。

鉢（第167図467～第168図486）

20点を図化した。５種類に細分類が可能と思われる。胎土は粗いが堅緻で，白色粒等を多く含む。467～470，472～474は口縁部内面の突起が一条あり，口縁端部が内面にせり出し，二条の突起に見える。467～471と474～476には灰白色の釉が胴部上位に掛かっていた思われるが，殆ど剥がれている。475は他器種の可能性も考えられる。476は内外面あばた状のくぼみが見られる。477と478は浅黄色の釉が掛かり，最大径が胴部上位にある。480～484の胴部下位はヘラ削りを行い，碁笥底風の底部を有している。486は口縁部を肥厚させ，「ハ」字形に外側に開く。口縁部外面には目跡が残る。推定で９～12か所と思われる。内外面に褐釉が掛かる。溝状遺構15号内遺物の46と同一個体の可能性がある。

甕その他（第169図487～497）

胎土は粗く，白色粒等を多く含む。487と494は口縁部が二叉に分かれて断面がＹ字形を呈する甕の口縁部と胴部である。487の口縁部外面には斜位に押線が入る。494は胴部の下位である。内面に同心円状の当て具痕が残る。488と490は断面がＴ字形を呈する甕の口縁部である。口縁部上面と内面は灰色釉の上に暗オリーブ釉が一部に掛かる。489の口縁部は内側に屈折し外面に稜線をつくる。口縁部の釉は拭き取ってあり，内面に同心円状



第173図　中世遺物（25）青磁

の当て具痕がわずかに残る。491と492は胴部中位である。外面は釉を数回流し掛けしてあり，内面に同心円状の当て具痕が残る。495と496はＹ字口縁甕かＴ字口縁甕の底部であると思われる。外面には浅黄色の釉がわずかに掛かり，外底面には砂の付着が見られる。495の内底面には釉が溜まっている。497はサヤ鉢の底部付近と考えられる。穿孔部と考えられる抉りが３か所確認できる。時代は不明であるが，出土層より中世遺物として掲載した。古代須恵器の円面硯の台部分である可能性もある。

青磁

龍泉窯系青磁Ⅰ類は12世紀中頃から後半，Ⅱ類は13世紀前後から前半，Ⅲ類は13世紀中頃から14世紀初頭前後に編年されるものである。同安窯系青磁は12世紀中頃から後半に編年されるものである。同安窯系青磁は胎土は粘性が強く，硬質である。焼成良好品の釉は透明なガラス質で光沢がある。

龍泉窯系青磁碗Ⅰ類（第170図498～第171図533）

口縁端部は丸く肉厚で直口か僅かに外反となる例が多く，胴部下半の腰は張りがある。高台は断面四角形か五角形が多く，高台内部は削りが若干浅く，このため底部は肉厚となる。口縁部直下から底部外面までヘラ削りを行う。また畳付から高台内面は露胎となっている。

・龍泉窯系青磁碗Ⅰ－１類（第170図498～504）

内外面は無文である。504は小振りの小碗である。501～503は「金玉満堂」のスタンプを持つ。502の畳付には目跡が四か所ある。

・龍泉窯系青磁碗Ⅰ－２類（第170図505～第171図518・533）

器形はⅠ－１類と同様である。内面に片彫劃花文を有するが，手の込んだものから，比較的単純化されたものまである。516は特に焼成不良であり釉薬は白味を帯びている。

・龍泉窯系青磁碗Ⅰ－３ａ類（第171図519）

優品である。内面に片彫りで草花文や飛雲文を入れ，空白部を櫛目文で埋めている。胴部外面下位に回転ヘラケズリ痕が認められる。

・龍泉窯系青磁碗Ⅰ－４類（第171図520～531）

櫛刀によって２本から５本単位の形彫で内面を分割し，その中に飛雲文を入れる。見込みに劃花文を有するものもある。525と527は口縁部に輪花を有する。

・龍泉窯系青磁碗Ⅰ－６類（第171図532）

532は胴部外面に蓮弁文と縦の櫛目を入れ，内面に片彫劃花文を施す。

龍泉窯系青磁碗Ⅱ類（第172図534～542）

外面に蓮弁の文様を有するものである。口縁端部は直口か僅かに外反となる。534～537は片彫蓮弁文で，弁の中心に稜はない。538～542は弁の中心に稜をなす，いわゆる鎬蓮弁文である。畳付から高台内面は露胎である。

同安窯系青磁碗Ⅰ類（第172図543～548）

胴部はやや内湾気味に立ち上がり，器壁は薄い。外面に細かい縦の櫛目文を有する。内面上位には沈線があり，下位にヘラ状施文具による花文と櫛の先端で押したジグザグ状の点描文を有する。543と546の胴部外面下位は露胎となっている。

同安窯系青磁碗Ⅲ類（第172図549）

胴部外面に幅広の櫛目文を施し，下位は露胎となっている。内面は無文である。

龍泉窯系青磁Ⅲ類Ⅰ類（第172図550・551）

胴部中位で屈曲し，口縁部は直口する。後述の同安窯系青磁Ⅲより器壁がやや厚く，区別できる。551の底部外面は焼成前に釉を掻き取っている。

同安窯系青磁Ⅲ類Ⅰ類（第172図552～第173図564）

口縁端部は薄く尖り気味で，胴部中位で屈曲し，外側に反転している。ヘラ状施文具による文様と櫛の先端で押したジグザグ状の点描文を有するものが多い。552～559は胴部外面下半以下には施釉していない。560～564は全面施釉された後，底部外面の焼成前に釉を掻き取っている。これらは２種類に細分が可能である。

龍泉窯系青磁小盤Ⅲ類（第173図565）

口縁端部は外側に屈折し，平坦面を形成する。外面には鎬蓮弁文を施す。厚めの釉がかかる。

龍泉窯系青磁小碗Ⅲ－２ｃ類（第173図566・567）

胴部外面に鎬蓮弁文を施す。色調が碗Ⅱ類より明るい緑色である。

龍泉窯系青磁碗上田ｃ類（第173図568・569）

口縁部の外面に雷文帯を有するものである。569は口縁端部が直口する。

龍泉窯系青磁小碗Ⅰ－１’ａ類（第173図570）

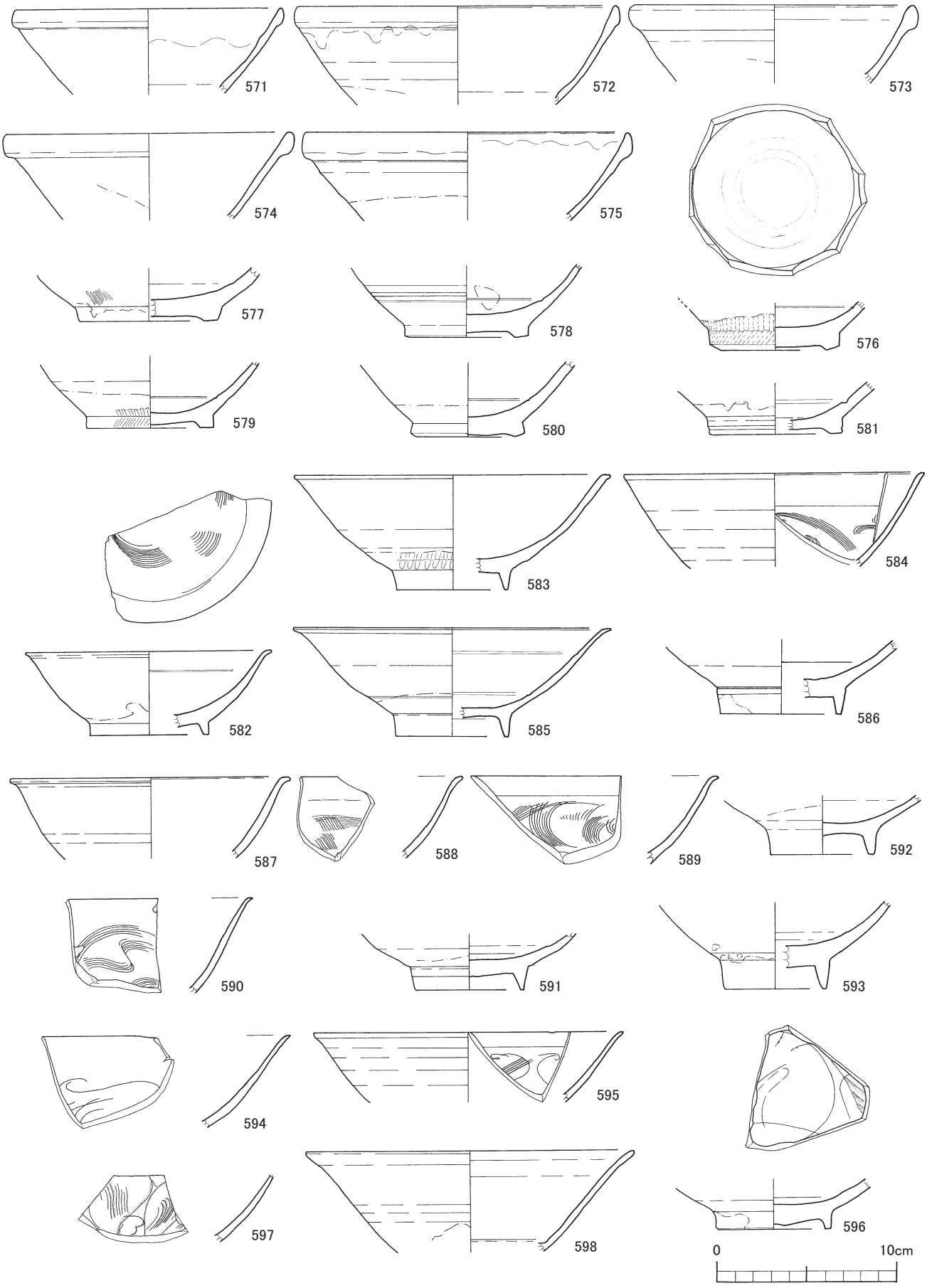
柱状の高台を有し，胴部の腰がやや張り，外底面は露胎である。高台内面の抉りを行わない。Ｄ期に該当する。

白磁

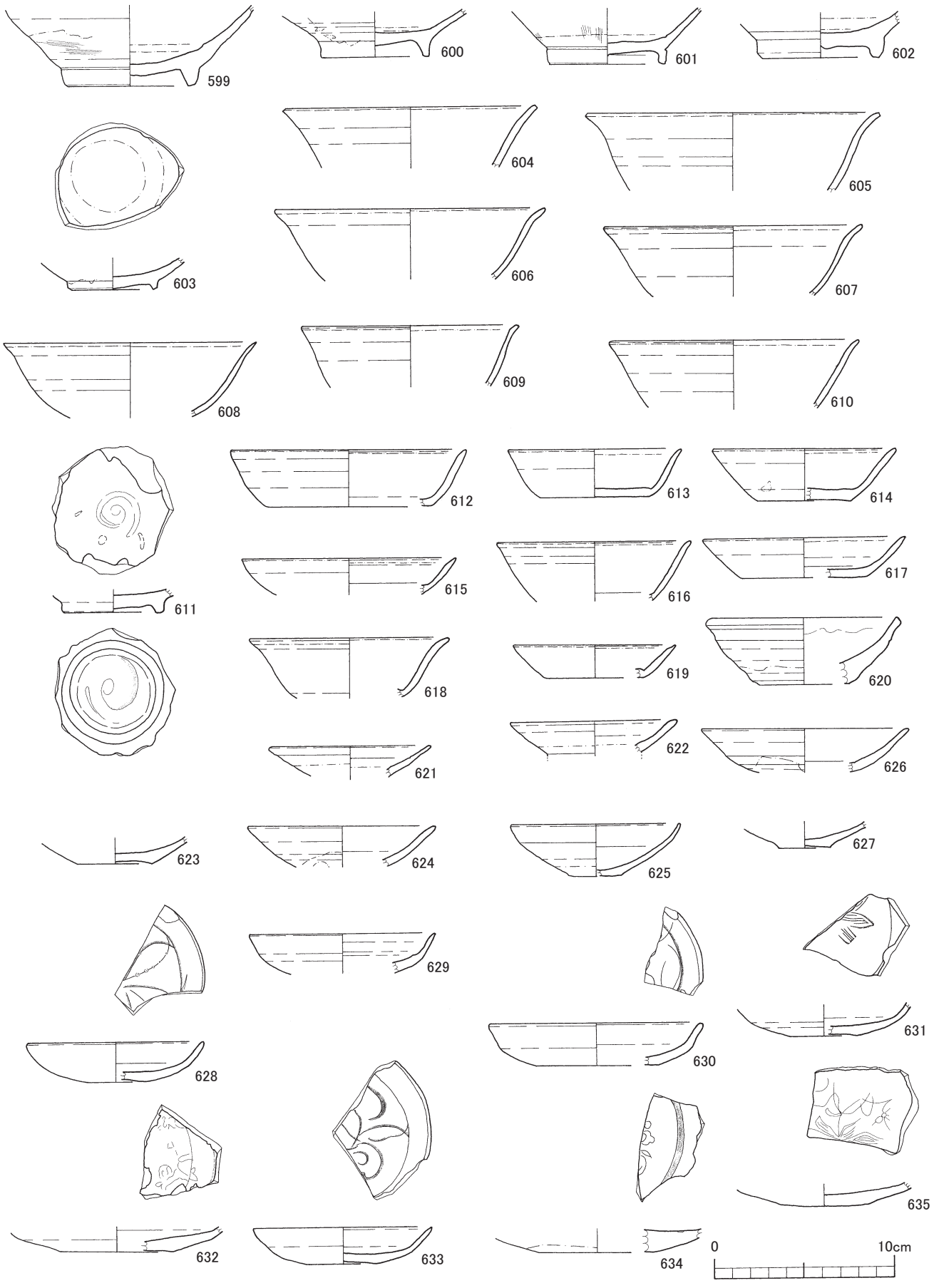
白磁Ⅱ類は11世紀後半から12世紀前半，Ⅳ類は11世紀後半から12世紀前後，Ⅴ類は11世紀後半から12世紀後半，Ⅵ類は11世紀後半から12世紀前半，Ⅶ類は12世紀中頃から後半，Ⅷ類は12世紀中頃から後半，Ⅸ類は13世紀中頃から14世紀初頭前後に編年されるものである。

白磁碗Ⅳ類（第174図571～581）

玉縁状の口縁部を有し，体部の器肉が比較的厚いものである。胴部の下位は露胎し，回転ヘラケズリ痕を残すものが数点認められる。高台は幅広で内面の削りが浅い。個体差が大きく，仕上がりが上手のものから粗雑な



第174図　中世遺物（26）白磁



第175図　中世遺物（27）白磁

ものまである。胎土についても同様である。釉薬は厚めにかかり，特に571・572，575は口縁部の内外面に釉垂れがある。576は見込み内の沈線に沿って意識的に打ち欠いている可能性があり，「メンコ」などの転用品として使用された可能性もある。578の胴部下位の露胎部分にはロクロ目が残る。

白磁碗Ⅴ類（第174図582～593）

口縁部を水平あるいは水平に近い角度で外反させ，高台は細く高く直立する。胴部の下位より露胎するものが多い。内面は無文のものと櫛目文を施すものがある。586は細く高く直立する高台を有し，体部と高台の境付近まで施釉される。内面は無文である。胎土は硬くて緻密である。583は胴部下位の露胎部分に回転ヘラケズリ痕を残す。Ⅳ類とⅤ類は閩南沿海系白磁と考えられる。

白磁碗Ⅶ類（第174図594～597）

体部は高台より直線的に延びてロート状を呈する。体部上半は外方へ開き，口縁部はわずかに外反する。高台はⅤ類より低い。本遺跡の出土数は碗の中では比較的少ないほうである。594と595は口縁部に輪花を有する。596は焼成不良であり，釉薬に透明感がない。

白磁碗Ⅷ類（第174図598～第175図603）

見込みの釉薬を環状に掻き取ったものである。高台はⅤ類より低く，Ⅶ類に類似する。体部は斜上方に直線的に開き，口縁部は外反する。胴部の下位より露胎する。599は胴部下位の露胎部分に轆轤による強いナデ痕があり，601は回転ヘラケズリ痕を残す。縦白堆線を有するⅧ－４類は包含層では確認できなかった。

白磁碗Ⅸ類（第175図604～611）

口縁部の釉を掻き取った，いわゆる口禿の碗である。体部の器肉が比較的薄い。口縁部が外反し，灰白色の磁胎にわずかに青色を帯びた白色釉が薄めにかかる。605は焼成不良でややくすんだ発色である。611は高台付近で轆轤による調整痕が残る。青みを帯びた釉薬が畳付・高台内にも施釉される。高台付皿の可能性がある。

白磁皿Ⅸ類（第175図612～619）

白磁碗Ⅸ類と同様に口縁部の釉を掻き取った，いわゆる口禿の皿である。わずかに青色を帯びた白色釉がかかり，胎土は硬質である。613は底部外面の釉を板状の工具で伸ばしていると思われる。総体的に口径・器高共に幅がある。

白磁皿Ⅱ類（第175図620）

口縁部が玉縁状をなす。高台は低く内面の削りがほとんどない。１点のみの出土。

白磁皿Ⅲ類（第175図621・622）

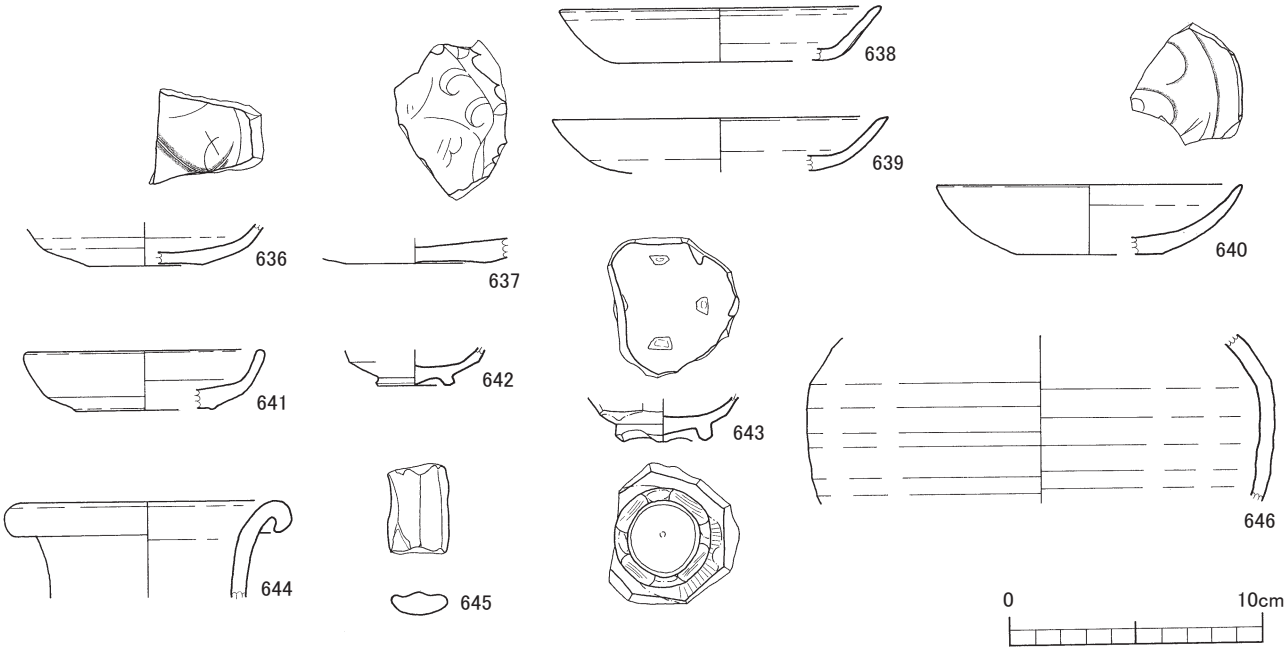
口縁部は直行縁もしくはわずかに外反する。見込みの釉薬を環状に掻き取ったものである。口径が９mm～9.2mmで小皿の部類に入ると思われる。胴部の下位より露胎する。

白磁皿Ⅴ類（第175図623）

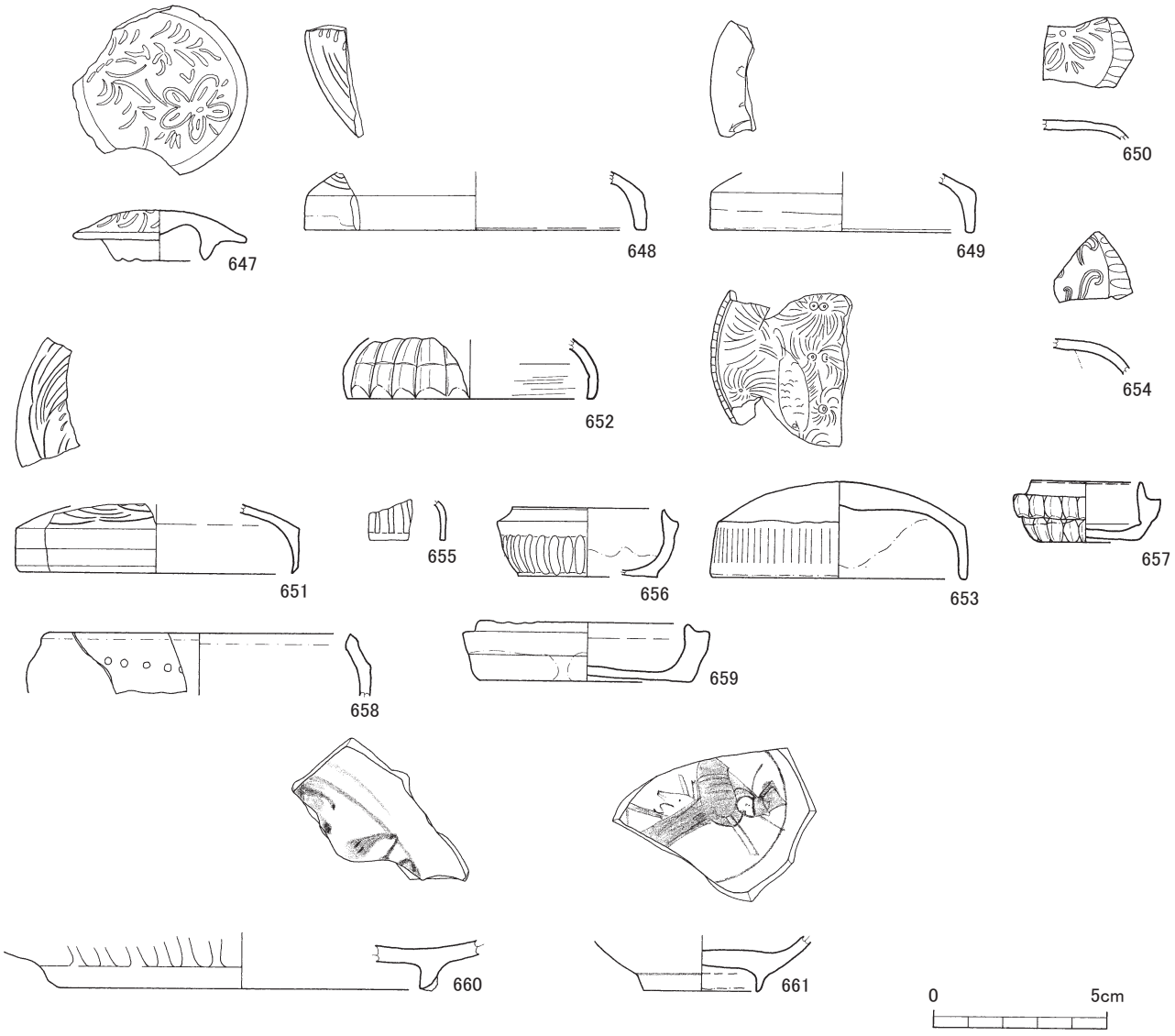
底部だけで全形が明らかでないが，Ⅴ類の可能性がある。全面施釉の後，底部外面の釉を削り取っている。

白磁皿Ⅵ類？（第175図624～627）

直口縁のものと口縁部が内湾するものがある。胴部の下位より露胎する。626の釉は黄色味が強く，青磁のような質感を帯びている。627はやや上げ底状になっている。



第176図　中世遺物（28）白磁



第177図　中世遺物（29）青白磁・青花

白磁皿Ⅷ類（第175図628～633・635第176図636～641）

Ⅸ類と共に白磁の皿の主体をなすものである。底部の釉は施釉した後に削り取る。628，630～637は見込みに草花文の凹印スタンプを施す。634のみG期に該当するものか。

多角形白磁坏（第176図642・643）

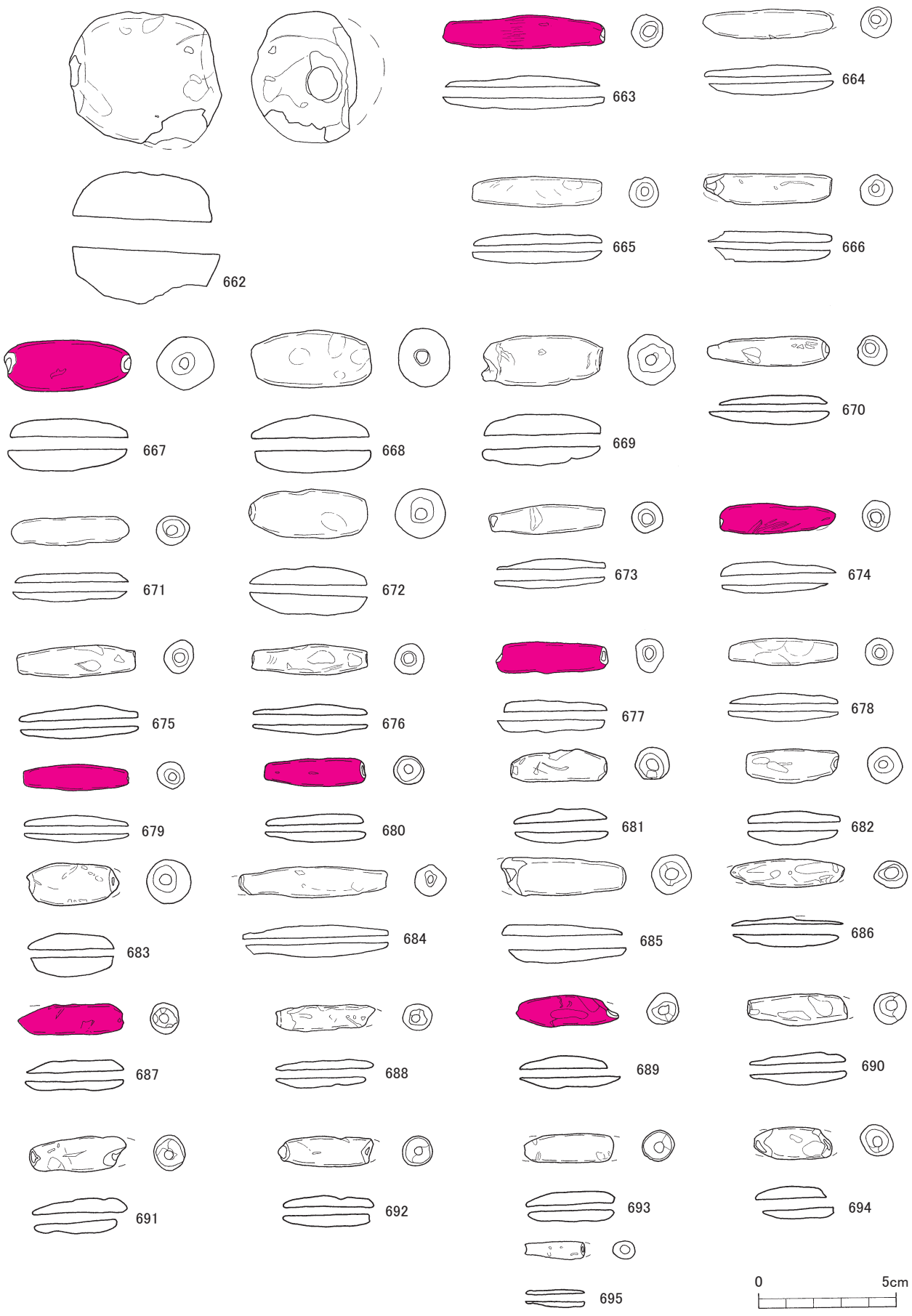
642・643は胴部が八角形を呈していると考えられる白磁坏である。時期は14～15世紀である。643は高台が四か所抉られており，接地部分にのみ施釉されている。見込みに目跡が四か所ある。

その他の白磁（第176図644～646）

644は丸く折り曲げられた四耳壺の口縁部である。645は水注の把手，646は水注か壺の胴部の屈曲部分であるが共に全形は明らかでない。

青白磁（第177図647～659）

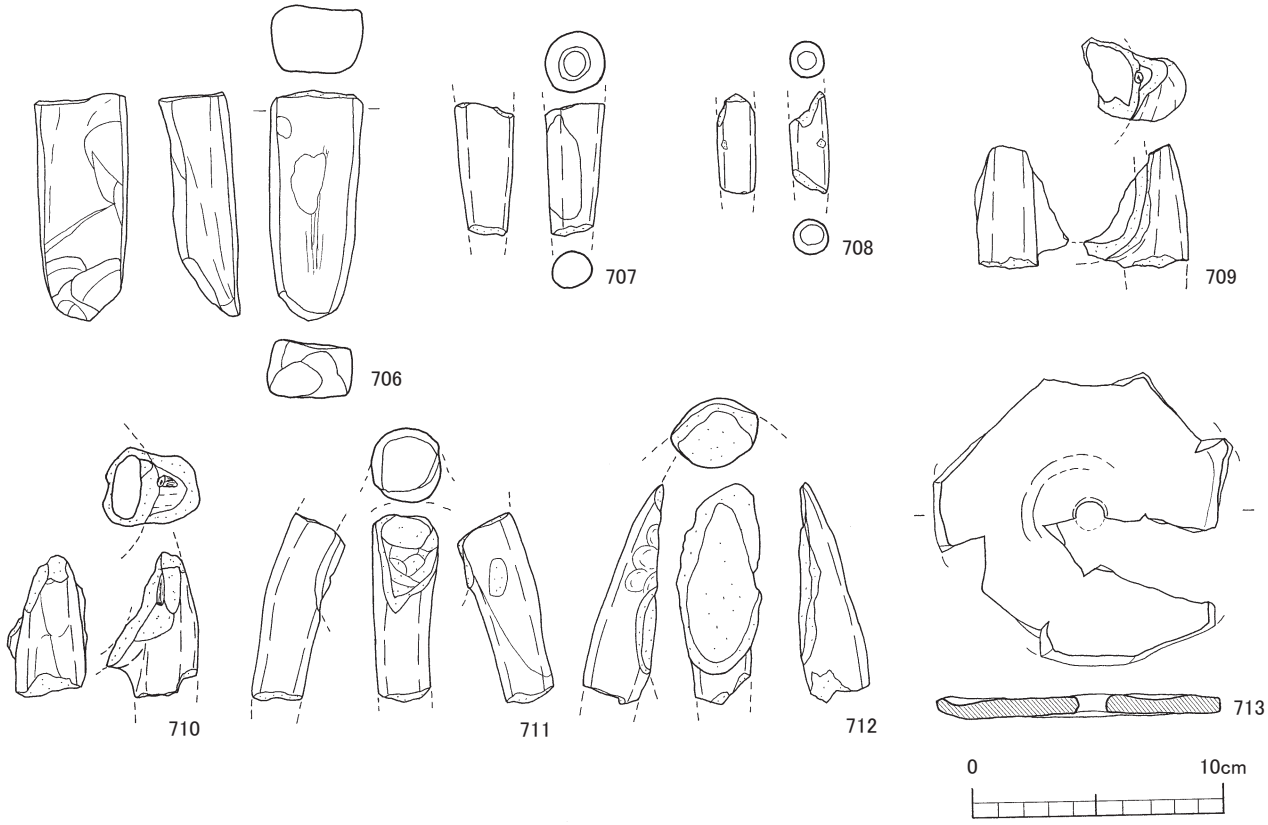
647は直径５cm を測る小壺の蓋である。上面に草花文を型押ししている。648～655は型造りによる合子の蓋である。天井部には草花文が型押しされ，側面には菊弁文を有するものと，無文のものがある。内面は露胎となるものが多い。650は12世紀前半の経塚に見られるものと類似しており，福建浦城大口窯に報告がある。653は褐釉が施され，複雑な構成の文様が型押しされる。654は双鳳文であると思われる。656～659は型造りによる合子の身である。側面には菊弁文を有するものと，無文のものがある。胴部下半と受け部は露胎となっている。659の底部外面は焼成前に釉を掻き取っている



第178図　中世遺物（30）土製品



第179図　中世遺物（31）土製品



第180図　中世遺物（32）土製品

青花（第177図660・661）

２点図化した。660は発色は悪いが，景徳鎮窯系の皿であると思われる。14世紀～15世紀の所産と考えられる。文様は不明である。高台畳付に重ね焼きの跡が残る。661は景徳鎮窯系の端反りの小碗であると思われる。見込みには人物文が見られる。13世紀後半～14世紀前後の所産と考えられる。

土製品

土錘（第178図662～695）

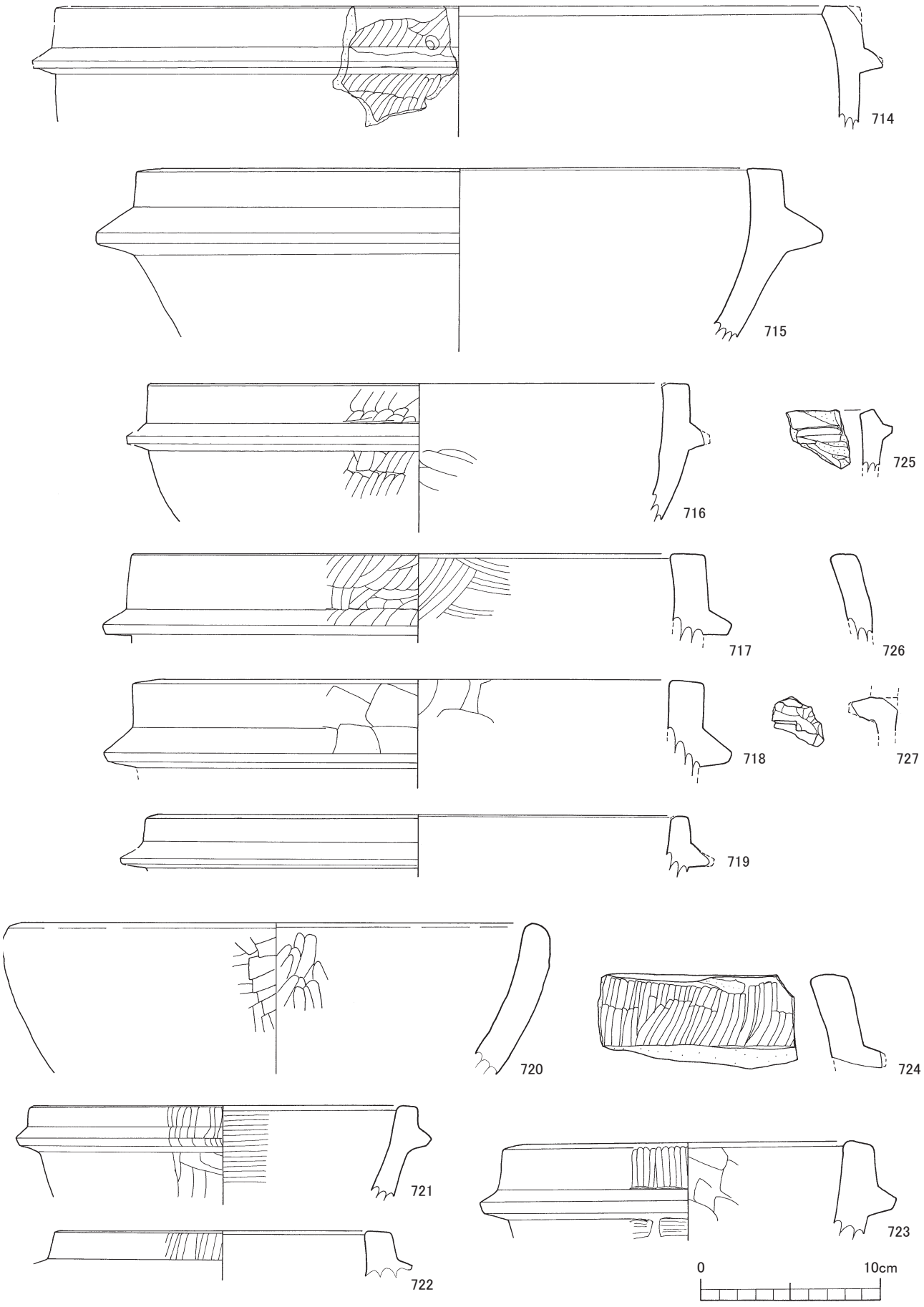
所属時期は明らかでないが，出土層位により中世遺物として掲載した。土錘は全て紡錘状のものに孔を貫通させた管状土錘である。赤色顔料を表面に塗布されてあるものが８点。662以外では長さは最大で5.9cm，径は最大で2.1cm 内に収まる。662は最大の径を測るもので，他の土錘とは違う用途が想定される。695は胴部の膨らみがない。

脚付土製煮炊具（第179図696～第180図712）

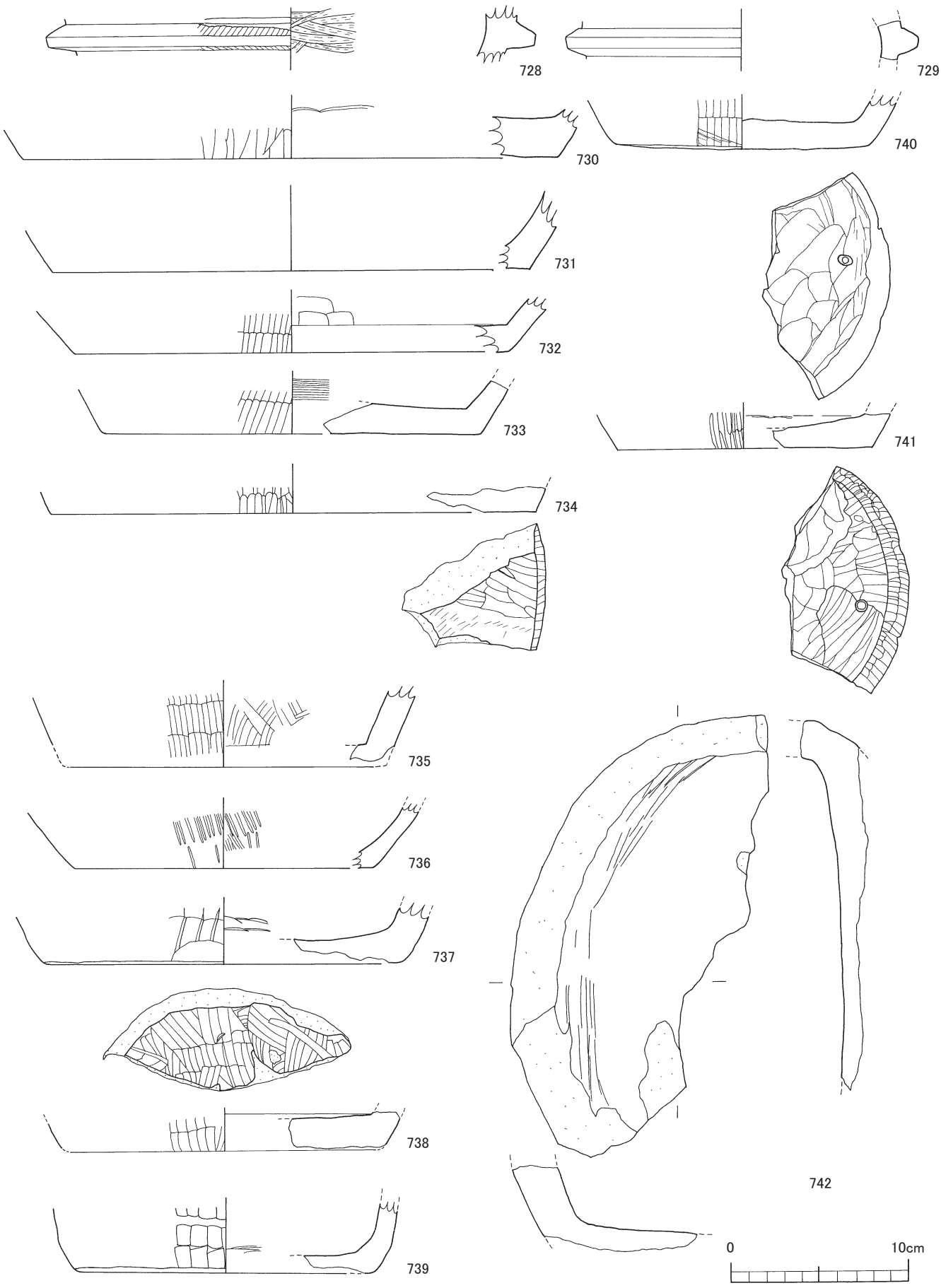
焙烙の把手部分に類似する，土師質の棒状を呈した土製品が出土したが，①鍋様の本体部分に付随して棒状のものが貼り付けられている。②断面形状は四角形と円形の両方があるものの，長軸方向が緩やかな孤を描いている。③上部が太く，下端の先端部分が若干尖っている。という理由により脚付きの鍋の一部と判断し，脚付土製煮炊具とした。696～706は断面の形状が四角形を呈しているものである。696は煮炊具の本体は欠損しているものの脚部のほとんどと考えられる部分が残存している。煮炊具本体に近い上部は幅も厚さも大きいが，下部に向かうに従って細くなり，先端は鈍い四角形となっている。この脚は，煮炊具本体へは先端部分が内向するように取り付いていたものと考えられる。698～702は上部から中部辺りまでの部分と考えられ，697，703～707は先端部かそれに近い部分であると考えられる。706及び707の先端はやや尖るのではないかと考えられる。707～712は断面の形状が円形を呈しているものである。709と710は本体の煮炊具部分が一部残存しているもので，これから判断すると煮炊具の中央よりもやや下位に，本体に対してほぼ直に脚を取り付けていたことが想定される。脚部の上部には本体側の中央部かその近くに直径４mm 程のストロー状の空隙部があり，また，脚の上端は本体になじませるように半円錐形状になっている。711と712は脚部の上部であると考えられるが，接合に問題があったことが想定され，煮炊具本体から剥がれるように取れたものと思われる。707と708は先端部分に近いのものと考えられる。

穿孔土製品（第180図713）

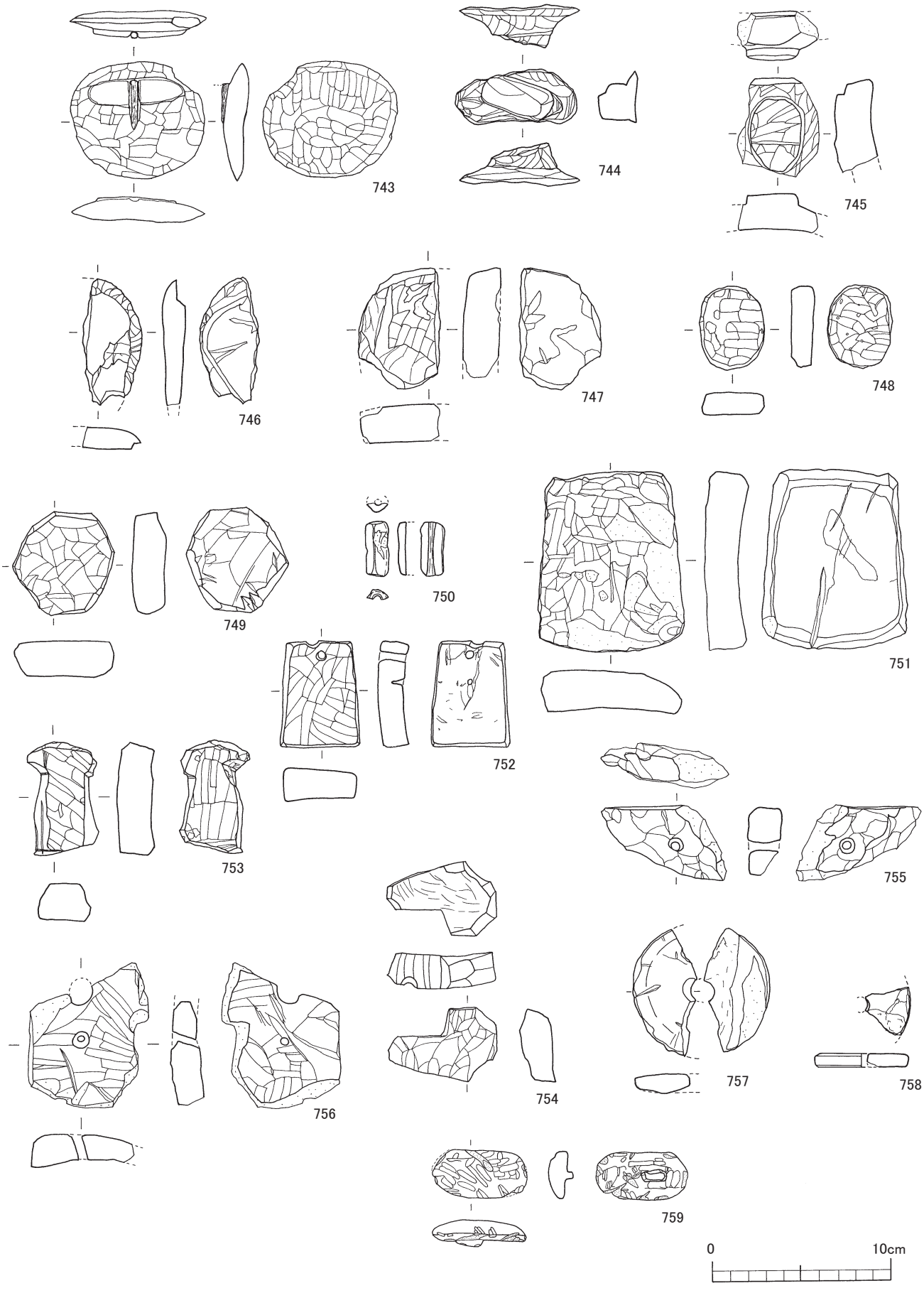
外面赤色の坏の底部を転用しているが，紡錘車の可能性があるが，ここでは穿孔土製品と位置付けておきたい。



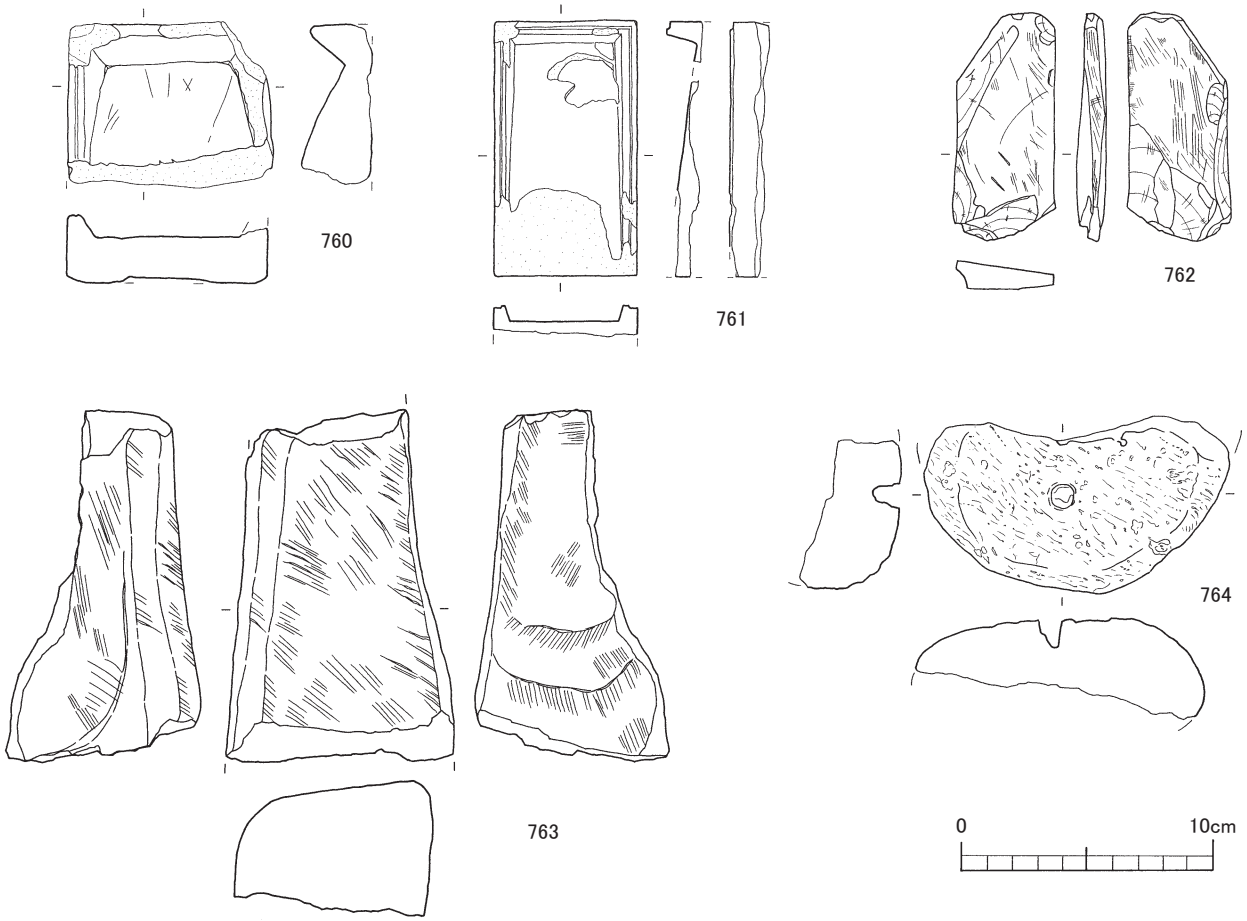
第181図　中世遺物（33）滑石製品



第182図　中世遺物（34）滑石製品



第183図　中世遺物（35）滑石製品



第184図　中世遺物（36）石製品

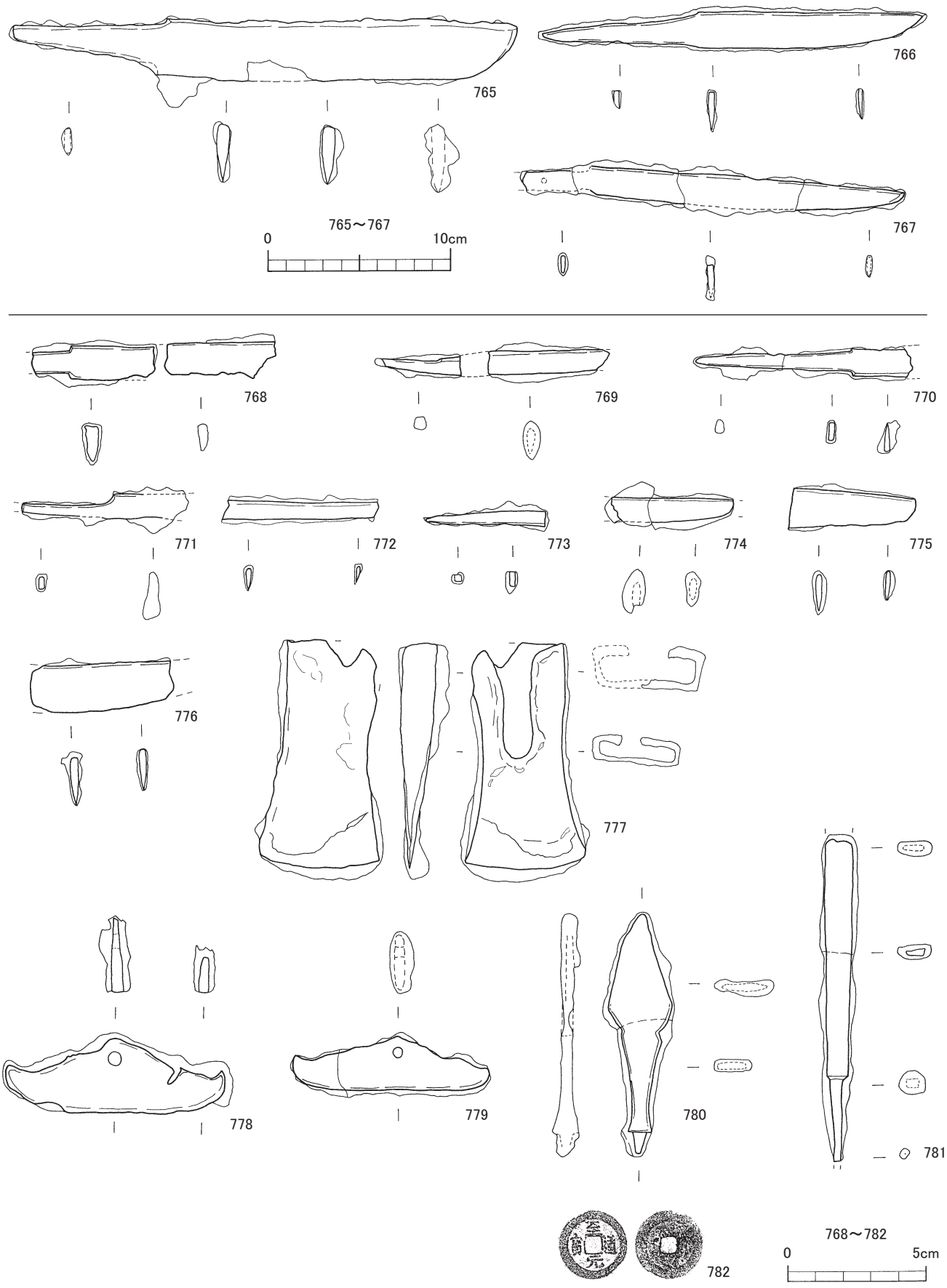
滑石製品

滑石製石鍋（第181図714～第182図742）

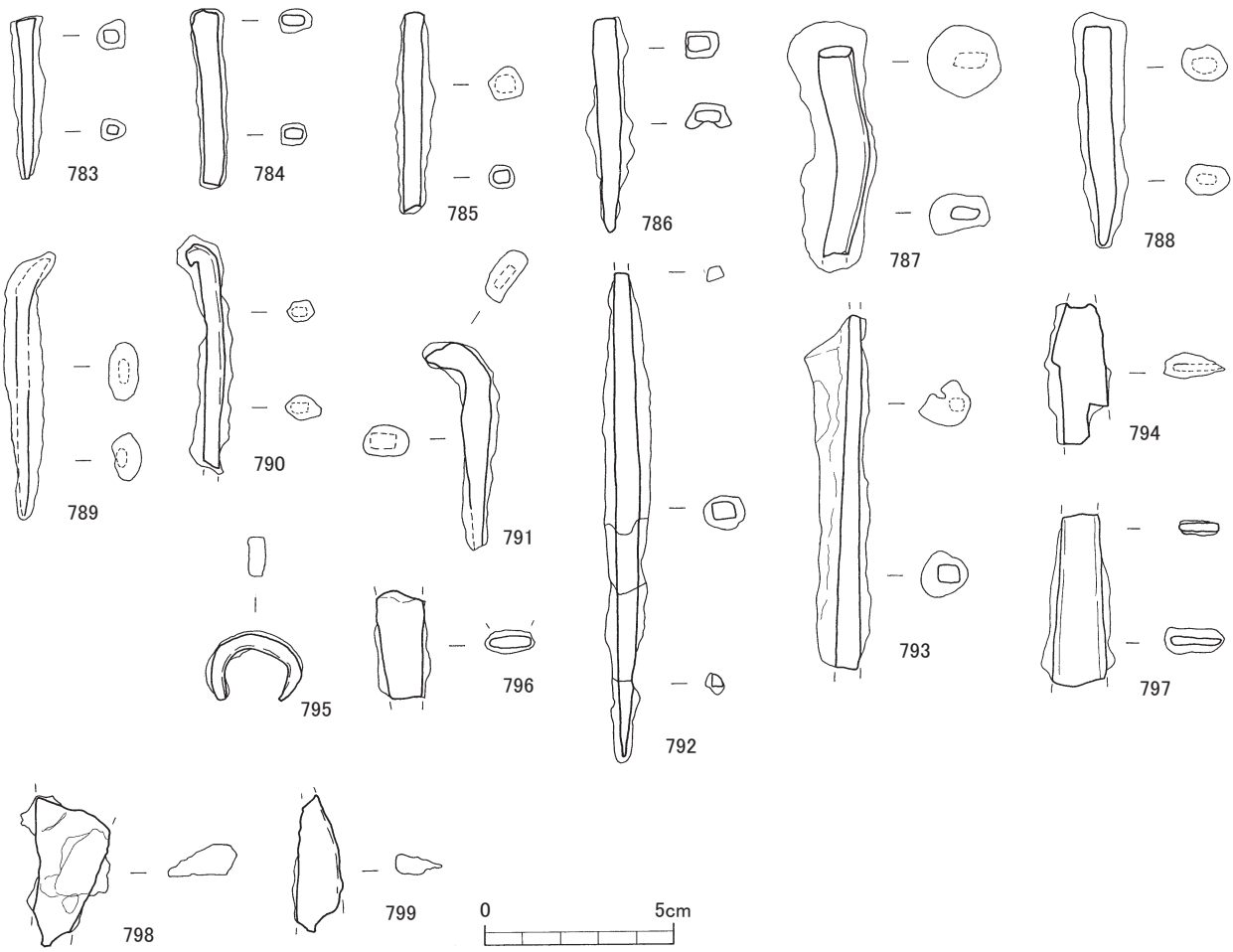
持躰松遺跡からは，多くの滑石製の石鍋やその転用品，加工品が出土している。

714～742は滑石製の石鍋で，714～727は口縁部，728・729は胴部，730～742は底部である。

714～718は口唇端部がほぼ平らで，外面では下部に向かってほぼまっすぐに下りるものである。714や717のように内面で一旦外向きに膨らんだ後に内向きとなるものと，715・716，718のようにほぼそのまま内向きとなるものとが見られる。鍔の形状や長さもさまざまで，715は比較的長く張り出す。器面調整（仕上げ）のケズリ痕もさまざまなものが見られ，外面では714や716のように鍔の上下で同様に斜め方向に細かな調整が短く施されるものや，718のように幅の広い調整が横あるいは斜め方向に短く施されるものなどが見られるほか，内面にも716～718のように調整痕の幅や方向などに差異が見られる。719～724は口唇端部の両角が714～718よりも丸味を帯びた形状を呈するもので，722，724，726は下部が一旦外向きに膨らんだ後に内向きとなるもので，それ以外はほぼそのまま内向きとなるものである。725は口縁部に突起を有するもので，把手と考えられる。714～720は一般的な石鍋の中でも割合に大型のもの，721～723は小型のものである。724～727は小片のため大きさは不明である。一般的に器壁の厚いものは大型となるものが多い。器面の調整もさまざまなパターンが見られる。730～742の底部のうち，730～734，736，740・741は安定した平底の端部が明確な稜を持つもの，737，739は丸味を帯びるものであり，738は底面が欠損しているためいずれか不明なものである。730～733は一般的な石鍋の中で割合に大型のもの，735～741は小型のものである。742は底面が正円形とはならず，楕円形になると考えられる。741の底部には穿孔が見られることから，石鍋の破損品を温石として転用した可能性があり，穿孔の周囲には紐擦れの跡と思われる痕跡が残っている。



第185図　中世遺物（37）鉄製品



第186図　時期不明遺物　鉄製品

石鍋再加工品（第183図743～759）

743～745は石鍋の把手部分を利用したものであるが，使用目的は不明なものが多い。743と745には釘が残存している。746～749は円形～楕円形に加工したもので，746と747には上部あるいは下部に段を設けており，小さな蓋のようにも感じられる。748と749は「メンコ」のようにも見える。750は管状に加工したものである。751と752は長方形に加工したもので。752の上部には穿孔が見られる。753は頸部以下を細くすることによって頭部を作り出している。754は石鍋の把手部分を利用した加工品，755と756はほぼ中央部に穿孔が見られるものである。757と758は石鍋の破損品を活用した紡錘車である。759の用途は不明である。

石製品（第184図760～764）

760と761は砂岩製の硯である。760は半分近く欠損している。短辺は7.9cm を測る。761はわずかに赤味を帯びる石材を使用している。底面の全てと上面の一部を欠損している。長辺は9.9cm，短辺は5.7cm，海の深さは1.2cm を測る。760と比べて縁辺加工等が丁寧に施されている良品であるといえる。762は粘板岩製の砥石である。半分近く欠損しているので，全体の大きさは明らかでないが，小型の携帯用と想定される。表面と裏面および側面に擦痕がある。763は砂岩製の砥石である。上面と両側面に擦痕がある。764は軽石製品である。半分近くが欠損しているので，全形が明らかでないが，穿孔具によると思われる未貫通の穴がある。

鉄製品等

包含層から鉄製の工具類，武器類その他の雑具類と古銭が出土している。また，中世の包含層から出土しているものの，形状だけでは時期について判別できないものも併せてここに掲載した。

短刀（第185図765～768）

最大長25cm 以上で身幅が広いものを短刀Ⅰ類（765）とし，最大長25cm 未満で身幅の狭いものを短刀Ⅱ類（766～768）とした。765は一部が腐食で失われているものの，ほぼ完形品であり，身部は19.3cm，茎部は８cm，重さ約167g を測る。腰刀として使われていた可能性も考えられる。766もほぼ完形品であり，身部は12.4cm，

茎部は8.4cm を測る。767は茎の一部が失われている。目釘穴が１か所確認される。768は欠損部分が多いので，全形は明らかではないが，身の幅からⅡ類に属すると考えられる。

刀子（第185図769～773）

短刀より小振りのものを刀子とした。いずれも関が明瞭な段を持つ。

その他（第185図774～782）

774～776は刃物片である。刃部幅からⅡ類に含まれる可能性がある。777は手斧形を呈する斧である。刃部はバチ形をなし，刃幅は約4.3cm を測る。柄部は厚く，両側を裏面に直角に折り曲げて柄を装着するための袋部をつくる。袋部の中空部分は上端より推定で4.5cm 程度まで達する。なお，777は遺物の保存処理中に原型が崩れてしまい，正確に復元できず，図面上での復元となったことを断っておきたい。778と779は火打金である。燧石などを衝撃させ発火させるものである。二等辺三角形の，二つの角が跳ね上がるような形状である。中央部上寄りに穿孔が認められる。13世紀以降のものと考えられる。780と781は鏃である。780は平根鏃である。全長8.8cm，最大幅2.6cm，重量13.82g である。781は丸根鏃である。身の先端が欠損しているので，全形は明らかでないが，全長は14cm 以内に収まると考えられる。茎の断面は方形を呈する。782は北宋の至道通寶である。西暦995年を初鋳年とするもので，文字は真書体である。

時期不明鉄製品（第186図783～799）

783～791は釘である。厚い錆に覆われ，全体形状が不明のものが多かった。792～797は用途不明の鉄製品である。792は棒状で，両端が先細りする形態である。795は１か所切れ目のある環状の製品である。797は最大幅1.6cm，厚さ３mm，残存長4.5cm の板状を呈する。楔の可能性も考えられる。798・799は用途不明の鉄片である。

表45　中世遺物観察表（１）

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		調整		備考
									外面	内面	外面	内面	
149	198	O-9	Ⅲb	土師器	椀	13.5	5.8	4.3	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	瀬戸内系土師質土器
	199	O-8	Ⅲb	土師器	椀	13.8	—	—	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	瀬戸内系土師質土器
	200	I-6	Ⅲb	土師器	椀	—	6.5	—	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	201	U-12	Ⅲb	土師器	坏	12.4	7	3.5	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	202	U-11	Ⅲb	土師器	坏	13.6	8.4	2.8	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	203	Z-12	Ⅲb	土師器	坏	13.6	10	3	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	底面に板状圧痕幅９㎜，外面にスス付着
	204	U-12	Ⅲb	土師器	坏	13.6	10	3.4	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	205	U-11	Ⅲb	土師器	坏	14.2	9	3.7	にぶい黄橙色	灰黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	—
	206	M-7	Ⅲb	土師器	坏	16.2	9.8	3.6	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	207	L-7	Ⅲb	土師器	坏	17.3	11.2	3.65	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ→指ナデ	—
	208	P-10	Ⅲb上面	土師器	坏	11	8.2	2.2	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	209	U-12	Ⅲb	土師器	坏	11.4	5.8	2.8	にぶい黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	内面にスス付着
	210	U-11	Ⅲb	土師器	坏	12.7	7.2	3.1	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	211	V-13	Ⅲb	土師器	坏	13.2	6.8	2.9	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	212	U-12	Ⅲb	土師器	坏	13.3	9.6	2.7	灰黄色	淡黄色	回転ナデ	回転ナデ	—
150	213	V-12	Ⅲb	土師器	坏	13.6	8	2.9	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	214	L-8	Ⅲb	土師器	坏	16	11	2.7	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	215	U-12	Ⅲb	土師器	坏	16.6	12	2.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	外面にスス付着
	216	U-12	Ⅲb	土師器	坏	12.2	8	2.9	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	217	U-11	Ⅲb	土師器	坏	12.8	9.4	2.3	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	218	U-13	Ⅲb	土師器	坏	13.8	8.8	3.3	にぶい黄橙色	淡黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	内外面にスス付着
	219	U-12	Ⅲb	土師器	坏	15.6	9.8	3.3	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	220	V-12	Ⅲb	土師器	坏	16	9.7	3.8	灰黄褐色	灰黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	—
	221	T-11	Ⅲb	土師器	坏	14	10.2	3.1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	222	M-9	Ⅲb	土師器	坏	15.2	—	—	灰黄色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	内外面にスス付着
	223	M-8	Ⅲb	土師器	坏	17.4	10.6	3.8	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	224	M-8	Ⅲb	土師器	坏	18.4	12.8	3.6	浅黄橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	225	P-11	Ⅲb	土師器	坏	16	7.2	2.9	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	226	M-8	Ⅲb	土師器	坏	16.8	9.8	2.6	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	227	W-13	Ⅲb下	土師器	皿	11	7	1.9	浅黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	内面にスス付着
	228	X-14	Ⅲb	土師器	皿	13.2	9.8	1.5	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	229	R-10	Ⅲb	土師器	羽釜	26.6	—	—	浅黄色	浅黄色	ナデ	ナデ，ヨコハケメ	—
	230	P-11	Ⅲb	土師器	羽釜	—	—	—	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ，ヨコハケメ	内面にスス付着
	231	J-6	Ⅲb	土師器	鉢	30.5	—	—	赤褐色	黄褐色	ヨコ・ナナメハケメ→指おさえ	ヨコ・ナナメハケメ	内面上部にスス付着

表46　中世遺物観察表（2）

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		調整		備考
									外面	内面	外面	内面	
151	232	W-12	Ⅲb	土師器	小皿	6.8	5	1.3	にぶい赤褐色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	233	U-11	Ⅲb	土師器	小皿	7.2	5.7	1.1	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ→指ナデ	—
	234	V-12	Ⅲb	土師器	小皿	7.4	5	1.1	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	235	V-12	Ⅲb	土師器	小皿	7.4	5.8	1.5	明黄褐色	明黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	—
	236	V-11	Ⅲb	土師器	小皿	7.6	5.4	1.1	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ→指ナデ	—
	237	U-11	Ⅲb	土師器	小皿	7.6	6.8	1.2	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	238	W-13	Ⅲb	土師器	小皿	7.8	4	1.1	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	239	V-12	Ⅲb	土師器	小皿	7.8	4.8	1.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ→指ナデ	—
	240	P-11	Ⅲb	土師器	小皿	8	5.9	1.45	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	241	W-13	Ⅲb	土師器	小皿	8	6	1.3	浅黄色	浅黄色	回転ナデ	回転ナデ	底面繊維状の圧痕
	242	U-12	Ⅲb	土師器	小皿	8	6	1.1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	243	U-12	Ⅲb	土師器	小皿	8.2	4.2	1.1	灰黄色	灰黄色	回転ナデ	回転ナデ	—
	244	V-12	Ⅲb	土師器	小皿	8.2	5.6	1.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	245	L- 7	Ⅲb	土師器	小皿	8.2	6.1	1	橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	内面口縁部にスス付着
	246	V-13	Ⅲb	土師器	小皿	8.2	6.2	1.25	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	247	U-12	Ⅲb	土師器	小皿	8.2	6.2	1.1	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	248	U-11	Ⅲb	土師器	小皿	8.2	6.4	1.15	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	249	W-13	Ⅲb	土師器	小皿	8.2	6.4	1.4	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	250	V-13	Ⅲb	土師器	小皿	8.3	6.4	1.3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	内面にスス付着
	251	T-11	Ⅲb	土師器	小皿	8.4	6.2	1.8	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ→指ナデ	—
	252	M- 8	Ⅲb	土師器	小皿	8.4	6.3	1.2	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	253	T-11	Ⅲb	土師器	小皿	8.4	6.4	1.3	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	254	V-13	Ⅳ上	土師器	小皿	8.4	6.6	2	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	255	U-11	Ⅲb	土師器	小皿	8.4	6.6	1.85	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	256	W-13	Ⅲb	土師器	小皿	8.5	6.5	1.5	黄橙色	浅黄色	回転ナデ	回転ナデ	底面に板状圧痕　幅9mm
	257	V-12	Ⅲb	土師器	小皿	8.6	6	1.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	258	P- 9	Ⅲb	土師器	小皿	8.6	6.4	1.6	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	259	W-13	Ⅲb	土師器	小皿	8.6	7	1.15	橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	260	M- 8	Ⅲb	土師器	小皿	8.6	7	1.3	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	口縁部にスス付着
	261	U-12	Ⅳ	土師器	小皿	8.6	7.4	1.8	にぶい黄色	にぶい黄色	回転ナデ	回転ナデ	内面にスス付着
	262	I- 6	Ⅲb	土師器	小皿	8.7	6	1.6	灰黄色	灰黄色	回転ナデ	回転ナデ	—
	263	L- 8	Ⅲb	土師器	小皿	8.7	6.2	1.1	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	264	R-13	Ⅲb	土師器	小皿	8.7	6.4	1.5	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	底面に指頭痕
	265	J- 6	Ⅲb	土師器	小皿	8.7	6.6	1.3	浅黄色	浅黄色	回転ナデ	回転ナデ	内面にスス付着
	266	W-12	Ⅲb	土師器	小皿	8.7	6.6	1.4	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	267	M- 7	Ⅲb	土師器	小皿	8.8	6.6	1.9	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	口縁部にスス付着
	268	V-11	Ⅲb	土師器	小皿	8.8	5.4	1.3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	269	W-13	Ⅲb	土師器	小皿	8.8	6.6	1.3	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	270	Q-10	Ⅲb	土師器	小皿	8.8	7.2	1.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	底面に指頭痕
	271	S-13	Ⅲb	土師器	小皿	8.9	7.4	1.3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	底面に板状圧痕　幅1.5cm
	272	V-12	Ⅲb	土師器	小皿	9	6.8	1.1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	底面に板状圧痕
	273	M- 7	Ⅲb	土師器	小皿	9	7	1	淡黄色	淡黄色	回転ナデ	回転ナデ	—
152	274	V-11	Ⅲb	土師器	小皿	9	7.2	1.3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ→指ナデ	—
	275	V-13	Ⅲb	土師器	小皿	9	7.4	1.7	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	276	O-10	Ⅲb	土師器	小皿	9	7.8	1.3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	277	M- 8	Ⅲb	土師器	小皿	9.1	6.8	1.5	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	278	O-10	Ⅲb	土師器	小皿	9.1	7.2	1.3	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	279	W-13	Ⅲb	土師器	小皿	9.2	6.4	1.2	灰黄色	黄灰色	回転ナデ	回転ナデ	内面にスス付着
	280	U-11	Ⅲb	土師器	小皿	9.2	6.8	1.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	内面にスス付着・底面繊維状圧痕
	281	U-12	Ⅲb	土師器	小皿	9.2	7.2	1.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	282	M- 7	Ⅲb	土師器	小皿	9.2	7.4	1.1	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	283	U-11	Ⅲb	土師器	小皿	9.3	7.2	1.3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	284	M- 7	Ⅲb	土師器	小皿	9.3	7.5	1.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	内外面赤色顔料塗布
	285	J- 7	Ⅲb	土師器	小皿	9.4	7	1.4	にぶい黄橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	内面に赤色顔料塗布
	286	M- 8	Ⅲb	土師器	小皿	9.4	7.15	1.55	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	287	X-15	Ⅳ上	土師器	小皿	9.4	7.8	1.15	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	内面にスス付着
	288	V-12	Ⅲb	土師器	小皿	9.4	8	1.3	浅黄色	浅黄色	回転ナデ	回転ナデ	—
	289	V-13	Ⅲb	土師器	小皿	9.4	8.5	1.6	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	内面にスス付着
	290	M- 8	Ⅲb	土師器	小皿	9.6	7.6	1.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	291	M- 7	Ⅲb	土師器	小皿	9.6	7.7	1.3	淡黄色	淡黄色	回転ナデ	回転ナデ	—
	292	O- 8	Ⅲb	土師器	小皿	9.6	7.8	1.1	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	293	U-12	Ⅲb	土師器	小皿	9.8	7.2	1.75	にぶい黄橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	294	X-14	Ⅲb	土師器	小皿	9.8	7.5	1.1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	底面に指頭痕
	295	L- 8	Ⅲb	土師器	小皿	9.9	8	1.5	浅黄色	浅黄色	回転ナデ	回転ナデ	—
	296	P-10	Ⅲb	土師器	小皿	10	8.6	1.35	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	—
	297	P- 9	Ⅲb	土師器	小皿	10	9	1.3	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ	—
	298	U-11	Ⅲb	土師器	小皿	10.3	6	1.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	内面に指頭痕・赤色顔料付着
153	299	R-11	Ⅲb	黒色土器Ⅰ類	椀	16.0	7.6	6.7	にぶい黄橙色	黒色	回転ナデ	ヘラミガキ	—
	300	W-13	Ⅲb	黒色土器Ⅰ類	椀	18.2	—	—	浅黄橙色	黒色	回転ナデ	ヘラミガキ？	—
	301	V-12	Ⅲb	黒色土器Ⅰ類	坏	16.8	—	—	淡黄色	黒色	回転ナデ	ヘラミガキ	—
	302	M- 6	Ⅲb	黒色土器Ⅰ類	坏	17.6	—	—	浅黄色	黒色	回転ナデ	ヘラミガキ？	—
	303	U-12	Ⅲb	黒色土器Ⅰ類	椀	—	7.2	—	浅黄橙色	黒色	回転ナデ	ヘラミガキ	—
	304	W-13	Ⅲb	黒色土器Ⅰ類	椀	—	7.6	—	浅黄橙色	黒色	回転ナデ	ヘラミガキ	—
	305	L- 7	Ⅲb	黒色土器Ⅰ類	椀	—	7.2	—	にぶい黄橙色	黒色	回転ナデ	ヘラミガキ	—
	306	W-14	Ⅲb	黒色土器Ⅰ類	椀	—	7.4	—	にぶい黄色	黒色	回転ナデ	ヘラミガキ	—
	307	J- 7	Ⅲb	黒色土器Ⅰ類	椀	—	7.2	—	にぶい黄橙色	黒色	回転ナデ	ヘラミガキ	—
	308	P- 9	Ⅲb	黒色土器Ⅰ類	椀	—	7	—	にぶい黄色	暗灰色	回転ナデ	ヘラミガキ	—
	309	W-13	Ⅲb	黒色土器Ⅰ類	椀	—	7.5	—	にぶい黄橙色	黒色	回転ナデ	ヘラミガキ	—
	310	V-11	Ⅲb	黒色土器Ⅰ類	椀	—	7	—	橙色	黒色	回転ナデ	ヘラミガキ	—
154	311	W-13	Ⅲb	黒色土器Ⅱ類	椀	17.8	—	—	黒色	黒色	ヘラミガキ	ヘラミガキ？	—
	312	L- 7	Ⅲb	黒色土器Ⅱ類	椀	—	6	—	灰色	灰色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	高台内に刻印
	313	L- 8	Ⅲb	黒色土器Ⅱ類	小皿	8.7	5.1	1.25	灰黄～黒色	黒色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—
	314	L- 7	Ⅲb	赤色土器	坏	16	—	—	橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—
	315	W-13	Ⅲb	赤色土器	坏	—	7.4	—	浅黄橙色	橙色	回転ナデ	ヘラミガキ	—

表47　中世遺物観察表（3）

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種・分類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		調整		備考
									外面	内面	外面	内面	
155	316	W-12	Ⅲb	瓦器	椀・楠葉型	11	—	—	灰色	灰色	指ナデ	ナデ	—
	317	O-10	Ⅲb	瓦器	椀・楠葉型	11.6	—	—	灰色	灰色	指ナデ+指オサエ	ヘラミガキ	—
	318	O-10	Ⅲb	瓦器	椀・楠葉型	11.6	—	—	暗灰色	灰色	指ナデ+指オサエ	ヘラミガキ	—
	319	O- 9	Ⅲb	瓦器	椀・楠葉型	11.6	—	—	暗灰色	暗灰色	指ナデ+工具ナデ	ヘラミガキ	—
	320	O-10	Ⅲb	瓦器	椀・楠葉型	12.9	—	—	淡灰色	淡灰色	指オサエ	ヘラミガキ	—
	321	O- 9	Ⅲb	瓦器	椀・楠葉型	13.4	—	—	灰色	灰白色	ナデ	工具ナデ	—
	322	O-10	Ⅲb	瓦器	椀・楠葉型	15	—	—	暗灰色	灰色	指ナデ+指オサエ	ヘラミガキ	—
	323	N-10	Ⅲb	瓦器	椀・楠葉型	15	—	—	淡灰色	淡灰色	指ナデ	ヘラナデ	—
	324	O-10	Ⅲb	瓦器	椀・楠葉型	15.6	—	—	灰色	灰色	指ナデ	ヘラミガキ	—
	325	N-10	Ⅲb	瓦器	椀・楠葉型	15.8	—	—	暗灰色？	灰色	指ナデ+工具ナデ	ヘラミガキ	—
	326	N-10	Ⅲb	瓦器	椀・楠葉型	16.4	—	—	灰色	灰色	指ナデ+指オサエ	ヘラミガキ	—
	327	O-10	Ⅲb	瓦器	椀・楠葉型	17.2	—	—	暗灰色	灰色	指ナデ+指オサエ	ヘラミガキ	—
	328	N-10	Ⅲb	瓦器	椀・楠葉型	17.4	—	—	灰白色	淡黄色	ナデ	ナデ	—
	329	X-13	Ⅲb	瓦器	椀・和泉型	11.3	—	—	暗灰色	暗灰色	指ナデ+指オサエ	ヘラミガキ	—
	330	W-13	Ⅲb	瓦器	椀・和泉型	12	—	—	灰色	暗灰色	工具ナデ+指オサエ	工具ナデ	—
	331	W-13	Ⅲb	瓦器	椀・和泉型	12.6	—	—	灰色	灰色	ナデ	ヘラミガキ	—
	332	W-13	Ⅲb	瓦器	椀・和泉型	12.8	—	—	明灰色	暗灰色	指ナデ+指オサエ	ヘラミガキ	—
	333	W-13	Ⅲb	瓦器	椀・和泉型	13.4	—	—	灰色	淡灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	334	N-10	Ⅲb	瓦器	椀・和泉型	14.2	—	—	灰色	灰色	指ナデ	ヘラミガキ	—
	335	U-11	Ⅲb	瓦器	椀・和泉型	15.6	—	—	灰色	灰白色	指ナデ	ミガキ	—
	336	P- 9	Ⅲb	瓦器	椀・楠葉型	—	5	—	暗灰色	灰色	ナデ	ヘラミガキ	付け高台
	337	O-10	Ⅲb	瓦器	椀・楠葉型	—	4.8	—	淡灰色	淡灰色	ヘラケズリ+指オサエ	ヘラミガキ	付け高台
	338	N- 9	Ⅲb	瓦器	椀・楠葉型	—	4.8	—	淡灰色	灰色	指ナデ	ヘラミガキ	付け高台
	339	O- 9	Ⅲb	瓦器	椀・楠葉型	—	5.8	—	灰色	灰色	ヘラケズリ+指オサエ	ヘラミガキ	付け高台　輪状ミガキ痕
	340	O- 9	Ⅲb	瓦器	椀・楠葉型	—	6.1	—	暗灰色	暗灰色	ヘラケズリ+指オサエ	ヘラミガキ	付け高台　輪状ミガキ痕
	341	O-10	Ⅲb	瓦器	椀・楠葉型	—	—	—	暗灰色	暗灰色	ナデ	ヘラミガキ	付け高台
	342	N-10	Ⅲb	瓦器	椀・楠葉型	—	4.6	—	灰色	灰色	指ナデ	ヘラミガキ	付け高台
	343	O-10	Ⅲb	瓦器	皿・楠葉型	8.6	6.4	1	淡灰色	淡灰色	指オサエ+工具ナデ	ヘラミガキ	—
	344	Y-12	Ⅲb	瓦器	皿・和泉型	14	—	—	暗灰色	灰色	工具ナデ+指オサエ	ヘラミガキ	—

表48　中世遺物観察表（4）

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種	色調		調整		備考
						外面	内面	外面	内面	
156	345	T-11	Ⅲb	樺万丈系須恵器	甕	灰色	灰白色	ナデ+格子目タタキ	ヨコ・ナナメハケ目のちナデ	—
	346	V-13	Ⅲb	樺万丈系須恵器	甕	灰オリーブ色	灰色	ナデ+格子目タタキ	ナナメハケ目	—
	347	L- 7	Ⅲb	樺万丈系須恵器	甕	灰白色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	348	V-13	Ⅲb	樺万丈系須恵器	甕	灰色	灰色	ナデ+格子目タタキ	ヨコナデ	—
	349	V-13	Ⅲb	東播磨系須恵器	甕	黒褐色	黒褐色	平行タタキ	当て具→ナデ	土師質
	350	M- 8	Ⅲb	魚住窯須恵器	甕	暗灰色	暗灰色	格子目タタキ	ナデ	—
	351	P- 8	Ⅲb	魚住窯須恵器	甕	暗灰色	灰色	平行タタキ	ナデ	—
	352	O-9, P-9, 10, 11	Ⅲb	魚住窯須恵器	甕	灰色	灰色	平行タタキ	同心円当て具→ナデ	—
	353	U-12	Ⅲb	樺万丈系須恵器	甕	灰色	灰色	格子目タタキ	ナナメハケ目	—
157	354	T-11, T-12, X-13	Ⅲb	須恵器	甕	灰色	灰色	ナデ+平行タタキ	当て具→ナデ	—
	355	M- 7	Ⅲb	須恵器	甕	灰色	灰色	格子目タタキ→部分ナデ	平行当て具→部分ナデ	—
	356	P- 9	Ⅲb	東播磨系須恵器	甕	暗オリーブ褐色	にぶい黄橙色	細線平行タタキ	当て具→ナデ	焼成やや不良
	357	I- 5	Ⅲb	樺万丈系須恵器	甕	淡黄色	淡黄色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
158	358	V-13	Ⅲb	樺万丈系須恵器	甕	灰オリーブ色	灰色	ナデ+格子目タタキ	工具によるナデ	—
	359	V-12	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	360	T-13	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰白色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	361	X-14	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰白色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	362	P-11	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	363	M-9,N-10,O-10	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	364	N-9, O-9	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	365	U-13	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	366	V-13	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	367	W-13	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰白色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	368	P- 9	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	369	M- 7	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	370	X-13	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰白色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
159	371	N-10,O-10	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰白色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	372	O-9, N-10	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰黄色	灰黄色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	373	W-12	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	374	V-13	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰色	灰色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	375	N- 7	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰白色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	376	X-14	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰白色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	377	U-12	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰白色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	378	R-12	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	379	V-13	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰白色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	380	X-14	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	黄灰色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	381	O-9, O-10	Ⅲb	東播磨系須恵器	捏鉢	灰白色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	382	U-12	Ⅳ上	樺万丈系瓦質土器	捏鉢	灰白色	灰白色	ロクロによるナデ	ナナメハケメ	—
	383	—	—	樺万丈系瓦質土器	捏鉢	灰色	灰色	ロクロによるナデ→ナデ	ナナメハケメ	—
160	384	U-13	Ⅲb	樺万丈系瓦質土器	捏鉢	灰白色	灰白色	ロクロによるナデ	ナナメハケメ	—
	385	N- 8	Ⅲb	瓦質土器	捏鉢	灰色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	奈良火鉢　輪花形
	386	N-10	Ⅲb	樺万丈系瓦質土器	捏鉢	灰色	暗灰色	ロクロによるナデ	ナナメハケメ	—
	387	M- 7	Ⅲb	瓦質土器	捏鉢	淡黄色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	内外面の剥落が多い
	388	—	表	瓦質土器	擂鉢	灰白色	灰白色	ロクロによるナデ→ナデ	ロクロによるナデ→ナデ	—
	389	K- 6	Ⅲb	瓦質土器	擂鉢	淡黄色	淡黄色	ロクロによるナデ→ナデ	ロクロによるナデ	土師質
	390	J- 6	Ⅲb	瓦質土器	擂鉢	灰色	灰白色	ロクロによるナデ→ナデ	ロクロによるナデ	—
	391	M- 8	Ⅲb	類須恵器	壺	灰色	灰色	ロクロによるナデ	格子目当て具→ナデ	カムィヤキ

表49　中世遺物観察表（5）

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種・分類	色調		調整		備考
						外面	内面	外面	内面	
161	392	P-11	Ⅲb	常滑	甕・5型式	暗赤褐色	にぶい赤褐色	ロクロによるナデ	ナデ	外面に自然釉付着
	393	—	表採	常滑	甕・6a型式	暗赤褐色	にぶい赤褐色	ロクロによるナデ	ナデ	—
	394	O-13	Ⅲb	常滑	甕・6型式	にぶい赤褐色	明赤褐色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	395	M-8, L-8	Ⅲb, Ⅲ	常滑	甕	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ナデ＋押印文	ナデ	—
	396	T-10	Ⅲb	常滑	甕	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	—
	397	O-11, M-8	Ⅲb	常滑	甕	にぶい赤褐色	明赤褐色	ナデ＋押印文	ナデ	—
	398	X-14	Ⅲb	常滑	甕	灰オリーブ色	にぶい褐色	ナデ	ナデ＋指おさえ	—
	399	N-10	Ⅲb	常滑	甕4～5型式	暗オリーブ色	にぶい褐色	ナデ＋押印文	ナデ→指おさえ	外面に自然釉付着
	400	N- 9	Ⅲb	常滑	甕	浅黄色	にぶい黄色	ナデ＋押印文	指おさえ→ナデ	—
	401	I- 6	Ⅲb	常滑	甕	灰オリーブ色	にぶい褐色	ナデ＋押印文	指おさえ→ナデ	外面に自然釉付着
	402	W-12	Ⅲb	常滑	甕	にぶい赤褐色	灰黄色	ナデ	ナデ	—
	403	X-15	Ⅲb	常滑	甕	にぶい赤褐色	にぶい褐色	工具によるナデ	工具によるナデ	外底面に砂の付着
162	404	V-12	Ⅲb	常滑	甕	にぶい褐色	にぶい黄褐色	工具によるナデ	工具によるナデ	外底面に砂の付着
	405	Y-14	Ⅲb	常滑	甕	灰褐色	灰色	ナデ	ナデ	—
	406	Y-13	Ⅳ	常滑	甕	にぶい赤褐色	褐色	工具によるナデ	工具によるナデ	—
	407	Y-14	Ⅲb	常滑	片口鉢・Ⅰ類	明赤褐色	浅黄色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	内面に自然釉付着
	408	W-12	Ⅲb	常滑	片口鉢・Ⅱ類6a型式	にぶい赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	—
	409	—	Ⅲb	常滑	片口鉢	橙色	赤褐色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	—
	410	V-13	Ⅲb	常滑	片口鉢・Ⅰ類4型式	浅黄橙色	浅黄色	ロクロによるナデ	ナデ	内面に自然釉付着
	411	Y-14	Ⅲb	常滑	片口鉢	にぶい赤褐色	赤褐色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	内面 使用による磨滅
	412	H- 5	Ⅲb	常滑	片口鉢	浅黄色	灰オリーブ色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	内面に自然釉付着，重ね焼き跡
	413	1T	Ⅲb	常滑	鉢	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	輸入陶器(耳壺)の可能性あり
163	414	V-14, W-12	Ⅳ	常滑	壺	灰オリーブ色	にぶい黄色	ナデ＋押印文	指おさえ→ナデ	外面に自然釉付着
	415	U-12	Ⅲb下	瀬戸	合子蓋	明緑灰色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ+糸切り	上面に淡緑色の灰釉
	416	U-12	Ⅲb下	瀬戸	合子蓋	オリーブ黄色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ+糸切り	上面に淡緑色の灰釉
	417	Y-13	Ⅲb	瀬戸	卸皿	灰白色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ+卸目	内外面に淡緑色の灰釉
	418	O-10	Ⅲb	備前	椀・Ⅰ期	灰白色	灰白色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	口縁部に自然釉
	419	K- 6	Ⅲb	備前	擂鉢・Ⅳ期	灰オリーブ色	灰オリーブ色	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	内面 使用による磨滅

表50　中世遺物観察表（6）

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種・分類	胎土	釉薬	備考
164	420	Y-14	Ⅲb	輸入陶器	天目碗	灰白色	暗褐色	—
	421	V-12, 13	Ⅲb	輸入陶器	天目碗	橙色	にぶい赤褐色(鉄釉)硬質	産地不明
	422	T-12	Ⅲb	輸入陶器	壺・Ⅳ類？	にぶい黄橙色，緻密，黒色粒	浅黄色	—
	423	M- 9	Ⅲb	輸入陶器	耳壺・Ⅵ類	灰色，黒色粒	上オリーブ色下灰白色	外面に釉の流しがけ
	424	Y-14	Ⅲb, Ⅲ	輸入陶器	壺・Ⅳ類	灰色，磁質	黒褐色	—
	425	R-10	Ⅲb	輸入陶器	耳壺・Ⅶ類or水注・Ⅷ類	にぶい橙色，紫色粒	灰黄色	口縁部内側に目跡
	426	T-12, U-12	Ⅲa	輸入陶器	耳壺・ⅩⅡ-1類	灰白色，白色粒，堅緻	極暗赤褐色	口縁部は一部露胎
	427	O-10	Ⅲb	輸入陶器	壺	灰色，磁質	灰緑色	429と同産地か
	428	U-11	Ⅲb	輸入陶器	耳壺 or 水注	灰褐色，磁質，黒色粒	灰オリーブ色	口縁部内側に目跡
	429	P-11	Ⅲb	輸入陶器	壺	灰色，磁質	灰緑色	—
	430	X-13, Y-14	Ⅲb	輸入陶器	耳壺・ⅩⅡ類	灰白色，白色粒，堅緻	極暗赤褐色	内面無釉
	431	T-11	Ⅲb	輸入陶器	壺・Ⅱ類	灰白色，磁質，黒色粒	灰オリーブ色	454と同一個体か
	432	U-12	Ⅲb	輸入陶器	水注・Ⅴ類 or 壺	黒褐色，堅緻	オリーブ黒色	—
	433	T-12	Ⅲb	輸入陶器	壺・Ⅱ類	灰褐色，磁質，黒色粒	灰オリーブ色	431と同一産地と思われる
	434	U-11	Ⅲb	輸入陶器	壺 or 耳壺	灰褐色，磁質，黒色粒	オリーブ灰色	428と同一個体か
	435	T-12, U-12	Ⅲb	輸入陶器	耳壺・ⅩⅡ類	灰白色，白色粒，堅緻	極暗赤褐色	内面無釉
165	436	T-12	Ⅲb	輸入陶器	耳壺・ⅩⅡ類	灰白色，白色粒，堅緻	極暗赤褐色	胴部下位と内面は露胎
	437	Y-14	Ⅲb	輸入陶器	耳壺・Ⅵ-1類	灰色，礫	にぶい黄色	外面は釉が薄くかかる
	438	U-12, W-13	Ⅲb	輸入陶器	耳壺・ⅩⅡ類	灰白色，黒色粒，堅緻	暗褐色	内面露胎
	439	Y-13	Ⅲb, Ⅳ	輸入陶器	壺	にぶい橙色，茶色粒	黒褐色	外面に工具痕，内面にロクロ目
	440	T-11	Ⅲb	輸入陶器	耳壺・Ⅵ-2類	淡茶灰色，黒色粒	灰褐色	—
	441	W-13	Ⅲb	輸入陶器	耳壺・Ⅲ or Ⅳ類	黄灰色，白色粒	暗オリーブ褐色	442と同一個体
	442	W-13, X-13	Ⅲb	輸入陶器	耳壺・Ⅲ or Ⅳ類	黄灰色，白色粒	暗オリーブ褐色	—
	443	U-11	Ⅲb	輸入陶器	耳壺・Ⅵ類	にぶい橙色，白色粒	灰緑色	—
	444	U-12	Ⅲb	輸入陶器	耳壺・Ⅵ類	灰白色，磁質，黒色粒	灰オリーブ色	口縁部内側に目跡
	445	V-12	Ⅲb	輸入陶器	耳壺・Ⅵ類	灰褐色	淡茶灰色	口縁部内側に目跡
	446	V-12	Ⅲb	輸入陶器	耳壺・Ⅵ類	にぶい橙色	上オリーブ黒色下灰黄褐色	外面に釉の流しがけ口縁部内側に目跡
	447	W-13	Ⅲb	輸入陶器	耳壺・Ⅵ類	茶灰色	上黒褐色下淡灰緑色	外面に釉の流しがけ
	448	W-13	Ⅲb	輸入陶器	耳壺・Ⅵ類	橙色，磁質，赤色粒	黒褐色	口縁部内側に目跡
	449	K- 6	Ⅲb	輸入陶器	四耳壺・Ⅵ-2類	灰色，堅緻	灰白色，オリーブ黒色	体部外面下位に目跡
	450	U-11	Ⅲb	輸入陶器	耳壺	灰褐色，磁質，黒色粒	灰オリーブ色	428と同産地か
	451	U-12	Ⅲb	輸入陶器	耳壺	灰褐色，磁質，黒色粒	灰オリーブ色	428と同産地か
	452	Y-13	Ⅲb	輸入陶器	耳壺	灰白色	灰黄色	—

表51　中世遺物観察表（7）

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種・分類	胎土	釉薬	備考
166	453	M- 8	Ⅲb	輸入陶器	磁州窯系白釉瓶	にぶい赤褐色	透明釉	白化粧に魚子文の象嵌
	454	U-11	Ⅲb	輸入陶器	耳壺 or 水注	灰緑色	灰オリーブ色	口縁部内側に目跡
	455	U-12	Ⅲb	輸入陶器	水注	灰色，磁質	オリーブ灰色	光沢のある釉薬　446と同産地
	456	L- 7	Ⅲb	輸入陶器	水注・Ⅳ or Ⅷ類	灰白色	オリーブ黄色	—
	457	U-12	Ⅲb	輸入陶器	水注・Ⅳ類？	にぶい黄橙色	淡緑白色	—
	458	W-13	Ⅲb	輸入陶器	水注・Ⅴ-2b類	灰褐色，白色粒	暗褐色	注口部，内外面施釉
	459	1T	Ⅲ	輸入陶器	水注(把手)・B群	灰色，磁質	オリーブ灰色	445と同産地
	460	L- 9	Ⅲb	輸入陶器	盤・Ⅰ-2b類	灰色，白色粒	灰オリーブ色	—
	461	X-14	Ⅲb	輸入陶器	盤・Ⅰ-1b類	灰色，白色粒	灰オリーブ色	胴部下位露胎
	462	M- 8	Ⅲb	輸入陶器	盤・Ⅰ-1b類	灰色，白色粒	オリーブ黄色	外面露胎　内面に鉄絵
	463	U-12	Ⅲb	輸入陶器	小盤・Ⅰ-2b類	灰色，黒色粒，白色粒	灰オリーブ色	外面露胎　内面に鉄絵
	464	U-12	Ⅲb	輸入陶器	盤・Ⅲ類？	浅黄橙色	濃茶色（鉄釉）	口縁部内側に目跡，481と同一個体か
	465	X-13	Ⅲb	輸入陶器	小盤	浅黄橙色	オリーブ色	外面露胎
	466	X-12	Ⅲb	輸入陶器	盤・Ⅰ-2'類	灰色，白色粒	灰オリーブ色	口縁部内側に目跡
167	467	T-11	Ⅲb	輸入陶器	鉢・Ⅰ-1b類	赤褐色，白色粒，堅緻	灰白色？	—
	468	U-12	Ⅲb	輸入陶器	鉢・Ⅰ-1b類	赤褐色，白色粒，堅緻	灰白色？	—
	469	T-11	Ⅲb	輸入陶器	鉢・Ⅰ-1b類	にぶい黄橙色，白色粒，堅緻	灰白色？	—
	470	T-11, U-11	Ⅲb	輸入陶器	鉢・Ⅰ-1b類	にぶい褐色，白色粒，堅緻	灰白色？	—
	471	W-13, X-14	Ⅲb	輸入陶器	鉢・Ⅰ-1b類	赤色，白色粒，堅緻	灰白色？	—
	472	V-13	Ⅲb	輸入陶器	鉢・Ⅰ-2a類	褐灰色，白色粒，堅緻	オリーブ灰色	口縁部付近の内外面に施釉
	473	Y-14	Ⅲb	輸入陶器	鉢・Ⅰ-2a類	赤褐色，白色粒，堅緻	浅黄色	口縁部付近の内外面に施釉
	474	U-13	Ⅲb	輸入陶器	鉢・Ⅰ-2a類	にぶい赤褐色，白色粒，堅緻	浅黄色	口縁部外側のみ釉がかかる
	475	W-12	Ⅲb	輸入陶器	鉢 or 盤	浅黄色，白色粒，粗い	剥落して不明	耳壺・壺・盤の可能性あり
168	476	X-12	Ⅲb	輸入陶器	鉢・Ⅰ類	浅黄色，白色粒，粗い	剥落して不明	内外面にあばた状のくぼみ
	477	M- 8	Ⅲb	輸入陶器	鉢・Ⅲ類	にぶい褐色，白色粒	浅黄色	—
	478	Q- 9	Ⅲb	輸入陶器	鉢・Ⅲ-2類	にぶい褐色，白色粒	浅黄色	460と同一産地か
	479	R-10	Ⅲb	輸入陶器	鉢・Ⅲ-1類	橙色，白色粒	淡褐色	口縁部内側に目跡
	480	M- 8	Ⅲb	輸入陶器	鉢・Ⅲ類or耳壺・Ⅵ-2類	橙色，堅緻	暗オリーブ色	胴部外面上位に目跡
	481	U-12	Ⅲb	輸入陶器	鉢・Ⅵ類	橙色，堅緻	灰褐色	碁笥底
	482	X-12	Ⅲb	輸入陶器	鉢・Ⅲ or Ⅵ類	にぶい赤褐色	黄褐色	胴部外面下位に目跡
	483	T-11, 22	Ⅲb	輸入陶器	鉢・Ⅲ類	灰白色，白色粒，磁質	灰白色	—
	484	X-12	Ⅲb	輸入陶器	鉢・Ⅵ類？	橙色，磁質，赤色粒	灰オリーブ色	底部碁笥底風
	485	Y-13	Ⅲb	輸入陶器	鉢・Ⅳ類？	明赤褐色，白色粒，堅緻	無釉	胴部外面下位に目跡　内外面無釉
	486	X-14	Ⅲb	輸入陶器	鉢・Ⅵ-1類	にぶい橙色，堅緻	オリーブ褐色	底部碁笥底風
169	487	I- 8	Ⅲ	輸入陶器	甕・Ⅲ類	灰褐色　白色粒　紫色粒　堅緻	黄褐色	Y字口縁甕，476と同一個体か
	488	X-14, 15	Ⅲb	輸入陶器	甕・Ⅴ類	にぶい橙色，白色粒	黄褐色	T字口縁甕，490と同一個体か
	489	V-13	Ⅲb	輸入陶器	甕・Ⅰ類	灰白色，橙色，白色粒	浅黄色	口縁内折の大甕
	490	Y-14	Ⅲb	輸入陶器	甕・Ⅴ類	にぶい赤褐色，白色粒	暗オリーブ色，灰色	T字口縁甕
	491	V-13	Ⅲb	輸入陶器	甕・Ⅱ類	赤褐色	にぶい黄色	内面に同心円の当て具痕
	492	U-12	Ⅲb	輸入陶器	甕・Ⅱ類	赤褐色	にぶい黄色	内面に同心円の当て具痕　491と同一個体と思われる
	493	X-15	Ⅲb, Ⅲb上	輸入陶器	甕・Ⅱ類	灰白色，白色粒	浅黄色	内面に同心円の当て具痕
	494	K-6, N-10	Ⅲb	輸入陶器	甕・Ⅲ類	灰褐色，白色粒，紫色粒，堅緻	黄褐色	内面に当て具痕
	495	T-12	Ⅲb	輸入陶器	甕	赤褐色，灰色，白色粒	浅黄色，灰色	外部底面に砂が付着
	496	V-13	Ⅲb	輸入陶器	甕	暗オリーブ灰色，黒色粒，白色粒	浅黄色，灰色	外部底面に砂が付着
	497	W-12	Ⅲb	輸入陶器？	サヤ鉢？	茶褐色，堅緻	—	穿孔部分あり
170	498	U-11	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-1類	灰白色，堅緻	オリーブ灰色	—
	499	X-15	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-1類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	500	Y-14, X-14	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-1類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	501	W-13	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-1c類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	502	—	—	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-1c類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	畳付きに目跡
	503	T-11, U-12	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-1c類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	504	U-11	Ⅲb	龍泉窯系青磁	小碗・Ⅰ-1類	灰黄色	灰オリーブ色	—
	505	T-13	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-2a'類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	506	W-13	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-2a'類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	507	H-12	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-2a類	灰白色，堅緻	明オリーブ灰色	—
	508	T-12	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-2a類	灰色，堅緻	緑灰色	—
	509	T-11, 12	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-2b類	灰白色，堅緻	オリーブ灰色	内外面発色不良
	510	R-13	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-2a類	灰色，堅緻	オリーブ灰色	—
	511	Q- 9	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-2a類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	512	U-13	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-2類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	513	R-10	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-2類	灰白色，堅緻	オリーブ黄色	—
	514	T-11	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-2類	灰白色，堅緻	オリーブ灰色	—
	515	W-14	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-2類	灰白色，堅緻	明オリーブ灰色	—
171	516	T-11	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-2a類	黄橙色	灰黄色	焼成不良
	517	W-13	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-2類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	518	K- 6	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-2類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	519	V-13	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-3a類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	畳付き，高台内面露胎
	520	M- 9	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-4d類	灰白色，堅緻	オリーブ灰色	—
	521	S-12	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-4a類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	522	I- 6	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-4a類	灰白色，堅緻	オリーブ灰色	—
	523	U-12	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-4a類	灰白色，堅緻	オリーブ灰色	—
	524	U-11	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-4b類	灰白色，堅緻	緑灰色	口縁部輪花

表52　中世遺物観察表（8）

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種・分類	胎土	釉薬	備考
171	525	U-12	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-4b類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	526	O- 9	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-4類	灰白色，堅緻	オリーブ灰色	—
	527	X-13	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-4b類	灰色，堅緻	灰オリーブ色	口縁部輪花
	528	V-13	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-4類	灰色，堅緻	オリーブ灰色	—
	529	W-13	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-4d類	灰色，堅緻	灰オリーブ色	—
	530	X-12	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-4類	灰色，堅緻	灰オリーブ色	発色不良，畳付きに目跡
	531	X-15	Ⅲ	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-4類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	532	V-13	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-6b類	灰白色，堅緻	オリーブ灰色	—
	533	X-12	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅰ-6c類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
172	534	T-11	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅱ-a類	灰黄褐色	灰オリーブ色	—
	535	—	—	龍泉窯系青磁	碗・Ⅱ-a類	灰白色，堅緻	暗オリーブ色	畳付き，高台内面露胎
	536	V-13	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅱ-a類	灰白色，堅緻	明緑灰色	—
	537	V-12	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅱ-a類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	538	T-11	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅱ-b類	黄褐色	灰オリーブ色	—
	539	K- 6	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅱ-b類	灰色，堅緻	オリーブ灰色	—
	540	W-13	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅱ-b類	灰白色，堅緻	オリーブ灰色	—
	541	V-13	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅱ-b類	灰白色，堅緻	オリーブ黄色	発色やや不良
	542	U-11	Ⅲb	龍泉窯系青磁	碗・Ⅱ-b類	灰白色，堅緻	オリーブ灰色	—
	543	X-13	Ⅳ	同安窯系青磁	碗・Ⅰ-1b類	淡黄色	浅黄色	—
	544	Y-13	Ⅳ	同安窯系青磁	碗・Ⅰ-1b類	淡黄色	浅黄色	—
	545	T-11	Ⅲb	同安窯系青磁	碗・Ⅰ-1b類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	546	U-12	Ⅲb	同安窯系青磁	碗・Ⅰ-1b類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	胴部下位露胎
	547	T-11	Ⅲb	同安窯系青磁	碗・Ⅰ-1b類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	548	U, V, Y-12	Ⅲb	同安窯系青磁	碗・Ⅰ-1b類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	549	S-11	Ⅲb	同安窯系青磁	碗・Ⅲ-1a類	灰白色，堅緻	オリーブ灰色	胴部下位露胎
	550	T-12	Ⅲb	龍泉窯系青磁	Ⅲ・Ⅰ-2b類	灰白色，堅緻	オリーブ灰色	—
	551	Q- 9	Ⅲb	龍泉窯系青磁	Ⅲ・Ⅰ-2b類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	外底部の釉掻取り
	552	U-12	Ⅲb	同安窯系青磁	Ⅲ・Ⅰ-1a類	灰白色，堅緻	明オリーブ灰色	—
	553	T-11	Ⅲb	同安窯系青磁	Ⅲ・Ⅰ-1a類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	554	U-11, 12	Ⅲb	同安窯系青磁	Ⅲ・Ⅰ-1a類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	555	L- 9	Ⅲb	同安窯系青磁	Ⅲ・Ⅰ-1b類	灰白色，堅緻	オリーブ灰色	—
173	556	V-12	Ⅲb	同安窯系青磁	Ⅲ・Ⅰ-1b類	灰白色，堅緻	オリーブ灰色	—
	557	P-11	Ⅲb	同安窯系青磁	Ⅲ・Ⅰ-1b類	灰白色，堅緻	オリーブ灰色	—
	558	T-12	Ⅲb	同安窯系青磁	Ⅲ・Ⅰ-1b類	灰白色，堅緻	灰色	—
	559	W-13	Ⅲb	同安窯系青磁	Ⅲ・Ⅰ-1b類	灰白色，堅緻	オリーブ灰色	胴部下位に回転ヘラケズリ痕
	560	Y-12	Ⅲb	同安窯系青磁	Ⅲ・Ⅰ-2a類	灰白色，堅緻	オリーブ灰色	—
	561	P-11	Ⅲb	同安窯系青磁	Ⅲ・Ⅰ-2b類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	562	U-11	Ⅲb	同安窯系青磁	Ⅲ・Ⅰ-2b類	灰白色，堅緻	明オリーブ灰色	底面にスス付着，発色不良
	563	R -12	Ⅲb	同安窯系青磁	Ⅲ・Ⅰ-2b類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	564	U-12,V-12,T-11	Ⅲb	同安窯系青磁	Ⅲ・Ⅰ-2b類	灰白色，堅緻	オリーブ灰色	—
	565	T -11	Ⅲb	龍泉窯系青磁	小盤・Ⅲ類	灰白色，堅緻	明緑灰色	鎬蓮弁文
	566	1 T	Ⅲc	龍泉窯系青磁	小碗・Ⅲ-2c類	灰白色，堅緻	オリーブ色	—
	567	K- 6	Ⅲb	龍泉窯系青磁	小碗・Ⅲ-2c類	灰白色，堅緻	明緑灰色	—
	568	R-10	Ⅳ	龍泉窯系青磁	碗・上田Ｃ類	灰白色，堅緻	明緑灰色	外面雷文帯
	569	O- 9	Ⅲb上	龍泉窯系青磁	碗・上田Ｃ類	灰白色，堅緻	明緑灰色	外面雷文帯
	570	L- 8	Ⅲ	龍泉窯系青磁	小碗・Ⅰ-1’a類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	柱状の高台
174	571	M- 9	Ⅲb	白磁	碗・Ⅳ類	灰白色，堅緻	灰白色	内面に釉垂れ
	572	K- 7	Ⅲb	白磁	碗・Ⅳ類	灰白色，堅緻	灰白色	胴部下位露胎
	573	—	—	白磁	碗・Ⅳ類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	胴部下位露胎
	574	I- 6	Ⅲb	白磁	碗・Ⅳ類	灰白色，堅緻	灰白色	胴部下位露胎
	575	K- 6	Ⅲb	白磁	碗・Ⅳ類	灰白色，堅緻	灰白色	胴部下位露胎
	576	ヒモン	カクラン	白磁	碗・Ⅳ-1a類	灰白色，堅緻	灰白色	胴部下位は露胎，回転ヘラケズリ痕
	577	M- 8	Ⅲb	白磁	碗・Ⅳ-1類	灰白色，堅緻	灰白色	回転ヘラケズリ痕
	578	P-11	Ⅲb	白磁	碗・Ⅳ-1a類	灰白色，堅緻	灰白色	外面露胎，ロクロ目残す
	579	M- 8	Ⅲb	白磁	碗・Ⅳ-1a類	灰白色，堅緻	灰白色	胴部下位は露胎，回転ヘラケズリ痕
	580	—	Ⅲb	白磁	碗・Ⅳ-1a類	灰黄色，堅緻	灰白色	胴部下位露胎
	581	K- 7	Ⅲb	白磁	碗・Ⅳ-1類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	582	O-10	Ⅲb	白磁	碗・Ⅴ類 or Ⅵ類	灰白色，堅緻	浅黄色	—
	583	U-12	Ⅲb	白磁	碗・Ⅴ-4a類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	584	Z-13	Ⅲb	白磁	碗・Ⅴ-4b類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	585	K- 7	Ⅲb	白磁	碗・Ⅴ-4a類	灰白色，堅緻	灰白色	胴部下位露胎
	586	X-13	Ⅲb	白磁	碗・Ⅴ類	灰白色，堅緻	灰白色	胴部下位露胎
	587	J- 6	Ⅲb	白磁	碗・Ⅴ類	浅黄色，堅緻	灰白色	—
	588	U-11	Ⅲb	白磁	碗・Ⅴ-4b類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	589	U-12	Ⅲb	白磁	碗・Ⅴ-4b類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	590	U-12	Ⅲb	白磁	碗・Ⅴ-4b類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	591	V-13	Ⅲb	白磁	碗・Ⅴ類	灰白色，堅緻	灰白色	胴部下位露胎
	592	Y-12	Ⅲb	白磁	碗・Ⅴ類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	胴部下位露胎
	593	S-11	Ⅲb	白磁	碗・Ⅴ類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	胴部下位露胎
	594	V-11	Ⅲb	白磁	碗・Ⅶ-b類	灰白色，堅緻	灰白色	口縁部輪花
	595	U-12	Ⅲb	白磁	碗・Ⅶ-b類	灰白色，堅緻	灰白色	口縁部輪花
	596	Y-14	Ⅲb	白磁	碗・Ⅶ類	灰白色，堅緻	灰白色	焼成不良
	597	R-10	Ⅲb	白磁	碗・Ⅶ類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	598	—	—	白磁	碗・Ⅷ-３類	白色，堅緻	灰白色	見込みと胴部下位露胎

表53　中世遺物観察表（9）

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種・分類	胎土	釉薬	備考
	599	Y-13	Ⅳ	白磁	碗・Ⅷ類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	600	S-11	Ⅲb	白磁	碗・Ⅷ類	灰白色，堅緻	灰白色	胴部下位露胎
	601	M- 8	Ⅲb	白磁	碗・Ⅷ類	灰白色，堅緻	灰白色	外面に回転ヘラケズリ痕
	602	T-11	Ⅲb	白磁	碗・Ⅷ類	灰白色，堅緻	灰白色	外面露胎
	603	W-13	Ⅲb	白磁	碗・Ⅷ類 or Ⅲ-1類	灰白色，堅緻	灰白色	胴部下位露胎
	604	T-11	Ⅲb	白磁	碗・Ⅸ類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	605	R-12	Ⅲb	白磁	碗・Ⅸ類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	606	V-13	Ⅲb	白磁	碗・Ⅸ類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	607	U-11	Ⅲb	白磁	碗・Ⅸ類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	608	V-13	Ⅲb	白磁	碗・Ⅸ類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	609	O- 9	Ⅲb上	白磁	碗・Ⅸ類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	610	V-13	Ⅲb	白磁	碗・Ⅸ類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	611	V-14	Ⅲb	白磁	碗・Ⅸ類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	612	W-13	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅸ-1b類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	613	W-13	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅸ-1b類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	614	V-13	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅸ-1b類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	615	T-11	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅸ-1b類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	616	X-15	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅸ-1b類	灰白色，堅緻	灰白色	—
175	617	Y-13	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅸ-1b類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	618	W-13, Y-13	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅸ-1c類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	619	X-13	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅸ-1b類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	620	T-11	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅱ-2類	灰白色，堅緻	灰白色	胴部下位露胎
	621	U-14	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅲ-1類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	622	U-12	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅲ-1類	灰白色，堅緻	灰白色	胴部下位露胎
	623	T-11	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅴ類？	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	外底面釉剥ぎ取り
	624	O- 9	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅱ-1類	灰白色，堅緻	灰白色	胴部下位露胎
	625	T-13	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅵ-1a類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	626	T-11	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅱ-1類	灰色，堅緻	オリーブ黄色	胴部外面下位露胎
	627	Y-14	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅵ-1a類	灰白色，堅緻	灰白色	外面露胎
	628	Y-13	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅷ類	灰白色，堅緻	浅黄色	外底面釉剥ぎ取り
	629	Q-9, R-10	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅷ類	灰白色，堅緻	灰白色	—
	630	Y-13	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅷ類	灰白色，堅緻	灰白色	外底面釉剥ぎ取り
	631	W-13	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅷ-１類	灰白色，堅緻	灰色	底部の釉を削り取り
	632	W-13	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅷ類-２類	灰白色，堅緻	灰白色	外底面釉剥ぎ取り
	633	X-12	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅷ-１b類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	箆描き草花文
	634	M- 7	Ⅲb	白磁	Ⅲ・森田分類C群？	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	外底面釉剥ぎ取り
	635	—	—	白磁	Ⅲ・Ⅷ-２b類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	外底面釉剥ぎ取り
	636	X-13	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅷ類	浅黄色，堅緻	浅黄色	外底面釉剥ぎ取り
	637	X-13	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅷ類-２類	灰色，堅緻	灰色	外底面釉剥ぎ取り
	638	W-12	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅷ-２類	灰白色，堅緻	灰色	—
	639	H- 5	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅷ-２類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	—
	640	U-11	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅷ類	灰白色，堅緻	灰オリーブ色	外底面釉剥ぎ取り
176	641	U-11	Ⅲb	白磁	Ⅲ・Ⅷ-１類	灰白色，堅緻	灰白色	外底面釉剥ぎ取り
	642	X-12	Ⅲb	白磁	多角形坏・森田分類D群	灰白色，堅緻	灰白色	胴部下位露胎
	643	Y-13	Ⅲb	白磁	多角形坏・森田分類D群	灰白色，堅緻	灰白色	外面低位にヘラケズリ痕
	644	W-13	Ⅲb	白磁	四耳壺・Ⅲ類	灰白色，堅緻	灰色	—
	645	—	Ⅲb	白磁	水注・把手	灰白色，堅緻	明緑灰	—
	646	U-12	Ⅲb	白磁	水注 or 壺Ⅲ類	灰白色，堅緻	明オリーブ灰色	—
	647	U-12	Ⅲb	青白磁	小壺蓋	灰白色，堅緻	明緑灰色	小壺蓋　草花文様型押し
	648	—	Ⅲb	青白磁	合子蓋	灰白色，堅緻	明緑灰色	—
	649	X-14	Ⅲb	青白磁	合子蓋	灰白色，堅緻	オリーブ灰色	—
	650	O-10	Ⅲb	青白磁	合子蓋	灰白色，堅緻	明緑灰色	—
	651	W-12	Ⅲb	青白磁	合子蓋	灰白色，堅緻	明オリーブ灰色	—
	652	W-13	Ⅲb	青白磁	合子蓋	灰白色，堅緻	明緑灰色	—
	653	U-12	Ⅲb	褐釉磁	合子蓋	灰白色，堅緻	オリーブ色	—
177	654	U-12	Ⅲb	青白磁	合子蓋	灰白色，堅緻	明緑灰色	—
	655	N -10	Ⅲb	青白磁	合子蓋	灰白色，堅緻	明緑灰色	650と同一個体
	656	W-13	Ⅲb	青白磁	合子身	灰白色，堅緻	明緑灰色	—
	657	V-14	Ⅲb	青白磁	合子身	灰白色，堅緻	明緑灰色	—
	658	W-13	Ⅲb	青白磁	合子身	灰白色，堅緻	明緑灰色	—
	659	W-12	Ⅲb	青白磁	合子身	灰白色，堅緻	オリーブ色	—
	660	—	表採	青花	Ⅲ・小野分類C群	灰白色，堅緻	青みがかった透明	高台に重ね焼きの跡
	661	—	表採	青花	端反小碗・小野分類B群	灰白色	透明	—

表54　中世遺物観察表（10）

（　）内は欠損部分の測定値

挿図	番号	出土区	層位	種別	品種	最大長(cm)	最大径(cm)	色調	備考
178	662	N- 8	Ⅲb	土製品	錘	5.5	4.8	褐色	—
	663	X-12	Ⅲb	土製品	錘	5.9	1.2	にぶい赤褐色	赤色顔料塗布
	664	V-13	Ⅲb	土製品	錘	4.8	1.1	にぶい褐色	—
	665	S-10	Ⅲb	土製品	錘	4.7	1.1	灰黄色	—
	666	W-15	Ⅲb	土製品	錘	4.6	1.1	浅黄橙色	—
	667	X-15	Ⅲb	土製品	錘	4.6	1.9	明赤褐色	赤色顔料塗布
	668	W-14	Ⅲb	土製品	錘	4.4	2.1	にぶい橙色	—
	669	T-11	Ⅲb	土製品	錘	4.4	1.8	褐色	—
	670	Y-12	Ⅲb	土製品	錘	4.4	1.1	にぶい黄橙色	—
	671	W-12	Ⅲb	土製品	錘	4.3	1	灰黄色	—
	672	X-15	Ⅲb	土製品	錘	4.3	1.8	橙色	—
	673	—	表	土製品	錘	4.2	1.1	にぶい橙色	—
	674	W-13	Ⅲb	土製品	錘	4.2	1.1	明赤褐色	赤色顔料塗布
	675	S-10	Ⅲb	土製品	錘	4.2	1.1	にぶい黄橙色	—
	676	T-12	Ⅲb	土製品	錘	4.2	1.1	にぶい黄橙色	—
	677	W-12	Ⅲb	土製品	錘	4.1	1.2	黄橙色	赤色顔料塗布
	678	W-12	Ⅲb	土製品	錘	4	1	にぶい黄橙色	—
	679	V-13	Ⅲb	土製品	錘	3.8	1	暗赤褐色	赤色顔料塗布
	680	P-10	Ⅲb上	土製品	錘	3.7	1	橙色	赤色顔料塗布
	681	P-10	Ⅲb	土製品	錘	3.6	1.1	浅黄色	—
	682	W-12	Ⅲb	土製品	錘	3.3	1.2	にぶい黄褐色	—
	683	V-12	Ⅲb	土製品	錘	3.2	1.5	にぶい黄橙色	—
	684	W-12	Ⅳ	土製品	錘	(5.4)	1.1	灰白色	—
	685	M- 7	Ⅲb	土製品	錘	(4.4)	1.3	灰黄色	—
	686	—	表	土製品	錘	(4.1)	1.1	にぶい黄橙色	—
	687	W-12	Ⅲb	土製品	錘	(3.8)	1.1	にぶい黄橙色	赤色顔料塗布
	688	K- 6	Ⅲb	土製品	錘	(3.6)	1	黄橙色	—
	689	Y-13	Ⅲb	土製品	錘	(3.6)	1.2	にぶい黄橙色	赤色顔料塗布
	690	V-12	Ⅲb	土製品	錘	(3.6)	1.2	灰色	—
	691	Y-13	Ⅲb	土製品	錘	(3.5)	1.25	にぶい黄橙色	—
	692	X-12	Ⅲb	土製品	錘	(3.45)	1.1	にぶい黄色	—
	693	W-13	Ⅲb	土製品	錘	(3.3)	1.05	にぶい黄橙色	—
	694	W-12	Ⅲb	土製品	錘	(2.8)	1.2	橙色	—
	695	W-12	Ⅲb	土製品	錘	(2.2)	0.7	明赤褐色	—

表55　中世遺物観察表（11）

挿図	番号	出土区	層位	種別	品種	器面調整	色調	備考
179	696	K- 6	Ⅲb	土製品	脚付煮炊具	ケズリ→ナデ	灰白色	—
	697	H- 5	Ⅲb	土製品	脚付煮炊具	ケズリ→ナデ	浅黄橙色	—
	698	M- 8	Ⅲb	土製品	脚付煮炊具	ケズリ→ナデ	浅黄橙色	—
	699	L- 7	Ⅲb	土製品	脚付煮炊具	ケズリ→ナデ	浅黄橙色	—
	700	K- 7	Ⅲb	土製品	脚付煮炊具	ケズリ→ナデ	にぶい黄橙色	—
	701	M- 8	Ⅲb	土製品	脚付煮炊具	ケズリ→ナデ	黄橙色	—
	702	K- 7	Ⅲb	土製品	脚付煮炊具	ケズリ→ナデ	浅黄橙色	—
	703	J- 6	Ⅲb	土製品	脚付煮炊具	ケズリ→ナデ	浅黄橙色	—
	704	I- 6	Ⅲb	土製品	脚付煮炊具	ケズリ→ナデ	にぶい黄橙色	—
	705	K- 6	Ⅲb	土製品	脚付煮炊具	ケズリ→ナデ	にぶい黄橙色	—
180	706	K- 6	Ⅲb	土製品	脚付煮炊具	ケズリ→ナデ	浅黄橙色	—
	707	N- 9	Ⅲb	土製品	脚付煮炊具	ケズリ→ナデ	にぶい橙色	ススの付着
	708	R-12	Ⅳ	土製品	脚付煮炊具	ケズリ→ナデ	橙色	—
	709	N-10	Ⅲb	土製品	脚付煮炊具	ケズリ→ナデ	浅黄橙色	ススの付着
	710	O-10	Ⅲb	土製品	脚付煮炊具	ケズリ→ナデ	浅黄橙色	ススの付着
	711	V-13	Ⅲb	土製品	脚付煮炊具	ケズリ→ナデ	淡橙色	ススの付着
	712	W-14	Ⅲb	土製品	脚付煮炊具	ケズリ→ナデ	淡橙色	ススの付着
	713	L- 3・8	Ⅲb	土製品	穿孔土製品	上面ロクロによるナデ・下面糸切り	にぶい橙色	赤色坏の転用品

表56　中世遺物観察表（12）

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種	口径	備考
181	714	R-10	Ⅲb	滑石製品	石鍋	43.4	穿孔
	715	T-12	Ⅲb	滑石製品	石鍋	35.2	—
	716	Y-13	Ⅲb	滑石製品	石鍋	29.6	—
	717	X-14	Ⅲb	滑石製品	石鍋	31.4	—
	718	T-12	Ⅲb	滑石製品	石鍋	31.3	—
	719	V-13	Ⅲb	滑石製品	石鍋	29.9	—
	720	樋門	カクラン	滑石製品	石鍋	29.4	—
	721	W-13	Ⅲb	滑石製品	石鍋	21.4	—
	722	X-14	Ⅲb	滑石製品	石鍋	18.4	—
	723	V-13	Ⅲb	滑石製品	石鍋	20.4	—
	724	Z-13	Ⅲb	滑石製品	石鍋	—	—
	725	T-11	Ⅲb	滑石製品	石鍋	—	—
	726	O-11	Ⅲb	滑石製品	石鍋	—	—
	727	V-13	Ⅲb	滑石製品	石鍋	—	—

表57　中世遺物観察表（13）

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種	口径	備考
182	728	V-12	Ⅲb	滑石製品	石鍋	—	—
	729	V-13	Ⅲb	滑石製品	石鍋	—	—
	730	W-13	Ⅲb	滑石製品	石鍋	—	—
	731	X-13	Ⅲb	滑石製品	石鍋	—	—
	732	W-13	Ⅲb	滑石製品	石鍋	—	—
	733	U-11	Ⅲb	滑石製品	石鍋	—	—
	734	X-14	Ⅲb	滑石製品	石鍋	—	—
	735	I-13	Ⅲb	滑石製品	石鍋	—	—
	736	W-13	Ⅲb	滑石製品	石鍋	—	—
	737	F-12	Ⅲb	滑石製品	石鍋	—	—
	738	X-13	Ⅲb	滑石製品	石鍋	—	—
	739	P-11	Ⅲb	滑石製品	石鍋	—	—
	740	U-11	Ⅲb	滑石製品	石鍋	—	—
	741	V-13	Ⅲb	滑石製品	石鍋	—	穿孔
	742	K- 6	Ⅲb	滑石製品	石鍋	—	—
183	743	U-12	Ⅲb	滑石製品	石鍋再加工品	—	—
	744	V-14	Ⅲb	滑石製品	石鍋再加工品	—	—
	745	Y-13	Ⅲb	滑石製品	石鍋再加工品	—	—
	746	L- 8	Ⅲb	滑石製品	石鍋再加工品	—	—
	747	M- 7	Ⅲb	滑石製品	石鍋再加工品	—	—
	748	O- 9	Ⅲb	滑石製品	石鍋再加工品	—	—
	749	V-13	Ⅲb	滑石製品	石鍋再加工品	—	—
	750	V-12	Ⅲb	滑石製品	石鍋再加工品	—	—
	751	R-10	Ⅲb	滑石製品	石鍋再加工品	—	—
	752	V-11	Ⅲb	滑石製品	石鍋再加工品	—	穿孔
	753	W-12	Ⅲb	滑石製品	石鍋再加工品	—	—
	754	U-14	Ⅲb	滑石製品	石鍋再加工品	—	穿孔
	755	T-12	Ⅲb	滑石製品	石鍋再加工品		穿孔
	756	X-14	Ⅲb	滑石製品	石鍋再加工品		穿孔
	757	Y-14	Ⅲb	滑石製品	石鍋再加工品	—	穿孔
	758	P-11	Ⅲb	滑石製品	石鍋再加工品	—	—
	759	W-12	Ⅳ上	滑石製品	石鍋再加工品	—	—

表58　中世遺物観察表（14）

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考
184	760	U-12	Ⅲb	石製品	硯	—	7.9	2.7	砂岩
	761	U-11	Ⅲb	石製品	硯	9.9	5.7	—	砂岩
	762	U-11	Ⅲb	石製品	砥石	9.1	3.9	1.1	粘板岩
	763	K- 6	Ⅲb	石製品	砥石	—	8.8	—	砂岩
	764	V-13	Ⅲb	軽石製品	穿孔品	12.1	—	—	用途不明

表59　中世遺物観察表（15）

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種	部位	最大長(cm)	最大厚(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	備考
185	765	V-11	Ⅲb	鉄製品	短刀Ⅰ類	完形品	27.3	2.9	4.9	166.69	—
	766	R-12	Ⅲb	鉄製品	短刀Ⅱ類	完形品	20.8	0.6	2.3	32.13	—
	767	U -11	Ⅲb	鉄製品	短刀Ⅱ類	ほぼ完形品	21.4	0.7	2.6	45.14	穿孔
	768	S-13	Ⅳ	鉄製品	刀子	身・茎	4.6	0.7	1.5	10.04	—
	769	W-14	Ⅲb	鉄製品	刀子	身・茎	4.3	0.7	1.4	6.68	—
	770	J- 7	Ⅲb	鉄製品	刀子	身・茎	7.9	0.6	1.3	7.04	—
	771	T-12	Ⅳ	鉄製品	刀子	身・茎	6.1	0.9	1.6	5.42	—
	772	J- 6	Ⅲb	鉄製品	刀子	身・茎	5.7	0.4	1.1	3.3	—
	773	S-10	Ⅲb	鉄製品	刀子	茎	4.5	0.6	0.9	3.19	—
	774	V-11	Ⅲb	鉄製品	刃物片	刃部	4.7	0.7	1.6	6	—
	775	Y-13	Ⅲb	鉄製品	刃物片	刃部	4.6	0.5	1.6	6.09	—
	776	V-11	Ⅲb	鉄製品	刃物片	刃部	5.2	0.8	2	10.38	—
	777	—	—	鉄製品	手斧	ほぼ完形品	8.5	1.8	4.6	119.65	基部袋状
	778	W-13	Ⅲb	鉄製品	火打金	完形品	8.3	1.1	2.8	39.56	—
	779	U-12	Ⅲb	鉄製品	火打金	完形品	7.2	0.8	2.2	17.81	—
	780	V-14	Ⅲb	鉄製品	鏃	完形品	8.8	1	2.6	13.82	—
	781	樋門	撹乱	鉄製品	鏃	ほぼ完形品	11.7	1	1.3	15.39	—
	782	1 T	Ⅲb	古銭	北宋銭	完形品	2.5	1.4	—	2.17	至道元寶

表60　時期不明遺物観察表

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種	部位	最大長(cm)	最大厚(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	備考
186	783	W-13	Ⅲb	鉄製品	釘	ほぼ完形品	4.3	0.7	0.8	5.2	—
	784	U-11	Ⅲb	鉄製品	釘	ほぼ完形品	4.7	0.7	0.9	6.45	—
	785	W-13	Ⅳ上	鉄製品	釘	完形品	5.3	0.9	1	8.4	—
	786	T-11	Ⅲb	鉄製品	釘	完形品	5.7	0.9	1.2	7.02	—
	787	V-13	Ⅲb	鉄製品	釘	ほぼ完形品	6.5	2.1	2	27.05	—
	788	W-13	Ⅲb	鉄製品	釘	完形品	6.2	0.9	1.3	11.71	—
	789	V-12	Ⅲb	鉄製品	釘	完形品	7	1.5	1	17.06	—
	790	V-12	Ⅲb	鉄製品	釘	ほぼ完形品	6.2	1	1.2	9.89	—
	791	S-10	Ⅲb	鉄製品	釘	ほぼ完形品	5.4	0.9	1.5	11.08	—
	792	V-13	Ⅲb	鉄製品	鉄製品	身・茎	12.9	1	1.2	20.87	棒状
	793	L- 8	Ⅲb	鉄製品	鉄製品	不明	9.3	1.3	1.6	22.79	—
	794	Y-13	Ⅲb	鉄製品	鉄製品	不明	3.7	0.6	1.6	4.77	—
	795	V-13	Ⅳ	鉄製品	鉄製品	不明	—	0.6	—	4.84	環状
	796	V-14	Ⅲb	鉄製品	鉄製品	不明	2.9	0.7	1.4	4.36	—
	797	Y-13	Ⅲb	鉄製品	鉄製品	不明	4.5	0.7	1.9	10.46	—
	798	Q-10	Ⅵ	鉄製品	鉄片等	不明	3.7	0.9	2.4	5.97	—
	799	X-15	Ⅲb	鉄製品	鉄片等	刃先？	3.6	0.5	1.4	2.35	—

第Ⅸ章　近世の調査

第１節　遺　物

１遺物の出土状況

近世の調査では，遺構が確認されず，遺物の数も他の時代と比較するとごく少ない。集中的に一箇所から出土するという状況も見られなかった。記録によると，享保10年（1725年）に北東約１㎞の台地上に新田川掘削工事が行われている。それに伴いこの付近に散在していた郷土の集落が，阿多麓へ移転させられている。旧宅地はすべて田地に開墾されており（注１），絵図でも本遺跡付近は「御新田」と記載されているのが確認できる（注２）。

注１　金峰町郷土史編纂委員会 1989『金峰町郷土史 下』

注２　柳原敏昭　2005「中世万之瀬川下流域の様相について」『中世の地域と宗教』吉川弘文館

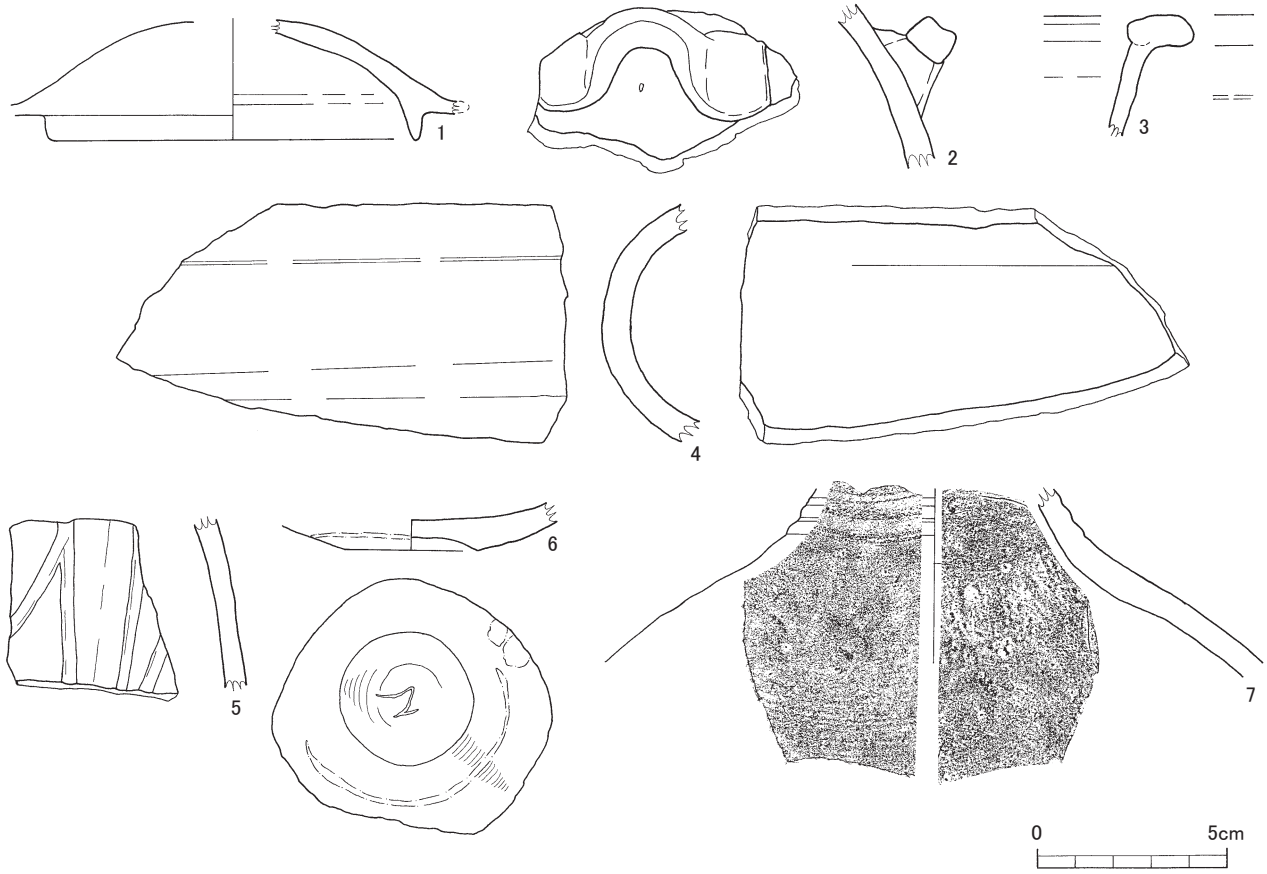
２遺物

苗代川（薩摩）焼（第187図１～７　第188図８）

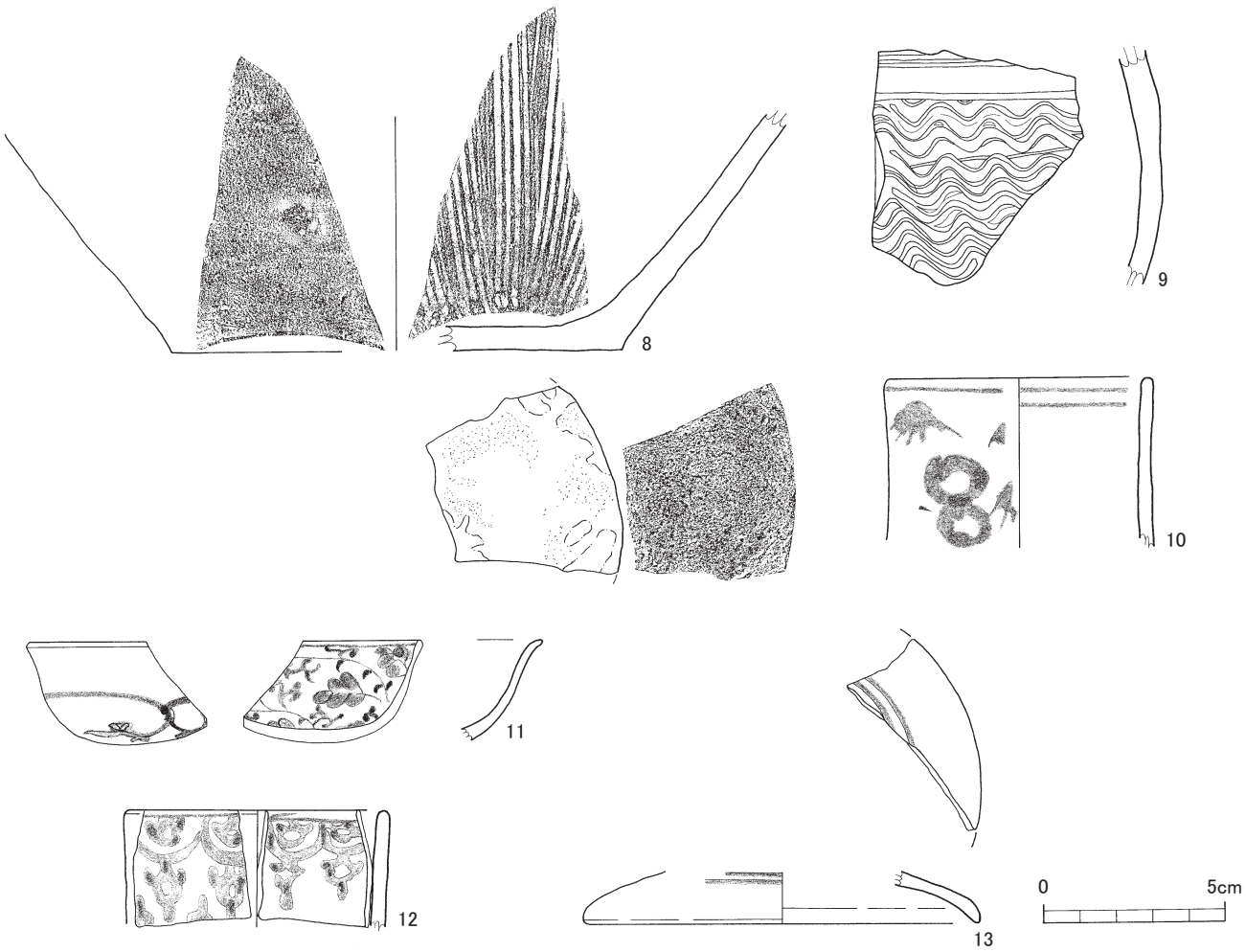
１は上面のみ鉄釉のかかった蓋である。３はここでは練鉢としたが，蓋としての可能性も考えられる。口縁部は一度外側に折り返した後，内側に折り返して納めているため，内面に段が看取できる。４は土管である。明確な時期は明らかでないが，苗代川地区の土管生産は明治から始まっているようであり，『鹿児島県統計書』では昭和13年（1938年）まで生産が続いている。明治後半になると鹿児島県の陶磁器生産の中心は苗代川地区から鹿児島地区に移っており，苗代川地区では土管や煉瓦等の生産が盛んになってきている。５は外面に掻き落としで笹の葉とみられる文様が描かれている。半胴甕の可能性が高い。６は土瓶の底部で内面のみ鉄釉が掛かる。その形状よりメンコとして転用した可能性がある。８は擂鉢である。内底面に目跡があり，外底面には砂の付着が認められる。18世紀頃の所産か。

肥前系陶磁器（第188図９～13）

９は全形は不明であるが，17Ｃ後半～18Ｃ頃の肥前系陶器の鉢の可能性のあるものである。外面は白化粧土の上より刷毛目を施し，その上より茶褐色の鉄釉をかけている。10は外面に圏線で区画して中に雪持笹を配している筒型碗である。19世紀から幕末の時期のものと考えられる。13は全形は不明であるが青磁の蓋と考えられる。



第187図　近世遺物（１）陶器



第188図　近世遺物（２）陶磁器

表61　近世遺物観察表

挿図	番号	出土区	層位	種別	器種	胎土	釉薬	備考
187	1	樋門	攪乱	苗代川焼	蓋	うすい茶褐色，白色粒	上面鉄・黒褐色	—
	2	樋門	攪乱	苗代川焼	耳壺	茶褐色	内外面鉄・緑褐色	—
	3	表採	一括	苗代川焼	錬鉢	茶褐色	内外面鉄・緑褐色	—
	4	埋戻し土中	—	苗代川焼	土管	茶褐色	内外面鉄・黒褐色	外面に成型痕，管径７㎝
	5	樋門	攪乱	苗代川焼	半胴甕	茶褐色	内外面鉄・緑褐色	掻き落とし文
	6	表採	一括	苗代川焼	土瓶	茶褐色	内面鉄・暗茶褐色	土製品か
	7	表採	一括	苗代川焼	徳利	茶褐色	内外面鉄・黒褐色	—
188	8	H- 5	Ⅲｂ	苗代川焼	擂鉢	茶褐色	内外面鉄・緑褐色	内底面に目跡
	9	表採	一括	肥前系陶器	鉢	茶色	外面褐釉内面鉄釉	化粧土，櫛目文
	10	樋門	一括	肥前系磁器	筒型碗	白色	染付	19C ～幕末，雪持笹文
	11	表採	一括	肥前系磁器	端反り皿	白色	染付	18C 中頃，唐草文
	12	表採	一括	肥前系磁器	筒型碗	白色	染付	18C 後半，唐草文
	13	樋門	攪乱	青磁	蓋	灰白色	灰オリーブ色	産地不明

第Ⅹ章　科学分析

第１節　科学分析の概要について

科学分析は，発掘調査時及び整理作業において複数年度にかけて分析を依頼した。その結果については，報告書が納品されている。ここでは，納品された報告書を測定の種類別に改編を行い掲載している。このため，文言等に関しては，提出された報告書とは必ずしも一致していないが，分析の経過やその結果については改編を行っていない。

第２節　放射性炭素年代（その１）

㈱古環境研究所

１　試料と方法

表62　採取試料等

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
1	畠遺構，畝上面	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析（AMS）法

２　測定結果

表63　放射性炭素年代測定結果

試料名	^{14}C年代（年ＢＰ）	δ^{13}C（‰）	補正^{14}C年代（年ＢＰ）	歴年代 交点（１σ）	測定No.（Beta-）
1	440±50	−26.6	420±50	AD1455 （AD1435～1495）	110891

３　測定に際して

１）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C /^{12}C比から，単純に現在（1950年 AD）から何年前（BP）かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,568年を用いた。

２）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C /^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C /^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

３）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り，^{14}C /^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年 BP より古い試料には適用できない。暦年代の交点とは，補正^{14}C年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σは補正^{14}C年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。

第３節　放射性炭素年代測定（AMS 測定）（その２）

㈱加速器分析研究所

（１）測定の意義

遺構および土器の年代を推定する根拠とする。

（２）測定対象試料

Ｕ・Ｖ－12区遺構224から出土した木炭（試料 No.2：IAAA-61643），Ｕ－13区遺構281から出土した種実（No.4：IAAA-61644），Ｕ－13区遺構283から出土した木炭（No.5：IAAA-61645），Ｘ－13区古代２号土坑から出土した木炭（No.6：IAAA-61646），Ｕ－12区遺構196から出土した炭化物（No.7：IAAA-61647），Ｕ－12区弥生時代２号竪穴住居跡から出土した木炭（No.8：IAAA-61648），Ｓ－11区Ｖｂ層から出土した土器に付着した炭化物（No.11：IAAA-61649），弥生時代１号竪穴住居跡から出土した炭化物（No.7：IAAA-61883）の合計８点である。

（３）化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理，アルカリ処理，酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～１N の水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。

３）試料を酸化銅１g と共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（還元）し，グラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着し測定する。

（４）測定方法

測定機器は，3MV タンデム加速器をベースとした14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また，加速器により^{13}C/^{12}C の

測定も同時に行う。

（5）算出方法

1）年代値の算出には，Libby の半減期5568年を使用した。

2）BP 年代値は，過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された，1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

3）付記した誤差は，次のように算出した。
複数回の測定値について，χ^2検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い，みなせない場合には標準誤差を用いる。

4）$\delta^{13}C$ の値は，通常は質量分析計を用いて測定するが，AMS 測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}C$ の値を用いることもある。
$\delta^{13}C$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB}) / {}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで，$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C 濃度：$(^{14}C/^{12}C)$ S または $(^{14}C/^{13}C)_S$ $^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C 濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$ または $(^{14}C/^{13}C)_R$

$\delta^{13}C$ は，質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/{}^{12}C$）を測定し，PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として，それからのずれを計算した。但し，加速器により測定中に同時に $^{13}C/^{12}C$ を測定し，標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}C$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また，$\Delta^{14}C$ は，試料炭素が $\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C 濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（1）式の^{14}C 濃度を，$\delta^{13}C$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))^2$$

（$^{14}A_S$ として$^{14}C/^{12}C$ を使用するとき）または

$$= {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))$$

（$^{14}A_S$ として$^{14}C/^{13}C$ を使用するとき）

$$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \text{（‰）}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については，海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため，同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合，同位体補正をしない $\delta^{14}C$ に相当する BP 年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として，pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており，$\Delta^{14}C$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}C = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \text{（‰）}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}C / 10 + 100 \text{（%）}$$

国際的な取り決めにより，この $\Delta^{14}C$ あるいは pMC により，放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln(\text{pMC} / 100)$$

5）^{14}C 年代値と誤差は，1桁目を四捨五入して10年単位で表示する。

6）較正暦年代の計算では，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ransey1995 Bronk Ramsey2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001）を使用した。

（6）測定結果

測定結果を表65にまとめた。遺構224・281・283出土試料の年代はほぼ同じである。暦年較正年代（1σ）から判断すれば，1050AD ～1220AD であり，平安時代後期後半～鎌倉時代初頭に相当する。X－13区の古代2号土坑の年代は，飛鳥時代後半～奈良時代前半に相当する。U－12区の遺構196は遺構224・281・283よりやや古く，平安時代後期後半に相当する。弥生時代2号竪穴住居跡の年代は，弥生時代前期後半から中期前半にかけての年代である。S－11区 Vb 層から出土した土器に付着した炭化物の年代もこれに近く，弥生時代中期末から後期初頭の年代である。

弥生時代1号竪穴住居跡から出土した炭化物（No.7：IAAA-61883）が1990±30yrBP の^{14}C 年代である。弥生時代中期末から後期初頭に相当する年代である。

処理および測定内容に問題は無く，調査所見や遺物の予想年代とも整合的であることから，妥当な年代であると考えられる。

参考文献

Stuiver, M. and Polash, H.A.（1977）Discussion: Reporting of 14C data. *Radiocarbon*, 19：355-363

Bronk Ramsey C.（1995） Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon*, 37（2）425-430

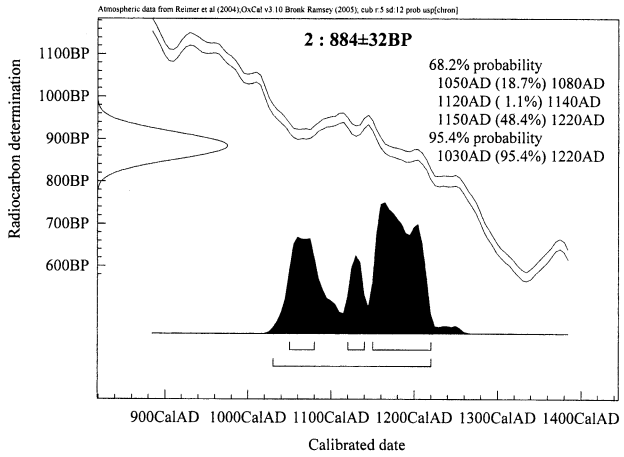
Bronk Ramsey C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43（2A）355-363

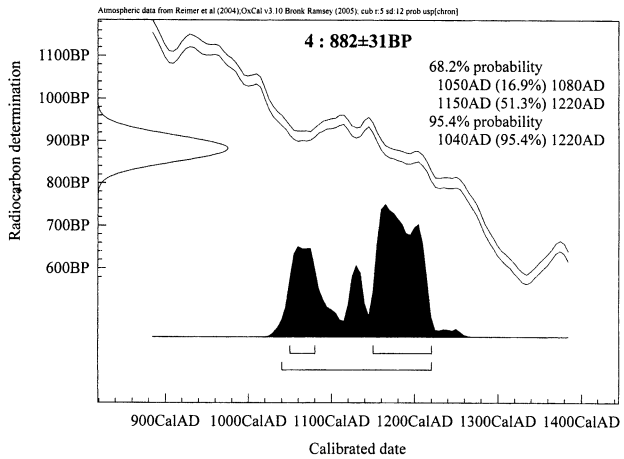
Bronk Ramsey C., J. van der Plicht and B. Weninger（2001）'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon*, 43（2A）381-389

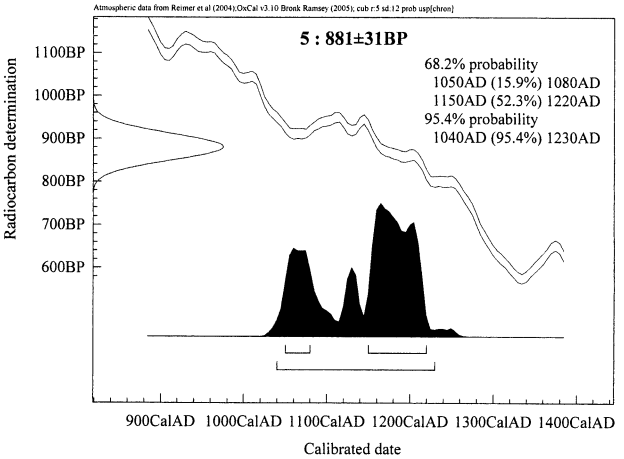
Reimer et al.（2004）IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

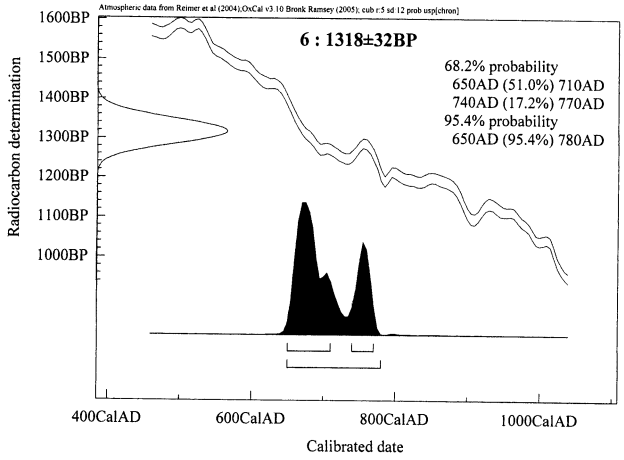
表64　結果一覧表

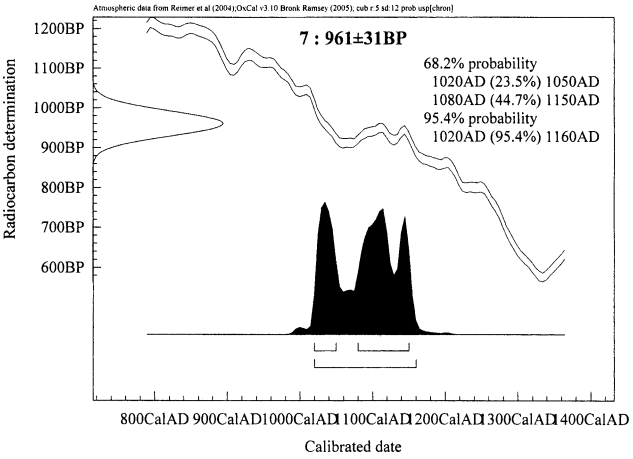
IAA Code No.	試料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-61643	試料採取場所：　U・V－12区 遺構224	Libby Age（yrBP）：　880 ± 30
		$\delta^{13}C$（‰），（加速器）＝ −30.24 ± 0.86
	試料形態 ：　木炭	$\Delta^{14}C$（‰）＝ −104.2 ± 3.6
	試料名（番号）：2	pMC（%）＝　89.58 ± 0.36
		$\delta^{14}C$（‰）＝ −113.8 ± 3.2
	（参考）　$\delta^{13}C$ の補正無し	pMC（%）＝　88.62 ± 0.32
#1451-1		Age（yrBP）：　970 ± 30
IAAA-61644	試料採取場所：　U－13区 遺構281	Libby Age（yrBP）：　880 ± 30
		$\delta^{13}C$（‰），（加速器）＝ −26.45 ± 0.76
	試料形態 ：　種実	$\Delta^{14}C$（‰）＝ −104.1 ± 3.5
	試料名（番号）：4	pMC（%）＝　89.59 ± 0.35
		$\delta^{14}C$（‰）＝ −106.7 ± 3.2
	（参考）　$\delta^{13}C$ の補正無し	pMC（%）＝　89.33 ± 0.32
#1451-2		Age（yrBP）：　910 ± 30
IAAA-61645	試料採取場所：　U－13区 遺構283	Libby Age（yrBP）：　880 ± 30
		$\delta^{13}C$（‰），（加速器）＝ −29.13 ± 0.77
	試料形態 ：　木炭	$\Delta^{14}C$（‰）＝ −103.9 ± 3.5
	試料名（番号）：5	pMC（%）＝　89.61 ± 0.35
		$\delta^{14}C$（‰）＝ −111.5 ± 3.2
	（参考）　$\delta^{13}C$ の補正無し	pMC（%）＝　88.85 ± 0.32
#1451-3		Age（yrBP）：　950 ± 30
IAAA-61646	試料採取場所：　X－13区 古代２号土坑	Libby Age（yrBP）：　1,320 ± 30
		$\delta^{13}C$（‰），（加速器）＝ −24.09 ± 0.76
	試料形態 ：　木炭	$\Delta^{14}C$（‰）＝ −151.4 ± 3.4
	試料名（番号）：6	pMC（%）＝　84.86 ± 0.34
		$\delta^{14}C$（‰）＝ −149.8 ± 3.2
	（参考）　$\delta^{13}C$ の補正無し	pMC（%）＝　85.02 ± 0.32
#1451-4		Age（yrBP）：　1,300 ± 30
IAAA-61647	試料採取場所：　U－12区 遺構196	Libby Age（yrBP）：　960 ± 30
		$\delta^{13}C$（‰），（加速器）＝ −26.65 ± 0.85
	試料形態 ：　炭化物	$\Delta^{14}C$（‰）＝ −112.9 ± 3.4
	試料名（番号）：7	pMC（%）＝　88.71 ± 0.34
		$\delta^{14}C$（‰）＝ −115.9 ± 3.1
	（参考）　$\delta^{13}C$ の補正無し	pMC（%）＝　88.41 ± 0.31
#1451-5		Age（yrBP）：　990 ± 30
IAAA-61648	試料採取場所：　U－12区 弥生２号竪穴住居跡	Libby Age（yrBP）：　2,190 ± 30
		$\delta^{13}C$（‰），（加速器）＝ −27.92 ± 0.78
	試料形態 ：　木炭	$\Delta^{14}C$（‰）＝ −238.3 ± 2.9
	試料名（番号）：8	pMC（%）＝　76.17 ± 0.29
		$\delta^{14}C$（‰）＝ −242.8 ± 2.6
	（参考）　$\delta^{13}C$ の補正無し	pMC（%）＝　75.72 ± 0.26
#1451-6		Age（yrBP）：　2,230 ± 30
IAAA-61649	試料採取場所：　S－11区	Libby Age（yrBP）：　2,010 ± 30
		$\delta^{13}C$（‰），（加速器）＝ −24.53 ± 0.84
	試料形態 ：　土器付着	$\Delta^{14}C$（‰）＝　−221 ± 3.2
	試料名（番号）：11	pMC（%）＝　77.9 ± 0.32
		$\delta^{14}C$（‰）＝ −220.3 ± 2.9
	（参考）　$\delta^{13}C$ の補正無し	pMC（%）＝　77.97 ± 0.29
#1451-7		Age（yrBP）：　2,000 ± 30
IAAA-61883	試料採取場所：　弥生１号竪穴住居跡	Libby Age（yrBP）：　1,990 ± 30
		$\delta^{13}C$（‰），（加速器）＝ −23.57 ± 0.77
	試料形態 ：　炭化物	$\Delta^{14}C$（‰）＝　−219 ± 3
	試料名（番号）：9	pMC（%）＝　78.1 ± 0.3
		$\delta^{14}C$（‰）＝ −216.7 ± 2.7
	（参考）　$\delta^{13}C$ の補正無し	pMC（%）＝　78.33 ± 0.27
#1474		Age（yrBP）：　1,960 ± 30

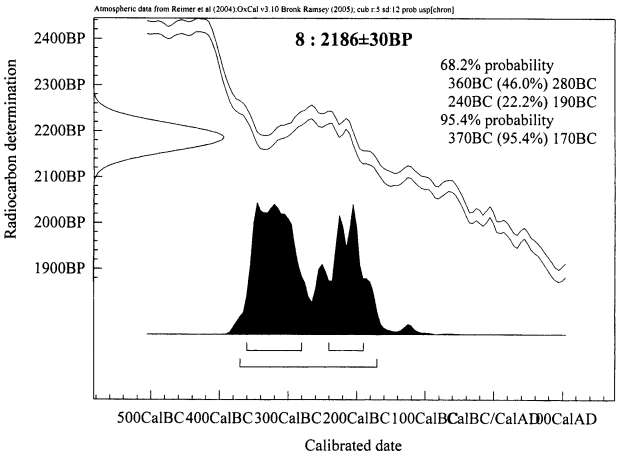


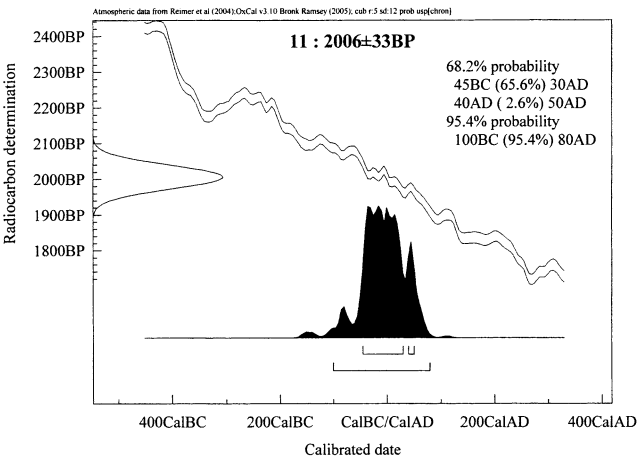


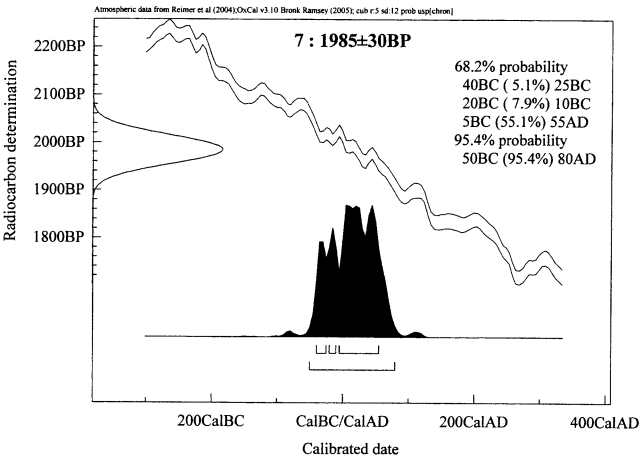












第189図　分析試料データ

第４節　出土木片の樹種調査結果

㈱加速器分析研究所

1　試料

試料は持躰松遺跡から出土した用途不明品木片２点である。

2　観察方法

炭化材の数㎜立方の試料をエポキシ樹脂に包埋し研磨して，木口（横断面），柾目（放射断面），板目（接線断面）面の薄片プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3　結果

樹種同定結果（広葉樹２種）の表と顕微鏡写真を示し，以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1）ツバキ科ツバキ属（*Camellia sp.*）

（遺物 No.9）（写真 No.9）

散孔材である。木口では極めて小さい道管（～40㎛）が，単独ないし２～３個接合して均等に分布する。放射組織は１～３細胞列で黒い筋としてみられる。木繊維の壁はきわめて厚い。柾目では道管は階段穿孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔（とくに直立細胞）は大型のレンズ状の壁孔が階段状に並んでいる。放射柔細胞の直立細胞と軸方向柔細胞にはダルマ状にふくれているものがある。板目では放射組織は１～４細胞列，高さ～１㎜以下からなり，平伏細胞の多列部の上下または間に直立細胞の単列部がくる構造をしている。木繊維の壁には有縁壁孔が一列に多数並んでいるのが全体で見られる。ツバキ属はツバキ，サザンカ，チャがあり，本州，四国，九州に分布する。

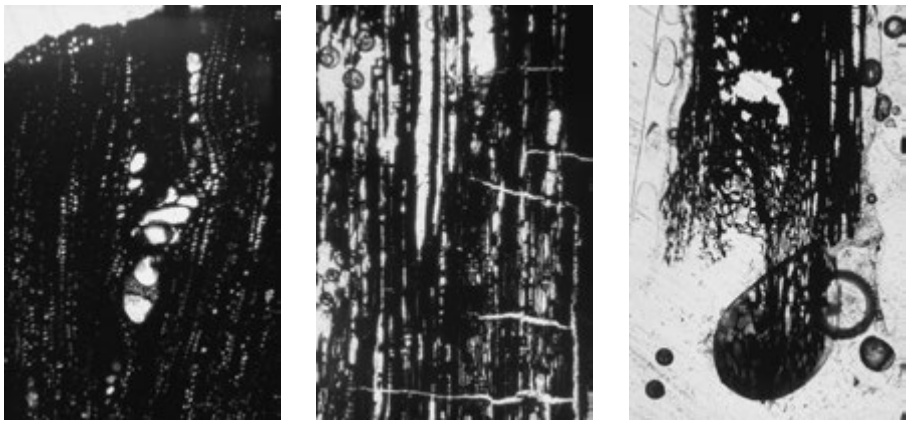
2）広葉樹

（遺物 No.8）（写真 No.8）

木口では道管が２～３個が集まり，不均一に分布する。柾目では道管は単穿孔を有する。道管放射組織間壁孔は小型と柵状である。板目では放射組織は不明である。

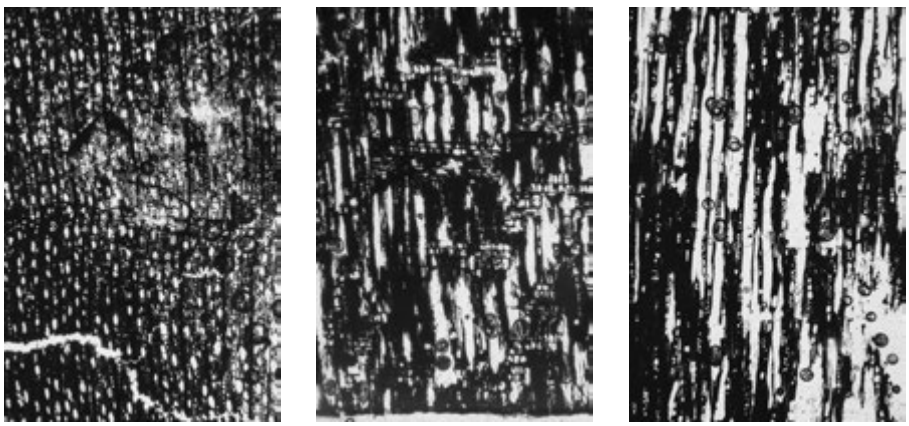
表65　出土樹種同定表

No.	遺跡名	試料名称	樹種
8	持躰松遺跡	竪穴住居２号－７	広葉樹
9	持躰松遺跡	竪穴住居１号－１	ツバキ科ツバキ属



木口×40　　柾目×40　　板目×40

No.8　広葉樹



木口×40　　柾目×40　　板目×40

No.9　ツバキ科ツバキ属

◆参考文献◆
島地　謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
島地　謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）
北村四郎・村田　源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）
深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所　史料第27冊　木器集成図録　近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所　史料第36冊　木器集成図録　近畿原始篇」（1993）

◆使用顕微鏡◆

Nikon
MICROFLEX UFX-DX Type 115
※）本測定は，当社協力会社・㈱吉田生物研究所にて実施した。

第５節　持躰松遺跡出土植物遺体の同定調査

㈱加速器分析研究所

１　はじめに

鹿児島県持躰松遺跡では，炭化した植物遺体が出土している。これらについてその種類を同定したので，以下にその結果を示す。

２　調査方法

試料を実体顕微鏡下で観察し，その形態から種の同定を試みた。その際，石川茂雄（1994年），大井（1978年），北村・村田（1979年），中山・井之口・南谷（2000年）を参照した。

３　結果

木本２種が認められた。写真を示し，同定結果を表66,67に記す。和名の順位，学名は北村・村田（1979年）によった。

表66　植物遺体同定表

No.	和名	科名	学　名	種類	部位	写真 No.
1	ウメ	バラ	Prunus mume Sieb. et Zucc	木木	核，仁	2，3，4＊
2	モモ	バラ	Prunus Persica Batsch	木木	核	1，5，6

表67　出土遺構と結果

No.	試料 No.	出土遺構等	地　区	種類と部位	写真 No.
1	1	遺構５（ピット）	W-15	モモ核	1
2	3，4	遺構281（ピット）	U-13	ウメ核，仁	2，3，4＊
3	9	遺物4265	U-13	モモ核	5
4	10	Ⅲｂ包含層	W-14	モモ核	6

＊：写真４には，仁を内包した核の様子を撮影してある。

［参考文献］
石川茂雄　1994『原色日本植物種子写真図鑑』，石川茂雄図鑑刊行委員会
大井次三郎　1978『改訂増補新版日本植物誌顕花編』，至文堂
北村四郎・村田　源　1964『原色日本植物図鑑草本編』上，中，下保育社
北村四郎・村田　源　1979『原色日本植物図鑑木本編』Ⅰ，Ⅱ保育社
中山至大・井之口希秀・南谷忠志　2000『日本植物種子図鑑』，東北大学出版会
牧野富太郎　1989年『改訂増補牧野新日本植物圖鑑』，北隆社
※）本測定は，当社協力会社・㈱吉田生物研究所にて実施した。



1　2　3　4　5　6

1．No.1 モモ核（×1.3）　2．No.2 ウメ核（×1.5）　3．No.2 ウメ種子（×2.0）　4．No.2 ウメ核と種子（×1.1）
5．No.3 モモ核（×1.5）　6．No.4 モモ核（×1.4）

第６節　植物珪酸体（プラント・オパール）分析

株式会社　古環境研究所

１　はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり，植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。

持躰松遺跡の発掘調査では，砂質土層直下から中世とされる畠遺構が検出された。ここでは，同遺構におけるイネ科栽培植物の検討を主目的として分析を行った。

２　試料

分析試料は，Ｙ－13グリッド断面（中世畝間状遺構④）の溝部（試料４）と畝部（試料５，６）および遺構検出面の溝部（試料７）と畝部（試料８）の計５点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。なお，畠遺構検出面から採取された炭化物の放射性炭素年代測定では，420±50y.B.P.（暦年代で西暦1455年頃）の年代値が得られている（第Ⅲ章参照）。

３　分析法

植物珪酸体の抽出と定量は，プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに，次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１ｇに対して直径約40㎛のガラスビーズを約0.02g 添加
　（電子分析天秤により0.1㎎の精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20㎛以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は，イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし，400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は，ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また，おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}g）をかけて，単位面積で層厚１㎝あたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94，ヨシ属（ヨシ）は6.31，ススキ属（ススキ）は1.24，メダケ節は1.16，ネザサ節は0.48，クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75である。

４　分析結果

（１）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い，その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕
機動細胞由来：イネ，キビ族型，ヨシ属，ススキ属型（ススキ属など），ウシクサ族型，ウシクサ族型（大型），シバ属，マコモ属
穎の表皮細胞由来：オオムギ族（ムギ類）

〔イネ科－タケ亜科〕
機動細胞由来：メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節，ヤダケ属），ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節），クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など），マダケ属型（マダケ属，ホウライチク属），未分類等

〔イネ科－その他〕
表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），茎部起源，未分類等

〔樹木〕
ブナ科（シイ属），ブナ科（アカガシ亜属？），クスノキ科，マンサク科（イスノキ属），その他

５　考察

（１）イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち，栽培植物が含まれるものには，イネをはじめオオムギ族（ムギ類が含まれる），ヒエ属型（ヒエが含まれる），エノコログサ属型（アワが含まれる），ジュズダマ属（ハトムギが含まれる），オヒシバ属型（シコクビエが含まれる），モロコシ属型などがある。このうち，本遺跡の試料からはイネとオオムギ族が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

１）イネ

イネは，分析を行った５試料のすべてから検出された。このうち，遺構検出面の溝部（試料７）と畝部（試料８）では，密度が5,000～5,900個 /g と高い値であり，稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個 /g を上回っている。また，Ｙ－13グリッド断面の畝部（試料５，６）でも4,100～4,300個 /g と比較的高い値である。これらのことから，同畠遺構では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

２）オオムギ族

オオムギ族（穎の表皮細胞）は，遺構検出面の畝部（試料８）から検出された。ここで検出されたのは，ムギ類（コムギやオオムギなど）と見られる形態のもの（杉山・石井，1989）である。密度は1,400個 /g と低い値であるが，穎（籾殻）は栽培地に残されることがまれであることから，少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。これらのことから，同畠遺構でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

３）その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため，その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。キビ族型にはヒエ属（ヒエが含まれる）やエノコログサ属（アワが含まれる）に近似したものが含まれており，ウシクサ族型（大型）の中にはサトウキビ属に近似したものも含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお，植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため，根菜類などの畠作物は分析の対象外となっている。

（２）植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外のイネ科の分類群では，ヨシ属，ススキ属型，ウシクサ族型，メダケ節型，ネザサ節型，クマザサ属型などが検出されたが，いずれも少量である。樹木では，マンサク科（イスノキ属）が比較的多く検出され，ブナ

科（シイ属）なども検出された。樹木はイネ科と比較して一般に植物珪酸体の生産量が低いことから，植物珪酸体分析の結果から古植生を復原する際には，他の分類群よりも過大に評価する必要がある。おもな分類群の推定生産量によると，イネが最も卓越していることが分かる。

以上のことから，当時の調査区周辺はススキ属やチガヤ属，メダケ節，ネザサ節などが生育する草原的な環境であり，部分的にヨシ属が生育する湿地的なところも見られたものと推定される。また，遺跡周辺にはイスノキ属やシイ属などの照葉樹林が分布していたものと考えられる。

6　まとめ

分析の結果，中世とされる畝間状遺構①からは，イネの植物珪酸体（プラント・オパール）が多量に検出され，同遺構で稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また，同遺構の一部ではムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

当時の調査区周辺は，ススキ属やチガヤ属，メダケ節などが生育する草原的な環境であり，部分的にヨシ属が生育する湿地的なところも見られたものと推定される。また，遺跡周辺にはイスノキ属などの照葉樹林が分布していたものと考えられる。

参考文献

杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第２号，p.27-37.

杉山真二・石井克己（1989）群馬県子持村，ＦＰ直下から検出された灰化物の植物珪酸体（プラント・オパール）分析．日本第四紀学会要旨集，19，p.94-95.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，９，p.15-29.

表68　植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

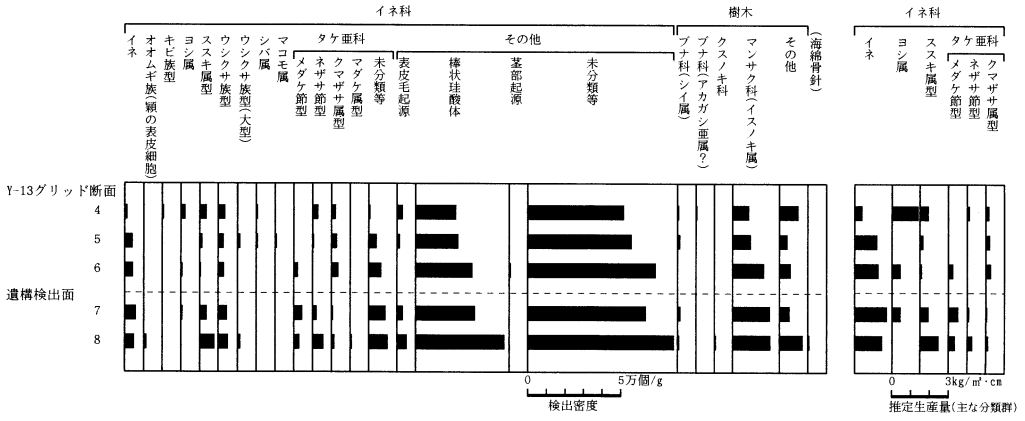
分類群 ＼ 試料	Y-13グリッド断面 4	5	6	遺構検出面 7	8
イネ科					
イネ	14	41	43	59	50
オオムギ族(穎の表皮細胞)					14
キビ族型	7				
ヨシ属	22		7	7	
ススキ属型	36	14	7	37	79
ウシクサ族型	36	27	29	44	50
ウシクサ族型(大型)		14			14
シバ属	7	7			
マコモ属		7			
タケ亜科					
メダケ節型			22	44	29
ネザサ節型	29	7		22	57
クマザサ属型	22	27	36	7	14
マダケ属型					7
未分類等	7	41	65	88	100
その他のイネ科					
表皮毛起源	29	14		29	50
棒状珪酸体	217	227	303	316	474
茎部起源			7		
未分類等	515	556	685	633	782
樹木起源					
ブナ科(シイ属)	7	14		15	7
ブナ科(アカガシ亜属?)	7				
クスノキ科					7
マンサク科(イスノキ属)	87	96	166	199	201
その他	101	41	58	52	122
(海綿骨針)					7
植物珪酸体総数	1145	1133	1427	1553	2060

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡･cm）

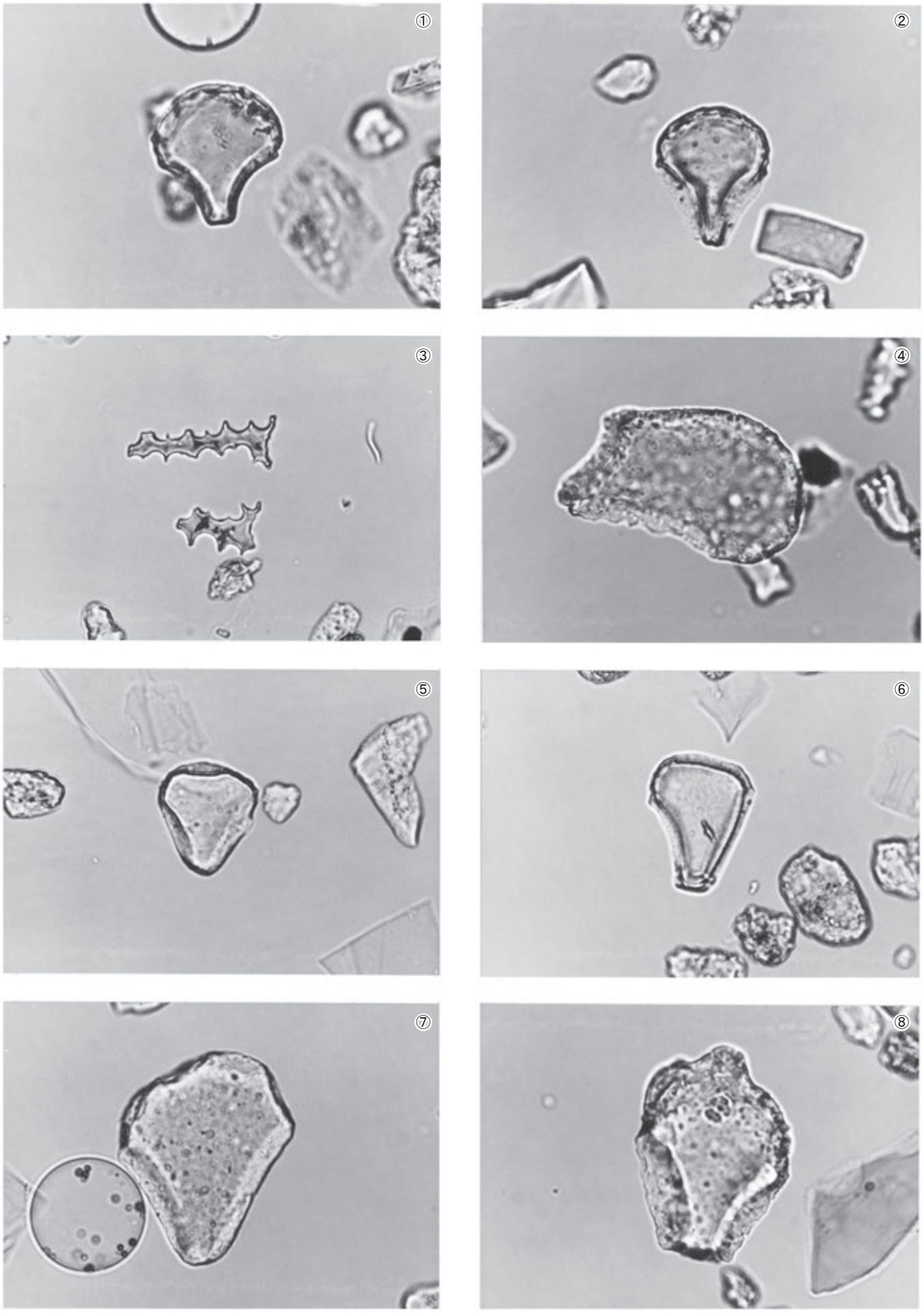
イネ	0.43	1.21	1.27	1.73	1.48
ヨシ属	1.37		0.45	0.46	
ススキ属型	0.45	0.17	0.09	0.46	0.98
メダケ節型			0.25	0.51	0.33
ネザサ節型	0.14	0.03		0.11	0.28
クマザサ属型	0.16	0.21	0.27	0.06	0.11

タケ亜科の比率（%）

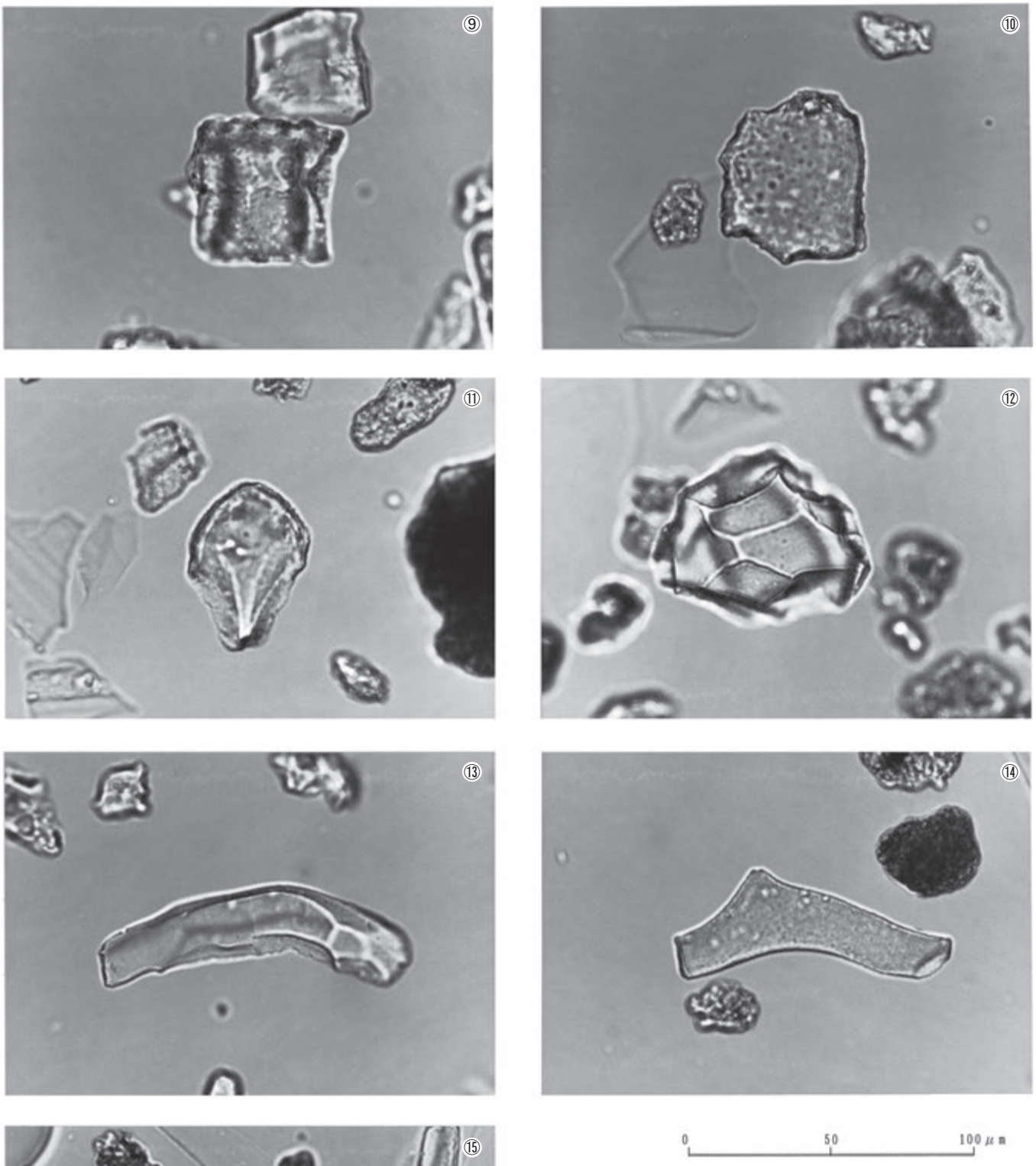
メダケ節型			48	76	46
ネザサ節型	46	14		16	38
クマザサ属型	54	86	52	8	15



第190図　Ｙ－13グリッドにおける植物珪酸体分析結果



植物珪酸体写真 1



①･② イネ
③ オオムギ族
④ ヨシ属
⑤･⑥ ススキ属型
⑦ ウシクサ族型
⑧ メダケ節型
⑨ ネザサ節型
⑩ クマザサ属型
⑪ マダケ属型
⑫ ブナ科（シイ属）
⑬ クスノキ科
⑭ マンサク科（イスノキ属）
⑮ 海綿骨針

植物珪酸体写真 2

第７節　花粉分析

株式会社　古環境研究所

１　試料

分析試料は，Ｙ－13グリッド断面（中世畝間状遺構④）の溝部（試料４）と畝部（試料５）の２点である。

２　方法

花粉粒の分離抽出は，基本的には中村（1973）を参考にし，試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

１）５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
２）水洗した後，0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き，沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
３）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
４）水洗した後，氷酢酸によって脱水し，アセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。
５）再び氷酢酸を加えた後，水洗を行う。
６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い，グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は，1500rpm，２分間の遠心分離を行った後，上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

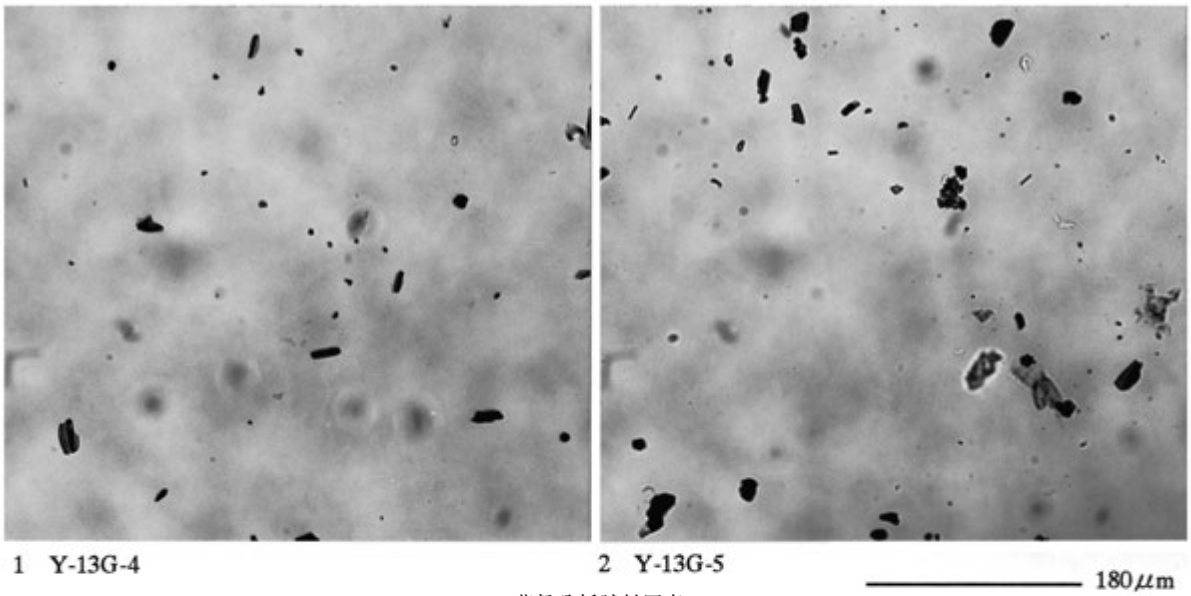
検鏡はプレパラート作製後直ちに，生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は，島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし，所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって，科，亜科，属，亜属，節および種の階級で分類した。

３　結果と考察

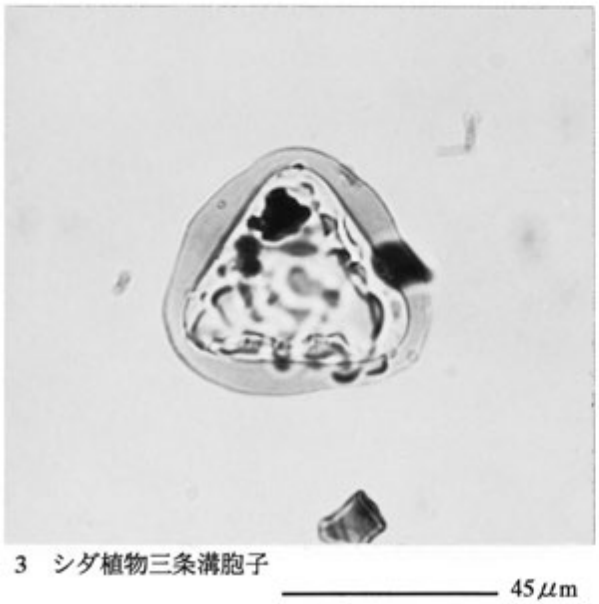
分析の結果，中世畝間状遺構④の溝部（試料４）からシダ植物胞子１形態がごく少量検出されたが，花粉はいずれの試料からも検出されなかった。このように花粉が検出されない原因として，乾燥的な土壌生成作用や風化作用によって花粉が分解されたことなどが考えられる。

参考文献

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料　研究の方法，角川書店，p.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.
中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.



花粉分析試料写真



植物珪酸体写真

第８節　古代畝間状遺構②に関する自然科学調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

Ｋ－７区で検出された古代畝間状遺構②に関して，年代に関する情報を放射性炭素年代測定，作物に関する情報を花粉分析と植物珪酸体分析により得る。また，便所遺構の堆積物では寄生虫卵の密度から糞便の堆積を検出することができる（黒崎ほか1994）ことから，畝溝への施肥（人糞の利用）の可能性を寄生虫卵分析により検討する。

１　試料

調査対象は，Ｋ－７区西壁で見られた堆積物である。この堆積物は主に砂で構成され，下位より年代不詳の畝溝を構成するシルト混じり砂，洪水砂，鎌倉時代遺物包含層のシルト混じり砂～砂，旧水田耕土のシルト混じり砂の４つに区分される。

畝溝は，発掘調査所見から平安時代の可能性も指摘されており，東西方向に並行して構築されている。なお，他区内には弥生時代，古墳時代，平安時代，鎌倉時代の各遺物包含層から認められている。

試料は，壁面から堆積物５点が採取された（第191図）。

この中から，畝溝堆積物（試料５）を中心に試料を選択し，放射性炭素年代測定１点（試料５），花粉・寄生虫卵分析２点（試料２・５），植物珪酸体分析４点（試料１・２・３・５）を選択した。

２　分析方法

（１）放射性炭素年代測定

測定は，学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。

（２）花粉分析・寄生虫卵分析

試料約10g に対して，水酸化カリウムによる泥化，篩別，重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離，フッ化水素酸による鉱物質の除去，アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し，花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し，光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査する。出現する花粉・胞子化石の全ての種類について同定・計数する。

なお，寄生虫卵に関しては金原・金原（1994）等の分析方法を参考に，試料を正確に秤量して花粉分析と同様な物理・化学的処理を施す。処理後の残渣を定容して一定量を抽出し，グリセリンで封入して，１ｇあたりの各種類の個数を正確に求める。

（３）植物珪酸体分析

試料中の植物珪酸体は，過酸化水素水・塩酸処理，超音波処理（70w，250kHz，１分間），沈定法，重液分離法（ポリタングステイト，比重2.4）の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に希釈し，カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後，プリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下全面を走査し，その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下，短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下，機動細胞珪酸体と呼ぶ）を，近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

３　結果

（１）放射性炭素年代測定

結果を表69に示す。

表69　Ｋ－７区西壁の放射性炭素年代測定結果

試料名	試料の状態	年代値 (y.B.P.)	Δ^{14}Ｃ補正	Coad-No.
Ｋ-７区西壁　畝溝	土壌	1,640±60	−185.4±6.0	Gak-20360

年代値：1,950年を基点とした値。

（２）花粉化石・寄生虫卵の産状

試料２では保存状態の悪いシダ類胞子２個体のみが認められ，花粉化石は検出されない。また，試料５は無化石である。一方，寄生虫卵は２試料とも検出されない。

４　考察

（１）畑の年代について

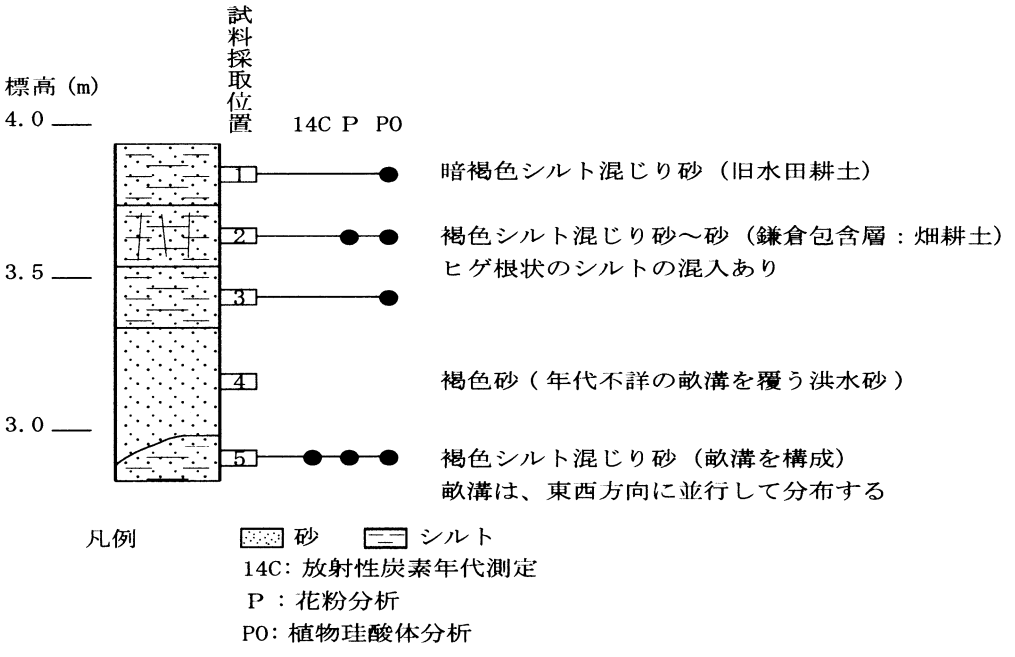
Ｋ－７区北壁の畝溝から得られた放射性炭素年代値は，紀元４世紀頃の年代を示した。発掘調査所見からは平安時代頃の可能性が指摘されており，今回の測定結果とは年代観に差が見られる。

この点は，測定した土壌中の有機物（土壌腐植）に起因すると考えられ，畝溝を構成する土壌の形成過程を明らかにし，測定値を評価する必要がある。

（２）畑の作物について

畝溝では，栽培植物としてイネ属の植物珪酸体が認められたものの，わずかであった。イネ属は，陸稲が畑作されるとともに，畑の保温・保湿材として敷き藁されることもある。今回検出されたイネ属が畑作物か，敷き藁に由来するものか，今回の結果からは明確にならないが，いずれにしろ畝溝での畑作に関連する可能性が考えられる。しかし，キビ類やムギ類などの植物珪酸体は検出されず，これらのイネ科畑作物が栽培されていた可能性は低い。

なお，ソバなどに由来する花粉化石は全く検出されなかったが，花粉・胞子化石は有機膜で構成されているため，空気中の酸素により酸化・分解されやすい。また，畝溝で畑作が行われた場合，畑耕土は常に空気に曝されていたことが想像される。わずかに検出されたシダ類胞子の保存状態が悪かったことを考慮すれば，花粉・胞子化石が畝溝へ混入・堆積した後に酸素に曝される好気的状態があったことなどの要因で分



第191図　Ｋ－７区西壁の分析層位

解・消失したと考えられる。そのため，他の畑作物が栽培されていた可能性もある。

また，この時期の植生について，今回の結果から詳細を検討することは困難である。しかし，少なくとも検出された植物珪酸体の産状から，タケ亜科をはじめとして，ウシクサ族，イチゴツナギ亜科などのイネ科植物が生育していたことがうかがえる。

上位層では，鎌倉時代遺物包含層でもイネ属が認められ，その出現率も高くなる。そのため，本層が堆積した頃には，本地点でも稲作が行われるようになったことがうかがえる。さらに，旧水田耕土でもイネ属が検出され，現地所見を裏付ける結果と言える。また，周囲にはタケ亜科などのイネ科植物が生育していたと思われる。

（3）施肥の可能性について

畝溝からは，寄生虫卵が全く検出されなかった。寄生虫卵は，花粉・胞子化石と同様に有機膜で構成されているため，空気中の酸素に曝される好気的状態では分解・消失する可能性がある。そのため，今回の産状から施肥などで糞便が利用されていたかを判断することは困難である。

なお，施肥が行われた場合にはリン酸などの成分含量が高くなることも想定され，土壌理化学分析を実施することで間接的に検討できると思われる。そのため今後，同時期の耕作地を対象とした調査例を増やし，糞便利用について検討していきたい。

表70　K－7区西壁の植物珪酸体分析結果

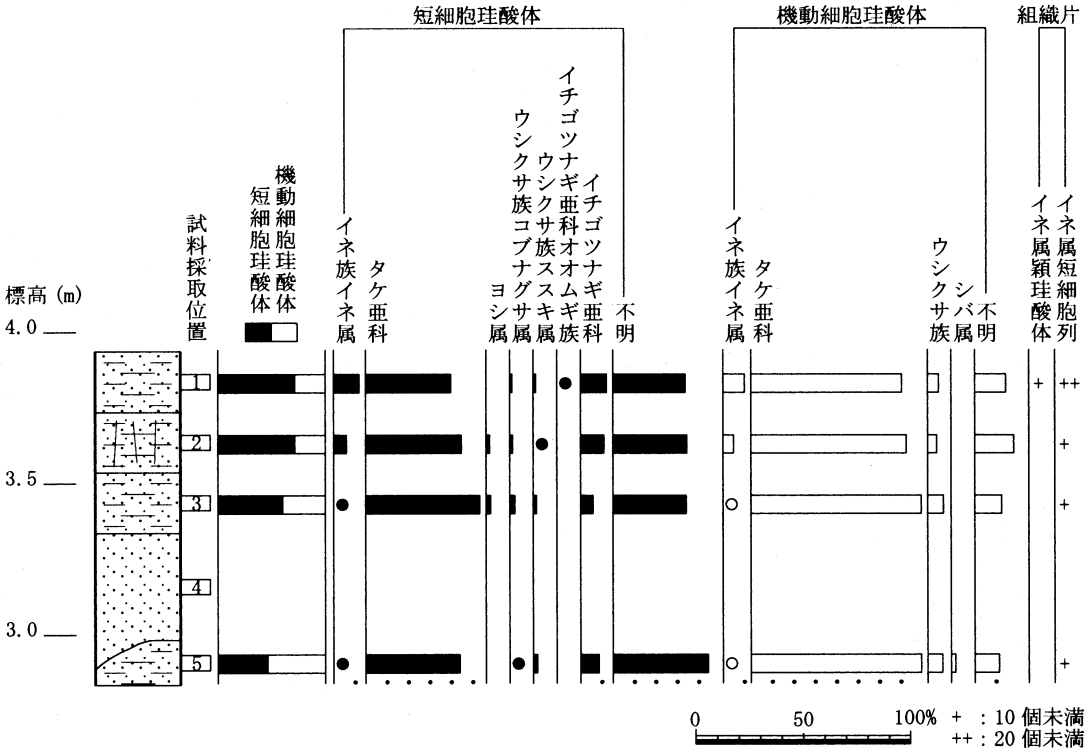
種類 / 試料番号	1	2	3	5
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	42	18	2	1
タケ亜科	140	136	109	93
ヨシ属	－	5	4	－
ウシクサ族コブナグサ属	4	4	5	2
ウシクサ族ススキ属	4	3	3	4
イチゴツナギ亜科オオムギ族	1	－	－	－
イチゴツナギ亜科	43	33	12	18
不明キビ型	76	57	31	37
不明ヒゲシバ型	9	9	4	3
不明ダンチク型	34	39	35	54
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	14	6	1	1
タケ亜科	97	87	108	196
ウシクサ族	7	5	10	17
シバ属	－	－	－	5
不明	20	22	17	28
合計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	353	304	205	212
イネ科葉身機動細胞珪酸体	138	120	136	247
総計	491	424	341	459
組織片				
イネ属穎珪酸体	2	－	－	－
イネ属短細胞列	12	3	1	1

引用文献

金原正明・金原正子（1994）堆積物中の情報の可視化．可視化情報，14（53），p.79-84.

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，P.31-64.

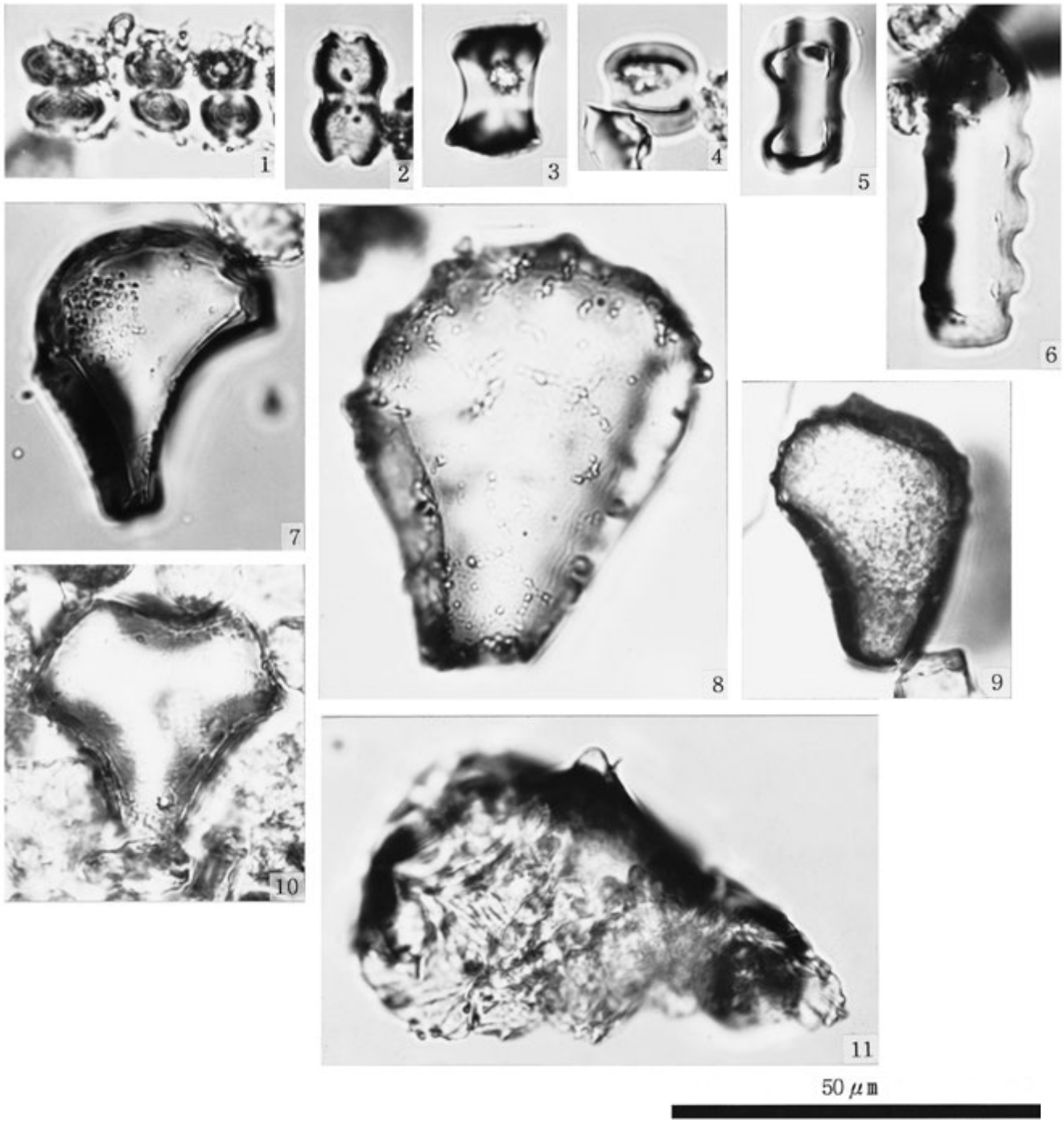
黒崎　直・松井　章・金原正明・金原正子（1994）トイレの考古学．日本考古学協会第60回総会研究発表要旨集，p.49-51，日本考古学協会.



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は１％未満の種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により＋の記号で示す。

第192図　植物珪酸体群集と組織片の産状

植物珪酸体写真



1．イネ属短細胞列（試料番号1）
2．イネ属短細胞珪酸体（試料番号1）
3．タケ亜科短細胞珪酸体（試料番号3）
4．ヨシ属短細胞珪酸体（試料番号2）
5．コブナグサ属短細胞珪酸体（試料番号1）
6．オオムギ族短細胞珪酸体（試料番号1）
7．イネ属機動細胞珪酸体（試料番号3）
8．タケ亜科機動細胞珪酸体（試料番号3）
9．ウシクサ族機動細胞珪酸体（試料番号3）
10．シバ属機動細胞珪酸体（試料番号4）
11．イネ属穎珪酸体（試料番号1）

第９節　中世畝間状遺構②に関する自然科学調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

持躰松遺跡は，万之瀬川添いの低地に立地する。平安時代（12世紀後半）の中国製陶磁器類がまとまって出土し，中世以前と考えられる畑跡も検出されている。

今回の分析調査では，Ｇ－４区で検出された畑跡の年代に関する情報を放射性炭素年代測定，作物に関する情報を花粉分析と植物珪酸体分析により得る。また，今回は施肥（人糞の利用）の可能性を検討するため，畑跡の堆積物について寄生虫卵分析を試みる。これは，便所遺構の堆積物では，寄生虫卵の密度から糞便の堆積を検出することができる（黒崎ほか，1994）ためである。

なお，本遺跡Ｋ－７区でも中世以前の畝溝が検出されており，栽培植物や施肥に関する情報を得る目的で同様な自然科学調査を実施した。その調査結果とも比較検討を行う。

１　試料

調査対象は，Ｇ－４区北壁で見られた堆積物である。この堆積物は主に砂で構成され，大きく７つに区分される。

このうち，最下位には古墳時代遺物包含層のⅤ層，上位に時期不明の畑跡が検出されたⅣ層，これを覆う洪水砂が見られる。Ⅳ層は，発掘調査所見からＫ－７区の畝溝よりも上位とされる。また，砂とシルトの互層，さらに上位に比較的厚い灰褐色砂層を経て，中世遺物包含層（Ⅲｂ層），褐灰色シルト混じり砂（床土？），Ⅲａ層とされる暗褐色シルト混じり砂が堆積する。

試料は，北壁断面で堆積物11点を採取した（第193図）。この中から，畑跡を中心に試料を選択し，放射性炭素年代測定１点（試料番号10），花粉・寄生虫卵分析と植物珪酸体分析２点（試料番号10・11）を実施する。

２　分析方法

（１）放射性炭素年代測定

測定は，学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。放射性炭素の半減期として，LIBBY の半減期5,570年を使用している。

（２）花粉分析・寄生虫卵分析

試料約10g に対して，水酸化カリウムによる泥化，節別，重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離，フッ化水素酸による鉱物質の除去，アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し，花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し，光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査する。この間に出現する花粉・胞子化石の全ての種類について，同定・計数する。

なお，寄生虫卵分析では，金原・金原（1994）等の分析方法を参考に，試料を正確に秤量して花粉分析と同様な物理・化学的処理を施し，処理後の残渣を定容して一定量を抽出し，グリセリンで封入して，１ｇあたりの各種類の個数を正確に求める。

結果は，出現個体数の一覧表として表示する。また，花粉化石が100個体以上検出された試料については百分率で出現率を算出し，花粉化石群集組成図を作成する。出現率の算出は，総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数として用いた。図表中で複数の種類をハイフォン（－）で結んだものは，種類間の区別が困難なものである。

（３）植物珪酸体分析

試料中の植物珪酸体は，過酸化水素水・塩酸処理，超音波処理（70W，250KHz，１分間），沈定法，重液分離法（ポリタングステイト，比重2.4）の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に希釈し，カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後，プリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し，その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下，短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下，機動細胞珪酸体と呼ぶ）を，近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

３　結果

（１）Ｇ－４区北壁の放射性炭素年代値

結果を表71に示す。

表71　Ｇ－４区北壁の放射性炭素年代値

試料名	試料の質	年代値	誤差（±）	$\delta^{13}C$	測定番号
10（畑跡）	土壌	290	70	−20.4	Gak-20373

注（１）年代値：1,950年を基点とした値。同位体補正がされている
（２）誤差：標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代
（３）$\delta^{13}C$：試料炭素の$^{13}C/^{12}C$ 原子比を質量分析器で測定し，標準に PDB を用いて同様に算出した値

（２）Ｇ－４区北壁の花粉化石・寄生虫卵の産状

調査した２点のうち，試料番号11ではシダ類胞子１個，試料番号10ではシダ類胞子25個が検出されるが，花粉化石は全く認められない。

また，寄生虫卵は２試料とも検出されない。

（３）Ｇ－４区北壁の植物珪酸体の産状

結果を表72，第194図に示す。

各試料から植物珪酸体が検出されるものの，保存状態が悪く，表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

試料番号11・10では，イネ属やキビ類，ムギ類などのイネ科作物に由来する植物珪酸体が検出されない。

検出される種類はタケ亜科，ヨシ属，ウシクサ族，イチゴツナギ亜科などであり，その中ではタケ亜科の産出が顕著である。

４　考察

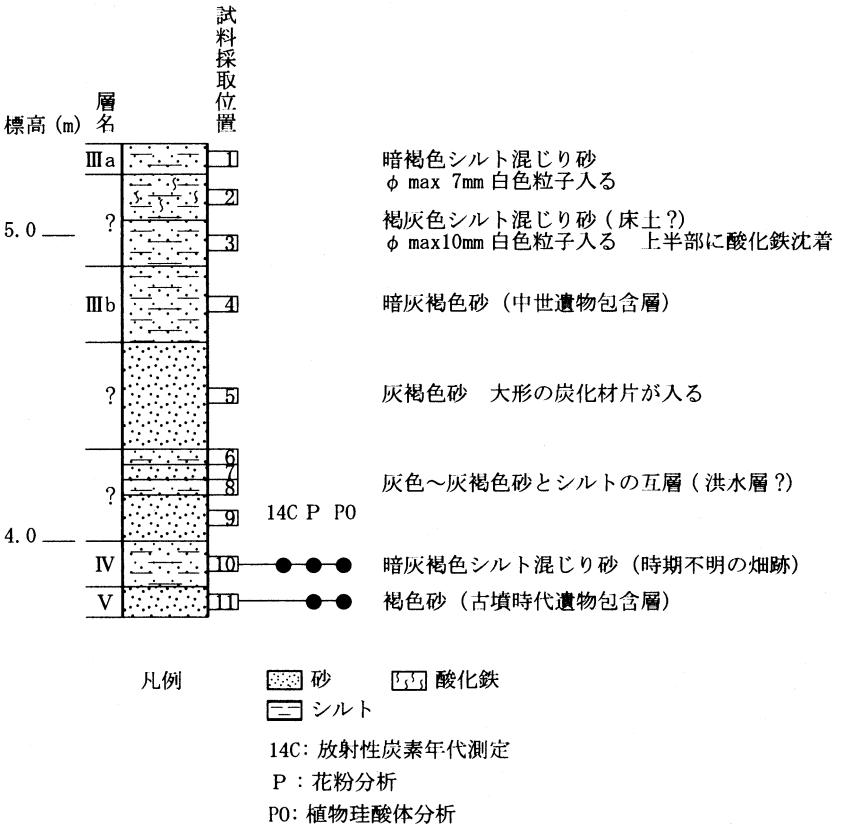
（１）畑の年代について

Ｇ－４区北壁の畑跡から得られた放射性炭素年代値は，17世紀頃に相当する。この年代値は，Ｋ－７区西壁で検出された中世以前の畝溝より層位的に上位にあることとは矛盾しないが，本地点の中世遺物包含層との間に層位的な逆転を生じる。

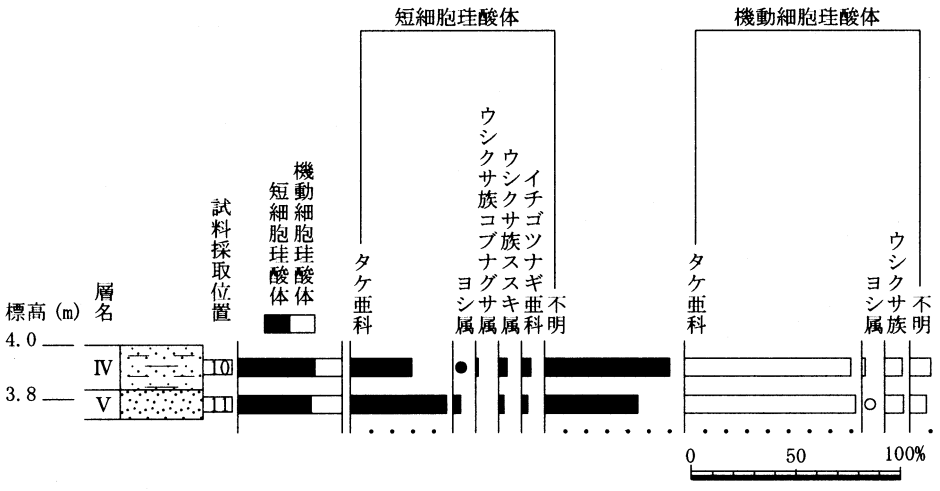
この点は，測定した炭素が土壌中の有機物（土壌腐植）であることに起因すると考えられる。すなわち，生成年

表72　G－4区北壁の植物珪酸体分析結果

種　　類 / 試料番号	10	11
イネ科葉部短細胞珪酸体		
タケ亜科	100	108
ヨシ属	3	9
ウシクサ族コブナグサ属	4	－
ウシクサ族ススキ属	14	6
イチゴツナギ亜科	15	7
不明キビ型	90	45
不明ヒゲシバ型	9	11
不明ダンチク型	105	49
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
タケ亜科	95	82
ヨシ属	2	1
ウシクサ族	10	9
不明	12	8
合　計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	340	235
イネ科葉身機動細胞珪酸体	119	100
総　計	459	335



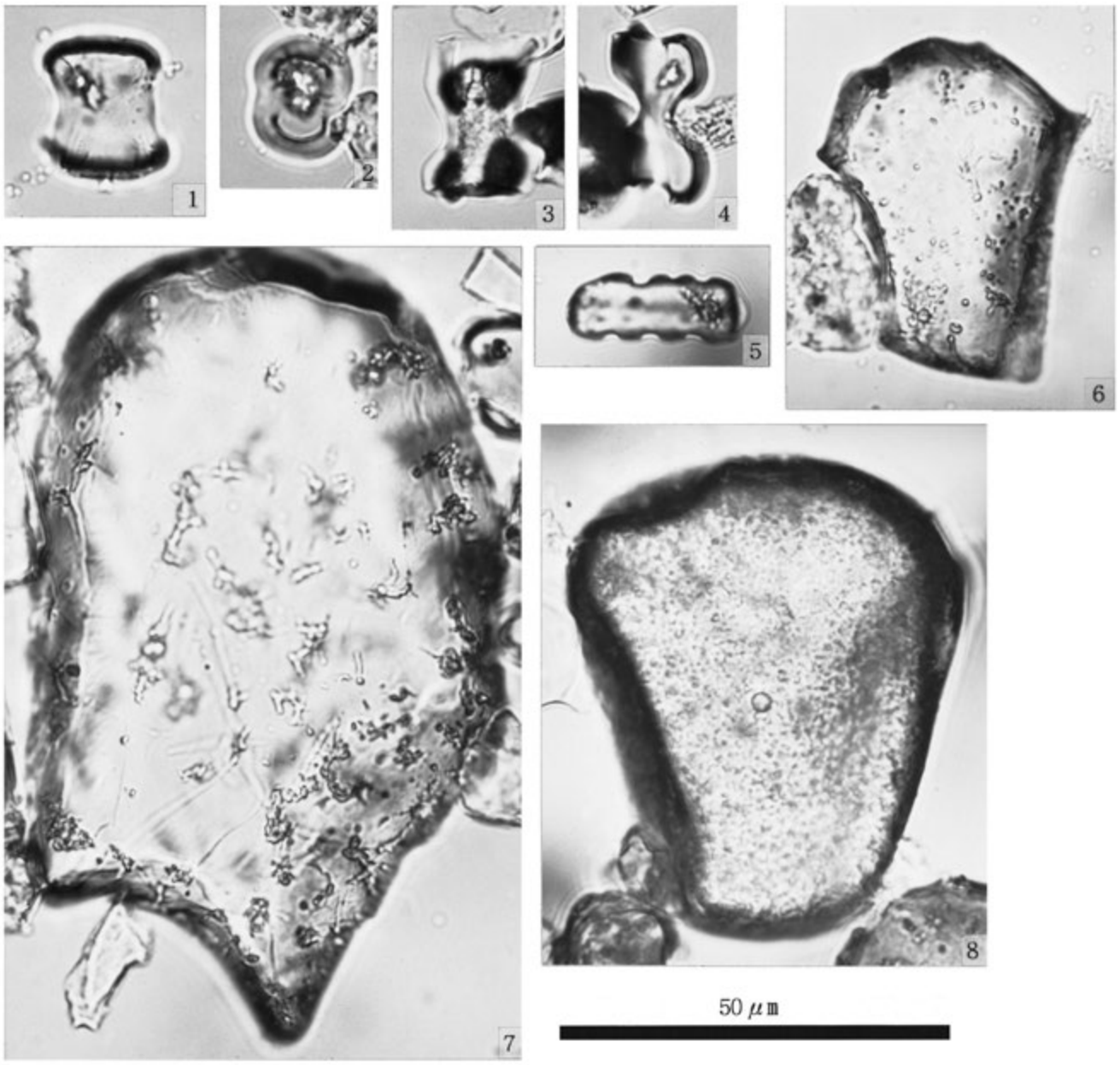
第193図　G－4区北壁の分析層位



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は1％未満の種類を示す。

第194図　植物珪酸体群集の層位分布

植物珪酸体写真



1．タケ亜科短細胞珪酸体（試料番号11）
2．ヨシ属短細胞珪酸体（試料番号11）
3．コブナグサ属短細胞珪酸体（試料番号10）
4．ススキ属短細胞珪酸体（試料番号10）
5．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（試料番号10）
6．タケ亜科機動細胞珪酸体（試料番号10）
7．ヨシ属機動細胞珪酸体（試料番号10）
8．ウシクサ族機動細胞珪酸体（試料番号10）

代の若い上位層の有機物が，本地点のような粗い砕屑物で構成される堆積物中で下位に浸透・移動し，畑跡の堆積物中に上位の有機物が混入したためと思われる。

したがって，今回の畑跡の年代に関しては，今後の類例蓄積をまって再検討する必要がある。

（2）畑の作物について

古墳時代遺物包含層と上位の畑跡からは，栽培植物に由来する花粉化石や植物珪酸体が全く検出されなかった。花粉・胞子化石は有機膜で構成されているため，空気中の酸素により酸化・分解されやすいので，畑耕土は常に空気に曝されていたことが想像される。わずかに検出されたシダ類胞子の保存状態が悪かったことを考慮すれば，花粉・胞子化石が酸素に曝される好気的状態があったことなどの要因で分解・消失したと考えられる。そのため，今回の産状から，栽培されていた畑作物の種類を推定できない。

また，本地区ではイネ科作物に由来すると見られる植物珪酸体に乏しく，その栽培は考えにくい。しかし，本地区の畑跡以前に構築されていたとされるＫ－７区の畝溝では，イネ属の植物珪酸体が検出されており，稲作が行われた可能性があったが，本地区では判然としない。

なお，今回得られた分析結果からこの時期の植生について詳細を検討することは困難であったが，わずかながら検出された植物珪酸体の産状から，タケ亜科をはじめとして，ウシクサ族，イチゴツナギ亜科などのイネ科植物が生育していたと考えられる。

（3）施肥の可能性について

畑跡試料からは，寄生虫卵が全く検出されなかった。寄生虫卵は，花粉・胞子化石と同様に有機膜で構成されているため，空気中の酸素に曝される好気的状態では分解・消失する可能性が高い。なお，今回の産状から施肥などで糞便が利用されていたか判断することは困難である。

なお，畑などで施肥が行われた場合には，リン酸などの成分含量が高くなることが想定されるので，今後土壌化学分析を実施することで間接的に検討できると思われる。今後，同時期の耕作地を対象とした調査例を増やし，検討していきたい。

引用文献

金原正明・金原正子（1994）堆積物中の情報の可視化．可視化情報，14（53），p.79-84.

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-64

黒崎　直・松井　章・金原正明・金原正子（1994）トイレの考古学．日本考古学協会第60回総会研究発表要旨集，p.49-51，日本考古学協会.

第10節　１号土坑墓に関する自然科学調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

持躰松遺跡は万之瀬川添いの低地に立地する。発掘調査の結果，平安時代（12世紀後半）の中国製陶磁器類がまとまって出土しており，このうち，０－９地区では１号土坑墓から白磁の端反碗と青白磁の合子が出土した。今回は１号土坑墓に関して，年代観に関する情報を得ることを目的として放射性炭素年代測定，内容物に関する情報を得ることを目的としてリン分析と脂肪酸分析を実施する。

１．年代推定

1－1．試料

調査対象は，１号土坑墓埋土１点である。

1－2．分析方法

測定は，学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。

1－3．結果

結果を表73に示す。

表73　１号土坑墓試料の放射性炭素年代測定結果

試料名	試料の質	年代値	誤差（±）	$\delta^{13}C$	測定番号
１号土坑埋土	土壌	1,790	60	−22.4	GaK-20361

注．（１）年代値：1,950年を基点とした値。同位体補正がされている。
（２）誤差：標準偏差（ONE　SIGMA）に相当する年代。
（３）$\delta^{13}C$：試料炭素の$^{13}C/^{12}C$原子比を質量分析器で測定し，標準に PDB を用いて同様に産出した値。

1－4．考察

土坑埋土の放射性炭素年代測定値は，同位体補正値で1790±60年前を示した。本土坑の時代観については，覆土上部から出土した白磁椀が12世紀後半～13世紀前半のものであったこと，本土坑が構築されている堆積層が奈良・平安時代の遺物を包含していることから，中世頃のものと考えられている。今回の年代値はその時代観よりかなり古い値となっている。この原因としては，１）土坑を堆積物が別の場所から持ち込まれたもので，その土壌の堆積年代が古かった。２）本土坑が構築されている堆積物が長い間地表面となっており（古墳時代の頃よりあまり堆積していない），古い時期の炭素が含まれていた，などの可能性が考えられる。今後，調査地点の地形や堆積層序に関する検討を行い，発掘調査成果と併せて，今回の年代値について再評価したいと考える。

２．内容物の検討

2－1．試料

試料は土坑墓埋土，および対照試料とされた基本土層Ⅲｂ層とⅢｃ層から採取された合計３点である。

2－2．分析方法

（１）リン分析

測定は，土壌養分測定法委員会（1981）を参考に，硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法で行った（土壌養分測定法委員会，1981）。以下に，各項目の操作工程を示す。

試料を風乾後，軽く粉砕して2.00㎜の飾を通過させ，風乾紳士試料とする。風乾紳士試料の水分を加熱減量法（105℃，５時間）により測定する。風乾紳士試料2.00gをケルグール分解フラスコに秤量し，はじめに硝酸約５

mlを加えて加熱分解する。放冷後，過塩素酸約10mlを加えて，再び加熱分解を行う。分解終了後，水で100mlに定容して，ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し，リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P205）濃度を測定する。

測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P205㎎/g）を求める。

（2）脂肪酸分析

脂肪酸分析定法（坂井ほか，1996）に基づき，脂肪酸を抽出した後，クロマトグラフィーで測定し，測定データを解析する。

2−3. 結果

（1）リン分析

結果を表74に示す。

土坑墓埋土および対照試料は，いずれも黒褐色を呈する粘土質である。

リン酸含量は，対照試料と比較して土坑墓埋土が僅かに高い。

表74　リン分析結果

試料		土性	土色		P205（㎎/g）
土坑	埋土	Lic	10YR3/2	黒褐	1.71
サンプルA	O-9区Ⅲb層	Lic	10YR3/2	黒褐	1.49
	O-9区Ⅲc層	Lic	10YR3/2	黒褐	1.29

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性
Lic：軽埴土（粘土25〜45%，シルト0〜45%，砂10〜55%）

（2）脂肪酸分析

結果を第195図に示す。埋土の脂肪酸組成は，対照試料とはぼ同様である。哺乳類の脳・神経・臓器に多く分布する（中野，1993）と言われる高級脂肪酸であるC24：0（リグノセリン酸）がわずかに検出されるが，C20：0（アラキジン酸）やC22：0（ベヘン酸）は全く検出されない。

また，ステロールは埋土からはほとんど検出されない。これに対して，対象試料のⅢb層からは動物性のステロールであるコレステロールが確認されており，埋土とは異なる。Ⅲc層は埋土と同様にほとんど検出されない。

2−4. 考察

1号土坑墓埋土および対象試料は，いずれも土色が黒褐色を呈し，土壌腐植に富むことがうかがえる。また，土壌中の理化学成分を保持しやすい粘土にも富むことから，遺構内にリン成分が供給された場合には残留しやすいと推定される。

現在の土壌に含まれるリン酸含量，いわゆる天然賦存量はBowen（1983），Bolt・Bruggenwert，（1980），川崎ほか（1991），天野ほか（1991）から，約3.0P205㎎/g程度と推定される。また，人為的な影響を受けた黒ボク土の平均値は5.5P205㎎/gとの報告もある川崎ほか，（1991）。遺跡の調査例では，骨片などの痕跡が認められる土壌で6.0P205㎎/gを越える場合が多い。したがって，過去の堆積物において，これらの値を著しく越える値を示す場合は，その堆積物中には外的要因（おそらく人為的影響によるもの）によるリン酸成分の富化が指摘できる。

今回の1号土坑墓埋土のリン酸含量は，この天然賦存量の範囲内にある。また，対照試料と比較して若干高い値となっているが，有意差であるとは考えにくい。したがって土坑内に外的要因，特にヒトを含む動物遺体の埋納によるリン酸の富化は認められないと判断される。一方，埋土の脂肪酸・ステロール組成には特異な成分の濃集は見られず，動物遺体の痕跡は認められない。

以上から，本結果を見る限り，土坑内に遺体の痕跡が残留しているとは考えにくく，土坑の用途が墓であるとは一概にいえない。今後さらに，同様な調査により資料を蓄積し，検討していくことが望まれる。

＜引用文献＞

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.28-36.

Bowen，H. J. M.（1983）環境無機化学一元素の循環と生化学一．浅見輝男・茅野充男訳，297p.,

博友社［Bowen，H. J. M.（1979）Environmental Chemistry of Elements］.

Bolt，G. H.・Bruggenwert，M. G. M.（1980）土壌の化学．岩田進午・三輪容太郎・井上隆弘・陽捷行訳，学会出版センター［Bolt，G. H. and Bruggenwert，M. G. M.（1976）SOLD CHEMISTORY］p.235-236.

土壌標準分析・測定法委員会編（1986）土壌標準分析・測定法．354p.，博友社.

土壌養分測定法委員会編（1981）土壌養分分析法．440p.，養賢堂.

川崎　弘・吉田　拷・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省
農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.23-27.

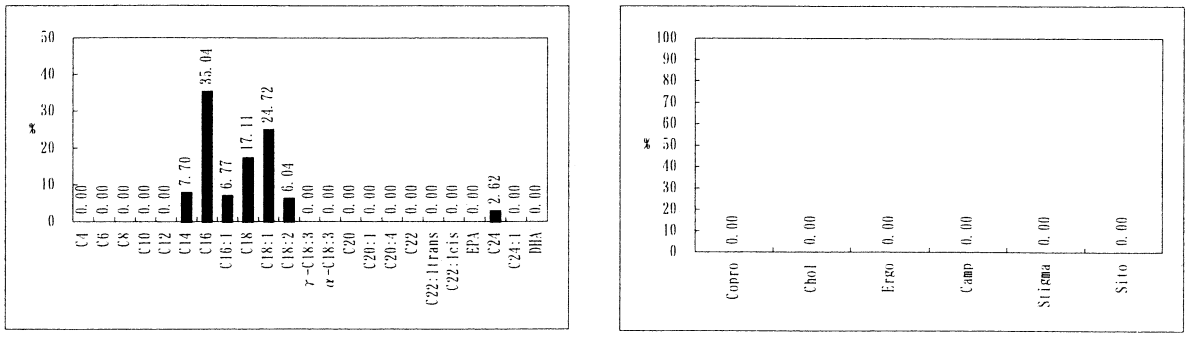
京都大学農学部農芸化学教室編（1957）農芸化学実験書第1巻．411p.，産業図書.

中野益男（1993）脂肪酸分析法．「第四紀試料研究法2研究対象別分析法」，p.388-403，東京大学出版会.

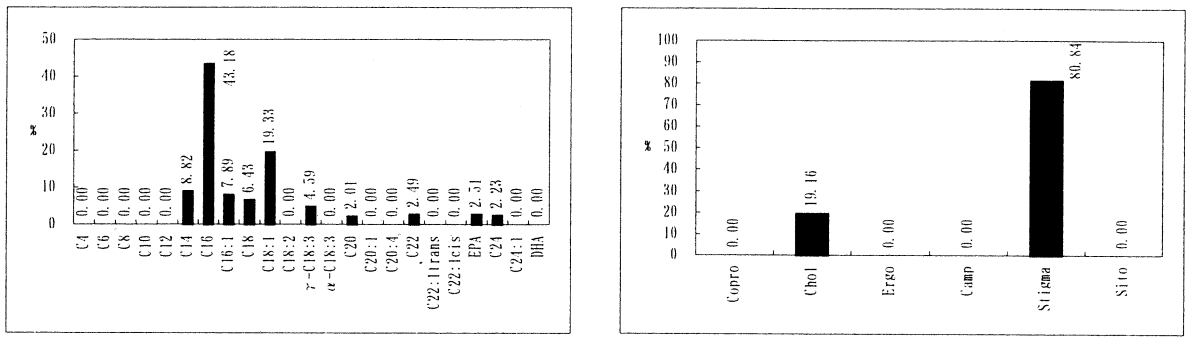
農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.

ペドロジスト懇談会（1984）野外土性の判定．ペドロジスト懇談会編「土壌調査ハンドブック」，p.39-40.

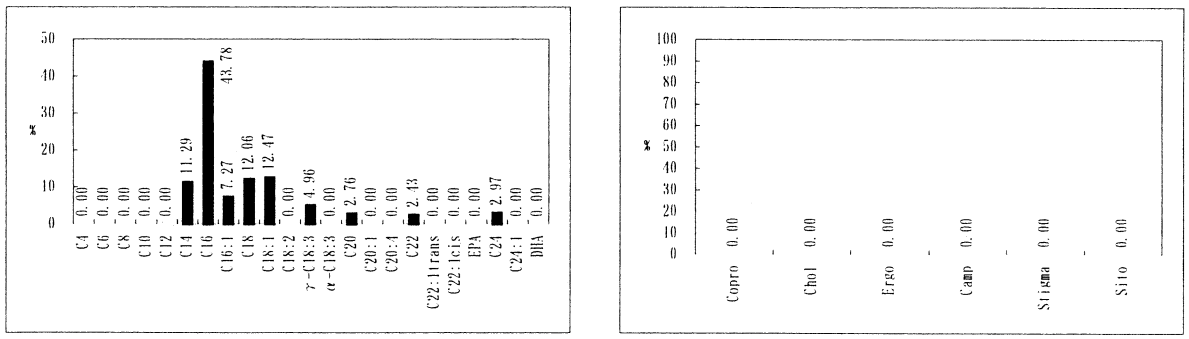
坂井良輔・小林正史・藤田邦雄（1996）灯明皿の脂質分析．富山県文化振興財団埋蔵文化財調査報告第7集「梅原胡摩道遺跡発掘調査報告書（遺物編）第二分冊」，p.24-37，財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所.



埋土



サンプルA（基本土層Ⅲb層）



サンプルA（基本土層Ⅲc層）

第195図　脂肪酸分析結果

第11節　赤色顔料の分析

鹿児島県立埋蔵文化財センター

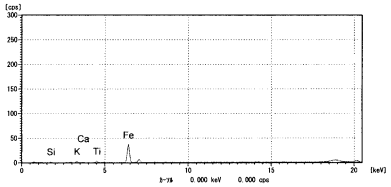
持躰松遺跡出土資料に付着した赤色顔料について，蛍光X線分析装置（堀場製作所製　XGT-1000）を用いて定性分析を行い，走査型電子顕微鏡（日本電子製　JSM-5300LV）を用いて，顔料の粒子形状観察と画像撮影を行った。古代赤色土器174・183共に胎土部分を2カ所，内面の赤色部分を2カ所測定した。

174については，胎土部分と赤色部分とを比較すると，赤色部分の方に鉄の強いピークが表れた。この他に，銅が0.2～0.3%赤色部分に認められた。

183については，胎土部分と赤色部分とに鉄分が多く認められているが，両者について明確な差が認められなかった。このことが，何に由来するのかは不明である。

No.174

①胎土部分１



'07/07/05 13:13

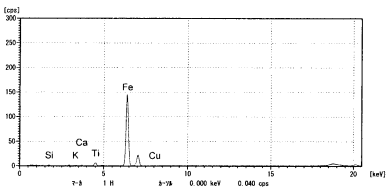
H19-032.SPM ('07/07/05 13:09)
MTM97W-14IV上 胎土1

XGT径	: 100 μm	測定時間	: 50 s
X線管電圧	: 50 kV	電流	: 1000 μA
ﾊﾟﾙｽ処理時間	: P3		
X線ﾌｨﾙﾀ	: なし	試料ｾﾙ	: なし

定量補正法 : ｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞﾚｽ

元素	ﾗｲﾝ	質量濃度[%]	3σ[%]	強度[cps/mA]
14 Si けい素	K	25.37	2.66	19.62
19 K カリウム	K	9.35	0.74	34.01
20 Ca カルシウム	K	5.73	0.51	25.15
22 Ti チタン	K	6.11	0.48	42.01
26 Fe 鉄	K	53.44	2.01	607.12

③内面赤色部分１



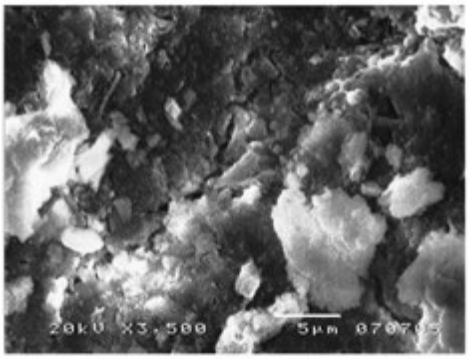
'07/07/05 12:16

H19-030.SPM ('07/07/05 11:01)
MTM97W-14IV上 内面付着物（顔料）再1

XGT径	: 100 μm	測定時間	: 50 s
X線管電圧	: 50 kV	電流	: 1000 μA
ﾊﾟﾙｽ処理時間	: P3		
X線ﾌｨﾙﾀ	: なし	試料ｾﾙ	: なし

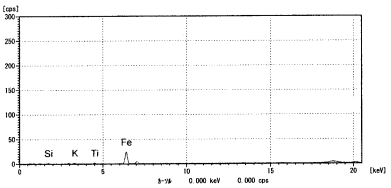
定量補正法 : ｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞﾚｽ

元素	ﾗｲﾝ	質量濃度[%]	3σ[%]	強度[cps/mA]
14 Si けい素	K	11.19	1.53	16.53
19 K カリウム	K	1.26	0.21	11.90
20 Ca カルシウム	K	1.44	0.14	19.94
22 Ti チタン	K	3.26	0.19	77.46
26 Fe 鉄	K	82.56	1.46	2425.16
29 Cu 銅	K	0.28	0.22	4.20



③の写真

②胎土部分２



'07/07/05 13:24

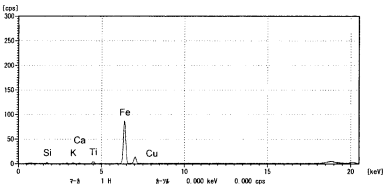
H19-033.SPM ('07/07/05 13:21)
MTM97W-14IV上 胎土2

XGT径	: 100 μm	測定時間	: 50 s
X線管電圧	: 50 kV	電流	: 1000 μA
ﾊﾟﾙｽ処理時間	: P3		
X線ﾌｨﾙﾀ	: なし	試料ｾﾙ	: なし

定量補正法 : ｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞﾚｽ

元素	ﾗｲﾝ	質量濃度[%]	3σ[%]	強度[cps/mA]
14 Si けい素	K	26.72	3.45	12.87
19 K カリウム	K	13.12	1.13	29.09
22 Ti チタン	K	5.92	0.63	26.64
26 Fe 鉄	K	54.24	2.67	395.00

④内面赤色部分２



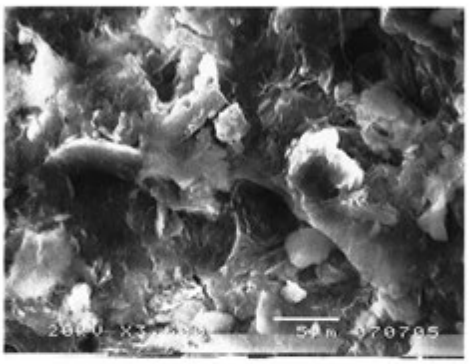
'07/07/05 12:15

H19-031.SPM ('07/07/05 12:07)
MTM97W-14IV上 内面付着物（顔料）再2

XGT径	: 100 μm	測定時間	: 50 s
X線管電圧	: 50 kV	電流	: 1000 μA
ﾊﾟﾙｽ処理時間	: P3		
X線ﾌｨﾙﾀ	: なし	試料ｾﾙ	: なし

定量補正法 : ｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞﾚｽ

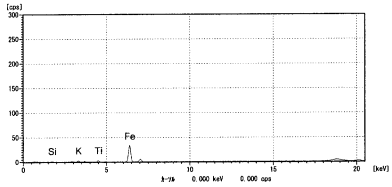
元素	ﾗｲﾝ	質量濃度[%]	3σ[%]	強度[cps/mA]
14 Si けい素	K	20.85	1.92	24.45
19 K カリウム	K	4.31	0.38	27.46
20 Ca カルシウム	K	1.96	0.24	17.00
22 Ti チタン	K	3.57	0.26	52.67
26 Fe 鉄	K	68.95	1.73	1454.26
29 Cu 銅	K	0.39	0.30	4.67



④の写真

No.183

①胎土部分１



'07/07/05 14:10

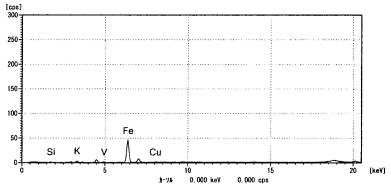
H19-036.SPM ('07/07/05 13:51)
MTM97V-11IV 胎土1

XGT径	: 100 μm	測定時間	: 50 s
X線管電圧	: 50 kV	電流	: 1000 μA
ﾊﾟﾙｽ処理時間	: P3		
X線ﾌｨﾙﾀ	: なし	試料ｾﾙ	: なし

定量補正法 : ｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞﾚｽ

元素	ﾗｲﾝ	質量濃度[%]	3σ[%]	強度[cps/mA]
14 Si けい素	K	26.23	2.85	15.52
19 K カリウム	K	11.37	0.97	33.43
22 Ti チタン	K	6.13	0.53	37.64
26 Fe 鉄	K	57.27	2.30	546.69

③内面赤色部分１



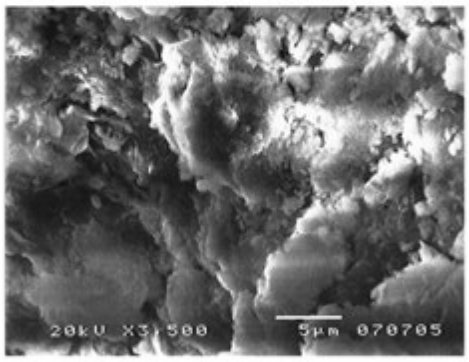
'07/07/05 13:32

H19-034.SPM ('07/07/05 13:28)
MTM97V-11IV 内面付着物（顔料）再1

XGT径	: 100 μm	測定時間	: 50 s
X線管電圧	: 50 kV	電流	: 1000 μA
ﾊﾟﾙｽ処理時間	: P3		
X線ﾌｨﾙﾀ	: なし	試料ｾﾙ	: なし

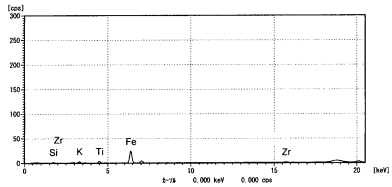
定量補正法 : ｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞﾚｽ

元素	ﾗｲﾝ	質量濃度[%]	3σ[%]	強度[cps/mA]
14 Si けい素	K	21.79	2.83	14.38
19 K カリウム	K	11.50	0.92	38.89
23 V バナジウム	K	1.06	0.28	10.52
26 Fe 鉄	K	64.84	2.46	746.57
29 Cu 銅	K	0.81	0.57	5.55



③の写真

②胎土部分２



'07/07/05 14:18

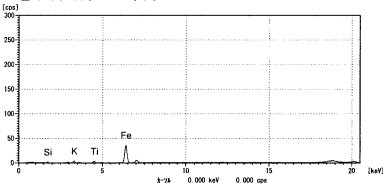
H19-037.SPM ('07/07/05 14:15)
MTM97V-11IV 胎土2

XGT径	: 100 μm	測定時間	: 50 s
X線管電圧	: 50 kV	電流	: 1000 μA
ﾊﾟﾙｽ処理時間	: P3		
X線ﾌｨﾙﾀ	: なし	試料ｾﾙ	: なし

定量補正法 : ｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞﾚｽ

元素	ﾗｲﾝ	質量濃度[%]	3σ[%]	強度[cps/mA]
14 Si けい素	K	28.43	2.76	18.39
19 K カリウム	K	15.50	1.09	42.04
22 Ti チタン	K	9.20	0.69	47.92
26 Fe 鉄	K	45.57	1.91	399.54
40 Zr ジルコニウム	K	1.30	0.32	19.00

④内面赤色部分２



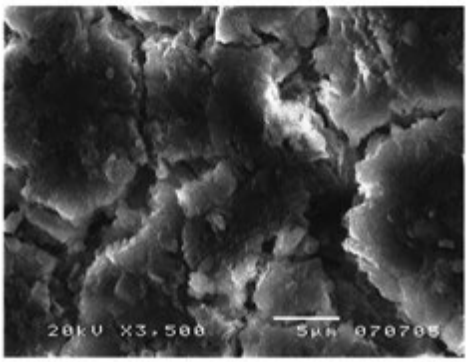
'07/07/05 13:36

('07/07/05 13:34)

XGT径	: 100 μm	測定時間	: 50 s
X線管電圧	: 50 kV	電流	: 1000 μA
ﾊﾟﾙｽ処理時間	: P3		
X線ﾌｨﾙﾀ	: なし	試料ｾﾙ	: なし

定量補正法 : ｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞﾚｽ

元素	ﾗｲﾝ	質量濃度[%]	3σ[%]	強度[cps/mA]
14 Si けい素	K	26.04	2.39	20.05
19 K カリウム	K	14.60	0.92	51.43
22 Ti チタン	K	6.74	0.49	46.62
26 Fe 鉄	K	52.62	1.82	593.54



④の写真

測定試料写真

第196図　赤色土器分析測定関係一覧

	青　磁	白磁・青白磁・青花	輸　入　陶　器	国産陶器等
C 期 11世紀後半 ～ 12世紀前半		575 620 625 582	453 460 456 486 478 469	
D 期 12世紀中頃 ～ 12世紀後半	498 502 519 518 520 507 551 563 533 546 529 549	585 595 599 70 23 71 72 633 628 185		322 414
E 期 13世紀前後 ～ 13世紀前半	535 541		467 424 449 139 490 489 495 479 465	329 365 716 392
F 期 13世紀中頃 ～ 14世紀初頭	565 566	608 182 661		393 415 416 408 417
G 期 14世紀初頭 ～ 14世紀後半 及び それ以降	568 569	660 643 69		419 385

スケールは不統一につき，本文中挿図参照のこと

第208図　持躰松遺跡中世出土遺物の編年

第Ⅺ章　発掘調査のまとめ

第１節　遺構・遺物の概観

本遺跡からは，古くは縄文時代後期の遺物が出土するのを始めとして，近世までの遺構・遺物を検出・確認することができた。以下，本遺跡の時代変遷について大まかに振り返ってみたい。

１縄文時代

本遺跡に，最初に足跡を残したのは縄文時代後期の南福寺式，出水式土器の時期の人々で，継いで入佐式，黒川式土器の時期の人々であるが，これらに伴う遺構は残っておらず，土器などの遺物だけが若干残存しているのみである。その後，刻目突帯文土器を携えた人々がやってくる。おそらく，水田稲作を試みたのであろうが，この時期の明確な水田遺構は検出されていない。このことから，この地に居住したわけではなく，より安定した地域へと移動して行ったと考えたい。

２弥生・古墳時代

弥生時代の中期になって入来式，黒髪式，山之口式，須玖式土器を持った人々が渡来する。その後，後期に松木薗式や中津野式土器を持った人々が来た。確実なところでは中津野式期の人が竪穴住居を作っていることから，この付近に小集落を営んだ可能性が考えられる。土坑や溝が掘られ，掘立柱建物も作られた。

古墳時代の初めの頃にも竪穴住居が営まれると共に，掘立柱建物も建てられていたようで，多数のピットが検出されているほか，その周囲には溝を掘り，土坑を設けている。また，多数の土器も遺棄されており，それが土器溜まりとして検出されている。この土器溜まりには，壺形土器が多く含まれることから，祭祀的な意味を持つことが考えられる。中でも，「水辺の祭祀」の可能性が高いのではないかとの指摘もある（１）。須玖式土器等も見られることから，在地の人々でありながら，他地域からの製品が搬入された状況が見て取れる。

３古　代

古代になると，一気に人口が増えたと考えられ，掘立柱建物が多く見られるようになると共に，畑はある程度まとまった地域に，畝の長さが短く畝間が狭く耕されたものが数か所に見られる。畝の方向が上位と下位とで直交するか所もあることから，時期差・時代差と，耕作方法や作物に差異のある可能性もある。また，溝状遺構は遺跡の南側を東西に限る深い大溝を始め，直線的なものに加えて弧状となる幅の狭い溝も数か所で見られる。また，畑も畝とほぼ同様な方向に掘られている。

また，焼土のある土坑も確認された。炭化物や灰の集中がみられることから，焼成土坑や鍛冶炉の可能性が想定される。また，調査担当者は地床炉と想定しているが，遺構の性格を決定するには至らなかった。この時期には，一般的となった土師器や須恵器を使っているのを始め，カマド形土器も見られることから，そこに居住している人々については一考の余地を残している。それはまた，数多くの篦書土器についても言える。「門」や「凡」「幸」「冨」などに混じって「所」か「厨」かと考えられる文字も見られ，一般集落とは異なった性格を持つ可能性が考えられる。

古代の掘立柱建物跡は３間×３間の建物１棟以外は２間×３間の建物が５棟以上復元できたが，復元できなかったものを入れると，もっと増える可能性があり，掘立柱建物としては２間×３間を基本として建てられていたと想定される。そのほかに２間×２間と１間×１間の建物跡がそれぞれ１棟ずつ復元された。これらは，柱間の間隔が梁間と桁行方向で異なっていることから，倉庫ではない総柱建物であると考えたい。

４中　世

中世になると，遺構・遺物共に大きく増加し，本遺跡の主体をなす。掘立柱建物跡として復元できたものは少なく，わずかに３棟に過ぎないが，建物として復元できなかった残りの大多数のピットは，多数の建物があったことを物語っている。復元された３棟のうち１棟については本遺跡中最大の規模を誇っている。２間×５間の梁間方向の２か所に，半間の庇が中央部だけに設けられており，古代の掘立柱建物跡とは様相を異にしている。中央部のみに庇を取り付けていることから考えて，この建物は２間×２間の建物２棟をつないだ「双堂形式」と考えたい。その場合，西側の１基のピットの欠損は，なんらかの原因で検出できなかった可能性が高い。これ以外の建物は，２間×２間が１棟と，１間以上×３間の建物が１棟復元されている。また，竪穴建物跡も１棟確認されている。内部にピットが多数検出されているが，これは本遺構の周辺に多数のピットが集中することから，全てがこの竪穴建物に伴うものとは考えられず，各辺２～３本の主柱であったと考える。

土坑墓と推定される遺構も２基検出された。何れも埋土中の偏った場所に遺物が出土したことから，墓主の埋葬後に日常的に使用していたとみられる食器類を中心に供献した様子が窺える。形状は隅丸長方形と楕円形の２種類である。

石列も検出した。自然角礫が主体であるものの，中に

は五輪塔の笠石と考えられる人為的に加工された遺物も集中して出土している。細かく見るといくつかのブロックにまとまるような感じも受ける。これは，土砂で押し流されたというよりも，小さなまとまりとして遺棄された状況を物語っているように考えられる。前畑遺跡（薩摩川内市）で発見されたような石塔の基壇（鹿児島県埋文センター2003）である可能性も指摘しておきたい。

これらとは別に，土師器の集積がＴ－13区において２か所で見られた。１号と２号は，それぞれ大型の坏１枚と小型の坏が２枚ずつで構成され，３号は小型の坏が４枚と大型の坏が２枚とで構成されており，いずれも南西方向から北東に向かって並べて置かれた状況が看過される。これに関する類例は西ノ平遺跡（薩摩川内市）【鎌倉時代前半期】や中福良遺跡（霧島市牧園町）【平安時代末～鎌倉時代初頭】などにみられ，祭祀に関係があるものと考えられている（中村2006）。なお，この一角は，周辺からは独立したような遺物の出土状況をしていることも，祭祀関連の遺構であるとの想定を裏付けている。

調査区の南側で，大溝が検出されたのを始め，矩形となる溝や短めの溝も散在している。畑は建物とは異なった地域に，ある程度広域に設けられた。この時期の畑は畝の長さが短く，狭い間隔でほぼ直線的に耕されたものと，畝の長さが長く，ゆったりとした間隔で地形に沿ったものか，ゆるやかな弧を描くように耕されたものとの２種類が見られるが，これは栽培していた作物の違いが反映された可能性もある。その畑を守るためにであろうか，杭が数多く打たれ，柵が設けられていた。これは，河川からの水の浸入から畑や作物を守るというよりも，部外者や動物などの浸入から畑の作物を守るためである可能性が大きいと考えられる。なお，この杭列（柵）の跡は，畑でも後者のタイプの部分に集中して見られることを付記しておきたい。

遺物としては，土器・陶磁器類（糸切底の土師器の皿や坏等のほか，東播磨系や樺万丈産（２）の須恵器，常滑・瀬戸・備前などの国産陶器，青磁・白磁等の輸入陶磁器，カムィヤキ，赤色・黒色土器や瓦器等），石製品類（滑石製石鍋・砥石や硯等），鉄器及び製鉄関連遺物類（刀子・火打金・鏃・鉄滓・鞴羽口等）等が出土している。また，脚付土製煮炊具も出土しており，県内でも種類の多さや特殊性が指摘できる。土坑墓内からは白磁の合子も出土しており，一括資料として重要である。

これらの遺構・遺物から想定される中世の本遺跡の性格について考えてみたい。畑跡や多数のピットからは，一般的な集落の様相も感じられはするものの，復元できた大型の掘立柱建物跡は，全時代を通して最大規模であり，かつ二面に庇を有する双堂形式の建物と考えられる。また，豊富な国内陶器や輸入陶磁，東播磨系や樺万丈，カムィヤキといった遺物や，一般集落からはほとんど出土することのない楠葉型や和泉型の瓦器や硯，刀子，それに脚付土製煮炊具や土坑墓に供献された白磁の合子などから，この時期の一般的な集落とは全く異なった特殊な施設を想定したい。

それは，遺跡が南薩摩随一の大河川，万之瀬川沿いに立地することを抜きにしては語れない。本遺跡の発見当時に大々的に取り上げられたような「万之瀬川河口付近に築かれた対外貿易の一大拠点であり，当時のその地方の実力者，阿多（平）忠景とのつながりも考えられる遺跡」との認識を認めるか否かについては置くにしても，このようなものを一般庶民が持ち得たとは考えにくい。これらの多種多様な遺物が出土していることから考えると，荘園の出先機関や在地領主層の施設，開墾地などのような特殊な遺跡と考えた方が相応しいようにも思えるのである。また，寺社などの領有地やそれらが経営主体となった地域や集落の一部との考えも，可能性の一つとして置くべきかも知れない。

５近　世

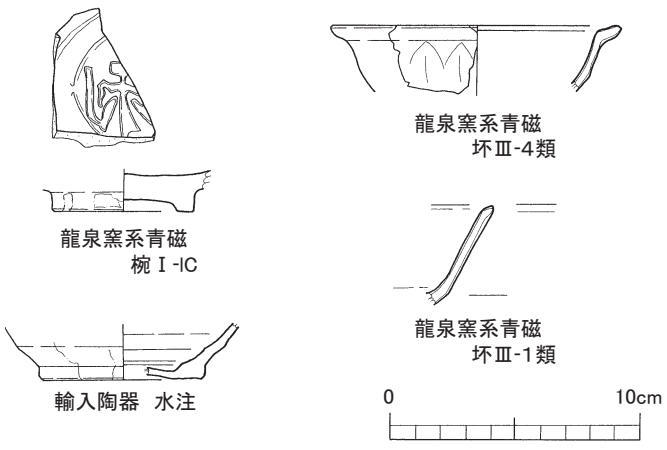
近世に入ると，薩摩焼や磁器が一部には見られるものの，その後ほぼ完全に耕地化している。近代になって南薩鉄道が縦断して建設されるという変化があったものの，そのまま現在に至ったと考えられる。

注

（１）中村直子氏（鹿児島大学准教授）の指摘による。
（２）樺番城とする場合もある。ここでは樺万丈とした。

引用・参考文献
中村和美2006「まつりと信仰」『先史・古代の鹿児島（通史編）』鹿児島県教育委員会
鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『前畑遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（56）

（繁昌正幸）



第197図　中世遺物

第2節　縄文時代～弥生・古墳時代の遺構・遺物について

縄文時代

縄文時代では，縄文時代後期・晩期の土器，石鏃，磨石，敲石等の石器が出土した。しかし遺構は検出されず，生活の中心地であった可能性は低い。後期では土器の口縁部片が数点出土したのみで，縄文時代は晩期の遺物が中心といえる。晩期では黒川式土器が中心であるが，その前後の入佐式，干河原段階の遺物も若干見られた。

今回の万之瀬川流域の調査において縄文時代の出土状況を概観すると，本遺跡の上流側に隣接する渡畑遺跡では縄文時代後期以降の土器が，さらに上流側の芝原遺跡・上水流遺跡においては，縄文時代中期以降，前期以降の土器がそれぞれ出土している。このように万之瀬川流域の縄文時代遺跡では下流に下るとともに古い時期の遺物の出土が見られなくなる傾向が認められる。この傾向の示す意味については遺跡環境との関係をふまえながら今後検討していくべき課題としたい。

弥生・古墳時代

①遺構

遺構は住居跡5軒，土坑6基，溝状遺構5条，ピット群，土器溜まり1箇所が検出されている。出土遺物から弥生時代中期～終末期の遺構群と考えられる。

1号住居からは松木薗式～中津野式の特徴を持つ甕形土器の底部と共伴して袋状鉄斧（9）が出土した。袋状鉄斧は弥生時代中期～古墳時代初頭に北部九州を中心に全国的に出土する(注 1)。本遺跡の鉄斧は袋部分がつながらないタイプで，このタイプは舶載品を模倣したものと考えられている(注2)。

2号住居では，須玖式の甕の口縁部や穿孔を持つ小型鉢形土器（15）が出土しており，弥生時代中期後半であると考えられる。15 のような口縁部に2か所の穿孔つき突起をもつ鉢は，山ノ口式の模倣品であろう。

4号土坑からは山ノ口式(37)・黒髪Ⅱ式（39～43)が出土しており，弥生時代中期後半後段階の土器群であると考えられる。この一括出土品は，薩摩半島西部の松木薗式以前の段階の様相がよくわかる資料となっている。

土器溜まりからは松木薗Ⅱ式新段階～中津野式の土器が出土した。壺には一条刻み目突帯を施すもの(90～95)と，大型で二条刻み目突帯を施すもの（88）小型で無文のもの（105～112）がある。一条刻み目突帯のものは，口唇部をヨコナデし端部が少しくぼむ特徴をもつもの(90～92)や，底部にやや平底の形状を残すもの(90, 92)があり，古相を示すととらえられる。しかし，甕については口縁部の立ち上がりや形状が中津野式の特徴を持つ。一方，底部はやや踏ん張り気味の低い脚台などがあり，口縁部に比べて古式の様相を呈する。完形品がないため明確ではないが，甕の口縁部だけが新しい特徴をもっている(注 3)。土器溜まりの特徴として，川岸近くで検出されたことと大型の壺，小型の土器（手づくね土器など）が出土していることが挙げられる。類例として，鹿児島大学構内遺跡（釘田第8地点）と萩原遺跡がある。釘田第8地点では，河川堰跡周辺に大量のミニチュア土器，大型壺が出土し，「特別な場所であった」と指摘されている(注 4)。また，萩原遺跡でも河川跡に平行して大型の壺と高坏，鉢，壺，甕の口縁部，底部等がまとまって出土し，「意図的に配置されていたもの」と指摘されている(注5)。上記の例は古墳時代中期の遺構であり，本遺構の年代よりもやや時代が下るが，「水辺」という場所，出土状況，器種構成の共通性からこの土器溜まりは水辺の祭祠遺構の可能性が考えられる。(注6)

②遺物

弥生時代の遺物は，完形品を含み多量出土している。各分類に土器形式をあてはめると以下のようになる。

Ⅰ類：刻目突帯文土器
Ⅱ類：入来・山ノ口式土器
Ⅲ類：黒髪式土器
Ⅳ類：須玖式土器
Ⅴ類：松木薗・中津野式土器

これらは弥生時代中期後半から終末期の特徴を持つ土器群である。従来の編年観では，外来系は中期後半の須玖式，黒髪式，山ノ口式であるが，黒髪式の一部や山ノ口式は在地でつくられた可能性があり，異系統と位置づけられている土器群を含めてセットとして使用している可能性がある。上水流遺跡出土遺物中には，中期前半の土器群があるが，入来式と黒髪式が折衷したとみられる折衷形が在地の土器として製作・使用されている。本遺跡では，折衷形が形式変化したというよりも，異系統のものを併存して使用しており，この点で，松木薗遺跡出土遺物の特徴と類似する。器種組成の特徴として，高坏が大変少ないことが挙げられる。中津野式の時期から南部九州では高坏が普及し始めるが，薩摩半島西部地域は普及が遅いとされる。本遺跡もそれに合致しており，この地域の特徴をよく示した土器群であると言える。(注7)

(注 1)　川越哲志(編)2000『弥生時代鉄器総覧』広島大学文学部考古学研究室

(注 2)　岡村秀典 1997「鉄製工具」『弥生文化の研究』5　道具と技術Ⅰ　雄山閣

(注 3,6,7)　鹿児島大学埋蔵文化財調査室准教授中村直子氏の指摘による。

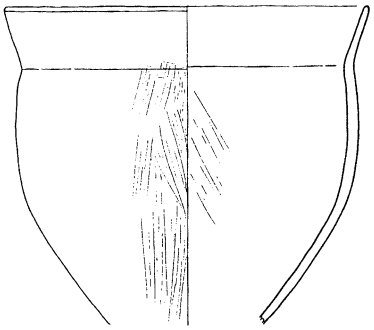
(注 4)　橋本達也 2001「鹿児島大学総合研究博物館ニュースレター」No.2

(注 5)　中村耕治 1980「大型壺およびその周辺」『萩原遺跡（Ⅱ)』姶良町教育委員会

(注 6)　中村直子 2004「住居跡およびその周辺における土器出土状況の特殊な事例について」『鹿児島考古』 第 38 号

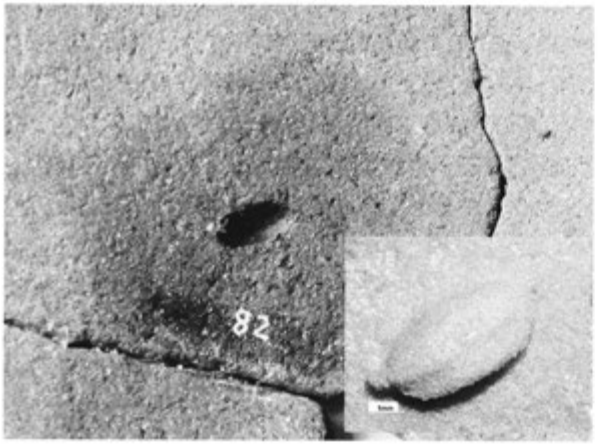
甕形土器に見られる種子圧痕について

整理作業時に甕形土器中に籾痕のような圧痕を有する土器を5点確認した（74,77,152,290,298）。これらのレプリカを作製し電子顕微鏡で観察した結果、籾痕と考えられる資料を2点紹介する。なおレプリカ製作，顕微鏡写真撮影には永濵功治氏の協力を得た。

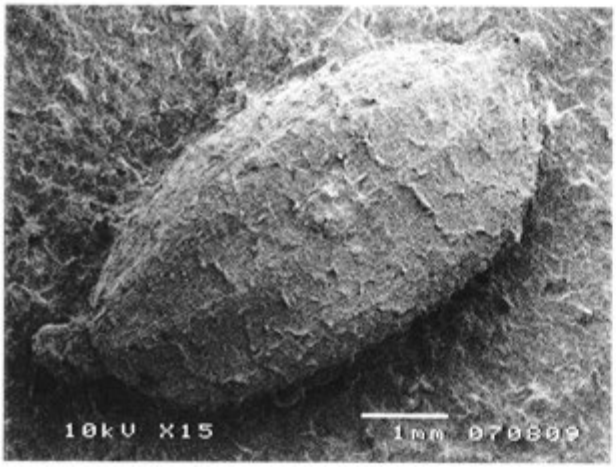


第198図　資料1(74)

復元口径26㎝の甕で，口縁部はく字状にかなり立ち上がり，胴部はあまり膨らまず外面はケズリに近い板ナデ調整が施される。胴部最大径部付近の内面に6×3.5㎜の籾痕と思われる圧痕が確認された。

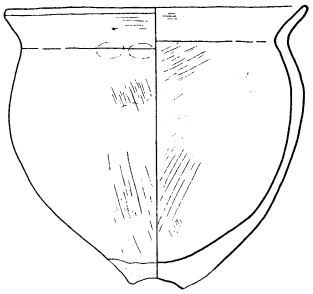


資料1圧痕部分拡大写真およびレプリカ



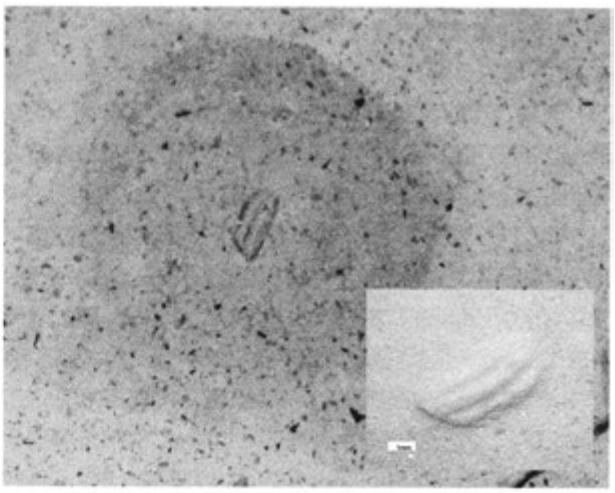
資料1圧痕レプリカの電子顕微鏡写真

資料1は籾特有の顆粒状の粒が明瞭に観察できないが，両端部の突起の形状や中央部の筋状の起伏の形状から籾痕の可能性が考えられる。土器溜まり遺構に伴う中津野式土器の圧痕である。

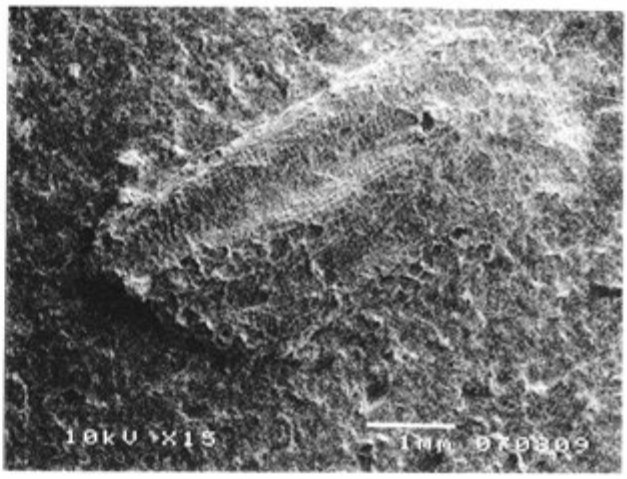


第199図　資料2(77)

口径16㎝の甕で，く字状口縁を持ち，胴部は球形に近い器形を呈する。胴部内面やや下方に5×3㎜の浅く筋状の起伏を有する圧痕が確認された。



資料2圧痕部分拡大写真およびレプリカ



資料2圧痕レプリカ電子顕微鏡写真

資料2は資料1のように端部が観察できず全体の形状は不明だが，表面に籾特有の顆粒状の粒と思われるものが観察される。また，表面の筋状の起伏も籾に類似しており，籾痕の可能性を指摘できる。本資料も資料1と同様に弥生時代後期～終末期の土器溜まりに伴う資料である。他の資料についても顕微鏡で観察したが，籾痕とは判断できなかった。

（富山孝一）

第３節　建物跡について

１古　代

①　掘立柱建物跡１号は本遺跡に最も普遍的な２間×３間の建物で，心心間距離は梁間が4.40m，桁行が6.13mで，面積は約26.97㎡である。

各柱間は，梁間で2.16～2.22m，平均では2.18mとなり，桁行で1.78～2.18m，平均では1.99mとなる。このことから，本遺構で使用された基本尺は，古代の大尺であると想定する。

②　掘立柱建物跡２号は調査ではピットを欠いているが，それを補って想定した場合の規格は，２間×２間の建物となると考えられる。

心心間距離は梁間が4.36m，桁行が4.41mで，面積は約19.23㎡となる。

各柱間は，梁間で1.30～2.42m，平均では2.02mとなり，また，桁行で1.54～2.72m，平均では2.17mとなる。このことから，本遺構で使用された基本尺は，古代の大尺であると想定する。

柱の位置が１間長さのものと同時に半間長さのものも見られることから，そのような柱間を持った建物として存在したのか，あるいは束柱などの支えを考えるべきなのか，さらには建て替えなどを考慮すべきなのかについては詳細は不明とせざるを得ない。

③　掘立柱建物跡３号は下記の掘立柱建物跡４号と同一か所で検出されたことから，同一規模での建て替えと考えられるが，主軸方向も若干ずらしての全面的な造作であることから全く別個の遺構として取り扱った。

規格は，２間×３間で，心心間距離は梁間が4.28m，桁行が5.11mで，面積は約21.87㎡となる。

各柱間は，梁間で1.90～2.25m，平均では2.05mとなり，また，桁行で1.52～1.82m，平均では1.68mとなる。このことから，本遺構で使用された基本尺は，古代の大尺と普通尺の併用であると想定する。

④　掘立柱建物跡４号は上記の掘立柱建物跡３号と同一か所で検出された。

規格は，２間×３間で，心心間距離は梁間が4.04m，桁行が5.12mで，面積は約20.68㎡となる。

各柱間は，梁間で1.92～2.12m，平均では2.02mとなり，また，桁行で1.60～1.82m，平均では1.68mとなる。このことから，本遺構で使用された基本尺は，古代の大尺と普通尺の併用であると想定する。

⑤　掘立柱建物跡５号は調査区域の端部に当たっていたことから，２基ほどピットを欠くが，それを補って想定した場合の規格は，２間×３間となると考えられる。心心間距離は梁間が3.50m，桁行が4.79mで，面積は約16.77㎡となる。

各柱間は，梁間で1.67～1.76m，平均では1.72mとなり，また，桁行で1.48～1.73m，平均では1.59mとなる。このことから，本遺構で使用された基本尺は，古代の普通尺であると想定する。

⑥　掘立柱建物跡６号は，１間×１間の建物である。心心間距離は，梁間が1.65m，桁行が2.85mで，面積は約4.70㎡となる。

各柱間は，梁間で1.35～1.65m，平均では1.50mとなり，また，桁行で2.65～2.85m，平均では2.75mとなる。このことから，本遺構で使用された基本尺は，古代の普通尺と大尺の併用であると想定する。

⑦　掘立柱建物跡７号は２間×３間の建物で，心心間距離は梁間が2.95m，桁行が3.98mで，面積は約11.74㎡となる。

各柱間は，梁間で1.22～1.69m，平均では1.47mとなり，また，桁行で1.24～1.53m，平均では1.34mとなる。このことから，本遺構で使用された基本尺は，古代の小尺であると想定する。

⑧　掘立柱建物跡８号は唯一の３間×３間の建物で，心心間距離（注１）は梁間が4.89m，桁行が4.78mで，それに囲まれる面の面積は約23.37㎡となる。

各柱間は，梁間で1.49～1.75m，平均では1.62mとなり，また，桁行で1.50～1.85m，平均では1.63mとなる。このことから，本遺構で使用された基本尺は，古代の普通尺であると想定する。

⑨　掘立柱建物跡９号は基本的に２間×３間の建物と考えられ，桁行の１基の柱穴が欠損した総柱建物であったと考えられる。

心心間距離は梁間が3.55m，桁行が5.56mで，面積は約19.74㎡となる。

各柱間は，梁間で1.44～1.83m，平均では1.78mとなり，また，桁行で1.66～2.29m，平均では2.03mとなる。このことから，本遺構で使用された基本尺は，古代の普通尺と大尺の併用であると想定する。

桁行方向のピットが南側で３基しかないは，１基の柱穴の欠損と考えられ，柱筋が整っていないのは，何らかの原因で外側に張り出した結果と考えられる。

⑩　掘立柱建物跡10号は，柱穴の欠損が想定されることを考慮に入れても判然としない。２間×２間か，そうでなければ２間×１間の建物の北側に，半間の庇が取り付くもの，または２間×１間の建物の北側及び西側にそれぞれ半間の庇が取り付く，変則的な二面庇建物との想定も成り立つように思われる。

心心間距離は梁間が4.35m，桁行が5.56mで，面積は約24.19㎡となる。

各柱間は，梁間で2.65～3.37m，平均では3.04mとなり，また，桁行で1.95～2.94m，平均では2.39mとなる。このことから，本遺構で使用された基本尺は，古代の大尺，または各柱間の距離を２間分と考えてその半分の長さを基本としたと考えれば1.52mとなるので普通尺が使

われていたものと想定する。

２中　世

①　掘立柱建物跡１号は２間×５間の南北２方向の一部に，半間の庇が取り付くものである。

心心間距離は，梁間が3.79ｍで，桁行は9.48ｍで，面積は35.93㎡である。また，二面の庇部分は，北側で梁間が0.78ｍ，桁行が３間分で6.33ｍ，面積が4.93㎡となり，南側では梁間が1.08ｍ，桁行が２間分で3.65ｍ，面積は3.94㎡となる。したがって，二面の庇を加えた面積は約44.8㎡ということになる。

各柱間は，梁間で1.88～2.16ｍ，平均では1.97ｍとなり，２間分の柱間が3.92ｍと4.00ｍであることから，これを加えた柱間の平均も1.97ｍとなる。また，桁行では，1.37～2.20ｍ，平均では1.69ｍとなり，２間分の柱間が3.42ｍと3.85ｍで，それをつなぐ柱間の2.30ｍを加えた柱間の平均も1.70ｍという数字となる。このことから，梁間は中世の大尺を用い，桁行は普通尺を使っていると想定する。

また，庇の部分は，梁間が0.78～1.12ｍ，平均では0.93ｍとなり，桁行が1.79～2.21ｍ，平均では1,99ｍとなる。庇の幅は半間であるので，梁間の平均の数値を２倍すると1.86ｍとなる。そうであれば，中世の大尺が用いられた可能性が大きいものと思われる。

ここで，本建物跡の構造について考えてみたい。先述したように，本建物跡は２間×５間の南北方向に半間の庇が部分的に取り付く形の建物である。主屋部分を詳しく見てみると，中央部に２基の柱穴があることから，桁行方向がこれらの柱穴で２つに分かれて廊下のような状況となり，これを挟んで２棟が合わさった建物と考えることが可能となる。そうすると，２間×２間の建物が２棟合わさり，その間を１間幅の廊下様のものでつなぐことによって，総体として２間×５間に及ぶ桁行の長い建物としたのではなかろうか。北側には４基の柱穴が見られ，両端が欠失していることから，中央部の廊下様の部分を中心として対称の関係にあるのに対して，南側には３基の柱穴しか見られず，中央部分を中心とした対称の関係とはいえない。ただし，南側のみ庇による覆いを短くしているのはなぜであろうか。筆者は，南側の柱穴の１基は何らかの理由で検出されなかった可能性も指摘したい。事実，調査中の写真を詳細に観察したところ，欠失した部分に黒色の円形のシミがみられた。

②　掘立柱建物跡２号は調査区域外に延びているが，規格は２間×２間であろうと考えられ，複合する柱穴は，建て替えによる結果と考えられる。

心心間距離は，梁間が2.27ｍ，桁行が3.32ｍで，面積は7.54㎡となる。

各柱間は，梁間で0.93～1.31ｍ，平均では1.21ｍとなり，桁行で1.43～1.91ｍ，平均で1.67ｍとなる。このことから，本遺構で使用された基本尺は中世の小尺と普通尺であると想定する。

③　掘立柱建物跡３号は，一部調査区域外に延びているが，規格は２間×３間であろうと考えられる。

心心間距離は，梁間が3.49ｍ，桁行が5.62ｍで，面積は19.61㎡となる。

各柱間は，梁間で1.69～1.80ｍ，平均では1.74ｍとなり，桁行で1.86～1.89ｍ，平均で1.87ｍとなる。このことから，本遺構で使用された基本尺は中世の普通尺と大尺であると想定する。

④　掘立柱建物跡４号の内部南側には，２基の土坑が確認されており，本建物跡に付随する遺構と考えられる。１基の土坑は，建物跡の南側の中でも南に掘られた土坑である。長軸方向はほぼ東西方向で52㎝，短軸方向はほぼ南北方向で42㎝あり，平面形は幅の広い楕円形である。深さは東側に16㎝の最深部があり，西側にかけては緩やかな傾斜で上がっていく。もう１基の土坑は，建物跡の南側の中でも北に掘られた土坑である。長軸方向はほぼ南北方向で56㎝，短軸方向はほぼ東西方向で28㎝で，平面形は幅の狭い楕円形である。深さは最深部で13㎝で，底面の形状は弧状を呈している。

これらの土坑の機能について考えてみる。１間×１間という極めて狭隘な建物の南側半分に，方向は違えるものの，隣接して掘られている状況である。この建物が高床式の建物であれば，床の下部に設けられていることになるが，本遺跡ばかりでなくとも，この時期の１間×１間の建物は，そのほとんどが平地式の土間建物であるとされている。このことから，おそらく板壁に囲まれた建物の地面の南半分の場所に，形状の異なるそれほど深くない土坑が掘られたということになる。

このような状況の遺構のあり方から考えると，地下への簡易な収納施設である可能性が考えられる。それも，土器などの容器などではなく，根菜類などの植物を一時的に埋めておいて，それほど時を経ずに掘り上げた状況が考えられる。

※中世の尺については，苦辛城の調査成果を参考にした。
・鹿児島県教育委員会1983『苦辛城跡』鹿児島県教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書（27）

注

1　本文中ではピット間距離について記載したが，ここでは心心間距離で計測し直している。（繁昌正幸）

第４節　古代の遺物について

これまで旧金峰町内では，古代の遺跡が数か所で発見されており，この中でも特に小中原遺跡・山野原遺跡などは注目されている。

持躰松遺跡においても，古代の遺物が相当数出土している。ここでは，当遺跡から出土した土器について，中村和美氏の年代観（中村1997・2006など）をもとに時代ごとに分類することとする。（第200図）

土師器

椀は，９世紀前半のものがほとんどである。これ以外には，器高の高くなる９世紀中頃のもの，体部の丸くなる９世紀後半のもの，高台の脚が長くなる10世紀前半頃のものが若干含まれる。

また，ピット内からは玉縁に類似した口縁部を持つものが出土している（13）。これは，古代の荊州窯系白磁（中国製）を模したものであろう。

坏は，口径と底径の差が比較的少なく「箱形」を呈する８世紀末～９世紀前半のもの，口径と底径の差がある程度みられる９世紀中頃以降のものとにわかれる。

皿・蓋は，基本的には８世紀代と考えられるものであり，椀・坏と時代的に合致しない。今後の課題であろう。特に，ヘラ書きがみられる皿（317）は８世紀末～９世紀前半のもので，時代的な背景を窺わせる。

盤（109）も８世紀代に位置付けられるもので，外面に丁寧なミガキを施す。

甕は底部まで残存するものがないので様相がとらえにくい。ただし，「胴が張る」という比較的古式の様相を持つものが多く含まれることから，９世紀前半頃の可能性がある。また，成型時に胴部にタタキを施した後にハケメ調整を行うものが多いのも古式の様相を示す。

黒色土器・赤色土器は，ほとんどが９世紀後半～10世紀前半のものである。ただし，黒色土器の中で体部の湾曲が強く高台断面が三角形で，内面のミガキが良好に残るもの（115，116）は11世紀代である。

その他としては，高坏・鉢などがあるが明確な時期は特定できなかった。なお，ヘラ書き土器は基本的には９世紀代が中心である。特に完形の坏で外底部に「凡」とヘラ書された完形の杯（350）は，９世紀中頃～後半である。

須恵器

椀・坏は，８世紀後半のものを最古として，ほとんどが８世紀末～９世紀初頭である。また，中岳山麓窯跡群で生産された９世紀中頃以降のものも含まれる。

蓋は，ほぼ全てが８世紀末～９世紀初頭で，うち４点が硯（転用硯）として再利用されている。皿も蓋同様に８世紀末～９世紀初頭である。

甕・壺・鉢等については，ほぼ全てが９世紀中頃である。これらの中には県内でも出土数が少ないものが含まれており，注目されるものである。中でも，双耳坏（215）は東北地方において，蝦夷に関わる遺物として扱われている（利部1998）。西日本での出土はごく少ないとされるが，県内でもその例にもれず現在のところ他に確認されてない状況である。

特殊遺物

小倉畑遺跡（姶良町）で出土した香炉（寺原2006）に類似した土器（252）と，鉄鉢形須恵器（瓦鉢）（23）が出土している。また，刻書土器の中には「卌」に類似するものが施されるものがある。香炉は仏具であり，鉄鉢は僧侶が托鉢で施食を受ける容器とされることから，寺院との関わりが強いとされるものである。「卌」は九字とされ修験道などとの関わりが指摘される（坂本ほか2004など）。これらは，あくまでも類似品であるのでその性格については可能性にとどめたいが，少なくとも何らかの宗教的行為に関係していた可能性がある。遺物組成をみると（表75，76），土師器が全体量の３／４を占めることがわかる。土師器は椀・坏が多く，須恵器は甕が多い。また，土師器の中の黒色土器・赤色土器は全体量からみるとほんの一部である。

註

坂本佳代子・岩澤和徳・松田朝由2004「墨書土器の性格－鹿児島を例として－」『縄文の森から』第２号　鹿児島県立埋蔵文化財センター

寺原徹2006「仏教関連遺跡としての小倉畑遺跡」『大河』第８号　大河同人

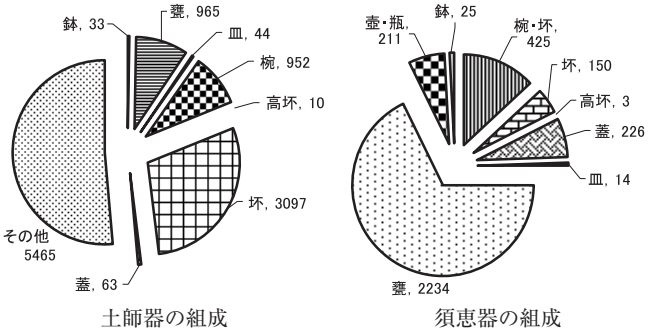
利部修1998「東北以北の双耳坏と環状凸帯付長頸瓶」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第13号

中村和美1997「鹿児島県における古代の在地土器」『鹿児島考古』第31号　鹿児島県考古学会

中村和美2006「土師器と須恵器」『先史・古代の鹿児島通史編』鹿児島県教育委員会

（上床　真）

表75　古代遺物組成表（その１）



土師器の組成
（総計10,629点）

須恵器の組成
（総計3,263点）

第５節　カマド・鍛冶関連の遺構・遺物について

持躰松遺跡では，「移動式カマド」と呼ばれる遺物が出土している。これまで県内では，数例しか発見されていないものである。この遺物は形態はカマドに類似するが機能は明らかではない。ここでは移動式カマドではなく「カマド形土器」に名称を統一して論を進める。

本遺跡出土の「カマド形土器」は古代に該当するものであるが，全国的な例では，カマド形土器は古墳時代から存在することになっている。さらにカマド遺構も古墳時代に出現し，普及するという（石野1990）。翻って，鹿児島県内の事例をみると古墳時代にはカマドに関する遺構・遺物は発見されていない。そこで，ここでは県内において古代から散見されるようになるカマドに関する遺構・遺物について県内の状況をつかみ持躰松遺跡の特性を明らかにするために，集成を行う。

また，中世については鍛冶関連遺構が発見されている。この鍛冶関連遺構については，カマド状遺構との区別が困難なものも存在するが，具体的な集成がなされていない。そこでここでは中世のカマド状遺構の集成も併せて行い，その傾向について明らかにしたい。

・古代のカマド・鍛冶関連遺構・遺物

（１）遺物

まず，持躰松遺跡ではカマド形土器が出土している。集成の結果県内では現在のところ８か所で発見されていることが明らかとなった（表77－①）。このうち，大隅では現在のところ後迫遺跡と曲迫遺跡の２か所でしか発見されておらず，ほとんどが薩摩で占められている。また，遺跡の立地からみると内陸よりは海岸寄りの傾向がみられる。

（２）遺構

古代のカマド状遺構は，その可能性のあるものを含め14か所で発見されている。このうち，12か所でドーム形の炉壁のみられるものや礫の集中が観察されている。特に，焼土の周囲に礫が積まれており，カマドの痕跡ととれるものも存在する（榎崎Ａ・中尾立・仁田尾中Ｂなど）ので前向きな検討も可能であろう。建物との関係をみると，竪穴住居に伴うものは２か所のみで，掘立柱建物に伴うもの４か所となっており，建物に伴わず単独で存在するもの８か所であった。

また，古代には軽石集積（焼土の周囲に軽石が存在するものや，軽石が集積された遺構）も存在する（表77－②）。近年になって，高篠遺跡で注目された遺構であるが，この遺構もカマドもしくは鍛冶に関連する遺構との指摘がある。

この遺構については集成を行った結果８か所となった。８か所のうち４か所が曽於市内であり，この地域で顕著なことが想定されるが，薩摩地域においても４か所で発見されていることから，地域的な偏りではない可能性も考慮する必要がある。ただし，軽石集積の中には，被熱痕跡のみられない遺構も存在するので，今後検討が必要である。また，高篠遺跡の軽石集積５から鍛造剥片が検出されているので，鍛冶関連遺構としての検討も今後必要であろう。

遺跡の分布をみると，カマド形土器と比較してやや内陸よりの傾向がみられるようである。

なお，鍛冶屋馬場遺跡（薩摩川内市）等では，古代の鍛冶炉が発見されているが，形態のみでは通常の炉と大きな違いはみられない。今後は，炉状遺構が発見された場合は必ず鍛造剥片の有無を確認するような準備が必要であろう。

（３）遺構と遺物の関係

カマド形土器とカマド状遺構の両方が発見されている遺跡は大島遺跡（薩摩川内市）だけである。このことから，両者は通常は共存するものでなく用途が異なる可能性が考えられる。稲田孝司氏によれば，カマド形土器は実用よりも祭祀的な性格が強いものであるという（稲田1978）。

例えば，曲迫遺跡（霧島市）ではカマド形土器が発見されているが，遺跡内には性格不明の土坑が６基発見されている。この土坑内のうち２基からは，土師器坏の完形品が出土していることから祭祀的な性格が想定される。また，遺跡の全体的な傾向としては，椀・坏は多いが甕は少ない。ただし，カマド形土器とセットになる程度の量は存在する。さらに，甕に限定すると，包含層中からの出土量よりも土坑埋土内からの出土量の方が充実している。この事実は，カマド形土器の特殊な機能を想起させるものといえよう。

また，県内出土のカマド形土器の表面を観察すると，煮炊きの痕跡があまりなく，あったとしても煤・炭化物の付着が弱いという特徴があるので，日常用ではない可能性がある。

以上のことから，持躰松遺跡出土のカマド形土器については祭祀的な性格を持つものと考える。具体的には，大阪府五反島遺跡でみられるような「水に関する祭祀」を想定したい。

・中世のカマド・鍛冶関連遺構・遺物

中世のカマド遺構について考察を行った研究はいくつかみられる。以下にそれらの内容を列挙する。

出口浩氏は，川上城の炉跡について平面形からＡ（円形）とＢ（長楕円形）の２タイプに分類している。

Ａタイプは，円礫・角礫等が半円形か馬蹄形に並べられ，炉壁の高さ・灰出し部などが確認できないもので，臨時的あるいは短期的な利用がされたものとされた。

Ｂタイプは，炉部・たき口部・灰出し部などが区別されるもので，炉壁等は凝灰岩礫を含む粘土で焼き締めてしっかりと作られる。床面にも焼土・灰の堆積が多くみ

られる。地域の拠点となる山城・城館や中心郭などにみられることから長期間に多くの人々が使用したものとされた（鹿児島市教委1994）。

今村敏照氏と中村守男氏は，馬場Ａ・辻町２遺跡（大口市）の調査成果をもとに，県内発見のカマド状遺構について集成を行って概観した。カマドについて，燃焼室・焚口・灰溜めの３部分に区別している。ここでは特に，建物内か否かについて関心が持たれており，それに伴って性格付け（煮炊きされたものの種類・炉との判別等）などについてが課題であるとした（今村・中村1994）。

佐藤氏は，日輪城跡（曽於市）の調査成果をもとに，県内の炉状遺構が，城郭遺跡に集中する傾向のあることを明らかにした。また，炉状遺構を，①居住空間とは一線を画する「鍛冶炉」としての機能を持つもの　②居住空間と密接に関連する「カマド」的なものに大別した（佐藤2000）。

有川氏は，柚須木城跡（鹿児島市）発見の炉状遺構について，出口氏の分類に従ってＡタイプ（円形）とＢタイプ（長楕円形）に分類を行い，その相違点について指摘している（有川2004）。

中世のカマド遺構が発見された遺跡の傾向をみると，20か所が城郭関連遺跡で，11か所が集落関連遺跡である。この傾向から，城郭に付随する場合が多いことが明らかになった。ただし，集落遺跡は中世前半（11世紀後半～14世紀前半）に，城郭関連遺跡は中世後半（14世紀中頃～16世紀中頃）にほぼ区分されることから，時期的なものとすることもできる。特に，城郭関連遺跡は15・16世紀をピークとするものなので，この時期に特化するものといえよう。

ただし，上ノ城跡（南さつま市）のように，遺構内から美山堂平窯（日置市）産とみられる製品（17世紀代）が出土している場合もあるので，中世としたものの中には厳密には近世前半期までを含む場合も考えられる。

鍛冶炉についても集成を行ったので，ここで触れたい。佐藤氏も検討を行っているが，カマド状遺構と鍛冶炉の区別は困難な場合が多い。その中で，ほぼ明らかな鍛冶炉について集成したのが表77－③である。県内からは10か所で中世の鍛冶炉が発見されている。

この中で，特に上加世田遺跡の場合は，いわゆる炉状遺構で，通常は「カマド」とされる形態のものであるが，周囲から鉄滓・粒状滓・鍛造剥片などが出土していることから「鍛冶炉」とされるものである。この遺構に関しては，形態はカマドに類似することから，カマドが鍛冶炉に転用されたものと考えたい。また，上加世田遺跡は持躰松遺跡を初めとする万之瀬川関連遺跡とも地理的に近いことを考慮すると，このような転用が万之瀬川関連遺跡でもなされた可能性もある。今後，検討したい事項である。

持躰松遺跡で検出された鍛冶炉とされる遺構は，県内の資料を見る限り「ヒョウタン」形ではないことから，少なくとも「炉」としてもよいものであろう。さらに，形態のみからの性格付けにはなお検討を要するが，鉄滓・鍛造剥片の存在から「鍛冶炉」とみなしてよいと考えたい。

（４）おわりに

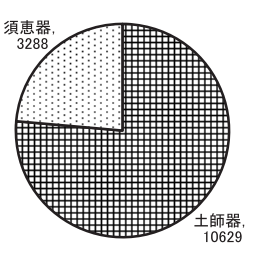
最後に，南島のカマド状遺構についても触れておきたい。特に大島郡を中心とする南島では，焼土が非常に多く検出される。ただし，あまりにも多く検出されることから，近世以降の製糖に関するものとされて調査されないことが多いという。実際に，あやまる第２貝塚（奄美市）で発見された遺構は，江戸時代から昭和初期の製糖跡（サタヤドリ）とされるものであるが，形態がしっかりとしていたために記録された希有な例（笠利町教委1984）で，通常は時期不明の地床炉に類似遺構は記録される機会がないという。シラス台地上などで発見される「芋穴」と同じような扱いである。筆者はこれらの遺構についても，歴史を語る資料として状況が許せば平面記録だけでも必要ではないかと考える。この問題は，今後の課題として残すことにしたい。

参考文献

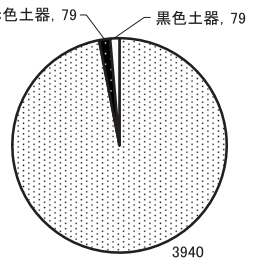
有川孝行2004「まとめ」『油須木城跡』郡山町埋蔵文化財発掘調査報告書（４）郡山町教育委員会
石野博信1990『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館
稲田孝司1978「忌の竈と王権」『考古学研究』25-1　考古学研究会
今村敏照・中村守男1994「大口市馬場Ａ・辻町２遺跡におけるカマド跡」『大河』第５号　大河同人
笠利町教育委員会1984『あやまる第２貝塚』笠利町文化財報告書（７）
佐藤亜聖2000「炉状遺構についての一試論」『日輪城（恒吉城）跡』大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書（20）鹿児島県大隅町教育委員会・（財）元興寺文化財研究所
出口浩1994「配石炉跡について」『川上城跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（18）鹿児島市教育委員会

（上床　真）

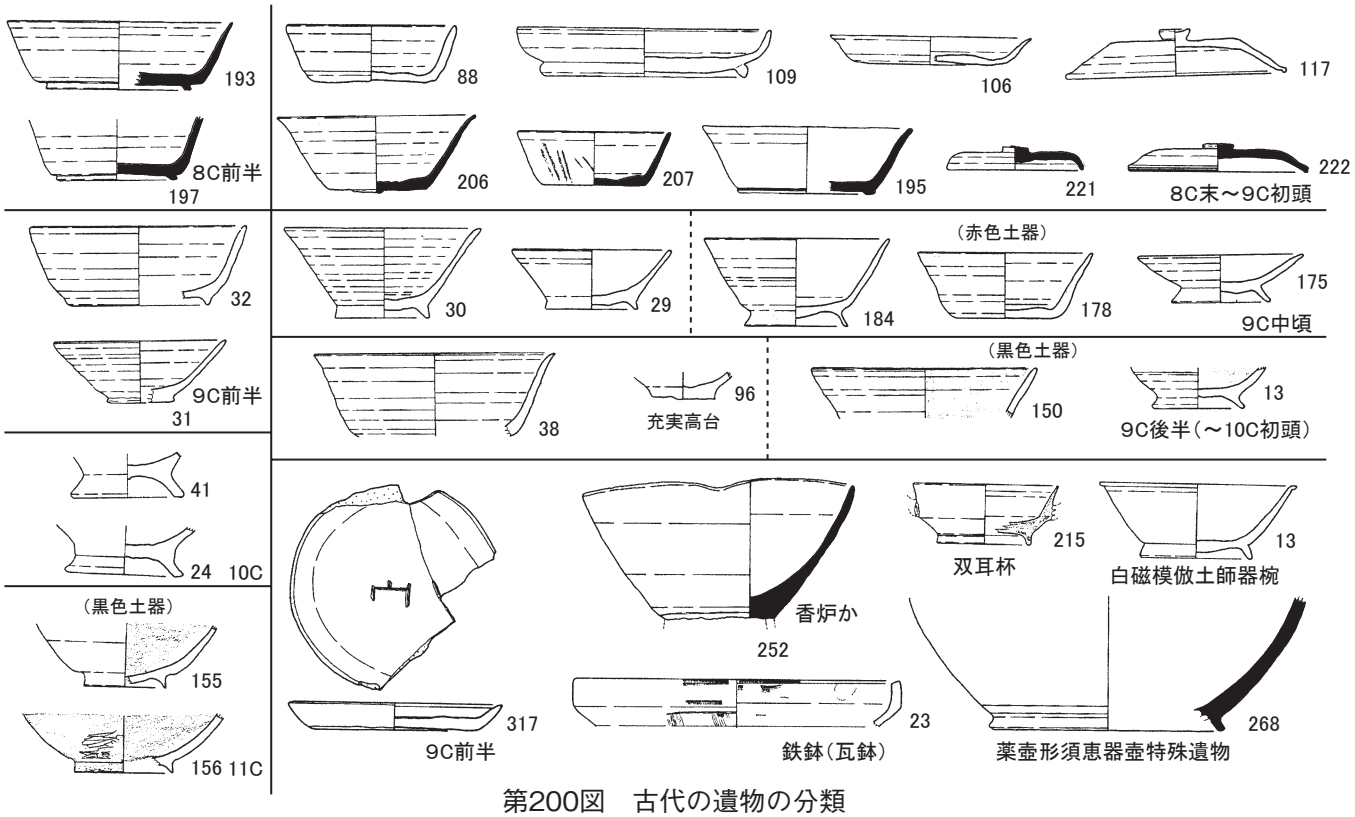
表76　古代遺物組成表（その２）



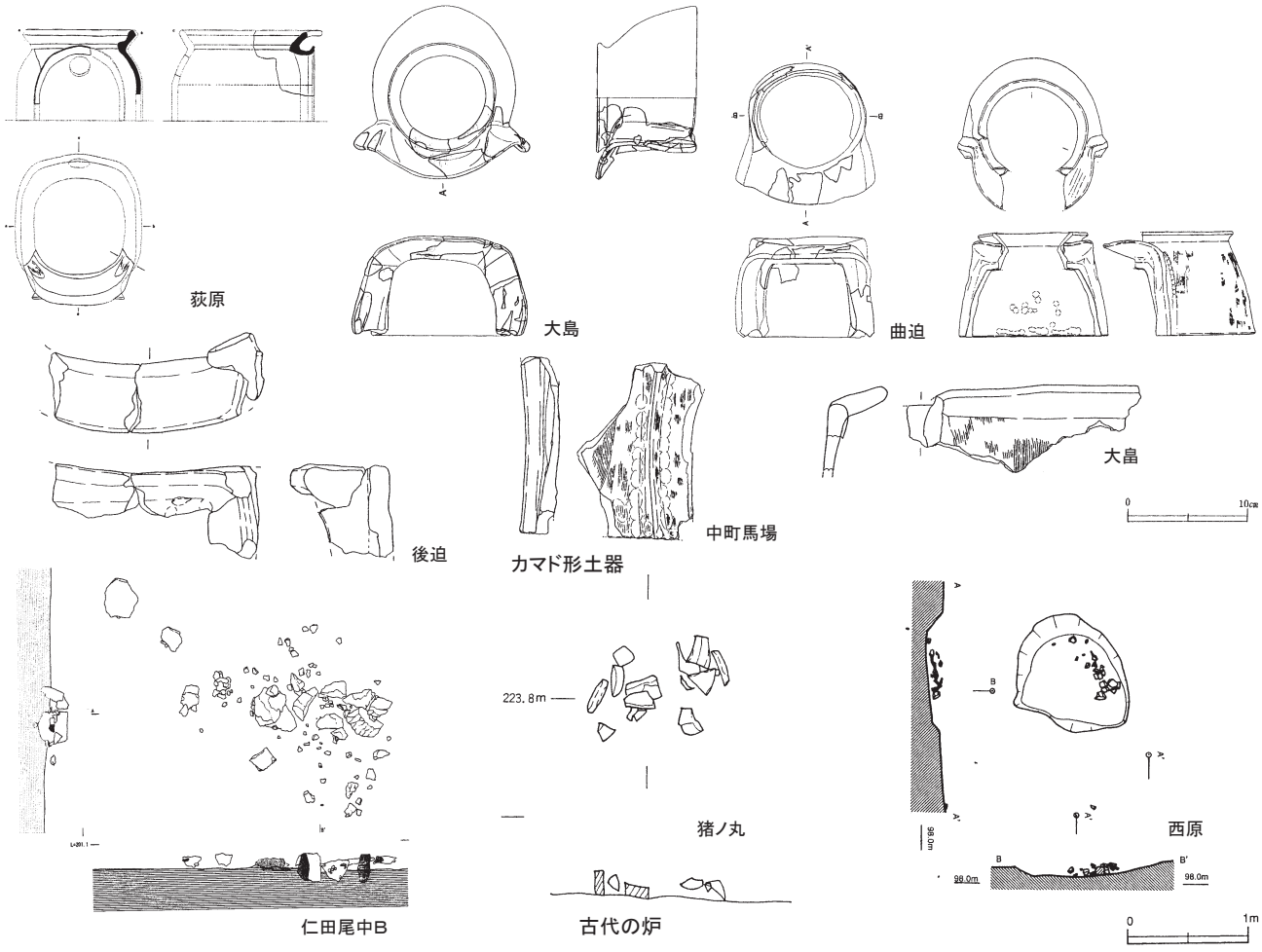
土師器と須恵器の割合



土師器の種類



第200図　古代の遺物の分類



第201図　カマド関係（その１）

表77　カマド関連遺跡一覧表（その１）

①カマド形土器出土遺跡

番号	遺跡名	所在地	時期	遺　物　名	備考	文献
1	萩原	姶良郡姶良町平松原字萩原	古代	移動式カマド	県内初の資料	町（1）1978
2	後迫	曽於郡大崎町横瀬字後迫	古代	移動式カマド		埋セ（66）2003
3	曲迫	霧島市溝辺町麓字曲迫	古代	移動式カマド	３個体あり	埋セ（64）2004
4	大島	薩摩川内市東大小路町	古代	移動式カマド		埋セ（80）2005
5	中町馬場	薩摩川内市里町村西字中町馬場	古代	移動式カマド		村（2）2004
6	安茶ヶ原	いちき串木野市市来町川上字南安茶ヶ原中	古代	移動式カマド		埋セ（118）2007
7	大畠	出水市野田町下名字大畠	古代	移動式カマド		町（1）2006
8	持躰松	南さつま市金峰町宮崎字持躰松	古代	移動式カマド		本報告
9	浜町	鹿児島市浜町	近世	カマド	カマドか？	埋セ（25）2000
10	松尾城及び宗功寺跡(3)	薩摩郡さつま町虎居字松尾	近世	カマド	カマドか？	町（7）1997

②軽石集積検出遺跡

番号	遺跡名	所在地	時期	遺　構　名	備考	文献
11	踊場	曽於市財部町南俣字踊場	古代	古代集石	４基。被熱なし。	埋セ（71）2004
12	高篠	曽於市財部町南俣字高篠	古代	軽石集石５	５基。土師器が出土。４・５は掘立柱建物内。軽石集積５から鍛造剥片検出。	埋セ（71）2004
13	宮尾	鹿児島市石谷町字宮尾	古代	土器集中遺構	大小の土師器甕２点・礫出土。被熱。	埋セ（73）2004
14	下永迫Ａ	日置市伊集院町下谷口字下永迫	古代	集石	隣接して竪穴遺構あり。	埋セ（72）2004
15	上ノ平	日置市伊集院町下神殿字上ノ平	古代	中世軽石集積	ピット内と地面に積んだものあり。被熱なし。	埋セ（70）2004
16	桐木	曽於市末吉町通山字桐木	古代	堀り込みのある焼土	４号建物中に軽石を伴う焼土あり。	埋セ（90）2005
17	常磐原	鹿児島市（郡山町）郡山字常磐原	古代	焼土遺構	103㎝×72㎝，厚さ16㎝の範囲に焼土粒子・赤色に焼けた軽石が散布。土師器片を伴う。	町（3）2003
18	唐尾	曽於市末吉町諏訪方字唐尾	古代		軽石を伴う焼土あり。	本年度刊行予定
19	谷山弓場城跡	鹿児島市下福元町字池田	中世	集積№９	軽石・礫・石臼・鉄輪・被熱あり。	市（11）1992
20	柳原	日置市伊集院町下谷口字柳原	中世	軽石集積	被熱なし。塚状に積んでいる。	埋セ（94）2005

③鍛冶炉検出遺跡

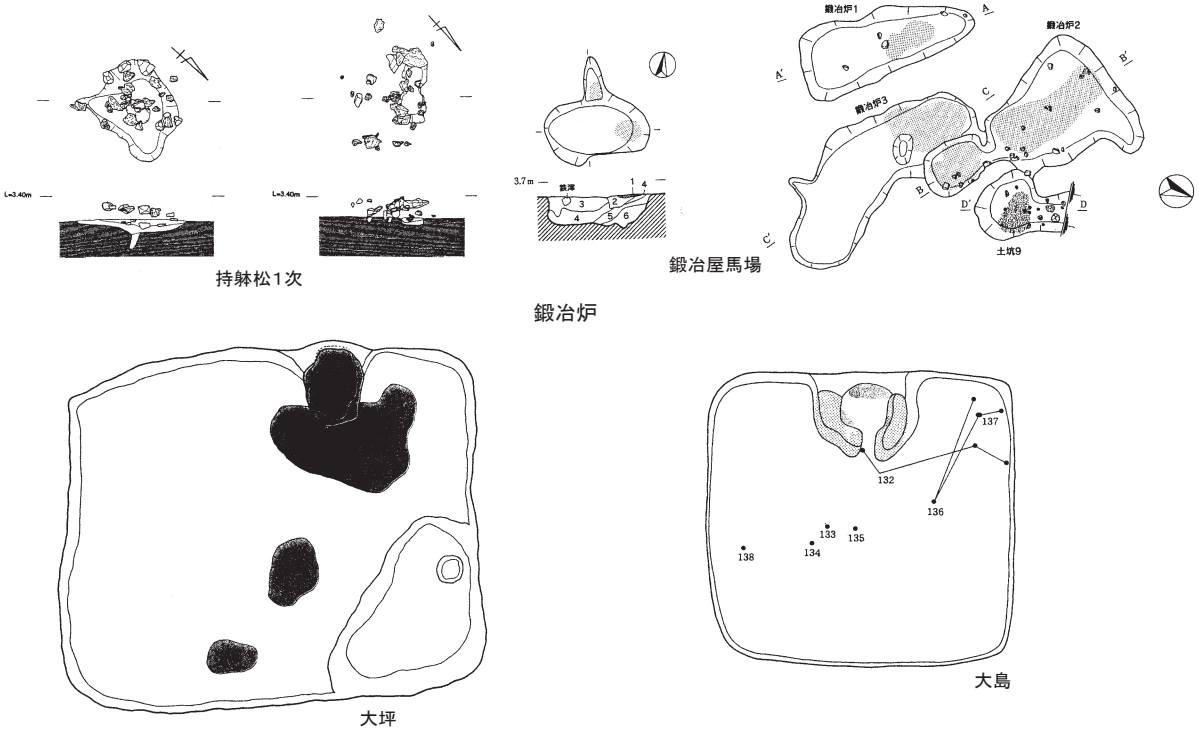
番号	遺跡名	所在地	時期	遺　構　名	備　考	文献
21	鍛冶屋馬場	薩摩川内市平佐町字鍛冶屋馬場	古代～	鍛冶炉	古代（10世紀中頃）・中世	埋セ（39）2002
22	橋牟礼川	指宿市十二町字下里・橋牟礼	古代	鍛冶炉	８世紀。竪穴住居内	市（21）1996
23	犬ヶ原	日置市東市来町伊崎田字犬ヶ原	古代	鍛冶炉	11～12世紀	埋セ（50）2003
24	高篠	曽於市財部町南俣字高篠	古代	軽石集石５	９世紀	埋セ（71）2004
25	宝満製鉄遺跡	志布志市志布志町帖字宝満	中世	土坑	土坑（集石）鍛冶炉か？廃滓場か？	町（31）2003
26	下山田Ⅲ（東地区）	奄美市笠利町万屋字下山田	中世	製鉄遺構	12～13世紀。	町（9）1988
27	松尾城及び宗功寺跡	薩摩郡さつま町虎居字松尾	中世	鉄関係炉	カマド状遺構を鍛冶炉に転用か？強く焼けている。	町（4）・(5)・(7)
28	上加世田	南さつま市加世田川畑字上加世田	中世	炉状遺構	カマド状遺構を鍛冶炉に転用か？強く焼けている。	市（3）1985
29	日輪城（恒吉城）跡	曽於市大隅町恒吉字麓	中世	SX316・366・372		町（20）2000
30	持躰松	南さつま市金峰町宮崎字持躰松	中世	鍛冶炉	中世前半か　鉄滓がぎっしりつまった土坑あり。	町（10）1998

参考文献

稲田孝司1978「忌みの竈と王権」『考古学研究』25－１　考古学研究会
杉井健1993「竈の地域性とその背景」『考古学研究』40－１　考古学研究会
鈴木秀典1989「竈と炉」『よみがえる中世２　－本願寺から天下一へ－　大坂』平凡社
田中昌樹2003「北陸地域の『竈形土製品』について」『富山考古学研究』第６号　財団法人富山県文化振興財団・埋蔵文化財調査室事務所
近澤豊明1992「竈形土製品について」『長岡京古文化論叢Ⅱ』
外山政子1992「炉かカマドかーもう一つのカマド構造についてー」『研究紀要』10　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
馬淵和雄1989「鎌倉の煮炊き　－囲炉裏と鍋－」『よみがえる中世３　－武士の都－　鎌倉』平凡社

報 告 書

姶良町教育委員会 1978『萩原遺跡』姶良町発掘調査報告書（２）
大隅町教育委員会・(財）元興寺文化財研究所 2000『日輪城（恒吉城）跡』大隅町埋蔵文化財調査報告書（20）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004『上ノ平遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（70）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003『後迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（66）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004『東免・曲迫・山神遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（64）
金峰町教育委員会 2003『鮎受・弥十山・針原・上水流Ｃ・Ｄ・大迫田遺跡』金峰町埋蔵文化財調査報告書（14）
栗野町教育委員会 1995『猪ノ丸遺跡』栗野町埋蔵文化財発掘調査報告書（３）
郡山町教育委員会 2003『常磐原遺跡』郡山町埋蔵文化財発掘調査報告書（３）



持躰松1次　　鍛冶屋馬場

鍛冶炉

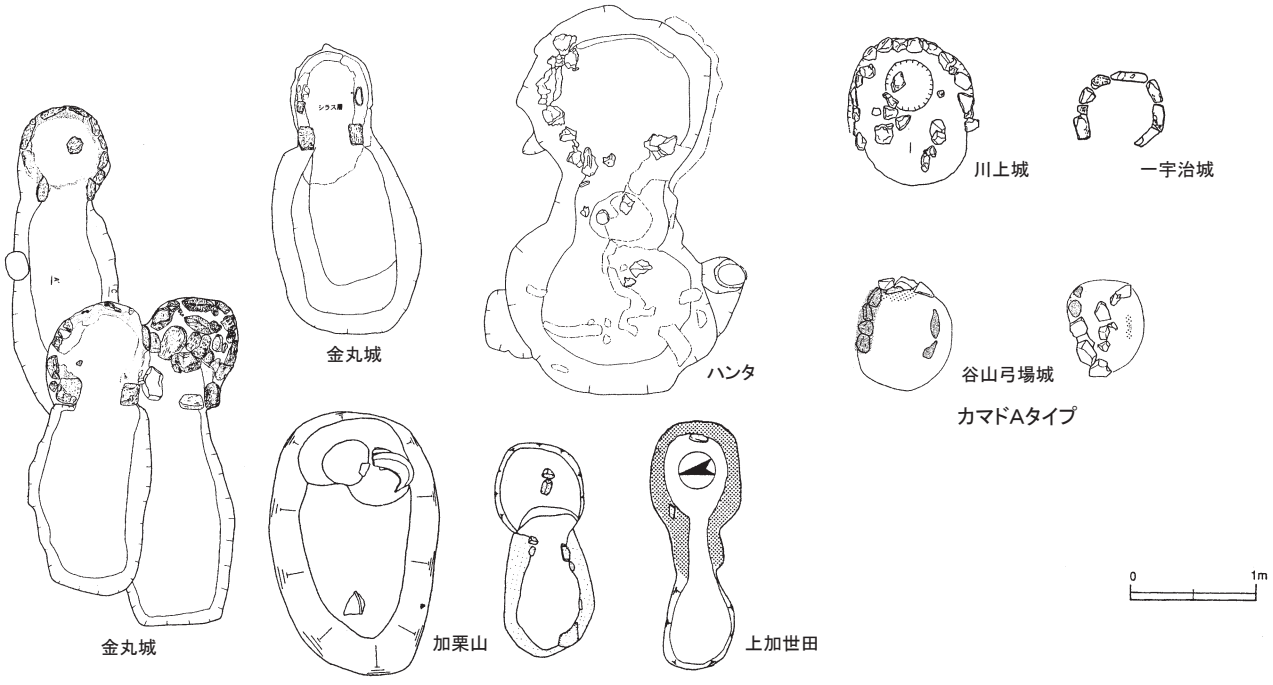
大坪　　大島

カマドを持つ竪穴建物

第202図　カマド関係（その２）

表78　カマド関連遺跡一覧表（その２）

番号	遺跡名	所在地	時期	遺　構　名	備考	文献
31	仁田尾中Ｂ	鹿児島市石谷町字仁田尾中	古代	１・２号配石炉	石組み炉・地床炉。	埋セ（110）2007
32	山神	霧島市溝辺町麓字山神	古代		地床炉・掘立柱建物内	県（7）1997
33	石打	姶良郡湧水町（旧吉松町）川西字石打	古代	２地点４基・３地点４基	炉内上部から土師器甕・安山岩礫など出土。被熱。	町（4）1999
34	猪ノ丸	姶良郡湧水町（旧栗野町）恒次字猪ノ丸	古代	配石遺構	砂岩礫十数個。被熱。	町（3）1995
35	中尾立	霧島市福山町福沢字中尾立	古代		４号建物内にカマド状遺構あり・他は地床炉。	町（2）1994
36	橋牟礼川	指宿市十二町字下里・橋牟礼	古代	地床炉	掘立柱建物内。	市（16）1994
37	高篠	曽於市財部町南俣字高篠	古代	集石１	掘り込みの上面に角礫が集中・被熱なし。	埋セ（71）2004
38	踊場	曽於郡財部町南俣字踊場	古代	古代焼土・古代礫集積	古代焼土・礫集積２基・１号建物内に焼土あり	埋セ（71）2004
39	中野西（根木原Ａ）	鹿屋市根木原町字中野西	古代	11号土坑	古代のかまどの可能性あり。	埋セ（76）2004
40	榎崎Ａ	鹿屋市郷之原町榎崎	古代	円形土坑	焼土のある（集石状）円形土坑（礫・土師器・粘土・焼土あり）。	県（63）1992
41	西原	日置市伊集院町郡字西原	古代	焼土土坑	礫・土師器。	埋セ（58）2003
42	小薗	南さつま市金峰町浦之名字小薗	古代	地床炉１	古代　礫・被熱・土師椀・土師甕。	町（11）2000
43	大坪	出水市美原町・黄金町字大坪ほか	古代		カマド付き竪穴住居８世紀	埋セ（79）2005
44	大島	薩摩川内市東大小路町字大島	古代		カマド付き竪穴住居８世紀	埋セ（80）2005
45	加栗山	鹿児島市川上町字加栗山	中世	中世カマド	炉址４基・１つには羽釜入り。	県（16）1981
46	成岡	薩摩川内市中福良町成岡	中世	中近世カマド		県（28）1983
47	苦辛城跡	鹿児島市山田町内城	中世	中近世カマド		県（27）1983
48	鶴ヶ岡城跡	薩摩川内市東郷町斧渕三ヶ郷	中世	カマド２基		町（8）2004
49	西ノ平	薩摩川内市中福良町西ノ平	中世	かまど５基	粘土壁のもの４基，石組み１基。うち３基は建物内。	県（28）1981
50	上ノ城	南さつま市加世田武田上ノ城	中世	１～８号炉	７からかんざし出土・堂平の１期出土（近世前半まで継続か）。	市（2）1980
51	上加世田－１（第Ⅱ地点）	南さつま市加世田川畑字上加世田	中世	カマド跡１・２号	室町時代。	市（3）1985
52	平泉城跡	大口市山野平出水字城	中世	炉跡５・集石２	集石は被熱。	市（1）1982
53	針原	南さつま市金峰町花瀬字針原	中世	炉状遺構	炭化物のＣ14から17世紀代か。	町（14）2003
54	上焼田Ａ・Ｂ	南さつま市金峰町宮崎字上焼田	中世	カマド	竪穴建物に付属。	町（15）2003
55	金丸城跡	曽於郡大崎町井俣字小牧・金丸	中世	焼土を伴う土坑19基	土坑17から擂鉢（備前か）出土・軽石でゲートをつくる。	町（4）2005
56	下堀	曽於郡大崎町岡別府字福岡・下堀	中世	焼土を伴う土坑５基		町（6）2006
57	谷山弓場城跡	鹿児島市下福元町字池田	中世	焼土（石組炉）４基	軽石・粘土・被熱（集積№９は軽石・礫・石臼・鉄輪・被熱あり）。	市（11）1992
58	川上城跡	鹿児島市川上町字弓場	中世	配石炉	室町時代。	市（18）1994
59	谷山城跡Ｅ地点	鹿児島市下福元町字岩下	中世	石組炉跡	中世か（谷山城時代か？）。	市（31）2000
60	油須木城跡	鹿児島市郡山町油須木字上ノ原	中世	カマド遺構７基	中世後半。	町（4）2004
61	頴娃城跡	揖宿郡頴娃町郡字城内	中世	カマド跡	15～16Ｃ　40×40円形　焼土。	町（7）2007
62	知覧城跡（蔵之城跡）	川辺郡知覧町永里字城内	中世	炉跡	カマドか　炉壁・石組・石・軽石。	町（12）2006
63	牟礼ヶ城跡	南さつま市金峰町池辺向江	中世	配石遺構	15世紀　被熱・土師皿。	町（4）1993
64	一宇治城跡	日置市伊集院町大田	中世	１トレンチ炉跡	被熱・土師皿。	町（5）1991
65	原口	日置市日吉町吉利西山字原田	中世	炉跡	被熱。	町（4）2003
66	串木野城跡	いちき串木野市上名城之元	中世	炉跡	円形石組炉が３基並ぶ　16～17世紀。	市（2）2000
67	松尾城及び宗功寺跡	薩摩郡さつま町虎居字松尾	中世	ＳＲ－１～４	１は石組み　３・４は石が被熱。	町（4）1994・(5）1995・(7）1997
68	中之城跡	阿久根市山下鳴川	中世	焼土遺構４基	カマド１の近くに鉄滓・坩堝あるが少量で鉄との関係不明　遺跡内に竪穴建物あり。	市（4）2003
69	松尾城跡	出水市上鯖淵字松尾	中世	石組遺構	スス付着・安山岩礫　火を使った生産遺構か？	市（10）1999
70	馬場Ａ	大口市平出水字馬場	中世	カマド１・２・３	１は建物内。	市（13）1994・(15）1996
71	辻町２	大口市平出水字辻町	中世	カマド２基		市（13）1994・市（15）1996
72	日輪城（恒吉城）跡	曽於市大隅町恒吉字麓	中世	中世の炉状遺構５基	軽石の石組のある炉跡。	市（3）2006・町（20）2000・(24）2002
73	井手ノ上	曽於市末吉町南之郷柿木字井手ノ上	中世	集石	焼土なし・拳大の礫が十数個　砥石・紡錘車出土。	町（8）1989
74	横川城跡	霧島市横川町中ノ字城山	中世	炉１～３	主に16　標高約240m。	町（1）1987
75	芝原	南さつま市金峰町宮崎字芝原	中世	カマド	切り取り保存を行っており，展示中。	未報告
76	上水流	南さつま市金峰町花瀬字上水流・森山	中世	カマド		本年度刊行予定
77	下山田Ⅲ（東地区）	奄美市笠利町万屋字下山田	中世	炉跡	炉跡。12～13世紀。	町（9）1988
78	ハンタ	大島郡喜界町西目字半田	中世か	11号遺構	熊大調査　南窯焼出土。	町（2）1987
79	オン畑	大島郡喜界町小野津	中世か	１・２号炉	カムィヤキ出土。建物。	町（5）1993
80	榕	霧島市横川町下ノ字榕ほか	近世	焼土域３基	近世カマド。薩摩焼甕・肥前陶器出土。	埋セ（78）2004
81	地頭仮屋跡	鹿児島市郡山町字松尾	近世	カマド遺構		市（44）2006
82	川の上・中ノ丸	鹿屋市大浦町松橋川の上・中ノ丸	近世	遺構１～５（カマド）	16世紀以降か・近世頃の掘立柱建物多い。	市（74）2004
83	新田	鹿屋市輝北町下百引字新田	近世	炉	近世掘立柱建物跡７号内炉。	町（2）2005
84	切石	鹿児島郡十島村諏訪之瀬島	近世	配石炉	３つの石を使用　鉄製鍋出土。	熊本大研究報告（1）1994
85	あやまる第２貝塚	奄美市笠利町須野字大道	近世か	サタヤドリ（黒糖製造跡）	江戸～昭和初期。	町（7）1984



第203図　カマド関係（その３）

第６節　鹿児島県の紡錘車について

１はじめに

本遺跡からは，土師器製の紡錘車が７点，鉄製紡錘車が３点出土している。県内では，土師器製及び鉄製紡錘車が同じ遺跡で出土した例は少ないが，転用品を含めた紡錘車の集成は行われておらず，研究も進んでいない。ここでは紡錘車資料を集成して若干の検討を行い，本遺跡における紡錘車資料の意義や遺跡の位置づけについて考えたい。

２考察

紡錘車は，一般的には正面観が円形を呈し中心部に穿孔を有する資料として認識されている。材質は，「石・土器・骨角・木・金属など」あるという（藤村淳子1997）。

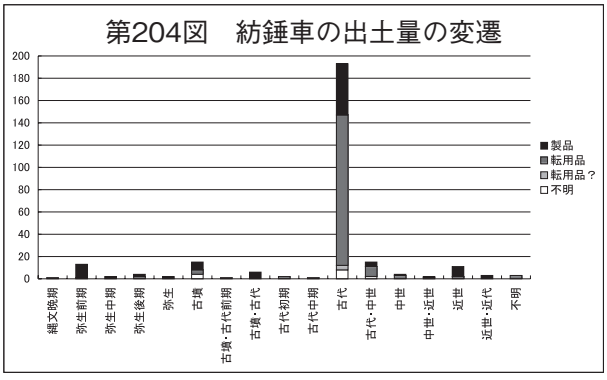
縄文期における本県の有孔円盤状製品を観察すると，周縁の調整が粗い資料が殆どであり，本県出土の古墳時代以降の土師器転用品に見られる周縁部の丁寧な調整とは明らかに趣を異にする。

中間研志氏は，「当初から紡錘車として作った方が製作途中の失敗も少なく，より確実に得られるという常識的判断」から，土器小片転用の有孔円盤状製品は「中古の中国の最古期や，朝鮮半島の若干の例外を除いて，その大多数は紡錘車ではないと判断したい」（中間1985）と述べる。筆者は特段判断を下しえる資料等持たないので，縄文後・晩期の有孔円盤状製品については，ここでは取り上げないことにする。

弥生時代以降については，土師器等転用による有孔円盤状製品に共伴する穿孔されない円盤状の土製品については，未製品の可能性を想定し集成に含めた。以下に各時代の量的・質的な状況を，紡錘車の材質や形態等の比較を通して県内の紡錘車の状況を概観する。

（１）弥生時代の特徴・傾向

出土点数は20点程度であり，量的には古墳時代と大差はない（204図参照）。弥生前期の資料が12点と多いが，高橋Ⅰ式土器と共伴する高橋貝塚出土の資料である。



形態については，高橋貝塚出土の紡錘車中２点は，正面観がつまみ蓋状の独特な器形を呈しており，「板付孤状溝列の系統に位置づけられるが，（内１点は）側面に沈線を巡らせ曲がり田期の特徴を残す」（中間1985）とされる。その他の資料に関しては，いずれの正面観も円盤状を呈する。

材質を見ると，高橋貝塚資料はいずれも土製であるが，その他の資料は石製である。大原・宮薗遺跡出土の弥生後期の資料中，２点の土製品を紡錘車に含めたが，亀の腹の甲を材質とした紡錘車に伴う穿孔のない円盤状製品であり，「メンコ」の可能性もある。土器の転用品が少ない点は，宮崎県の「土器をうちかいて成形した転用品が目立たない」（日高2006）との傾向と類似する。

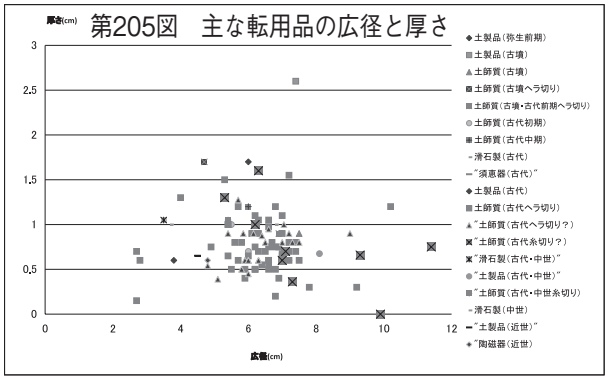
（２）古墳時代

弥生時代には殆ど見られなかった転用品が出現し，製品と同率を占める。円盤状が殆どであるが，つまみ蓋状の資料が１点，算盤玉状の製品が１点出土しているのが特筆される。つまみ蓋状の紡錘車は鹿児島大学構内で出土しており，他県の類似品との比較から５世紀後葉から６世紀初頭の時期が比定されている（甲斐康大2006）。隣の宮崎県では，算盤玉状の形態が弥生時代に存在するが，本県の同種資料が比較的宮崎県と近距離である東田遺跡（肝付郡高山町）で出土している。

転用品の多くが土師質であることと併せて，製品中，土製品及び土師質が１／３以上を占め，石製と続く。

（３）古代

それまでは数十点であった出土数も，古代になると200点程度に増える。多くは転用品である（204図参照）。特筆事項としては，鉄製紡錘車の出現が挙げられる。



当該時期のものは，全て円盤状を呈する。転用品の多くが土師器底部の再利用である。円形を呈する土師器の底部は加工しやすいことから転用素材として適していたのであろう。

底部の切り離し痕と，広径との関係をみると，ヘラ切り痕ありの紡錘車の方が糸切り痕ありのものよりもややばらつきがみられるが，顕著な差異ではない（図205参照）。一方，土師転用品の広径の散布状況は４～８㎝程度と広いのに対して，鉄製紡錘車の広径は４～６㎝の間に収まり，鉄製紡錘車が他の材質の紡錘車よりも画一性

が高いという事実は滝澤亮氏の指摘と合致する（滝澤1985）。また，堀田孝博氏は鉄製紡錘車の出現と普及の背景を考察する中で，転用紡錘車の出現が庸調絹・布の粗悪化をまねき，「それへの国家的対策」として鉄製紡錘車が普及したと分析する（堀田1999）。

転用品の多くは，椀や高台付椀に比して坏の底部を再利用している。これは体部に加えて高台を打ち欠く手間を避ける意識が働いていた可能性がある。石製については，石材の記載がないものも多く確認できなかったものがあった。確認できたものの中では，砂岩や泥岩，粘板岩製がほとんどを占める。石材をみると，砥石に使用される石材が含まれることが注目され，「材質が砂岩や凝灰岩に限られており，その形状からみてもある程度使い込んだ砥石の形を調整した」（堀田1999）との指摘もある。しかし，砥石の再利用と指摘された事例は見られない。鉄製紡錘車については，紡輪14点，紡茎４点の計18点の出土が確認された。小中原遺跡・榎崎Ａ遺跡・小倉畑遺跡・鍛冶屋馬場遺跡・市ノ原遺跡５地点・持躰松遺跡から出土しているが，特に地理的傾向は見出されない。６か所中，鍛冶屋馬場遺跡６点，市ノ原遺跡５地点４点，持躰松遺跡３点，小倉畑遺跡２点と４遺跡で複数出土するが，鉄製紡錘車の出土が遺跡の性格を意味するものなのか，保存に適した埋土状況を示すものかは，現況では確認できない。

（４）中世

古代に200点近く出土した紡錘車は，中世になると激減し，転用品が殆どを占める。ただし，鉄製と木製の紡錘車の普及も想定されることから，出土数の割合が当時の紡錘車の割合を示していない可能性がある。

形態は古代同様，全て円盤状を呈する。材質については，土師質と石製に加え須恵器や滑石製石鍋の転用品も含まれる。ただし，鉄製紡錘車は出土していない。

（５）近世

本県では，可能性を含め製品13点，不明３点の報告がある。なお，宮崎県では「漁労用の網ひもをよるための大型品の民俗例が残る」が，一般的には「近世になると消滅」するという（日高2006）。本県資料中にも，その形態や材質から紡錘車としての機能が疑われる資料が含まれており，宮崎県と同様な傾向が見出される。

円盤状に加え，双穿状が出土している。紡錘車と報告されているが，形態からみて土錘の可能性が高い。材質に関しては，製品として，土師質土製品14点，軽石製２点の報告がある。転用品は極僅かで，土製品と陶磁器製がある。

３結論

紡錘車は，その出自から製品と転用品に分けられる。弥生・古墳時代は製品が多く，古代に転用品が主流を占める。古墳時代の紡錘車は少量であるが，同時代の土器の突帯刻みに布目圧痕を有する資料が確認されることに注目したい。「弥生時代の終わりから古墳時代の甕や壺に多」く，「布目圧痕で確認できる布の織は細かく，その布地の素材や織りの種類は特定できない」が（中村直子2005），紡織の例証の一つと捉えられる。他には土器底部に糸による丁寧な編み痕が残される資料も散見されるなど，紡錘車が一定量使用されていた可能性を示唆する。古代になると，紡錘車の出土量が激増する。宮崎県においても，紡錘車出土数の増大化と，土器転用の割合の高さが指摘され（日高2006），本県同様の傾向がうかがえる。古代の量的な突出は，南九州における古代前後に，紡織を巡って量的・質的に画期的変化があった可能性を示す。紡錘車の増加の主な要因としては，律令制度に基づく調庸の負担が挙げられよう。10世紀成立の『延喜式』には，大隅国・薩摩国ともに調庸としての布の課税が記載されている。なお，『延喜式』民部下に「隼人調布」が見えることから，調の布と隼人調布とは規格が異なっていた可能性が指摘（永山2006）されており，紡錘車との関連で注目される。質的変化に関しては，鉄製及び転用紡錘車の出現期と，調庸布の粗悪化する時期がほぼ同時期であることから，古墳・古代期における紡錘車の質的・量的変化と調庸に係る国家的政策との関連性を指摘する意見がある（堀田1999）。また，京田遺跡で古代の木製紡錘車が出土しているという事実から，県内においても少なくとも古代以前には木製紡錘車が普遍的に存在した可能性がある。県内では，弥生後期では大原・宮薗遺跡（薩摩川内市下甑町）の壺棺付近から，古代では榎崎Ａ遺跡（鹿屋市）の周溝墓から鉄製紡錘車３点，小倉畑遺跡（姶良町）の周溝墓から紡茎２点，古代・中世では山崎Ｂ遺跡（湧水町）と薩摩国分寺（薩摩川内市）の土坑内から１点ずつ出土している。県外の事例とは時代的差異があるが，紡錘車が埋葬儀礼に関係する可能性についても指摘したい。

このことから，持躰松遺跡出土の鉄製紡錘車についても祭祀的な行為に使用された可能性があるといえよう。今後は，周辺地域を含め他県の事例とも比較検討しながらより詳細な分析を行って明らかにしていく必要がある。

引用・参考文献

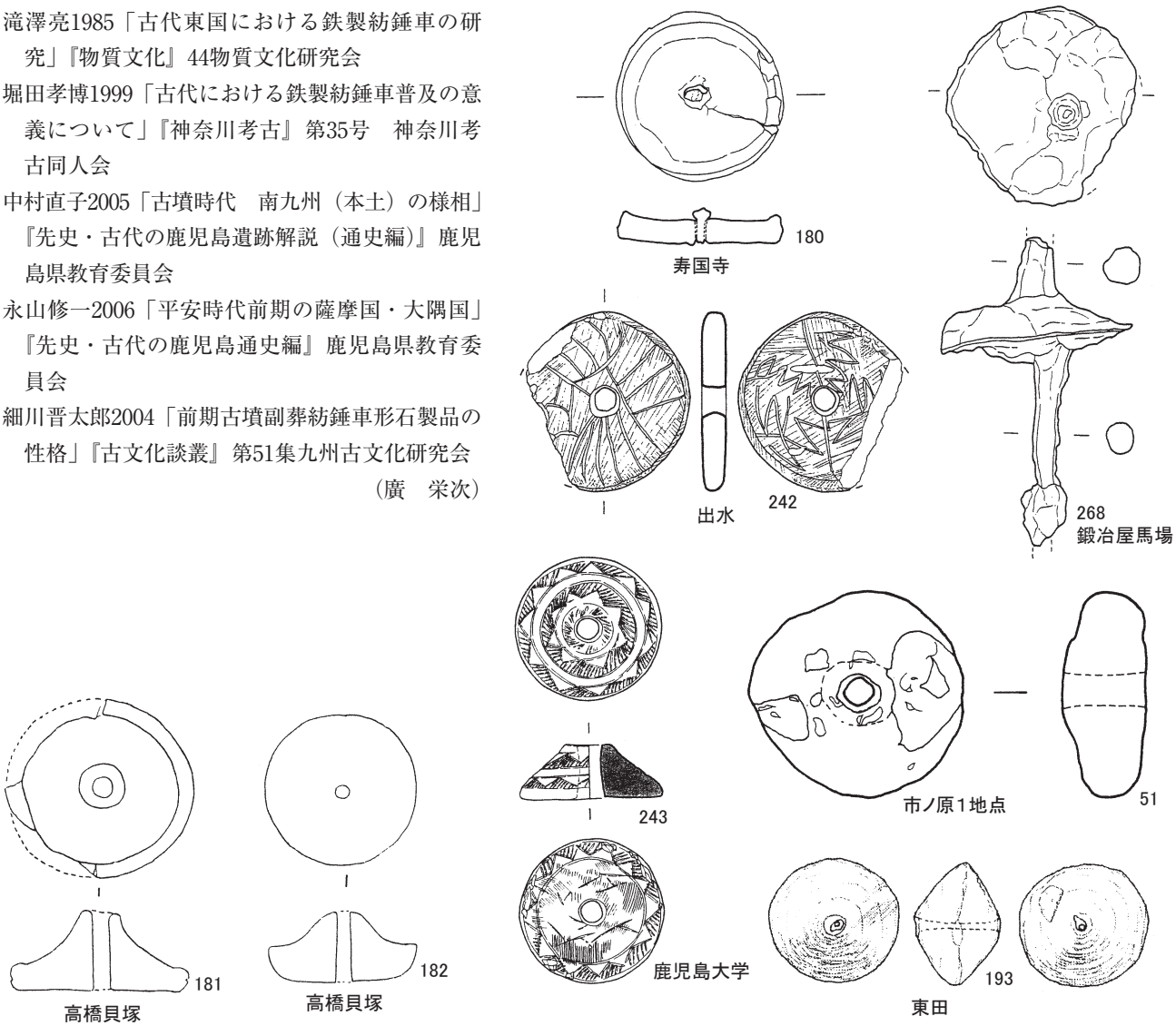
藤村淳子1985「紡錘車」『弥生文化の研究』第５巻　道具と技術Ⅰ　雄山閣

中間研志1985「紡錘車の研究」『石崎曲り田遺跡－Ⅲ－』福岡県教育委員会発掘調査報告書第11集　福岡県教育委員会

日高優子2006「宮崎県内における紡錘車の様相」『宮崎考古学会発表レジュメ』

甲斐康大2006「資料紹介」『「News letter」鹿児島大学

総合研究博物館
滝澤亮1985「古代東国における鉄製紡錘車の研究」『物質文化』44物質文化研究会
堀田孝博1999「古代における鉄製紡錘車普及の意義について」『神奈川考古』第35号　神奈川考古同人会
中村直子2005「古墳時代　南九州（本土）の様相」『先史・古代の鹿児島遺跡解説（通史編）』鹿児島県教育委員会
永山修一2006「平安時代前期の薩摩国・大隅国」『先史・古代の鹿児島通史編』鹿児島県教育委員会
細川晋太郎2004「前期古墳副葬紡錘車形石製品の性格」『古文化談叢』第51集九州古文化研究会
（廣　栄次）



第206図　県内出土の特徴的な紡錘車（スケールは不統一）

表79　紡錘車一覧（1）

石製紡錘車一覧

番号	遺跡名	所在地	時代	直径	厚さ	A※	重さ(g)	穿孔形態	穿孔偏比	出土遺構	材質	完形	備考
233	久保崎Ⅳ	曽於市大隅町月野	縄文晩期	－	－	－	－	正円	－		滑石		
234	阿多貝塚	南さつま市金峰町	弥生	4.2	1.2	0.9	－	正円	0		不明		
235	入来	日置市吹上町入来	弥生	4	0.4	1.35	－	正円	0.968	溝	泥岩	○	
236	谷添	南大隅町根占横別府	弥生中期	5.7	0.5	0.5	12.17	正円	0		頁岩		
237	谷添	南大隅町根占横別府	弥生中期	4.9	0.65	0.5	22.9	なし	0		頁岩	○	
238	大原・宮薗	薩摩川内市下甑町	弥生後期	4.95	2.475	0.825	－	正円	0		軽石		追加
239	上原	鹿屋市南町	古墳	4.4	0.7	0.8	－	なし	0		不明		
240	萩原（Ⅱ）	姶良町重富	古墳	4.57	0.85	－	－	正円	－		砂岩		追加
241	成岡Ⅱ	薩摩川内市福良町	古墳	5.2	0.6	0.9	－	正円	0	住居内	砂岩		
242	出水	鹿屋市吾平町上名	古墳	5.25	0.7	0.6	20.6	正円	0		不明		
243	鹿児島大学	鹿児島市荒田町	古墳	4.2	1.6	0.7	－	正円	0	住居内	不明	○	
244	橋牟礼川	指宿市十二町下里丈六	古墳	4.8	0.95	0.8	20	正円	0		不明		
245	永野原	肝属町高山後田	古墳・古代	4.35	0.7	0.6	18.8	正円	0		粘板岩	○	
246	永野原	肝属町高山後田	古墳・古代	5.25	1.05	0.9	20.6	穿孔途中	0		粘板岩	○	
247	永野原	肝属町高山後田	古墳・古代	5.2	0.85	－	19.6	正円	0		粘板岩		
248	永野原	肝属町高山後田	古墳・古代	7.55	2.1	－	131	なし	－		粘板岩		
249	城山山頂	霧島市国分上小川	古墳・古代	5.2	0.35	0.7	12	正円	0		砂岩		
250	城山山頂	霧島市国分上小川	古墳・古代	5.2	0.8	0.6	8	正円	0		砂岩		
251	本御内	霧島市国分中央2丁目	古代	4.28	0.94	1	－	正円	0.896		砂岩		
252	市ノ原（1）	いちき串木野市市来町大里	古代	6.8	1	0.54	97.92	なし	0.92		滑石	○	
253	藤坂・基中	蒲生町下久徳	古代	7	0.7	0.6	－	正円	0		頁岩		
254	一宇治城	日置市伊集院町大田	古代・中世	3.6	0.6	0.3	－	正円	0.94		軽石	○	
255	一宇治城	日置市伊集院町大田	古代・中世	4.2	0.8	0.3	－	正円	0.81		軽石	○	
256	山田中西	喜界町山田	古代・中世	3.5	1.05	0.3	27	正円	0		滑石	○	
257	小中原	南さつま市金峰町宮崎	中世	3.7	1	0.3	－	正円	不明		滑石		打欠・追加
258	大畠	出水市野田町下名	中世	4.6	0.85	0.7	－	正円	0	貝塚	不明	○	
259	浜町	鹿児島市浜町	近世	4.9	1.7	0.2	－	正円	0		軽石	○	
260	浜町	鹿児島市浜町	近世	6.7	1.8	0.5	－	正円	0		軽石	○	

その他の紡錘車一覧

番号	遺跡名	所在地	時代	直径	厚さ	A※	重さ(g)	穿孔形態	穿孔偏比	出土遺構	材質	完形	備考
261	大原・宮薗	薩摩川内市下甑町	弥生後期	5.36	0.9	0.8	20	正円	0	臺稲付近	亀の腹甲	○	
262	京田	薩摩川内市中郷町	古代	6.5	0.75	0.6	－	正円	0	溜池	木製	○	

鉄製紡錘車一覧

番号	遺跡名	所在地	時代	直径	厚さ	A※	紡茎長	紡茎幅	紡茎厚	重さ(g)	穿孔形態	穿孔偏比	出土遺構	完形	備考
263	小中原	南さつま市金峰町新山	古代	4.5	0.2	－	－	－	－	16.4	正円	－		○	
264	榎崎A	鹿屋市郷之原	古代	4.2	0.48	0.3	－	－	－	－	正円	0	周溝墓	○	
265	小倉畑	姶良町西餅田	古代	－	－	－	－	22.6	－	－	正円	0	周溝墓	○	円形・紡茎
266	小倉畑	姶良町西餅田	古代	5.55	0.69	0.36	－	－	－	－	正円	0	周溝墓	○	紡茎
267	鍛冶屋馬場	薩摩川内市平佐町	古代	－	－	－	10.6	0.5	0.5	11	なし	0			円形
268	鍛冶屋馬場	薩摩川内市平佐町	古代	5.7	1.3	－	－	－	－	－	正円	0			レンズ状
269	鍛冶屋馬場	薩摩川内市平佐町	古代	－	1	－	8.8	1	－	46	正円	0			
270	鍛冶屋馬場	薩摩川内市平佐町	古代	5.3	0.2	0.6	－	－	－	21	なし	0			
271	鍛冶屋馬場	薩摩川内市平佐町	古代	4.4	0.9	－	－	－	－	13	長楕円	－			レンズ状
272	鍛冶屋馬場	薩摩川内市平佐町	古代	－	－	－	8	0.9	0.9	44	なし	0		○	
273	鍛冶屋馬場	薩摩川内市平佐町	古代	4.8	1.8	－	－	－	－	－	なし	0		○	
274	市ノ原（5）	日置市東市来町湯田	古代	4.7	0.27	0.22	－	－	－	8.2	正円	0.96			
275	市ノ原（5）	日置市東市来町湯田	古代	6.174	0.26	－	－	－	－	－	正円	0			
276	市ノ原（5）	日置市東市来町湯田	古代	－	－	－	－	－	－	－	正円	－			紡茎
277	市ノ原（5）	日置市東市来町湯田	古代	－	－	－	－	－	－	－	正円	0			紡茎
278	持躰松	南さつま市金峰町宮崎	古代	3.85	0.25	0.2	3.15	0.35~0.4	－	－	正円	0		○	円形
279	持躰松	南さつま市金峰町宮崎	古代	3.9	0.25	0.1	－	0.25	－	－	正円	0			円形
280	持躰松	南さつま市金峰町宮崎	古代	4.8	0.3	0.3	2.4	0.35	－	－	正円	0.805	遺構		円形

※　Aは穿孔部の直径
※　穿孔偏比は器体中心部を1としたときの偏り比

転用紡錘車一覧

番号	遺跡名	所在地	時代	直径	厚さ	A※	重さ(g)	穿孔形態	穿孔偏比	出土遺構	転用部位	底部痕跡	完形	備考
1	サウチ	奄美市笠利町喜瀬	弥生前期	6	1.7	5.4	－	正円	0	住居内	不明	不明	○	
2	大原・宮薗	薩摩川内市下甑町	弥生後期	6.7	1.7	－	－	なし	－		高台付椀底部	不明	○	追加
3	大原・宮薗	薩摩川内市下甑町	弥生後期	2.9	1	－	－	なし	－		高台付椀底部	不明	○	追加
4	萩原（Ⅱ）	姶良町重富	古墳	3.9	1.8	0.65	－	正円	0	住居内	不明	不明	○	
5	萩原（Ⅱ）	姶良町重富	古墳	7.4	2.6	1.28	－	正円	0		甕底部	－	○	未製品
6	萩原（Ⅱ）	姶良町重富	古墳	6	1	0.7	－	正円	0		不明	不明		
7	崎山・落ノ上	鹿児島市宮之浦町	古墳	7.5	0.9	0.9	－	正円	0		不明	不明		
8	榎木原	鹿屋市高須町	古墳	3.75	1.05	0.6	－	正円	0		不明	不明		
9	大島	薩摩川内市中郷町	古墳	4.7	1.7	0.6	28.7	正円	0.84		杯底部	ヘラ		
10	角野原Ⅱ	吾平町上名	古墳	6.8	0.7	0.8	－	正円	0		不明	不明		
11	下大原	鹿児島市喜入町瀬々串	古墳	4.8	1.56	0.6	－	なし	0	住居内	不明	不明	○	
12	城下	薩摩川内市百次町	古墳・古代前期	6.9	0.9	0.96	－	なし	0		杯底部	ヘラ		
13	大坪	出水市美原町	古代初期	5.5	1	1.4	43.3	なし	0.92		皿底部	不明	○	
14	大坪	出水市美原町	古代初期	6	0.7	1.1	38.3	なし	0		皿底部	不明	○	
15	薩摩国府	薩摩川内市国分寺町	古代	7.7	0.9	0.8	－	正円	0.902		底部	不明		
16	新番所後	指宿市十二町	古代	5.7	0.675	0.8	－	穿孔途中	0.928		杯底部	不明		
17	石峰	霧島市溝辺町麓	古代	5.6	0.6	－	－	なし	0		杯底部	不明	○	未製品・追加
18	石峰	霧島市溝辺町麓	古代	6	0.9	－	－	正円	－		底部	不明	○	追加
19	石峰	霧島市溝辺町麓	古代	8.4	1	－	－	穿孔不明	－		底部	不明		追加
20	小山	鹿児島市宮ノ浦町	古代	6.2	0.9	0.55	－	正円	0		底部	不明		
21	西ノ平	薩摩川内市中福良町	古代	7.2	0.9	0.3	－	正円	－		杯底部	ヘラ？	○	
22	西ノ平	薩摩川内市中福良町	古代	5.7	1.275	0.6	－	正円	0.914		杯底部	ヘラ？	○	未製品
23	春田	霧島市隼人町小浜	古代	7.2	1.3	0.85	－	正円	0		杯底部	不明		周縁欠
24	榎崎Ａ	鹿屋市郷之原	古代	6.4	0.875	0.95	－	正円	不明	周溝墓	底部	ヘラ？		周縁打欠
25	榎崎Ａ	鹿屋市郷之原	古代	7	0.8	1.2	－	正円	0	周溝墓	高台付椀底部	ヘラ？		
26	榎崎Ａ	鹿屋市郷之原	古代	6	0.6~1.35	0.85	－	正円	0		高台付椀底部	ヘラ？	○	
27	榎崎Ａ	鹿屋市郷之原	古代	4.8	0.54	1.05	－	正円	0		底部	ヘラ？	○	
28	榎崎Ａ	鹿屋市郷之原	古代	5.1	0.39	0.9	－	正円	0		底部	ヘラ？		
29	榎崎Ａ	鹿屋市郷之原	古代	6.3	0.6	1.05	－	正円	0		高台付椀底部	ヘラ？		
30	榎崎Ａ	鹿屋市郷之原	古代	9	0.9	0.9	－	正円	0		底部	ヘラ？		周縁打欠
31	榎崎Ａ	鹿屋市郷之原	古代	5.9	0.6	1.05	－	正円	0		高台付椀底部	ヘラ？		
32	榎崎Ａ	鹿屋市郷之原	古代	6.3	0.6	0.9	－	正円	0		底部	ヘラ？		
33	榎崎Ａ	鹿屋市郷之原	古代	5.4	0.9	1.2	－	楕円	0		底部	ヘラ？		
34	九日田	湧水町栗野北方	古代	12	1.2	0.5	－	正円	0		製品	－		
35	竹牟礼	蒲生町漆	古代	7	0.675	－	－	正円	－		底部	ヘラ		追加
36	竹牟礼	蒲生町漆	古代	6.6	0.975	－	－	正円	0.746		底部	ヘラ		
37	竹牟礼	蒲生町漆	古代	6.3	0.9	－	－	正円	0		底部	ヘラ		
38	竹牟礼	蒲生町漆	古代	7.8	0.3	－	－	正円	0		底部	ヘラ		
39	星塚	霧島市横川町下ノ	古代	6	0.51	0.75	－	正円	0		底部	不明		
40	星塚	霧島市横川町下ノ	古代	6.15	0.5	0.75	－	正円	0		底部	不明		
41	本御内	霧島市国分中央2丁目	古代	7.14	0.42	1	－	正円	0		底部	不明		
42	高井田	加治木町木田	古代	6.5	0.75	0.75	－	正円	0		杯・椀底部	不明	○	
43	計志加里	薩摩川内市中郷町	古代	6	0.66	0.6	－	なし	0		椀底部	－		
44	市ノ原（1）	いちき串木野市市来町大里	古代	7.3	0.36	0.9	46.77	正円	0		高台付椀底部	糸？	○	
45	市ノ原（1）	いちき串木野市市来町大里	古代	7.1	0.7	0.75	－	なし	0.64		高台付椀底部	糸？		
46	市ノ原（1）	いちき串木野市市来町大里	古代	11.4	0.75	0.9	－	長楕円	0		底部	糸？		
47	市ノ原（1）	いちき串木野市市来町大里	古代	9.3	0.66	－	－	正円	－		底部	糸？		
48	市ノ原（1）	いちき串木野市市来町大里	古代	9.9	－	0.6	－	なし	0.8		高台付椀底部	糸？		未製品
49	市ノ原（1）	いちき串木野市市来町大里	古代	6.3	1.6	0.6	－	正円	0		底部	糸？	○	
50	市ノ原（1）	いちき串木野市市来町大里	古代	5.3	1.3	0.6	－	正円	0		底部	糸？	○	
51	市ノ原（1）	いちき串木野市市来町大里	古代	6.2	1	0.6	－	なし	0		底部	糸？		
52	中原	姶良町脇元	古代	7.5	1.2	－	－	正円	－		杯底部	不明		
53	中原	姶良町脇元	古代	7.5	1.8	1.6	－	正円	0		椀底部	不明		
54	石坂	日置市伊集院町郡	古代	6.6	0.95	0.8	－	正円	0		底部	ヘラ？	○	
55	高篠坂	曽於市財部町南俣	古代	6.3	0.9	0.9	－	正円	0		椀底部	不明		
56	高篠坂	曽於市財部町南俣	古代	9.8	1.2	1.05	－	正円	0		椀底部	不明		
57	曲迫	霧島市溝辺町麓	古代	6.2	1.1	0.6	－	正円	0		底部	不明	○	周縁打欠
58	踊場	曽於市財部町南俣	古代	6.96	0.7	－	23.8	なし	－		高台付椀底部	不明		未製品
59	踊場	曽於市財部町南俣	古代	7.3	0.8	1.05	39.1	なし	0		底部？	ヘラ？	○	
60	踊場	曽於市財部町南俣	古代	7.5	0.8	0.75	8.7	正円	0		底部？	ヘラ？	○	
61	踊場	曽於市財部町南俣	古代	6	0.45	0.75	18.6	なし	0		底部？	ヘラ？	○	
62	踊場	曽於市財部町南俣	古代	5.8	0.5	－	29.5	正円	0		底部？	ヘラ？	○	未製品
63	踊場	曽於市財部町南俣	古代	6.5	0.8	－	21.2	正円	－		杯底部	ヘラ？		未製品
64	踊場	曽於市財部町南俣	古代	7.05	1	－	17.8	正円	－		杯底部	ヘラ？		未製品
65	踊場	曽於市財部町南俣	古代	－	1.2	－	23.1	正円	－		底部	ヘラ？		未製品
66	踊場	曽於市財部町南俣	古代	6.15	0.9	－	7.2	正円	－		底部	ヘラ？		未製品
67	踊場	曽於市財部町南俣	古代	5.85	0.9	－	6.9	正円	－		底部	ヘラ？		未製品
68	高篠	曽於市財部町南俣	古代	－	0.85	0.6	－	なし	－		杯底部	ヘラ		
69	高篠	曽於市財部町南俣	古代	4.9	0.75	0.6	－	なし	0		杯底部	ヘラ	○	
70	高篠	曽於市財部町南俣	古代	6.2	0.5	0.8	－	なし	0		杯底部	ヘラ		
71	高篠	曽於市財部町南俣	古代	5.4	1	0.7	－	正円	0		杯底部	ヘラ		
72	高篠	曽於市財部町南俣	古代	6.6	0.5	－	－	正円	0.98		杯底部	ヘラ		
73	高篠	曽於市財部町南俣	古代	5.9	0.4	0.8	－	正円	0		杯底部	ヘラ	○	
74	高篠	曽於市財部町南俣	古代	6.8	0.75	0.6	－	正円	0		杯底部	ヘラ	○	
75	高篠	曽於市財部町南俣	古代	5.8	0.8	0.7	－	なし	0		杯底部	ヘラ	○	
76	高篠	曽於市財部町南俣	古代	2.8	0.6	0.8	－	正円	0.936		杯底部	ヘラ		
77	高篠	曽於市財部町南俣	古代	5.6	0.8	0.8	－	正円	0		杯底部	ヘラ	○	
78	高篠	曽於市財部町南俣	古代	6.2	0.75	0.9	－	なし	0		杯底部	ヘラ	○	
79	高篠	曽於市財部町南俣	古代	2.7	0.7	0.8	－	正円	0		杯底部	ヘラ		
80	高篠	曽於市財部町南俣	古代	6.8	0.2	1.2	－	正円	0		杯底部	ヘラ		
81	高篠	曽於市財部町南俣	古代	6.2	0.5	0.8	－	正円	0		杯底部	ヘラ		
82	高篠	曽於市財部町南俣	古代	7.5	0.6	0.75	－	正円	0		杯底部	ヘラ		
83	高篠	曽於市財部町南俣	古代	7.2	1.55	0.3	－	正円	0		杯底部	ヘラ		
84	高篠	曽於市財部町南俣	古代	7.2	0.7	－	－	正円	0		杯底部	ヘラ	○	
85	高篠	曽於市財部町南俣	古代	6.3	1.05	－	－	正円	0		杯底部	ヘラ	○	
86	高篠	曽於市財部町南俣	古代	6	0.65	－	－	正円	－		杯底部	ヘラ		
87	高篠	曽於市財部町南俣	古代	6.8	0.5	－	－	正円	－		杯底部	ヘラ	○	
88	高篠	曽於市財部町南俣	古代	7.4	0.7	－	－	正円	－		杯底部	ヘラ	○	
89	高篠	曽於市財部町南俣	古代	5.9	0.5	－	－	正円	－		杯底部	ヘラ		
90	高篠	曽於市財部町南俣	古代	5.4	0.65	－	－	正円	－		杯底部	ヘラ		
91	大島	薩摩川内市中郷町	古代	7	1.1	0.8	54.7	正円	0		杯底部	ヘラ	○	
92	大島	薩摩川内市中郷町	古代	6.2	1.1	1	43.4	正円	0		杯底部	ヘラ	○	
93	大島	薩摩川内市中郷町	古代	5.7	1.2	1.1	30.8	正円	0		杯底部	ヘラ	○	
94	大島	薩摩川内市中郷町	古代	6.1	0.9	1.2	22.6	正円	0		杯底部	ヘラ		
95	大島	薩摩川内市中郷町	古代	5.4	1	0.6	21.7	正円	0		杯底部	ヘラ		
96	大島	薩摩川内市中郷町	古代	4	1.3	0.9	22.3	正円	0		杯底部	ヘラ		
97	大島	薩摩川内市中郷町	古代	6.8	1.2	0.9	34.7	なし	0		杯底部	ヘラ	○	
98	大島	薩摩川内市中郷町	古代	6.3	0.7	1	19.7	正円	0		杯底部	ヘラ		
99	大島	薩摩川内市中郷町	古代	5.3	1.5	1	19.8	正円	0		杯底部	ヘラ		
100	京田	薩摩川内市中郷町	古代	7	0.6	0.45	－	正円	0		杯体部	糸？		周縁打欠
101	財部城ヶ尾	曽於市財部町南俣	古代	7	0.65	0.8	－	正円	0		底部	ヘラ		
102	財部城ヶ尾	曽於市財部町南俣	古代	6	0.6	0.5	－	正円	0		底部	ヘラ？		
103	財部城ヶ尾	曽於市財部町南俣	古代	6.6	0.6	0.6	－	正円	0		底部	ヘラ		
104	財部城ヶ尾	曽於市財部町南俣	古代	7.2	0.8	1	－	正円	0		底部	ヘラ		
105	財部城ヶ尾	曽於市財部町南俣	古代	7.2	0.6	0.6	－	不明	0		底部	ヘラ		
106	財部城ヶ尾	曽於市財部町南俣	古代	6.6	1.05	0.8	－	正円	0		底部	ヘラ		
107	柳原	日置市伊集院町下谷口	古代	6.6	0.6	0.75	－	正円	0		椀底部	ヘラ	○	
108	柳原	日置市伊集院町下谷口	古代	6.6	0.75~1.05	0.45	－	正円	0		椀底部	ヘラ	○	
109	柳原	日置市伊集院町下谷口	古代	6.9	0.75	0.45	－	正円	0		椀底部	ヘラ	○	
110	柳原	日置市伊集院町下谷口	古代	9.2	0.3	0.45	－	正円	0		椀底部	ヘラ		
111	柳原	日置市伊集院町下谷口	古代	2.7	0.15	0.3	－	正円	0		椀底部	ヘラ		
112	尾崎Ｂ	出水市文化町	古代	7	0.24	1.3	－	正円	0		底部	不明	○	
113	島巡	大口市篠原	古代	5.7	0.9	1	－	正円	0		不明	不明		
114	島巡	大口市篠原	古代	3.2	0.9	0.5	－	正円	0		不明	不明		
115	島巡	大口市篠原	古代	7.2	0.92	0.6	－	正円	0.876		底部	不明	○	
116	萩原	曽於市大隅町中之内	古代	7	0.825	0.98	－	正円	0		不明	不明		
117	萩原	曽於市大隅町中之内	古代	4.935~5.5	0.9	0.65	－	正円	0.893		不明	不明	○	
118	武Ｅ	鹿児島市武一丁目	古代	6.12	0.47	0.567	－	正円	0.84		杯底部	不明	○	
119	武Ｅ	鹿児島市武一丁目	古代	6.129	1.248	0.8	－	なし	0.93	大溝内	杯底部	不明		

表80　紡錘車一覧（2）

番号	遺跡名	所在地	時代	直径	厚さ	A※	重さ(g)	穿孔形態	穿孔偏比	出土遺構	転用部位	底部痕跡	完形	備考
120	武E	鹿児島市武一丁目	古代	5.9	0.86	0.8	－	正円	0		杯底部	不明		
121	武E	鹿児島市武一丁目	古代	5.9	1.135	1.187	－	なし	0		杯底部	不明	○	
122	武E	鹿児島市武一丁目	古代	6.8	1.25	－	－	正円	－		底部	不明	○	追加
123	武E	鹿児島市武一丁目	古代	6.58	1	0.56	－	正円	0.94		杯底部	不明	○	
124	武E	鹿児島市武一丁目	古代	6.356	1.47	－	－	正円	－		底部	不明	○	
125	武E	鹿児島市武一丁目	古代	4.76	0.68	0.576	－	正円	0		杯底部	不明	○	
126	藤坂・禁中	蒲生町下久徳	古代	7	0.8	0.54	－	なし	0		底部	不明		
127	藤坂・禁中	蒲生町下久徳	古代	7	1	0.6	－	なし	0		底部	不明		
128	藤坂・禁中	蒲生町下久徳	古代	8.6	0.9	－	－	なし	－		底部	不明		
129	藤坂・禁中	蒲生町下久徳	古代	7	1.1	－	－	なし	－		底部	不明		
130	藤坂・禁中	蒲生町下久徳	古代	7.4	0.9	－	－	なし	－		底部	不明		
131	藤坂・禁中	蒲生町下久徳	古代	7.8	1	－	－	正円	－		底部	不明		
132	藤坂・禁中	蒲生町下久徳	古代	7	1	－	－	正円	－		底部	不明		
133	竹牟礼	蒲生町漆	古代	－	0.8	－	－	正円	－		底部	不明		
134	長綠	蒲生町下久徳	古代	7.4	0.8	－	－	なし	0.932		底部	ヘラ切り		
135	長綠	蒲生町下久徳	古代	7	0.9	－	－	なし	－		底部	ヘラ切り		
136	長綠	蒲生町下久徳	古代	6.5	0.7	－	－	正円	－		底部	ヘラ切り		
137	鳥居ヶ段	鹿屋市輝北町平房	古代	6.3	0.6	0.75	－	正円	0		底部	不明	○	
138	鳥居ヶ段	鹿屋市輝北町平房	古代	5.1	0.6	0.75	－	正円	0		底部	不明	○	
139	鳥居ヶ段	鹿屋市輝北町平房	古代	6.9	0.75	0.75	－	なし	0		底部	不明		
140	鳥居ヶ段	鹿屋市輝北町平房	古代	5.4	0.6	0.6	－	正円	0		底部	不明		
141	鳥居ヶ段	鹿屋市輝北町平房	古代	6	0.6	0.75	－	正円	0		底部	不明		
142	鳥居ヶ段	鹿屋市輝北町平房	古代	6.3	0.7	－	－	正円	0.836		底部	不明		
143	鳥居ヶ段	鹿屋市輝北町平房	古代	8	0.6	－	－	正円	－		底部	不明		
144	鳥居ヶ段	鹿屋市輝北町平房	古代	6.3	0.45	－	－	なし	0		底部	不明		
145	鳥居ヶ段	鹿屋市輝北町平房	古代	6.6	0.45	－	－	正円	－		底部	不明		
146	時吉北川	さつま町時吉	古代	4.4	0.8	0.7	－	正円	不明		不明	不明		周縁欠
147	時吉北川	さつま町時吉	古代	6.4	0.6	0.7	－	正円	0		不明	不明	○	
148	井出ノ上	曽於市末吉町柿木	古代	6.5	1.25	1	－	なし	0.8	集石周辺	杯（底部）	不明	○	
149	桑幡氏館	霧島市隼人町神宮	古代	3.8	0.6	0.4	－	正円	0.826	溝	不明	－		
150	大峰	菱刈町荒田	古代	3.7	0.45	0.6	－	正円	0		底部	不明	○	
151	笑童子	日置市吹上町	古代	6.8	0.7	0.8	－	正円	0		不明	不明		
152	笑童子	日置市吹上町	古代	5.5	1	0.6	－	正円	0		不明	不明	○	
153	赤井田	日置市吹上町小永吉	古代	10.2	1.2	0.7	－	正円	0		底部	ヘラ切り		
154	持躰松	南さつま市金峰町宮崎	古代	6.7	0.4	0.75	18.13	正円	0.924		杯底部	不明		
155	持躰松	南さつま市金峰町宮崎	古代	5.7	0.6	1.5	18.6	正円	0		杯底部	ヘラ切り		
156	持躰松	南さつま市金峰町宮崎	古代	6.7	0.8	1	26.76	正円	0.948		杯底部	ヘラ切り		
157	持躰松	南さつま市金峰町宮崎	古代	6.4	0.55	0.25	10.31	正円	0.932		杯底部	ヘラ切り		
158	持躰松	南さつま市金峰町宮崎	古代	6.9	0.4	0.8	21.75	不定形	0		杯底部	ヘラ切り		
159	持躰松	南さつま市金峰町宮崎	古代	5.5	0.5	0.55	14.5	不定形	0		杯底部	ヘラ切り		
160	持躰松	南さつま市金峰町宮崎	古代	6.6	0.55	0.7	21.17	正円	0		杯底部	ヘラ切り		
161	踊場	曽於市財部町南俣	古代中期	6	1.2	－	23.7	なし	－		充実高台杯底部	不明		未製品
162	山崎B	湧水町栗野米永	古代・中世	6.4	0.64	0.8	－	正円	0		杯・椀底部	不明		
163	山崎B	湧水町栗野米永	古代・中世	6.4	1.1	1	－	正円	0		杯・椀底部	不明		追加
164	山崎B	湧水町栗野米永	古代・中世	5.6	0.8	－	－	正円	0	土坑内	杯・椀底部	不明		追加
165	山崎B	湧水町栗野米永	古代・中世	6.6	0.9	0.8	－	正円	0		杯・椀底部	不明		追加
166	西ノ平	薩摩川内市中福良町	古代・中世	8.1	0.675	－	－	正円	0	柱穴内	不明	不明		追加
167	後迫	大崎町横瀬	古代・中世	6.3	0.45	0.6	－	正円	0.93		杯・皿底部	不明	○	
168	一宇治城跡	日置市伊集院町大田	古代・中世	7.2	0.6	1.3	－	なし	0		椀底部	糸切り		
169	薩摩国分寺	薩摩川内市国分寺町	古代・中世	5.4	1.8	1	－	正円	0	土坑内	不明	不明	○	
170	前畑	日置市東市来町	古代・中世	5.3	0.82	0.8	－	正円	0		不明	不明		
171	原口	日置市日吉町吉利	古代・中世	5.4	1.05	0.75	－	正円	0.76		底部	糸切り		周縁打欠
172	上野城	薩摩川内市百次町	中世	6.8	0.6	0.45	－	方形・砲形	0.864		底部	糸切り？		周縁打欠
173	石塚	霧島市隼人町久美田	中世・近世	5.5	1	0.6	－	正円	0		不明	不明		
174	大龍B	鹿児島市大竜町	近世	4.5	0.651	0.7	－	正円	0	遺構	不明	－		
175	二浦	長島町二浦	不明	3.9	0.54	0.15	－	正円	0		不明	不明	○	
176	二浦	長島町二浦	不明	3.75	0.45	0.3	－	正円	0.86		不明	不明		周縁打欠
177	二浦	長島町二浦	不明	5.7	0.75	0.75	0	なし	－		高台付椀底部	不明		追加

土器以外を転用した紡錘車一覧

番号	遺跡名	所在地	時代	直径	厚さ	A※	重さ(g)	穿孔形態	穿孔偏比	出土遺構	転用部位	底部痕跡	完形	備考
178	赤井田	日置市吹上町小永吉	古代	14.2	0.6	0.8	－	正円	0		－	－	○	須恵器転用
179	石峰	霧島市溝辺町麓	中世	6.9	1.89	0.9	－	正円	－		不明	不明	○	瓦質土器転用
180	寿国寺	鹿児島市武二丁目	近世	4.8	0.6	0.2	25.6	なし	0		不明	－	○	置か？・陶磁器転用

※備考欄に「追加」とあるのは，報告書中「紡錘車」との記載は確認できなかったが図面上からもしくは共伴遺物に紡錘車が確認され，未製品を含めて筆者が可能性が考えられると判断した資料である。

製品としての紡錘車一覧

番号	遺跡名	所在地	時代	直径	厚さ	A※	重さ(g)	穿孔形態	穿孔偏比	出土遺構	底部痕跡	完形	備考
181	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋	弥生前期	5.4		2.3	－	正円	0		－	○	
182	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋	弥生前期	4.8		2	－	正円	0	撹乱層	－	○	
183	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋	弥生前期	2.7		1	－	楕円	0		－	○	
184	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋	弥生前期	2.44		0.65	－	正円	0		－	○	
185	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋	弥生前期	2.8		0.8	－	正円	0		－	○	
186	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋	弥生前期	3.3		1.2	－	正円	0		－	○	
187	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋	弥生前期	3.4~3.6		1.1	－	正円	0		－	○	
188	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋	弥生前期	4.2		1.3	－	正円	0		－	○	
189	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋	弥生前期	4.4		1	－	正円	0		－	○	
190	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋	弥生前期	4.8		1.2	－	正円	0		－	○	
191	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋	弥生前期	5.1		1.1	－	正円	0		－		
192	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋	弥生前期	4.6		1.8	－	正円	0		－	○	
193	東田	肝付町高山野崎	古墳	3	2.4	0.6	－	正円	0		－	○	
194	萩原	姶良町重富	古墳	6	0.7	0.62	－	正円	0		－	○	
195	小瀬戸	姶良町西餅田	古代	5	0.8	0.88	－	正円	0		－		
196	小瀬戸	姶良町西餅田	古代	5.6	0.9	0.8	－	正円	0		－	○	
197	小瀬戸	姶良町西餅田	古代	7	0.9	0.88	－	正円	0		－		
198	小瀬戸	姶良町西餅田	古代	6.8	1	0.88	－	正円	0		－		
199	小瀬戸	姶良町西餅田	古代	7	1.2	1.617	－	正円	0		－		
200	西ノ平	薩摩川内市中福良町	古代	6.7	0.99	0.66	－	正円	0		－		
201	西ノ平	薩摩川内市中福良町	古代	5.6	0.66	0.75	－	正円	0		－		
202	西ノ平	薩摩川内市中福良町	古代	6.6	0.6	0.9	－	なし	0		－		
203	小中原	南さつま市金峰町新山	古代	5.5	1.5	0.75	16.4	正円	0		－		
204	小中原	南さつま市金峰町新山	古代	5.5	1.575	0.425	－	正円	0		－		
205	小中原	南さつま市金峰町新山	古代	5.75	1.5	0.425	－	正円	0.92		－		
206	市ノ原（1）	いちき串木野市市来町大里	古代	3.6	0.9	0.3	－	不定形	0		－		
207	犬ヶ原	日置市東市来町伊崎田	古代	7.2	2	1.4	36.5	正円	－		－		
208	犬ヶ原	日置市東市来町伊崎田	古代	6.4	2.12	1.4	13.9	正円	0		－		
209	犬ヶ原	日置市東市来町伊崎田	古代	6.4	2	1.8	10.7	正円	0.94		－		
210	犬ヶ原	日置市東市来町伊崎田	古代	6.4	2.6	1.4	10.2	正円	0		－		
211	犬ヶ原	日置市東市来町伊崎田	古代	10.6	1.4	－	14.4	正円	－		－		
212	犬ヶ原	日置市東市来町伊崎田	古代	7.8	1.68	－	7.7	なし	－		－		
213	中尾立	霧島市福山町福沢	古代	7	0.65	1	－	正円	0		－		
214	中尾立	霧島市福山町福沢	古代	6.6	0.9	0.6	－	正円	0		－		
215	中尾立	霧島市福山町福沢	古代	－	1	0.6	－	正円	0		－		
216	藤兵衛坂段	霧島市福山町福沢	古代	6.2	0.65	1.1	－	正円	0		－		
217	藤兵衛坂段	霧島市福山町福沢	古代	5.5	0.5	0.7	－	正円	0		－		
218	笑童子	日置市吹上町	古代	6.6	0.9	1	－	正円	0		－		
219	山崎B	湧水町栗野米永	古代・中世	6.4	1.1	0.8	－	正円	0		－	○	
220	成岡	薩摩川内市中福良町	古代・中世	5	1.35	0.9	－	正円	0.6		－	○	
221	中原	姶良町脇元	中世・近世	4.7	0.7	0.6	－	長楕円	0		－		
222	浜町	鹿児島市浜町	近世	1.995	3.255	0.63	－	正円	0		－	○	
223	浜町	鹿児島市浜町	近世	2	4.2	0.525	－	正円	0		－	○	
224	浜町	鹿児島市浜町	近世	2.2	4.725	0.882	－	正円	0		－	○	
225	浜町	鹿児島市浜町	近世	2.76	3.948	1.115	－	正円	0.54		－	○	
226	浜町	鹿児島市浜町	近世	3.36	4.872	1.47	－	正円	0		－	○	
227	浜町	鹿児島市浜町	近世	3.192	4.767	1.365	－	正円	0.75		－	○	
228	浜町	鹿児島市浜町	近世	2.65	4.935	1.323	－	正円	0		－	○	
229	雪山	日置市東市来町美山	近世・近代	3.7	0.9	0.75	－	なし	0		－	○	
230	雪山	日置市東市来町美山	近世・近代	3.7	0.9	0.9	－	なし	0		－	○	
231	雪山	日置市東市来町美山	近世・近代	7.8	0.9	1.05	－	正円	0		－		

表81　紡錘車一覧（3）

第７節　古代赤色土器について

南九州の古代には，土師器の内面あるいは外面に赤色顔料が施されている土器がある。黒色土器が内黒，両黒と俗称されているが，これに対応するように，内赤，両赤などと呼ばれたりする。一般的に使われてきた名称としては「内赤土師器」や「内朱土器」である。だが，必ずしも統一された名称ではなく，各報告書によってその名称は様々である。

この土器は，特に鹿児島県内でも現在の日置市周辺に多いようで，宮崎県や熊本県の場合は南部すなわち鹿児島県側でわずかに出土する傾向にあり，出土事例は増加の一途を辿っている。

持躰松遺跡でも，この資料は出土しており，隣接する渡畑遺跡や芝原遺跡においてもまとまって出土している。当遺跡の場合は，主体を成す時期が若干下るために，この赤色土器の出土量は少ない。しかしながら，古代末の阿多地方の様相を知る上でこの土器は欠かすことの出来ない資料であり，ここでは，出土遺跡を集成することで空間的な広がりについておさえていきたい。

なお，本報告書において，名称は八木澤一郎氏の述べるとおり，「赤色土器」を用いている。この点に関しては，研究史を振り返って確認していきたい。ただし，本県において赤色土器を題材として取り扱った論考は極めて少なく，発掘調査報告書の記述等を中心に先行研究等を紹介していきたい。

旭慶男氏は，「内黒土師器と同じ方法で赤色顔料を内面に塗り込み丁寧に磨いたもので内朱土器と呼ばれている」と，その製作技法に着目している（旭　1987）。

中村和美氏は，その呼び方に対して「内面に塗られている顔料が，水銀朱ではなく，ベンガラ」である点から，従来呼ばれてきた「内朱」ではなく「内赤土師器」であると指摘する（中村　1994）。さらに，「技法的には内面にヘラミガキを施す点は黒色土器と同様である」としている。また，成川式土器の中に，「ベンガラによって彩色された土器がみられるが，この伝統をひくものとも考えられるがその系譜がたどれるかは今後の課題」とし，その系譜について可能性の１つを指摘している。

池畑耕一氏は，日置市吹上町の古代を概観して，「県内の他地域では出土数の少ない内赤土師器が（中略）多く出土している」点を指摘し，「その製作地など興味深い資料」であるとしている（池畑　2003）。これは，分布域に特徴が見られる点を具体的に示したものであった。

八木澤一郎氏は，「内面だけでなく，外面にも赤色顔料を塗布」する資料がある点を指摘し，「黒色土器にならい」赤色土器と呼んだ（八木澤　2003）。これは，漠然と称され統一された表現がないままであった現状を打開するものであった。

石丸良輔氏は，赤色土器の出土分布図を作成し「赤色土器が出土した遺跡は主として薩摩半島西岸に沿って分布」する点を指摘した。これは，先に紹介した池畑氏の指摘をより補強する報告であった。石丸氏は，これを基に「伝路（伝馬路）」について想定を行っている（石丸　2004）。

このように，報告書を中心として幾つかの重要な指摘がなされてきた。だが，冒頭で述べたとおり分布域やバリエーションなど，ある程度明確に示さなくてはならない課題がある。次ではこれらの点について述べていくこととする。

本論に入る前に，第Ｘ章第11節において行った，この赤色について成分分析を紹介しておきたい。分析にあたっては，当センター縄文調査室の内山伸明氏に協力を依頼し，センター所蔵の蛍光Ｘ線分析装置を用い，必要に応じて電子顕微鏡写真を撮影した。分析した資料は第105図174と第106図183で，関連資料として芝原遺跡出土資料２点，上水流遺跡出土資料２点も合わせて分析を実施した。その結果，持躰松遺跡資料に関しては，ベンガラなどの顔料は検出されていない。特に，183に関しては鉄分のピークも胎土部分の結果と大差はないことがわかった。過去に実施された赤色土器の分析では，山下堀頭遺跡においても，赤色部分と胎土部分との分析が行われ，今回の測定結果に類似する結果が報告されている。報告書では，「顔料の塗布の可能性を示す値は得られなかった」と述べられ，「顔料以外の化粧土の塗布も考えられる」ことを指摘している（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005）。この他に，下永迫遺跡においても実施されており，この時の分析では「ベンガラなどの鉄を主成分とした赤色顔料」と同定されている（鹿児島県立埋蔵文化財センター　2004）。

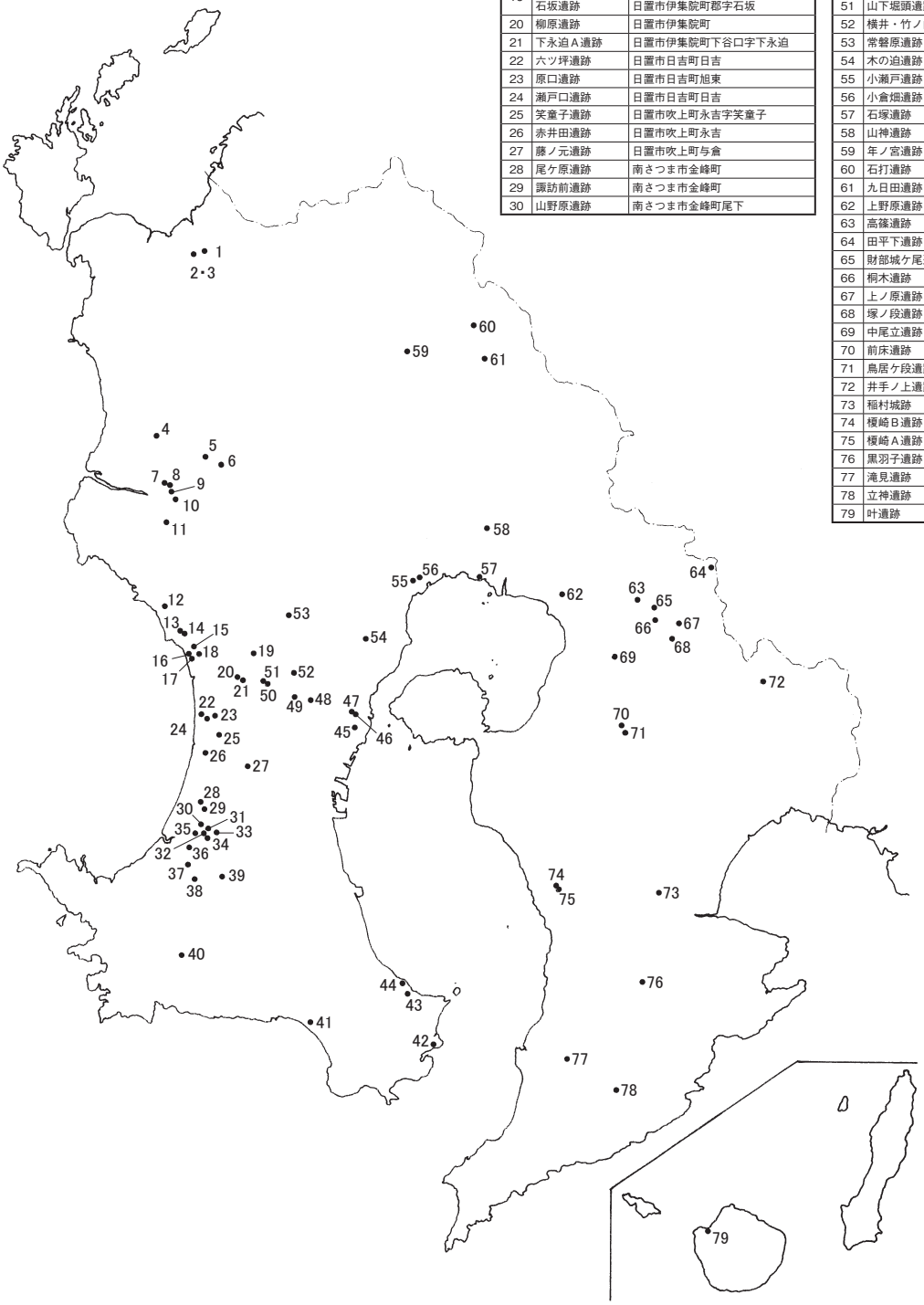
これら少ない分析結果ではあるが，赤色土器に用いられた赤色顔料は，水銀朱ではなくベンガラや赤鉄鉱などの周辺で産出される顔料を用いているものと，赤色ではあるが鉄分のピークが明確でないものの２種類が存在していることが指摘できよう。ただし，持躰松遺跡の分析結果では，銅の成分も検出されていることから，この点に関しては類例の増加を待ちつつも留意しておきたい。

さて，表82は現段階で筆者が知り得た限りでの赤色土器出土遺跡一覧である。集成に際しては，報告書に掲載されているものについて，内面にのみ赤色を呈するもの，内外面が赤色を呈するもの，外面のみに認められるものの３タイプを抽出した。本来であれば，器種及び器形の変化も表に組み込み，時間軸の設定を行わなくてはならないが，地域性を浮き彫りにするという観点から，今回は一括して取り扱っていきたい。そして，この表を

表82　赤色土器出土一覧

番号	遺跡名	所在地
1	大坪遺跡	出水市美原町
2	尾崎Ａ遺跡	出水市中央町表郷西
3	尾崎Ｂ遺跡	出水市文化町横尾
4	前畑遺跡	薩摩川内市城上町前畑
5	五社遺跡	薩摩川内市東郷町斧渕柏ノ木
6	坂ノ下遺跡	薩摩川内市東郷町南瀬坂ノ下
7	計志加里遺跡	薩摩川内市中郷町計志加里
8	京田遺跡	薩摩川内市中郷町京田
9	大島遺跡	薩摩川内市東大小路町大島
10	鍛冶屋馬場遺跡	薩摩川内市平佐町
11	西ノ平遺跡	薩摩川内市中福良町西ノ平
12	安茶ケ原遺跡	いちき串木野市川上南安茶ヶ原中ほか
13	上ノ原遺跡	いちき串木野市大里
14	市ノ原遺跡第１地点	いちき串木野市大里字上ノ原前
	市ノ原遺跡第５地点	日置市東市来町湯田字上市ノ原
15	堂園平遺跡	日置市東市来町伊作田
16	古城遺跡	日置市東市来町長里字古城原
17	前畑遺跡	日置市東市来町伊作田柿之迫
18	犬ケ原遺跡	日置市東市来町伊作田犬ヶ原
19	西原遺跡	日置市伊集院町郡
	石坂遺跡	日置市伊集院町郡字石坂
20	柳原遺跡	日置市伊集院町
21	下永迫Ａ遺跡	日置市伊集院町下谷口字下永迫
22	六ツ坪遺跡	日置市日吉町日吉
23	原口遺跡	日置市日吉町日吉
24	瀬戸口遺跡	日置市日吉町日吉
25	笑童子遺跡	日置市吹上町永吉字笑童子
26	赤井田遺跡	日置市吹上町永吉
27	藤ノ元遺跡	日置市吹上町与倉
28	尾ケ原遺跡	南さつま市金峰町
29	諏訪前遺跡	南さつま市金峰町
30	山野原遺跡	南さつま市金峰町尾下

番号	遺跡名	所在地
31	筆付遺跡	南さつま市金峰町尾下筆付
32	平畑Ｂ遺跡	南さつま市金峰町
33	小薗遺跡	南さつま市金峰町浦之名小薗
34	上山野遺跡	南さつま市金峰町中津野上山野
35	小中原遺跡	南さつま市金峰町新山字小中原
36	持躰松遺跡	南さつま市金峰町宮崎
37	上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑
38	祝原遺跡	南さつま市加世田川畑字舞敷野
39	南田代遺跡	川辺町田辺田字南田代
40	山内遺跡	枕崎市東鹿篭
41	城ヶ崎遺跡	頴娃町御領字城ケ崎
42	新番所後遺跡	指宿市十二町尻垂ノ上
43	横瀬遺跡	指宿市西方字横瀬
44	尾長谷迫遺跡	指宿市西方字尾長谷川迫7420他
45	一之宮遺跡Ｂ地点	鹿児島市郡元二丁目一之宮神社境内
46	共研公園遺跡	鹿児島市
47	武遺跡Ｅ地点	鹿児島市武一丁目
48	山ノ中遺跡	鹿児島市西別府町山ノ中
49	宮尾遺跡	鹿児島市石谷町字宮尾
50	フミカキ遺跡	鹿児島市福山町字フミカキ
51	山下堀頭遺跡	鹿児島市福山町山下堀頭
52	横井・竹ノ山遺跡	鹿児島市犬迫町横井竹之山
53	常磐原遺跡	鹿児島市郡山町郡山字常盤原
54	木の迫遺跡	鹿児島市川上町花棚字木ノ迫
55	小瀬戸遺跡	姶良町西餅田字小瀬戸
56	小倉畑遺跡	姶良町西餅田字小倉畑・上森ノ辺田
57	石塚遺跡	霧島市隼人町野久美田字石塚
58	山神遺跡	溝辺町麓
59	年ノ宮遺跡	菱刈町南浦字年ノ宮
60	石打遺跡	湧水町永山石打
61	九日田遺跡	霧島市栗野町北方九日田
62	上野原遺跡	霧島市国分川内
63	高篠遺跡	曽於市財部町南俣
64	田平下遺跡	曽於市財部町下財部字田平下
65	財部城ケ尾遺跡	曽於市財部町南俣
66	桐木遺跡	曽於市末吉町諏訪方桐木
67	上ノ原遺跡	曽於市末吉町諏訪方田方
68	塚ノ段遺跡	曽於市末吉町諏訪方塚ノ段
69	中尾立遺跡	霧島市福山町福沢中尾立
70	前床遺跡	鹿屋市輝北町平房前床
71	鳥居ケ段遺跡	鹿屋市輝北町中平房鳥居ヶ段
72	井手ノ上遺跡	曽於市末吉町南之郷柿木
73	稲村城跡	鹿屋市串良町下小原
74	榎崎Ｂ遺跡	鹿屋市郷之原町榎崎
75	榎崎Ａ遺跡	鹿屋市郷之原町榎崎
76	黒羽子遺跡	鹿屋市吾平町上名黒羽根
77	滝見遺跡	根占町川北滝見
78	立神遺跡	田代町大原立神
79	叶遺跡	熊毛郡上屋久町永田下叶



第207図　赤色土器出土遺跡位置図

基に第207図のとおり位置図を作成した。両者を用いて，南九州の状況を概観していきたい。

まず，本遺跡の所在する薩摩半島南部では，従来の指摘にあるように，東海岸部より西海岸部に多く，特に日置市を中心にして分布している状況が見られる。注目される点としては，本遺跡横を流れる万之瀬川を境として，その以北と以南では明らかに遺跡数に変化が見られることであろう。すなわち，この点から赤色土器の中心地は万之瀬川以北である，と指摘することが出来る。なお，下永迫Ａ遺跡では，土器の出土量比率を算出しており，これによると，赤色土器は全体の23％を占めていることが報告されている。

薩摩半島北部では，日置市に近いところでその出土が見られる。この他，充実高台椀に赤色部分が観察される資料が見られる点もこの地域の特徴である。この地域は，充実高台椀の分布が濃い。そして，その分布は薩摩国府周辺に広がっているようである。

大隅半島南部では，わずかに６遺跡で出土している。この点に関しては，発掘調査事例数も少なからず影響している可能性もあろう。

大隅半島北部では，１つの遺跡内からの出土量は少ないながらも，点在している状況が見られる。都城市にかけてこの状況は大差ない。

熊毛諸島では，上屋久町叶遺跡で出土している。なお，これ以南での出土例が確認出来なかったことから，現段階での最南端の遺跡と言うことになろう。

このように，傾向としては既に池畑氏や石丸氏が指摘しているように，薩摩半島南西部にその分布が集中するということがわかる。しかし，その広がりは集中域こそ薩摩半島南西部に見られるが，県下全域に点在するように分布している状況であった。この状況について，石丸氏は墨書土器との関係も吟味した上で，路との関係を指摘している（石丸　2004)。この検討は薩摩半島に限定したことであるが，未報告資料なども含めた詳細な分布の検討を行うことで，より明確に示すことが出来るものと考える。また，今回は言及できなかったが，器形的な特徴から，９世紀後半から10世紀前半にかけての資料が多い点も指摘できよう。これは，黒色土器の南九州への展開と極めて連動しており，両者の関係が色の違いはあるが，着色面にはミガキ手法が用いられていることなど，緊密に関係していることを示唆してと思われる。加えて，この段階はその前後の時期と比べて遺跡数も増加する。背景についても論究していかなくてはならない。

以上のように，その出土傾向を掴むことが出来た。

また，該期には充実高台椀と呼ばれる特徴的な一群の存在もある。太宰府において，薩摩から来た土器として著明な資料であるが，薩摩の様相は明確ではない。時期判定には共伴関係や出土状況などを詳細に分析しないといけないが，充実高台椀が出土する遺跡に於いてもこの赤色土器が認められ，両者が時間的に近接している可能性が高い。このことは，古代の土器生産と流通に関わる問題へと発展することと思われ，今後より注意が必要な点であろう。

これまで述べてきたように，古代赤色土器はその分布の中心が薩摩半島南西部にある。また，充実高台椀にも赤色土器が存在していることなどから，９世紀後半から10世紀の前半に中心があると言えるであろう。そして，赤色土器の展開は森隆氏の指摘する黒色土器が広く展開する頃の資料が多い点と類似する。このように，古代の南九州を考える上での素材は現在確実に増加しており，今後はこれらについて明確な時間設定を行い，その成立と展開についても考えて行く必要があろう。

持躰松遺跡は，発掘調査時から中世の遺跡として注目を集めている。確かに，中世の遺構遺物に関してこれまでの歴史観に一石を投じる資料も有ろう。隣接する渡畑遺跡や芝原遺跡に関しても同様のことが言える可能性もある。しかしながら，中世以外の多くの時代や時期に関しての情報も膨大である。これらについても十分に検討し，複数期にまたがる遺跡の１面のみが詳細な検討を経ずして過大評価を受けることのないよう留意して行かなくてはならない。

最後に，文中でも述べたが分析に当たっては内山氏の協力を得た。再度感謝の意を表したい。

引用・参考文献

旭慶男　1987 「第７章歴史時代の遺構と遺物」『上加世田遺跡－２』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（４）加世田市教育委員会

池畑耕一　2003 「第二編　吹上のあけぼの」『吹上郷土誌』通史編一　吹上町

石丸良輔　2004 「第５章　まとめ」『下永迫Ａ遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（72）鹿児島県立埋蔵文化財センター

中村和美　1994 「鹿児島県（薩摩・大隅国）における平安時代の土器－土師器の変遷を中心に－」『中近世土器の基礎研究Ｘ』日本中世土器研究会

八木澤一郎　2003 「第４章　石坂遺跡の調査」『山ノ脇遺跡ほか』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（58）鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター2004『下永迫Ａ遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（72）

鹿児島県立埋蔵文化財センター2005『山下堀頭遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（92）

（黒川　忠広）

第８節　古代・中世の鉄器について

本遺跡出土の鉄器で古代・中世の両時期のものは，層位が場所によっては明確でないこともあり，他の出土遺物とのセット関係や，他の遺跡の出土状況を参考とした時代区分を行った。以下，県内の出土事例をもとにこれらの考察をおこなっていきたい。

古代鉄器について

紡錘車は古代を中心に出土例が見られるようである。鎌については291は鍛冶屋馬場遺跡（薩摩川内市）で，292は小中原遺跡第３次調査（現南さつま市）においてそれぞれ同じ形状のものが報告されている。これらの事例から９～10世紀のものであると考えたい。

中世鉄器について

短刀のⅠ類（765）は一般的に当時腰刀と呼ばれていたものである。仕明遺跡（志布志市）と上野城跡（薩摩川内市）では白磁Ⅳ類（玉縁口縁）の椀と共伴して土坑墓内と柱穴遺構から出土しているので，11世紀後半から12世紀前半のものと考えられる。本遺跡のものも上記の２遺跡と同時期と考えられるが，短刀と土坑墓との関係を結びつけるような出土状況は，確認されなかった。短刀のⅡ類は県内の類例が少ないが，山ノ脇遺跡（日置市）の農具埋納遺構で類似する資料が出土している。共伴した青磁から14世紀とされるので，本遺跡のものも，14世紀以降としておきたい。刀子は県内に中世の類例が無いが，古代の刀子とは形態が違うことから中世とした。また，手斧形を呈する斧（777）は類例の出土が古代・中世共に類例が無いが，「石山寺縁起」に使用されている様子が描かれている（澁澤1984）ことから中世とした。これらについては今後の成果を期待したいところである。

火打金は類例が少ないが，上野城跡で13世紀の方形竪穴からの出土が県内の初現である。本遺跡出土の２点（778，779）も同様の時期以降のものであろう。ところで火打金とは，火打石と打あわせ火花を発生させるための三角形の鋼鉄片である。火打金に関しては藤木 聡氏の論考がある。藤木は九州出土の火打金を下表のように分類している（藤木2004）。

このなかで本遺跡出土の２点はⅠ類にあたる。

火打金の出現時期について，九州では10世紀末～12世紀以降の中世前半においてⅠ類が主体を占め，Ⅱ類が少量みられる。16世紀頃の中世後半以降になると，Ⅲ類が出現し，Ⅱ類は継続する。Ⅰ類はほとんどみられない。なお，火打金は明治10年代にマッチが市場に出回るようになると，次第に世の中から姿を消すようになる。そのマッチもライターの出現により，社会全体の需要が激減していることは我々の知るところである。

鏃については平根鏃が上野城跡の12世紀の資料と類似しており，丸根鏃は廻城（霧島市）の14～15世紀の資料と類似している。

本遺跡の中世の鉄器は大きく，12～13世紀に出現する鉄器（短刀Ⅰ，火打金，平根鏃）と14世紀以降に出現する鉄器（短刀Ⅱ，丸根鏃）とに分けられるようである。一遺跡としては種類も豊富で，刀子や手斧のように県内では初めて出土した器種もありこれらは遺跡の性格を反映している可能性がある。今後，出土例の増加を待つ必要があろう。

引用・参考文献

鹿児島県教委　2002 「鍛冶屋馬場遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（39）

鹿児島県教委　1991 「小中原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（57）

鹿児島県教委　2004 「上野城跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（68）

鹿児島県教委　2003 「山ノ脇遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（58）

有明町教委　2005 「仕明遺跡（１～３次）」『有明町埋蔵文化財発掘調査報告書』（７）

河口貞徳・本田道輝　1984 『廻城－落城と出土遺物－』廻城発掘調査報告書

澁澤敬三　1984 『絵巻物による　日本常民生活絵引』神奈川大学日本常民文化研究所編　平凡社

藤木　聡　2004 「九州における火打石・火打金－集成資料と基礎的な整理－」『古文化談叢　第51集』 九州古文化研究会

（抜水茂樹）

表83　火打金の分類

平面形		紐掛け／装飾など		下辺の長さ
Ⅰ類	三角形（山形）	両端は上方へ返される	三角形部分に円孔あるものあり	10㎝以内
Ⅱ類	三角形（山形）	両端は上方に折り曲げられる	——	10㎝以内で大小あり
Ⅲ類	三角形（山形）	——	三角形部分に左右対称の透かしあり	10㎝以上

第９節　中世の遺物について

本遺跡の特徴として，中世の遺構，包含層から出土した多種多様の輸入陶磁器が挙げられ，その器種組成は旧金峰町（現南さつま市）教育委員会が平成８～11年度に調査した小薗遺跡の遺物組成と大体において一致する。また，規模は違うが九州北部の博多や大宰府といった中世の交易拠点のそれにも近い。本遺跡出土の輸入陶磁器を使用目的によって分類すると以下の通りである。

１．食膳具

碗（白磁Ⅳ類Ⅴ類Ⅶ類Ⅷ類Ⅸ類，龍泉窯系青磁Ⅰ類Ⅱ類Ⅲ類，同安窯系青磁Ⅰ類Ⅲ類，天目）

坏（龍泉窯系青磁Ⅲ類上田分類Ｃ類，白磁森田分類Ｄ群）

皿（白磁Ⅱ類Ⅲ類Ⅴ類Ⅵ類Ⅷ類Ⅸ類，龍泉窯系青磁Ⅰ類，同安窯系青磁Ⅰ類）

盤（輸入陶器Ⅰ類Ⅲ類）

２．貯蔵具

壺（輸入陶器Ⅱ類Ⅳ類）

耳壺（輸入陶器Ⅲ類Ⅳ類Ⅵ類Ⅶ類 Ⅻ類）

甕（輸入陶器Ⅰ類Ⅱ類Ⅲ類Ⅴ類）

３．調度具

水注（輸入陶器Ⅳ類Ⅴ類）

瓶（磁州窯系瓶）

合子

４．調理具

鉢（輸入陶器Ⅰ類Ⅲ類Ⅳ類Ⅵ類）

これは県内の他の輸入陶磁器出土の遺跡と比較してもその種類の多さが指摘できよう。また国内の搬入土器・陶器としては，瀬戸内系の土師質土器，楠葉型及び和泉型瓦器，東播磨系の須恵器捏鉢と甕，東海系遺物として常滑産の甕，瀬戸産の卸皿と小壺蓋，樺万丈産の甕と捏鉢，備前産の摺鉢，肥前産の滑石製石鍋などで，多産地のもので構成される。

本遺跡出土の中世の輸入陶磁器を大宰府の貿易陶磁編年に従って時期区分し，併せてその時期に相当すると思われる国産の陶器等をまとめてみたのが第208図である。ただし遺物の全形や型式・時期が特定されていないものは割愛したことを了承されたい。これによると，本遺跡の中世遺物は11世紀後半から15世紀前半のもので構成されているといえる。それぞれの時期の出土遺物について，輸入陶磁器と国産の陶器等を中心に様相をみていき本遺跡の性格を検討していきたい。

Ｃ期（11世紀後半～12世紀前半）

輸入陶磁器が出土する最も古い時期である。白磁は玉縁口縁を特徴とする碗Ⅳ類と口縁端部を水平あるいは水平に近い角度に外反させる碗Ⅴ類があり，皿はⅡ類とⅥ類がある。青磁はこの時期には見られない。輸入陶器として磁州窯系の白釉瓶と水注Ⅳ類，盤が見られる。

Ｄ期（12世紀中頃～後半）

青磁と白磁の出土量と種類が一番多く，本遺跡への輸入陶磁器のピークのひとつをなす時期である。龍泉窯系青磁はいわゆる劃花文の碗Ⅰ類と小碗Ⅰ類があり，皿Ⅰ類もこの時期である。またＤ期に出土する同安窯系青磁は碗Ⅰ類・Ⅲ類・皿Ⅰ類がみられる。白磁は碗Ⅴ－４類・Ⅶ類・Ⅷ類・皿Ⅲ類・皿Ⅷ類などがあり，土坑墓から出土した優品の碗と青白磁もこの時期のものである。破片が小さく，厳密に区別できたわけではないが，青磁の皿に関しては同安窯系青磁が龍泉窯系青磁より圧倒的に多い。輸入陶器としては鉢Ⅰ－１ｂ類・Ⅲ類・Ⅵ類等の調理具がみられる。国産の陶器等もこの時期から見られ始める。また，肥前産の滑石製石鍋がＤ期～Ｅ期にかけて流入してくる。

Ｅ期（13世紀前後～前半）

青磁の種類が限定される。鎬蓮弁文である龍泉窯系青磁碗Ⅱ類のみで，白磁の出土がみられない。Ｅ期の特徴は，貯蔵具である壺Ⅳ類・耳壺Ⅵ類・耳壺Ⅳ類及び甕Ⅰ類（内折口縁）・甕Ⅲ類（Ｙ字口縁）・甕Ⅴ類（Ｔ字口縁）等がみられることである。この時期の国産陶器は口縁部の断面がＬ字状を呈する常滑甕５型式である。Ｄ期に比べて青磁の種類こそ少ないものの，輸入陶器の種類の多さでＥ期は，Ｄ期に続くピークの時期であるといえよう。また，広域流通品である東播磨系須恵器がＤ期の後半からこのＥ期に流入してきている。

Ｆ期（13世紀中頃～14世紀初頭）

Ｄ・Ｅ期に比べて青磁・白磁の出土量が極端に減少する。青磁は龍泉窯系青磁碗Ⅲ類と坏Ⅲ類，白磁はⅨ類（口禿げ）の碗・皿が殆どである。輸入陶器はＥ期に続き貯蔵具である壺・耳壺・甕類等がみられるが減少傾向にあるといえる。この時期は国産陶器の種類が増え，口縁部の断面がＮ字状を呈する常滑甕６型式と鉢や，瀬戸の卸皿等が見られ，Ｄ期より約１世紀の間，東海系陶器の産地と交流があったことが窺える。東播磨系須恵器もこの時期までみられ，加えて樺万丈系の須恵器や瓦質土器などの流入もみられる。

Ｇ期（14世紀初頭～14世紀後半）及びそれ以降

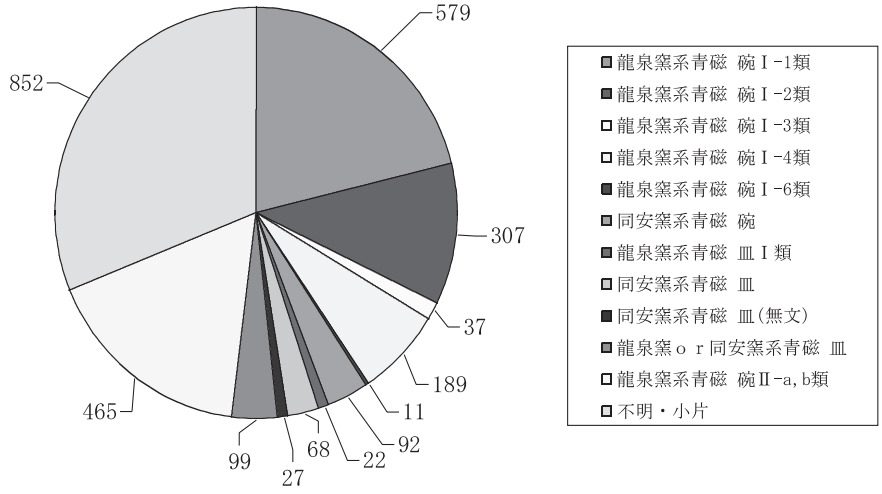
Ｆ期以上に輸入陶磁器，国産陶器の出土量は減少するので，Ｇ期とそれ以降の時期をまとめて扱った。輸入陶磁器として青磁・白磁・青花が，国産陶器として広域流通品である備前の擂鉢・瓦質土器（奈良火鉢）などがみられるが，いずれも少量である。

以上のことに中世前半期の九州における中国との陶磁器貿易形態を併せて論じていきたい。本遺跡の輸入陶磁器の流通がピークを迎えるＤ・Ｅ期，すなわち12世紀中

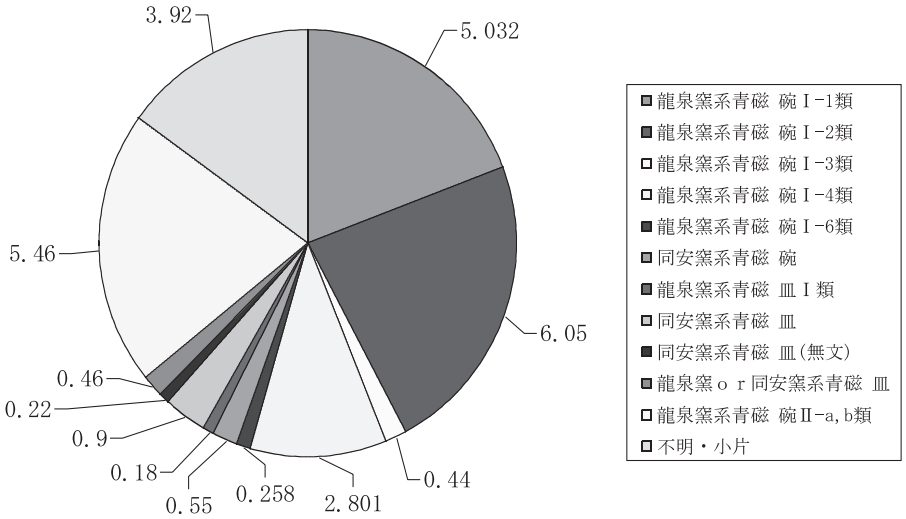
表84　包含層中の青磁類別集計表

青磁　分類	片数	重量（kg）	備考
龍泉窯系青磁 碗Ⅰ－1類	579	5.032	D期
龍泉窯系青磁 碗Ⅰ－2類	307	6.05	D期
龍泉窯系青磁 碗Ⅰ－3類	37	0.44	D期
龍泉窯系青磁 碗Ⅰ－4類	189	2.801	D期
龍泉窯系青磁 碗Ⅰ－6類	11	0.258	D期
同安窯系青磁 碗	92	0.55	D期
龍泉窯系青磁 皿Ⅰ類	22	0.18	D期
同安窯系青磁 皿	68	0.9	D期
同安窯系青磁 皿（無文）	27	0.22	D期
龍泉窯 or 同安窯系青磁 皿	99	0.46	D期
龍泉窯系青磁 碗Ⅱ－a，b類	465	5.46	E期
龍泉窯系青磁 碗Ⅲ類	12	0.22	F期
龍泉窯系青磁 坏Ⅲ類	16	0.1	F期
龍泉窯系青磁 碗Ⅳ類	3	0.09	G期以降
龍泉窯系青磁 盤	3	0.2	G期以降
龍泉窯系青磁 小碗	2	0.04	G期以降
龍泉窯系青磁 皿	6	0.06	G期以降
龍泉窯系青磁碗上田分類C（雷文）	2	0.018	G期以降
碗（見込み蛇の目釉剥ぎ）	4	0.07	G期以降
壺	2	0.03	
不明・小片	852	3.92	
総　数	2798	27.099	

ＤＥ期の青磁の破片数の割合



ＤＥ期の青磁の重量の割合



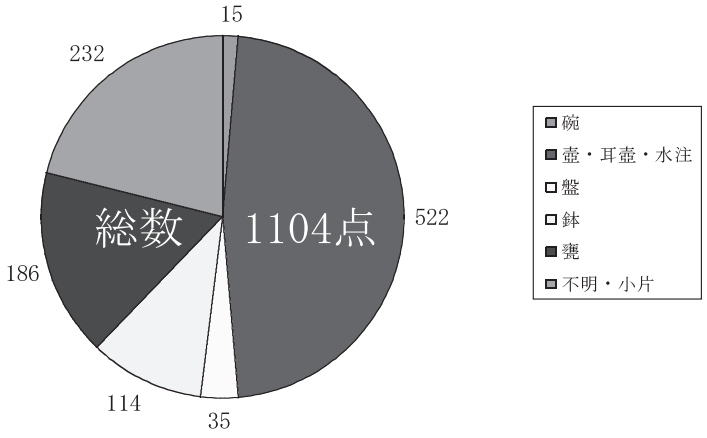
頃から13世紀前半期は，大宰府古代権力が極度に衰退し，鴻臚館（大宰府）による管理貿易の形態が崩れだす時期である。同時期はまた，中央及び在地権門寺社が玄界灘及び九州西岸に荘園を有し，そこに宋商船等を引き入れ，直接取引する形態に代わる時期である。さらに東海系陶器や東播磨系須恵器が広域流通するのもこの時期である。また本遺跡からは畿内系の瓦器もＤ・Ｅ期に見られる。なかでもＤ期にみられる楠葉型の瓦器は京都や摂関家とのつながりが推定される遺跡に分布することが指摘されている。山本信夫氏は，「本遺跡の貿易陶磁の種類と量からして，一般階層よりはこれらの物資を優位に獲得できる富裕な階層の存在が考えられる。またこれらの階層は輸入物資の流通実権を掌握していたことも考えられる。」としている。ところで白磁・青磁等の碗・皿・合子等はそれ自体が商品であるが，Ｅ期に出土が集中する壺・耳壺・甕等の貯蔵具は，それ自体が商品でなく，商品輸送時のコンテナーとしての役割を果たしていたことが考えられる。このことからＤ・Ｅ期の交易について２つのことが想定できる。１つめは壺・耳壺・甕等の貯蔵具を使って陶磁器以外の物資の運搬も行っていた可能性があるということ。２つめは甕の中に碗・皿等の食膳具をいれて船舶のバラストとして船底に積んで航行していた可能性があるということである。

九州における中国陶磁器の輸入量はその後，13世紀から14世紀前半には最盛期を迎え，一部庶民階層まで需要は及んでいる。本遺跡のＦ・Ｇ期前半がこれにあたるが，この時期の本遺跡の様相は輸入陶磁器がしだいに減少し，国産陶器や須恵器や在地土器が主体となる。ところで本遺跡は水田耕作や過去数回に及ぶ河川の氾濫に伴う洪水堆積層などを含んでいるので，必ずしも層序が安定している状況ではなかった。そのため在地土器の主体をなす土師器は，多数が古代の土師器と同一層で出土したため別が困難であり，時代別の数量的把握は断

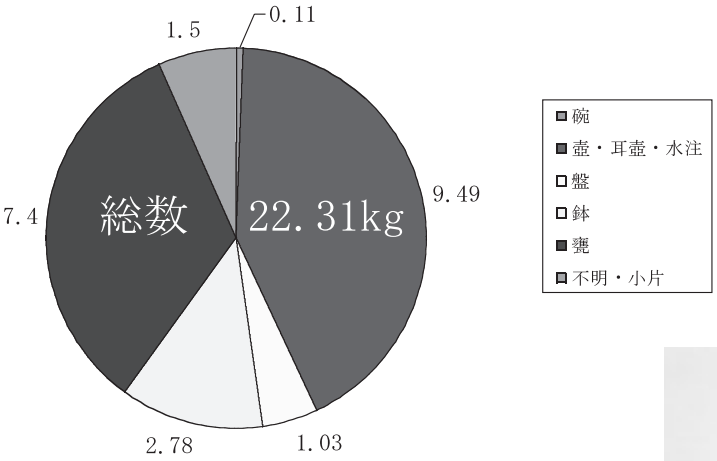
表85　包含層中の輸入陶器 器種別集計表

器種	片数	重量（kg）	備考
碗	15	0.11	
壺・耳壺・水注	522	9.49	D～E期
盤	35	1.03	C期　E～F期
鉢	114	2.78	D～F期
甕	186	7.4	E期
不明・小片	232	1.5	
総　数	1104	22.31	

輸入陶器の片数の割合



輸入陶器の重量の割合



念した。　G期の後半の出土遺物からは交易の様子が殆ど窺えず，さらに16世紀以降には畑地あるいは水田となっていったと考えられる。

引用・参考文献

亀井明徳　1986『日本貿易陶磁史の研究』 同朋舎出版
尾上実・森島康雄・近江俊秀1995「瓦器椀」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
金峰町教委　1998「持躰松遺跡　第１次調査」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(10)
森本朝子　2003 「博多遺跡群出土の合子について」『博多研究会誌』第11号　博多研究会

四耳壺の製作技法について

本遺跡出土の輸入陶磁器の組成から特徴的と言えることのひとつに，貯蔵具の多様性があげられる。完形品として出土した四耳壺（449）の製作技法について陶芸家四元　誠氏に詳しく見ていただいた。

（１）形成について

外底面に残る工具痕よりロクロは右回りであり，高台は削り高台である。輪積みで形成された胴部外面の下約３分の１は削って仕上げられている。胴部を削る際は壺を逆さまにして，ロクロ上に管状の工具（和名を湿台という）を据えそれにのせて回転しながら削っている。管状の工具を使用したことは，内底面の窪み形状よりわかる。また，耳は胴部を削る前に付けてある。

（２）釉薬について

玉垂れ状になっている釉薬は景色として意識的に流しかけられている。釉薬のある方を火前に持ってきている。灰釉の種類は不明である。

（３）焼成について

全体的に焼成不良である。焼成に際してはおそらくこれよりも大きい壺か，もしくはサヤ鉢に入れられて焼かれているようである。

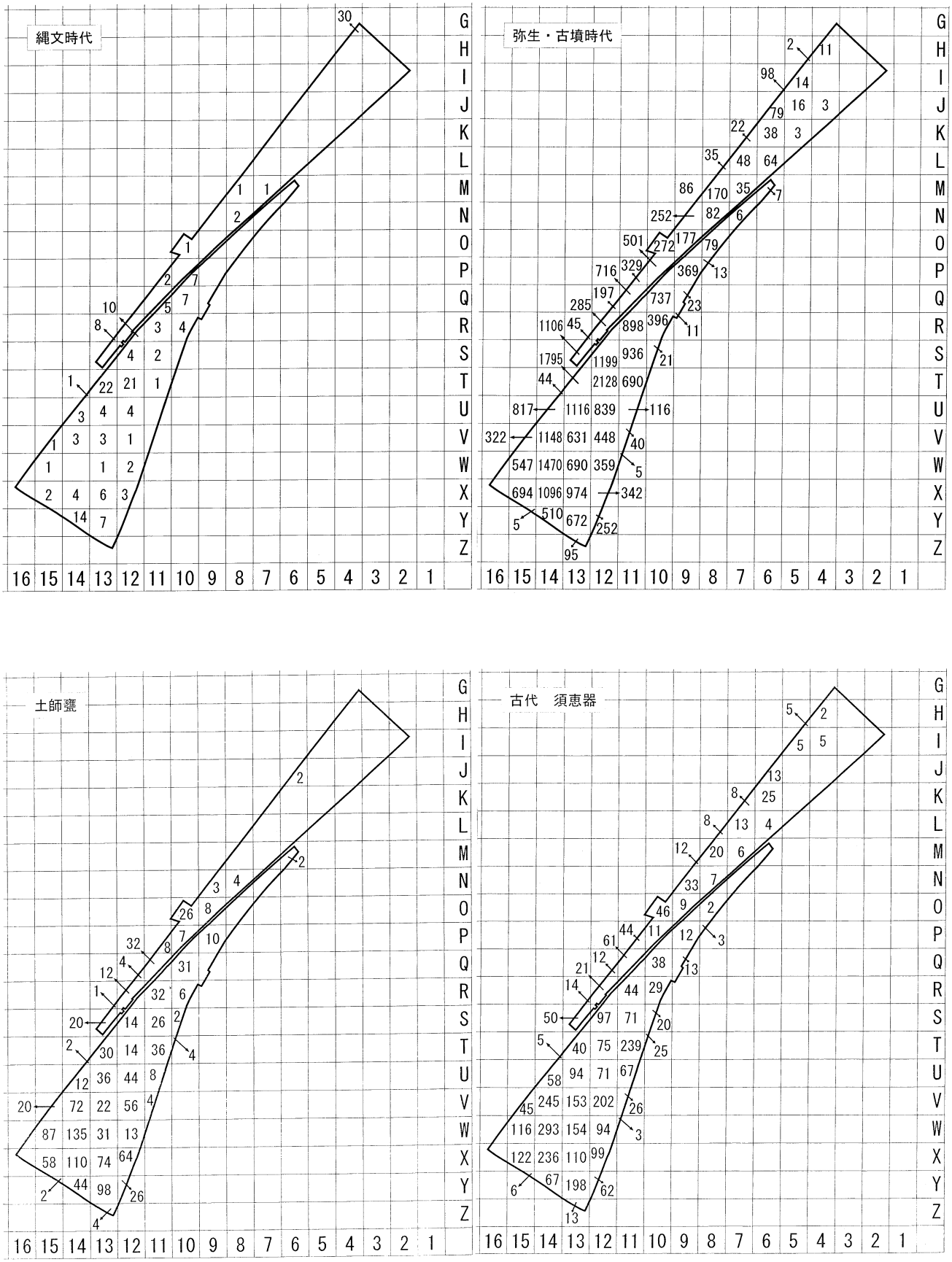
（４）用途について

貯蔵具としての四耳壺であるが，一時的に固形あるいは液体の商品を保管する容器として用いられたのではないだろうか。その理由は焼成不良により，液体を長期間保存しておくと染み出てくると考えられるからである。

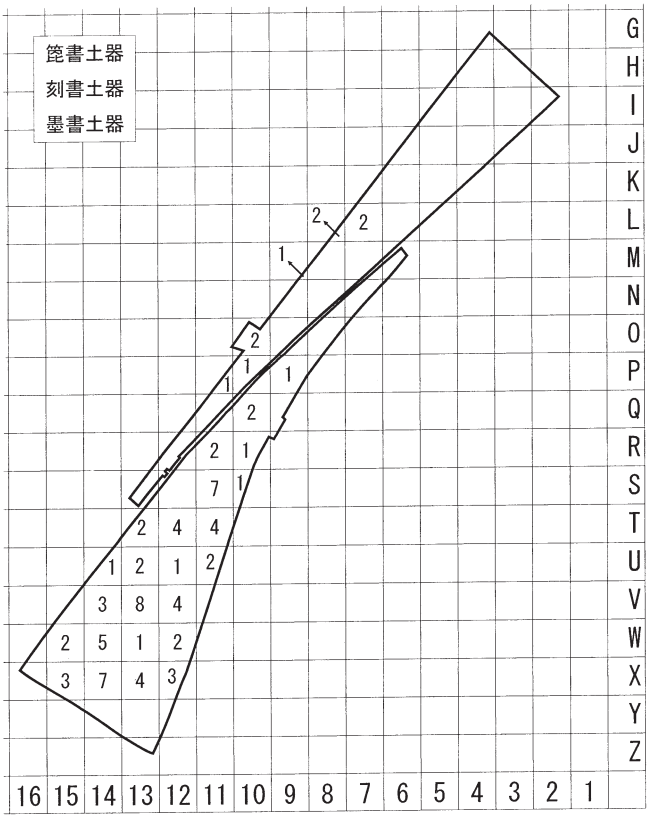


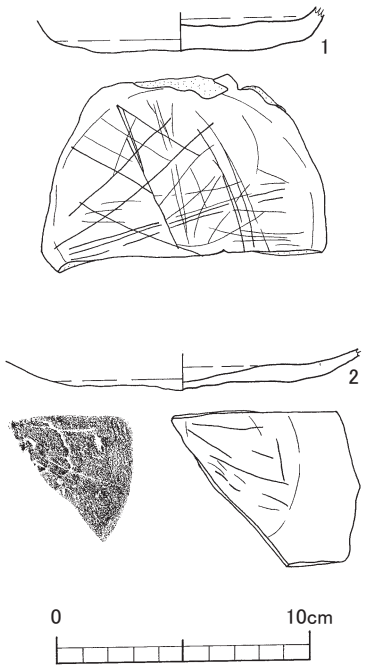
四元氏製作の四耳壺（左）と449

（抜水茂樹）

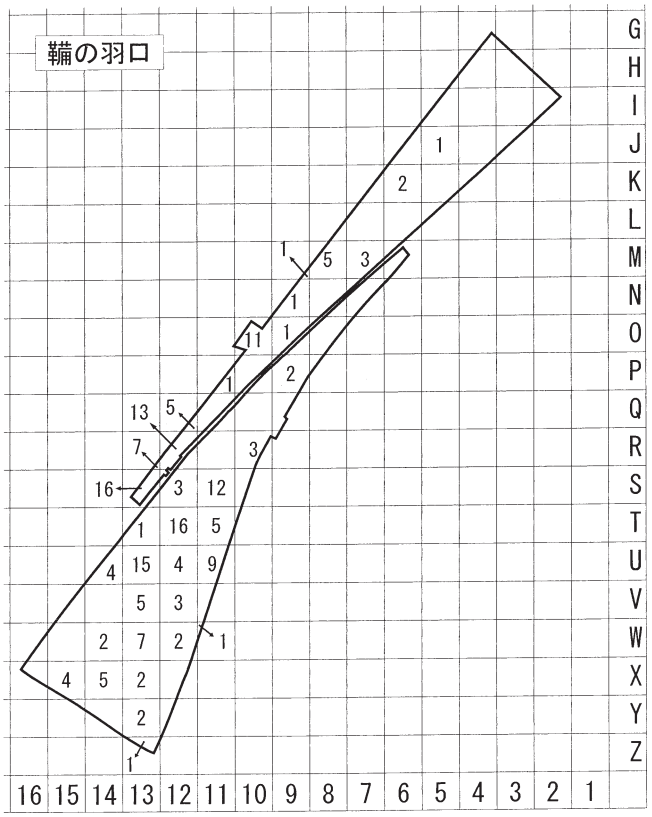


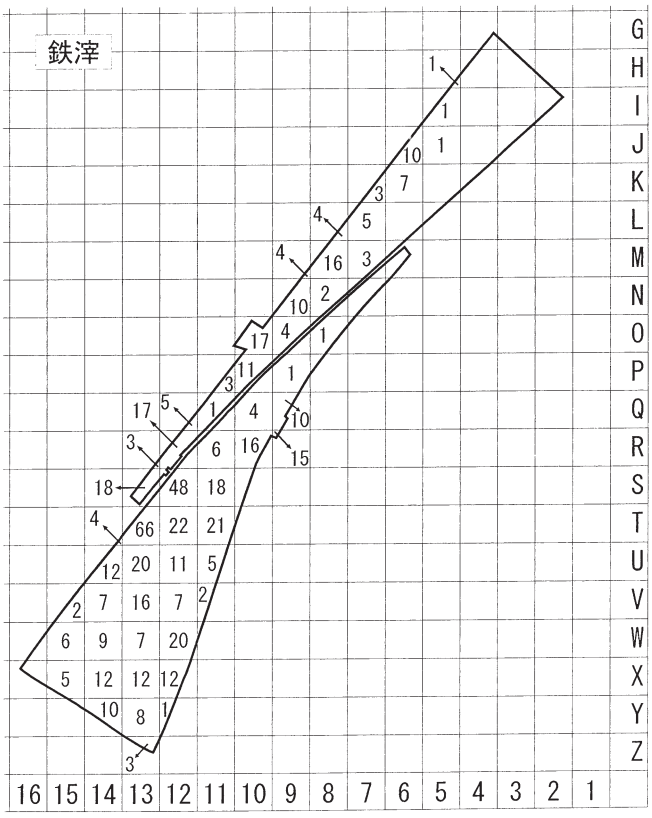
第209図　グリッド別遺物数（１）



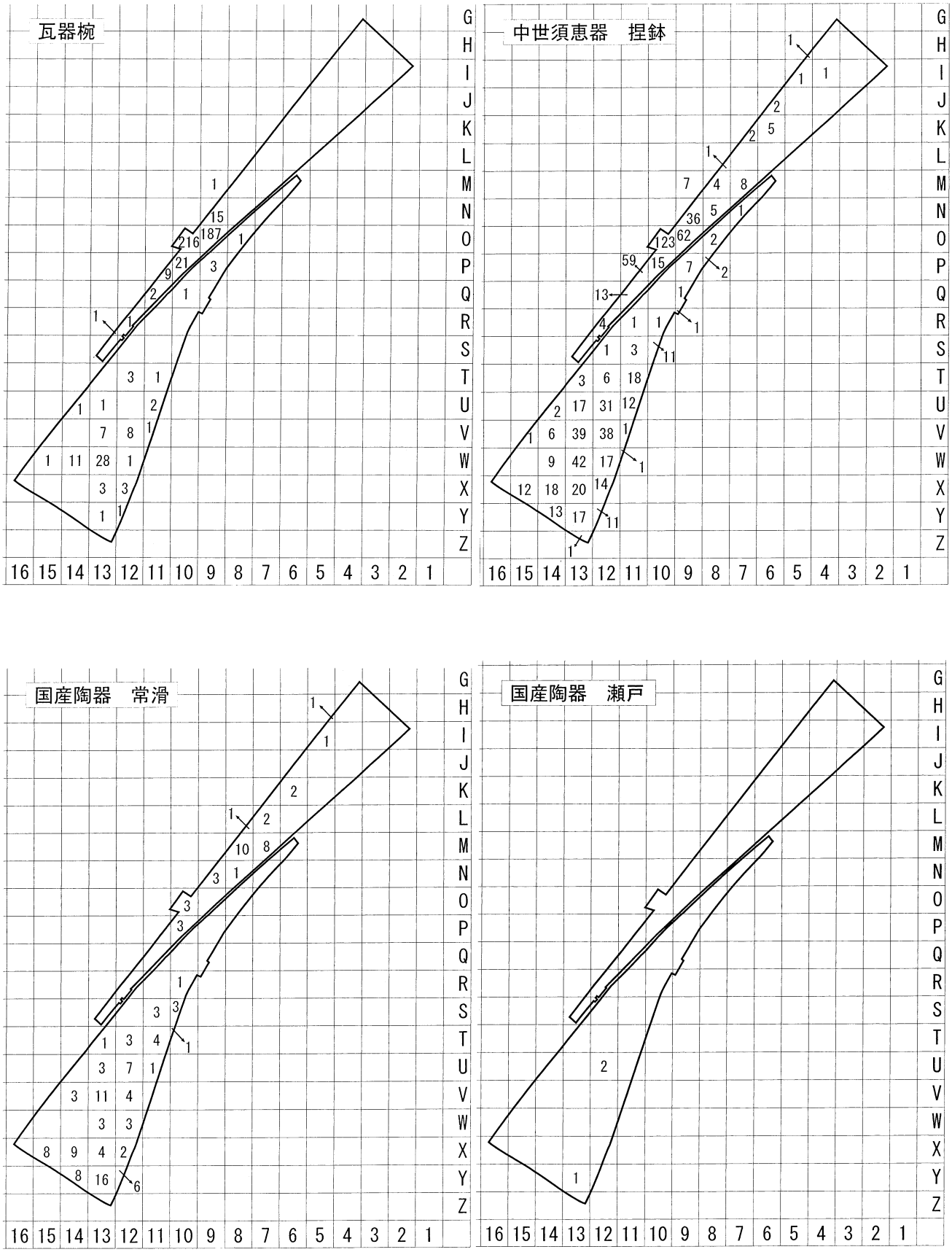


第211図　刻書土器

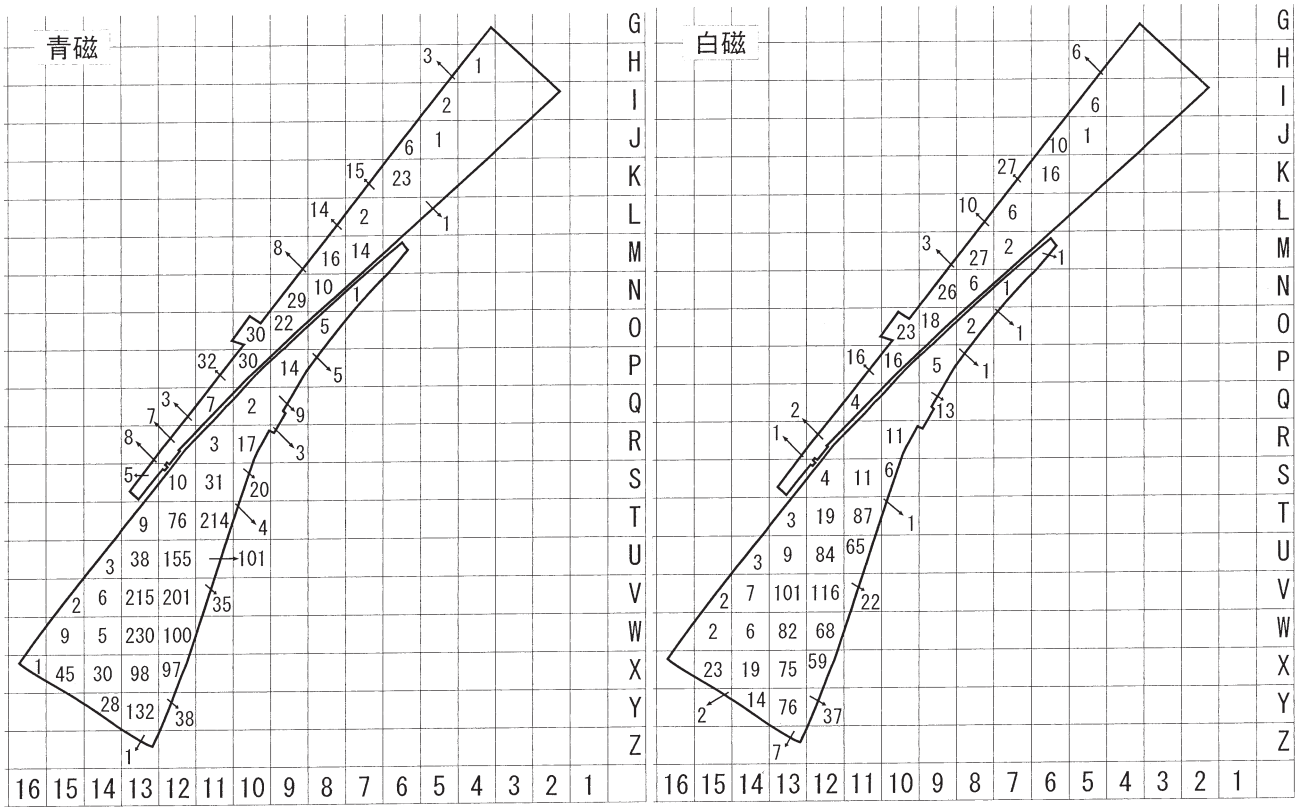




第210図　グリッド別遺物数（２）



第212図　グリッド別遺物数（３）



第213図　グリッド別遺物数（４）

写　真　図　版



土層断面（Ｓ－10区）



土層断面（Ｙ－12区）古代の溝状遺構５号
土層断面



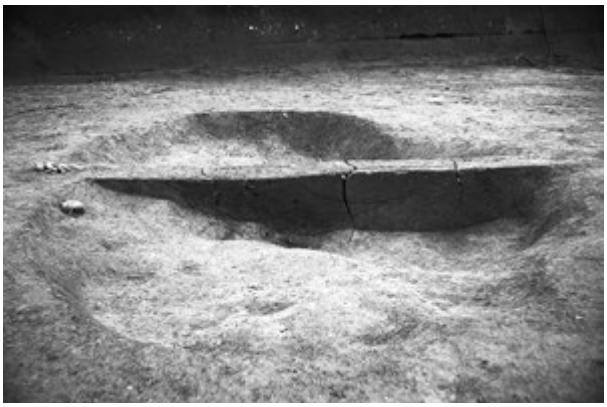
弥生～古墳時代遺構の集中部（Ｔ～Ｘ－11～14区）



竪穴住居跡１号（Ｔ・Ｕ－11・12区）

弥生～古墳時代　遺構

２号土坑（Ｓ－12区）



埋土の状況



完掘状況



溝状遺構１号内壺出土状況（Ｒ－10区）



甕出土状況（Ｘ－14区）



土器溜まり（Ｓ・Ｔ－11～13区）

弥生～古墳時代　遺構・遺物出土状況





２号土坑（Ｘ－13区）



溝状遺構５号（Ｗ～Ｚ－13～15区）



畝間状遺構②（Ｎ－７区）



遺構検出状況（Ｒ～Ｗ－11～15区）

古代　遺構（１）



掘立柱建物跡１号（Ｃ・Ｄ－７区）検出状況



掘立柱建物跡１号（Ｃ・Ｄ－７区）完掘状況

古代　遺構（２）



中世遺構全景



ピット群②



畝間状遺構②



大雨で冠水した調査区



掘立柱建物跡２号（P・Q －9・10区）

中世　遺構（１）



土師器集積遺構１号・２号（Ｔ－13区）



土師器集積遺構３号（Ｔ－13区）



石列（Ｘ～Ｙ－13～14区）



掘立柱建物跡１号（Ｏ－10区）



竪穴建物跡（Ｗ－13区）

中世　遺構（２）



1号土坑墓（O－9区）



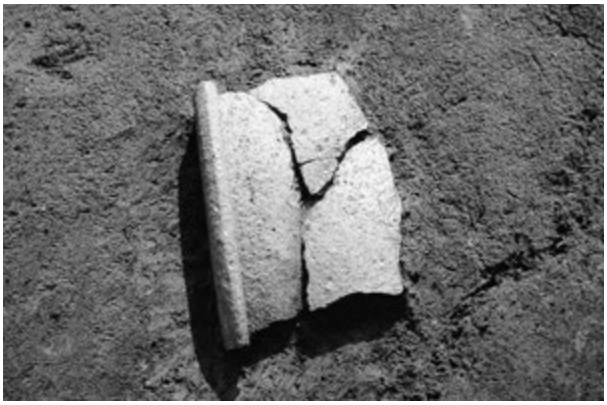




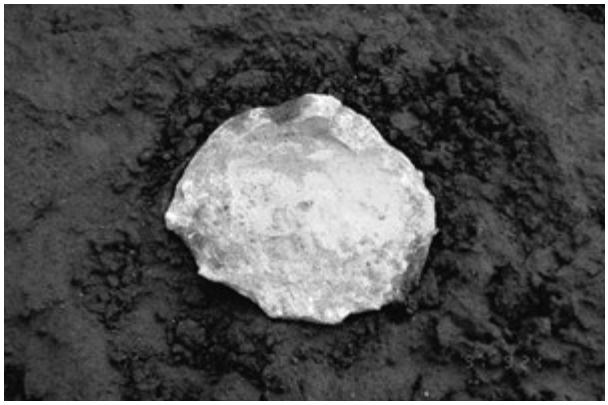


2号土坑墓（U－11区）

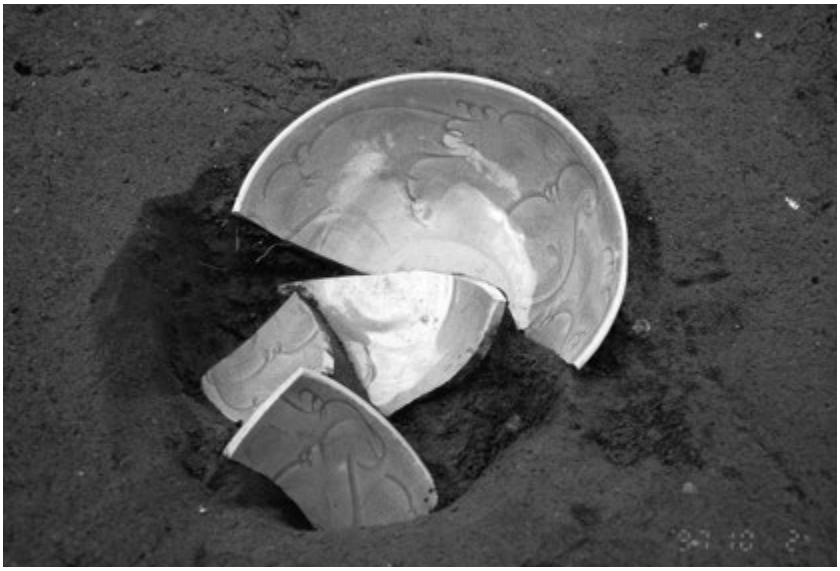
中世　遺構（3）



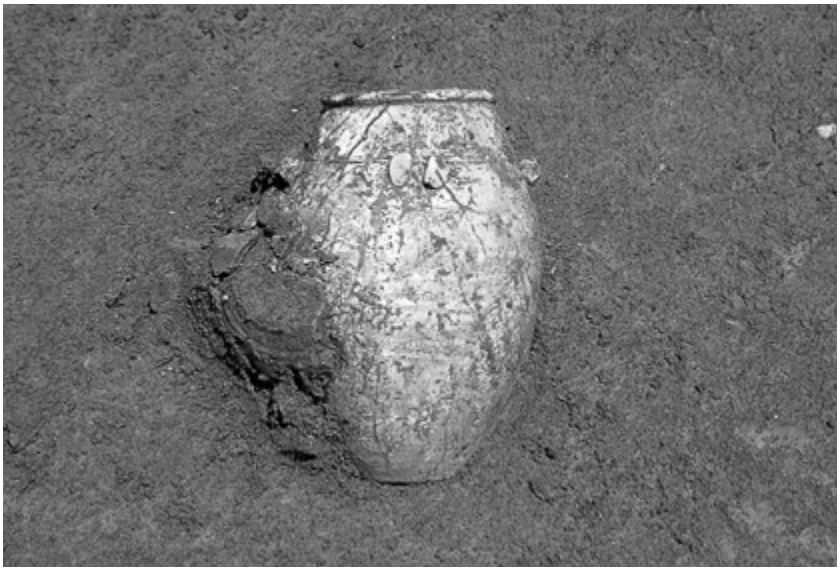
輸入陶器（盤）出土状況



滑石製石鍋出土状況



青磁碗出土状況



四耳壺出土状況

中世　出土遺物（1）

図版12



土師坏出土状況



短刀出土状況

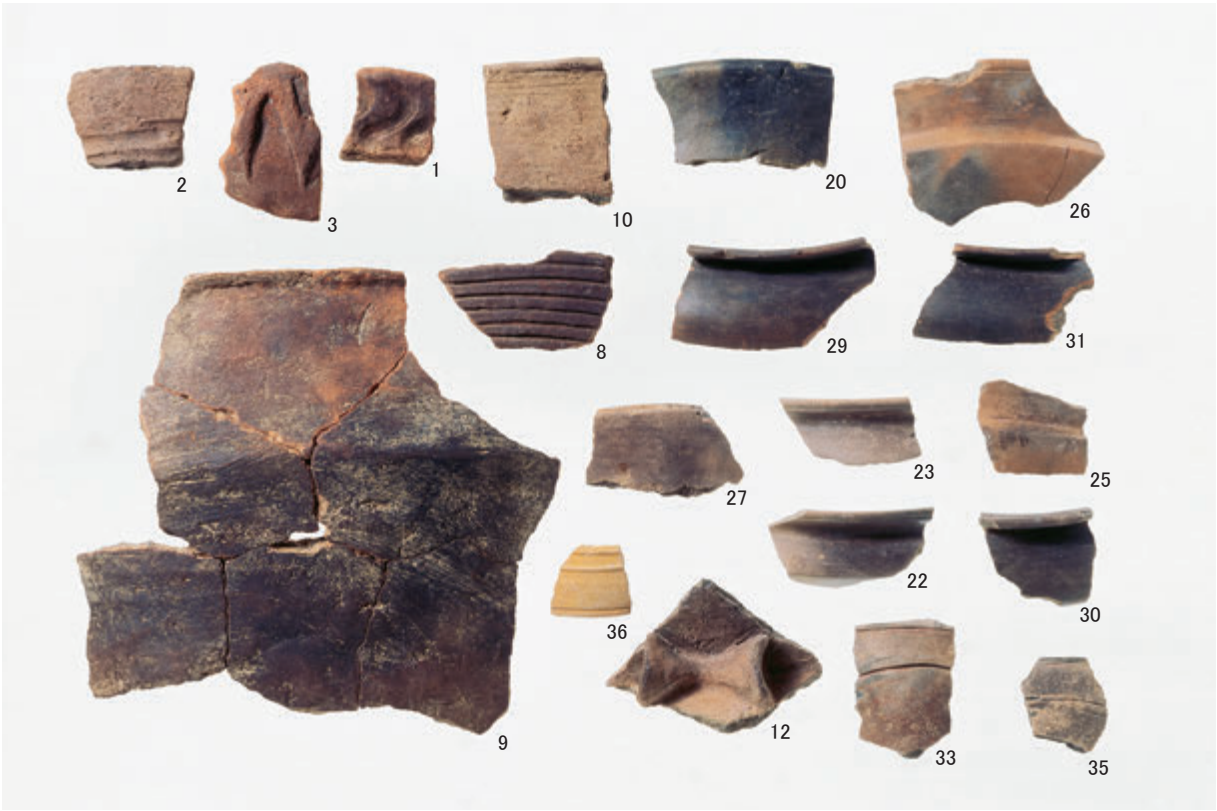


硯，土師器出土状況



須恵器出土状況

中世　出土遺物（2）


2
3
1
10
20
26
8
29
31
9
27
23
25
36
22
30
12
33
35


40
39
38
41
42
44
45
47
46
43


59
50
63
60
62

縄文時代　出土遺物

図版14









弥生・古墳時代　遺構内遺物（１）













弥生・古墳時代　遺構内遺物（２）



弥生・古墳時代　遺構内遺物（３）



弥生・古墳時代　遺構内遺物（４）

図版18











弥生・古墳時代　出土遺物（１）









弥生・古墳時代　出土遺物（２）













弥生・古墳時代　出土遺物（３）



弥生・古墳時代　出土遺物（４）

図版22



弥生・古墳時代　出土遺物（５）





弥生・古墳時代　出土遺物（６）



















古代　出土遺物（1）土師器



古代　出土遺物（２）土師器



古代　出土遺物（３）土師器



古代　出土遺物（４）土師器

図版28



古代　出土遺物（5）黒色・赤色土器













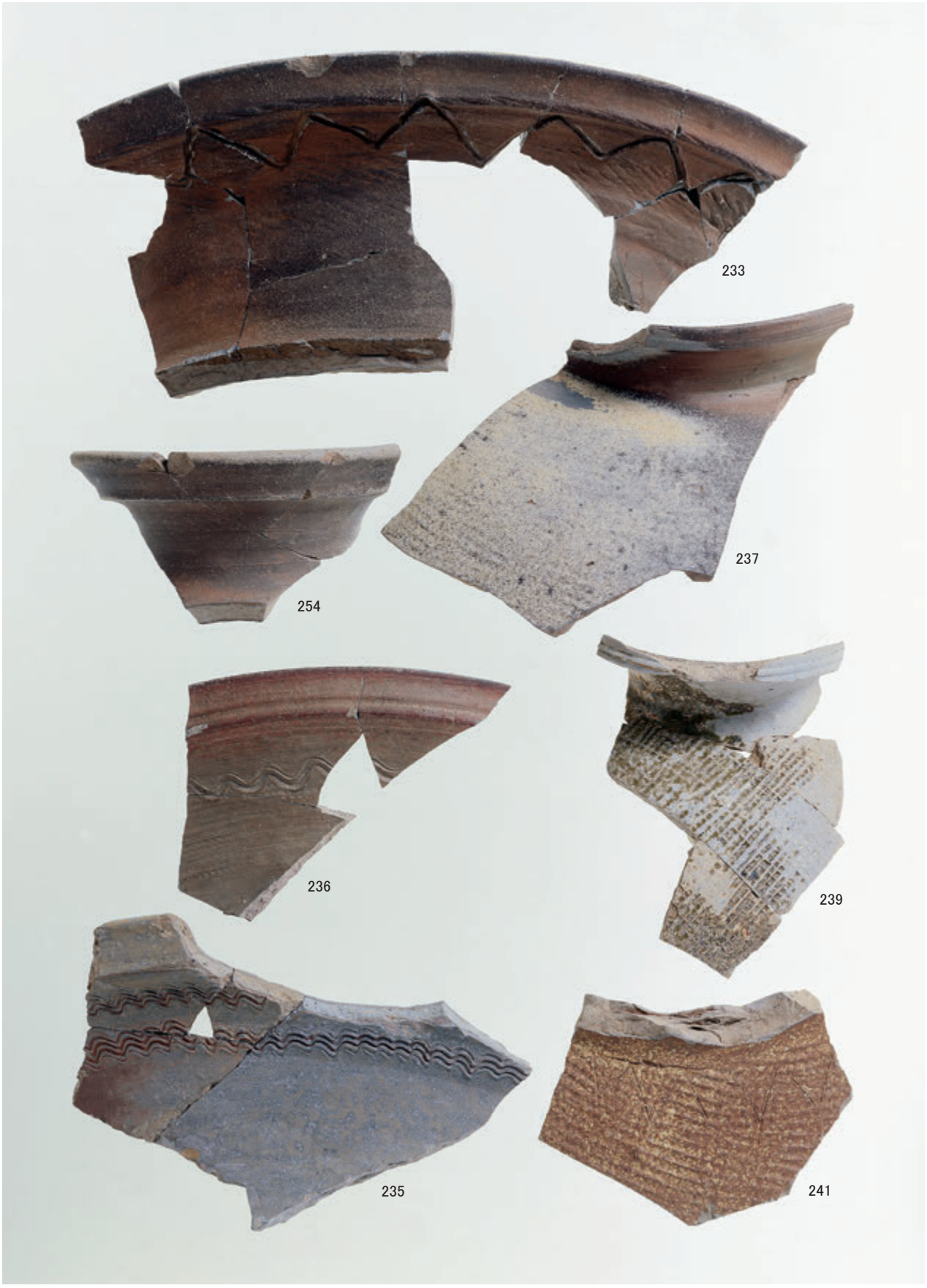


古代　出土遺物（6）須恵器

図版30



古代　出土遺物（７）須恵器



古代　出土遺物（８）須恵器

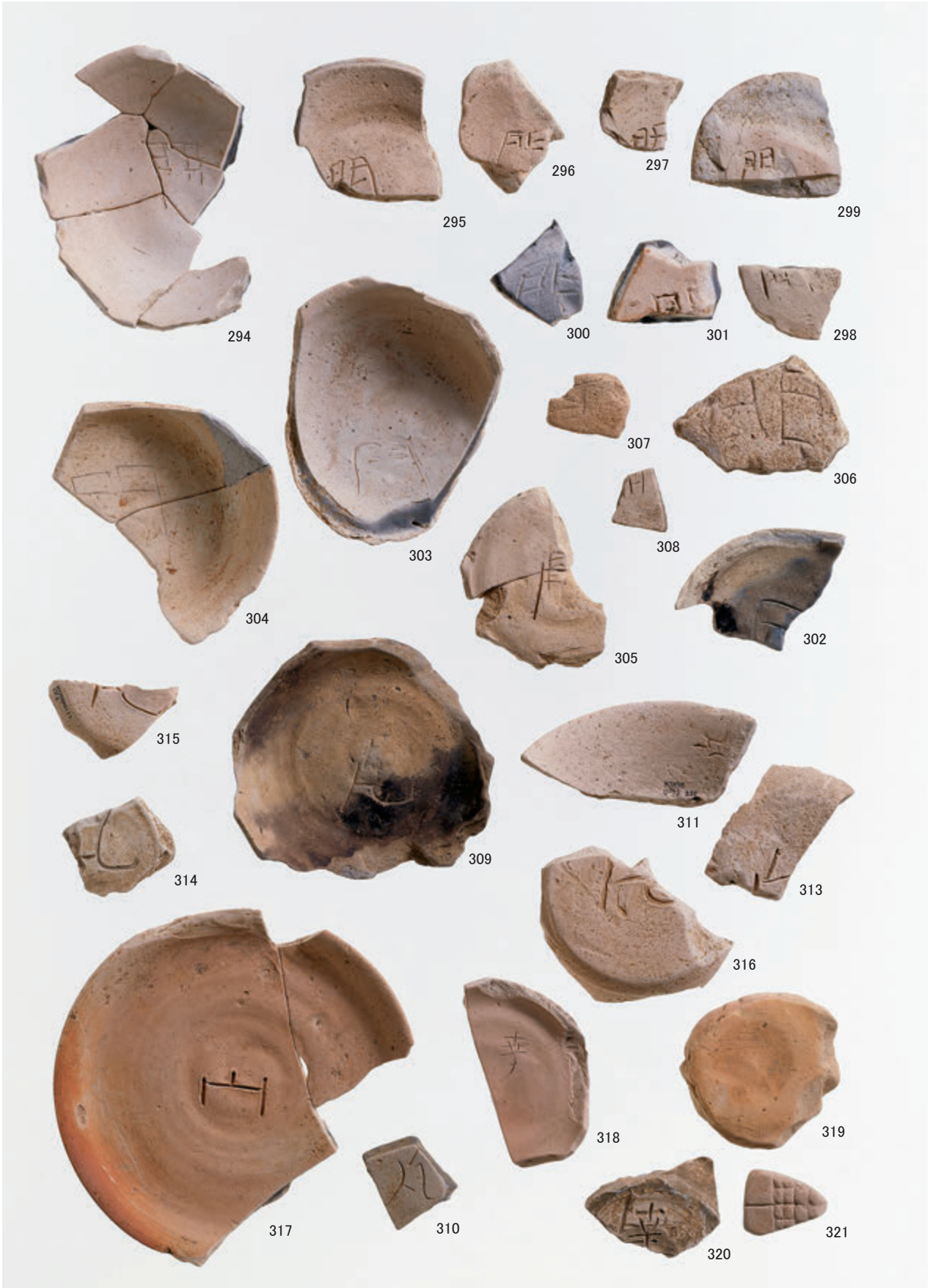
図版32



古代　出土遺物（９）須恵器



古代　出土遺物（10）須恵器



古代　出土遺物（11）箆書土器等



古代　出土遺物（12）篦書土器等



古代・中世　出土遺物（13）土製品



古代　出土遺物（14）鉄製品



中世　出土遺物（1）土師器・黒色土器



中世　出土遺物（２）土師器・黒色・赤色土器

図版40



中世　出土遺物（３）土師器・瓦器



中世　出土遺物（４）須恵器



中世　出土遺物（５）須恵器・瓦質土器



中世　出土遺物（6）国産陶器

図版44



中世　出土遺物（７）輸入陶磁器











中世　出土遺物（８）輸入陶磁器・須恵器・土師器

図版46











中世　出土遺物（９）輸入陶磁器

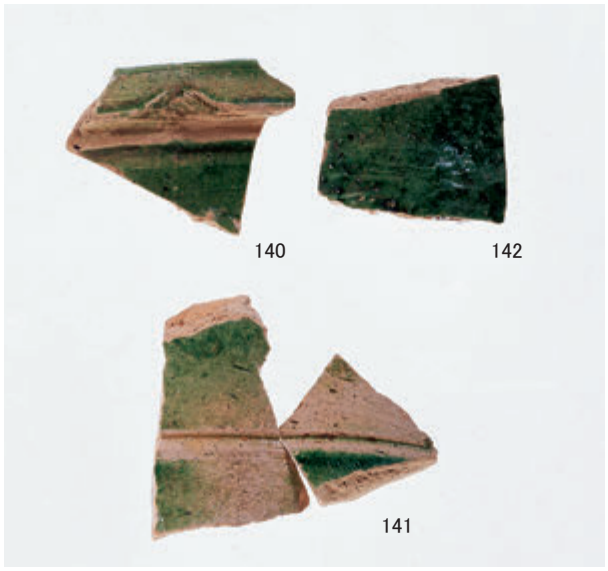












中世　出土遺物（10）輸入陶磁器



中世　出土遺物（11）輸入陶器



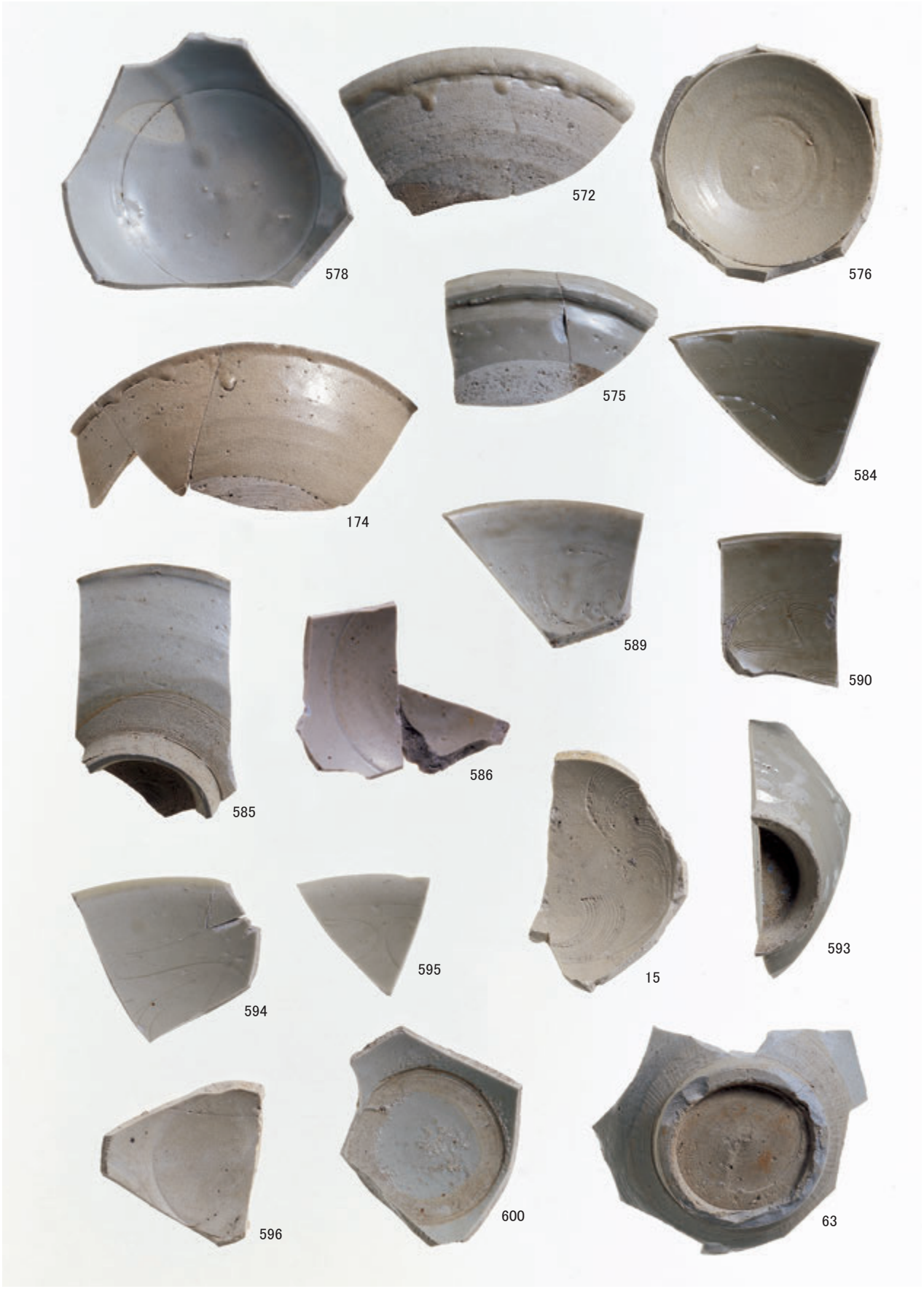
中世　出土遺物（12）輸入陶器


526
522
529
527
528
525
507
505
509
512
31
532
533
517
518
143
514
516

中世　出土遺物（13）青磁



中世　出土遺物（14）青磁



中世　出土遺物（15）白磁


605
617
606
182
611
23
624
640
630
625
626
628
635
632
637
634
636
631
623
644
645
642
643

中世　出土遺物（16）白磁

図版54





中世　出土遺物（17）青磁・白磁・青白磁・青花





中世　出土遺物（18）土製品



中世　出土遺物（19）滑石製品



中世　出土遺物（20）鉄製品等

図版58



時期不明　出土遺物　鉄製品



古代・中世　出土遺物（21）石製品

図版60



発掘調査の様子



平成９年度の持躰松遺跡の作業員



万之瀬川流域遺跡群の整理作業員

発掘調査の様子等

あとがき

持躰松遺跡は，平成９年度の発掘開始から実に多くの方々のご協力のもとに作業を進め，限られた日数の中で最大限の努力を行ってここに報告書を作成するに至りました。整理作業を進めるほどに，数々の貴重な遺物が出土していることに気付き，あらためてすごい遺跡なのだという認識を深めました。ところで万之瀬川下流域の遺跡群の報告書刊行は今後も続きます。遺跡は発掘すれば消滅していきますが，南薩地方に生きた先人達の歴史は，これらの報告書に書かれた事実の積み重ねによって将来解明されていくのではないでしょうか。また，万之瀬川の改修によって長年洪水に苦しめられてきたこの地域の人々の生活も，大幅に改善されるものと信じます。

発掘調査および報告書作成業務従事者

（１）発掘作業従事者

阿久根香子　阿久根睦美　有村美子　井料信子　有元キミエ　伊野通夫　岩本徳子　上野栄一郎　上村カズ子　宇治野マリ　大上田五月子　上薗光子　加治屋ミヤ子　神野アキ子　神野サチエ　狩集まゆみ　上埜操　川﨑和美　川路恵　掛越タネ　肝付頼久　清木場ミチ子　栄国シナエ　坂口スミ子　坂口佳男　迫彰　坂下ヨシ子　坂元愛子　鮫島弘　鮫島直美　鮫島文夫　鮫島マリ子　下大薗ヒサエ　下大薗ミチ　下堂薗キミ子　新門ノリ子　諏訪薗チエ子　諏訪薗トミエ　諏訪薗洋子　田中ヒサエ　堤則臣　鶴東イツエ　寺薗佐和子　堂薗アサエ　徳田有希乃　中間邦子　西薗弘子　西田ユミ子　西前和子　櫨木ツルエ　畠中アイ子　畠中茂孝　八田久二　馬場アキエ　原口シズ子　原口マサ子　原口春海　原口撩子　原薗ムツ子　平田和哉　平山美恵子　前薗和子　前田徳子　前田裕見子　前野美智子　前野克昭　前野ヨシ子　前原タマ子　牧本フヂ子　南ヨツエ　宮園武男　宮下麻貴子　宮本サツ子　宮脇イチ子　森田一則　宿里哲夫　山口正人　山下和子　山下昭政　山本多美子

（２）報告書作成業務従事者

浅山順子　有川ひとみ　有村貴子　池田真弓　石井凉子　石坂きくえ　石坂啓子　市薗厚子　井手上福代　稲留文子　今西ゆかり　海老原弘子　大田雅子　大保裕子　大村彌紀　小倉ひろ子　小田原美保　落合由美子　柏木節子　柏原千鶴　加藤明子　上赤世津子　川野高子　木島恵美　北道成子　古賀美智子　小薗久美子　後藤ひろみ　細田保子　榮素子　迫間洋子　佐土原恵　鮫嶋みどり　重久ひとみ　下入佐正子　進徳より子　末川章吾　末川七々恵　末原智子　杉本夏美　瀬戸口俊子　竹ノ内礼子　田實美穂　田代留美　立山佳代子　田中美佐枝　田淵一子　垂門加世　鶴みつ子　寺田美幸　永井絹子　中川ヒロミ　中川原聡子　長澤みどり　永田和子　永田ひとみ　長友みゆき　中村敏江　西浩司　西清子　西川明美　西川貴浩　西園礼子　西田のり子　野邊由美子　橋口晶子　橋口まゆみ　原田ゆかり　福園とし子　福永義一　藤田みどり 古里智恵子　松下奈津実　松村郁美　宮坂多美子　宮原紀代　毛井惠子　持田好子　森山優子　八ヶ代祐子　山下貴子　山元順子　吉岡美喜

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（120）
中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

持躰松遺跡

発行年月　平成19年12月
発　　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
☎（0995）48-5811
印 刷 所　斯文堂株式会社
〒891-0122
鹿児島市南栄２-12-６
☎（099）268-8211